

√シルバー【完結】

ノイラーテム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この日、三人目のトールス・シルバーが存在を消した。

名を隠した強者は狙われる。ゆえに司波達也はその名を表に出すこととなる。評判の出始めた彼に訪れたのは、第一高校へ誘う才ファーであった。

平穏に始まるかと思われた新学期も、CAD密輸事件の影がちらつき始めたことにより、風紀委員として活動を余儀なくされる。

目次

中学・FLT編

設定集：ネタバレ注意

プロローグ

リバーシ

トールス・アンド・シルバー

いざない

ブランシユ・無頭竜同盟編

学業のススメ

入学式という儀式

我が身の所在

CAD密輸事件

テロの予感

カウンセリング

ブラックオーダー

滅びしモノと、喰らえるモノ

仕込み作業

お祭り前夜の夜

お祭り騒ぎの開宴

吹き抜ける風

女性問題と言う難題

包囲網の形成

一方の出来ることと、もう一方の出来ること

ブラックリスト

リーヴス・フォウ・フォア・リーヴス

244

235

221

211

198

185

175

165

152

141

130

119

104

91

76

62

53

45

32

23

12

1

本格的な戦闘	259
色彩の陰る日	281
激論と激戦と【前編】	295
激論と激戦と【中編】	310
激論と激闘と【後編】	324
九校戦編	
九校戦、校内予選	344
エースの条件	356
氷が融けて霧となり、雫が現れる	369
陽差し零れる夕日に、ほのかな灯火	382
幕間での苦心、苦労の活かし方	392
明晰なる智慧は、地上の昂が如く	406
人克己して路を進む	419
将は道を輝き照らす	428
年輪は古きと比べ、幹を太くする	440
クール・ド・リオン	450
追い求めるは、至達にあらざる也り	465
波乱の九校戦	476
金色の女	484
九校戦本戦、前編	496
九校戦本戦、中編	506
九校戦本戦、後編	517
ネクスト・ジェネレーション	533
横浜操乱編	
葦原を草薙ぐ剣(ウイードクラッシュ)	544

炎の花（アマリリス）

557

聖なる契約（ホーリーオーダー）

567

光と影（ソル・イ・ソンブラ）

576

横浜事変、前編

584

横浜事変：中編

593

横浜事変：後編

606

メルトダウン

620

灼熱の来訪者編

灼熱の来訪者

630

幕開けは驚きと共に

638

新たな戦いの幕開け

646

勝利ではなく、種を捲くために

654

錯綜する情報

662

渦巻く螺旋

670

流れ行くさなかに

678

やがて来る戦いの前に

685

偽りの瑕と、偽りの勝利

693

雲散霧消

704

偽りの最終決戦：前編

714

偽りの最終決戦：後編

723

茶番

731

変転する運命

740

炎の宿命：前編

751

炎の宿命：中編

764

炎の宿命：後編

774

後日談

ネクスト・ジェネレーション

中学・FLT編 設定集：ネタバレ注意

／キャラクター編

『司波・達也』、“摩醯首羅”、“シルバー”

原作の主人公であり、今作でも主人公。炎の色は白銀。

灼眼のシャナとのクロスにより微妙に変わっているが基本的な事は同じ。

『分解』と『再生』という難易度の高い属性に特化し過ぎ、魔法式がマウントし続けて居る為にBS魔法師として生まれる。

しかし、その得意魔法の行使すら危ぶまれる能力であった為、四葉・段多郎こと“探耽求究”ダンダリオン（後述）によって改造された。

“探耽求究”が過去に行ったフレイムヘイズ強制契約実験の成果を踏まえ、「フレイムヘイズ化したデータに近くなる」ように、可能性を焼失・感情を消去することで能力拡張を実施。

可能性が焼失させられた為に、規定された能力以上のことを得ることが出来ないが、思い付くことは可能であるため達也は研究者であると自覚して居る。

無計画で無責任な“探耽求究”を義父として認識して居るため、反動として理屈っぽい。

（また、教授の判り難いネーミングセンスに対し、直球な名前に成っている）

・原作との相違点

施術者が“探耽求究”ダンダリオンである（第一基準）。シルバーと初期公表。可能性が焼失している。感情は消されているが一度ゼロになっただけ。

（また今作はリーナ編終了で完結する為、バリオンランス・ゲートキーパーは所持しない）

『オン・マケイ・シヴァラヤ・ソワカー！』

『司波・深雪』、“四葉の後継者”、“完全に近い人間”

原作のメインヒロインであり今作でもヒロイン。炎の色は目の覚める雪の様な白。

達也でフレイムヘイズ化のデータを得た“探耽求究”により、「一から設計したら凄いいんじゃないですかね？」と造ってみた結果が、出来上がったのは現行人類よりも10%ほど完全に近い人間。

ナンバーズでも特に有力な十師族の四葉家の次期当主候補。

・原作との相違点

施術者が“探耽求究”ダンダリオンである（第一基準）。可能性が焼失している。

『お兄様ならば間違いありません』

『四葉・真夜』、“極東の魔王”、“夜の女王”、“駄目な方のお袋”、“マジヨリーさんの妹分”

原作のラスボス候補であるが、今作ではポンコツヒロイン。

ナンバーズの中でも特に有力な四葉家の当主。過去に自身を酷い目に合わせた崑崙法院や、それまでの記憶をデータに変換した姉である深夜を『紅世の徒』によって喰われた。

この復讐を行うとした所、別の紅世の徒“銀”によって先を越される。その後“銀”も討滅させられたと聞き、相次ぐ目的の消失に傷心。

更に“銀”は強い感情によって勝手に代行する機能であったと告げられ、もはや笑うしかない状況に茫然自失の状況であった。

だが、達也が“シルバー”と名乗り始めたことで、「銀≡シルバー、即ち達也が私の代わりに復讐してくれる」と認識する事で、人間として再び自覚するに至っている。

深夜が紅世の徒に食われて記憶のすり替えが始まった時も、既にデータ化して居たため特に勘違いは起きて居ない。即ち真夜にとつての現状は我が子と言つても良い、可愛い達也がくれた新しい人生：と言う感じで愉しんでいるロールプレイである。

・原作との相違点

ヤンデレではない。

『あらあらあら。達也ちゃんってばお母さんにおねだり?』

“探耽求究”ダンタリオン、“教授”、四葉・段多郎、“駄目な方の親父”

シヤナ側の人物であるが、説明に欠かせないので記載。炎の色は馬鹿のように白けた緑。

その場の思い付きで行動と目的がコロコロと変わる、はた迷惑なマッドサイエンティスト。紅世の徒の中でも強大な『王』であるが、平然と仲間を裏切りしたい放題の研究のために人間やフレイムヘイズと手を組んだりもする。

達也の改造に深雪のコーディネイト、アメリカ政府に頼まれて粒子加速器の跡地を使用した召喚陣を作ったりと、ロクな事をしていない。

不都合はだいたい紅世のせい、おおよそ教授が原因と思つて差しつかえないが、一番問題なのは既にこの世には居らず責任の一切を取らないことである。

なお、紅世側のルールでは異名に見える部分こそが本質を現す名前であり、“探耽求究”が本名でダンタリオンというのがこちらで付けた呼び名である。

要請や詰問など真面目な時には“探耽求究”と呼ぶのが正しく、愛称として呼ぶ場合は教授やダンタリオンと呼ぶ形式となる。

『つーいいいにアレを使う時が来たのですねえ?! ドーミノーおおお！ 計測の準備は良いですかあああ！』
『七宝・琢磨』

原作後半での弟分であり、今作では最初から弟分。
ナンバースの中でも特に有力な、師補十八家と呼ばれる七宝家の跡取り。

懇意にしている技師が紅世の徒に食われ、記憶の矛盾整理ですり替えが起きた。その徒が同じ様な技術者である三人目のトラス・シルバーを喰つたため、再び記憶のすり替えが起き達也を慕うに至る。
(紅世の徒による記憶整理の説明、単に千本桜みたいな能力を出したかっただけ。などの理由により時系列を変更して登場)

・原作との相違点

懇意の技工師が消失。達也と最初から仲が良い。専用魔法『ビリオン・エッジ』を習得して居る。戦術級魔法師。

『お兄様のおかげです！』

『七草・真由美』、“一高の生徒会長”、“エルフィンズスナイパー”

原作のヒロインであり今作でもヒロイン。ポンコツに見えるのはだいたい演技。

ナンバーズの中でも最も有力な十師族の七草家に所属し、スタイル以外は完全無欠、いやその体型にもニーズが…などと言われる美少女。マルチスコープという特殊な魔法の才能込みで有能な魔法師として知られている。

シルバーに目を付け百山校長と組んで一高の意識改革を狙っている。初日の出来事は、ぼほ出来レース。二人居る兄のうち一人が消失し、代役を求められて狸化が進み、ストレスからポンコツ化することもある。

(七草家と四葉家は共に勢力がすり減っており、精鋭である分だけ四葉の方が被害が大きい)

・原作との相違点

達也を意図的に招いている。一科生と二科生の垣根を取り除こうと初期から行動して居る。

『もしかしてそういうのが好み？ 意外と積極的なのね』

『司・一』と『司・甲』

ブランシエ日本支部のリーダーである司・一は、紅世の徒への対策として義弟である司・甲のプロデュースを行うことにした。奇しくもシルバーの名前を出した達也と同時期の事である。

付き合いのあるアンダーグラウンドの組織が、他の組織と抗争を起こし弱体化したことにより吸収。ブランシエは強大化する。

司・甲はその指示を受け霊子放射光過敏症と向き合い、魔法を視る目をフルに活かして、魔法剣術大会の高校部門で優勝して居る(負担は大きく倒れた模様)。

・原作との相違点

ブランシエが武闘化派。司・甲が霊子放射光過敏症と向き合う時期

が早期化。剣術大会で優勝。

『良く見ろ、メデューサの眼を！』、『見える!!』

『一高の生徒会メンバー』

原作における先輩たちであり、今作でのサブヒロイン達。

凄腕の技術者であり研究者仲間であるシルバーに対し、ある種の尊敬を持つと同時に、現時点では少し遠い人という隔意を持っている。

(原作において優秀なはずの服部副会長が、七草会長を交際相手に考えて居ないのと同じ)

『申し訳ありませんが、二科生を生徒会に登用する事はできません』、

『し、シルバーさんだ!』、『事実を認めることにやぶさかではない』

『渡辺・磨利』、“一高の風紀委員長”、“綱”、“嫁さんは委員長”

ナンバーズの中では末流の渡辺家の当主候補であり、武家の渡辺家の当主。

先祖還り・当然変異的に魔法師の才能が開花し、百家としては末流の出ながらも卓越した能力を持つ。風紀委員長として名を馳せ、気風の良さといわゆる宝塚的な外見もあって人気が高い。

武家の渡辺家の本流が絶えた為、ドウジ斬りを世に再現した功績と合わせ、恋仲である千葉・修次を婿養子に迎える予定込みで、実家よりも先に本家を継いだ。

(ここでの変化は、ようするに本編のエピソード圧縮用です)

・原作との相違点

能動浮遊地雷の習得が早い。渡辺家の本流と“綱”の銘を継いでいる。修次と婚約。エリカと冷戦ではない。

『超弾道ドウジ斬り：もうちよつとなんとか成らなかったのか?』

『千葉・エリカ』

剣の魔法師としてしられる武闘派の千葉家に所属する末の妹。妾の子供であるためこの間まで正式には認められて居なかった。

魔法力は低いが高レベルの認識力と感覚を持ち、棲息速度域が常人と違う。このため父に失われ掛けた秘剣の体現者として育てられ、次男である修次の教えを受けメキメキと頭角を現している。

そんな中で渡辺・磨利は、長姉の勘気を分担してくれる相手であり、

修次に相応しい兄嫁グヌヌ状態であり、積極的に近づきたくも遠ざかる必要もない相手。

…と、思ったか!? そーんな訳は無い。優しい兄を巡り、魔法に関するコンプレックスを刺激されている。

・原作との相違点

磨利を明確にライバル視している。達也に対して強くなる為の協力者と認識して居る。

『アレって達也くんが造ってあげたんでしょ？ あの女ばかりズルイよ…』

『西城・レオンハルト』

ブルゲ・シリーズという生体改造された祖父を持ち硬化魔法への高い適正持つ。これを様々な使い訳を行っている為、同じ魔法とは思えないバリエーションを持つ。

遺伝のせいか荒らぶる心を制御…というよりは宥めるべく各地を放浪して居る。

・原作との相違点

各地を放浪する引退者（フレイムヘイズなど）と交流を持つ、隠行の才能と喧嘩の経験が微妙に向上。

（良くも悪くとも、達也との関係は変わっていない）

『止めるシュヴァルツ・シルト！』

『森崎・駿』

ナンバーズのなかでは末流で魔法力も低い家系あるが、森崎家は速度に特化したクイックドロウを持ってボディーガード派遣業で成功を収めている。

彼は家の中でも魔法に関してはかなりの実力を備え、一科生としての成績も上位に入る。どちらかといえば能力主義者であったが、リンの護衛を受け持ったことと、達也がシルバーと呼ばれる能力を知ってからは見る目が少し変わっている。

・原作との相違点

偏見が無くなり達也ともそれなりの距離を取るなど、立ち位置的には服部副会長に近いポジションになっている。

パラレル・キャストを覚え特殊な使い道をする予定。

『リン！ 大丈夫ですか？』

『リン』〃 孫・美鈴〃

アジア系アメリカ人の少女で、父の急死に伴い誘拐された。詳細は徐々に明らかになるが、生まれの問題や性格、担う役目からエリカと仲が良くなっていく。

・原作との相違点

森崎と早期に別れない。父の死のタイミングと原因が異なる。

『え？ シュンと？ 止してよ。住む世界が違うとお互いに不幸だと思わない？』

『リチャード・孫』

『名倉・三郎』

誰ですか？ 知らない子ですね。

／世界設定編

『紅世』と『無何有鏡』

前者は『紅世の徒』たちがやって来た世界で、後者は去って行った世界。

本編で出て来ることは無く、「どこから来たの？」「どこへ行ったの？」という問いに対する答えとして用いられる言葉。

『紅世の徒』と『紅世の王』

この世では無い世界、『紅世』よりやって来たモノ。

『存在の力』で構成される体を持ち、存在の力を行使する事で様々な『自在法』を使用する。

彼らに存在の力を喰われると、初めから居ないモノとして認識され、記憶の矛盾整理が起きる。

紅世の徒にとって、存在の力はHP || MPのライフポイントであるため、保有量が0になるまでは戦える。

この特性から普通の魔法師では倒す事も難しい（守る者が居ないことも強み）。

一定率の攻撃力次第で倒す事も可能なため、十師族の直属や軍の精鋭であれば倒せる。

ただし、より強大な『王』に関しては、力の保有量や戦闘経験の問題で、戦術級魔法師でなければ対抗も難しい。

とはいえ、現時点で王どころか一般の徒ですら異世界へ不可逆の移動を行い、残っているのは少数と思われる。

『紅世の徒』 VS 『精鋭魔法師』の戦闘に関する概念

人間から見ると紅世の徒は、HP || MPで人間100に対して200も300もある存在で倒し難い。

基本的に護るべきモノや根拠地を持たない為、倒すことも追い詰める事も難しい。

逆に紅世の徒からみると、人間は死に易いが、存在するだけではエネルギーを使いもせず、LPが許す限り何度でも挑んで来る面倒な相手。

休息すれば回復し、昔と違って集団で襲ってくるので厄介ではある。

『フレイムヘイズ』と『自在師』

かつて紅世の徒を倒す為に世界を駆けまわった存在であり、武闘派魔法師と認識されている。

その生まれは、紅世の徒を許せぬ者が、同族の行動を許せないと思う『紅世の王』と契約し、可能性を焼失することで王を自分の中に封印・利用して居る。

とはいえ紅世の徒の大多数が不可逆の移動で居なくなり、殆ど引退し、あるいは自滅とも言える戦闘環境に自らを置いている。

『外法宿』

フレイムヘイズ達が使って居た、情報交換・休息所・物資の供給場。

最後の大战で殆どの宿が壊滅し(特に関東圏は酷い)、フレイムヘイズ達の隠遁により、形だけの再建されていけば良い方である。

九重寺は比較的は無事な外法宿であり、九重・八雲が忍を自任していることから情報収集機能はまだ残っているらしい。

なお八雲はただの魔法師であるとも、色の無い炎を司る紅世の王と契約するフレイムヘイズであるとも言われるが確証は無い。

／魔法編

『ベリオン・エッジ』↓ 改一『一文字』、改二『白装』

使用者：七宝・琢磨

モデル：千本桜景厳、大地の剣、スピリット・オブ・ソウル白鶴
ミリオンのエッジ用の紙の刃を、一定のフィールドに入れ、そのフィールド自体を群体制御するもの。

刃の詰まった袋を飛ばしているだけなので、元のミليونより殺傷力は高くない。この為、一列に並べて合体させる一文字形態、防御にもなる白装形態が考案される。

『白き真実』

使用者：司波・深雪

モデル：うみねこシリーズ

特定の文言に対しての認識を著しく低くする。

キーワードは予め定めねばならず、対象者の同意が無い場合は消耗も高い。

『四葉』という言葉に定めてこの魔法を使うと、『四葉』という風に、メモでも取らない限りは後で思い出せなくなる。“レテ川の魔女”と呼ばれた母譲りの精神魔法なのかもしれない。

なお、原作に全く関係ないので、この魔法ありきでストーリーが進むことは無い。

『雷上動』

使用者：渡辺・磨利

モデル：浮遊自動機雷

自分の周囲を番号振りし、その場所に稲妻を発生させる魔法。
一種のリアクティブ・アーマーであるが、対人・対ナノマシン用の範囲特化と、対戦車用の威力特化の二種類の使い方をする。

名称は源氏に伝わる鶴落とし（盗賊とも）の弓から。

『落頭民』

使用者：ジエームズ・朱

モデル：ホラー系の少女漫画各種

歡起召喚したSBに対象の意識をコピーする。

コスト上の問題で簡単な植え付けであるが、言う事を効かせ易くできる。

『測量操弾射撃』

使用者：ジエームズ・朱

モデル：鬼礫珠『顎』、測量射撃

歓起召喚したSBから来る情報を元に、射撃の正確性を高めるものの。

知覚同一を行えば精度は更に向上するが、消耗度や反撃された場合のリスクが大きくなる。

『煙壁』

使用者：ダグラス・黄

モデル：伊賀の影丸より複数

香料散布と煙の幻覚により鼻と目を誤魔化す煙幕を作り出す。

どちらかといえば他の技の前提条件の為に作りだされるが、『化生体』化によって簡単な攻撃を留める壁を作ったり、対探知ジャミングを掛けたりバリエーションも豊富。

『煙針』

使用者：ダグラス・黄

モデル：伊賀の影丸より複数、項羽と小龍（風魔の小次郎）

『化生体』による偽物の針を作成し、精緻なコントロールを更に強化する。

これにより物理的に留めることの出来ない投薬を行う。

『化生体』作成はコストに見合わない殺傷力ではあるが、この技は投薬が目的なので効果的。

『物心ドウジ斬り』

使用者：千葉・エリカ

モデル：サイキック物少年漫画各種

知覚をSBに合わせ、サイオンを流しながら斬りつける。

グラム・デモリッションほどの威力を持たないが、無理やり呼ばれているSBであれば十分な：パラサイト相手にもそこそこの威力を持つ。

『仮徹如意』

使用者：西城・レオンハルト

モデル：神鉄如意、九校戦で出て来た布

術者の前方・脇などに展開し、ランス・狼牙棒・盾・追加装甲などの使い道を持つ。

(モデルに成った原作のツールよりも、使い道が限定される代わりに強度が高い)

『ネクスト・ヒューマン』

使用者：“探耽求究”ダンタリオン

モデル：学園トライアングル

人造フレイムヘイズ化による10%程度、現行人類よりも完成された人間の創造のこと。

一通り能力が高いので、現行人類が不得意な魔法容量・演算その他が特に高く感じられる。その強さはゲームやファンタジー小説に置ける勇者の一族並みだと思えば差支えない。

『M・エクスパンダー』

使用者：無頭竜のみなさん

モデル：超人ロック

モデルになった原典と違い魔法力は上げてくれないが、魔法演算などが不思議と圧倒的に向上する。

プロローグ

異なる世界、紅世。

かつて、そう呼ばれる世界からの来訪者達。『紅世の徒』ともがらがこの世界に居た。

彼らは人々が持つ『存在の力』を食らって消滅させ、己の力にしてきたのだ。

存在の力を食らわれた者は重要性を忘れさられ、どうでも良い者として、別の者に比重を移されてしまう。

だが、大亜連合と大漢の争いに前後して事件の発生はパツタリと消える。

彼らを専門に狩る者：フレイムヘイズや自在士という武闘派魔法士との戦いに破れたとも、勝利して別世界に行く力を奪ったとも言われるが詳細は不明。

彼らの多くが別世界に去り、大きな事件の発生は終息を迎えた。

だが、全ての『紅世の徒』ともがらが去った訳ではない。

徒を狩る、フレイムヘイズや自在士と呼ばれる武闘派魔法士たちから逃れる為に、地下に潜った。

極力、目立つ有名人などの襲撃を避け、名も知らぬ一般人を狙う様になったのである。

どうしても大きな存在の力を持つ獲物が欲しい時は、裏社会の住人たちが名を隠した有名人たち：アンダーグラウンドの実力者を対象に選んだ。

そのことが、新たな悲劇と喜劇を作り上げるとも知らずに…。

●もう思い出せない、君のために

俺が高校受験を控えているのに、紅世の事なんて調べたのには、理由がある。

かいつまんで俺が手伝っている会社、FLTでの話をしよう。

「御曹司。パラレル・キャストの軽減化の事なんですがね…」

「牛山さん。それは俺の担当じゃないよ。あいつに言ってくれないと」

俺は牛山主任の無茶振りに苦笑して見せることで答えた。

「なに言ってるんですかい。理論の御曹司と、技術の俺じゃないですか」

「牛山さんこそ何を言ってるんですか。技術の牛山さん、ループ・キャストと基本理論の俺、そしてパラレル・キャストと応用概念のあいっが…」

俺はその時、思わず絶句した。

(あいつとは、誰だ?)

役割は思い出せる。

どんな奴だったかも、大まかにだが判る。

だが決定的な記憶、そして知識と意識を結び付ける段階で失敗した。

まるで紙で列記された人物のことを、自分に取って関わる人物だとは認識できないように。

「そんな奴も居たとは思いますが、どうでもいい人間に聞いたって仕方ねえでしょう。つたく、どこかでサボるかしてるんでしょうなあ」
(…冗談を言ってる様にも見えない。それに役割を考えたら冗談で済む話じゃないぞ)

同時に魔法を唱えるパラレル・キャストは難易度の高い物で、それを軽減させることのできる奴が、どうでもいい訳が無い。

俺が理論化したループ・キャストとは別の意味で、このチームには必要な理論、必要な人材だったはずだ。

(考え方は二つある。一つ目は魔法による欺瞞情報に限界が来た。だが、これは無い…)

最初から居ない人間を、居たかのように認識させる。

確かに腕利きの精神系魔法士が居れば、不可能ではないだろう。

だがそれでも精々、一人か二人で限界だ。

これだけ多くの人間を騙し資料や機械、旧知の人間込みで騙し続けるのは難しいだろう。

ならば、考えられるのは、もう一つ。

(MIAか…。まあミッションでの失踪じゃなくて、ミュータントに

関わる存在失踪というところだが)

俺がこう思い付けたのは理由がある。

単純だ。

俺を取り巻く環境の中に幾つかの組織があり、それらで同様の失踪が確認されたからだ。

謎の情報生命体に収奪されると、その者が持つ情報への関心度が大幅に低下。

どうでも良い相手とみなされ、その者が持つ権限や役割は、近しい者に割り振り直されることで、矛盾を極力回避しようとする。

この矛盾回避が謎の生命体がやった後始末なのか、情報の欠落からくる損傷を少しでも防ごうとする意識的な回避なのかは不明だった。

だが、こうやって役割が俺に振られたことを考えれば、後者だと認識せざるを得ない。

なにしろ、居たという記憶と認識を組み合わせないだけで、情報自体は残っているのだから。

ならば悩むより、まずはすべきことがある。

「牛山さん。ちよつと担当者と呼んできます。もし見つからないなら俺がやるときますんで、『俺のデスク』にでも置いといて下さい」

「すいませんね。もし別件が入ったら、御自宅の方にメールで要望だけ回しときますよ」

俺の言いたいことを察して、牛山さんが適当に切り上げてくれる。

別件が入ったことを察して、『俺のデスク』…次の要望書の中に優先案件として入れておいたのだ。

同時に俺が持つ能力の一部を使用して、あいつの情報を検索する。どこに居るのかは検知できるが、付帯する情報がとても低い。

まるで、俺が持つ別の能力で倒した敵の情報がそうであるかのよう
に、刹那の煌めきだけを有していた。

「あ、お兄さま。もうお済みですか?」

「いや、すまない。別件が入って担当者呼びに行くところだ。あいつとは親しいし…お前も来るか?」

俺が帰るのを待つて居た妹が、自分の用事を片付け始める。

止めようかと思つたが、『家』にも関わることなので、そのままにさせておいた。

「あいつ…？ どなたかは存じ上げませんが、お兄さまの手を煩わせるなど…」

「アンドウ。その名前に心当たりはあるか？ 漢字の読み方はこの際構わない。認識があるか…だけでいい」

俺は妹の言葉を中断させると、移動しながら質問を投げかけた。

深雪は俺に追いつがりながら…。

予想された事だが、首を傾げた。

「アンドウさんですか？ 知らない方ですね。その方が何か不都合を…？」

「むくれた姿も可愛いが、少し冷静になれ。…例のM I A案件だ」

俺の為に不都合を押し付けてた対象に怒ってくれるのはありがたい。

だがこの場合は、不要な配慮だ。

冷静に物事を処理し、後に活かす必要がある。

「あ…。どなたかが…」

「そうだ。アンドウが存在を消された。そして今ならば…」

怒つた顔が悲しそうな顔に変化する。

きっと誰か大切な人間を失つた事を、理解できたのだ。

俺には良く判らない感情だが、俺の代わりに深雪が啼いてくれるならば…俺は救われる気がした。

「この『眼』で消失を確認できる、またと無いチャンスだ」

「…っ」

今度こそ深雪は泣きだした。

大切な人間が失われたと言うのに、他人が理解できないことが悲しい。

特に『俺が』、それを理解できないことがたまらなく悲しい。

普段ならば、完全に感情を抑制する教育を積んだ筈の妹が、不思議なことに涙を流す。

それはきつと、激しい感情を消失…いや焼失した俺の代わりに、泣いてくれているのであろう。

とてもありがたく、俺にはもったいないくらいの妹である。

「啼いて居る姿も可愛いが、少し冷静になれ。…初めて尻尾を掴んだんだ。このチャンスが無駄には出来ない」

「は…い…」

僅かばかりの後悔と、涙を拭いてやりたくなる感情を抑制して俺は歩き続ける。

晴れているのに、憂鬱な雨のイメージ。

激しい感情を失った俺も、どうにか妹関連だけは残さず維持で来ている。

それが施術した、おやし…ダメおやしの方や、おふくろ達の恩情なのか、『枷』なのかは判らない。

だが、今は、それをありがたいと思った。

どうせ俺の感情は、力を得るための代償として焼失しているのだ。肉親への感情が残り、それが俺の代わりに啼いてくれるような、できた妹ならば言うことは無い。

それよりも、今は情報の収集をやり遂げるべきだろう。

例えマッドサイエンティストと呼ばれようと、起きてしまった事象は仕方ない。

可能な限り次回に続くデータを収集し、可能ならば次回を行きさないようにすべきなのだ。

「このM I A案件は、いつか俺が潰す。これは、あいつがくれたチャンスだ。絶対に無駄には出来ない」

「はいっ！」

今度の返事は直ぐに聞こえた。

急ぎ足の俺に、深雪がなんとか付いてくる。

それは俺が僅かに怒っているような姿が、決意を固めた姿が嬉しかったのかもしれない。

俺は自分にまだこんな感情があることを教えてくれた、妹にも優しくしてくれたあいつに、僅かばかりの感謝を覚えた。

「アンドウさんや、おかあさま達の仇を取りましょう！」

(そうか。俺はそんなことも忘れて居たんだな…)

そういえば俺のおふくろも、存在の力を奪われて失踪したのだ。

今更ながらに思い出し、母の双子であり俺達にちよつかい掛けて来る…、ダメな方のおふくろを、おふくろとして認識していた。

これも存在の力を奪われた対象に対する、自己意識の回避なのだろうか？

もしかしたら本来の母親の方に良い思い出が無いので、才能はあっても性格的にダメな方な、双子のほうを母親として認識したいと言う甘えだったのかもしれない。

ともあれ、母は元重要人物である、そして『家』は大きな組織でもある。

帰ったら、本家の方に顔を出して、情報を調べるとしよう。

俺はそんなことを思いながら、目的地である、来訪者用のセンターに移動していた。

●セブンデイズホリデイ

来訪者センターの一室では、あいつが中学生…一年くらい下だろうか？ の相手をしていた。

他愛ないやりとりであるのに、嬉しそうに反応が返って来るのを見ると、随分と親しい様だ。

まるで妹が、俺に対して尊敬…というには大袈裟な感情を向けて来るかのようだ。

話しこんでる相手の情報を思い出してみる。

「確か…あれは他から頼って来たんだったか。掛りつけ技術者が信用できなくなったので、相手を変えた…と」

「まあ。そんなことで取引先を変えるなど、尻軽にも程があります」

俺は首を振って、深雪の勘違いを留める。

「いや、おそらくはあれもMIAの被害者だ」

俺は思い出しながら、簡単な履歴を説明する。

普通ならば秘密にする筈の顧客情報が、社内とはいえ漏れて居るのも、幾つか原因があった。

「でなければ…仮にも七宝に連なる者が、容易く懇意の相手を変えるわけがない」

「七宝家…ナンバーズが、ですか。それは確かに。いえ、七草家との確執を考えれば、判る話です」

情報が漏れた理由の一つは、相手が有名な家だったからだ。

加えてナンバーズと呼ばれる強力な魔法士の家がらでも、七宝と七草は仲が悪い。

その七宝家に所属する魔法士が自分達の会社を頼ったとあっては、技術者本人が黙秘しても、自然と漏れてしまうのも仕方が無い。

四葉と呼ばれる別の家との繋がりには巧妙に隠されているので、ナンバーズとは関係ないと思っ、つい夢の様なこととして語ってしまうのだ。

「おそらくは、腕前の良い技術者に頼っていたんだ。それが急に失踪して、記憶の方が関連する人物…そして同レベルの腕前を求める」

「その人物がたまたま、あの方だった…と」

俺は頷いて、簡単に説明を付け加えた。

「大学の研究室で研究していた独自概念か何か繋がりだろう。その辺は代用が効かないからな」

会社である以上は、腕前の良い技術者を揃えることが前提だ。

だが、概念は替えが効かない。

理解できる者も少なくは無いだろうが、同時に腕前を備えるというのは至難だ。

それならば、自動的にここに来てしまったということも領けはする。

とはいえ、おそらく本人に聞いても説明できない類の証明に成ってしまうが。

「お兄さま。その…今ならばまだ間にあうというならば、お話などはされないのですか?」

「何のために? 情報の推移ならばここからでも観察できるし、反応はおそらく普段通りの他愛ないレベルだ。それに…あいつの遺したモノはここにある」

おずおずと申し出る深雪に、俺はFLT：いや課のエンブレムの辺りをなぞった。

あいつが遺した応用概念は、ちゃんと形に成っている。

今後、何がどうなるうとも、課が成果を残し、技術が利用されるならば、あいつの名前も残り続けるのだから。

もう大して思い出せない会話とは別に、印象に残る重要な会話くらいは思い出せる。

おそらくはエピソード自体の記憶で、やがてそれは、他の人物に挿し変わってしまうのかもしれないが。

少なくとも今は、俺の心の中に刻まれている。

ならば、あいつの時間は、あいつとの出逢いを必要とする者の為に、遺しておくべきだろう。

思い返すと、ソレはこの間のことなのに、随分と懐かしい。

きつと既に摩耗し、風化を始めて居るからだろう。

『それは無駄な研究と呼ばれたやつじゃないか?』

『いいかいタツヤ。魔法技術はまだ始まったばかりなんだ。となると、別のファクターを加えれば、無駄ではない可能性も出て来る』

あいつは並列処理に関して、無限とも思える組み合わせを試していた。

俺はそれが理解できず、思わず質問したのだ。

『別の?』

『そう。例えば個性だね。生来の血筋の他、育つて来た環境に寄って得意不得意は変わってくる』

これならば判る。

例えば家によって、特定の魔法が得意な家系がある。

加えてナンバーズと呼ばれる数字持ち家柄は、同じ数字で、同じ異能研究所での成果を共有しているから用法が似てしまう。

『同じ家に所属する同じレベルの魔法士なのに、基礎理念や応用概念が理解できない。あるいは、特定出力が強過ぎたり、逆に足りなかったりね』

『ああ、そういうことならば理解はできるな。特定の家に伝わる術式

が、何故か可能な者と不可能な者に別れるとか。逆に使えないとされていた術が、そいつだけ使えたり』

俺自身、自分の特性に寄って、とある属性の魔法しか自在に使えない。

逆に、この属性に限り、圧倒的な能力を有していると言えるので、言いたいことは判った。

『そこで組み合わせさせて調べて居るんだよ。特定の魔法士ならば、あるいは魔法を使った後で、特定の魔法とならば。並列が軽くなるなるんじゃないかと思って』

『言いたいことは判る。だがそれは特殊過ぎて、時間が掛る上に、その個人にしか使えないんじゃないか?』

俺がそう言い返すと、あいつは不思議そうな顔で言い返してきた。

『そうだよ? 僕は知らない誰かの為じゃなくて、僕を頼ってくれる誰かの為の力に成りたいんだ。カスタマイズ屋で十分さ』

そう言いながら、あいつは特定条件を崩してしまうことで、画一的な条件を整えることに成功した。

場合によつて普通よりも重く、逆に意味を薄めて極端に軽くすることで、一部が緩和される事もある訳だ。

これまで出来る者は限られるとされてきた、パラレル・キャストを、魔法師ならば誰でも1つくらいは可能だと立証して見せたのである。

特定の魔法同士の組み合わせ、あるいは同じ魔法の別利用など、条件は限られるが、この場合は可能になるという道が示されたことの方が大きい。

例えばあいつと喋っている相手、七宝・琢磨であれば七宝家の方を操る『ミリオン・エッジ』を元に、特定の魔法を並列処理させる。

それがある意味、琢磨という少年専用の、『ビリオン・エッジ』という億を越える魔法を開発したらしい。

そして…。

俺が既に失われた過去を思い出している間に、あいつは消失してしまっただ。

まるで俺が、あの魔法を使用した時のような、突然の消滅。

リアルタイムでソレを観察しながら、友人の消滅を悲しいと思えない自分を残念に思った。

数字の変化としてしか理解できず、既に記憶がそう処理し始めていたというのを、我ながらに自覚する。

「あ、あの……」

「なんです七宝さん」

不意に部屋の扉を開けて出てきた七宝が、俺の方を見て少し戸惑ったようだ。

あいつとの兼ね合いで顔だけ合わせて居たが、なんで中学生が居るのだろうと疑問に思っていたはずだ。

「お兄さま、……どう、説明したものでしょう?」

「そうだな。後でゆっくり話すか、無かったことにして牛山さんにも大学の研究室の……」

深雪に説明が難しいと言おうとしたことで、俺は変化の第二期を観察した。

「お兄さま、とうとう開発していただいた『ビリオン・エッジ』の習得に成功したんですよ!」

名称というものは、紹介した名前が定着することがままある。

友人の友人に紹介されると、年齢とかを無視して、アダ名に敬称をつけて後輩が先輩を呼ぶと言う奇妙な現象が起きる。

ここでは琢磨という少年は、俺のことをあいつとして認識し、深雪が俺を呼んだ呼称をそのまま採用したのだろう。

普段ならば男同士でそんなことはありえないが、これも記憶処理に関する矛盾回避が為せることなのかもしれない。

(やれやれ……。どうしたものかな。だが……観察するには丁度いいか) どうやら理論に関する俺のことを、あいつに聞いていたらしい。

腕前を買われていたようで、ありがた迷惑だが……。

記憶の処理に関して、対象の推移する瞬間を見たのだ。経過を見て記憶がどう消えて行くのかを診るには丁度良いだろう。

中学生という年齢が近いこともあり、親しく面倒を見たということ、俺は否定しないことにした。

これが七宝・琢磨との奇妙な慣れ染めの始まりとなったのである。

リバーシ

●奇妙な縁

「習得されたのですか？ おめでとうございます七宝さん」

まずは差し障りのない事を…と思つたが、少し予定を変更する。

「せっかくですし、適当な日時で試技の予定を組んでおきましょうか。空いてる日と…、やってみたい標的の傾向を教えてください」

「お兄さまさえよければ是非！ 後…琢磨と呼んでください」

どの道、俺が担当になるだろうし、今の間に『ビリオン・エッジ』を見ておく事にする。

どんなトリックで万が億になるのかは聞いているが、実際に見えないと詳細が判る訳も無い。

「そう言われても『社に居る間』はお客様、そういう訳にもいきませんよ。それと、自分のことも司波で構いません」

「はい！ 家で調整をお呼びしたり…同じ学校になれたらお願いしますね」

俺が試技室を予約しながら伝えたことを理解した様で、七宝は嬉しそうに返事をした。

年が近かろうが、FLTという会社に所属している以上は通さなければならぬ立場がある。

だが、どちらも中学生であり一年差。直ぐに同じ学校になる可能性があつた。

そして、手間だとは思いつつも、七宝の面倒を見るのもこれからの事を思えばこそだ。

浅く抑えるために適当に終わらせるか、それとも深く付き合う為に丁寧な対応をするか…。

どちらにせよ、知らない術式を後でなんとかするよりも、七宝自身が把握しきれてない今の内に理解しておいた方が良いからだ。

それに、七草が『三』の研究所から『七』に乗り換え、同じ七同士で争つたと言う話は有名だ。

後で違う研究者だと思ひ出して大きな問題になるよりも、ここで担

当替えになったとした方が齟齬が出ないだろう。

「対象の方はどうされますか？ 自動でも良いですが特殊な目標が必要ならば、深雪：妹に標的を用意させますが？」

「そうですね。機械相手では物足りないと思っていた所です。…出来る範囲でお願いしましょう」

どうやら、七宝はあいつに対する俺の立ち位置を、俺に対する深雪というふうには、そのまま心理的距離を入れ換えたらしい。

俺の提案に深雪は最初こそ戸惑うものの、七宝が向ける対抗心タツプリの目にやる気を出したようだ。

「私…がですか？ 判りました。お相手をさせていただきますね…」

抗議の視線というよりは、問いかけの様な視線を受けて俺は頷く。

後で帰りにでも説明するでしょう。

そしてミリオン・エッジ以上に準備が掛ると言うことで、少し日が空けてスケジュールを調整。

相当に気合いを入れている七宝に合わせてつつ、俺は引き継ぎの書類などを紛れ込ませておいた。

ループ・キャストの提案を牛山主任に見せた時もそうだが、案外、アナログ媒体のインパクトというものは侮れない物だ。

後で確認する時に、消えたあいつから俺に変わったことの整合性を、この資料を読んだ時に納得できるようにしておく。

一通り終わった後、課の方にも顔を出し引き継ぎと、心苦しいものの、あいつの資料をこちらに移す手続きを済ませた。

知識と実体験では意味が違うが、今の所は問題無く済ませられそうだ。

そこまで終った段階で、深雪が先ほどのことを尋ねて来る。

「お兄さま、何故、あのような事をお申し出になられたのですか？」

「相手が七宝家とあっては無碍にできんだろう。少なくとも…本家の意向を確認しないうちにはな」

七宝家はナンバーズと呼ばれる腕利きの魔法師の中でも、十師族に劣らぬ立場にある師補十八家。

それも十師族の七草に対抗心を燃やしており、入れ替わりを目論んでいる可能性の高い家だ。

家の意向が表面に留めろと言う指示ならば、今の内にボロが出ない程度に付き合いを処理する。

逆に、利用できるよう確保ならば、何年も付き合う仲になるので丁寧な対応が必要だろう。

「重要なのはMIA案件だ。七宝の件と合わせて報告すれば、いかに親父たちが俺を気にらないと思っても、早めに回答が返ってくるだろうさ」

「そうですね…。随分と親しげに話されてましたよね？ まさか…」

標的を深雪に用意させるという話が気に入らなかったのか、妙な感線りが返って来た。

俺は苦笑しながら深雪の頭に手を置くと、ポンポンと軽く叩いてから撫でてやる。

「俺に男を口説く趣味はない。それにアレは俺との距離感が急に变化したせいで戸惑い、お前が俺を呼んだ言葉や態度をコピーしてるだけだ」

キツパリと主張してから、事態を説明する。

「後はそうだな…。本家はともかく親父たちの掣肘を受けずに行動できるようになるかもしれない」

「それならば納得はできます。お兄さまが素晴らしい腕をお持ちなのは言うまでもありませんが、『あの人』たちには理解できません。それを是正する為の材料であるならば、深雪は喜んで相対しましょう」

俺は深雪好みのネタを仕込んで、この話題を適当に打ち切ることにする。

案の定、親父たちよりは行為が持てると、辛辣な言葉を向けて七宝の話題を置き去りにする。

やはり自分を置いて、他人に構いつけたのが気に入らなかっただけか…。

それに、話題を切る為に口にしたが、親父たちは…親父に限らない

が、俺を物扱いする傾向にある。俺自身はそれほど違和感はないが、ほかならぬ深雪がソレを嫌がる以上は、なんとかしたい優先事項だ。そしてループキャストの実用化にこぎつけて以降、締めつけが厳しく感じられたのも一因ではある。

ここで管理下に置かれるのを座して待つよりも、MIA案件に絡めて、七宝の態度を利用するのも悪くは無いだろう。

そういう意味に置いて、利用する以上は利用されることを覚悟するし、何らかのメリットを与える手間であれば面倒とは思わなかった。

●本家の意向

そして、事態は俺が思いもせぬ速度で急展開した。

本家に連絡を入れて僅か数日、不意の来客が訪れる…。

招かれざる客でありながら、断るわけにはいかない相手がやって来たのだ。

「おつかえりなきうい。達也さん。寂しくなかった?」

その日の帰り、全てのセキュリティを突破し、新婚家庭か何かと勘違いした様なエプロンが俺達に迫って来る。

ちようど深雪が出かけて居る様で、妹が待つて居ると安心していたのが運の尽き。

四葉・真夜…本家の御当主さまが御出ましになったのだ。

時々、冷静冷血で知られるこの人物は、こんな風に義理の家族ごっこをやりたがる時がある。

(…勘弁してくれ。またこの心理サイクルに陥っているのか)

この建物どころか、一族全ての生死すら押さえるこの人物を遮る手段は存在せず、俺達には拒絶する権限が無い。

モラル・ハラスメントという言葉が頭の中でちらついてしまう。

「御袋、来てたのか。…用件があるならさっさと終わらせてくれ。それに、俺の方にも伝えにやならんことがある」

正直な所、圧倒的な権力者に逆らうことは出来ないのです、されるがままなのだ…。

「まあ…。義理とは言え息子に会いに来ちゃいけないって言うの? 義母さん悲しい…」

仕方無くつきあっていると、時々ではあるが、本気で親だと思ってしまう時も無くはない。

かつては本物の母親と双子だからと思ってしまうていたが…。

今では良く判る、これはMIA案件の後遺症だ。

俺は母親の事を忘れ、この人は母親のフリをすることで、心の矛盾に整理をつけただけなのだ。

ただし、この人には母親に成ることが出来る筈が無く…。その意味では、あえて流されていたのかもしれない。

そういう意味では、道化のフリをして自分の意向をネジ込みに来たと言えなくもないだろう。

「あら、家がらみ？　じゃあ仕方無いわね…。それで、伝えたいことは何なの？　達也さんの報告から先に聞きましょうか」

気配がガラリと入れ替わる。

柔らかいワンピースとエプロンが、カクテルドレスか何かのように感じられてしまう。

こんな風に素早く態度を切り替えられる辺りが、道化を演じて居るのではないかと思える理由だ。

「まずは提出しておりますがFLTでMIA案件です。場合に寄って資料の提供をお願いしたいと」

「それに付随して、七宝家の跡取りが自分の担当に成りました。御指示に合わせますが、無ければ適当に処理いたします」

俺は重要度に合わせ、続けざまに報告を上げる。

ことさらに事務的に告げるのは、あらぬ誤解を受けては困るからだ。

自由を求める気持ちが無いわけではないが、今は主張する事すら憚られる。

「必要なのは対処する場合の過去例ね？　別に構わないけれど…。達也さんはどうしたいの？」

だがこの人物には通用しない、笑いながら踏み込んで来る。

意図を察したからと言っていきなり処断はすまいが、対応を間違えれば、飼殺しに近い形で管理されることに成るだろう。

「こちらを狙った以上は撃滅します。ですが、深雪を守る意味でも、あの程度は表に出して行くべきかと」

「どうして表に出ることが、深雪さんを守ることにつながるの？　このまま無名で済ませる手もあるでしょうけど」

この問答は答え合わせの様なものだ。

ＭＩＡ案件の基本事項くらいは調べているのか？

そして、それを踏まえて、対処手段を考えて居るのか…と問うているのだ。

俺は三本の指を立てながら、いつきに説明を行った。

「二つ目。ＭＩＡ案件の犯人は、対抗者から隠れる為に無名に近い人物を狙う傾向にあります」

「二つ目。チームをよりカスタマイズに対応した…腕のある個人と密接に結びつくモノとして行く予定です」

「三つ目。仮に隠し続ける事が有用である場合も、自分達が目立つことで、他の家を隠す事が可能です」

深雪は当主候補の筆頭であり、可能な限り守る必要がある。

次に、個人と繋がり強いチームを作ること、情報の入手や将来的な縁を繋ぐ役にも立つ。

最後に、俺たち四葉に所属する者には、ある程度の情報を隠して、裏で行動する者も多いのだ。

それら三つを結び付ける手段が、開発チームであるトラス・シルバーのメンバー公表である。

「一応は合格としておきましょう。でも確認しておかなくちゃならない重要な事があるわよね？」

そしてあつけないほど肯定の言葉が簡単に降りて来た。

当主が出す鶴の一声があれば、いかに親父と言えど止めることはできまい。

安堵すると同時に、非常に厄介で…当然といえば当然の疑問を突き返される。

にっこりと笑う笑顔は温かい様であるが、同時に向計画で有れば、即座に処刑しかねない恐ろしさがあつた。

「ねえ達也さん、あなたが成功する道理は無いわよね。技術って切磋琢磨するモノ。あなたと同じくらい努力してる子は居るんじゃないの？」

開発チームの名前を表に出し自分がそれに名前を連ねるとして、有名になるとは限らない。

それなりの腕を持ち、理論の方では自信がある。

だがそんなモノは、会社であり技術者である以上は、至極当然。切り札足る質問を容赦なく放って来た。

だが、これは当然のことだ。

四葉がFLTのスポンサーであるなしに、確定せねばならない事項でもある。

当然の質問ゆえに、俺には当然の答えが用意してあった。

「加重系魔法の三大難関の一つ、飛行魔法に目途をつけました。九校戦ではさぞ話題をさらうことでしょう」

俺が切り返した言葉に、ぱちくりと目がまたたくのが見えた。

意味が理解できないはずが無い。

俺の言った例え：九校戦で行われる、跳躍を繰り返す競技を思わず想像したのだろう。

「ふふ…やだもう達也さんってば、これってインサイダーになっちゃうじゃないの。でもいいわ、それなら確かに話題性も採算性も十分ね」

「畏れ入ります」

くすくすと笑う声に俺は安堵を覚えた。

恐ろしい相手との気の抜けないやりとりを無事に終えたと言えるだろう。

この時ばかりは本当に、そう思っていた。

後から考えれば、甘いと言うほか無い。

「来年のミラージ・バットを今から楽しみにしているわ。龍郎さんが何か文句を言ってきたら、『思い知らせる為に放り出せ』と入れ知恵するつもりだから、それまでには頑張るのよっ。」

「鋭意努力します」

FLTから切り離して独自採算の子会社にする。

そう通告されて肝が冷えた。

飛行魔法は目途が立っているが、万人向けの実用化にはもう少し掛かる。

カスタマイズメーカーとして名前を馳せることができなければ、ずっと紐付きで管理されることになるだろう。

だが、逆に考えれば行動の自由の他、資金的にも相当にやることのできるだろう。

そして……。

最後の最後に、本当に恐ろしいモノを俺は見ることになっる。

この時まで、俺には激しい感情が存在しないのだと考えて居た。

まさかそれが、こんなにもアツサリ覆るとは、この時の俺には思いも寄らなかつた。

「ねえ達也さん。MIA案件の犯人って紅世の徒って言うらしいの。必ず滅ぼしてくれるわよね？」

そこに、女の形をした穴があつた…。

空虚な笑顔、光の無い瞳。

三十台と評されるほどに若く、美しいと評された外見はそのままに、似ても似つかぬ恐ろしいナニカが居た。

「私って何も無いの」

「恨んでも飽き足りないはずの大漢はもう何処にも無くて、実感も湧かない。勝手にそんな魔法を掛けた深夜も…紅世の徒に食べられちゃつた」

「その徒ですらもフレイムヘイズとか言う魔法師に倒されて…私は誰を恨めば良いのかしらね？」

「私の代わりに倒しておいたから納得しろって？ 納得出来る訳ないじゃない。でも、居ないのよ、何も無いのよ…」

四葉・真夜という女は最初から暗黒洞で、何もかもを呑みこんで自滅するのではないか？

あるいは暗黒の泥を吐きだし続けて世界を覆うのではないか…。

そんな妄想が思い浮かぶほどに、この女性は虚ろで、そこには何も

無かった。

誰かを破滅させる魔法と権力を持つて居るのに、その矛先だけがどこにも無かったのだ。

その在り様が、俺にはたまらなく恐ろしかった。

「ねえ達也さん……。約束してくれるわよね。今回、うちの庭を荒らした奴を必ず破滅させてくれるって。ねえ？」

だが、不思議なことに、俺はこの女に奇妙な親しみを覚えて居た。

「ああ、約束するとも。どこに隠れていようとも、俺が必ず探し出して破滅させてやる」

俺にも恐怖という感情があると教えてくれた。

俺と同じ様に、紅世の徒という訳の判らない連中に翻弄された仲間が此処に居る。

同病相哀れむと言う訳ではないが、その事実が俺に親近感を抱かせた。

代理欲求だと判ってはいたが、構いつけて来るこの女を嫌いになれないのはそんな理由だろう。

トーラス・アンド・シルバー

●雲間に挿す光

課に顔を出すと、不思議なくらいに騒然としていた。

もともと静かな場所では無いことを除いても、だ。

「どうしたんですか？ 妙にザワついてますが」

「こりや御曹司！ みつともない所を見せてすいやせん。ちよいと在庫確認やらブッキングのミスが重なりやしてね」

牛山主任が説明するには、使い切りそうな材料を補充に行くと、管理からは無いから回せないと言われたらしい。

それだけならまだしも、課には無い大型のマシンの申請に対して重なっているのでこちらが後回しにされたそうだ。

「御曹司の予定してる試技室みたいに、指定するタイプの注文は美味く行ってるんですが…」

（あの人か？ だとしたら随分と手が早い…。いや、それにしても穩当過ぎるな）

話を総合する限り課の優先順位が、露骨に下げられたようだ。

怠業に成らない程度のサボタージユを重ねて、無い場合はこの課を後回しにする…。

今回、真つ先に連想するのは昨日の話から来る試練だが、追い出して強制独立という件に比べて大したことは無い。

示された期限からは遥かに遠く、昨日の今日で研究が出来るはずが無いことくらいは判るはずだ。

（逆か…。もともとこつちが本筋だったと考えれば納得がいく。あの人はこれを聞きつけて、俺と親父たちの双方の背中を押す気だな）

俺の報告を受けて、本家はどの程度の案件なのか調査した。

その過程で、課の優先度を下げる嫌がらせが始まっていると判ったのだろう。

だが、その程度ならば誰に取っても何の意味も無い。

俺を掣肘するにしても放置するにしても効果が薄く、何の介入も無ければ納めることは簡単だ。

だが、それもまた本家に取っては何の意味も無い。

「御曹司？」

「ああ、少し考えこんでしまいましたか。…おそらくはやっかみや嫌がらせの類いだと思います」

だからあの人は、俺には独立を促し、親父にはいずれ放逐を促すつもりなのだろう。

もし命令する気ならば、昨晚のうちに命じて、今頃は絶望と怒りの目が向いて居たかも知れない。

ソレを考えれば、今の自体は温過ぎる。

「つまらねえ事しますなあ。仕方ねえ、俺が行ってガツーンと…」

「いえ。それでは逆効果です。…実績でもあげれば簡単に黙るとは思いますが、二つか三つ手を打ってみませんか？」

ならばむしろ、この状況を利用するくらいの方が良いはずだ。

「小ロットで良いので、ループ・キャストを基本としたCADの発表と試験提供を前提にします。その上でちよつとした改革を取り入れるわけです」

一応は部外者に近い立場なので、提案という形で口にしてみる。

牛山主任は最初驚いたようだが、直ぐに面白がって尋ねてきた。

「確かに実績が無いことを理由にしているなら、実績上げるのが妥当ですなあ。それで御曹司は何をお考えで？」

「このまま管理だけの嫌がらせで済めば良いですが…」

何の干渉も無い場合の解決手段を口にしつつ、俺は目的に合わせて予想の方を修正する。

実際にはそこまでやらないとは思いますが、あり得る範囲の懸念を並べ立てた。

「ライバル関係の部署や、親父に近い筋でネジこまれると面倒です。

次は人事異動や引き抜きが来ても不思議ではありません」

「ソイツは厄介だ。時期としちや横紙破りだが、連中の十八番ですからなあ」

使えない技術者を飛ばす事もありえるが、邪魔者を無意味に飛ばす事も無くは無いです。

顔を抑えて嫌そうな顔をしてる牛山主任自体、そういう兼ね合いで窓際に干されていたのだ。

そうした連中が、牛山主任が元の場所へ戻ってくることを嫌って、盛大な妨害をする可能性はゼロではない。

「そこで声を大きくして断ることもできなくはないですが、実際にはやりたくてもやれないのが大人ってもんですわ」

元の部署に戻す、もっと良い陽の当たる場所に…。

そう言われたら信用できなくとも揺らぐ者は多いし、良くてでも不従として給料を下げられる可能性はある。

実際に異動させる気は無くとも、口にするだけでこちらの作業を邪魔するカードになるだろう。

「…で、具体的にはどうなさるつもりで？」

大袈裟に顔を覆っていた主任は、悪戯小僧のような視線をこちらに向けて来る。

少年の様なくなってきたくささと、悪戯小僧の同居…。これこそが牛山主任が飛ばされて来た理由なのかもしれない。

「基本路線はさつき言った通り。後は残る場合の収入確保と、帰属意識を高める工夫をします。ロータリー四十七士を御存じですか？」

「そりゃあ俺だって男ですからね。化け物エンジンの開発チームのことは良く知ってますさあ！」

Mツダの名車RX78はスポーツカーとして一世を風靡したマシンだ。

ホンダムやダットサン、ボクヨユウ自動車など大手のマシンと比べても遜色ないどころか、一時的に性能が上回った時期もある。

そのエンジン開発は難事業で、関わった技術者達は全員が世に知られている。

詳しい者はその後に何に関わったかまで良く知っている様で、牛山主任はそれこそ少年の様に目を輝かせてベラベラとしゃべっていた。「でしたら話は早い。まずは記録に残るようにしてイザと言う時に備えます」

まあ、これはそれほど意味のある行為ではない。

首を切り難くするというだけで、何の保証も無い。

だが、切られ難くなるのは確かで、かつ、忘れられたあいつや俺の名前を出す事にも繋がる布石という程度でしかない。

本命は此処から。

「次に、プロジェクト・リーダーに大きな権限を渡して、やってみたいモデルの開発が出来る様にします」

「ははあ…。他所が欲しがらる名の知れた技術者を干すとは簡単に言えませんな。その上で好きな物造りに打ち込めるって、あつしらにとつてのは大きな魅力だ」

研究者が好きな研究を出来る訳ではない。

同様に、技術者が好きな技術を試作できる訳でもないのだ。

基本的にはやれと言われた用事をこなし、少ないパイを奪い合う形で開発リソースを割くことに成る。

仮にカスタマイズくらいのレベルであろうとも、自分の興味だけで本格的にやれないという問題があるのだ。

だからこそCADならCADで、好きなタイプのCADを作り易くさせてやれば良い。

この課に所属する限り、汎用型なり特化型なり、ちゃんとした理論と目算があれば自分の目指す物を試す事が出来るなら他所に移ろうとはしないだろう。

ちゃんとした実績が名前と共に残っているなら、実績やチームワークを盾に異動に文句を言う事も出来なくはない。

「でも良いですかい？ それじゃ細かい開発に手を取られて、大きなことは出来ないって中途半端にもなりかねませんが」

「勿論、大きな企画があれば別です。お忘れの様ですが牛山主任。自分達もプロジェクト・リーダーの資格はあると思いますよ」

開発リソースを割けば、当然ながら何もできなくなる可能性もある。

特に貴重な素材は分割出来ない場合も多い。

だが、そういう場合は事前に話し合っつて将来の優先を決める形にしてしまえば良いのだ。

そうすれば：既に実績のある俺達二人の発言力は大きくなる。

「はは！ 御曹司も人が悪い。海の物とも山の物ともしれない今の状況で一足先に作り出す俺達を相手に、下の連中が異議を唱えられるはずがねえじゃねえですか」

「そう言う事です。抜かすの剣というやつですがね。ひとまずは、ファースト・モデルの案を練りましょうか」

ソレを振り回す気は無いが…。

どうしても必要な場合の決定権は、実績に照らし合わせる以上は最初から保証されていると言えるだろう。

勿論、無名の人物が良いアイデアを出して覆ることもあるだろうが、それほどの人物ならば望む所と言える。

なにしろここで発言権や実績を誇りたい訳ではない…。

あくまでこの方針というのは、将来に独立する時の為の布石なのだ。

FLTの子会社として独立採算を果たした時、残ると言ってくれるように、今から帰属意識を高めていくだけなのだから。

●旗揚げと、黒蝶

まずは俺達を中心に成ってファースト・モデルの話を進め、ループ・キャストを前提にしたCADの開発開始。

判り易く易く汎用型のトーラス系と特化型のシルバー系とし、後は完成した順番で発表…。

という段階で、横槍が入って来た。

「どういう事なの！ あなたの様な人が勝手に名前を公表するなんて…」

「小百合さん。仮にもFLTの社長夫人ともあろう方が声を荒げるモノではないと思いますが」

社長一行が通り過ぎようとした時、一人の女が踵を返して俺の方に詰め寄って来る。

親父の後妻であり、管理の責任者でもある司波・小百合だ。

「失礼ながら御懸念のことに關しては、小百合さんの担当部署である管理とは関係ないと愚考しますよ」

「わ、私の管理が甘いと言うつもりなの!？」

決して煽る気などなかったのだが、やつかみで資材やらスケジュールを弄っている人間にはそう聞こえなかったのだろう。

立ち上げたばかりのチームであることを利用して、実績が下だから後回しという程度の小細工である。

無視しておけば良いと思ったのだが、あらぬ関わりを持ってしまった。

流石に見かねたのか、それともサボタージュでは無いとフォローする気なのか、親父が小百合さんに味方を始める。

二人揃って口を合わせられると流石に面倒ではあるが、話を上に通す丁度良い機会だと思っておこう。

「達也、いい加減にしなさい。お義母さんに失礼だろう。それに四葉本家からは情報を極力隠すべしと言われているはずだ」

小百合さんも四葉の家に翻弄された口なので、同情する余地はあっても揶揄する気は無かった。

だが親父はそうは思わなかったらしく、俺を制しつつ、本家の言う事を聞けと言ってくる。

情報統制自体は小百合さんのやつかみは関係なく、これまで当然としてあった四葉の主義だからだ。

しかし、その部分解除は昨日の時点で確認済みだ。

「その四葉家から下された任務の一環です。決して本家の意向に逆らう訳でも、あなた方の職責を侵すモノではありませんよ」

四葉はかつてのできごとから秘匿傾向にあるが、今回はそれを逆手に取つての状況と言える。

予め来ると判っている流れだけに、むしろ拍子抜けするくらいに反撃する事が出来た。

「例のM I A案件に関する防護策と、同時に四葉全体を隠す為の囮役を兼ねます。俺達が目立つことで家の者は動き易くなるでしょう」「そういうことなら仕方あるまい。他に何も無ければ…行くぞ」

四葉当主の意向を確認していると聞いて、異論を唱える気は無いらしい。

家族間でのシコリは強まったかもしれないが、FLT内での嫌がらせは起きなくなるだろう。

あとは実績を上げること、もめ事はこれで収束すると思われた。

●幾万の刃と、幾億の刃

そして俺はシルバー・ホーンというシリーズを発表。

汎用型ゆえの煩雑さで遅れたものの、牛山主任もトーラスの名前を冠したCADを発表するだろう。

あとは試験運用の反応待ちで、当面の予定は七宝の相手をするだけに成った、

「要望のあった機動目標に対する試験を二度、その後に硬化目標に対する試験。それを終えれば俺の方で適当にオマケと行きましよう」

「はいお兄さま…じゃなくて司波さん！ いつでも構いませんよっ！」

七宝はアタツシケースを開くと、大きな書籍がバラバラと千切れていく。

「本当にこれほどの……では参ります」

(いきなり百万で来たか。相当の自信だな)

今までの上限いっぱいのが舞いあがり、流石に深雪も息をのむ。

ややあつて強化プラスチックで出来た標的が、十ほど軽やかに舞いあがつて行くのだが…。

ジグザグに乱数回避する機動目標を、あつさりと紙の刃が捕えてしまふ。

「こんな物では練習にもなりませんよ。手加減は無用です！」

「っ！ ならば次は、任意回避も入れて行きますね」

ズタズタになる標的を見て七宝は得意げに、深雪は少しだけ悔しそうだ。

妹が感情的になるのも珍しいが、七宝の方も最初に見たトゲトゲしさが抜けて居る。

思うに二人とも同世代の中では抜きんでた存在であり、案外、ここでの出会いは悪くないように思われた。

そして次には乱数回避に加えて、奥行きや目の錯覚も利用した複雑

な軌道を取り始めた。

「あつ…。くそ、じゃあもう百…いや、三倍で責め立ててやる！」

時々加わり深雪の意思が踊る様に回避し、途中で強化することで移動速度すら変化させる。

頼まれ仕事に対していささか大人げない様な気もするが、それでも七宝には良い刺激に成ったようだ。

三百万の紙の刃が、三つの扇と化して広範囲を仰ぐように追い詰めていく。

総数を増やしたこともあり、管理が甘くなつて落ちない目標もあるが、殆どが最初の接触で叩き落とされて行く。

「深雪、次は一枚だけで良い。アイスピラーズブレイクに挑むくらいで行きなさい、でないと七宝さんに失礼だ」

「判りましたお兄さま！」

俺の指示に深雪だけでなく、七宝まで応じて居るのが面白い所だ。

次々と上がる難易度に、二人ともちよつとした勝負をしてるつもりなのだろう。

そして、今度の変化は劇的だった。

たった一つの群に襲いかかる一千万近い刃。

だがまるで歯が立たず、ボロボロにこそしているが、七宝は深雪の守りを突破できないで居た。

「一千万でも駄目なんて…。ようやく勝った気もしますけど」

「いや、一千万だからこそだ。おそらくは…トリックが持つ敷居値に引掛つたな。七宝も数を減らせばどうなっていたか判らん」

逆に深雪の方がビツクリしたようだ。

勝負ではないことを忘れて思わず俺に質問してくる。

「敷居値ですか？」

「そうだ。あの魔法は範囲に特化しており、それゆえに攻撃強度を上げ難いという欠点がある」

これだけの数をまともに制御することなど不可能。

だからトリックを使って、詐欺臭い方法で万単位のミリオン・エツジを億単位に変更する。

それこそがビリオン・エッジであり、結局はトリックでしかないからこそ、固有の弱点を持っていた。

「七宝さん、お見事でした。最後のは群体制していない一ゆえの問題ですから、今後の課題としましょう」

「すいませんお兄さま。いけると思っただんですが…」

「制御して居ない?」

俺と七宝の会話に深雪が首を傾げた。

当たり前だろう、群体制の練習をしているのに、していないとはどういう事なのか?

そう、これこそが億を操るトリックだ。

「ビリオン・エッジは刃を操る群体制じゃない。深雪、風景画だとも思っただけでよくご覧」

「風景…? あっ」

俺は自分用のCADを用意しながら、深雪にヒントを出した。

「全体に分散している様に見えますけれど、これはもしか、小さな集団に別れて居るのですか?」

「そうだ。相殺しないだけの処理をしたグループを一つの領域に放りこんだ…いわば風船のようなものだ。風船を操る群体制ではあるけどね」

干渉する規模を減らす事に寄り、個別に掛る能力負担やサイオン量を大幅に下げた。

魔法の連続使用そのものは、それこそループ・キャストで行っている。

もちろん多くの欠点を抱えて居て、全体で1つではない為、先ほどの様な場合に威力向上が難しい。

ミリオンエッジが刀の波なら、ビリオンエッジはカミソリの網くらの差がある。

さらに干渉を減らしたとはいえ、それでも同時に他の事をするのは難しいだろう。

「あえていうなら敵部隊や隠行集団を叩き潰す為の専用術式ということか? …さて、オマケの方を片付けましょう」

俺は自分用の銃型特化CADである、造りたてのシルバー・ホーンを掲げた。

七宝に声を掛けつつ、銃口を天空の刃たちに向ける。

「ベリオンエッジが一撃で……。グラム・デモリッション？」

「見ての通り、術式の強度が下がる欠点もある。こうなった時にどうするか？ それが必要な問題です」

必要干渉力とサイオンを減らす為、最低限の力で滞流させているだけ。

それも最初にそう命じただけで、その後は袋を投げるように領域を動かしているだけだ。

だからこそ、情報強化で他者の干渉を防ぎ難く、術式解体が直撃すると、まさに風船が割れる様に吹き散らされてしまうのだ。

「さて七宝さん。あなたなら、この後どうしますか？」

「え、ええ……と。流星にもう必要ないと思つて用意していないし……どうしたら」

答えの無い問いに、無理やり応えを出さなければならない。

そうしたイジワルな問いに対し戸惑っていたが、やがて混乱した頭で最低限の行動を取った。

七宝の近くにある僅かな数の刃が、力無く浮かび始める。

「くそっ！ こんな状態じゃ1万も動員できない……」

「いえ、それで良いんですよ。どんな状態でもその数だけを操れるようになれば、乗り切ることが出来ると思います」

特に最適解では無いかもしれないが、七宝の見付け出した答えを、俺は全力で応援する事にした。

もともと答えなどないのだ。

今の状態が七宝に取つての基礎であり、最も操り易い数だということなのだろう。

ならば、この数を上手く操つて、どんな状態にでも対処できるように、答えの方を動かせば良いのである。

「ひとまずの完成記念と、次なる目標の確定をお祝いして、専用のCADと戦法でも考えてみましょうか」

「本当に良いんですか!? お兄様がよろしければ、是非!」

俺の他愛ない申し出に七宝はとても喜んだようだ。

本家の意向は優良顧客として確保しつつ、師族会議で何かあった場合は、間接的に取り込めるようにすること。

その延長線上に過ぎないのだが、喜んでくれるならば悪い気分では無い。

「ミリオン・エッジと併用出来る数に絞って、ミリオン・エッジの欠点を補う形にしようかと思っただけですよ。手間としては大したものではありません」

アイデアとしては基本に戻るだけだ。

対軍仕様のミリオン・エッジの火力では駄目なら、対人仕様で練り上げられたミリオン・エッジで切り分けばいい。

先ほどの強力な個体の様な場合や、術式解体された場合。

あるいは奇襲された時に身を守るためなど、咄嗟に利用できる、併用できる僅かな数だけを用意するだけだ。

できれば風船をぶつけて居るだけの状態をなんとかしたいところだが…。

まあ他人様の術式である、追々何とかして行けば良いだろう。

●ダブルセブン

そして何日かが過ぎ去く。

提供しているCADの反応を集積しながら、メインで紅世に関して調べつつ、サブで七宝用のCADを作り上げていった。

CADの方はアイデアが先行しているので難しくもないが、紅世の方はそうもいかない。

せいぜいが『徒』^{ともがら}と呼ばれる下位の存在と、『王』と呼ばれる上位の存在に分化していることくらいだ。

徒であれば十師族に連なる精鋭ならばなんとかなるらしいが、王であれば最低でも国家に数人いるかいないかの戦術級の魔法師が必要条件というのだから、軽く目眩を覚える。

(戦闘力もだが、追跡者が居るから隠れて居るとするのが最大の難関だな。最悪、第三者も利用せざるを得ないとして…)

自分の手だけで片付けるといふのは贅沢かもしれない。
そう思ったところに、牛山主任が声を掛けてきた。

「御曹司、すいやせん。お客様がお見えになっておられるんですがね」
「そうですか、応接室の方にお願ひします」

七宝が取りに来たかな？

と思いつつ、試作一号を鞆に入れて移動する事にした。

主任の顔がニヤニヤ笑いだったのが気にかかるが、もしかしたらC
ADを提供を要望するどこかの会社なのだろうか？

評判は良いので、最近では警備会社などがそういう話を持ち込んで
きたりしている。

そう思っていたのだが…。

予想は斜め上の方向に覆された。

「初めまして。私は第一高校の生徒会長を務めております、七草・真由
美と申します」

「これはご丁寧に。FLTに所属しておりますチーム、トールラス・アン
ド・シルバーの司波と申します」

意外なことに、一高の生徒会長だった。

志望高の一つであり、十師族であることから知ってはいたのだが
…。

何の要請で来たものやら。

「今回は備品の手配か何かでしょうか？」
「いえ、実は…」

多くのデータを集める為と、名前を手っ取り早く広めるために、
ループ・キャストなどの技術は公開している。

だからこそ、わざわざ中学生に頭を下げる生徒会長の要望など、他
に思い付かなかった。

あと少して用件を聞きだし、会話も終わると言うのに、在つては居
る闖入者が現われたのは、その時である。

「お兄さま、いけません！ そいつは魔性の女です。きっと良からぬ
ことを…」

「琢磨、お兄様は止め。失礼しました…なんの御用向きでしょうか？」

七宝が会談中に割って入ると言う迷惑なことをしてくれましたので、やんわりとあしらいながら、七草嬢に頭を下げる。

それに対して彼女は、くすくすと笑いながらコケティッシュな笑顔を向けて来る。

「あらあら。笑い出してしまつてごめんなさい、これでおあいこですね？ 改めまして用件なのですが…。第一高校に入学していただけませんでしょうか？」

だが、その話の内容は、俺に取って意外な物であった。

いざない

●不誠実なオファー

突然の訪問者、七草・真由美からの要請は驚くべきものだった。第一高校に入学して欲しいとのことだが、生徒会長に就任したと言うが何をやらかす気なのだろうか。

「自分の実力は二科生止まりかと思われます。どのような意図か測りかねますが？」

シルバーとして公表しているデータの中には、俺の能力程度も含まれている。

魔法師としての才能は低いが、サイオン量やコントロール力を活かして研究に役立てたと言う程度であるが…。

俺の実力は補欠である二科生であり、将来を約束される一科生には程遠いのだ。

他の学校からはせいぜい、試験機の提供をした会社や購入を考慮している会社のOBが勧めるくらいである（研究系大学からの飛び級は除く）。

「存じ上げております。忌憚なく失礼な言い方をするならば、二科生だからこそ…来ていただきたいのです」

七草嬢はここで、あえて直球で勝負をしてきた。

「失礼なっ！」

「琢磨、座れ。…すまないが少し静かにしていてくれ。熟考を擁することのようだ」

ならば続きを聞かねばならないだろう。

闖入した七宝はそのままに（維持の悪い言い方をすれば、遮る為の牽制役になる）。

続きを促すために、場を整えることにした。

「長くなりそうですので、御好きな飲み物をどうぞ。…さて、二科生を増やしてどんな意味があるのでしょうか」

まさか機材の調整を安く済ませようと言う訳でもあるまい。

京都の二高なら古式魔法を学べるかもしれないし、静岡にある技術

系の四校なら開発者としては悪い環境では無いが、どちらも妹の深雪を考えればメリツトはない。

首都圏にあることもあり、一高への進学は本家の横槍が無ければ本命ではある。

実際に願書は提出してあるし、変えろと言われ無い限りは受験予定なのだが…。

あえて難色を示してみるといふか、どんな目的なのか興味があった。

それに、無条件に頷くのも良いが、条件を引き出せるなら無意味な時間潰しでもあるまい。

「一科生と二科生の対立を快く思っては居ません。それに、元はと言えば制度上の意味が無いのは御存じでしょうか？」

「寡聞にして聞いたことはありませんが、よろしければ説明をお願いします」

正規の生徒で精鋭であることを誰からも要望される一科生。

補欠であり戦力の足しとして急遽追加された二科生。

その対立というか隔たりは大きいと言っているが、まさか制度上の意味が無いとは知らなかった。

自分自身が二科生止まりなこともあり、姿勢を正して興味深く拝聴する事にしよう。

「始まりは知っての通り定員を増やしたことに寄ります。現在でも力リキュラムそのものは同じなのですが…」

俺の興味がわいたこともあり、七草嬢は紅茶のカップを置いて本腰を入れ始める。

「当初は枠を増やただけで、意味はありませんでした。ただ単に、エンプレムの発注が間にあわなかったというだけです」

「それが何故、今の様な構造が生まれたのですか？」

あるいは、これを伝えることこそが本命であったのかもしれない。真摯な瞳で語りかけて来る。

それで頷く訳ではないが、興味だけなら非常にそそられる話だった。

「根源的な問題は人員です。必要に駆られて生徒を急遽増やしても、教師までは無理です。特に致命的だったのが…」

七草嬢はそこで言葉を区切り息を整える。

一気にしゃべってしまった反動なのか、僅かに顔を赤くして元の衛身を取り戻した。

「教育原理の管理限界がそのまま魔法に、いえ才能の延び代はその比ではありませんでした」

「あっ…そうか」

「なるほど。教育原理までは存じ上げませんが、人を育てるのが難しいのは良く判ります」

七草嬢の言葉に七宝は顔色を変える。

それはそうだろう。

現時点で戦術級魔法師との境目にいるが、ついこの間まではそれほどの範囲火力は有して居なかったのだ。

それを見出したあいつや、交代する形で育てた俺のような者が居なければ急成長しなかったに違いあるまい。

「教育原理では一般に20名程度、聞くのが主な教育でもその倍が限度とされています。そして、才能を伸ばすのは僅か3名から5名ほどとか」

同じ様に埋もれた才能の持ち主は結構いるはずだ。

魔法の才能は遺伝する為に、七宝のようなナンバーズ出身の一科生の方が大きく伸びる傾向は顕著であるだろう。

教えるのが数名の方が良いのは、いわゆる個人向けの学習塾が一時増えたことから窺える。

「そして代を重ねることで、今度は慣習例やデータに基づく制限に変わったと言う訳です」

「BS魔法師のような超特化型は別にして、育てる人も時間も無いから二科生には不要…と。夢の無い話だ」

逆にもととの才能が俺のように特化しており、入学時点で二科生止まりの者が、そこから教育を受けなければどうなるかはおして知るべし。

「そこで私は、二科生と一科生の間に横たわる軋轢を解消し、異なる未来を作る為に司波さんに一高へ入学していただきたいのです」

「とはいえ二科生に何ができるやら」

一科生と同じ程度に調整し直したCADなら用意できるだろうが、それ以上の断言は出来かねる。

それに、この女は重要な事を言っては居ない。

血統で才能の影響が大きいこのご時世で、推薦入学などあるはずもないが…。

入学に便宜を図るとも、その後は何を…とも口にはしていないのだ。

今の話を聞く限り学校サイドの後押し無しでやって見せ、制度を改革しようと言うのが透けて見えるが、聡明な思想に共感する必要があるとは思えない。

この女は本家が俺の予定とは異なる道を示した時に、異議を提示するだけのメリットを提示してくれるのだろうか？

●人と人との掛け橋、セブンブリッジ

気が付けば俺は、十師族の七草としての付き合いだけではなく、何かの意義を求め始めて居た。

メリットがあれば領きたいという心の表れであり、大きな振れ幅の無い俺の心が、理由を求めているのだろう。

「我が高の二科生で、司・甲さんを御存じですか？」

「今年の剣術大会で同じ一高の…それも一科生を破って優勝した方でしょう？」

あの時はちよつとした話題に成ったので良く覚えて居る。

純粹なスポーツの剣道ならともかく、魔法を交えた今日の剣術において二科生と一科生の差は大きい。

だが司・甲という男は類い稀な防御技術で勝ち進み、決勝戦は僅差で勝利を飾ったのだ。

極度の緊張感を擁したらしく、大会後に倒れて入院したというのも、話題に成った大きな原因なのだ。

「その司さんはその…あまり大きな声では言えないのですが、 霊子

放射光過敏症なのですけど、お兄さんの指導もあって大幅に改善。試合に活かしたそうなのです」

「ほう…？ 確かに広めない方が良い話ですが、興味がそそられますね」

その話を聞いた時、俺は二つのことに思い至った。

一つめは二科生が一科生に勝利出来た理由であり、二つめは症状の改善という言葉への違和感だ。

人は誰しもがサイオンや魔法の輝きに対し、必要以上の量を意図的に遮断して受け取る。

霊子放射光過敏症は一般に『見え過ぎ病』と呼ばれており、誰しもが持っている遮光機能が無い代わりに、無意識に見えない様にされた細工を容易く見抜き易いのだ。

ゆえに、使いこなす事ができれば魔法を伴う剣を防ぎ易いのは確か。

(だが、改善するような病じゃない。強いて言うなら制御力の向上だがそれも普通はあり得ない)

俺が違和感を覚えたのは、使いこなしたと言うのではなく、改善したと言う良い回しだ。

司とやらの兄弟が詳しくないのであればそう言う可能性もあるが、困ってる当事者がそんな事を言うだろうか？

俺がそんな他愛のない疑問にとらわれて居ると、七草嬢はそのまま喋り続けていたらしい。

「司波さんなら彼の様な人がお客なら、専用の魔法式やCADを用意できるのではないですか？」

「…？ ええ、まあ。そうですね。特殊な目と体捌きがあることを前提に、慣性制御に特化した体術補助を組むでしょう」

思わず答えしてしまったが、高度な体術にとつての鬼門は圧倒的なパワーかスピードだ。

自己加速を極めたり、高周波以上の超震動で足を止められると、流石に手が出ない。

迂闊にも受け答えの前後を聞き飛ばしてしまったが、七草嬢は感心

し、七宝はウンウンと自慢げに頷いて居る。

「どうやら話の筋的には間違つて居ない様だが…。」

「ということは、彼の様の特化した二科生が居れば、判り易く一科生だけが優れているのではないと示せると思います」

「確かに一人二人なら例外で済まされませんが、十人・二十人と出てくれば教育方針の方が間違つているでしょう」

ここまで来れば、話の流れと要望が見えて来る。

七草嬢はエンブレムの不備と、認識のすれ違いから始まった今の制度に対し、数多くの実績を生み出す事で覆そうとしているのだ。

あくまで能力が評価対象外に偏っているだけであり、基準が違うか、十全に活かせば劣つてなど居ない。

…それは常々、妹が俺を慰めるために言ってくれていることであり、今では俺のささやかな心情でもある。

もし七草嬢が俺の共犯者として誘い、彼女もまた俺の共犯者足る覚悟があるのであれば、乗つても良いかもしれない。

思えば頷いても良いと言うメリットを無意識の内に探していたのも、この答えを欲していたのだろう。

「興味のあるお言葉でしたが、妹の意見もありますので一存では答えることが出来ません。ですが…」

俺は一応の体裁を整えつつ、断りではなく別の言葉を告げた。

「特性を活かすための技術者や見識の持ち主を御紹介ただかねば、始めることすらできません。そのことを御理解下さい」

「ということとは、妹さん次第で…」

俺は言葉には出さず、頷きもしなかった。

ただ、七宝の為に用意した特殊なCADの箱を掲げて、テーブルの上を開いて見せる。

「お兄さま、そのペーパーナイフはもしや…」

「これはミリオン・エッジ専用の特殊CADでして、刻印魔法を使用しているのですが…。生憎と門外漢ですので効率が良くありません」

「っ！ では専門家を紹介できると思いますが…。多分ですけど、共通の名前が思い浮かんでいるのではないのでしょうか」

五十里という刻印魔法の権威があり、その子弟が一高に通って居るはずだった。

彼への紹介を暗に要請すると、七草嬢は入学を条件とせずに頷く。それは五十里家に関わらず、こちらが欲しいコネクションを提供してくれるならば、入学できない場合でも協力すると言うサインであり、了承でもあった。

七草家は精鋭こそ少ないが、様々な家とのパイプが太い。

それはこれから『紅世の徒』を調べるために必要なモノではあるし、特化した魔法師を活かす経験自体は四葉家にとっても役立つだろう。そう思いながら、俺はペーパーナイフを取りあげて七宝に手渡した。

「と言う訳で済まないが、場合によっては直ぐにバージョンアップしてしまうかもしれん」

「いいえ、いいえ！ 専用の魔法とCADを持つ者がどれほど居ましようか！ 大切にしますね！」

七宝は嬉しそうな顔でペーパーナイフを眺め、柄に当たる部分にCADの本体が在ることに気が付いた。

「中はミリオン・エッジと、何かに特化した硬化魔法…ですか？」

「サイズを小さくするとそれが限界だった。その紙の上でサイオンを通してみると良い」

鞆に入っている紙の上で、サイオンを流した瞬間、紙の刃がペーパーナイフの上に張りついて行く。

見る見るうちに太刀と呼ぶに相応しい程の長さになったのである。「護身用の小太刀ならぬ呼太刀というところかな？ さて、お客様を放置してしまいました、申し訳ありません」

「いえいえ。お手並みを見て、返って申し訳ないくらいです」

俺と七草嬢は顔を見合わせて苦笑し合った。

互いに実用例を見せ、確認して納得する為の儀式なのだ。

それこそ話を引き合いに出した七宝にこそ謝るべきであろう。

「そうだ。これからは同じ学校に通う学生同士ですし、もつと砕けた良い方で呼び合いませんか？ …えーと、私の事は真由美でもお姉さ

んでも構わないけど」

「…妹次第と申し上げましたがね。まあ、お手柔らかにお願いしますよ、会長」

どこかで見たノリに、そういえば上流階級にも流行りと廃りがあるのを思い出した。

四葉・真夜、藤林・響子、そして七草・真由美。

俺の回りにはこのタイプが集まるのか、あるいはこのタイプが主流に成り易いのだろうか？

(それはそれとして、本家の意向窺いとは別に、師匠の所にも顔を出さないとな…)

一高に入学するにしろ、仮想敵として別の学校に入学するにしろ、それらは必要なことだ。

本家が何も言わないならばそのまま入学するつもりであるし、場合によっては何らかのメリットを提示して提案するべきだろう。

そして…この辺りを根城にする現代の忍者である師匠に、問うておきたい事が出来たからである。

ブランシユ・無頭竜同盟編 学業のススメ

●志望

とある夜のこと、俺は体術の師匠である九重・八雲にアポを取り、車中で考えをまとめながら向かって居た。

第一高校に行くことは決めて居たし、七草会長との会談で決断もした。

後は本家からの横槍が無い次第だが、あつた場合に説得する為の材料にする為だ。

(深雪が四葉の当主候補筆頭であり、俺はそのガーディアンである以上は一高から四校までに絞られる)

本家の指示そのものは通信や伝令で良いとは言え、家の行事もある以上は近隣の方が良い。

長距離移動手段を使用する頻度から特定される訳には行かないし、だからといって隠れて移動するのもおかしな話だからだ。

(本家のある長野から同心円状に在る四つの学校のうち、真つ先に外れるのは技術の四校)

技術系の四校は俺の修練にしなければならないし、ライバルに成つてもらう方が良い。

そうすれば丁度良い相手に成るし、場合によっては従姉弟たちが入学し、その成果を内外から手に入れる事も出来るだろう。

(次に外すのは京都の二校。古都に住まう古式魔法師の検証は魅力だが、おいそれとは教えてくれまい。それに『九島』の縄張りだからな)
十師族のひとつである九島は長老的な立場に在り、うちの当主さまが弟子入りした時期もあつて仲が良い。

四葉の強大化を懸念して離れそうになった時もあるが、『紅世の徒』が起こす事件で四葉や七草の戦力が削がれたこともあり…仲が良いままなのだ。

(九島と言えば、あそこの当主候補は体が悪いと聞いたな。完全思考

型を研究して持ち込むのも悪くないかもしれん。…やはり二校は無いか)

CADの操作の方式は、思考は補助にメインは指先で操る接触型が主流で、完全思考型は誤作動が多いので自分なら扱いたくは無いです。

だが、逆説的に言えば改良の余地が沢山あるという意味では良い開発対象だろう。

九島の当主候補のように体が悪い者には完全思考型の方が操作が楽だと聞いたこともあるし、その辺りを手土産に出来るならば、ワザワザ同じ学校に成って仲を深めに行く必要も無いだろう。

(やはり本命の一高か、対抗で金沢の三校という選択肢だな)

一高は首都圏に在ることも踏まえて生徒の層が分厚く、ここ何年か九校戦と呼ばれる魔法を使ったスポーツ大会で二度も優勝して居る。

無難に通うにしても、選手や技術者入りして名前を上げるにしてもやり易いと言えるだろう。

一方で三校の方は武門の気風があり、戦闘面を重視した傾向にあることから、九校戦でもライバル関係にあった。

競技の固定化の問題で連敗しているが、それも僅差が重なるので点数方式の影響とも言える。何らかの手を入れることができればスパイラルから脱出できるだろう。

(北陸の『一条』は佐渡侵攻の影響で郷土意識が強いと聞く。となるとプリンスはあちらだろう。カーディナル・ジョージがどう出るかも気に成るな)

佐渡への侵攻に立ち向かった一条の当主候補である一条・将輝は、返り血でクリムゾン・プリンスと呼ばれるほどの戦術級魔法師だ。

加重系統プラス・コードを発見した吉祥寺・真紅郎もまた北陸の出身のはずだ。

彼らが次の世代の三校を担うのであれば、七草会長たちが卒業した後なら勝利は可能だろう。

(…七草会長には悪いが、三校も悪くは無いな。深雪も居るし新人戦だけなら勝利を奪うのは難しくない。全年の優勝はその次の年からでも遅くはあるまい)

心情的には協力を約束した七草会長の手前、一高側に在る。

だが俺の冷めた思考回路は、三校に入る場合のメリットを計算して居た。

俺や深雪の力だけで逆転できるほどに甘くは無いだろうが、プリンストンとジョージが居るなら話は別だ。

勝利を演出して得られる名声や、過程で得られる技術を考えれば、利点は決して低いモノではない。

(やはり本命馬と対抗馬の関係だな。意図して三校を下げる提案をするほどじゃない。…あとは一高で事件が起きた場合に介入するか次第だ)

一高で事件が起きる可能性が高い。

俺はその臭いを嗅ぎつけている。七草会長が言った、司兄弟の言う霊子放射光過敏症の改善とやらだ。

治せないはずの病を乗り越えた人物…の元に集う人望で、何をしようとしているかが氣に成る。

(司兄弟は意図的に噂を流布し、一高で何かをしようとしている可能性が高い)

剣術大会で優勝した以上は、トリックがあつたとしても改善という噂は広まるだろう。

一科生を打ち破つた二科生という名声もまた、何かを起こすのには打ってつけた。

集めた人望を利用して出来ることには限りがあるが…。

もし意図して事件を起こそうとするなら、何らかの技術なり作為な嘘でもって利用はするだろう。

これに介入して収めれば、直接でも間接でもいい、何かを得ることは可能だろうか？

三校に行くメリットという事実を打ち消せるだけの、何らかのメリットを俺は探す。

(つい…とは言うまい。心情的には一高なのだと認めよう。会長個人はともかく、現時点で評価されない系統の実力を認めさせてみたいと思う)

その意味に置いて、司兄弟が切り口にしている名声は、俺自身の問題には利用できるものだった。

野心的に利用しに行くか、放置して騒ぎを利用するに留めるかは、連中の目指すモノ次第だろう。

そう思っていた俺の認識は甘かったのだと、過ぐに思い知らされることに成る。

何しろ連中は騒動どころか、積極的な犯罪を犯そうとしていたのだから。

●忍者

修行者が集う忍者の屋敷、九重寺。

ここには俺の体術を鍛えてくれた師匠、八雲和尚が居るはずなのだが…。

寺にはそぐわない香りが、周囲に満ちて居た。

「これは…どういうことだ…」

「達也くんかい？ いやあ、やられてしまったよ」

灯りが無いのは何時もの事だが、寺に取つての住居である庫裏に向かうと、そこには九重・八雲がぐったりとしていた。

呼吸は荒く、今にも死にそうな顔で俯いている。

「まいったまいった。久しぶりの友人の来訪だと思っていたら油断した。……と秘蔵の般若湯だったんだけどねえ」

「坊主が酒なんか隠しておくからです。大丈夫ですか？ 無理なら誰か呼びますが」

酒気がそこらじゅうに充満しているくらいである。

相当な量を呑んだのだろう。

「よせよせ。むくつけき男に介抱されて何が嬉しいもんかね」

俺が介抱する人間を呼ぼうとすると、師匠はパタパタと手を振った。

「君の妹さんくらいの美女とか、差し入れの方がありがたいよ。それになんだ、彼女がその辺に転がったら若い者には目の毒だしね」

「でしたらお袋が置いて行った地酒でも今度持ってきてきますよ」

俺は生活の闖入者が残した置き土産を押し付けることにして、『眼』

を凝らしてみる。

その瞬間、異様な景色が拡がることに気が付いた。

「誰も居ないようですが、至る所に…」

「それは隠行法の一つき。何処かに隠れるんじやなくて、全てに妖しい気配を散布しておく。欠点はあるが見破られ難いのが特徴」

充滿する酒気全てに、サイオンと残り香のようなモノを感じた。

嗅覚による探知を妨害するモノのようだが、エイドスの在り処すらも妨害していたのだ。

「自分の情報をコピーペーストして分身に紛れるわけですか。居るところが判ってしまうが、何処かは判らない…」

「こうすると簡単な隠蔽を併用するだけで姿を消せるし痕跡が残らないからね。彼女の様に常在戦場で敵地に潜り込んで休む人間には、まさに眠りながらも維持できるシロモノさ」

俺は自分の特殊な眼による探査を過信して居た。

師匠達のように情報戦が主体の者に取っては、優れた探索法などあって当然、それを誤魔化す為の技術を磨き合っていたのだろう。

一本取られた形であるが、俺はむしろ克己心を刺激された。

同レベル以上の相手でなければ、自分を磨くことなど出来まい。

先ほどまで一条と組むのも悪くないと思っていたが…、何のことは無い、九校戦で戦うことこそを愉しみにしていた。

「しかし、君が家の事に触れるのも珍しいね」

「偶にはそういうこともあります。家の用事でお土産を抱えて御機嫌窺いに出歩くこともありますしね」

さりげない話題で、師匠は俺の素情に探りを入れてきた。

四葉の情報隠蔽は強力で、俺のことを調べきれなかったと言って居たのを思い出す。

それに対して俺は、トボけた振りでサインを送った。

場合によっては情報を開示して良い、ただし、相手とレベルを考慮すること。

そういう指示は出ているが、ここで喋る気は無い。

だが、臭わせることで、俺が何者かを判断するピースだけを与える

ということだ。

何処の家に所属するのか追求しないし、自ら喋ることも肯定もしない。

(当然のことだ。俺と師匠は何人かを介して出会い、懇意の付き合いがある程度。同じレベルの付き合いがあったり、スポンサーが居るなら黙っておくことはできないだろう)

それは俺にも言える。

四葉家には隠れた大物スポンサーがおり、かなりの影響を受けて居ることは確かだ。

懇意にしている家はある程度協力体制も築いて居るはずだが、スポンサーの意向次第ではそれらとも距離を置く必要があるくらいの間柄である。

「じゃあ何処の酒か愉しみにしていよう。ところで：今日の用事はなんなのかな？　まさか稽古でもあるまい」

「それなら相応の時間に汗を流しに来ますよ」

俺は苦笑してみせてから、話を一端打ち切る。

今夜は四葉だろうと匂わせたに留まるだけで、これ以上の詮索は無用だ。

「聞きたいことがあったのですが：御来客なら出直しましょうか？」

「構まわないよ。聞いて居ても関心が無ければそれまでの人だし、興味があれば立ち塞がるモノ全てをなぎ倒して現れるからね」

おおよそ女性を示す言葉ではないが、氷の冷たさと炎の熱さを兼ね備えた人物だと思われた。

熱し易いが冷め易い、とことん自分の都合を優先する人物なのだろう。

「魔法科学学校の競技で、去年の剣術大会で優勝した、一高の司・甲について尋ねたいと思いましたが」

「ふむ…。忍びとして、近所に越してきた人物のことは軽く調べることになっているんだけど…まあ知ってるよ？」

師匠は剃りあげた頭をポリポリとかきながら、言うべきことを整理して居る様だった。

口を開いた時に出てきたのは、実に詳細で、何時の間に調べたのかと首を傾げるほどだ。

「司・甲、旧制は賀茂・甲。親の連れ子で司・一とは当然、義理の兄弟になる」

まずは当たり障りのない内容で、ここまでは驚くに値しない。

「君が聞きたい方面だと、司・甲がエガリテに所属し、司・一の方が上部組織であるブランシエのリーダーということかな」

「エガリテにブランシエですか…」

これは驚愕に値する情報であった。

ブランシエは一種のテロリストで、エガリテは若者向けを取り込む為に若干マイルドになった下部組織である。

魔法師と一般人の収入格差を是正するという詠い文句だが、魔法師に課せられた義務と努力を無視し、暴れるだけ暴れて居ると言う状況だ。

表向きの看板に合わせて言論で活動して居る様に見えて、裏ではそんなレベルでは無く、当局は完全にテロリストとしてみなしている。

魔法師が居ることが原因とするその趣旨は、裏で何処かの国が唆していると思われた。

「それとブランシエは最近に成って他の裏稼業の連中ともめて居てね。御同業と争ったり取り込んだりを繰り返している」

「感謝しますよ師匠。これで一高に行った時に戸惑うことが無くなります」

俺はこの時点で一高に行くことを決めた。

司兄弟：ブランシエが何を意図して居るのが、大まかに読めたからだ。

一高を中心として根を張り、方々に網を伸ばすには絶好の立ち位置なのだから。

これから起きる犯罪を未然に、あるいは起きてから穏当に納めることが出来れば大きなプラスになる。

協力的で騒ぎを起こさない人物と目されるだろうし、そこまでに過程で：可能ならば連中の成果を横取り出来るかもしれない。

その論法ならば、本家が他の学校に行けと言って来た場合に、説得する材料くらいには成るだろう。

「御礼というには失礼ですが、社に送られている中元やらお歳暮なりも持つてきますね。注文があれば言ってください」

「それはありがたいねえ。慎ましい物だけで暮らすのも良いけれど、肴が多い人生も良しだ」

もちろん土産のことだけを指すのではなく、必要な情報や機材があれば回すと言う意味を含んで居る。

師匠はそのことを判った上で、俺が帰宅するのを見送ってくれた。

● side | M's

「達也くんは一高か。これでこっちの騒ぎはなんとかなるかな」

達也立ち去ると、八雲は無造作に投げられた本に向かって話しかけた。

書物というには大きなソレは、野卑な声で『返事』をして来る。

『キヒヒ。あれが“摩醯首羅”か。面白くなって来やがったぜ。オレ達はどうするよ、我がぶつ壊しの匠、マー…、あいた!』

「頭に響くから黙ってなさいよ。たく!」

巨大な本の向こう側、金髪の美女が体を起こした。

酔っぱらった仕草でクダを巻き、酒瓶抱えて一人酒。本をブン殴って黙らせる。

「ここは可愛い後輩に任せて、あたしは北か西に行くとするわ」

『可愛い? 誰の事を言ってるのかしらねえが、可愛いねえ…こいつあトンたパワーワードだ』

Mと呼ばれた女は暴力的で実に酔っ払いだが、ちつとも酔いが回って居ない顔で立ちあがる。

そして本を留めたバンドを担ぐと、まだ中味の残っている酒瓶を抱えて立ち去って行く。

あまりに気風の良い風来坊振りに、八雲が止める言葉すら思い付かなかった。

もつともここは無法者の集まる宿である、留まるも立ち去るも自由なのであるが。

…そして月日は流れ、第一高校の入学試験日。

トールス・アンド・シルバーのうち、シルバーだと言われた男の後方で、Mが名字の頭文字である女がその仕草を眺めて居た。

「わあ…凄い…」

「ほのか。あの人凄いの？」

その娘は、ほのかというようだ。

友人らしき少女が寄って来て尋ねると、驚いた様に、抗議するよう
にちよつとだけ声を上げたのだ。

「凄い、凄いよ雫！ 必要最低限の力を、最短の時間で合わせたんだよ？ 私にはとても無理！」

「70〜90の範囲が必要で、75〜80が理想だとすると、そこに合わせたの？ 私も：一度じゃ無理かな」

ほのかという少女には、何かが詳細に判るのだろう。

もう片方の雫と呼ばれた少女は、無表情ながら少しだけ饒舌になる。

悔しいのか、それとも事実なのか、数度あれば可能だと言う言葉を添えて感心を示した。

「最低限で、最短か…」

その近く。

Mが頭文字の男は、隣で囁かれた言葉を聞いて僅かに眉を上げた。プロフィールには魔法に関しては大した才能が無いと書いてあったが、技術者としては十分な才能があるのかもしれない。

「そう言う傾向の才能もあるんだな」

男はそれだけ呟いて、関心を順番待ちして居る測定に戻したのである。

これが後に司波・達也に関わるかもしれないし、関わらないかもしれない男女の抱いた感想であった。

入学式という儀式

●意図した偶然

渋る妹をエスコートして、俺は朝早くから第一高校に登校した。今日は入学式なのではあるが、こんな時間からやってくる必要があるのは、極一部の生徒だけだ。

「本来ならばお兄さまは…」

「そこまです。数値や制度上の問題もあるし、『今』は仕方が無い」

俺の扱いが二科生では低過ぎると、納得いかない深雪であるが：コレは機械で測定した結果である。

最初から決まっている目標値を満たさない以上は、俺が二科生なのは当然とも言えた。

「いずれお前ならこんな風潮を変えて行けるさ。俺はその時を心待ちにしている」

「そんな！ だとしても全てお兄様の才能が認められてのことです。

深雪は、深雪は…」

という感じで深雪はひたすら持ち上げようとする。

俺の事を思ってくれるのは嬉しいが、キリが無いので予定を促す事にした。

「さ、深雪。そろそろリハーサルの時間だろう？ せつかくの晴れ舞

台を俺に見せてくれないか」

「お兄さまがそうおっしゃるなら…」

入学式のスケジュールを含めて、学校の地図から校則までデータは事前に網羅しておいた。

深雪が渋る事も含めて、ここまでは問題なく進行していると言えるだろう。

俺は暇を潰すフリをして、さりげなく適当なベンチを探した格好を装った。

その折りに聞こえて来る梅蔑の声と、珍しい者を見たと言う声の両方が入り混じって聞こえて来る。

「ウィードがこんな時間から？ はりきっちゃって」

「所詮はスペアなのにな」

「あれはトーラス・アンド・シルバーじゃないか？ 社員や契約してる奴なら事前に来るのは当然だろ」

プロファイルの一部を公表した事もあって、中には俺の事を覚えて居る者もいるようだ。

『紅世の徒』対策で公表に踏み切った訳だが、早くもその成果が表れて居ると言える。

知って居る者は数少ないが、割とそういう者ほど口数が多いのは、ありがたいことにユーザーかもしれない。

だが、目的はそんな事ではない。

俺は予定して居たベンチが空いているのに安堵し、書籍を取り出して広げて読み始める。

何度も読み込んだ本の、何度も比較した例であるが、これが実に飽きない。

かつて様々な定理に挑んだ学者達も同じ気持ちだったのだろうか…と言えば言い過ぎだろうかと自分で苦笑した。

そんな俺に対し、ある者は通り過ぎ、ある者は珍しそうに今は珍しくなったアナログ媒体を眺めて通り過ぎた。

ただ、一人の例外を除いては。

「もう直ぐ開場時間ですけど…。珍しいですね、紙の本ですか？」

「ええ、はい…」

読書を始めて暫く、掛けられた声に俺は顔を上げた。

そこには思った通りの人物が不思議そうな顔で覗きこんで居る。

「失礼しました。私は登校の生徒会長で七草・真由美と申します。お邪魔しちゃいましたね」

「いえ、時間潰しでしたから問題ありません。自分は司波・達也と申します」

予定して居た七草会長との邂逅を終える。

さりげなく話題づくりをする為に、わざわざアナログ書籍を用意したのだが、つい読み込み過ぎて居た。

つい、没入して気が付くのが遅れてしまったが、その様子がおかし

かったのだろうか、会長は少しだけ笑って居る。

「登校で禁止している仮想端末ならともかく、通常の端末であれば特に気にしなかったのですが……。珍しいのでつい、声をかけてしまいました。ごめんなさいね」

「仮想端末は読書に向きませんし、量を読まない単純な比較検討ならばこちらの方がずっと早いですから」

論文を頭に入れるならこんな古めかしい方法は取らないが、二つの内どちらが好ましいのか？

どちらを選んだ場合に、他方の比重はどうなるのか……。

という簡単な研究のルート構成を比較するならば、今でもずっと見易いと言える。

媒体の技術が進んで置き去りにした手法の一つなのかもしれない。

「しかし、仮想端末を禁止して居るのですか。道理で見かけない筈です。確かにアレは未成年に限っては良い影響を与えないですから」

「そういうこと……ですね。どこかで見た記憶が、と思いましたが、トラス・アンド・シルバーさん？ 当校によるこそ」

俺が会長の話題に合わせると、会長はにっこり笑った後で戸惑って見せる。

途中で口調を丁寧な物と愛嬌がある物を入り混ぜてきた。

準備のためを通り過ぎる在学生などは、偶然であると信じたようだ。

俺達は既に知り合いなので、そんな素振りを見せない芸達者と言えるだろう。

もしかしたら、俺が名乗らなくても、こんな感じでしれつと近着いて来たかも知れない。

「司波で構いませんよ。それに技術者数名の中の末席を汚しているに過ぎません」

「ではこちらも七草で構いません。でもですね、貴方が大したことが無いなら、殆どの新入生は失格ですよ？ 何しろ魔法工学などでは登校始まって以来の成績だと評判ですから」

俺の言葉に会長はくすくすと笑い始めた。

今度は完全に笑い出している。

この様子だと、本当に俺の成績を知っているようだ。

演技の為にしても周到過ぎるその手腕に、俺はある種の狸ぶりを予感した。

「七教科の平均点が九十六で。特に難しいテストでは平均点が七十台なのに満点、小論文も文句なし。私だって無理よ?」

「これでも専門家ですし、所詮は実技を抜いたモノですから自慢にはなりませんよ。それでは」

通行人の手前ばかりして喋っているが、明らかに詳細な点数まで知っているようだ。

どこから入手したものやら…と思いつつ、ベンチから立ちあがって会場に向かうことにした。

話を軽く聞いて居た数人が、あからさまに青い顔をして点数の話をしているのが小耳に聞こえて来る。

二科生と一科生の壁を取り払う為のオフアールと聞いてはいたが、こんな所から利用されるとは思ってもみなかった。

この分では、在校生の何人かまで通達されているかもしれない。迷惑だと思ふ反面：残り半分では会長に隔意を持ってないでいた。

なにしろ、利用できる才能があると認められたということなのだから。

●意図せぬ偶然

俺が開場時間に合わせて移動して居ると、珍しい組み合わせの男女が見えた。

女性用ビジネススーツを着こんだ先生らしき女性と、逃げようともかく新入生だ。

見た所、学生の方は俺と同じ二科生のようではあるが、柔らかい印象と同時に隙のない身のこなしが窺える。

「ミキヒコちゃん大丈夫? ここから先は先生と生徒だからねっ」

「大丈夫だって一美ねえさん。ボクだって子供じゃないんだし……っというか、忘れたのはねえさんじゃないか」

どうやら二人は姉弟か同じ一門らしく、女性の方は教師で少々迂闊

らしい？

そう思ったのだが、不思議と落ち着いた笑顔でこちらに気が付いて会釈する程度の余裕がある。

もしかしたら、弟の緊張を解す為にワザと忘れて来たのかもしれない（あるいは必要な物を心配性の弟が？）。

「失礼」

「こちらこそ」

そうこうする間にミキヒコと呼ばれた男とも目が合い、お互いに視線を外すように会釈を重ねた。

見て欲しく無いモノが人にはあるものだし、見て見ぬふりをする情けもある（というか、俺自身見られたくない家族も見る）。

そんなやりとりがあつたものの、時間管理の甲斐もあつて、まだ人がまばらな内に入ることができた。

会長が目立つようにしてくれたお陰もあり、目立つ席や囲まれるような席は避けたいと思う。

そんな候補の中で、さりげなく壇上の妹を確認できる位置は限られていた。

良く聞いている振りをして眠ることもできるが、まずは席を…。

と思つた時、奇妙な先客がそこに居た。

「なんでこいつはグースか寝てるんだ…。というか、この様子だと開場より前に入ったんじゃないのか？」

大きな席いっぱいに眠りこけた二科生が居た。

ガタイが大きいが見合つた筋肉をつけて居るようで、ひよろつとしたようにもマッチョにも見えない。

熊が立ち上がると意外にスマートなのにと似て居た。

あれで、熊は機敏であるし、隠密に長けているので侮れない…ようにするにそんなイメージを湧き立たせる。

他の席を探そうかと思つたが、ここがベストなのは変わりない。

（こいつの近くに寄りた奴が居るとは思えんから丁度良い。それに、イザとなればこいつが俺の代わりに目立ってくれるだろう）

そんなことを理由にしていたが、俺自身がこいつに関心があるのか

もしれなかった。

なにせ開場を設営した在学生に気付かれることなく入り込み、中の様子を窺える丁度良い位置に隠れて居るのだ。

どんな奴だろうか、あるいはどんな傾向を持っているのだろうかとか、気に成らなかつたという方が嘘だろう。

大柄な体と何かに特化した魔法式、それに加えて隠行能力と加われれば、歩兵としては理想的と言える。

一科生の平均的に高い能力が理想なのは言うまでも無いが、二科生にはこう言ったツブシの効く使い勝手の良いタイプが多く現場では割りと要望が高いのだそうだ（一科生出身者を頻繁に前線に出せないからとも言いが）。

それなのに二科生と言うだけで評価が低くなるのは、やはり、画一的な教育自体には問題が多いのだろう。

（つと。余計な考えに気を取られていたが…。一科生は前方、二科生は後方に集まってるな）

少しばかり自意識過剰で、研究本位過ぎたかもしれない。

目立つとか目立たないとか関係なく、一科生は前方にのみ、二科生は後方にと自然と別れて居る。

差別はされてる方が意識を強く持つとか言うが、そのことを忘れていた。

時間まであと二十分ほどあるだろうか？

出来過ぎなくらいの妹が、こんな状況でジタバタするはずもあるまい。

心配する事も無く、臨で寝入ってる男を真似る訳でもないが、俺も休むかと楽な態勢になってから眼を閉じようかと思つた時。

ふと、快活な声が掛けられたのである。

「ねえ、隣良い？」

「構わないが…」

声を掛けてきたのは、声に見合つたスリムでスポーツの似合いそうな女だ。

だが疑問というか、何故ここに？

他に席が空いて居るだろうに、ワザワザ寝た子を起こして移動させねばならない席を選んだのだろうか？

「いやね。あたし達、さつき出会ったんだけどさ意気投合しちやつて…。四人連れなのよね」

「ああ、なるほど。近くがまるっと空いてるのはここだけだな。ちよっと待ってくれ」

見れば確かにもう三人の女生徒が居る。

そして方々に席は余っているが、まとめて空いて居るのはこの周囲だけだ。

前の席に二人、俺の隣に二人と座れば雑談しつつ時間を潰せるだろう。

面倒ではあるが、俺がこの要請を断らなかつたのは、良いキカツケだったからだ。

自然と眠ってる男と顔見知りになりつつ、こんなことを躊躇なく人に頼める女とも顔を繋いで置けるのは面白い縁だろう。

「済まない、起きてから寄ってくれるか？」

「ん？ ああ…、悪い。もう時間か？ 五分前には眼を覚ますつもりだったんだがな」

随分と図太い奴だ。

それに直ぐに覚醒した様で、五分前に起きると言つた事もおそらくは断言だろう。

ますます現場向きだなと思わなくも無かつた。

「西城・レオンハルト、レオって呼んでくれよ」

「俺は司波・達也。司波でも達也でも…」

「あたしは千葉・エリカね！ で、こっちが…で、前の席に居る眼鏡っこが柴田・美月。んで、その隣が…」

「よ、よろしくお願いします。柴田、美月です…」

男がレオと名乗ると、俺の返事が終わる前に女も自己紹介を始めた。

割って入つたにも関わらず、不思議と気にならないのは、オープンなその気質からだろうか？

それぞれに名乗る中、印象に残ったのは前の席に居る真面目に頭を下げて来た眼鏡の子だ。

俺はその眼鏡に軽く注意を割き、とある病の傾向を思い出した。(度が入っておらず、ファッション性もない眼鏡か…。霊子放射光過敏症の可能性が高いな)

重度の問題が無い限り、簡単な手術で視力の回復が可能なこのご時世だ。

ファッションであるか、霊子放射光過敏症を緩和する為の、ちよつとしたアイテムくらいしか眼鏡の需要は残っていない。

司兄弟に関わりにならないければ良いが…とは思いつつ、踏み込むのも少し気が引けた。

逆に尋ねてみたいのが、先ほどの千葉・エリカという女だ。

百家の中でも、剣の魔法師と呼ばれる千葉家というのがあり、彼女のイメージはそれに合致する。

だが、その家にエリカと言う名前は無かったはずだ。

(とはいえ、うちを考えると名前が無いから他人とは到底思えない。関連を考慮くらいはしておこう)

ここで口にするほどの事ではない。

警察や警備関連に強い影響力を持つ千葉家は、間接的にお得意先と言える。

事を構える気は無いし、俺や深雪と一緒に、家に良い思いをしていない場合もあるだろう。

それに、『当て物』と言うのは、複数の証拠だけ掴んで必要な時にだけ口にするから、推測に真実味が生じる。

ホイホイと、どうだろうああだろう？ と尋ねてはただのノリが軽い人でしかない。

もつともそういう人格の持ち主の方が、友人を作るのが上手かったりするので、善し悪しだ…とエリカの方を眺めた。

なにせ先ほど出会って直ぐに友人だと言うのだから、彼女には友人が多い違いな(皮肉ではなく)。

●三度目は必然

入学式が始まり、新入生総代である妹が登場して、会場は息を飲む声や溜息に包まれた。

予想されたことだが太居そんな人気で、明日から周囲が騒がしくなりそうだ。

その後は総合的にとか、魔法以外でとか、苦勞が窺える表現の挨拶やらが続く。

俺の事を考えてくれる妹や、二科生と一科生の垣根を覗こうとする会長を考えれば、自然とそうなるだろうのだろう。

そして一通りの行事が終わり、俺達のクラス決定を兼ねたIDカードが交付されていった。

「あたしと美月だけE組。司波くんたちは？」

「俺もレオもE組だな。そっちは離ればなれになって残念そうだな」

社交性というか人懐っこいエリカは、なんとさっきの式中に周囲の者とも仲良くなっていらしい。

とはいえ全員が同じクラスなわけではなく、俺達はE組が半分程度で、他の子は別クラスだったようだ。

ただの偶然なのかもしれないが…。

面白い組み合わせなど思えなくもない。

後は出来るだけ面白い高校生活を…と当たり前前の生徒のように、願うべきだろうか？

「この後はどうする？ ホームルームに行ってみる？」

「いや、俺は妹と約束して居てな」

「おっ、達也は妹が居るのか。それじゃあ仕方ねえよな」

この日のセレモニーはここまでだが、妹と合流して行くべき場所がある。

…途中で他の者に呼ばれるかもしれないが、嘘はついて居ない。

「あの…。もしかして、新入生総代を務められた司波・深雪さんですか？」

「へー、双子なの？」

「いや、俺と深雪のどっちかが一カ月ずれても別学年というレベルで離れて居るだけだ」

そう珍しい名字でもないだろうに、美月が尋ねて来た。

だが、推測というには、ニュアンスが少し確証を帯びて居るような気がする。

「知らない人には誤解されるし、知っている人からは良く比較されて苦労するんだけど、良く判ったね」

「そうよね、あたしなんか全然気が付かなかったわよ」

「二人とも面差しが似て居ますから」

俺は思いきって尋ねてみた。

「へー、面差しねえ。言われてみれば似てるような気がしないでも」

「お前、実はお調子者とか言われて無いか？」

「あの…ですね。そのー、二人ともオーラを含めた傾向が良く似てるんですよ。それで、つい…」

エリカとレオが軽口を言い合うと喧嘩だと思ったのか、つい、美月が本音を口にした。

「オーラって気脈？ 師弟の剣筋とか似るって言うけど、そんなもんかと思えば納得できるわね」

「流石にオーラまで見られているとは思わなかった。良い眼力というべきかな」

「がっ、眼力だなんて…」

「こちらも確証が得られたので、冗談を言い合ってる二人には感謝しておく。」

やはり靈子放射光過敏症かと思ったが、そのことを直接は口にせず、美月が思いたい方に取れるニュアンスをしておいた。

もし俺の事を見抜けるレベルの知識があるならば、師匠に司兄弟のことを確認したように調査を頼む必要があるかもしれない。

場合によっては忠告して釘を刺す必要があるかもしれないが、この場は『眼』について特に指摘する気はなかった。

途中までは同じコースなので、みんなで約束した場所まで移動することにした。

（みんな…か。気が付けば下の名前と呼んだりしているな。気易い連中だからか、それとも俺が浮かれて居るのか）

可能性としては、どちらもだろう。

だからこそ、向こうからやって来る深雪が笑顔とも怒りともつかぬ顔をしている。

おそらくは俺が気易く話しかけられるメンツを見付けたのが嬉しいのと、同時に自分を置いてと言う嫉妬心だろう。

なんとというか妹はこの頃、俺が親しくする人間全てより、距離感が近くないと納得出来ないようなのだ。

俺に取って一番親しい人間とは、深雪以外はありえないというのに…。

「お兄さま、さっそくご友人を作られたようですね。ご紹介していただければ幸いなのですが」

「ん。ああ、そうだな。クラスメイトになる西城・レオンハルト、柴田・美月、それと…千葉のエリカ」

「うん、その千葉で良いわよ。司波くんも中々鋭いわね」

深雪が笑顔の一部に見えない青筋を立てて紹介を求めて来たので、俺は順を追って説明した。

キーワードが途中で幾つか拾えたので、ある程度の確信と共にエリカを紹介すると、素直に頷いて来る。

しかし、俺も…ということとは、自分は感が鋭いつもりなのか？

「私は司波・深雪と申します、お兄さまともどもよろしくお願いしますね。深雪とお呼びください」

「司波くんと紛らわしいし、せつかくだから深雪と呼ばせてもらおうわね。代わりにあたしのこともエリカでいいから…」

「わ、私のことも美月って呼んでくださいね」

「俺もレオでいいぞ」

実際にはもう少し長いのだが、こんな感じのやり取りが過ぎた頃に後ろから声を掛けてくる様子が見えた。

本当は直ぐにでも声を掛けようとしていたのだろうが、一応は、こちらの手前待っていてくれたようだ。

「また会ったわね、司波くん。深雪さんと達也くんって、私も呼ばせてもらって構わないかしら？」

「構いません。兄もその方が喜ぶと思います」

「深雪…」

七草会長の言葉に、深雪は氷の笑顔で応じた。

俺が最低源の説明して背後事情を理解して居るからだ、もしかしたら七宝経由であることないこと聞いて居たのかもしれない。

だが会長の方も狸振りは凄く、一切変わらぬ笑顔で切り返していた。

「ここではなんですし、生徒会室までお願い出来ないかしら？」

「私は兄と待ち合わせて居るのですが…。兄と一緒にしたら一向に構いません」

「司波さん。申し訳ないが、部外者を連れて行くと言うのは…」

笑顔で応酬する会長と深雪の間に、副会長が割って入った。

勇気ある行動だと思うが、この場合は無謀と言えるだろう。

…何故ならば、ここまでのやり取りは半分くらい出来レースだからだ。

せつかくの公平性を保とうとする精神も、女性陣というダンプカーに跳ねられる行為でしかない。

「はんぞーくんの言う事ももつともなのだけれど、摩利に連れて来てって頼まれているのよ」

会長は頬に手を当てて、上目遣いで副会長を見上げた。

「トールス・アンド・シルバーさんがうちの生徒として来てて、さつき出会ったって言ったたら、是非について。勿論、達也くん次第だけ」

もともと会長の方に勢いがあるし、彼女ほどの美人にこんな仕草をされたら、普通は心が動いて仕方無いのだろう。

俺にはポーカーフェイスの仕草が変わったくらいにしか思えないが、気の毒に。

副会長は、この手の女性とあまり知りあつて居ないらしい。

「風紀の渡辺委員長が？ 何のよう…。いえ。そういうことでしたら仕方ありません。司波…：次第なのでしたら」

「どの道、自分は校長室と生徒会室に顔を出す様に言われております。順番が前後するかもしれませんが、構いません」

副会長が俺に断らせようとする苦しい手法を取って来るが、出来レースである以上は、最初から彼に反撃の余地を残して居ない。

申し訳ないとは思いつつも、さっさと切り返す事にした。

「校長が？ お前に？」

「はい。おそろくは、FLTがらみで余計な物を持ち込むな、公私混同を弁え妙な実験をするなどと言う注意かと。至極もつともな事だと思えます」

お前呼ばわりは流石に失礼だと思ったが、俺にとってはどうでも良いので流す事にした。

実際には、推測では無く、こちらから申し出たことだ。

それに関連して、校長達から疑問があれば答えると添えてアポを取ったら、早い段階で了承が降りて居た。

規則を順守する真面目な人間も組織には必要だが、今回は本当に気の毒にという他あるまい。

副会長好みの秩序に従う文言を入れて喋った為、大人しく引きさがつたようだ。

あるいは、渡辺委員長か、風紀に関連して、よろしくないことでもあり、押し付ける気なのかもしれない。

いずれにせよ、俺の予定は滞りなく進んで居た。

「それにしてもお兄さま。いつのまにこんなに美しい方とお知り合いに？ 話の筋的に、渡辺委員長にも眼をつけられているようで」

「深雪。お前が何を考えて居るかしらんが、それはお二人に失礼だろう。それと…」

冷たい笑顔が、俺の方に回って来た。

これは御機嫌を取らねばならないなと思いつつ、近くに深雪好みの店でもあれば…と思わざるを得ない。

「俺の好みはそうだな、もう少し落ち着いた。どちらかと言えば冷静な人の方だな。だから、やましいことは無い」

「そうでしたか、申し訳ありません」

俺が適当に言い訳を考えて話を反らすと、深雪はつーんと顔を背けるものの、少しだけ冷静さを取り戻した。

そういう傾向の人が好みだと言ったから、合わせようとしてくれるのだろう。

多少複雑だが、この際は…と思っていたが、不思議なことに会長が混ぜっ返してきた。

「あら、ふられちゃったわね。…でも、達也くんってそういう子が好みなんだ…ふくん♪」

「司波、人の好みは人それぞれだが…。頑張れよ」
「…？」

会長は楽しいモノを見付けたという笑顔を浮かべ、副会長は何故か気の毒そうな顔をこちらに向けるのであった。

この答えは、生徒会室で氷解するのだが、深雪を宥めるのに面倒になったとだけ、今は言っておこう。

我が身の所在

●校長室での接見

先生方の指示次第ということもあり、俺は先に校長室に向かった。その間に生徒会側からの要望を深雪に伝え、問題が無ければスムーズに行くはずだ。

「失礼します」

「入りましたえ」

ノックを規定回数した上で、招待に従って入室する。

そこに居るのは本来の予定である校長と教頭、そして…。

立会いを要望されたりリストの中から『適当に選んだ』二人の合計四人だ。

「いやあミスター・シルバーが我が校に入学してもらえると幸先がいい」

「誰であれ、特別扱いはせんからな」

「扱いに関しては当然の事であると心得ております」

出会い頭に先制して来たこの二人は、就職担当の教師と生徒指導に当たる教師だ。

後から必要になるだろうと言葉の上では選んだ理由にしておいたが、実のところ、この二人が軍務経験ないし縁者にその経験者が居るからである。

俺を取り巻く環境の一つに軍属であるということが存在する。

聞いたところによると軍務経験者は同じ経験者を同類扱いするというが、そのことはあまり計算して居ない。

重要なのは、後で『軍機の手前』という言葉を出した時に納得させ易いからだ。

俺が課せられて居る秘密は、公表したFLTの他にも、四葉から枝分かれして多方面にわたる。

説明する訳にはいかないが、後で判明した時に何故言わなかったという問題も面倒だ。

ならば『何かあるがルール上は喋れない』と臭わせておくのが、誠

意に見えるかと判断してここに至る。

秘密保持の意味では余計でしかないこの二人の同席を許可したのは、その為の布石と言う訳だ。

「まずは皆様方にお詫び申し上げなければなりません、自分などの為に恐縮です。お手間を取らせていただきます」

「それに関してはこちらからも望むことだ、気にする事は無い。まあ…掛けたまえ」

軽い礼の姿勢を取った後、直立不動で説明の準備に入る。

だが百山校長は眉ひとつ動かさずに、一見、俺に対して柔らかく出たような態度を見せた。

「では失礼いたします」

「ここも学内だ、あまり気にせんでよかろう」

しかし、これは俺の軍人的な態度を嫌ったのか、あるいはこちらのペースで技術論的な説明を嫌ったのかもしれない。

巧妙に隠してはいるが、本家の上級執事たちが見せる話題の切り替えに良くにっていた。

俺が着席した所で、八百坂教頭が事前説明を読み上げる。

「確か…公私混同を避けFLT社から学内へ、余計な機材や実験を持ち込んだりしないという誓約の申し出でしたね。殊勝な心がけだと思います」

「ちよつと待ってください。せつかくミスター・シルバーが居るのに、その手腕を縛るのは惜しいかと」

俺が発言するよりも早く就職担当の教師が異議を上げた。

彼からすれば自分が押さなければならぬ就職希望の生徒に箔を付けるチャンスである、気持ちは判らなくは無い。

だが、見知らぬ学生にまで無制限に頼られても困るし、社への斡旋を求められても困る。

綱紀に従うつもりがあると見せる為にも、ここは一度、断っておくとしよう。

「失礼ながら、自分は理論畑で当校には技工師としてあるべきモノを学びに参っております。即実用に耐え得る品を扱えるほどではあり

ません」

「しかしだねえ…」

「司波が良いと言っているんだからそれで良からう。それに、だ。十文字や七草にだって我儘は許しておらんし、連中も文句など言っておらんぞ」

食い下がろうとする就職担当に対し、俺に近い筋で動いたのは生徒指導の教師だ。

この男からすれば、最初にガツンと言うだけで気が済んだと言うか、あるいは、俺の態度を殊勝と見たのかもしれない。

フオローと言うほどではないが、俺が積極的には動かないこと自体には納得しているようだった。

一方で、二人の教師に喋るだけ喋らせ、校長と教頭はダンマリを決め込んで居た。

おそらくは俺の対応を眺めるために、二人を出汁に使って居るのだろう。

その意味では、利用するために同席許可を出した俺と良く似て居た。

「ではせめて、九校戦やコンペはどうかね？ あれが学内ではないし、そもそも理論や技術を試すものだ」

「それに関しては自分の管理する権限にありません。それこそ十文字会頭や七草会長が判断されることではないでしょうか」

「うん、その通りだ。一生徒が自ら手を上げるべきでは無いな」

俺は就職担当に謝りながら一応は断った風で、完全には否定をしなかった。

元より学内と規定して申し出たのは、その二つの行事で関わる可能性が高かったからだ。

実のところ、七草会長は俺をフルに使うつもりだろう。

ならばその二つに俺が呼ばれないことはあるまいが、一年目からメイン担当では特別扱いとみなされるので、主軸に据えるはずもない。

そういう意味では、最初から出来レースで参加することは決まっていると言えるだろう。

結論としては、嘘ではないが真実でもないと言う回答になる。

一応の結論が出た所で、教頭が二つめの確認事項を切り出してきた。

「質問・疑義があれば答えられる範囲で、とあります。二・三なくもないですが、そちらに思い当たる余地はありますか？」

「お答えできるモノ、お答えできないモノ、中には研究の様に進捗すら窺わせることが出来ないモノが存在します」

「まあ社秘を口にされても困るがね、法に反する事は困るぞ」

俺は建前論を口にしたように見せて、今日の本題を切り出した。

隠しているつもりだったが校長はなんらかの臭いを嗅ぎつけたのだろう、冗談めかして釘を刺して来る。

だが俺の意図は、あくまでこの建前論を口にする為なのだ。

口にすら出来ない事があると説明した上で、後で実例を出せば、最初から誠意を見せたことにはなるだろう。

「その上で、説明し易い範囲ですが名前と住所でしょうか。シルバーは通名であり住居には住んでおりません」

「シルバーは商売用の通名であり、公表して居る住所はあくまで盗っ人やテロリスト対策ということだな。…で、我が校の方は？」

俺の言葉に合わせて頷きながら、校長は初めて態度を顕わにした。

あるいはソレすらも演技なのかもしれないが、ここは乗ることにしよう。

「申告通りの場所に住んでおります。ですが先の懸念もありますし、窃盗の可能性が出た場合には変更する可能性がありますのでご理解ください」

「ここまでに關しては問題ありません。同様の生徒が当校や他校にもおりますから」

司会の役目なのだろうか、教頭は次の話題を促してきた。

俺は素直に頷いて、FLTのトップの写真を指差しながら、まずは差し障りの無い内容を口にする。

「父、司波・龍郎は椎原・辰郎という通名でFLTの社長をしておりますが、学校に提出した文章には記載しておりません」

「おお、椎原社長が。これはますます持って。いや、北方会長の例もありますし問題ないかと…」

「…君。周知の事実とは言え、此処にはおらん生徒の話をするのはどうかと思うがね」

俺の話題に飛び付いた就職担当を、校長が一睨みで黙らせる。

次に、トップのうち別の人物の欄に指を滑らせた。

そこには白衣の人物の絵が載っている。

「同様に記載して居ない事項やフェイクが混ざってしまうこともあり。例えば椎原・辰郎には四葉・段多郎なる義兄が本部長…とありますがそんな人間はおりません」

「FLTのフォアリーフともども、例の四葉のアンタツチャブルを利用した防衛策の一環ですね。その例をとる会社が多いとは聞きます」
「その件は良い。重要なのは君には法や校則に反した隠し事があるかどうかだ」

俺は全ての説明責任を果たし心より安堵した。

四葉・段多郎なる人物は確かに存在しないが、四葉家との間がらまで否定したつもりは無い。

これで深雪が当主に指名され、急遽、四葉・深雪と名乗っても語って良い範囲で説明したことに成る。

フェイクだと思ってさっさと切り上げたのは、校長の方なのだから。

そして、最後に説明しなくておきたいが、おそらくは必要になることを付け加えた。

「最後に、ありがたいことに軍にも納入しております。それに関して」
「…?」

「軍にも魔法師が居る以上は当然だろうか?」

俺の言いたいことを最初は意味が判らないようだった。

それも当然だろう、商品であるCADが魔法師のツールである以上は軍でも使用するのだから。

「納入しておりますのは開発用の部隊であり、自分のBS魔法も合わせて一応は軍属扱いとなっております」

「なに？」

「軍属だと」

これも嘘ではないが真実でもない。

とある非常事態とBS魔法の問題により、軍属扱いで四葉から出向して居る。

その後にはCADも納める様になったのではあるが、この場合は逆の意味に取らせるように説明した。戦術開発部隊であって技術開発ではないことも含めてだ。

「軍のことをべらべらしゃべる訳にもいかんとは思うが、一応の説明はくれるな？」

「はい。最初に述べさせてもらいましたが、説明できること、出来ないこと主張する事、存在を説明できないことがあるのを改めてご理解ください」

ここで生徒指導の態度が少し軟化した。

就職担当の方も顔色を変えたが、先ほど校長に睨まれた経緯もあり今度は大人しい。

「自分は納入時や必要な場合に呼ばれる非常勤ですので、従軍の必要はありません。ただし開発部隊とは言え、軍機に寄り全く所属を明らかに出来ません」

「まあ当然だな。子供を引き連れる部隊など有るわけが無いが、技術開発で何処だと口にする訳にもいくまい」

やはり経験者は軍務ゆえの機密に理解が早いのは助かる。

また、トーラス・アンド・シルバーは警察や警備、軍隊の一部に人気があるモデルなので、納入するのが不自然ではないというのも大きいだろう。

改めて最初に開いたシルバーの欄に戻しながら説明を続ける。

「また、当該部隊も『司波・達也という人物』は所属しないと答えるかと思えます」

「ああ、こちらにも別の通名があるのか」

「まったく、念の入っておることだな」

少しばかり態度の軟化した生徒指導に対し、校長の方は御機嫌斜め

だ。

だが：海千山千の校長が、この程度で表情を変えるはずもあるまい。

不快だという姿を見せて、軍からの関与から距離を置いて見せたのだろう。

「その：差しつかえなければ、BS魔法について説明をお願い出来ますか？」

「軍機というなら仕方ないがBS魔法師だというのに二科生レベルならば、十分通用するだろう」

「まさか戦術魔法とは言わんだろうな？ 厄介事は困る」
教頭たちの質問と懸念は当然だ。

BS魔法は個人の資質に影響するが、評価対象では無い魔法であり、大きく傾倒するがゆえに使い手は能力が低い場合が多い。

それだけに強力な魔法であり、学校はともかく、警察や軍隊などあれば大きな評価ポイントではある。

そして、戦術魔法級ならば爆弾を抱えて居るのと同じことなのだから…。

「この場のみの話であれば。ただ：先ほどの『説明できる』モノを有しておりますし、危険なモノではありません」

「うーん。ならば我々は遠慮しておこう。校長と教頭のみで良いんじゃないか？ 迂闊に聞くとゲンコツの一つも落とせんようになる」

「そう：ですね。我々には荷が重い」

俺が持つBS魔法は二つあるが、ここでは開陳して良い方を開示する。

コレは隠しておきたくても、非常時には絶対に使う能力であり、秘密を共有しておいた方が良いからだ。加えて言うならば秘密は一つとのミスリード。

とはいえ喋られては困るので、生徒指導と就職担当の二人に目を向けると、察したらしく自分から申し出てくれた。

二人が退出した後で、校長は不機嫌そうな顔を隠しもせず尋ねて来た。

「で、どんな魔法なのかね？ もったいぶる必要があるのだろうか」
「校長先生は自在師の方が使われる、『再構成』を御存じですか？ 自分はそれに近い能力を限定こそ違うものの…使用が可能です」

僅かに校長が態度を変える。

今度は替えるではなく、確かに変えた。

どうやら自在師の能力を知っているらしい。

そして、その有用性もだ。

「なるほどな。確かに危険な能力では無さそうだ」

「当校にも一人所属しておりますが、あの魔法は見事なものですね。壊れた機材や校舎が完全に元に戻っていました」

「教師の方ですか？ 失礼しました。自分が使うBS魔法は『再生』と申しまして、単体という欠点と時間制限・サイオン消費の大きな口スはありますが修理が可能です」

紅世に関わるので調べたことが在るのだが、自在師が使う『封絶』という結界。

これは予め仕掛けておくと、その領域で壊れた物がサイオンを支払うと再構成されるらしい。

事前に敷く必要があるが、実験などには丁度良い能力と言えるだろう。

自在師自体は紅世の徒が姿を消して以降、探すのが面倒ではあるが雇えないほどではないらしい。

親父たちは実験の都度、俺の持つ『再生』を便利使いしてはいたが、今では自在師を雇う方向に切り換えたようだ。

同じ様に軍の開発部隊でも、戦闘では無く似たような事をやらされているのだらうと、教頭の方は納得したらしい。

校長も同じ様な表情を見せて居たが、こちらを完全に信用させられたとは思わないでおく。

だが俺の話自体は一応の筋が通っているということで、双方の思惑はともかく、形式上は問題無しと言うことに成った。

●生徒会室での波乱

俺は校長室を後にすると生徒会室に向かった。

定例行事から言えば、主席である深雪は、生徒会への入会を要請されているはずだ。

そう思っただアをノックした所、見えたのは思わぬ光景であった。「お兄さま、お食事は精進で構いませんか？」

「お前が選んでくれたのなら何でも良いよ。…ところでこの状況はどう言うことでしょうか」

そこにあつたのは数人の為には無用と思えるような、食事や飲み物を出す配膳サーバー。

そこに食事を取りに行っている生徒会の面々だった。

「達也くんの用事が長くは成りそうに思えなかつたし、基本的な説明だけして昼食を一緒に取ろうと思って」

「では失礼ながら御相伴に預かりたいとは思うのですが：何故、こんな所にサーバーが？」

「業務で遅くなる時も多くなりますし、その都度に移動しては効率が下がると思し送りを受けて居ます」

七草会長の悪戯っぽい説明と違い、端的に説明したのは伶俐な美人だった。

美少女と言っても良いのだが、顔や背の高さを含め構成する一つ一つのパーツや声に至るまでが、きつめの印象だった。

その女性がワザワザ申し送りと伝えた以上は、以前の生徒会からそういう理由で配置されているのだろう。

俺の会釈に軽く会釈を返す彼女の前に、会長の手が掲げられた。

「この子はリンちゃんこと市原・鈴音。会計を担当してもらってるわ。我が校の誇るクールビューティの一角ね」

「私のことをリンちゃんと呼ぶのは会長だけです」

俺が自己紹介を返そうとする前に、会長は次なる人物の元へクルクル回りながら移動した。

七草家の方で、何かあつたのだろうか？

息抜きに遊んでいるのではないかと思うくらいにはハイテンションに見える。

次に示されたのは小柄な少女で、愛くるしい顔を赤くしていた。

「この子はあーちゃんこと中条・あずき。書記を担当してもらっているわ。うふふ、実はトーラス・アンド・シルバーのファンなのよね」
「あーちゃんは止めてください、よりにもよってシルバーさんの前で…。な、中条です、よろしくお願いします！」

からかいたくなる会長の気持ちも判らなくもないが、ファンだと本人の前で紹介するのもどうかと思う。

可哀想に涙目になりながら一生懸命挨拶して来る…。のだが。

思わず先輩なのか尋ね返したくなった。

最後に副会長の後ろに回り込み、目隠ししながら説明を開始する。

「十文字くんは何時も部活連で居ないし風紀の磨利は遅れてるから、はんぞーくんが最後ね。服部形部小丞範蔵こと働く副会長よ」

「ちよつと待つてくださいい会長、下級生の前でそういう呼び方は…というよりも、初めて聞いた言い方じゃないですか」

気の毒なことに上級生とか副会長の威厳とか、もはや何処かに消えて居る。

そこに居たのは異性に心をときめかせる少年であり、悪戯好きの姉分に良い様にされる弟分であった。

おそらくは憧れて居たのだろう、まるで反撃できないまま動けないでいる。

一通り反応を愉しんだ後で、会長は席に着いた。

「以上が生徒会のメンバーで、さっき言った部活連の十文字くんと、風紀の磨利が外部から協力と独自性を確保しながら、行事を運営して居るわ」

「この学校では生徒に権限が大きく与えられており、その二つは生徒会と着かず離れずの権限をもった組織となります」

七草会長の言葉を市原会計が補足する。

学校側からの管理が強い風潮と、生徒の自立性が強い風潮の二つがあるらしい。

今は自立性が尊ばれるということだが、それでも行政・司法・立法の三つが分立するように、部活をまとめる組織と風紀を取り締まる組織は別権限ということだとか。

食事会と言う訳でもないが、会長のノリに付き合わされて和やかなまま食事が始まる。

「硬い話は後に回すとして、司波くんには何か聞きたいことない？ まずはあーちゃんから」

七草会長からの無茶振りに、中条書記は口の中の物を呑みこんでから急いで息を整えた。

「ふえ？ わ、わたしですか!? ええとシルバーさん、シルバーホーンはお持ちですか？」

「当然所持……。いえ、この場合は携行しましたが提出中です。せつかくですから、後で触ってみてください」

くるくると変わる愛くるしい表情は小動物めいている。

質問が持つてきているかとの言葉だろうから、規則に則り預けているだけだと告げたら、輝く様な笑顔で何度も頷いて居た。

「じゃあ次にリンちゃん」

「そうですね……。書籍を読んで居たと会長からお聞きしましたが、何の研究書ですか？」

「重力制御魔法式熱核融合炉の可能性について、です。特に極小型と極大型のモデルケースに関しての項を」

学校で読んで居る以上は機密などの問題は無いと踏んだのだろう。

市原会計は俺が読んで居た本に付いて尋ねてくる。

「あの研究は素晴らしいですね。魔法師の未来について考えさせられる項だったと思います」

「その通りです。自分はループ・キャストを主軸に考慮しますので、どうしても極小型寄りとなってしまうんですが」

俺も愉しく読んで居た無い様なので、つい話が弾んでしまった。

二人で長話をしてしまうと、茫然とした顔で会長たちがこそこそとやり始める。

「…話にちつとも付いて行けないんだけど、あーちゃん判る？」

「な、なんとか。極小型は風車の様な負荷を下げることを重視して管理・維持を安定的に行うもので、極大型は逆に水車の様な大規模大容量…のモノだったかと」

「手前味噌の話に夢中になってしまい申し訳ありません」

俺は自分達の興味の話題に没頭してしまったことを詫びた。

一昔前の原子炉とソーラー発電のようなもので、どちらの方式を取るかで色々変わって来る。

文明そのものを押し上げるなら極大型であるが、俺の目的を叶えるにはむしろ極小型の：おつといかん。

「それにしてもいつも最低限しかしゃべらないリンちゃん、こんなに楽しそうに長話をするなんてねえ…。どう思う深雪さん？」

「そうですね。兄がこんなに楽しそうに喋るのを始めて聞いた様な気がします」

「深雪…」

「喋らない訳ではありません。言葉を連ねる必要性を普段は感じないだけです」

七草会長と深雪は何故か仲良く笑顔で意気投合したようだ。

話題に置いて行かれた女性と言うものは、こんな風に団結するものなのかもしれない。

対処に困る俺と違い、市原会計は涼しいものであった。

「はんぞーくんは？」

「そうですね。校長との話しはどうなったんだ？」

「予想通り、実験や持ちこみに釘を刺されましたが、当然の事ですので誓約を行ってきました」

硬い話は後でということだったが、服部範蔵副会長は気に成っていいことを追求して来た。

予想も何もこちらから申請した訳だが、彼に聞かせて居る事前話から行っても、この回答で問題無いはずである。

そのお陰もあってか副会長は納得し、つまらない反応だったからか会長の方は不満げである。

いずれにせよ食事が終わりにかけて居たことと、遅れて渡辺風紀委員長がやってきたことで話は止まった。

「お、君がシルバーこと司波・達也か？ 私は風紀委員長の渡辺・磨利だ。よろしくな」

「司波です。よろしくお願いします」

ガチャリとドアを開けて姿を現したのは、凜とした佇まいのすらりとした女性だった。

美しいと言うよりは恰好良いという言葉が良く似合い、女性陣から熱烈な支持を受けそうな外見である。

どこかで見た所作に似てはいるが気のせいだろうか。

しかし、流石に会長の友人だけあって、同じ様な紹介をするな…。流れが副会長が最後に成っていたし、もしかして会長と示し合わせで、気不味くなったら中断する為に様子を窺っていたのではないか？ そう思ったが、どうやら俺の穿ち過ぎだったようだ。

「もしかして例の件？」

「ああ。また隠されていた。巡回だけでなく、魔法で監視までしてた場所をやられてる」

良く判らない流れの内容で、俺達は関係ない話のようだ。

この様子なら歓迎会を演出する為に、一芝居打ったわけでは無さそうだが…。

不思議なことに、中条書記がちらちらとこちらを見ながら口を出していた。

「粗悪品とは言え安い物ではないのに、どこから持ち込んでいるんでしょう？ 組み立てて最低限の運用をするだけでも大変ですよ」

「待って下さい、もしかしてCADですか？ なら調整をする為の場所も必要になりますよね」

持ち込まれたナニカ。

最初は想像もつかなかったが、シルバーのファンだという中条書記が、期待した目で俺を見て居る。

ならばCADなのだろうと、半信半疑で口を開いた。

「ん？ ああ、君はCADの専門家だったな。ならば話は早い。専門家としての意見を聞かせてくれるか？」

どうやら俺の予想は正解だったようで、渡辺委員長は快諾してくれただばかりか…。

思わぬ爆弾までオマケに投下してくれる。

「どの道、君を風紀委員に勧誘しようと思つて居たんだ。今なら先生方の枠も含めて、よりどりみどりだぞ」

「良いわね、ソレ！ 生徒会枠で彼を推薦するわ。深雪さんも一緒に活動できるし：リンちゃん、問題無いわよね？」

「はい、先ほどの要請、兄と一緒に是非お受けしたいと思います」

「確かに生徒会への入会は、校則で一科生と限定されていますが、風紀委員には存在しておりません」

恐ろしい勢いで何かが、なし崩し的に決まりかけて居た。

それに反抗したのは服部範蔵副会長だ。

会ったばかりのこの男が、これほど頼れると思つた事は無い。

「ちよつと待つてください！ オブザーバーで十分なはずです！ 有名人だからと二科生を風紀に入れるのには反対します！」

だが、残念なことに彼は女性陣の総スカンを食らつて沈んでしまつた。

その勢いは、さながら列車に飛び込む野生動物の如く。

「失礼ですが副会長。彼を生徒会に入れることはルールとして出来ませんが、任免権は生徒会長や先生方とルールで決まっております」

「それにだ。没収したCADの解析だけでなく、日常的にCADを運用する風紀の備品整備も効率を考えればおそらくこれ以上の人材は居ないぞ？」

「シルバーさんが魔法式を読み取れるのは、公式HPだけでなく、業界でも良く知られた事実なんですよ！」

ルールを説く市原会計に加えて、大人しそうな中条書記まで論戦に加わっている。

それでも孤軍奮闘しようとする副会長に、会長が冷たい笑顔を浮かべて立ち塞がる。

「そ、それでも反対です。知識はあるかもしれませんが、取り締まりには実力が必要で…」

「はんぞーくん？ 私はもう決めたの。達也くんがイヤというなら仕方ないけど、理論まで整っている状態で、貴方が感情で口を挟むことはないわよね？」

既にもう、役者が違うとかそういう問題では無い。

状況が俺を必要としていて、ルールの上でも問題が無いそうさ。

ならばそのレールの上に大人しく引きずられて行くしかないが、せめて野生動物が跳ねられないようにフォローくらいはするでしょう。

仕方無く俺は二人の前に割って入り、妥協案を提出する。

「副会長の言う事も一理あると思います。そこで、副会長に俺の実力を測って頂くのはいかがでしょうか？　ただし、この件に関しては人ごとではないので関わらせていただきます」

「二科生のお前がか？　思いあがっている訳じゃない…よな？」

俺の申し出が意外だったのか、副会長は信じられないような物を見る目をした。

まあ何しろ俺の排斥をしている最中に、とうの俺からフォローが来たのだ。信じられなくとも仕方あるまい。

「俺を買ってくださっている方が居る以上は、クライアントの信頼に応えなければなりません。ですが同時に、性能の方も示す必要があるかと」

「大した物言いだが、俺は手加減せんぞ？」

俺の言い様に呆れたような仕草で副会長は不敵な笑みを浮かべた。

二科生なぞに負ける気は無いと、タカをくくっている様子だ。

とはいえ俺が実力を示して置くことには意味がある。

ここでCADが持ち込まれたら、真っ先に疑われるのは俺であるから、解決に協力する必要がある。

そして、何れ来る九校戦にエンジニアとして招かれるには、風紀でCADの調整しておくのはプラスだろう。

CAD密輸事件

●試合では無く、ゲームに挑む

俺が服部範蔵副会長に勝負を申し出たことに対し、渡辺風紀委員長は面白そうな顔を浮かべた。

七草会長と深雪は流れで押せなくなったのが不満の様だが、ゴリ押しは後に不満が残る可能性もある。

ここは白黒点けると言う訳ではないが、スッキリと終らせた方が良いだろう。

「では、私が審判役で対等な条件による公正な…」

「ちよつと待ってください」

どうした？ と渡辺委員長は宣言を停止し、俺の方に向き直る。

「これは非常時での俺の腕前を見る為の物。『攻勢の利』と『守勢の利』が別々に存在する方が良いと思います」

「ほう？ 例えばどんな条件だ？」

モメごとが好きなのか、それとも今起きている問題のストレス解消なのか。

渡辺委員長は唐突な俺の物言いに不満を見せなかった。

面白がった表情はそのままに、俺の意見を促して来る。

「例えば服部範蔵副会長は、俺の情報を幾つか得た上で好きな開始距離を選びます」

「俺は手加減しないと云ったはずだが？ それと範蔵は付けなくていい。服部形部で提出して居るからな」

「何を考えている司波？ そんなに有利な条件を服部に出して」

服部副会長は怪訝な顔を浮かべつつ俺の勘違いを指摘し、渡辺委員長は愉快げな顔で問いただして来る。

それもそうだろう、もともと勝負は不要だった所に、自分から条件を上げる者は居ない。

「当然ながらこちららは別の条件を貰います。特定の物を守りきるとか、場所に辿りつけば良いとか」

「なるほど。司波が風紀に入ったとして、巡回や護衛中に狙い撃ちに

されたと仮定するのか…」

「良いだろう。渡辺委員長に問題が無ければ俺は構いません」

要するに俺が求めたのは、より想定されるケースに近い『ゲーム』だ。

試合をしたところで、俺の実力を測る事は出来ないだろう。

勝つても負けてもシコリが残る可能性はあり、それこそ服部副会長の器量次第になってしまう。

だが、この方法ならば確実に次に活かせる。

例え裏を掛けて敗北しようとも、その過程を見てもらう事で、風紀と言うよりは…九校戦に向けて俺の印象を強く出来ると言う訳だ。

また、試合をするよりも服部副会長の言う懸念に近く、勝つても負けても印象が変わる可能性が高い。

(…とはいえ俺は相手の考えや気持ちが判るわけじゃない。むしろ怒らせてしまったので無ければ。の話だがな)

もつとも服部副会長も気分を切り替えて、ゲームに挑むように条件を考え始めたようだ。

今の時点ではこの試みは成功と言えるだろう。

「では俺の情報を、正しいかを中条先輩にチェックしてもらったで、渡辺委員長に幾つか選んでもらって転送してもらいます」

「別にチェックせずとも…」

「わ、わたしですか!? そうですね、問題ありません!」

服部副会長が何か言う前に、中条書記が顔をますます輝かせて頷いた。

ブンブンと目を回さないか心配なくらいだが、本人は嬉しそうだ。

俺と服部副会長の双方が条件を出しあった紙を提出すると…。

「…なんというか、もう良いんじゃないかなという気がするんだけど…」

「桐原の例もある。ここまで来たら最後までやる方がスッキリすると思うぞ? 中途半端が一番いかん」

七草委員長と渡辺会長が何かボソボソ言ったん後に、結局、話がまとまったようだ。

「ではCADの受け取って1時間後に場所を転送。到着次第に勝負を開始するものとする」

「それをお願いします」

俺と声がハモった事を面白くなさそうにしながらも、不敵な笑顔を浮かべて服部副会長は生徒会室を後にした。

●一つの可能性

あちらは他に調整する場所が他に在るのか、俺が生徒会室に戻ってくると副会長はいなかった。

代わりに待ち構えて居たのは中条書記で、ケースを開けるとハシヤギっぷりが止まらない。

ケースに入れて居るのは二丁の銃型：特化型CADだ。

「これってどっちも特化型のシルバーホーンの、更にカスタムモデルですよね!？」

「ええ。触れるだけなら構いませんよ」

俺が許可を出すと、中条書記は頬ずりせんばかりに興奮していた。

どうやら俺のファンというよりは、デバイス・オタクらしい。

目を輝かせて触れるだけの範囲ながらチェックし始める。

「あれ、こんなにストレージをいつも持ち歩いて居るんですか?」

「自分の処理能力では汎用型を使いこなせませんからね。目的に応じて変更する事にして居ます」

俺はそういうとストレージの一つを取り出し、軽く確認してから、中条書記が触って無い方に嵌めこんでおいた。

設定が滞りなく機動し、誰も居ない方向に構えるとまさしく銃にか見えない。

そこまで行った段階で、もう邪魔にはなるまいと七草会長が尋ねて来た。

「ねえ。グラム・デモリッションを使えることまで教えてしまった良かったの?」

「構いませんよ。どのみちFLTのHPには記載して居る情報です」

腕を組んで眺めるように口にしていたが、俺の反応を見て顔だけは笑顔のまま耳元近くで囁いて来る。

「そう言う事じゃなくて、せっかく良い雰囲気だったのに」

「誤魔化しても良いことはありませんよ。それよりも、俺のことを副会長に買ってもらった方が早い」

そう、俺にとつて勝負の行方など、どうでも良い。

俺の目的、七草会長のオーダー、そして風紀委員への招請と三つの目的に対して効率的に動いたただけだ。

例えばここで副会長がヘソを曲げて突き離してきたとしても、俺が使えたと認識してもらえば良いのだ。

だからこそグラム・デモリッションや、魔法の起動式を読めるといふ情報をあえて送ってもらったのである。

この時点で、俺がどんな人間なのか、どれだけ役に立つかは、おそらく服部副会長の方が七草会長よりも知っているに違いあるまい。

「それに、正確な情報が常に正しいとは限りません」「え?」

心配するクライアントを宥める必要はあるだろう。

「自分はグラム・デモリッションのバリエーションを用意して居ますし、パラレル・キャストという手段もありますから」

「君は策士だな。最初から欺瞞情報を掴ませるつもりだったのか」

「どういうこと? 二人だけで話を進めないで欲しいのだけど」

俺が顔を話して説明すると、渡辺委員長がくすりと笑いを漏らした。

会長の方は本当に判らないと言うよりは、内緒話を誤魔化す為に判らないフリをしたようだ。

そのことに気が付かないのか、演技に乗っているのか渡辺委員長は大袈裟に説明を行う。

「司波：私も達也と呼ばせてもらおうぞ? 達也は最初から二丁の特化型CADや格闘戦を使う予定で、術式解体は数枚ある手の内の一枚だということだな」

「馬鹿正直にグラム・デモリッションだけを使う必要も無いでしょう」

俺は事前情報で、師匠である九重・八雲に格闘を習っている情報を含めて、幾つかの情報を提示した。

渡辺委員長はその中から、服部副会長と俺の勝負がバランス良くなるように送ったと言っている。

副会長の方もあまり情報を引き出すのは好まなかったようで、事実上、俺の方が相手の行動を制限して居ると言えた。

相手は様々な手段が取れるにも関わらず、俺が使うかも判らないグラム・デモリッションを想定しなければならぬ。

得意な距離で挑むか、それとも奇襲し易い距離で挑むかなども頭が痛い問題のはずである。

「それは判るんだけど…」

「そういえば渡辺委員長。先ほど気に成る話をしていましたね。魔法まで使用したのに、抜けられた…」と

なおも会長が食いさがって来たので、俺は一度引くことにした。

押してダメなら引いてみるとも言おうが、あえて他の話題に持ち込んだのだ。

この勝負とは関係なく、CADの話には首を突っ込むと告げて居るので、問題も無い。

「そうだな。辺り一辺倒の巡回とは別に光学迷彩まで使ってもらったが、誰かが移動した形跡が残るのみだ」

「囿まで使ったのですか？ 聞く限り入念な調査に見えるのですが…」

藁にもすがる思いというには程遠いだろうが、他人に聞かせるのがストレス解消にはなるのだろう。

渡辺委員長は肩をすくめて話し始め、俺はCADの調整をしながら話を聞く。

あからさまな話題転換であったが、七草会長も興味はあったようで、それ以上の何も言っていない。

「勿論こちらをひっかけまわす為に通っただけ、小動物か何かという可能性もあるが…。延々と歩哨を立てた時は一切の行動を起さない」

口だけ、計画だけで手腕が伴って無いという可能性はあるまい。

それなら七草会長を始め、ここに居る誰かが注意を促しているはずだ。

(随分と徹底してるな。…何らかのトリックがあると見るべきか)

となれば思考の穴を付いて、何らかの詐欺臭い手を成立させていると見るべきだ。

幸か不幸か、俺はトリックの種と、CADの持ち込みをやる相手に心当たりがあった。

(司・甲…。魔法の光を見ることが可能ならば光学迷彩に意味は無い。むしろ慢心を引き越すだけだ)

件の人物が所属するエガリテと母体のブランシエは、魔法に寄る差別に對抗して居るが魔法によるテロは否定して居ない。

霊子を見る目をフルに使って、『魔法』が発動して居るかだけを理解出来ればいい。

どんな魔法か判らずとも、その場所を避けることで、重点的に警備して居る場所を回避できるのだから。

(本命を司・甲としよう。あとは対抗で会長たちの狂言…いや、ないな。大事過ぎる)

俺に発言権を持たせるために七草会長が計画したとしても、バレたら大変だ。

となると司に関わる可能性が高いだろうし、後は連中自身が黒幕か、それとも別の犯罪集団が影を利用して居るかの差だ。

ここで捕まえるのは容易いが、それでは事件の本質には近づけない。

何かキーが必要だ…と考えて居た時に、深雪が声を掛けて来た。

「お兄さま、もしかして、からくりが解けたのですか？」

「ああ。それほど難しいトリックじゃない。問題は一人・二人捕まえた所で枝を切られて幹に近く手段がないことか」

「本当か？　これまで風紀が全力で動いても見付けられなかったんだぞ？」

思わず答えると、深雪はしてやったりと言う顔を浮かべ、委員長は仰天して居る。

(どうやら俺に手柄を立てさせたかったらしいが、しよのない子だ…)

そうは思いつつも、せっかく妹がお膳立てしてくれた舞台である。兄としては期待に応えるでしょう。

「一人捕まえれば何とかする手段がなくもない、是非教えてくれ」

「そういうことでしたら…。まずは一案として聞いてください」

委員長の方に考えがあるとと言う話であり、俺は考えを示す事にした。

「風紀が特別な作戦を立てるか自体は、学内でアンテナを張って居れば、気が付くのはそれほど難しくありません」

「そうだな。さっきの例で言えば、光学迷彩を使いこなせる奴は限られる。そこまではいい」

俺の言葉を噛み砕くように委員長は重々しく頷いた。

彼女の手駒として自由自在に動ける精鋭メンバーはそれほど多くあるまい。魔法は長時間保たないのでどうしても交代制に成る。

彼らだけを見張り、特別な日をまずは予測する。

「何が・何処で・何時、それが特別なのか判らない時は何もしなければ良い。その上で、魔法発動を検知するシステムを組むのです」

「ん？　すると何か、連中は私達が魔法を使つて居るかどうかで判断しているの？」

俺は司・甲の話を伏せたまま、ゆっくりと頷いた。

「ここではどんなシステムかは置いておきましょう。魔法を使つて居る事が判ればそこを避ければ良い。判らなければ、先ほど言った様に行動そのものを中止すればいい」

迂闊に話して無実でも困るし、そもそも、大会で優勝し別の過敏症発症者を勧誘して居る可能性もある。

そこでオブラートに包み、何か、魔法を検知するシステムとぼかして説明をした。

だが、そこで明言を避けつつも、あえて口にする文言も存在する。

「犯人、もしくは犯人たちの目論見は学園側を翻弄し、仲間達に行動力を見せつける事でしょう。でなければ頻繁に持ち込む必要などありませんからね」

「そう考えれば納得はいくが…。それではまるで、学園内に対抗勢力

が居ることに成るぞ？」

俺の言葉に委員長は苦々しく口を開いた。

可能性の一つと考えるはいても、思考の隅に追いやっていたのだろう。

自分達が対抗される様な圧制者だとは思いたくないに違いあるまい。

「対抗勢力がいるのではなく、対立構造があると錯覚させたいのでしよう。それを助長する為に、あえて強力な魔法を使う日で挑発行為に出る」

「もしかして、達也くんは二科生と一科生の対立を煽っている人物が居ると言いたいのか？」

「俄かには信じがたいが、そう考えるとしつくりくるな」

俺が水を向けた話の流れに、七草会長が載って来た。

ここで彼女にもらったオーダーに応えるべく、二科生と一科生を分けるのはよろしくないという考えを吹きこんでおく。

もとより会長に近い筋であり、一般生徒全てが対立するのではなく、悪役が居ると信じた委員長は率先して領いていた。

「あり得る話ですね。実際に黒幕が考えておらずとも、いずれ使用する可能性のある策です。対処しておくにはこしたことはないでしょう」

「リンちゃんの言う事も、もつともだわ。後ではんぞーくんにも話を通して、考えておきましょう」

「その服部副会長との勝負もそろそろですね、移動しましょうか」

市原会計と会長は顔を見合わせて、説得の材料として考慮したようだ。

二人のやり取りは、俺と会長のやり取りに近い物がある。

どうやら彼女も、自分にも関わるナニカに関して、何らかの命題を見付けて居るのかもしれない。

ともあれ時間は着々と進み、勝負の会場を目指して移動することになった。

●奇襲の用意あらば、迎撃の用意あり

会場に赴くと、それなりの広さが密閉されていた。

壁は頑丈で周囲から窺えず、色々な意味で思いつきりやれそうだ。

そして暫くして、服部副会長に先駆けてどこかで見た顔が現われた。

「桐原。もしかして、お前も顔を出すとはな」

「こいつが気合い入れて何してるかと思えば、二科生と本気で勝負するって言うじゃありませんか。見逃せるほどに他人事じゃないんですね」

呆れた声の委員長だったが、相手との話で誰か予測が付いた。

二科生との勝負にこだわり、テレビでの望遠ながら見た顔。

確か、司・甲と決勝で敗れた生徒の筈だ。

しかし、ここで違和感が出て来る。

服部副会長は先ほどの会話から、自分に自信があり、率先して来そうないメージがある。

それに規則を重視する面もみえたとし、自分が先に訪れて、連れてきても良いかと聞きそうなものだ。

メールで尋ねたようには見えないし、何らかの作為を感じる。

いや、この桐原という男が、剣術大会で司・甲に破れて居ると言う事実が、俺に何かを警告して居た。

（しかし俺は直観に頼ったことは無いが……。なんだこの違和感は）
どうにも拭えない感覚。

デ・ジャ・ビュ、規視感と言う他ないが……。

念の為に思い返して行くと、さほど情報がないことあって辿りつく事が出来た。

何のことはない、自分が口にした司・甲への対策方法だ。

『司波さんなら彼のような人がお客なら、専用の魔法式やCADを用意できるので不是吗？』

『……？ ええ、まあ。そうですね。特殊な目と体捌きがあることを前提に、慣性制御に特化した体術補助を組むでしょう』

確か会長に最初に合った時に問われ、考え事をしていた時に思わず答えた回答である。

その時に口にはしなかったものの、俺はこう対策を考えたと思う。
『高度な体術にとつての鬼門は圧倒的なパワーかスピードである』
『自己加速を極めたり、高周波以上の超震動で足を止められるとどうしようもない』

これらのことを、俺はようやく思い出していた。

(副会長が『攻勢の利』として、多岐に渡る情報では無く、奇襲をルー
ル違反にしないことを選んだ可能性もあるな)

勿論、俺の気のせいであつたり、そう思わせるミスリードの可能性
が無い訳でもない。

偶然そう考えただけで、俺の勘違いである方がありえるだろう。

(とはいえせっつかく思い付いたんだ。そうであると想定しておこう)

自己加速を掛けたまま、ゆっくり歩いて居る違和感が、俺に気が付
かせた。

その可能性を否定しはしないが、単純に桐原という男から声を掛け
ただけの可能性もあるだろう(提案したのは彼だと、俺は思っている
のだが)。

俺の持つ特殊な目でもう少し深く調べられなくもないが、こんな他
愛のない勝負で使う気にもなれない。

『再生』に絡む能力だけに、機密とは言わないが、あまり気が付かれ
たいとも思えないからだ。

そんな事を考えていると、委員長が中央の少し奥まった場所で宣言
を始めた。

「勝負はどちらかが昏倒するか、重要物を奪うないし届けきつたらで
決着する。真由美、なにか貸してくれ」

「こんなもので良いかしら？ これなら何かあっても困らないしね」

委員長の要請に会長はハンカチを取り出し、俺に手渡した。

その時に深雪が眉をしかめるが、無視しながら軽く腕に巻いて奪う
ことが可能なようにしておく。

「司波…達也は壁の端から、始まり次第にもう片方の端に移動してく
れ。服部が好きな位置に移動し終わったら、挨拶ぬきで勝負を開始と
する」

「異論ありません」

「了解しました」

委員長の説明に頷きながら、俺は所定の位置に移動。副会長は軽く思案してから移動を開始した。

あの副会長が七草会長の私物を焼き払うとも思えないので、昏倒か、接近して奪いに来るか…。

と考えた時に、僅かに遠くで声が出たような気がする。

「…司波。悪く思うな、これは勝負だ！」

副会長は背を向けたまま、一瞬でミドル・レンジに移行。そのままこちらに腕を見せずに、CADを操り始めた。

「あ、あれって最初から加速魔法ですか？ 卑怯なんじゃ…」

「卑怯じゃない。奇襲して良いってルールだからな」

中条書記が悲鳴の様な言葉を上げると桐原という男がニヤリと笑った。

(ほう、そう来たか)

やはり自己加速を予め掛けておいたのだろう。

だが、そこから先が想定外だった。

「はんぞーくん暴走する気なの？ 幾らなんでも多過ぎだわ」

「いいえ。司波くんを迎撃されることを考えれば、むしろ適正範囲です」

管理限界を越えて、処理落ちしかねないほど多数の攻撃魔法。

殺し合いでは無いので威力は不要であることから、数だけが多いが…。

片方のCADを構えてサイオンを解き放つ。

「それでは俺に届きませんかよ？」

俺はループ・キャストを前提とした。グラム・デモリッションのバースト射撃を行った。

相手はサイオンの壁で魔法を練ってないことから、こちらも威力を落として数で攻め立てる。

ほぼ範囲魔法のような形で、一発のグラムが数個の魔法を、三点バーストによる重砲撃でまとめて粉碎して行く。

俺は歩きながら重心を方向け、片足は踵にもう片方は爪先に力を入れて強制的にバランスを取る。

その間にも多岐に展開した魔法陣を、片端から撃ち落として行くのだが…。

ここで副会長は、二度目の一斉砲撃。

「そんな事は…百も承知だ！」

同時に態勢を低く構え直した。

思いつきが良いと言っても良いだろう。

なんと副会長はそのままダッシュを掛け、先ほどよりも速く疾走して来る。

こちらがグラムで落とさなければ、自らも怪我をしかねないライン取り。

しかも急加速に急加速を繰り返し、慣性制御でなんとかバランスを取る無謀な突進を掛けて来る。

「これは…流石に決まったか？」

「いえ。兄ならば問題はありません」

委員長の言葉が疑問付きならば、深雪の言葉は確信に満ちて居た。

まったく、手を抜かせてくれないのか。

そう思いながら、俺はフットと力を抜いた。

踵と爪先で危く取っておいたバランスが崩れ、歩いている方向がねじ曲がって行く。

コロンと転がる様に、もともと傾向いて居た重心通りに俺は崩れ落ちる。

その過程で爪先に力を入れ直し、無理やり起きあがることで強制的に加速を掛けた。

「もらっ…なに!?!」

「服部っ…。くっ…」

桐原という男は副委員長に声を掛けようとした寸前で思い留まる。セコンドとして登録して居ない以上は、ルール違反だからだ。

直進する相手に対し俺は斜めに移動しながら、死角から死角に渡ってもう片方のCADを操った。

設定して居る魔法は無系統、サイオンの波を連続で飛ばすだけの魔法。

これならば俺の能力でも十分に対応できる。

そして…。

「勝負あり！ 流石は九重先生の弟子だ。…しかしあれは体術なのか？ それとも魔法か？」

「斜め移動であれば体術の総合で、いわゆる縮地の一種になります」
委員長が勝敗の決定をコールすると、俺は頷きながら体のバランスを整える。

縮地と呼ばれる技は、流派によって幾つもの説があり、複合体術として組上がる。

俺は相手の動きを予測して居た事もあり、斜めに動くことで相手の後方に移動した。

「その後は魔法よね？ でも、どうやったらそんな事が出来るの？」

「サイオンの波を連続でぶつけて、酔ってもらったんですよ。調整が面倒ですが、魔法としてはそれほど難しい訳でもありません」

「そういえばループ・キャストをトールラス・アンド・シルバーが実用できたのは、変数の調整が大きいですよね！」

会長の疑問に対しては、ハンカチを返しながら説明する。

中条書記が相の手を入れてくれたこともあり、スムーズに説明を終えることが出来た。

ループ・キャストは全く同じ魔法を繰り返すわけだが、同じ場所に発射しても意味が無いとされてきた。

だが、変数を管理して、僅かに位置・時間を変更する事により、意味あるものとして実用にこぎつけたのである。

テロの予感

●連名

「まさか服部がこうも見事にやられるとはな」

「実を言うと奇襲の意図が読めてましたからね」

「攻撃ポイントの予測というやつだな」

苦笑いを浮かべる桐原…先輩に説明を行うと、渡辺委員長が感心して見せた。

何時・何処にやって来るのが判って居れば、いかなる高速機動であろうと当てる事が出来る。

とはいえ、自身の見解では無く師匠である九重・八雲の受け売りなのでこそばゆい。

「もしコースかタイミングを誤魔化されていたら負けて居たかも知れません」

「あの状態で速度コントロールなんぞ出来る訳が。…いや、単純な幻覚で良いのか」

俺は肩をすくめて肯定して見せる。

服部副会長の選択肢は、高速機動による防御の無効。…だが、その答えは入口に過ぎない。

必殺技は必殺ゆえに防がれるし、ただの大技であつてもクリーンヒットすれば十分なのだ。

もう一工夫か二工夫練つてあれば違った結果だろうと見解が一致した。

「あるいは、今回なら高速機動ではなく、俺の処理不能レベルで防壁なり領域防御で籠城されたら手が出ません」

「…そんな恥ずかしいことが出来るか。だいたい、今回のルールだと逃げられて終わる可能性もある」

「もう良いのか、服部?」

軽く頭を振った後で、副会長が立ち上がって来る。

彼は完勝を狙った様なので、進路上に立ち塞がって防壁に籠るのは好みではないのだろう。

しかし…どうしても勝たなければならないなら話は違ってくる。

(今回はお互いに取ってそうではなかったただけだ。…そう言う状況に備えておく必要があるかもな)

機密であるBS魔法以外、処理能力が低い俺にとって籠城策は鬼門だ。

今回の様な勝利条件が在る場合の方が少ないだろうし、可能であれば対応策を用意しておくのも良いかもしれない。

…全力を隠したまま勝利が要求される状況が、どの程度あるかだが。

俺の能力や所属は開示が許可されたモノ以外にも、色々と秘密が多い。

準備しておいて、使わないという展開が理想だと思っておくことにしよう。

「…色々と思う事があるが、お前に十分な対人能力があることは認めよう。起動式だけでなく盤面を読む能力もな」

「じゃあ、達也くんが風紀入りするのは確定で良いわね。良かったわ」
不承不承ながら俺のことを認める服部副会長と、笑顔で受け入れる七草会長。

置いてかれて居るようでなんだが釈然としないモノを感じる。

「俺の意思は…まあいいでしょう。さっそく、例のCADを見せていただけますか？」

「気にするな、真由美はいつもこうだ。…ちよつと待ってろ、うちのやつが専門家を連れて来て居るはずだ」

渡辺委員長が口にしたのは奇妙な表現だが、ここのメンバーには周知の事実なのだろう。

苦笑とも付かない笑顔が溢れた。

「勘違いしないでね、千代田さんは良い子なのよ？ とある条件で暴走するだけで」

「千代田と言うと『地雷原』の、ですか？ なるほど風紀には心強く、暴走すると危険そうだ」

ナンバーズと呼ばれる百ある名家の中でも、実際に数字を関する家

は強力な家が多い。

数字を持たない非主流派でも、渡辺委員長のように生まれ持った才能が強力な者は居ないでもない。

だが七草会長や七宝のような十師族や師補十八家、そして千代田家や千葉家のように主流派は別格と言えるだろう。

その家に所属する子女が弱い訳は無い。

事実、エリカも魔法力はともかく、身のこなしは流れる様だった。

（エリカの身のこなし？ …そうか、渡辺委員長の動きはエリカに似て居るな）

師が同じ者は、字や身のこなしが似る場合が多いと言う。

もしかしたら、渡辺委員長は千葉道場に通っているのかもしれない。

そんな事を考えている間に、委員長はメールのやり取りを終えたようだ。

彼女の案内で風紀へ行くのかと思ったが、向こうがこちらへ来るらしい。

その間に副会長へ、先ほど健闘した二科生と一科生の対立を煽る存在の話をしつつ、待って居ることにした。

「失礼します。磨利さんに呼ばれてやってきましたー」

「失礼します。例のCADですが、一通り持ってきました」

やって来たのは中性的な二人組だった。

一人目はボーイッシュというか、気風の良い快活な女子。

二人目は優しい表情で女性的な顔立ちだが、れっきした男性のラインを持つ男子。

もしかしたら、パールツク的な物なのだろうか？

「二人にはメールで紹介したが、こちらがシルバーこと司波・達也。知っていると思うが新入生総代である妹の司波・深雪だ」

「風紀の千代田・花音よ。よろしくね！」

「部外者ですが呼ばれてきました、五十里・啓です。よろしくお願いしますね司波くん」

俺と深雪が挨拶する前に、千代田先輩から口火を切った。

釣られるようにして五十里先輩も挨拶を掛けて来るが、案外、この順番で良かったのだろう。

「司波・達也です。よろしくお願ひします」

「妹の深雪です。よろしくお願ひしますね。…不躰ですが、お二人は恋人なのですか？ 随分と仲が良さそうですね」

普通に挨拶を返した俺に対し、深雪は随分と突っ込んだ。

「あら、見る目が在るわね。でも、正確には許嫁よ」

「そうなんですか？ でも、羨ましいですね。こんな素敵なお兄様だなんて」

だが意外にも、そのことが良い結果に繋がった。

あるいは、深雪は鋭い観察眼で見抜いて、あえて口にしたのかもしれない。

千代田先輩は社交辞令に満更ではなく、第一印象を良い物として捉えたようだ。

「もしや刻印魔法の五十家の方ですか。これは心強い」

「こちらこそミスター・シルバーがスタッフに加わってくれて心強いよ」

プログラムではなく、物に直接書き込む刻印魔法は廃れ気味だ。

だが、彼が所属する五十家は現代でも権威を残す数少ない家である。

実践的かつ、更なる追求を続けており、旧態依然としていなければ刻印魔法は今でも有用だと示していると言えた。

（現時点で有用なのは、効果を抑えてでも持続し易くしたものや、魔法を掛り易くする魔法陣に近い仕掛けだろうか）

七宝に渡した専用CADでも言えることだが、1つのスキルや概念で実行可能なことは少ない。

やはり多方面の技術を結集してこそ、新しい局面が見えて来るだろう。

そして、俺は七草会長に目を向けた。

（この問題のスタッフに五十里先輩が呼ばれているのは、最初からか。俺の要望自体は渡りに船だったみたいだな）

俺は一高に招かれる時に、要望として刻印魔法の権威などへの紹介をお願いした。

最初から引きあわせるつもりだったのなら、甘い条件だったということに成る。

とはいえ、その時にこんなことが判るはずも無く、低い条件だったのなら必要以上にストレスは与えて居ないだろう（こちらの恩が減る訳ではないので、気にはしないでおく）。

いずれにせよ、デバイス好きが高じて技術面も高い中条書記を合わせて、スタッフは揃ったことになる。

おそらくは、この三人は九校戦でも顔を揃えるのではないだろうか？

●用途の差

持ち込まれたCADは特化型と汎用型、それぞれ完全な物とバラシてある物の合計四つ。

「これは警察に持ち込む為の物とは別だから、好きに触ってくれ」

「今までの調査結果を先に言おうと、初期型に近い：今では能力が低いレベルのCADだよ」

委員長の許可が出たので手に取って確認してみた。

確かにFLTで扱う物どころか、大手の量産品にすら届かないスペックではある。

その間に他のメンバーは、生徒会室のディスプレイに上げられたデータを眺めながら、それぞれの感想を言って居た。

「サイオンの消費が殆ど抑えられてないし、必要とされる精密性が半端ないな。こんなもん使ったら成功するものもしねーぞ」

「しかも制御しきらないと発生するノイズ酷いな。隠蔽や幻覚を使ったら、逆に探知されかねない」

何故か居残ってる桐原先輩の意見をフォローしようと、服部先輩が言葉を添える。

タイプが違うだけに意外だが、案外、このくらい違う方が仲が良いまま居れるのかもしれない。

「前時代の技術から、CADに移行したばかりの頃はこんなもんだっ

「ただよ」

啓先輩があげた前時代とは、補助は呪文と魔法陣だけ、刻印される杖があれば理想的という時代。

そこから脱却し、プログラムとサーキットによって補助を行うCAD。

その時代の品に近いと言うが、まさしくそんな代物といえる。

そのレベルから脱却するには、人体実験という他ない人工ニューロンの開発を待たないとならない。

今では発達したニューロンが、プログラムを最適化して動かしてくれるのだから、まさしく隔世の差という他ないだろう。

「必要とされる能力が今と違うんです。この当時の基準でしたら、お兄さまは一流中の一流と目された筈です」

「じゃあ、司波兄は使いこなせるっていうのか?」

「達也で構いませんよ。そうですね、師匠の真似ごとで良ければやってみましょう」

「性懲りもなく深雪が俺を持ちあげてくれるので、兄としてはやってみせるしかない。」

選んだ術式は、『壁隠れ』や『潜り影』に使われる布状隠蔽。

俺は直接行使する事は無理なので、段階式の光学迷彩を入れて連続試行する。

第一段階で周囲の景色自体を変え、第二段階でそれに融け込むという行程だ。

走り回っては無理だが、足音を忍ばせながらゆっくりとであれば俺でも処理できるレベルの幻覚。

そこにノイズの走りは殆どなく、俺とは方式が異なるものの特異な目を持つ会長以外は、こちらを追尾出来て居ない。

「可能な限りノイズを出さないで居られる計算式ピッタリ、流石だね」
「司波さんが言っていました、必要とされる能力が変わった不運です。彼の欠点では無いと思っておいた方が良かった」と

「ありえない…という訳にはいかないんだろうな。目の前で起きている以上は」

五十里先輩が計測値を出すと、市原会計が冷然と指摘し、副会長は唸る様に両者の意見に頷いた。

奇しくも深雪がやってくれたお膳立てがマッチした形だが、こそばゆいと言う他は無い。

「それもあるが、さつきグラム・デモリツションをあれだけ放ったばかりだよな？ 真由美はあんまり使わないから比較し難いが」

「真似ごとの私と比較しないでよ。でも、この方式なら磨利にも光学迷彩使えるんじゃない？」

「残念ですが、先ほども言った通り、今回の相手は魔法自体を検知するシステムを利用して居るようなので、役に立つとしてもその次ですね」

委員長と会長が他愛ない話を始めたので、釘を刺しておく。

しかし、自分が苦手とする傾向の術を、新しい方式でなら容易く実行できると言うこともあり、逆に食いついて来た。

「今回だけを考えて居るんじゃないさ。…時に、具体的な迷彩指示はどうやるんだ？ それほど面倒な処置はしていないのだろう？」

「ああ…。自身の全周に番号を振って、その番号に簡単な指示を出しているだけですよ」

話を聞く限り、どうやら委員長が苦手なのは、手間が掛ることではなく意識的なモノらしい。

「じゃあ、だ。これを応用して幻覚では無く攻勢防壁や対人用の衝撃系は組めるか？」

「リアクティブ・アーマーにでもする気ですか？ 可能ですが、上手くやらないと自爆ですので注意してください」

確かにマルチ・キャストがこなせないとは思えないし、竹を割った様な性格では、幻覚のコントローラーは苦手な分野だろう。

即座に攻撃用の術式として転用を考える辺り、そちら方面のセンスは高いようだ。

その様子を眺めて居た一同は、溜息をついて会話に加わって来る。

「ふえー。司波くんがミスター・シルバーというのは、やっぱり本当ですなー。こんな簡単に思い付きません」

「僕でも無理だよ。刻印関係のいいなら、似たような応用も出来なくはないけど」

「啓なら可能だつて！ それにこのくらいの魔法なら、私も…地雷原の応用なら可能よ！」

そんな感じで話題が反れて行つた。

話を戻すべきかもしれないが、俺はとある考えを突きつめて居た。思うのだが、根本的な先輩達は勘違いをしている。

確かに初期型に近いが…、これは十分な性能を追っているCADだろう。

(違う…これは『魔法が使える』ことが重要としているだけだ)

精密性のフオローがない？

否…、精密に使う必要が無い魔法なら問題ない。

サイオンが大量に浪費され魔法が多様出来ない？

否…、一つ使えるか使えないかが重要な局面で、多用を考慮する必要がない。

今のCADに撃ち負けるなら、自分だけが一方的に攻撃すればいい。

壁を飛び越え碎けば通行できるかが重要な局面で、精密性や多用を問題にする訳が無い。

要するに、何かと比べたりしないツールと考えるべきだろう。

例えば、自分のような使い捨てられたかもしれない者にとって、このツールが在るかないかでは生存率に大きな差があるはずだ。

「それにしても、こんな無駄の大きなもんで何をやる気なのでしょうか」

「司波くんなら十分に使いこなせると言つても、普通の人には無理だからね」

どうやら先輩の技術者たちは、いや、他の面々も同じ見解のようだ。このツールの危険性を無視して居ると言うよりは、普段、自分が使つて居るCADと比較してしまつて居るのだろう。

コレは、むしろそんな人物がCADを使わない時を狙う、あるいは無防備な一般人を狙う為のツールだというのに。

俺なら使えるツールだからといって、別に弁護する気は無い。そもそも機械に対し、機械の様な人間が同情するのも妙な話だろう。

だからこれは、単なる説明と注意喚起のはずだ。

「いえ、むしろコレは、十分な能力を持つて居ると思いますよ。安価な暴力装置としては優秀な部類に入ると思います」

「え？」

「司波くん？」

何を言っているのか判らない。

技術者肌の二人だけでなく、周囲全体がそんな空気に包まれる。

それほどに、このツールに向けられた彼らの常識は共通事項であった。

「コレは比較する為のモノではなく、単独で役に立つ状況に運用するモノです」

口数が多くなるな、とは思いつつ、俺は一気に説明してしまうことにする。

だが反応は思っても見ないほど、衝撃的だったようだ。

「相手が無警戒。ないし即座に対応できる者が少人数なら全く問題はありません」

空気が凍った。

考えてもみないことを指摘されると、一様にそんな状態に成るらしい。

実際に起きてみれば別だが、平和な学生生活を送っているなら、理論段階の脅威にはこんなものだろう。

仕方無いのでオブラートに包んでソフトな話に切り換える。

「例えばCADの携行を許されている学校行事であっても、想定して居るのは一部区画。もし、そのほかでボヤが起きれば風紀委員も学校も慌てる筈です」

「た、確かに。新入生勧誘時は黙認される決まりだが、大事になれば風紀を守れなかったと言われるだろう」

想定するべきはテロです。

…ハッキリとそう委員長に言いたかった。

だが、流石に感情の動きに鈍い俺でも、ソレを口にしたら引かれるのは判る。

今は彼らの現実に合わせて可能性を口にしておき、『イザ』という時に、危険性が少し高まっただけ…。

そういう風に、誘導して行くしかあるまい。

少なくとも、精神的支柱になるべき人物が居ない以上は、そうするしかあるまい。

「それこそCADでも菓子でも構いません。現体制に不満を持っている者を煽る為に何かの成果を出します。まずは風紀を出し抜いて見せる訳です」

簡単にそんな計画を立てて、もってもらいたいプランを組み立ててみる。

「そして協力者が増え、CADの使用が許可された時に、少々と思わせておいて想定以上の事を起こして見せる…と」

「なるほど。厄介だが…まだ時間はありそうだな」

俺のでっちあげた話題にもっともらしく委員長が頷く。

人は信じたい話を信じると言うが、まさしくそんな感じだろう。

話が気まづくなつたのと、CADの件はこれ以上しようがないので一端解散となる。

深雪と会長が手続きの為に残るので、ここまで残つたのだし、俺も付き合つて残る事にした。

●人材、あるいはチームの必要性

意外なことに、桐原先輩が居残った。

彼を連れて来た副会長は、自前のCADの片付けもあつて既に立ち去つたと言うのにだ。

何故かと軽い疑問を覚えて居ると、向こうの方から話しかけて来る。

「司波…兄の方。さつき、本当はどう言おうとしたんだ？」

「隠したつもりはありませんが…。もう少し問題の程度が重い事です」

どうやら、俺と同じ見解であったのか、あるいは俺がソフトに喋ったことに違和感を覚えたのだろうか。

人数が減った所で（特に中条書記）、ズバリと切り込んで来た。

「親父が軍のとある部署に居るんだが、仲間内と呑んでる最中にな……。他国のニュースを見てボソッと予想することがある。そういう時の雰囲気似て居た」

「往々にして、そういう予想が当たると？　まさしく、そういう類の話題ですね」

なるほど、軍の海兵隊なり特殊部隊に身内が所属して居るのか。

悲観論であったり、そうなって欲しくないという希望もあるだろうが……。

この場合は、似て居ると断定された以上は例え違って居ても同じだと思いうに違いあるまい。

「待って待って！　それじゃ達也くんはこれがテロ用のCADだというの!？」

「兵器としては十分だと申し上げました。世界を闊歩するテロリストなら『使える』と評するでしょうね」

要するに、そういうことなのだ。

そういう事を想定させられるであろう七草家に所属する会長は、フリーズすることなく尋ねて来る。

魔法が速射性でマシンガンに劣るならマシンガンを携行し、精密性でライフルに劣るならライフルを携行すれば良い。

あのCADは限定環境下で、適当に動けば良いと割り切った代物なのだ。

「とはいえ現時点ではそこまでのテロをすることは思えないので、もっと小規模な犯行かと思っただのは確かです」

二科生のことを馬鹿にする一科生を授業中へ。

魔法師は邪悪だと言うデモ隊を校内から……。そんな風に撃つには十分だ。

それで十分なパニックが起こせるし、社会的な問題になるだろう。最初から単発の使い捨ての兵器であるならば、コレで十分。

「もともとは扇動した魔法師自体を使い捨てにする目的のモノでしょう。例えば…各国の分離独立派に色々な勢力が配るモノとか」

「お兄さま…」

深雪がハットとした表情でこちらを見た。

よくよく考えれば、俺がこの事実にも最も早く気が付いたのは、俺自身が四葉に取って使い捨ての兵器に近かったからだろう。

幸いにもそんな事にはならなかったが、そうでない可能性も低くは無かったかもしれない。

「そんなモノを誰が何処から…」

「断言はしかねますが、魔法による差別を訴えつつも、魔法師を駒扱いする様な団体があればありえるでしょうね」

スムーズに受け答えられなければ、茶化されていた所だが、幸いにして俺の中に応えはあった。

「そんな都合の良い組織があるのか？　ここは紛争地帯じゃねーんだぞ」

「ううん……あるわ、一つだけ」

「学生向けの政治団体であるエガリテ。この場合は陰から操るブランシエの方ですね」

師匠が教えてくれたブランシエとエガリテは、ちようどそんな組織だ。

魔法による差別の是正を訴えては居るが、平然と魔法師を使って騒ぎを起こす。

何故かと聞かれても困るが、他国が日本の発展を妨害する為にやってるなら、そんなものかもしれない。

都合の良いことに七草会長が反応してくれたので、それを促す意味でこちらから肯定して行く。

「ブランシエと言ったら、当局でテロ団体で指定されているとこじゃないか」

「表では言論に寄るデモ行為を主体として居ますが、裏では手段を選びませんからね」

そのつもりが無かったとしても、状況の変化もありえるだろう。

確か、師匠はブランシエが他のアンダーグラウンドの組織と、対立を深めて居るとも言った筈だ。

もし、その対立で勝利していたら、縄張りやシノギはどうなるのだろうか？

厄介極りなく、師匠が俺に情報を渡して来た理由が良く判る。

忠告を入れると同時に、これを解決すべきだと教えてくれたのだ。

面倒な事態だが、逆に言えば連中の動きを利用できる。

例えば武器商人を吸収したという危険性はあるが、証拠さえ見付ければ『表向きはクリーンなはず』のブランシエを堂々と逮捕・解散出来る。

言論で差別問題を標榜するブランシエが、実は正真正銘のテロリストだったというなら、他の団体は関わりを嫌って自粛を始めるだろう。

加えて、テロリストが焦点にした以上、二科生と一科生の対立は、放置できないと学校側にも思わせることが出来るかもしれない。

とはいえ対処に失敗すれば、大事では済まない。

嚴重注意どころか、学校の管理は厳しくなり、二科生が原因であれば大幅削減もありえる。

それでなくとも、予想しておきながら目の前で取り逃した俺は、深雪の護衛任務を解かれ一生飼殺しかもしれない。

ゴクリと誰かが息を呑んだ所で、俺は気分を切り替えることにした。

「とはいえ、先ほどの見解が全く嘘と言う訳でもありません」

「見つかった時期を考えても、仕入れたので将来の為に隠しただけ、今思い付いただけの可能性もある。危険なのはこれからです」

「まだ間に合うってことか…」

何が間にあうのかしらないが、桐原先輩には何か心当たりでもあるのだろうか？

話してくれば情報のピースが集まらなくもないが、俺とて自分の情報を喋る訳でもない。

お互いさまと思って、頭の隅に置いておくだけにした。

桐原先輩が立ち去った後で、会長が少しだけ気弱に質問を重ねた。同じ様な質問の繰り返しではあるが、不安なのだろう。

「どうしたら良いのかしら?」

「快刀乱麻で二科生問題を終わらせられるチャンスと思う方が、建設的だと思いますね」

俺とてこれほどの美少女が不安げであれば、慰めて優しくしたいという気持ちがないと断言できるほどに枯れては居ない。

だが上目遣いで胸元に寄ってこられても、後ろで深雪が冷たい笑顔なのでどうしようもないのだ。

「これでも真剣に悩んでるんだけど?」

「俺も本気で言ってますよ? ブランシエ側も根を張り始めただけでしょう。専門のチームを校内で立ちあげれば決して無理な範囲とも思えません」

「もしやお兄さま。組織に対し組織力ではなく、他を圧倒する精鋭で挑むのですか?」

ふてくされる会長を宥め、俺は深雪に頷いた。

それは半分だけ正しく、半分だけ間違いだ。

「別に戦闘力に限らないけどね。さっきのように不安になる時、『大丈夫だ』と言い切れるカリスマ。集団防御力、混乱する人々を落ち着かせる能力。最後に戦闘力かな」

「そんな能力を一人でも持つ方など、滅多におられませんものね。確かにチームの方が…」

「あら。私、丁度そういう人を知ってるわよ? 確かに『彼』がさつき居たら、問題無いと豪語して居たわね」

啼いたカラスがもう笑ったという言葉があるが、コロリと会長は楽しげな表情を浮かべた。

もしかしたら本当に、冗談で俺をからかって居たのかもしれないが、こんな場所で止めて欲しいものだ。

くすくすと笑いながら、先ほどまでの不安さが嘘のように会長は自信を取り戻した。

別に嫉妬する訳ではないが、それほどの人物が居るのだろうか?

人間としての厚みを持たない俺は、是非に知りたかった。

「だいたい判つて来たわ。小さな騒動はともかく、要所のテロは100%確実に止める。その後が重要で、先生たちを上手く乗せればいいのね？」

「そういうことです。できれば集めるチームの中に、二科生が何人か居た方が良いでしょうね」

「お二人で何か悪だくみをしてらっしゃるようですが、後でお聞かせ願えますか？」

機嫌を取り戻した会長と、急行化する深雪の対応を入れ替えながら俺は当面の目標を定めることにした。

学友とか言っても顔見知りでは、イザと言う時に操られている可能性だってある。

そんな不安の無い相手であり、実力があれば俺も今の能力だけで十分に渡って行けるだろう。

だから目標とは、仲間と言えるメンバーを集め、それらの人物に専用のCADと魔法を考えることだ。

今日で会った人々の中に、それだけの能力…いや、覚悟がある者が居れば良いなと思いつつ、俺は深雪と共に家路に着いた。

カウンセリング

●奇妙な朝

目覚めた俺はトレーニングの準備を始めた。考え事をしながら行いたかったので、深雪には料理を頼むと伝えておく。

「朝は軽い物で頼む。それと九重寺への土産は念のために日持ちするモノを」

「かしこまりました。ですがお兄さま…お尋ねにならないのですか？」

直ぐには行かないという意味を含めて、俺宛てに送られてくる親物ら日持ちする食材を選んで欲しいと要件を追加する。

深雪は瞬時にその事を察してくれたものの、少しばかり疑問だったようだ。

なにせ昨日は色々と面倒な情報があったので判らなくは無い

「ブランシェのことを教えてくださったのは先生ですし、聞けば教えてくださいなさると思うのですが」

「そうだね。でも、俺なりの調査をしてからにしたいと思ったんだ」

実のところ、師匠は優しい人だが甘い人ではない。

心に柵と交渉テーブルが複数あると思えば早いだろうか。

「せっかく子供扱いしないでくれるんだ。俺なりに判断を鍛えてから行っても損は無いと思う」

同レベルの付き合いができるならば、お互いの為に、より深い判断が必要な情報を投げて来る。

逆に、自分では何も調べず考えず迂闊に情報網を利用するならば、こちらが一つの方向にしか動けないような情報を渡してくるだろう。

それは四葉でエージェント扱いされるのと、どう違うのだろうか？

師匠に頼るとしたら、どうしようもなく急ぐ時、確定で情報が欲しい時に限るべきだ。

例えば深雪の危機など…。

「それではお戻りになるまでに用意しておきますね」

「楽しみにしてるよ。じゃっ」

通りに人が少ないのがこの家を調達した理由だが、目撃者が居ないとはいえない。

道まで出てから、俺は『目』で近隣を走査する。

その後は余計な事を考えずに高速移動の術式を発動した。

俺の力量ではこの程度の魔法ですら、注意してコントロールが必要になる。

制御に没入する訓練として余分な思考を排除して、一步一步、歩幅を増やしながら駆けて行つた。

「この辺にするか」

そして余裕持って帰れる（誰かが通つても良い）距離で足を止め、その近くにある公園へ。

徒歩で跳ねそうになる姿勢を維持しつつ、ゆっくりとベンチに上着を置く為に移動した。

ここで術を切り、今度は干渉幅を拡張する術式に切り換える。

そして自分の体同士ですら反発しかねない状態で、組手を想定した動きをしつつ、余計な考え事をすることにした。

つまり、今度は並行で他の事をするための訓練である。

（まず俺がしなければならぬのは状況の確定だ）

師匠に頼むにしろ本家に要請するにしろ、大山鳴動して出て来たのがネズミでは笑い話にしかない。

逆に深雪が危険になるかもしれないのに、悠然と構えるのは馬鹿げている。

そして、俺が状況がある程度調べ、どの程度の介入が適切なのか知っている・知って居ないは後に影響する。

知っていたのか頼むと言われ、代わりに何かを頼める、持ちつ持たれつの関係。

知らないなら教える代わりに、これをやってくれと言われる依存の関係。

実際に取り引するかは別にして、どちらが良いのかは言うまでも無い。

(次は、ブランシエのテロが起きるとしてその内容と規模だな)

アンダーグラウンド組織のどれかを打倒して吸収、ないし同等の提携をしたとする。

安価にCADを調達したとして、一高に隠すだけなどありえまい。やはり、一高の生徒…それも二科生を抱き込んでから、何か起こす気だろう。

(問題はソレが校内で起きるのか、外で起こす予定なのか…だ)

手駒を集め、裏切れない様に踏み絵を踏ませる。

そこまでは良い、二科生ばかりで一科生はおらずとも、魔法師自体が戦力だ。

加えて失敗したとしても、魔法師はテロリスト予備軍と罵ることで便利に使い潰す気だろう。

(校内だとすれば、十師族に連なる会長たちを人質にすること。他に…?)

判り易い形のテロとして要人誘拐や殺害がある。

この学校で要人と言える者は居ないか、居ても会長たちだけだ。

とはいえ政治要求を政府が呑むとは思えず、同時に他でテロを起こす場合の目くらましにしかない。

(魔法科大学と違い貴重な研究関連の現物を持ち込まれている筈が無い。後は施設だが…魔法科大学か)

確か、魔法科大学へデータを要求できる特別室があったはずだ。

一般閲覧できるモノもあるが、教師でも一部にしかアクセスコードが配布されないモノもある。

普段は担当教師が閲覧許可を出し、付き添う形で研究者肌の生徒に見せると聞いている。

だが一部がテロを起こして占拠している間に、別班がハックしてしまえば好きに情報を引き出せるだろう。

クラックこそ出来ないが、この方法でなら最先端以外は眺めることが出来る。

(となると校内で起きる場合は、本命を情報の抜き出しとした上で、会長たちも狙えるならば…というところか)

今年に限れば十師族に連なる者が二人も居ることになっている。だとするならば、狙うなら今年だろう。

陽動としてこれ以上の存在は居らず、本命が別ならば、最初から捕まえる必要も殺す必要も無い。

（会長が騒ぎを鎮めるために動けないで居る所を、狙ってみせつつ裏でこっそり情報を持ち出す。こんなところか…）

去年やらなかったのは、十師族というだけではターゲットというにはパンチが弱いので、会長職に就くの待ってから行動したのだろうか。

あるいは、単に闇組織との抗争が長引いた、あるいは別件で相手勢力が弱まったのを突いたから勝てた？

そして、この考えは他の場所でテロを起こす場合にも使えるはずだ。

（校内でテロと見せ掛けて会長たちを狙って見せる。ここまでは同じ基本路線で、本隊は別の場所へ移動すると…）

極論を言えば、テロを起こす側は『攻め手の理』によって、好きなタイミングと場所を狙える。

加えて、二科生を抱き込んだとしても所詮は使い捨て。適当な場所で騒ぎを起こして、会長の動きを固定するのは簡単だろう。

ここまで整理して校内の場合は読めて来たが、外は流石にどうしようもない。

もう少し状況が確定した段階で、本家に予測として情報を投げれば良いだろう。

こちらとしては校内への対処を万全にするつもりだし、外で何が起きようとも、情報は投げて居るのだから問題は無い。

（流石に今の段階ではここまでが限界だな。そろそろキリあげるか…）

並行してやっていた技と魔法の鍛錬が、何度目かの繰り返しに入っていた。

考えも進まなくなってきたので、ここで切り上げて家に戻るとしよ

う。

干渉系の術を打ち切り、再び移動系に切り換えて家路に付こうとした…。

だが、途中で思わぬ相手を見かけ、魔法を中断せざるを得なくなる。存在を知覚する『目』の範囲を広げた所で、途中で反応があったのだ。

それも昨日どこかで出会った人物の気配がしており、魔法を使いなから帰ることは躊躇われた。

仕方無くランニングに切り換え、距離的な保険を掛けておいて良かったと思うことにする。

(あれは…。確か森崎の?)

以前に試技の画像を幾つか見たことがあるが、クイツクドロウの森崎家の資料だったはずだ。

俺の記憶力は写真記憶と誤解されるくらいなので、ほぼ間違いはあるまい。

(一緒に居る女と朝帰りか…)

どうやら、どこかのカラオケなりで遊び倒したのだろう。

赤い髪の女はしきりに髪を気にしており、森崎の方は少し焦燥して居る気がする。

場合によってはホテルで年齢的に問題のある事をしていたのかもしれないが、俺には無関係なことだ。

森崎も気が付いた様で、バツが悪そうな何かを言いたそうな顔をしていたが、やがて別の場所に移動して行く。

迂回するのも妙な話なので、俺は可能な限り無視して帰ることにした。

ここでの出会いが後に影響する事になるとは思いもしない。

家に帰りつくと、深雪に森崎に出会ったとだけ告げると、軽くシャワーを浴びて食事を取ることにした。

●カウンセラー

色々インパクトのある朝だったが、学校でも色々あったので流されるように重要性が薄れて行く。

一番最初の出来ごとは、入学式前に出会った女教師と縁者らしき男子生徒のことだ。

「昨日はどうも」

「何のことだ？」

入学式前に出会ったうち、男子学生の方は軽く挨拶をしてきた。

俺はとぼけて返した後で、ぼそりと一言付け加えておく。

「何かあったとしても、俺が同じ目に会った時は見なかったことにしてくれるとありがたい。俺は司波・達也だ。達也でいい」

「了解、達也も同じ様な事が……。つとと、何もなかった。そうだね。ええと、僕は吉田・幹比古。幹比古で」

俺達は互いに微笑を浮かべて、見て見ぬ振りをする情けを確かめ合った。

こう言つてはなんだが小百合さんはともかく、駄目な方のお袋に遊ばれてる時は、見られたくは無い。

だが、その努力は早くも崩壊して行く。

ホームルームの開始十分も前に待機して居る女教師を見て、エリカが呟いた。

「あれ、一美ちゃんじゃない。ここの学校だったんだ」

「エリカの知り合いなのか？」

「どうやらエリカとも面識があつたようだ。」

俺は遠慮して聞こうとしなかったが、レオが気にすることなく尋ねた。

「んー。ミキっていうか、吉田家って知ってる？ その門人で名前が同じ吉田なのに、偉いさんの前でも吉田って名乗れる人」

「古式魔法のか？ 高弟というか、余人には無い才能がある場合はそうなるだろうな」

聞かないつもりだったが、俺は吉田家という古式魔法の大家を知っていた。

そこは現代魔法の概念を組み入れて、今でも発展して居る名門だ。

いわば刻印魔法の五十家と似たようなスタンスであるが、古式魔法の使い手は珍しく注目に値した。

だが、あの女教師はもつと珍しい能力者らしい。

「へー。流石っ。うちの千葉家は剣を使う事で武闘派の魔法師と呼ばれてるけど、あの人は自在師って言う別の意味で戦闘に特化した魔法師よ」

「自在師かあ。目的を見失って今では隠遁気味って聞いたけど、すごい珍しいじゃねえか」

「俺も見たのは初めてだが…。レオは良く自在師の事を知ってたな」
意外だったことが幾つかある。

見た目は優しげな、あの吉田・一美という女教師が、戦闘特化の自在師であったこと。

そして同じ戦闘系の千葉家に連なるエリカはともかく、レオまで知っているとは思わなかったことだ。

それも目的を見失った事まで知っていると言うなら、相当だろう。

「まあ俺はこの通り肉体派だからそう思うんだろうが…。まあ、爺さん達の受け売りだよ。後はあちこち渡り歩く間に、自然とな」

「渡り歩くって、アンタ何時の時代のつもりなのよ。博識なお爺さん達に感謝しなさいよね」

「二人とも、そこまでにしておけ。そろそろアナウンスが始まるぞ」

俺は適当に決まり切ったルーチンの授業登録を終えて、二人に時間を示した。

五分前にはあの女教師も入ってくるだろう。

「やばっ。というかお前、キーボード入力なのに早ええな」

「油断しちゃった。もうちよつと時間あると思ってたけど、流石はミスターね」

どうやら二人は俺の入力を見ながら時間を測っていたらしい。

確かにアナログな入力だが、そこまで珍しいだろうか…。

そんな感傷も早く、五分前のアナウンスが始まり、少し遅れて女教師も入って来る。

「…ですね。ではホームルームを開始したいと思います。よろしくお願ひしますね。では…」

今時の授業やHRは画面と端末で行うのだが、この女教師は対面学

習でも重視して居るのだろうか？

そう思つて居ると、本人から判り易く申告が為される。

「…と言う訳で、私はカウンセラーの吉田・一美です。この学校には一クラスごとに二名のカウンセラーが…」

ある程度の内容は聞き飛ばしてしまうとして、何故ここに居るかと言つと、カウンセラーなのだそうだ。

教師と違いカウンセラーは生徒の様々な悩みを聞き、簡単な相談を行つてくれる。

生徒には魔法師としての問題よりも、学校や進路などの悩みは多く、その為に存在して居る訳だ。

加えてカウンセラーには魔法師でなくとも成ることができるので、二科生にも配置することができらしい。

そうやって疑問を解消して行くと、ふと目に止まったモノがある。今時、珍しい書籍を持ち歩くのは俺くらいかと思つていたが、彼女も所持して居た。

そして興味を惹かれたのは、本ではなく挟みである『葉』の方だ。そんな事を考えて居たため、俺の思考が固つてしまったのだろう。思わぬ失敗をしてしまった。

「…登録が済んだ生徒は退出して構いませんが入室は認められませんが、それでは、何か質問があればどうぞ。えーと、もう終つてる吉田くんと司波くん？」

「え？ ええと、特に何もありません！」

「…その葉はもしかや小形CADですか？」

女教師が手持ちの端末に目を這わせると、俺と同様に終つている生徒を名指しした。

反応したのは幹比古で、思わず慌ててしまつて居るようだ。

だが、慌てて居たのは俺もかもしれない。

思わず考えて居たことを口に出してしまった。

「良く判りますね！ 技術系の先生でも見逃す人が多いのに」

「一美ちゃん、こいつは現職のCAD職人でもあるから。あ、デザイナーナーだっけ？」

「技術的には免許がまだだから、確かにデザイナーの方が…」
「本当かいエリカ？　もしかしてトーラス・アンド・シルバー？　本当にこの学校に居たんだ」

と言う感じで、大袈裟な自己紹介に成った。

どうやら幹比古とエリカは知り合いらしいが…、そこで俺の通名を出さなくても良いのと思う。

もしかしたら、俺が葉型のCADに興味を覚えたように、あいつも俺のことを考えて居たのかもしれない。

その後は面倒なことが色々あったが、なんとか抜けだす事が出来た。

「ごめん。僕があんな所で名前を出さなきゃ…」

「構わん。もう終わったことだし、エリカが先に口に出していたしな」

「ビュービュービュー」

謝る幹比古に対しエリカの方はどこ吹く風だ。

「まあ有名人ならいざれバレたんじゃない？　一日目で終わったと思っておけばいいじゃん」

口笛を吹くどころか、声に出して誤魔化した。

「そういえばCADのデザイナーって言ってたよな。技工師行くとしても、得意な魔法はなんだ？　俺は収束系の硬化魔法だけど」

「俺の方は実技が散々でな。誰もが同レベルの無系統の魔法か、単純な魔法を連発するくらいが精々だ」

レオは見た目通りというやつか。

それでも普通に使える魔法があるのは羨ましいと思いつつ、頭の中で素早く計算する。

これまでの立ち振る舞いから見て、基礎体力には問題が無い。

隠密行動もそれなりにやれそうで、硬化魔法はそんなレオに相性抜群だろう。

発動規模は関係ない系統なので、後は干渉力と構築速度次第で優秀な歩兵になれるだろう。

その日は結局、見学で終わる一日だった。

適当に色々な学校施設を歩きつつ、深雪と合流して食事をしたり、

午後も同じ様に一日を見学で過ごしていく。

そして放課後になり、再び深雪と一緒に帰宅する最中のことだった。

「どこまで着いてくる気だ？」

「司波さんに相談があるんだ」

「相談なら学校ですれば良いじゃないですか」

森崎や数人の一科生がこちらを取り巻いていたが、学校外まで着いて来たのは奴だけだった。

他は遠慮したようだし、相談は授業のことを理由にしたからなのだろう。

本来であれば、美月が割って入らなくとも、本当に理由の無い者は帰ってしまったと言う訳だ。

逆に言えば、ここまで来た彼には理由があることになる。

森崎は俺に目をやり一瞬だけ何かを考えたようだが、首を振って深雪に向かって行った。

「重要なんだ。司波さんじゃないと…」

「だから明日の朝にすれば良いでしょ？ そんな言い訳をしてまでお兄さんとの仲を引き裂く必要は無いはずですよ！」

「引き裂くだなんて美月は…」

焦っているような森崎に対し、美月の正論は通じない。

理由があるなら話せば良い様な物を、いつまでも口しなないから長引くのだ。

後から思えばおいそれと口に出せない内容なのだが、思い付けない時点で俺も未熟ということだろう。

「入学した今の段階ではそれほど変わりが無いじゃないですか。そんなに一科生って偉いんですか!？」

「そんなの関係ないだろ！ …それに、見たいなら何時でも見せてやるよー」

「特化型!?! こんな道の往来で試合をやる気かよ!!」

興奮する美月に対し、森崎は一瞬だけ端末に気を取られた後で銃の形状をした特化型CADを引き抜いた。

今度はレオが割って入り、アームガード状のCADを構える。

「理由あるなら説明しろ。深雪だって協力しないこともないだろう」

「ああ、もう！ こんなことをしている暇は無いだ！」

「だったらなんでCADなんか…。アレ？ 何か変な色が…」

森崎の興奮も相当な物で、事情説明などどこかに吹き飛んでしまっている。

だが、事態を変えたのは美月が突如、キョトンとした顔で空を見つめ始めた所だ。

「美月に何したの!? 幻覚なんか使っちゃってさ」

「待って。違うよエリカ。本当にナニカ居る…」

エリカまで興奮して警棒を取り出した。

それを制したのは幹比古。

「どうやら美月と幹比古の二人にだけは、何か特別な物が見えているらしい。」

「事情のつかめて居ない俺達を、思わぬ事態が襲うことになる。」

ブラックオーダー

●精霊

幹比古が懐から紙片を取り出すのに合わせて、俺は『目』で捜査を開始する。

近くに合計四つ。反応の内一人は、今朝がた森崎が連れて居た女だ。

連中の後方に居る五人目はバックアップか、それとも無関係な人間か。

「精霊を使役してるんだと思う。今から顕在化させる術を行使させてもらうよ」

「なるほどな。こつちを指している一人と様子を窺っている連中の他に、妙な気配が在るのはその為か」

この『目』のことを知られたくないので一瞬で打ち切り、判った情報に気配と偽っておく。

幸いにも状況に驚くばかりで、『目』を感知出来た者は居ない。

当事者らしき森崎は慌てて端末を弄り始め、興味なさそうな二人はCADを降ろして待機の態勢移っていた。

「良く判るわね。あたしなんてようやく後ろの方だけ判ったつてのに」

「お前は殺気に敏感なんじゃねえか？ 俺は前だけだな」

「それが判るだけでも二人とも大したもんだよ」

二人の会話に相槌を打つことで、万が一にも気が付かれないように誘導しておく。

そして森崎に話題を振り向けると、一同の関心はそちらに移った。

「…森崎、もしかしなくても護衛がらみで、会長への繋ぎが必要だったのか？」

「そうだ！ 出なければ同級生に迷惑なんて掛ける訳ないだろう！」

その言葉へ『素人』にはという意味合いが込められていたが、あえて無視しておく。

まあ、実家が護衛業もやってる奴にとっては、二科生では素人同然

なのだろう。

俺の方も気にせず片手で端末を取り出し、ケースからCADを念のために準備しておく。

「そう言うことなら早く言え。…琢磨か？俺だ、七宝家がセーフハウスを持つて居たら教えてくれ。そうだ、一高に近い場所で頼む」「七宝家と縁があったのか？」

「お兄さまの熱烈なファンなんですよ。ちよつと困った面もありますけど…」

俺が森崎の要求を先回りして連絡を取ると、案の定、ビックリした様子でこちらを眺めた。

実際には、警察に縁のあるエリカのコネの方がベストなのだが、それでは森崎はともかく護衛対象に通じない可能性もある。

そこまでのやり取りが終わったところで、幹比古が術を発動させる。

基本となる紙片：符をアレンジするところまではともかく、符を書き切つてからのタイミングが少し気に成った。

今は指摘するような時間はないので、後で機会があれば少し話してみよう。

ゆらりと空に見えたのは、空に浮かぶ狼か犬か何かの首だ。

その下を女がこちらに走つて来るのが見えるが…、森崎が手招きしているのを見て、安堵した表情を浮かべていた。

「これで近くまで寄つて来てる対象は判ると思う。継続時間を考慮すると、流石に遠方までは無理だけど」

「…もしかしてアレが精霊なんですか？　じゃあ遠くのは出来るだけ私が確認しますね」

幹比古が息をついて新しい符を取り出すと、美月が眼鏡を外して眩しそうな顔をしていた。

最初から注目して居た俺と違って、何人かがキョトンとしているようだ。

「わ、私ですね。ちよつと見たくないモノまで見てしまうと言うか…」美月が慌てて過敏症のことを説明している間に、女がこちらへ辿り

つく。

「リン！ 大丈夫でしたか？ もしかしてカツラを外したんですか？」

「だってこっちを追い掛けてるから、シユンがしてくれた変装が通じて無いんだと思って…。でもそしたら、急に正確に…」

森崎が抱え込むようにして、空飛ぶ首に銃型CADを向ける。

良く見れば髪の毛の色が朝と違っており、俺も『目』で見ってから気が付いたものの、一見で把握しろと言われても難しい。

「多分、把握させるキーワードに限りがあるんだと思うよ。途中まではそれなりに有効だったんだと思う」

「ということは、予備があれば少し誤魔化せるかもしれない」

幹比古の説明があつて、それなりにカツラも有効であつたことが判明した。

だが、何も知らない者が、そんなことを知っているはずもない。

おそらくは本人が言う様に、無駄だと思つて外した瞬間、搜索範囲を締められてしまったのだ。

仕方無いので奇襲され易い住宅街を避け、俺達はゆつくりと通りへと向かつて行く。

人避けの結界が張られているようだが、車線まで出れば七宝の通報から警察に所属する魔法師が来易いだろう。

「エリカを？ 流石に無理があると思うけど」

「どこ見て言つてんのよ！ たたくもう」

「…エリカだけじゃない。この場合は、二人が共通する第三者に似せるんだ」

「？」

移動しながらも、奇襲を警戒するとペースが遅くなる。

時間潰しに変装案を話し合いながら、徐々に後ろに回り込まれない場所に移動して行く。

「特徴を消すと言う森崎の案は間違いじゃなかった。追っ手が区別できないように、そのキーワードもぼかしてやればいい。幹比古、お前なら何を使う？」

「僕ならサイオンとか、犬の霊を使うとして臭いかな。どっちも何とか出来ると思う」

俺が従姉弟に居る双子へ提案した方法であるが、双子でも微妙に似て居ないことがある。

だが、同じ格好をした第三者に化け合おうと、それぞれの特徴を消せて混同させ易いのだ。

幹比古がサイオンや臭い対策をできるといふなら、なんとかなるだろう。

「おっけ。なら、まいた所であたしが変装しちゃえばいいのね」

「でも良いの？ あなた達まで巻き込んでしまつて」

「ここまで来て言いつこなしだな。それになんだ、放っておいて、俺達が無事に帰れるとも思えないしな」

「違うない」

間違われるのは自分だと言うのに、エリカは笑って不敵な笑みを浮かべた。

リンと呼ばれた女は少しだけ申し訳なさそうな気がするが、レオが笑って断言すると俺達まで頷いてしまった。

どうもエリカやレオの様に陽性の反応が強いと、陰に籠る気のある俺達までつられてしまう。

（そういえば、服部副会長もタイプの違う桐原先輩と仲は良さそうだったな）

俺がこいつらと居ると居心地が良いと感じるのも、案外、それだけ氣質が違うからかもしれない。

●ファーストミッション

追っ手のペースが速くなった所で、後ろが厚みのある壁になったマシジョンらしき場所に出る。

「連中の足が速いな。ここで戦うしかあるまい」

人は居ないが、ここならば後方から襲われ難いだろうと迎撃する事にした。

「人避けの結界が張つてあるね。時間制限はあるけど破り難いタイプ。相当に自信があるみたいだ」

「だろうな。すまんがその制限に挑んでくれ、綻びが出れば連中も焦るだろう」

やがて現われたのは強面という他ない黒服が三名。

共にサンングラスタイプの視線ポインタ入力と、胸ポケットかどこかに本体をしまう複合タイプのCAD。

俺自身は視線ポインタは誤作動を考えると好きになれないが、格闘か何かと組み合わせれる術式は多くない。

得意技に合わせて一・二種を使うなら悪くない選択肢だ。

「話しかけても来ない…問題無用か。ならー!」

俺がそこまで確認した瞬間、森崎が一瞬の早業を見せた。

流石はクイツクドロウに特化した早撃ちで名を馳せて居るだけはある、

黒服は素早く動いたにも関わらず、三人に魔法式を次々と命中させていた。

俺が『視た』ところ、気絶させることに特化した、単純ながらも考えられた魔法と言える。

護衛を生業にしていると撃たねばならない事もあるが、殺傷する訳にもいかない場合が多いからだろう。

「そんな馬鹿な。効いて居ないと言うのか…」

だが、相手が悪かったと言う他は有るまい。

黒服は三名のうち二名が、軽く頭を降って起きあがって来た。奇妙なのは、少しも声を発しないことだ。

ここまで訓練できるエージェントを送り込める組織か…。

「森崎。その術式は前後に揺さぶる事で気絶させる物だな？ ノックバック前に衝撃緩和されているんだ」

「そんな…。あの一瞬で見抜いたっていうのか？」

それはどうだろう。

俺とて一部始終を見たからだ。

連中も本当に見抜いているならば、最初の一人で何とかするかもしれない。

喰らってから無理やり間に合わせたという感じがするが、良くもそ

ここまで思い切れた物だ。

「対抗能力に特化して居るだけかもしれない。俺と一緒に普通の振動系で牽制しつつ、時々狙ってくれ」

「援護か…。仕方無い」

全く躊躇しないとしたか思えない反応ぶりである。

だがどこかで対応しきれない可能性はあるし、一撃気絶を見せ札にしておくことにしよう。

それで多少なりとも、有利に戦える筈だ。

だが悠長に考察できるのはそこまでだった。

残る二名はそれぞれに魔法を駆使して襲いかかって来る。

「向かって右が自己加速。左が衝撃の干渉強化による打撃で来る。深雪：お前は念の為に領域干渉を」

「はい、お兄さま。いかなる魔法も通しません」

魔法の重ね掛けは面倒なことに成る。

まずは仲間達に相手の行動を伝えつつ、妹へ対魔法防御を頼んだ。

深雪の干渉力は十師族級だ。干渉力特化型でなければ『魔法は』大丈夫だろう。

「魔法式が読めるって便利なもんね。じゃあ、あたしが右を抑えるわね」

「なら俺が左って訳だな。パンツァー！」

エリカが自己加速を掛けて飛び込み、レオが硬化魔法を掛けて迎撃を始める。

それぞれに己の得意技で対抗しようというのだろう。

「音声認識なんて初めて見ました。それとあれは…」

「以前に流行った逐次展開だな。なんともアナクロな」

音声認識も入力方法の一つだが正確性の問題で使う者は少ない。

逐次展開の方は、魔法式を継続系で発動こそするものの、途中で任意に継続と打ち切りを選択するものだ。

今では流行らない古臭い技法であるが、いつまで使うか判らない防御用の硬化魔法を使用するには、悪くない選択肢だろう。

一つ一つは古臭さが立っているが、選択肢の絞り先はかなり考え込

まれている。

「硬化魔法も面白い使い方をしているな。相對位置を個体して強度を上げつつ、飛ばされないようにしているのか」

相手は格闘の訓練を十分に受けて居るようで、レオを圧倒して居た。

だが、殴られても手甲型のCADは壊れる気配はなく、奴自身も軽く後ずさりしているだけだ。

防御力と言う意味でも、場所を守る壁役と言う意味でもかなりの性能を引き出している。

…そう、性能だ。

レオの動きには、そう評してあまりあるモノがある。

「見え見えなんだよ、シルト！」

(武器破壊に対してCADの防護力を一点集中したな。…明らかに素人考えのレベルを越えて居る。軍隊かどこかの特殊部隊か)

レオは喧嘩慣れしているようで、格闘術に押されてはいてもやられるほどではない。

同じ硬化魔法を様々な使い方をする事で、局面に対応して付いて行っていた。

そして、レオと逆に優勢に見えるのがエリカだ。

制御しきれないほどの速度で走りながらも、自在に制御して小回りを利かせている。

今も相手の拳をかいくぐり、警棒で脇腹を叩いていた。

だが、残念なことに殴り倒した…ではなく叩いたに過ぎない。

(こっちは有利だが、気を抜いたら危険な感じだな。刃物が欲しいが…)

エリカの身は軽く、警棒も重い物ではない。

もちろんそれを技で補って居るはずなのだが、相手は防御を捨てて致命打撃を避ける戦術法を選んでいる。

肉を切らせて骨を断つと言う訳でもないが、どこかでカウンターを受けたら、気絶させられかねない危険性ははらんで居た。

一進一退の攻防に見えるが、増援があれば直ぐに戦いの天秤は傾向

くだろう。

現状では黒服の側に可能性があり、こちらは長時間待つてようやく七宝が警察を動かせるかどうかだ。

さて、どうしたものか？

俺は二組の戦いを見ながら、微妙な差に注目した。

「エリカ、レオ。同じ土俵で戦うな。自分の長所で相手の短所を突くんだ」

俺の振動魔法があまり効いて居ないこともあり、二丁のうち片方を一度ポケットにしまう。

そして二人が軽く振り向いたところで、指を二本ほどクルリと回した。

「ちえ、仕方無いか。交代と行きましょ」

「わーった。確かにそつちなら、俺も無敵で要られそうだけ」

エリカもカウンターの危険性は察して居たのだろう、躊躇なく頷くと左の敵に踊りかかる。

対してレオの方は身を固めて右の敵に挑んだ。

そこから先は危なげない戦いになる。

レオは硬化魔法で加速型の攻撃を跳ね返しつつ、こちらこそカウンターを狙う。

逆にエリカは柔良く剛を制し、衝撃が浴びせられない様に受け止めることなく動き回った。

「凄い。たったあれだけの指示なのに」

「お兄さまならば当然のことです」

「それでもないよ。俺はともかく森崎の牽制は効いているし、いざとなればお前が凍らせてくれるだろう？」

リンに対して深雪が自慢げに語ってくれるが、実のところ森崎のノックダウン用の魔法が大きいだろう。

あれがあるからこそ、黒服は衝撃緩和を常に備える必要があるのだ。

同時に牽制用の振動魔法も俺より強力なので、今回はあいつに花を持たせるべきだろう。

だが、危険な状態はまだ続いている。

目の前の二人ではなく：後方に居た感覚が、距離を変えて居ないからだ。

加速魔法で飛び込んで来るかもしれないし、戦術級魔法師ならばかろうじて達する距離かもしれない。

戦闘はこちらが有利になりはした。

敵が仕掛けた時間制限系の結界も、幹比古が大幅に縮めているはずだ。

そいつが干渉して来るならば、そろそろだろうと踏んで、そろそろ声を掛けておく。

「美月。それとリンさんでしたか。何時でも動けるようにしておいてください。敵のバックアップが行動を起こすならそろそろです」

「わ、判りました」

「判ったわ」

何が来るか判らないが、声を掛けておけばパニックになることもないだろう。

二人は身構えて幹比古や森崎の側に寄り、いつでも防御系の魔法に頼る準備を始める。

結果から言うと、俺の予想自体は当たっていた。

今しかないというタイミングは読み切っているし、突入・長距離魔法のいずれにせよ対処できる自身はある。

深雪の領域干渉を突破できるとは思えないし、俺自身も体術の心得は有る。

来るなら来いと思つた俺の耳に、甲高い、人の可聴域限界の音が聞こえて来た…。

「なんだ？ この耳障りな音は」

「つー。幸せな耳ね。あたしには騒音に聞こえるんだけど」

「犬笛：いや、これは笙だ。達也、何か仕掛けて来るよ」

ピーっと言う音は、確かに笛の音に聞こえなくもない。

甲高い音だけ聞こえて居るが、笛の音だというならば、響かないだけで重低音もしているのだろうか？

耳はそれほどでもないの、仕方無く『目』を使い続けることにする。

暫くして、フッと音がした時のこと。

「っ!? お兄さま?」

「…っ。問題無い。掠っただけだ」

腕の肉が少し弾けた。

何かが通り過ぎ、俺の肉を抉って行く痛みを感じる。

だが無視できる範囲だし、対処の方が先だ。

「深雪が領域干渉を張ってるんじゃないの?」

「これは魔法を使わない実弾だ。…氷の弾丸か何か、証拠の残らない暗殺用の武器を使ってるな」

俺は一つだけ嘘をついた。

魔法によらない実弾攻撃であるが、弾は鋼フレシヨット矢だろう。

氷の弾丸というのは、深雪が偽物の証拠を残せるように。

何故そんな事をするのかと言うと、答えは単純だ。俺の切り札を使った時の対策である。

「操弾射撃だ。発射時にのみ魔法で強化する射出強化系。少々の硬化魔法だと貫通されるぞ」

「…的確な説明はありがたいな。となると…精霊による観測か。幹比古、ジャミングも任せられるか?」

「なんとか…。いや、間に合わせる!」

発射時のみ、魔法で加速か何かを強化し、硬化魔法の装甲ごと突破する気か。

確かにこの方法ならば、深雪の干渉領域を無視できる。

二発目が俺の肩の肉を抉り、着実に狙いを定めている理由もわかった。

(さて、どうしたものかな?)

幹比古がジャミングして、精霊の知覚を誤魔化すのを待つべきか?

それとも駄目元で精霊を術式解体で狙ってみるべきか。

俺が狙われるのは別に構わない。

保険として『再生』がある以上は、敵の狙いを一つ無効化できる。

そう、この時までは悠長に構えて居た。

だが、俺の思考が一撃で吹っ飛ぶ自体が起きたのだ。

正確には、俺の忍耐が限界突破したと言っても良いだろう。

「深雪ー！」

「お、お兄さま!?!」

俺は深雪を抱きしめる様に、懐へと庇った。

第三者は俺が避けない様に、仲間…それもよりによって深雪に当たるコースで放って来たのだ。

「…どうやら、死にたいらしいな」

どうしようもなく、俺の感情が一つの方向性に偏向きつつあった…。

滅びしモノと、喰らえるモノ

●怒りの矛先

俺には特殊な目、『エレメンタル・サイト精霊の眼』がある。

この目は『インフォ情報デ次元』にアクセスし、存在を認識する力だ。

バックアップは狙撃距離と言うほどには遠くない場所に居た。

操弾射撃の限界なのか、それとも奴自身の限界か。

いずれにせよ、この位置ならば十分に届く。

「そこか…。そんな所にいたとはな」

だから他者がアイデアにアクセスし、『エィド個別情報体』に魔法式を投射する際には、より詳しいことが判る。

先ほどまでは人が居るということしか判らず、それも人払いをしていなければ誰なのかもハッキリしないレベルであったが、今度は詳細に掴めた。

この情報を記憶。処分するまで…出来なければ再度に備えて深く覚えておく。

「喰らった傷から逆算したのか？　しかしこの距離でお前に何が出来る…」

「オン・マケイ・シヴァラヤ・ソワカ…」

実体験から想像したのだろう、森崎が都合の良い勘違いをしてくれるので軽く頷いておく。

だが説明には答えずに、俺は本来不要な真言マントラを唱えた。

そう、こんな真言は本来不要なのだ。

あえて言うなら、俺の心を鎮める最終ストッパー。

秘密事項に指定されている俺の能力を使う際に、本当に使って良いか自問する合図、居るならば周囲の仲間情報封鎖を頼む合図だ。

駄目な方の親父が思い付きで行動する為、そうならない様に自重する為のくだらない仕掛け。

(では、自問しよう。当てられる距離、一撃で終わらせられる状態だ。だが、深雪に負担を掛け…あるいはエリカ達に『口封じ』する程の事か?)

合図である真言を聞いて、今頃は深雪が精神魔法を準備して居るはずだ。

その精神魔法、『白き真実』で塗り潰した言葉は、周囲が正確に記憶する事が出来なくなる。

発動出来れば秘密を気にする事はなくなるが、慣れない精神魔法の行使だ、深雪に負担を掛けるのは間違いが無い。

発動に失敗するか、止めさせるならば、エリカ達の口封じが必要になる。

(深雪に負担を掛けてまで、深雪を攻撃された報復をするレベルじゃない。狙われたのは俺だ：)

俺の心を締める怒りが、徐々に収まって行く。

深雪の苦勞に比べればエリカ達に口封じ：誤魔化すなり、黙っておいてくれと言うなり、それでも駄目なら始末する事は苦勞でも何でもない。

だが、ここ最近の交流と、狙ってくる相手を何時でも把握できると言うことが、報復の必要性を薄れさせた。

「お兄さま、おやめ下さい。私などの為にそのお力は使っては成りません」

俺の怒りが収まった、脅威ではなくなったことが深雪にも判ったのだろう。

ここぞとばかりに、俺の腕を掴んで制止して来た。

「シユン…何が起きようとしていたの？」

「判りません。…あいつは二科生の筈なのに…。なんだ、この殺気は…」

リンと森崎の会話は、周囲の心境を如実に表したものだろう。

震える手で抱きしめ合いながら、疑念を込めた目をこちらに向けて来る。

そこまで極端ではないにしろ、他の連中も似たようなものだろう。

(ふう…。立ち止ったのは良いが、適当に言い訳を考えないとな。…それと逃げ出した奴の対処もだ)

奇しくも抱き合う男女が二組。いや美月と幹比古を合わせれば三

組か。

幹比古が古式魔法の使い手なのに目を付けて、意味の無い説明を行うことにした。

「俺は十年前なら一流で通じたタイプでな。サイオンの量と正確性がウリなんだ。その切り札と言えば判るか？」

「古式魔法だね？ 負担は大きいけれど遠距離攻撃や威力は申し分ないよ。かなり反動も大きい術ばかりだから無茶だと言わせてもらおうけど」

流石に専門家が居ると都合が良い。

こちらの用意したヒントを頭の中で繋げて、自分の常識にあった答えを出してくれる。

その頃は古式魔法と組み合わせながら現代魔法を確立して居た時だ。

思い当たるフシもあつたのだろう。

(これで良い。…なら後は片付けだけだな)

何をするか判らない奴と言う疑念が完全に晴れたわけではないだろうが、ここは良しとしておこう。

それに、ここで作った言い訳を信じさせられるならば、後あと気兼ねせずに行動できる。

バックアップで測量射撃してきた奴は既に逃げ出し、黒服を足止めに使ったようだ。

こちらは様子が攻守という意味で逆転しており、干渉強化型が壁役、自己加速型が牽制攻撃に徹して居る。

今度は奴らがマンションの壁を横にし、回り込まれない様に徐々に後ろに下がっている。

(時間稼ぎの為にこれほどの魔法師を使い捨てに出来るとは、なんとも贅沢なことだ)

それとも確実に逃げられる、…あるいは後で回収する手段でもあると言うのだろうか？

七宝が警察を動かしている筈だが、軍の方にも手を打った方が確かだろう。

俺と関わりある部隊に連絡を付ける必要性に至る。

ともあれ今は着実に目の前に居る三人を確保すべきだろう。

「レオ、壁役の気を引けるか？ エリカは援護に出て来た自己加速型を叩いてくれ」

「また元の配分か？ おーらい。エリカが片付けるまで保たせてやるぜ」

「何言ってるのよ。ちゃちゃつと終わらせてあげるから」

二人は俺の方に注意を払って無かったせいか、特に変化なく頷いてくれた。

レオは走り出し、エリカの方は警棒を短くして右手に持ち直す。

「行くぜ、ハルト！」

「お兄さま…あれって」

「師匠がやった『壁走り』と同じだな。そうか逐次展開だったのか」

レオは硬化魔法で片足をマンションの壁に付けると、即座に打ち切ってもう片方の足に硬化魔法を使用する。

その方式で壁を走っていくのだが、忍で師匠が殆ど痕跡を残さずにやった魔法とソックリだった。

レオがやれるのも得意魔法だからだろうが、その痕跡を隠す師匠の技にもビックリである。

（体術で互角なのに師匠との組手にはサッパリ勝てんし、俺にはこの手のやり込みは向いて無いのかもしれない）

曲芸じみた動きだが、意表を突くには十分だった。

正確には驚きもせず干渉型が対応して居るのだが、その援護に自己加速型が出て来るのは予定と同じだ。

思えばレオも、意表が付けなくても確実に気を引ける方法を取ったのかもしれない。

そして、エリカがやったことはもつと曲芸じみていた。

ハッキリいって、大道芸と変わりない。

「武器を…投げた？」

エリカは右手に短くした警棒を持ち、自己加速型の手前で左手にトス。

即座に延ばしながら、急所へ一撃を繰り出した。肩から肩の距離を伸ばし、左右逆の打ち込みを切り替える技だろう。

「これぞ飛燕の太刀…ってね。まあ一の太刀の応用なんだけどさ」「エリカちゃん…一の太刀って普通の人には使えない奥義だと思うの」

「すまんが一の太刀と言われてもサッパリだ。援護に来てくれると助かる」

エリカが言う一の太刀。

これは流派によって二通りの使われ方がある。

一つ目は、渾身の力を発揮して、一撃で倒す技。

二つ目は、相手の目付けを誤魔化し、一撃で倒す技。

ようするに、一撃で倒す技が『一の太刀』の概念であり、今回は後者の応用なのだろう。

それまでエリカに対し回避を捨てて体力保持に努めて居た自己加速型が、見切りを失敗してガードしてない場所に打ちこまれて気絶した訳である。

そこから先は一方的な展開だった。

前衛二名が足止めし、森崎のノックダウン魔法が早いか、深雪の氷結魔法が早いかの差でしかない。

「リンさんも落ち付いた様だし、七宝家のセーフハウスへ移動しましょう。詳細は後ほど構いません」

「ええ…」

俺と縁のある軍の部隊、独立魔装化大隊に連絡を入れてその場を立ち去ることにした。

仮に警察の部隊が護送に失敗したとしても、隊の方でトレースしてくれるだろう。

●複数の頭を持つモノ

俺達は七宝の案内で、一高近くのセーフハウスへ移動した。

途中で幹比古が精霊に対するジャミング術を何度も行使したこともあり、時間は夜に差し掛かる。

「急にすまん。場所を変える場合は俺の方から費用を出させてもらう」

「お兄さま、問題ありません。あまり表に出せない会合に使うだけで、別荘以外の使い道では滅多に使いませんから」

フル装備で出迎えてくれた七宝に対し、戦争する気なのかと苦笑しかけた。

だが、秘匿魔法で暗殺者を消滅させようとした俺が言うべき事でもないので、スルーして監視装置の使い方を教わっておいた。

「すまないが司波。詳しいことはリンさんが落ち付いてから…」

「それでも構わないが…これだけは言っておくべきだろう。第一高校が何者かに狙われている」

「ウチの学校が？」

依頼主を守ろうとして森崎が俺に釘を刺して来る。

先ほど言った、詳細について話して良いかどうかを判断する時間を与える為だろう。

とはいえそんな心遣いを気にしては何も始まらない。

情報を引き出す為に促す事にした。

「俺は風紀に誘われているんだが…。厄介な物を一高に持ち込んだ馬鹿が居る。コレに関わる情報があるならば一高や十師族の関係者は貴女を上にも下にも置かないでしょう」

「リンさんを利用する気か？　せめてもう数日待てないのか？」

「良いのよシユン。いいわ、全てでは無いにしろ話す事にします」

せっかくなので森崎を心情的なプラスとして利用する事にした。

あいつが優しく出ているところに、俺が厳しく出ると言う訳だ。

リンという女は、これが取引だと言う事を理解出来るくらいには頭が回るようだった。

情報というのは、何処で出すか、誰が言い出すかで変わるモノだ。

俺達が何かを発見してからでは価値が下がるし、本当に一高に関わる可能性がある事ならば、こちらが把握して居ない今の方がずっと高いのだ。

「そうね、まずは私の身の上から…。父はある業界の大立者で、立ち寄

る港ごとに女と子供が居るような人だったわ」

「あー。エライ人のお妾さんがお母さんって事ね」

意外にも同情的な視線を向けたのはエリカだ。

上から目線の憐れみではなく、その苦勞を理解出来て居る様だった。

もしかしたら、エリカ自身がそう言う身の出なのかもしれない。

血統が能力に関わる魔法師の間では、良くある話だ。

「使えると思ったのか…父が私を娘として認知して暫く、連絡が取れなくなつたわ。ようやく何が起きたのかを理解した時、あの男達がやって来た」

「今回の連中…ね。もしかして後継者争い？」

リンはエリカの質問に、少しだけ首を傾げてから頷いた。

「多分ね、他に考えられないし…。顔見知りだったダグラス・黄^{ウオン}は、私達が父の死を隠したなんて言ったけど」

「アレじゃない？ 後継者争いだと複数の候補が居て、他の有力候補の差し金とか」

今度は明確に首を振る。

よくあるお家騒動では無いらしい。

少しだけ考えた後、リンは思いきって口を開いた。

「そういう貴族に在りがちな血統主義じゃないの。力が全て、血は大義名分程度ね。そして、さっき言つた厄介な物にも覚えがあるわ」
「つまり、アンダーグラウンドで暗躍する組織の一つという訳か」

俺の確認に躊躇はするが頷いた。

闇の組織の血族と知られて、放り出されるのを警戒したのかもしれない。

とはいえ、この場に居るメンツで気にするのは美月くらいだろう。

森崎は依頼主だからか、それとも気があるのかリン側のようだし…。

後継者問題とは切り離せない幹比古やエリカの家でも、平和なだけで一歩間違えば似たような物だ。血で血を洗い、負けた方は暗殺者稼業に成りかねない危うさがある。

「私に判るのは父や有力者が何人が死んで、他所との抗争で組織が大きく弱体化したことよ。付き合いのある組織に吸収されかかっているの」

「ああ、なるほど。今度は俺にも判るぜ。大親分の傘の下でシマを整理して組を再統合ってことだな」

「組って、あんたどこの任侠映画の話をしてんのよ」

レオが納得して頷いているが、案外、その辺が真相なのかもしれない。

ブランシエが闇組織と抗争を起こして、勝利して吸収するというのは少し疑問符が付く。

だが、『同じスポンサー』が居る別組織を吸収して、再出発を手助けするというならば理解が出来る。

「なるほど、どうやら関連があるようですね。警察など官憲には貴女の事を知らせず、十師族も出来るだけ遠慮というスタンスで良いですか？」

「そうしてくれると助かるわ。これ以上の内容はもうちよつと考えが整理できてからね」

もともと、ブランシエの活動は魔法師への牽制という意味合いが強く、何処かの・誰かの造った組織というのはあり得る話だ。

リンの父親が操っていた組織も同じ系譜に属するブローカーか何かの組織で、影響力低下を懸念した親玉が指示したというなら吸収合併の可能性も無いではない。

（納得はできる。だがどういうことだ？ 闇組織を経営し。暗殺を警戒して居た筈の首領があっけなく始末される？）

そんな安易なことがあるのか？

黄という男に聞いて父親の死を知るくらいだし、その黄にしても勘違いするほどボスの情報が身内にも知られていないと言うことだ。

どんなに強い奴でも暗殺には弱い以上、情報隠蔽はベストに近いベターな手段の筈だ。

（情報隠蔽はベストではなく、ベター。まさかな…）

俺の思考は此処で引掛った。

何故ならば、俺を含めた四葉がかなりの情報隠蔽体質だからだ。本来であれば、俺がシルバーであること、意味合いが薄まったからと言って『再生』を使えることも秘密であった筈なのだ。

俺が世に出たのは、名前を出す事とある存在から深雪を守るため。

(アンダーグラウンドの連中を始末したのは、『紅世の徒』が捕食した結果だとするならばアツサリ行くのも判る気はするが、まさかそうなのか?)

闇の組織に対する遠慮が無いのも、紅世の徒であれば当然。

連中ならば人間のマフィアを喰うことに躊躇いがあるはずもない。その影響度＝存在の力を考慮すればさぞや美味かつたろう。

人間の暗殺者に魔法師がいかに強かろうとも、紅世の徒の方が遥かに死に難い。

加えて喰った相手の記憶が薄れて行くため、次々に食われない限りは気が付かれ難いというのもある。

可能性のある解として、整理されて行く思考。

だが、俺にはその答えに躊躇してしまう問題が一つだけあった。

(紅世の徒ならば簡単だ。複数の組織を狙った中に偶々リンの組織もあった…で済む。だが、餌さ場を複数持つて居るのか? それとも…)

問題なのは、紅世の徒が『不特定多数』居る場合だ。

派手な行動を起こすと、自身を狩るフレイムヘイズや自在師他の武闘派魔法師を呼び寄せてしまう。

だから紅世の徒たちも近年では大掛かりな活動をしないらしいが、必要に迫られてやっているか、その辺りを配慮できない新参者なのだと思っていた。

新参者であれば見付けだして討つのは容易いし、何かの目的があつて技術者たちを選んだのであれば時間は掛るが追い詰められるはずだった。

(技術者たちを餌さ場にする紅世の徒の他に、闇組織を餌さ場にする徒も居ると言うのか? どちらにせよ『担当者』に声を掛けた方が良

いな)

俺達の所属する四葉家は、十師族の中でも技術者を多く持ち、その勢力を隠している。

もともと魔法師は兵器として開発された経緯もあるが、四葉はその系譜を色濃く残す家だからだ。

ブランシエの情報だけならば連絡を取る意味も薄いですが、今の状況ならば話は別だ。

技術者という餌さ場、暗躍する組織という餌さ場。

偶然ながらその両方を兼ねる四葉家の者に、忠告すると同時に利用できる情報として投げた方が良いかもしれない。

本当に偶然なのか、それとも狙う意図があるのか？

深く考える前に、俺の思考はそこで途切れた。

何故ならば、リンの父親が操っていた組織に連なる情報が出て来たからだ。

「それで森崎さんと手に手を取って逃げ出して来たんですか？　なんてロマンチックな…」

「違うわよ…順番が前後するけど、ジェームズ・朱^{チユウ}という男が追って来てる途中で彼に出逢ったの」

「ということは、途中で出会わなければ捕まって居たってわけね。まさに運命の出逢いってやつじゃない」

女子会が始まっており、森崎とリンの仲を肴に盛りあがっていたようだ。

気の毒だとは思いますが、ここで見過ごせないキーワードが散見された。

「ジェームズ・朱^{チユウ}って国際指名手配されていなかったか？」

「確かその筈だ。オフィサーに成りあがって前線からは身を退いたそうだが…」

同じ思いを抱いたと言うか、顔を赤らめて逃げるように森崎がこちらに質問を投げかけて来た。

思わず頷いてしまったが、俺はその先の情報を知っている。

(ジェームズ・朱^{チユウ}はノーヘッド・ドラゴンに所属していた筈だ。無頭

竜ほどの組織が壊滅？)

あり得ない…。

個人、いやチームだとしても都合良く幹部を始末して行くのは難しいだろう。

少なくともどこかの国の特殊部隊と、同様の犯罪シンジケートが手を組まねば難しいだろう。

だが、懸念している紅世の徒であれば別だ。

俺は四葉の担当者である、黒羽家と連絡を取ることを決めた。

仕込み作業

● 割れ鍋に綴蓋であるゆえに

「一高に入り込んでる連中は、ブランシユとその息のかかったエガリテだ」

「ブランシユってあの…結構有名ですけど、どんなグループなんですか？」

「テロ組織よ。言論の表看板と、裏で暴力やら色々悪いことやってんの」

それが真実であるにしろ無いにしろ、考えねばならぬ事と、やるべき事がある。

黒羽家に簡単な内容で暗号メールを入れ、返事があるまでの間、今後の話をすることにした。

ここでリンから情報を引き出す為に使った、一高に何者かが悪影響を与えている情報を出す。

「どうやら一科生と二科生の対立を煽り、手下に引き込もうとしているようだな。みんなも気をつけてくれ」

「それなら一科生の方も安心は出来ないな。こう言っちゃなんだが十師族へのコンプレックスも相当なものだ」

見解の相違というのは悪い意味だけでは無い。
全く同方向のアイデアアマンだけでは、思い込みと言う罠に陥りかねない。

思ってもみなかったが、確かに森崎が指摘したように一科生も十師族に対抗心を燃やして利用される懸念は有る。

「可能性が高いレベルだったのですが、先ほどの話で確定できました。ありがとうございます」

リンの情報が無くとも確定はしていたが、『他人を納得させる』にはソースは多い方が良い。

それに、美月や森崎にサラッと吹き込むには、丁度良いタイミングで助かったのは確かだ。

此処で口にしておけば、エガリテに誘われてもホイホイと付いては

行かないだろう。

「…いいえ。お互いさまだものね」

「そう言っていただけだと自分も助かります」

彼女も自分の情報を利用された事には気が付いたようだが、あえて指摘するほど愚かでは無い様だ。

これならば、放っておいても大丈夫だろう。

自分の出すべき情報は出すだろうし、七草や…四葉を紹介しても一方的な利用されない様に立ち回ってくれるだろう。

「問題の長期化は避けたいけど、ブランシユか…厄介な相手だね」

「幸い敵も問題を抱えているようだ。でなければリンさんが逃げ出して来れるとも思えない」

幹比古の懸念に対し、俺は半分だけ頷いた。

結束の固い四葉であつても、決して一枚岩ではないのだ。

スポンサーの意向で無理やり一体化させられた状態で、しかも、同国民とも限るまい。

「あー。忠誠の証として挨拶に来いとか、一族を人質にとか言われたらムカ付くわよね。案外、ワザと逃げ易い状態で渡したんじゃない？」

「その後の追跡を考えたらその可能性は有るわね。手際の差というのは大き過ぎたもの」

想像できる流れとしてはこうだ。

要請に従って引き渡し、逃げ出して新しい要請が出た所で、満を持して実力を示して見せる。

ブランシユの無能を笑いつつ、自分の能力を誇示する訳だ。

「私達を利用してブランシユを弱体化させ、逆に自分達が上に…と言うのは都合が良過ぎるでしょうけど、連携の齟齬が期待できるだけでもありがたいですね」

「こっちは少人数なのに、敵さんが一斉につてのは避けてえよな」

「基本的には仲間割れを期待できるまで、敵の戦力を削ぐ為に迎撃。上手く行ったら警察に任せる形だな」

深雪が理解して居るのは当然として、レオもちゃんと判断で来てい

るようだ。

この様子ならば、こちらの認識は協力体制を維持すると言う事で、一致して居ると思っただろう。

「そこでエリカ」

「あに？」

おおよそ自体が呑み込めたであろう段階で、俺は新しく提案する事にした。

「警察の協力は仰ぎたいが、リンさんを引き渡す気は無い。出来るか？」

「面倒だけど多分出来るわよ？ 真面目な人には話して良い情報だけを、清濁併せのむーって言う人にはそれなりに話せば良いんでしょ？」

「何？ エリカって警察関係者なの？」

俺の話にエリカが載って来て、リンにウインクしながら微笑んで居た。

同情心もあるだろうが、どうやら事態を愉しんで居る様である。

「警察を裏から牛耳るって一族言うのと恰好良さそうだよな」

「人聞きの悪いことを言うなっーの。ところで達也君。報酬の方は期待していいの？」

「鼻薬を嗅がせると言うなら程度次第だな。勿論みんなにアルバイト代を渡すくらいは問題無い」

レオの冗談ともつかない言葉にエリカは頬をつまみつつ、悪戯っ子ぽい視線を投げかけて来た。

こちらとしても資金を惜しむ気は無い。

「あー違う違う。お金よりもホウキ…プログラムやCADの話だってば。あたしらの戦力UPが報酬って寸法よ」

「そんな特殊なCADを弄る自身は無いぞ？ だが、専用の法機を組めと言うなら相談に乗れる」

「その警棒ってCADだったのかよ」

法機とはCADの言い回しの事だが、この場合は自分の得意技が活かせる特化型CADの事だろう。

トーラス・アンド・シルバーでは七宝のビリオン・エッジだけでなく、カスタマイズくらいは普通にやっている。

今日は面白いモノをいろいろ見れたし、俺の目的の一つを考えれば願っても無い申し出だ。

こちらから提案せずとも向こうから来てくれたとも言える。

(その分、こちらが満足するまでデータを取得するのは難しいだろうが、まあそれは追々だな)

「じゃあ取引成立って事で♪」

俺とエリカは頷きあつて、双方の求めるモノを追求する事にした。

しかしこの様子だと、エリカは口先だけで警察を動かせる自信があると言うことだ。

レオが言つて居た裏から牛耳る一族というのも、あながち間違いは無いんじゃないか？

●ホウキ法機、アーティファクトあるいは宝 具

「さっきの戦いだけど、何か思わなかった？」

「例えばレオの使い方は面白かったが決定打不足。幹比古の方は…実力の割に二科生な理由は発現速度の認識齟齬か？」

「うーん。そう言われちゃ立つ瀬がねえ」

「そう…だけど、良く判るね。確かに僕もそれで相談はしてみたかったんだ」

納得しているレオと違い、幹比古の方は目をぱちくりさせて驚いている。

自覚はあるようだが、言い当てられて心底驚いて居る様だった。

「俺はBS魔法師なんだが、得意魔法とそれ以外の発現速度の差でイライラさせられることがある。同じ様な反応をしているようだったからな」

「確かにそうだね。もつと早く発動できるのに、以前はもつと上手くコントロールできたの…」

実際には『目』で見て、起動式を読んでいたのだが言う訳にもいかないの、感覚的な言葉で説明した。

それに対して帰って来たのは、実に感覚的な言葉だ。

「それは違うぞ幹比古。おそらくは、術の発動速度は変わっていない。単に、術が持つタイムラグの差を知覚出来るように成ったんだ」

「変わってない？ そんな馬鹿な！ 結界はそうかもしれないけど、他の術だって…」

俺は手をかざして止めると、紙とペンを取り出して説明を始めた。アナログ的だが、いまでもこの方が判り易い。

「古式魔法はカウンターを避けるために、呪文を聞き所作を見抜かれなくても良い仕掛けがあるんだろう。知覚力が大きく向上したためにソレを見抜いてしまい、齟齬が許せなくなっただけだ」

「達也君って随分と自信家だね。古式魔法にモノ申すだなんて。…でミキどうなの？」

「僕は幹比古だ。…確かにそう言う仕掛けはあるよ」

仮に術の発動が5フレームとする。

古式魔法はこれに1フレームか2フレーム入れて、複数の用途と誤差を含ませている。

例えば『緑青』という言葉には酸や毒、『稲』には大地・水・植物・稲妻などの意味合いが含まれる。

同じ言葉を用いた術でも、これだけ差があるならば、喰らう者が咄嗟に魔法で防御するのは難しいだろう。

ただし、それは古式魔法同士の戦いに限られる。

「昔はそれで良かったんだ。お互いにタイミングロスがあろうとも、カウンターされないことが重要だったんだからな」

「はは…。威力と汎用性で勝るはずの古式魔法が、CADで放つ現代魔法に叶なわないはずだよ。とっくに術自体が古くなっていったのか」
納得入ったのか力なく呟く幹比古に俺は首を振った。

「それも違うぞ。今回の攻防で敵がやって見せた奇襲性、お前が対抗して見せた対応力。これは武器だ。現代魔法では遠距離・長時間の管理は難しいからな」

「用途の差って事？ でも現実的な所で、撃ち合いになったらどうするのさ？」

SBを召喚して行った遠距離認識、その対抗手段。

こんな能力は現代魔法には無い。

幹比古が言う様に戦闘に成れば致命的な穴だ。

だが、奴自身がそう納得出来たならば、後はその穴を塞げばいい。

俺は紙に『稲』と書いている部分だけを千切り、こんな感じの刻印だと説明する。

「そうだな。古式魔法の対応力を残したままで、一部の術をCADにしてみよう。刻印魔法を使えば中間的な物を作れるはずだ」

「なるほど。緊急性を要する術専用の呪符を作るのか…」

例えば『稲』を伸ばすという魔法を、刻印魔法で呪符にする。

これは『草を伸ばす術』、『大地を隆起させる術』、『水辺で波を作る術』、『稲妻を飛ばす術』に使える。

だが、これを普通のCADでやろうとすると、絞って使うとしても放出や移動系で四つの魔法になるし、普通は複数の系統以外も使うので特化CADでは無理になる。

四つの魔法を管理するのと、一つの魔法で四種類の対象に使い分けるのでは大きく違う。

「特化型と同じ系統の術ならば入れられるとしても、それは別々のモノですものね。それら四つが一・二にまとまるなら凄いなと思います」

「同じ術が白と黒に使い分ける事もあるから、正確には八つだね。相克を利用して防壁に使うんだ」

「…何よ幹比古君。昔と同じ顔して議論出来てるじゃない」

「もしかして幼馴染なんですか!? 羨ましいです私、そう言うの無くて…」

俺の仕事を見てる深雪がフォローするのだが、エリカと美月が口出したおかげで微笑ましい光景に成った。

恥ずかしそうな幹比古とエリカであるが、美月はもしかして…これが平常運転なのだろうか？

意外な一面と言うか、感受性の高さから来るとも言った方がいいのか。

「次にレオだが、まずは硬化魔法のバリエーションを増やして総合強化してみよう」

「タンク役ですからその方が良いかもですね」

「えと：タンク役ってなんだ？」

「でも戦車って言うのもピツタリじゃない？ 攻撃力はそのうち何とかすればいいでしょ」

美月が恥ずかしそうに、ゲームでの用語だと教えてくれた。

前面で攻勢を一手に引きつけ、タフネスを活かして戦線を支える役目だそうだ。

「まずは車ごと護るのに慣れてもらえば、リンさんの護衛が楽になるな。：あとは、手とあの毛布との相対位置を固定して腕を上げて見てください」

「車ごとってますますタンクらしいじゃない」

「うるせえっ：。ええと、これでいいの？」

急に言われたせい、音声認識では無く戸惑いながらレオが魔法を発動させる。

イメージが固定されていないせいか、ペースはゆっくりだ。

やがて魔法が発動し、ピクリと毛布が動き始めた。

「おっ！ 毛布が空を飛んだぜ。面白れえなあ」

「今日の最後の方で、壁を歩いたろう？ あれは接地面を逐次固定する硬化とは別に、壁との相対位置を一定に保つ硬化を使い分けて居たのを見てな」

「良く見てるわねえ。本当に油断ならないと言うか：」

壁との設置を持続しても、頭が大地に向くだけだ。

相対位置を維持することで、自在に動いて居たわけだが、その方式を応用する事にした。

「実際のイメージが確立したこと、刻印魔法を併用する事でもっとスムーズに行くはずだ。後は位置と使い道に合わせて好きなコマンドを入力してくれ」

「脇に壁を作って通せんぼするパンツァーカイルとか、前に置いて突撃するパンツァーフオーとかいいですね」

「ねえ美月。なんであんたまでそんなに思い付くの？」

専門家である俺はともかく、美月が色々と提案するのは意外だった

のだろう。

エリカがしきりにアイデアソース尋ねるのだが、恥ずかしそうに読んだ作品にそう言うのがあるのだという。

俺が思い付く物など既にあると言うことか…恐るべしクールジャパン。

「でもこいつはいいな。ブラリと渡り歩くのも良いが、誰かを守って戦うってのも悪くは無さそうだ」

「当てつけか？ こっちは家業みたいなもんなんだが」

ブンブンと腕を振り回すレオに森崎が渋い顔をする。

森崎家の本業は魔法の研究職だが、ボディガードは副業どころか本業以上に成功して居る。

趣味と一緒にされても困るといふのは、判らないでもない。

だがそれに対するレオの回答は、意外な物だった。

「馬鹿にしてる訳じゃねえよ。何にも囚われず各地を放浪してるが、誰かを守る契約した時だけは凄い勢いで暴れ回る伝説の番長てのに憧れてるんだ」

(…レオ。それは番長じゃない、伝説の『紅世の王』だ)

俺は心の中でツツコミを入れた。

調べた紅世の資料の中で、もつとも警戒心を刺激される最強の王。噂では死んだとも、別世界に旅立ったとも言われている。

傍若無人の暴力性を秘めながら、誰かを護る為の戦いにしか本気にならない矛盾した存在。

あるいは、護る戦いのために特化した暴力装置なのだろうか。

(だが、案外、レオにはピッタリな目標なのかもな)

レオもまた、獣人めいた暴性を秘め、それと折り合いをつけて居るのかも知れない。

それに誰かを守るといふのは、レオの硬化魔法には相性が良い。

多少抜けて居る所もあるが、それは自分自身が容易く死なないという自負があるからだろう。

誰かを守るためならば、必死に頭を動かして体を鍛えるのかもそれなかった。

「エリカは『擦り足』使えるのか？」

「誰に物言ってるの？ 出来ない訳が無いじゃない」

俺の確認に、エリカは気分を害したように顔を背けた。

実にらしい行動であるが…。

俺にはある種の確信があった。

「体術じゃない。魔法の方だ。あればさっきの戦いで楽に勝てたと
思ってたんだが」

「…ほんつとーに油断成らないわね。使えるわよ。でも奥義に繋がる
技をおいそれと見せる訳ないじゃない」

なんだ、やっぱり使えたのか。

どうやらこちらを意識して、技に制限を掛けて居たようだ。

最後の最後まで放っておいたら嫌でも使ったろうが、俺が作戦を考
えたので温存して居たらしい。

「擦り足って柔道とかでやるアレじゃねえのか？」

「この場合は短事高速機動の事だ。出来るからと言って長距離・長時
間発動させる必要は無い。お前の逐次展開と同じだな」

一度の魔法で十移動できるとする。

得意な奴は十一・十二と延ばせるわけだが、別に十以上で使う必要
などないのだ。

むしろ、十を中心に九、十一を使い分け…。

場合によっては、一、ないしそれ以下の為だけに高速機動を発動さ
せる。

それが短事高速機動…『擦り足』である。

「ねえ達也君。あの女に魔法を作ってあげたの君だよ？ 互角に持
ち込んでたのに酷い目に会ったんだけど」

「あの女？ ああ、渡辺委員長に考案した『雷上動』のことか」

リアクティブ・アーマーみたいな技が欲しいと言う事で、簡単に指
示できる魔法を考案した。

好きな場所に稲妻を発生させる浮遊地雷のような雷撃魔法で、対
人・体ナノマシン用の範囲特化か対戦車用の威力特化を選べる。

最初は超弾道ドウジ斬りで良いだろうと思ったのだが、ネーミング

に文句が入ったので源氏に伝わる弓から、雷上動の名前を取った。
なんでも雷上動には専用の矢が二発あるかららしい。

「あの女ばっかりずるいよ…」

(そうか。仲が良い兄が婿養子に行くから義姉になるんだな。さて…
この場合はエリカが納得するかどうかか)

何を言ってもエリカが納得しないと意味は無い。

同時に嘘八百でも、エリカが納得すれば価値はあるだろう。

「魔法が一般的でなかった時代に、童子斬りの名前に隠して同時斬り
を使用した。だがドウジ斬りは一つじゃないって知っていたか？」
「へっ？」

エリカは思ってもみなかったらしく、素っ頓狂な声を上げた

それもそうだろう、何しろ、俺が今考えた。

「渡辺家に伝わるのは強大な相手の全身から斬りつけ、数人の雑魚を
蹴散らす為の多数同時斬りだ。他にも範囲型や持続型があっても良
いと思わないか？」

「なるほど一つの流派が、弟子の得意技で枝別れするのと同じね」

「例えば干渉力を上げて広範囲に振動を叩きつけるドウジ斬り、熱源
を操作して数秒ほど燃え続ける同時斬り。」

「そんな派性があっても良いのではと吹き込むと、エリカは自分の知
識でネタを事実として組み上げて行く。

繰り返すが重要なのは真実では無く、エリカが納得できるかだ。

「あの女は自分ちの伝承から組み上げて得意になってるけど、沢山あ
る内の一つって訳だ。…で私の向きのドウジ斬りはどんなの？」

「見た所、エリカ的能力は高速機動を最後まで実行できる超感覚だ。
SBを切り落とす物心同時斬りなんてどうだろう」

「常人が速度を上げすぎたら、途中で把握できなくなる事もあるが、
そんな事が無いのが強みだ。」

「ようするにエリカは超人じみた速度で動き回っても、自分が何をし
ているか把握できる。」

「標的の用意はできるけど…あんまり気は進まないな」

「いや、倒す的までは良い。エリカが自在にSBの位置を把握できる

ようになれば十分だ」

高速機動可能な超人が居るとして、真つ先に思い付くのは攻撃力の向上。

だがエリカの流派はそれを補う加重・慣性制御の魔法がある。

次に高速機動の別バリエーションの短事高速機動だが、これは既に持つて居るそうなので、最後は攻撃力の保持だ。

攻撃力を保持するには普通なら相手の装甲に対する衝撃系か、術式を解体する方法になる。

衝撃系は自分でアレンジして持つていると思うし、術式を解体するほどのサイオンを持つているとは限らない。

だが今回苦勞したSBに対して、存在を揺らぐ程度の威力を發揮するには十分だろう。

「仏神：神に会つては神を斬り、仏に会つては仏を斬る！ エリカちゃん凄いですね！ サイオンの色の見分け方くらいは私もお手伝いできますっ」

「その字じゃないと思うけど…。良いんじゃない？ 今回の敵に対して役立ちそうだし、覗き魔って嫌いなものよね」

納得してくれるのはありがたいが、どうにも美月はのめり込む癖があるな。

やはりブランシユの事を口に出したのは正解だったようだ。

適当な所で、司・甲がエガリテに居ることを吹きこんでおけばいい。「最後に思い付く範囲で森崎だが…」

「俺は自分の任務だと思つて居るが…。戦力強化になるなら覚えてやるよ」

森崎は二科生である俺に習うのは嫌なのか、あるいはプロ意識なのか少し躊躇った。

だが、今回出て来た敵のエージェントに対して力不足だったのは確かだ。

何しろこいつの術は普通のレベルに合わせたモノ。

即座に衝撃緩和で気絶魔法を無効化出来るような、化け物を相手にするのは考慮外なのだ。

「汎用型をサスペンドしながら使っていたな？ 常に二つ所持するならまずはパラレル・キャストだろう」

「生憎とそんなに器用じゃないぞ？ 一応はそいつの訓練を試してみたことはある」

俺の意見に対し、即座に首を振って来た。

まあ森崎のスタイルなら、真っ先に試して居るだろう。

「トールス・アンド・シルバーの顧客リストには居なかったと思うが……。コツは全部を利用しようと思わない事なんだ。可能な一部を最大限に利用する」

「全員記憶して居るのか？ 暇な事だな。データは後で回すことにする」

極論を言うと、一科生である森崎は何をしても強化に繋がる。

特殊な弾を作成する時だけとか、ソレを撃ち込んだ後で、汎用型に切り替え追尾するだけでも良い。

家の副業から元もと相当な訓練はこなしているから、実力そのものはそれほど伸びないかもしれない。

だから森崎は苛酷な訓練をしても延びないタイプの可能性は有るが、逆に色んなコツを覚えて状況に合わせて使いこなすなら話は別だ。

こればかりは実体験でやらないと判らないモノだし、低い能力を活かしてきた俺はそういうコツを無駄に覚えて居る。

俺の欠点をそのままに、一科生レベルにした上位互換だと言え少し思う所は有るが……。

今はそう言うことを言っている余裕は無いし、一科生にも協力者が居れば今後もやり易くは成るだろう。

「後は時間稼ぎだが、幹比古はダミー情報を作って、エリカに渡してくれ。ソレを警察や軍、何も無い場所に持つて行ってくれば暫くは問題無くなるだろう」

「了解」

「りよーかい」

こうして俺達は、一度帰宅する幹比古たちにSBのジャミングを頼

んでおいた。

もともと二人きりの俺と深雪や、たまに放浪して居るレオ、家に連絡して護衛を続ける森崎がこの屋敷に残ってリンをガードする形だ。

後は作戦を練る為に時間をくれと告げて、俺は自分に割り当てられた部屋の周囲に、誰も立ち入れない様にして置いた。

侵入を得意とする魔法の使い手ならば…、話は別なのだが。

お祭り前夜の夜

●足りないモノを埋める

部屋の割り当ては入口に一番近い部屋にレオ。

奥向きの安全な部屋にリンを置き、女性である深雪と護衛である森崎がその脇に面する。

俺は穴を埋めるためという理由で、裏手の部屋にしておいた。

その道中で深雪が声を掛けて来る。

「お兄様。僭越ながら、お願いしたいことが二つ」

「お前の言うことなら構わないよ。言っただけよ」

俺が困る我儘を深雪がしないという確信もあって、安請け合いを口にした。

「本日の様な戦闘に置いて、お役に立てる魔法のインストールを検討していただきたいのです」

「お前の持ち味は広範囲への影響だと思っただが……。手札は多い方が良いし考えてみようか」

どうやら深雪も夕方の戦闘に影響を受けたようで、俺は快く引き受けた。

妹の才能からすると、いちいち対人を考える必要はないのだが、早く個人に効く魔法はあっても良いだろう。

本当はCADをもう一つ持つことなのだが、急に用意できる物ではない。

用途が被っていたり、おいそれと使わない種別の魔法を削れば十分に余裕はあるだろう。

「ありがとうございます。二つ目ですが……夕方の戦闘で術式解体を使用すれば簡単に倒せたはず。そのことをお尋ねしたいと」

「お互いの戦い方を見たかったのと、エリカじゃないが見られている状態で手札を切る気が無かっただけさ」

バックアップ要員が居ると知っている状態で使う気にはなれない。イザとなれば多少の強引さは仕方無いにしても、余裕があるのは

判っていたし、まさに様子見と言う訳だ。

「それを聞いて納得いたしました。私も手控えておいて良かったのですね。おやすみなさいませ」

「ああ。お前の切り札は出来るだけ見せたくないし、見せるとしても『表』だけで済ませておきたいからね。オヤスミ』

深雪は軽く頭を下げると、少しだけ名残惜しそうに部屋に入って行った。

それを見届けてから俺自身も割り当てられた部屋に向かう。

そしてメールの返事があるか、一定の時間が経過するまでは簡単な作業をやっておくことにした。

（深雪のCADを確認して、見合った魔法を入れておくか。森崎のデータ確認はその後だな）

データを見るだけなら、深雪のと森崎のを並行して出来なくはない。

だが妹と比べられるはずもなく、万が一にもミスをしたくないし、連絡待ちとあって優先度を付けておく。

（深雪の能力ならば時間さえあれば何でも出来る。時間稼ぎにも使える魔法の方が望ましいな）

平面制圧能力に長けた妹の事、想定される場面というのはそう多くない。

一つ目は、夕方の戦闘で起きた乱戦のような状況で、敵だけをピンポイントで捉える場合。

二つ目は、不意打ちなど出会い頭に格闘攻撃を受ける（魔法は防げる）。

三つ目は、リンに限らず誰かが人質に成った時など、高速で発動する必要がある時だ。

（一の状況には『使える』程度で構うまい。注視すべきは二、あるいは深雪自身が三に追い込まれた時だろう）

極論を言えば、一の状況では他のメンバーを盾にしてゆっくり凍らせれば良い。

確か、美月がタンクという壁役がどうのと言っていたような気がするが、誰かを使って確実に行けばいいだけだ。

魔法で深雪に勝るのは至難。

ゆえに二と三で絞ったのはイン・レンジでの脅威。

(となれば威力は不要。咄嗟に発動可能で時間を稼ぎ易いモノ)

不意打ちされた時に、一撃で気絶することだけは阻止可能で…。

人質にされたとしても、救出に入るコンマ数秒を稼げればいい。

この魔法を併用する事で、大きな魔法を使う際に時間稼ぎにも繋がれば理想的だろう。

(候補は運動エネルギーを停止…いや減衰する魔法だな)

効果は僅かであっても、ループキャストで繰り返し返せば問題無いか？

重要なのは咄嗟に、あるいは精密にしようできるかだ。

完全に止める程の効果は不要で、確実性を重視する。

これをイザと言う時の防御と、時間が必要な攻撃補助に利用すればいい。

「実際に効果があるかは試してみたらして…。なんだ森崎の方も同じイメージで良いな」

深雪のCADデータを見てからと思っていたが、アツサリと考え付いてしまったのでやっておくことにする。

思わず考えを口に出してしまったが、そのくらい拍子抜けするほど簡単に思い付いた。

とはいえ、奴がパラレル・キャストする為の魔法では無く、それまでの繋ぎだから深雪と同じ考えでまとめてしまっただけだろうかというレベルなのだが…。

深雪に対して過保護で入念に考えるのに対し、森崎の方はオマケで良いかと思切つて居るからこそアツサリと決断できただけだろう。

(深雪が減衰ならば、森崎の方は加重系で効果押しだな)

あの加速系統の気絶魔法は、良くできた魔法だ。

前後に揺さぶるだけなので工程は短く、前後の移動を相殺することで事象の改変が小さい。

要はあの気絶魔法で気絶しない相手専用で考えれば良いのだ。

直ぐに思い付けたのは、旧アメリカ軍が過去にやらかした銃の問題がイメージに近く、対策手段を考えてあったのも大きいだろう。

可能な限り軽量化した後で、データカードにインストールガイドを付ければ終わり。

メールの返事もまだなこともあり、せつかなので持つて行くことにする。

●よばい？

俺は適当に方したデータカードを手に、森崎が割り当てられている部屋をノックした。

「起きてるか？」

「…なんのようだ？ 仮眠とはいえ大事は取りたい。手早くしてくれ」

不機嫌そうな顔をしているが、眠って居たわけではなさそうだ。

布団を半分に折りたたみ、いつでも起きれるよう、寝入らないように布団に入っていただけの様だ。

他に用件もないことだし、俺はデータカードを入口の棚に置いて簡単に済ませることにした。

「つなぎ用に不可視の弾丸を軽量化しておいた。ガイドに従って放りこんでおいてくれ」

「はあ!? インジブル・ブリット 不可視の弾丸だ……と」

森崎は大声をあげそうになり、慌てて口元を押さえながら喋った。

「加重系統のアレか？ 良くそんな物を知って、いや軽量化なんてできたな…」

「軽量化に関しては…もともとダミー入りで公表されているんだ。研究者が良くやる手だよ」

何故、俺がデータを持つて居たかの方はもっと簡単な理由がある。以前に三校辺りにカーディナル・ジョージが進学すれば、バランスが変わって面白いと予想を立てて居た。

そして本当に進学したと言う情報を受けて、九校戦に向けて手元で研究していたのだ。

「軽量化しただけのパターンと、使い方を絞ったモノも一応は用意してある。旧アメリカがやった銃の失敗を知ってるか？」

「馬鹿にするな。ストーンピング・パワーの重要性だろ？ そのくらい

は知ってるさ」

旧アメリカ軍は、銃に関して過去に二度ほど失敗して居る。単純に言うと、性能に任せて撃つたは良いが、結果として無力されて反撃を被ったということだ。

我慢して斧で頭を叩き割られ槍で突き刺され、あるいは旧式なはずの銃に撃ち負ける。

理由は単純で、銃自体の性能は向上しても、相手の態勢が全く崩れないのが原因だった。

このことから旧アメリカでは、無骨な大型拳銃が重視され、のけぞらせて反撃を防ぐと言う方法が取られた。

…というのが拳銃史に華々しく残る大失敗とその後の教訓である。

「要するにお前の加速魔法で気絶させられない相手専用の、動きを止めるだけの魔法だ。撃つたらリンさんを連れて逃げろ」

「言われるまでも無い。…だが礼は言っておく」

森崎は最後まで憎まれ口を叩いていたが、言うほどに気に入らない訳ではないのだろう。

布団を被ってはいるようだが、棚の方に興味があるのはありありと判る。

「では俺も寝る。…間違っても夜這に来るなよ」

「当たり前だ気色悪い」

そんな事を言いながら俺達は別れたが…。

こんな馬鹿なことを言ったのは冗談からでは無い。

もちろん森崎にそのケがあるという意味ではなく、俺の『目』に反応があったからだ。

(メールで待ち合わせをせずに直接来るとはな)

薄ぼんやりとした反応が、屋敷の裏手を包む。

魔法を使えば詳細に理解できる俺の目が、知り合いが来ている程度にしか区別してくれない。

だが幸いにして、俺にはこの反応の記憶があった。

他ならぬ、俺自身が引き出した従姉妹の隠行用魔法である。

察するに、誰かが俺の部屋の近くに来たとしても、俺が居る気配に

偽装しようとしたのだろう。

そう思いながら、俺は自分の部屋にノックもせずに入り込むのだが…。

「…ヤミ（文弥）なんで寢床に入って居るんだ？」

「えっと。誰かに見つかつた時に、達也兄さまが寝て居ると勘違いしてもらうためです」

従兄弟の方が寢床に入り込んで居たので、俺は呆れながらコールサインの方で呼んだ。

遊びに来た年下の従兄弟と、一緒に眠ると言うのは無いでもない。だが潜入工作に使う衣装は、少女に偽装して居るので誤解を受けることこの上あるまい。

ましてここは俺の家では無く、七宝の家なのだ。

…そして、七宝の家という点に思い至って一つの回答に辿りついた。

「ヨル（亜夜子）にそう言え、やれと言われたのか？」

「うん…。表では七宝家の御曹司に負けてるから、少しでもインパクトを強くしろって」

何しろ以前までは兄さんとは言っていたが、兄さまなど付けて居なかつた。

だからといって極端すぎる行動ではないかと思う。

夜も更け始め、面倒だったので深雪に使った対応を使い回す事にした。

「そんな事をしなくても、お前は俺の大切な従兄弟だよ」

「は…い」

深雪にいつもそうしているように頬を撫でると、何故かミヤ（文弥）は顔を赤らめる。

適当に対応したからといって、どこかで対応を間違えただろうか？

それとも亜夜子が余計な事を吹きこんだのか？

「ヨルが言って居ただけけど、昔は一族の若手を年上の人が可愛がって一人前にするって聞いたのですけど…」

「ここは七宝の家だしそんな事は考えて居ないさ…いや、そもそも…」

やはり対応を間違えて居たと言うよりは、やはり亜夜子が余計な事を吹きこんだらしい。

だが積極的に否定するのではなく、傷つけない様に言葉を選んだことが、逆の意味に取られてしまったようだ。

「現代ではそんな風習は無いぞ。落ち付け」

「ぼ、僕は達也兄さまが望むなら…。ううん、この家でじゃなくて、そうじゃなくて、ええとく」

恥らしいは最高の化粧と言う言葉があるそうだが、文弥はとても少女らしかった。

そういえば、最高の女性の演技が出来るのは、女性では無く学習した男性なのだと言ったのが誰かが言ったそうだ。

とはいえ俺に男の娘を愛する趣味は無いので、話を始めることにする。

「ヤミなんとかしてくれ。これじゃあ詳しい話もできない」

「仕方ありませんわね、ヤミちゃんは達也兄さんが大好きで大好きで…」

カーテンの影からくすくすと笑いながら、従姉妹が出て来た。

こちらは特に男装しているなどとはなく、逆にフリルっぽいのが女らしい格好だ。

あえて言うならば、眼帯が少し違和感がある程度。とはいえ変装だと言われればそんなモノだろうか。

「…判りました、せっかく飛んで来たのですものね。ここで帰れと言われても困りますから」

「そうしてくれると助かる。面倒は省きたいのでお前達がこの周辺に来ていた理由を教えてください」

四葉家に所属する分家の中で、裏を担当する黒羽家の双子。

彼女らの腕を持つてすれば、俺が事件に巻き込まれたという情報だけで、七宝家のセーフハウスに居るくらいは付きとめられるだろう。

ゆえに重要なのは、忙しいはずの彼女たちが此処に居る理由の方だ。

「裏社会の大立者がこちらで見られたと言うこともあつて様子を見る

来たんです。：残念ながらまかれてしまいました」

「お前達をまけるといいうなら相当の腕だな。だが丁度良い」

亜夜子は肩をすくめて無駄足だったと残念そうだが、この場合は十分な情報だった。

欠けて居たピースが揃い、パズルの概要が見えて来る。

「何か御存じなのですか？ それとも仕事ですか？」

「その両方だな。その大立者が何者かは知らんが、何をしたかは知っている」

文弥の問いに応えて俺は短く説明した。

少し前から起きているブランシュの情報は投げてあるが、改めて情報収集を要請するには丁度良い機会だからだ。

「疲弊した傘下組織を統合しに来たらしい。この家に逃げ出してきた関係者が居るよ」

「ということとは、もともとの命令系統は別だったと言うことですか？」
流石にアンダーグラウンドに通じて居ると話が早い。

裏の組織同士で信頼など出来るはずもなく、人質を出していたのだと、亜夜子は大して驚きもせずに事態を察して見せた。

「まずは…そうだなアンダーグラウンドでもMIAが起きた」

とはいえ、いちいち驚かれるのも面倒なので予想される最初の事態から説明する。

俺には予想でしかないが、二人にはあり得るべきことなのだろう。
驚きもせずに頷いていた。

「以前に話した技術者を餌さ場にしてる奴が、闇組織も餌さ場にして
いるのか、別の奴かは判らん。だが事実として無頭竜が食われた」

「ノーヘッド・ドラゴンほどの組織が壊滅するなら…」

「確かに連中の仕業みたいですね」

此処まで来ると二人にも事態が呑み込めて来たらしい。

そうなれば、組み合わせのもう片方がブランシュだと頭の中で繋げ
ているところか？

だとするならば、もう全てに話しても面倒は無いだろう。

「無頭竜が直接壊滅させられたか、アンダーグラウンドの抗争で壊滅

したかはこの際は関係ない」

「同じスポンサーのブランシユ日本支部が統合する事で、テロの可能性が高まった」

「お前達にやって欲しいのは、一連の事件が起きた後に奪えるモノを全て奪うことだ」

一気に告げはしたが、二人に戸惑いは無い。

やるべきことを見付けて、嬉々として事態を受け入れる。

こう言つてはなんだが、敵対者に容赦する理由が見付けられない。

第三者の組織が居て手を出し難いなど、緩衝地帯が必要ではない以上は、全てを叩き潰し洗いざらい持つて行くのが正しい裏稼業というものだろう。

「上手処理できれば、うちも少し息を吹き返せますね」

「そう言うことだな」

四葉の中でも裏稼業を担当する黒羽家は、叔父である黒羽・貢の負傷引退もあつて勢力の減少が著しい。

分家の当主代行である文弥としては、ここで駒となる使い捨ての手下や特殊技術でも回収できれば恩の字だろう。

そうすれば代行という仮ポジションでは無くなるし、四葉の当主候補に帰り咲ける。

「この屋敷に匿われている方の護送は必要ですか？」

「そこまでは頼まれていないな」

冷たい言い方になるが、この時点でリンを助ける意味は全くない。

囷として有用であるし、深雪が狙われる可能性が減るといふ意味では大助かりだ。

「夢見るお姫様ではないと言う事ですわね。楽で良いですけれど」

「…良くも悪くも馬鹿じゃなくて助かる。友人で居られる間は友人で居るつもりだ」

それと同時に、一方的に頼られた場合は別の選択肢が発生する。

利用され利用する間柄であれば、対等な付き合いを。

一方的な要請であれば、こちらも一方的に使い潰すか、あるいは手元に置いて組織ごと吸収する為に使う羽目になる。

情報を全て開示しないのは面倒だが、お互いにメリットを見出すなら丁度良い関係と言える。

個人の付き合いでは全てを話すのはプラスだが、組織同士においてはマイナスになる事をちゃんと理解して居るようだった。

中々に悪くない性格の持ち主であるように思われたし、一方的では無く、対等な関係で居たいものだ。

そう言う意味に置いて、この屋敷で話した仲間割れ説の楽観論で済ませるよりも、こちらで確実に叩き潰すプランを用意することこそが最大の好意であろう。

「さしあたっては、今日捕まえた連中を魔装大隊と連携して確実に確保。あとはブランシユのアジト搜索を適当に頼む」

「凄腕のエージェントでしたっけ？　どんな訓練方法なのか愉しみです」

「アジトの方の期限は、『テロの事前作業』までで構いませんわね？　それでしたら構いません」

捕まえた連中は軍に頼んであることを暗に告げると、文弥は頷いて追い込む為のプランを考え始めた。

同時に亜夜子の方は、ブランシユを泳がせて利用する算段を思案しているようだ。

「おおよそはこんなものだな。今夜はもう遅いし二人は俺の家に行ってお休み」

そう言って二人を下がらせて俺の方も休むことにした。

お祭り騒ぎの開宴

●一人多い登校者

疲れて気だるさが残りながらも、充実感が上回る目覚め。

俺は昨日の出来事を思い出しながら、確かめるように言葉を紡ぐ。

「自在師の情報だけでなく、ブランシュに吸収された勢力の情報や『紅世の徒』の情報か…」

登校数日の段階で、事態が大きく進展して居た。

やはりシユミーレートと違って相手が…それも複数の勢力があるというのが大きな原因か？

「思ったよりも進展が早いな。都合良く俺が望むペースでとはいかんか」

偶然と見るよりは、他者の介入が合って突き進んだ。

あるいはこちらの対応を上手く利用されていると考えた方が無難だろう。

例えば、刻印魔法の使い手への紹介を要求した時。会長は快諾したが既に相談している相手とまでは言って居なかったように。

例えば、リンは何者かの関与を懸念して居ても、それが『紅世の徒』やブランシュのスポンサーだとは知らなかったように。

了承する事は前提であっても、全てを語っては居なかった。無理にこの流れを断つよりは、用意された流れに乗りつつ逆に利用

するくらいの方が健康にも良いだろう。

駒としてこちらを良い様に扱いさえしなければ…、お互い様の関係で有れば問題は無い。

着替えながらそんな事を思いつつ、食堂に行って出発や食事の準備をすることにした。

「おはようございます、お兄様。お食事でしたら私が」

「深雪に任せておけば安心できるか。じゃあ、俺はエリカや幹比古と合流の連絡を付けておくことにしよう」

俺はそこで食事をつ深雪に任せて、エリカや幹比古にメールを打つことにする。

二人とも朝練に励むタイプと思われるので、この時間ならばもう迷惑でもあるまい。

少し思案をした後でエリカには小道具の注文を、幹比古には美月や呪具のことを確認しておく。

そうしている間に遅くまで見張っていたレオや、リンに浮き沿う形で森崎もやって来た。

「昨日は達也が来るって言ってた、ここの警備以外は何も無かったぜ」「嗅ぎつけられて居なければその筈だからな。…リンさんに少しお願いがあります」

まあ当然だろう。

亜夜子たちの気配を感じたとしても先に偽りの説明はしたので、レオに区別は付かないのは自明の理。

「…何？ 文句を言える立場じゃないのは判ってるけど、嫌な予感がするのだけれど」

同様に共闘関係で色々要請できる筈の俺が、ワザワザお願いなどと下手に出る以上はリンに取って文句が出ることしかない。

「一高で風紀委員は例外的にCADを所持出来るのですが、俺は誘われて居ますし…森崎もおそらくはそうでしょう」

「確かにそうだが、お前もか…」

「言いたいことが判ったわ。高校生の真似ごとをしろってことね」

説明と説得を同時にする為、俺はCADを自分達だけが所持出来る可能性が高いことを告げた。

戦力的に他者より優位に立っており、風紀という見回る立場の二人が居るのだ。

ここで学校に入り込まない手はあるまい。

「加えてですが、俺と深雪は一高の七草会長とも縁があります。ブランシユの情報提供者と説明すれば無碍には扱わないでしょう」

「先に逃げ道を塞ぐなんて酷い男ね。これで断ったら私が馬鹿みたいじゃない」

やはり頭が切れると話が早くて助かる。

戦力的にも、保護する場所の候補としても学校の方が多くの選択肢

を取れるのだ。

大学生か高校生が微妙な年齢に見えるし、年齢にこだわりがなければ、俺の提案に乗っても損が生じない。

学校での行動も会長に頼んで、IDカードの問題さえクリアすれば自由に行動できる。

あえて言うなら入りこんだブランチの連中が襲う可能性だが…。それはこの屋敷に留まっても、追跡者が見付けたらと考えれば同じなのだ。

ならばむしろ、似たような背恰好の学生達に紛れた方が、誤魔化せる可能性は高い。

「確認するが、このまま出ずに片付ける選択肢は無いんだな？」

「何時までと区切りが付けられないからな。王族の継承問題みたいな場合は別だが」

無頭竜の方にそういう風習があったとしても、吸収するブランチには通じないだろう。

「なら私に否定すべき言葉はないわよ。サイズの合う服くらいは調達してもらわないと困るけど」

「それならばエリカに頼んで居ます。合流次第に、ダミー用の呪具込みで着替えが出来ると思いますよ」

渋い顔をするものの、リンはそれ以上は言っつてこなかった。

俺達がこのまま彼女に付き添えない以上は、これより他の選択肢は無いのだ。

そうすることで敵の追及をかわし、手出しがあれば昨日のように叩き潰す事で焦りを待つしかないと判っているのだろう。

こちらも亜夜子たちにアジトの場所を探してくれと頼んではいるが、具体的にどんなテロを企んで居るか判るまでは四葉家も動かす気はあるまい。

告げる必要もなく、向こうが信じる可能性も低いことなので臭わせもせずにおいた。

こうして俺達は、新しいメンバーを加えて学校へと向かうことにした。

●人と人との連なり

学校への途中、幹比古たちと合流。

SBを見れる美月と一番の戦力である深雪が連れ添って、リンが着替えている間に色々申し合わせておく。

森崎が全体を見渡せる場所を抑えているので、人間の目で見付けられるという事もあるまい。

「ひとまずブランチュに繋がる情報と引き換えに、会長に話を通して学校での居場所を確保してもらおう」

「セーフハウスは七草家の方が多いいし、そちらも借りられれば万全ね。あーあー。うちのコネが使えたらなく」

「お前んところは警察関連だろ。無茶言うなよ」

エリカもレオもここまでの流れに疑問はない様だ。

俺は領いて、本命である幹比古の方に視線を移した。

「誤魔化す為の呪具は用意してあるよ。置延術式みたいなものだから、取り置きが出来るモノはそう造れなかつたけど」

「それで構わない。会長が領くか次第だが、不自然でない程度に吉田教諭へ連絡が取りたい」

幹比古が造った呪具の内、魔法的な効果がある物は流石に数が作れない。

それにいつまで続くか判らない段階では、臭いや外見で誤魔化すことで負担を軽くするべきだろう。

「一美ちゃんに？ ああ、サボリの口裏合わせね」

「怪我とかしてるはずねえもんな。精神的にまいったって事にしておけば、魔法が使えなくても問題無いか」

「僕のほうは別に構わないけど…。ここで話すってことは、面倒なことでもあるの？」

エリカとレオは納得顔だが、やはり幹比古は誤魔化せないか。

単なる証明書造りならば、昨日の時点や今朝のメールで済むからだ。

その方が手間が無いのに、今ここでワザワザという事に意味を見出したのだろう。

…なぜならば、吉田・一美は『紅世の徒』と戦っていたはずの自在師だからだ。

「話す前に尋ねる」

俺は予め、予防線を張っておくことにした。

「あくまで仮定の話、それも遠くの危険性だ。それでも聞きたいか？」
陽性の強いこの連中ならば問題無いと思うが、聞かない方が良い話題もあるからだ。

「ここまで来ておいて今更ナイショは無しだぜ。水臭せえじゃないか」

「そーよ。一蓮托生と言うか、聞かなかったら後で聞きだすから」

「後悔するからじゃなくて、やっぱり聞くんだね。…僕も聞くとしようかな」

聞くまでも無いことだと言わんばかりに二人は、残る一人も躊躇しながら頷く。

これは無意味な問答かもしれないが、後に成って大きな意味が出て来る。

関わる覚悟の無い者に話す必要は無いし、聞いた以上は自分の意思の範疇では協力してくれるだろう。

「まず。幹比古が視認させてくれたSBは、あの手の中で下位現象だ」
「基本的には追うだけ、見たことを簡単に伝えるくらいかな？ 少し

上になると魔法を遠くへ届けられない事も無い」

「なんだか凄いのか大したことないのか判らねえなあ」

俺が口火を切ると、幹比古が専門家らしく説明を受け継いだ。

「上位に成ると天候すら操りかねないけど…。達也が言いたいのは、そう言うことじゃないんでしょ？」

「ああ。もつと上の連中だと人間は食物連鎖の頂点には居られない」

流石に専門家には察しが付いてしまうか。

そもそも、自在師である吉田教諭に繋ぎを求めた段階で、怪しまれていたのかもしれない。

「それって、俺ら人間が食われちゃうってことか？ ゲー聞くんじゃなかったぜ」

「そうかな？ あたしは逆に聞いて良かったと思うけどね。何も知らずにただ食われるのは許せない」

最初は頭を抱えて居たレオだったが、エリカが不敵な笑顔を浮かべると吊られるようにニヤリと笑った。

もともと恐れて居なかつたのか、あるいは旅の途中でそういう噂を聞いていたのかもしれない。

「昨日、達也くんが物心ドウジ斬りを勧めたのはそういう理由もあったわけ？」

「まあな。リンの父親たちをやつたのがそいつらだとすると納得がいく。今は遠くの出来事と言うのは、そう言う理由だ」

「じゃあ、一美姉さんへの繋ぎというよりは、リンさんを守るってことだね」

エリカと幹比古はそれぞれにするべき事を理解したようだ。

剣の才能と超感覚があるエリカは、その能力を紅世の徒にも通じる様にする事。

幹比古は吉田教諭を通じてフレイムヘイズを動かす、対策法や専用の術があれば尋ねるということである。

「あとは自在師の中でも精鋭、最も武闘派と呼ばれるフレイムヘイズを動かせば理想的だな。少なくともリンが食われる可能性は無くなる」

「そういうえば今は活動が活発じゃないって話だよな。まあ可能な範囲で伝えて見るよ」

最も重要なのは、アンダーグラウンドを餌さ場にする紅世の徒を牽制する事だ。

紅世の徒とて愚かではあるまい。

無関係な輩であれば、その場を退散して雲隠れするだろう。

逆に、技術者を餌さ場にする奴と同じ個体、あるいは協力関係にある存在であればこちらに拠点を移すはず。

後は活動が大きくなって存在が露呈した所を、倒すなり追い込んで袋叩きにしてしまえばいい。

…この手で倒せればさぞ気分が良いだろうが、そんな感傷は余分で

余計。

今は深雪を守りつつ、確実に倒す事を目標とすべきだと自分を納得させた。

やがて一高の制服に着替え終ったリンが、美月や深雪と髪型を揃えてやって来た。

それぞれに髪の長さや質は違うが、ぱつと見だけなら姉妹に見える事も無い。

同じ人物に見せるのは無理でも、こんな風に知らない人間を誤魔化すには十分なのだ。

「何かあつた？」

「いえ。…何も」

リンの質問に対し、森崎がこちらをチラリと見てから否定した。

(読唇術か。迂闊だったな)

良く考えれば護衛業で名前を馳せる森崎が読唇術を使えるのは、そうおかしくないこともでない。

(だが、これは嬉しい誤算だな)

『表』の用事で森崎が使えると判ったし、こちらの密談を好意的に解釈しているようだ。

紅世の徒に関して理解はしておらずとも、リンが食われることがないように配慮したと受け止めたのだろう。

こうして俺達は意図せず、戦える者全員で紅世の徒の情報を共有したのだった。

●顔を合わせた者と、手を取った者

少し登校した所でカフェで暇を潰すメンバーと、生徒会室に向かうメンバーに別れた。

俺は深雪の他に森崎とリンを連れ立って、生徒会室に向かう。

「会長。少し構いませんか？」

「ええ。…森崎くんが居ると言う事は、昨日の暴漢騒ぎから護り通した依頼主さんかしら？」

「は、はい！ 騒ぎを納められず申し訳ありません」

会長は視線を森崎と言うよりはリンに移し、生徒会室のドアを大きく

く開いた。

暗に入って来いと言うのを理解しつつも、気真面目に頭を下げる辺りが森崎の森崎らしいところだろうか。

リンはその様子が気に入らないのか、それとも会長が気に入らないのか黙ったままだ。

「こちらはリンさんとおっしゃって、ブランシユがらみの関係者です」「あら…意外な展開ね。でも助かるわ。お話が聞きたいので入っていただきましようか」

会長は手で口元を隠しながら驚いた様子を見せるが、目はちつとも驚いては居ない。

考えるまでもなく、昨日起きたことを七草家の関係者に調べさせたのだろう。

事件の真相はともかく、何が起きたかは知って居たに違いあるまい。

「第一高校生徒会長の七草・真由美です。お時間を取らせて申し訳ありませんが、中で少し構いませんか？」

「リン・リチャードソンです。シユン…森崎君にはお世話に成っております」

二人の視線がぶつかった後、場所を生徒会室に移して話に入る。

最初は牽制し合って話が進まないのではないかと思っただが、意外なほどにスムーズに展開して行った。

昨日起きたこと話し合いの中で整理したことを踏まえて、アンダーグラウンドにある組織がブランシユに吸収された所まで一気に説明が終わる。

(これは…。手札を切る気だな)

駆け引きというものは良し悪しだ。

待遇を良くする事にも繋がるが、悪化する事にも繋がる。

もちろん俺達がある程度知っていると云う事もあるだろうが…。

事態を理解させる為にここまでの情報はスムーズに出した以上、隠している情報を使う事で保護させる自身が在るのだろう。

「もしかして、リンさんは何が起きるのか知っていらつしやるのかし

ら」

「その通りです。テロとかいう、何処か遠くの地で良く見る日常などではありません」

やはりというか、リンは情報の全てでは無いにしろ此処で話すつもりだったようだ。

ならば此処は、話し易いように援護射撃を入れた方が良いでしょう。」「会長。ここはリンさんを保護する代わりに、御協力を願ってはいかがでしょうか？」

「そうね。一高の生徒会長として…。いいえ、十師族の一員である七草家の者として、当局に知らせずに安全を確保させていただきます」超法規的に扱い、警察に知られたら捕まってしまうような情報でも構わない。

そう告げる事で取引し、安全に国外への逃亡ないし日本での生活を約束する。

「その言葉、信じます。そうですね、まずは何から話したもののやら…」無論、リンの方も全てを信じたわけではないだろう。

言質を取ったと言っても、あくまで言葉での約束。

紙面に残る契約であろうが、必要ならば破る事もあるのが政治だ。そう言う意味に置いて十師族は貴族的に信用が置けない面もある。だから、リンが話したのは乗って来ると確信したからだ。

結論から言うと、第一高校という母校に愛着を見せている時点で、会長は情報提供者を裏切らないに違いあるまい。

そう言う種の隠し玉であった。

「少年少女魔法師交流会を御存じですか？ アレを馬鹿馬鹿しく拡大解釈した計画の様です」

「えっ！」

思わず本気で驚く会長だが、それも仕方があるまい。

少年少女魔法師交流会は魔法師を浚ったもので、十師族の子女に取って語り継がれるほどの悪夢だからだ。

当事者であった四葉家と七草家にとっては、今なお残る瑕と言って差し支えあるまい。

「今時、DNAを目的とした誘拐ですか？ そんな手間だけ掛る馬鹿な事を…」

「拡大解釈と申し上げました。そうですね、とある組織には人を加工する技術があるそうですよ？」

信じられないと言った表情の会長に、リンが駄目押しの一撃を放つて来る。

「もしや昨日のエージェント達はその産物ですか？ なるほど手を焼かされるわけだ」

「なに人ごとみたいに言ってるんだよ！ 俺達が、一高の生徒が狙われてるってことだぞ！」

言われてみれば、昨日の戦闘で疑問に思わなかった訳でもない。

妙に早い反応、妙に高いタフネス。

心理誘導と薬物による人間兵器か…。道具扱いされる俺の成れの果てと思えば笑う事も出来なかった。

まさしく何処か遠いテロなんてモノではなく、足元に抱えた爆弾だったわけである。

森崎とリンを残し、俺と会長は隣室へ移る。

そこで簡単な協議をする為だが、ここで打てる手が多い訳でもない。

「達也君。やっぱり生徒会のみんなにくらいは話さない？ それぞれに凄い特技だってあるのよ」

「それは会長に一任します。俺にはその特技が判りませんし、そもそも混乱の中で動ける性格なのかもしれません」

俺の脳裏には、特に中条書記の顔があった。

冷静な市原会計や、戦闘力のある服部副会長や渡辺委員長はともかく中条書記が慌てずに行動出来るとも思えない。

「それは追々説明して行くわ。達也君は信じないでしょうけど、あーちゃんが一番混乱の中で心強いだよ」

授業前から付かれた様子の会長を宥めつつ、その場はリンへIDカードや隠れ部屋などを含む幾つかの約束をしてお開きになった。

吹き抜ける風

●風紀委員のお仕事

生徒会室を後にして、リンを隠し部屋のな教室へ連れて行った。来年度以降の授業用で、今は使われる予定が無いと言う教室らしい。

必要なツールの全てでは無いが、魔工技師用の道具がある部屋を興味深く眺めながら、次の目的地に向かう。

「お兄様。私は友達と約束があるのでこれで」

「ああ、十分に学園生活を送ると良い。俺達は風紀委員会に顔を出して行くから」

俺と森崎は呼び出されている風紀委員会へ顔を出すことにした。

とはいえ早朝ともあって、もともと多くない委員が勢揃いなどと言う事は無い。

雑然と備品のCADや書類が並ぶテーブルと、渡辺委員長が一人だけだ。

「早いじゃないか。それも二人とも連れ立ってとは興味深い」

「会長の所に顔を出して居ましたからね。騒ぎに関しては御存じだったのでは？」

町には魔法を検知するシステムがあり、どんな魔法だったのかはともかく使用を調べることが出来る。

それでなくとも暴漢が一高生を含めて襲ったということが騒ぎに成らない訳はないし、風紀委員長である彼女が知らされないはずもないだろう。

案の定、頷きながら本日の用件を切り出してきた。

「学内に置いてだが、その騒ぎに関して自衛力を求められる立場だからな」

「まあ普通の生徒には無縁の筈ですが、そうと言えないのが痛し痒しですね」

森崎はリンのことが気に成って仕方ないようなので、俺が一通りの話題を片付けることにした。

記録用のレコーダーや腕章、パトロールなどの区画をザッと聞いておく。

「ともあれ学内ではCADを所持出来ない建前だが、部活の新人獲得期間は多めにみられる。気を付けておくように」

「了解しました。ところで、ここの備品や書類は片つけて構いませんか?」

部屋を見渡しながら確認すると、渡辺委員長は露骨に嫌そうな顔をする。

「どうやら片付けられない人らしく、風紀の仕事が肉体労働メインだからか放置して来たのだろう。」

「とはいえデスクワークを俺がする必要は無い。」

「だがここで自主的に申し出れば、何がどこにあるのか、籠城する場合などに備えて戦力がどの程度あるのかなどを把握する事が出来る。」

「パッと見ただけでも、マニア垂涎の物から特化型の中でもキワモノと呼ばれたものまで備品は豊富だった。」

「おそらくは中条書記のようなマニアが、かつて委員会で備品担当だったのだろう。」

「俺はこれを二つ借りるとして…。森崎、これを持っておけ」

「人の都合を考えずに勝手なことを…。ってコレは『毒針』じゃないか」

「自分のCADを使う予定だったのだろうが、森崎は俺が渡した特殊なCADを見て考えを変えたようだ。」

「俺が選んだモノが非接触式スイッチの中でも感度に優れた物であるならば、森崎に渡したモノは指輪型の超特化CADだ。」

「たった一組みしか魔法が入らない代わりに、指輪として携帯できるという優れ物である。」

「貴族達が暗殺の為に使用した指輪から、『毒針』と呼ばれているキワモノであった。」

「奇襲前提で大した魔法は入らんが、パラレル・キャストの練習用くらいにはなる。使い方は判るか?」

「馬鹿にするな。ドロウレスの練習用に使ってるのと似てるからな」

ドロウレスというのは特化型CADの用法の一つで、銃の形をしたCADを相手に向けずに照準補正機能を使用する為のワザだったはずだ。

流石はクイツクドロウの森崎家というところだが…。

一見、完全思考型CADの問題が全てクリアされた場合には消えて行く技術であるが、このワザには独特の利点が存在した。

肉体的な訓練が心理動作を上回る腕前を前提にして、脳内のスキーマー発動すら無視して魔法を即座に使用出来るのだ。

要するに考えるよりも先に、魔法を一つだけ使えろと言う訳である。

そんな感じでテーブルをひっくり返していると、暫く後に何人かが顔を出しに来た。

「おや？ さっそく一年坊主を使ってお片付けの練習ですかい姐さん？」

「その名前で呼ぶなど言ってるだろう鋼太郎。それともその頭は飾りか！」

やってきたのは三年の二人組だ。

一人は快活で体育会系、同じ年である委員長の事を姐さんと呼ぶ辺りで性格の方は確認するまでもない。

もう一人は発言はせずにこちらを観察し、俺の胸元を見るが迂闊に態度は変えなかった。

「教師枠の司波と、生徒会枠の森崎だ。どっちもCADの扱い方は凄いで」

「紋無しの方が教師枠ですかい？ てっきり反対だと思ったんですがねえ」

「辰巳、その表現は問題だぞ。それで：腕の方は渡辺が自分で試したのか？」

言葉使いこそ悪いが、辰巳と呼ばれた先輩には委員長への敬意が見える。

逆にもう一人は言葉こそ丁寧だが、自分が上と言う不遜さが見て取れた。

見たところ文系の研究者肌なのに、腕力の必要な風紀委員と言う時点で増長するのも判らなくは無い。

「関本でも危いかもな。何しろ司波の方は服部に完勝するくらいだ」

「あの服部にか？ 入学以来、同学年には一度も負けたことが無いと言おう…」

「お前も動揺すんなよ。まあ、俺も驚いてるんだがな…。しかしあいつに勝てるなら心強い限りだ」

ニヤリとした笑いが委員長と辰巳先輩から零れる。

「どうやら関本という男は、才能があつても真から強いタイプでは無さそうだ。」

「多芸で器用貧乏、それを本人の努力と弁舌で押しに行く感じだろうか？」

「とはいえ話題の的になるには気持ち良くない。」

次の話題として、今の内に尋ねて相手の事を聞くとしたらその片割れが飛び込んで来た。

「摩利さんすみませーん！ 遅れちゃいました。シルバーくんもう来てますか？」

「遅いぞ花音。とつくに作業中だ」

「人の作業領域を勝手に割り当てないでください。整理するのは俺の趣味みたいなもんですけどね」

委員長と千代田先輩は同時に嫌な顔を浮かべた。

「どうやらあちらも片付けられないタイプだろうか？」

「本命では無いが、その片割れが来たのは用事が片付いて来たのはありがたい。」

「すみません。これを五十里先輩に渡しておいて頂けますか？ 刻印魔法の件です」

「おっけー。こっちは啓から頼まれた仕様書ね。頼んだわよシルバーくん」

「…シルバー？ もしかしてあのトールス・アンド・シルバー？」

「思い付いたレオや幹比古用の要望書をチップで渡すと、同様に向こうからも手渡された。」

どうやら同じ様な事を考えて居たようで、おそらくは刻印魔法を簡略の為に利用した特殊CADか何かだろう。

俺達の会話を聞いて、関本先輩の顔が疑問は氷解したとばかりに平静さを取り戻すのが見える。

「そうだ。チーム名であつて個人名ではないそうだがな。後で沢木や岡田たちにも会わせるつもりだ」

「そのくらいは知っているさ。…しかしミスター・シルバーが風紀のCADを整備するのか。これは良いな」

「ラッキー！　じゃあ俺のCADとか頼んだり、スゲー発明品を使うとか可能なのか？」

先輩達の勝手なスケジュールを聞きながら、俺はある種の微笑ましさを感じた。

ここでは実力さえ認めさせることが出来れば、二科生だとか気にする者は居ないか少数らしい。

あえて言うならば関本先輩だが、…まあメリットがデメリットを上回る間は気にしないだろう。

「こちらデータが取れますから構いませんよ。ただ、先生方にも妙なものは持つて来ないと約束して居るので、先行サンプルとかに成りますけどね」

「それで十分じゃない？　実験品とかはこうやってチップで渡して、自分の家の工房でやればいいんだし」

「普通は自分の家に工房なんて無いと思うがねえ」

「それを言うなら五十里の家を自分の家扱いして居る方が問題だろう」

俺の返答に三者三様の答えが返ってくる。

「こちらとしては肩をすくめる他は無い。

「とりあえず、俺は三年の辰巳・鋼太郎だ。強い奴は歓迎するぜ」

「同じく三年の関本・勲。時にミスター・シルバー、君は論文コンペには参加しないのか？」

「司波・達也。自分のことは司波と呼び捨てで結構です。…先に仕上げたい魔法とCADがありまして正直、九校戦が終わるくらいまでは

時間が取れません」

俺は挨拶を返しながら、追い詰められているスケジュールに苦笑する他なかった。

飛行魔法は未完成ながら形になり、自分で飛ぶだけならやってやれない事も無い。

しかしコピーを芸も無く繰り返して可能な程度、実用には程遠い。それだけなら他の誰かがFLTから研究を奪って行ったら、俺の研究だと主張できないレベルだ。

そして極め付けなのが、研究室がそろそろFLTを追い出されそうな事である。

これほど追い詰められているのに、学校では学校でブランシユ対策を要求され限界に近かった。

これでコンペ用の論文を書けとかオーバーワークでしかない。そんな有様であったが、それが返って良い反応に繋がったのだから。

関本先輩は満足そうに頷いていた。

(マウンティングというか上に居ないと気が済まないタイプか、それとも単に論文コンペで自信があるのか)

そんな事を思いながら納得していると、委員長が苦笑しながら俺達の方を睨んだ。

「そこで話を終わらせるな。こっちの森崎はまだだろう？ あの森崎なんだが…」

「構いませんよ。森崎でも俺はエースと言う訳でもないですしね」

「おつと悪い。今年は粒揃いで幸先が良いや」

そんな風に朝の段階では、円満に話が進んだ。

最後まで続いてくれれば、面倒が無かったのだが…。

●ラブコールは突然に

無事に授業が終わり、新入生を呼び込む騒ぎが始まった。

活発な美少女であるエリカなどはさぞ争奪戦が激しいのかと思つて居たら、修行と称して雲隠れ。

幹比古にSBを喚起させて、感知する練習をしているらしい。

(エリカ狙いの部活には悪いことをしたな。…いや、千葉道場の関係者以外で知っている連中は少ないか)

他愛の無いことを思いながら巡回を続けて居ると、嫌でも耳に飛び込んで来る言葉がある。

『二科生なのに風紀?』

という侮蔑の言葉もあれば、そうでない言葉も聞こえて来る。

『トールス・アンド・シルバー…本当に一高に来てたのか』

『ねえ、じゃあうちの部活に入ったら凄いCADで大会に挑めるんじゃない?』

ネームバリューとは不思議な物で、俺の才能だとか魔法の能力以前に名前の方で俺を判断するらしい。

時折、無茶な呼び込みに誘われては逃げ出し、あるいは説明して切り抜ける羽目に成った。

(やれやれ。エリカが居たら半分くらいは押しつけられたのにな)

苦笑が思わず顔に浮かびかける。

途中で暴発騒ぎが起きた時に、術式解体で落とした為に、グラム・デモリツションが使える生徒だと大騒ぎに成った。

お陰で追いまわされる羽目になり、風紀を取り締まるために来たのか、騒ぎを起こしに来たのか判らない。

(…それでも名前を公表しなければ誘われもしなかったろう。縁と言うのは不思議な物だ)

もし無名のまま一高に来ていたら、おそらくは無縁の苦労だったろう。

今頃は遅くなる深雪に付きあつて時間を潰して居るか、二人でさつさと帰って飛行魔法の仕上げをしているかもしれない。

どちらにせよこの騒ぎは関係ない対岸の火事であると思われた。

そう思えば苦笑が浮かび、あるいは想像に駆られて無意味な笑みが浮かぶのも仕方がないのかもしれない。

ありえない想像に浸りながら苦労して居ると、暫くしてカフェの辺りで手招きするのが見えた。

あれは…確か…。

「どうされました、関本先輩？」

「休憩がてら司波に話があつてな。茶の一杯くらいは奢らせてもらうが」

断ると面倒そうだと思つて、素直に頷いたのがまずかつたのかもしれない。

そこで断つておけば、その後の騒ぎが一つ減つたかもしれないのだが…。

しかし、この時点で俺が知る由も無い。

「御言葉に甘えることにします。手の内を見せたら俺が誘われる立場に成つてしまいました」

「はは…。普通の魔法師には無理な技だからな。七草も真似ごとしか出来んくらいだ」

唯一得意としている無系統魔法を、使うべきではないタイミングで使つてしまったとミスとして話題を切りだした。

そうするとこちらの状況を把握して居たようで、関本先輩は鷹揚に頷いている。

俺が対応を失敗したと言うことに満足して居るのか、それとも七草会長にも出来ないことで満足して居るのか。

こうやて折り合いを付け、些細なことでプライドを刺激せずに納められれば、案外、悪い性格では無いのかもしれない。

やがてコーヒーに口を付け、喉を潤した所で話が切り出された。「司波。時間が無いと言つていたが、それなら僕のテーマを手伝わな

いか？ 勿論そっちの研究が収束してからで構わない」

「分野によつては無知同然ですので、一年に務まる物とも思えません」

急な話であつたが買つてもらつて居ると思つておくことにした。足手まといになるのではと告げつつ、素早く思案する。

俺の心に浮かぶのは知的好奇心と、利用されることへの忌避感だ。自分の研究に関わることであれば、利用されても良いしこちらも利用させてもらう。

逆に無関係なジャンルで、一方的に利用されたいとは思えない。

「もつともな話だな。君の狙っている分野は何だい？ 分野によってはその方面で行動してもらえりし、君が来年以降に経験を役立ててもらつても構わない」

（手の内を見せずにこちらの手を聞きに来たか。正しくはあるが…）

自分の研究テーマを示して、どうだと言うタイミング。

ここで関本先輩は、あえて俺の関心がある分野を訪ねてきた。

話題を広げ、そちらに見識があれば協力もしあえる。

（話術としては正解だ。しかし、研究者としてはどうか？）

逆に言えば、こちらの研究ソースを覗き見て利用しようと言う魂胆に他ならない。

多芸な才能の一つに話術があるのを認め加点つつも、こちらの方面では他者を理解して居ないと減点することにした。

どのみち生徒会室で話している内容である。

分野が被っているか次第なので、思い切って腹を割ることにする。

「あくまで将来ですが、常駐型重力制御魔法式熱核融合炉を実現できればと思います」

「君もソレか…。僕は基礎の改良こそが魔法の発展に繋がると思うんだがね」

口火を切った瞬間に、苦虫を噛み潰したような顔になる関本先輩。

この反応を見て、思わず生徒会室での話題が蘇ったのは仕方あるまい。

あの時は好意的であったので、より深い感慨を覚える。

「そのこと自体は肯定します。例えば感応型はポイントも反応も妖しいですし、誤差が大き過ぎるまま使つて居ます」

「ならば判るだろう？ カーディナル・コードとは言わないが基礎技術の発展はおろそかにすべきじゃない」

関本先輩の言いたい事も判る。

カーディナル・コードを始めとして判っていないことは多いし、今もまだブラックボックスとして使つて居るモノの何と多いことか。

だが、同時に心が冷めるのを感じても居た。

関本先輩がやりたいのは、究極的にはカーディナル・コードを始め

とした『魔法学上の大成果』だ。

残念ながら、基礎系統だけでは計り知れない系統外魔術があるのを
実体験で知っているし、元より興味も無い。

俺の目的は、そこにはないのだ。

「基礎を徹底して改良し、今の技術を古い物にするんだ。そうすれば
君だって魔法を操れるように成るかもしれない」

いや、むしろ魔法師の発展など望んではいない。

新しい基礎基盤を作り上げ、自分達で修得すれば俺も一科生並に魔
法を使いこなせる。

そう説得しようとする先輩を、俺は一蹴することにした。

「生憎ですが自分は一科生になりたいとは思って居ません。俺が望む
のは魔法に置き変わる普通の技術ですよ」

「なに…？」

一瞬だけ、先輩は呆けたような顔をした。

まるで意味が判らない。

優れた魔法師ゆえに、呑み込むことが出来ない様だった。

それもそうだろう、魔法師が魔法を捨てる世の中など、彼の中では
ありえないのだから。

「良く考えて見るんだな。俺とあいつとどっちの理論が優れているの
かを」

「あいつが誰なのかは判り兼ねますが、基礎を突きつめて誤差を減ら
す方面ならお付き合いできますよ」

まるで捨て台詞のような言葉を残して関本先輩は去って行った。

その背中を見ながら、俺の方も席を立てて巡回しながら戻ることに
した。

あとは軽く流して、生徒会室の深雪やシークレットームに籠ってい
るリンと一緒に移動すれば良いだろう。

そう思っただけが緩んで居たのか、俺はつい考えている言葉を口に出
してしまった。

「あの様子だと、市原先輩の派閥と見られたのかな？ 最初の出会い
はどちらも同じ様な印象だったんだが…」

「呼びましたか？」

意外なことに、返事は直ぐ傍からあった。

少し離れた席に、とうの市原書記が居たのだ。

驚くと言うよりはむしろ呆れると言う他は無い。

「聞き耳を立てていらしゃったのですか？」

「人聞きの悪い。たまたま生徒会室以外で休憩したくなっただけです。ただ、そうですね会長に色々聞きましたので、少し様子を窺って居ただけです」

そう言うのを聞き耳を立てると言うのではないだろうか？

そんな事を思いつつも、この一言で全てを理解出来た。

相変わらず話が早いと言うか、会長がブランシユの事を説明したのと、俺を氣遣って様子を見に来させたというのが窺える。

とはいえここでブランシユ絡みの話は出来ないのです、人通りの少ない場所を選んで生徒会室に向かうことにした。

「会長から聞いた様ですが、危険な事件に首を突っ込む事に成りかねませんよ？」

「どの道、第一高校がテロの標的になれば避けられぬ運命です」

まさしく自明の理。

そう言われれば返す言葉が無い

なにしろ浚って人体改造するのであれば、一高生の誰もが危険と言う他ない。

医学的な加工と薬物投与でなら二科生でも十分だが、薬品と心理暗示メインで済ませるなら一科生は即戦力なのだ。

「それにしても意外でしたね。司波くんがロマンチストだとは思いませんでした」

「…っ」

ここでもまさかの不意打ちが待って居た。

「魔法に置き変わる技術。魔法の陳腐化を目指すには最低限、融合炉とマイクロウェーブ送電を組み合わせないといけません」

ようするに、こう言うことだ。

俺の目的とは、魔法師の地位を『兵器』から『経済の一環』へと向

上させつつ、同時に陳腐化することだ。

融合炉によって今までと段違いのエネルギーが容易に得られれば、非効率と呼ばれた幾つかの不可能が可能になる。

ヘリや戦車が活かせる状況では魔法が不要のように、魔法に置き変わる手段を確立化させていく。

通信によって手元のない機材を動かすのは二十世紀でも可能であったことだ。

これに発明当初は効果が薄かったエネルギー送電を並行して行い、指先一つで様々な機器を動かせるようになれば…。

いつか魔法は手段の一つになるだろう。

誰でも魔法の様に機材を操れるならば、兵器から特定環境で有効な技術者と化した魔法師は区別されることはあっても差別されることは無くなるはずだ。

「ロマンチストですか？　そうかもしれません」

その目的を看破されるとは思ってもみなかった。

同時に、クスリと笑われたままなのは我慢が出来ない。

深雪の事以外は銅でも良いはずの俺の心に、ささやかな炎が灯っていくのが判る。

それが怒りなのか、それとも同朋を求める叫びなのかは判らなかった。

「そうですね。せめて重力制御の用途が立てば話は別なのですが…」

「…っ！」

思わず手が出て居た。

片腕で壁を突いて進路を塞ぎ、少しだけ側に寄る。

「司波くん？」

「用途は立って居ます。飛行魔法の実用化が九校戦ごろには可能でしょう」

俺は他者に聞こえない様に、市原書記の耳元で囁いた。

「FLTでということとは、重力をループキャストで制御する為の変数が…、それも膨大な量が必要ですね」

「飛行術式自体は実用データと引き換えに無償で公開する予定です。」

後は勝手に成果を寄こしてくれるでしょう」

彼女は最初驚きはしたが、意味を理解すると目を閉じながら思案し始める。

俺の言葉を疑っていると言うよりは、事実だとして、そのもたらす未来を演算して居るかのようであった。

「ふふ…。面白いですね。では、ルーピキャスト型では得られないデータを先にこちらの論文で検証するしたら、協力してもらえますか？」

「俺では出来ない事を、異なるコンセプトで試してくれるならば是非飛行魔法のことは、九校戦までは秘密。」

そう良い含めるまでも無く、判っているようだった。

ならばもはや不要だと、俺はその場を立ち去ることにする。

去り際に市原書記が何か呟いていたような気がした。

「魔法師の居ない世界…ですか」

その言葉は俺の耳に届かなかったが、不思議と市原書記が普通の女の子のように見える。

立ち去りながら、それは普通の事だと思いう様にしながら、自然と俺は歩調を早めて行った…。

女性問題と言う難題

●ハニートラップにはご用心

最後に見通しの悪い区画の巡回に入ったので、『目』で軽く捜査。覚えのある反応が一、だがその人物が魔法を使った瞬間を『視て』居ないので詳細は不明。

あくまで俺の『目』が魔法に対して特化している為だが、死角ではないので構うまい。

「内密の話ですか、桐原先輩？」

「ああ。つるんで居る所を見られたくない。適当に歩調を合わせてくれ」

内容はおおむね予想できる。

司・甲が校内の対立を助長している容疑者だと言いたいのだろう。

「ブランシユの関連で妖しい人物に心当たりがあるという御話だと思いますが……。感情論では証拠に成りえないのでご注意ください」

「言われるかもとは思ったが、まさか口にする前に先回りされるとはな」

「今年の魔法剣術大会決勝戦で敗北して居るがゆえに、偏見である可能性が高まってしまう。」

司・甲がエガリテに所属して居ると知らない者には、多少の証拠では動く根拠には成りえまい。

「とはいえ、一応の根拠の他に証言を考えて来た。あの大会には奴の目と体術以外に、もう一枚対策があったと言ったらどうだ？」

「それには気が付きませんでした。先輩の奇襲が読まれて居そうな状態には見えましたが」

近接向けの魔法の中には、強力さよりも的確さが重要なモノがある。

魔法の発動と動きを過敏症の目で確認し、予め鍛えておいた体捌きで対処。

後は簡単な魔法を駆使して、攻防に渡る動きをフォローしていたのだと思っていた。

「引つかかった俺が言うのもなんだが、剣道部の壬生と付き合ってたことが合つて、大会前に言い掛りを付けて司に乗りかえられた」

典型的なハニートラップだ。

魔法師は貞操を守るが早婚するという風潮があるので、仕掛けやすいとも言える。

逆に魔法の扱いは心理的動揺が響くので、調子を落とすには十分かもしれない。

「癖を見抜かれた上で心理的に追い詰められたと？ それは故意だとしても同情できませんが」

「これが根拠にならんのは重々承知だ。：しかしな、言い掛りがチグハグな割りに本気で怒って居たんだが、思い返してみると同じ違和感がもう一つあった」

桐原先輩は少しだけ照れては居たが、怒りを覚えている様子は無い。

騙された自分が悪いとは認識して居ても、こちらを信じさせようと強弁する気はないようだ。

「根拠の他に証言とおっしゃられましたね。ということは、第三者が居る訳ですね？」

「そういうことだ。：渡辺先輩に手酷くあしらわれたと言う話題が出て、試合を取り持ったことがある。だが、本人に問い合わせるとそんな事は無い」

渡辺委員長か。

あの人ならば回りに合わせて嘘を突いたりしないだろうし、身内用の証言者としては適任ではある。

正式ではないにしろ、身内で試合をしたなら忘れてはいるはずもあるまい。

警察を動かす事は出来ないが、会長やエリカ達を説得する材料くらいにはなるかもしれない。

「壬生は『自分如きでは勝負にならない』と言われたつもりだったらしいが、先輩は『自分の腕ではもう壬生に勝てない』と言ったんだとおかしいと思わないか？」

「最初は本当にそう勘違いして居たとしても、いつまでもそのままと言うのがおかしいですね」

伝え聞く性格を聞いていただけでも、一度聞いただけでショックで諦めるとか激昂するなどありえまい。

当然、何度かは食い下がる筈だ。

それをしていないのは、もう一度口にする前に第三者が何かを吹きこんだか…。

「この事を思い付いてから、改めて振られた時を思い出すとだな。やはりおかしい」

「壬生先輩、渡辺委員長。そして壬生先輩と桐原先輩との会話との齟齬が大き過ぎる…と言う訳ですね？ 概ね判りました」

このすれ違いは当事者以外からもある程度は聞けるだろうし、介入者がいれば見えている事も可能だったはずだ。

ならば可能性は高いと言えるし、十分な『理由』にはなるな。

「そう言う訳なんだが、何か判るか？」

「難易度の極めて高い技術的な方法か、生まれ付きという前提で系統外の精神魔法ならば」

そこまで強力な刷り込みは、技術的には無理か、さもなければ重度の問題が起きる。

それを考えれば、精神魔法の方が可能性が高いだろう。

「相談に乗って話している間に使用するとしても、一瞬の隙を突く必要があります。その意味では身内である剣道部は妖しいと言わざるを得ません」

短い付き会いでは不可能だが、同じ部活ならば接点を作って第三者の前に連れ出す事も出来る。

それならば、生まれ付きの能力であろうと可能性は拡がるし、司弟の手引きで兄と引き合わせるだけなら簡単だろう。

そして、この流れが真実であろうと違おうと、状況証拠としては十分だ。

後はCADなり武器の一つなりを、『発見して見せれば』いい。

入念に隠して居れば悪辣な手段に頼らざるをえないが、連中の手際

的にそこまではしていないだろう。

むしろ小難しく動いた揚句、暴力で策を押し潰されることを警戒すべきかもしれない。

悠長に証拠固めをしている間に、七草会長が誘拐でもされたらコトだろう。

（今朝がたリンが口にして居た『交流会の悲劇』は、うちの御袋が被害者だからな。会長が同じ目に在ったら激怒どころでは済むまい）

親しい人間が被害に遭った事件、これから親しくなろうとしている人間が被害に遭うかもしれない事件。

それを考えた時、俺の脳裏に僅かな怒りが差し込んで来る。

そして、それが深雪に及ぶかもしれないと考えが至った時、俺の怒りは沸点を越えてむしろ静まって行つた。

ブランシユは消し去る：それだけだ。

「お前の評判を考えると、もう一度同じことをやって来るんじゃないかねか？ 壬生が剣道小町ってのは間違いがねえからな」

「それで先輩は、剣道部に関してどう対処して欲しいのですか？ もちろん、喧嘩を売られればなんとかしますが」

少しだけ悔しそうで、何かを振り切るような表情。

壬生先輩がそんなに尻軽だとは思いたくは無いのだろう。

だが、洗脳であればそんな事を思うだけ無駄だ。桐原先輩も結局はその続きを口にした。

「そうだな。壬生の悩みであれば聞いてやってくれ。魔法を開発するのは得意なんだろう？ あとはお前が連中に取り込まれなきや構わねえよ」

「ご自分を利用した相手に随分とお優しいですね。ですが判りました、精々洗脳されないように情報を聞き出して断定しますよ」

恥ずかしそうに顔を背ける辺りで、先輩の性格が判る。

惚れているが文句を言う気は無いし、拘束する気も無い。

彼女が俺に本気になるならばそれで構わないし、困っているなら助けて欲しいというのも本当なのだろう。

随分甘いと思うが…。

洗脳されているのは桐原先輩の勘違いで、説得され工作員に成り下がっていた時は処分する。

だが、そうでないならば別に先輩の頼みを聞いても差しつかえあるまい。

「一応は恩に着とく。それとな、対立を利用できるなら俺も利用する。お前は知らん顔をしとけ」

「剣道部と剣術部のいさかいが起きた場合ですね。…不正使用は程ほどだと助かります」

本当はそんな『流れ』にならないのが良いのだろうが、テロ組織にイニシアティブを取られた状況で文句は言えない。

自分で悪役になると言うならば、利用させてもらおうとしよう。

こちらとしては別に困らないし、会長にだけは事前説明しておけば最悪でも退学にはなるまい。

つい、進展した事態に気を取られながら、俺は巡回を切り上げて生徒会室に向かった。

新たな面倒事に巻き込まれているとも知らずに…。

●氷の美貌と、根回し作業

壬生先輩の食い違う記憶という情報を手掛かりに、強弱合わせて幾つかの魔法を考慮しながら生徒会室に向かう。

答えの出ぬままに辿りつくと何故か会長のニヤニヤ笑いに迎撃された。

「ちよつと聞いたわよ達也くん。リンちゃんを口説くなんてやるわね。リンちゃんはちつとも答えてくれないのだけど…」

「ほ、ほんとーですか〜!?!」

「っ!?!」

ピーっ!

七草会長の言葉に反応を示したのは、俺よりもむしろピープ音だった。

ミスをするや鳴る様に組まれているようで、実に趣味的だ。

平然としている市原先輩は自分の端末を使用して居るので、彼女の反応で無いのは確かだが。

しかし心当たりが無いので仕方無く尋ねることにする。

「なんのことですか？ 身に覚えが無いのですが」

「しらばっくれちゃって。壁ドンまでして居たと聞いてるわよ。お姉さん見たかったな」

「僭越ながら、壁ドンとはいかなる所業なのでしょう」

俺の質問に対し会長はますますニヤニヤ笑いを強くしていたが、奇妙な表現を確認して深雪が手を上げた。

ただし、その顔は凍りついた様な笑顔が張りついている。

「んつとねー。アーちゃんの所のディスプレイが壁として。『俺のモノになれよ』とか熱烈に求愛する事よ」

「ふ、ふえー。近いです近過ぎます。きやうー」

「っ!?! ……お兄さま。どう言うことかお聞かせ願いたいのですがっ」

会長は妙に作った声で中条書記の元に行き、片手で顎をクイッと持ち上げながらも片方の手でディスプレイ画像の手前に手を付ける。

ピーツツと強烈なビーブ音とは逆に、深雪の笑顔が強烈になった。なるほど、あの音は深雪のミスか…珍しい。

それにしても目が少しも笑って居ないので、俺は即座に解凍(回答)することにした。

「単に秘密を必要とする会話をしただけだ。それと会長、俺は顎など持ち上げては居ませんが」

「そう？ リンちゃんも大人しく目を閉じていたらしいけど…。秘密ってどんな秘密なのかしら？ 何処でデート？ それとも二人の今後？」

「あ、逢引きだけでなく、今後を話し合う仲だと言う事ですか？」

俺の言葉を一切聞きもせず、会長と深雪が俺に詰め寄って来た。仕方ないので言を重ねようとするが、良い言葉が思い付かない。

濡れ衣に微妙な真実が混ざっているので、打開をし難いのだ。

「深雪、落ち付け。会長はありもしないことを煽っているだけだ。今後と言ってもそんな内容じゃない」

「今後について話したのは本当なのですね？ 一体、どんなことを話

したのやら…」

駄目だ。

普段は冷静な深雪が、意外なことに激昂して居る。言葉を聞いて居ないと言うか、一定の状況が先に念頭にあるようだ。

まるでテレパスで共有しているかのように、二人は俺が市原先輩を口説いたのだとに敷きしていた。

この自体を打開したのは、意外なことに…。

いや、冷静に考えれば意外でもないんでも無い、もう一方の当事者の市原先輩だった。

「九校戦の切り札を聞いただけです。以上」

「九校戦の？」

「切り札とはもしや…」

市原先輩は手札をチラリと見せるだけで、流れを遮断してしまった。

何のことか判らない会長は首を傾げ、予想がつく深雪の方はハタと考え始める。

そういえば、テレパスは念頭に浮かんだことを繋げる精神魔法。

サトリと呼ばれるBS魔法を防ぐには、異なる思考で混乱させるのを一番だと師匠に聞いたことがあるが…。

イメージ的には同じ様なモノだろう、どうやら市原先輩は会長の扱いに慣れているらしい。

会長と深雪の間に共有されていた情景が見事に断裂する。

「司波さんならばその切り札に予想が付くではありませんか？ 重要性からすれば知る者は少ない方が良いでしょう」

「そう言うことならば仕方ありませんね。…申し訳ありませんでした市原先輩」

市原先輩は深雪の中にある答えだけで状況を整理してしまった。

ずっと対処法を考えていたのかもしれないが、イザという時に落ち付いて考えられるのはポイントが高い。

なるほど、会長が戦力として加えることを進めるのも判る気はし

た。

「でも良いなー。どんな魔法なんだろう。：専用のデバイスとか造ったりするんですか？」

「完成すれば普通のCADでも発動できますね。もちろん専門化したCADで使用するのが思想的ではありません」

判らないのがこの中条書記だ。

勉強や魔法実務としては申し分が無いのだろうし、この間見せてもらった分析力から技術方面でも行けるのは判る。

だがどうしても荒事には向いていない様には見えない。

どちらかという大切に守っておいて、後方で活躍してもらおう方が良い様に思えるのだ。

世の中には克己心と反骨心で命令をしない方が良い者もいるが、一から十まで指示した方が安心して働ける者も多い。

中条書記の性格的には後者の方だと思えるし、同じ方面であればまだ千代田先輩と五十里先輩のカップルに協力を要請した方が良い様な気がするのだが：。

そう思っ居た所、会長が意外な話をし始めた。

「こないだ悪い奴がこの学校を狙っているかもって言ったわよね？」

あーちゃんの梓弓で協力してあげたら、そのCADを御礼に貰ってもバチはあたらないんじゃないかしら」

「わ、私ですか!! そんなこと：」

「そうですね。放っておいても悪者は勝手にやって来ますし、そこを中条さんの魔法で協力すれば貢献度は高いと思います」

会長が中条書記に囁きかけると、すかさず市原先輩が畳みかける。

良いコンビネーションというか、会長の参謀役というポジションなのだろう。

「梓弓と言う魔法を聞いた覚えが無いのですが、もしや古式魔法か系統外の精神魔法ですか？」

「もしかして達也くんってライブラリイと直結してるんじゃないのかしら? その通りなんだけど、精神に働き掛ける能力なの」

「会長、その言い回しでは誤解を招きます。あくまで鎮静化に特化し

て居るとおっしゃるべきでは」

そして、ここでのポイントは『鎮静化』ということだ。

先ほど、飛行魔法という言葉を出さずに深雪を説得した先輩である。

あえて言葉に出した以上は、意味のある事だろう。

「古式魔法は白と黒、同じ術が二系統に使えると聞き及びますが？」

あくまで精神安定限定と？」

「中条さんの性格的には情動を高ぶらせて攻撃に……というのは難しいですね。ゆえに学内限定で許可が下りているのですが」

幹比古との会話のついでに調べたが、梓弓の儀式補助に近い能力なのだろう。

梓という中条書記の名前から取ったのではなく、古式魔法由来の精神魔法だからということか。

強制・洗脳して使うには難しい術であるし、学校内での実験や治安専用で許可が下りているのならば知っている者も少ない切り札に成り得た。

これならば会長が戦力に成ると行った理由も理解出来る。

攻撃力・防御力に優れている魔法師が一番困るのは、パニックになつて戦力外どころか足手まといに成ることだからだ。

中条書記を守り通すことで、他の学生達を冷静にできるならば、敵を潰す際に後ろから撃たれることもないだろう。

「そう言うことでしたら、サンプルモデルで良ければ提供しますよ。ナンバリングは入っていませんが構いませんよね？」

「逆に言えばノー・シリアルの限定品って事ですよね?! まかせてくださいいっ、どんな悪者だつて通しません！」

さきほどまでおっかなビックリと言つた風情だったのに、突如として勇ましくシャドーボクシングを始める。

子犬が自分ができることを盛んに示しているようで、例えば悪いが思わずクスリと仕掛けた。

中条先輩の性格が判つた気がして、能力ともども御厄介になることにしよう。

「学外での暴漢騒ぎは警察に任せますし、学校内に襲いかかって来てもパニッただけをお願いしますので安全ですよ。戦うことは無いかと…」

「なら余計に問題はありません！　どんな状況でもバッチこいです！！」

「…二人とも、私よりもリンちゃんの説得なら素直に聞くのね。自信なくしちゃうわ」

思い付いた方法で誘導すると中条先輩は嬉しそうに頷くのだが…。今度は逆に会長がふてくされ始めた。

そして不満を解消しようと、消えた筈の爆弾に火を点け直そうとする。

「でもリンちゃんも満更じゃなかったんじゃない？　実は性格の合わない人とは会話を続けるのも嫌いなくせに」

「私も女ですから一応は…。ですが魔法師の未来を語り合う方がずっと楽しいですね」

「未来の中にはお兄さまとの仲も入っているのでしょうか？」

せっかく鎮火したはずの火種に会長はニト口をぶちこもうとしていた。

恐ろしいことに市原先輩は頬に手を当てて、悪くは無さそうな表情をする。

お陰で無視しようとしていた深雪も再び加わって、針のムシロに座っている気分だった。

「安心してください。現時点でそのような気持ちはありませんし、行動する場合はあらゆる手段を講じます」

「…そのあらゆる手段とは具体的にどのような方法を？　もしやお姉さまとお呼びした方がよろしいのでしょうか？」

キツパリと言いつ切る市原先輩であるが、よせば良いのに深雪は尋ね続ける。

その意味では市原先輩も誤解を招く様な表現をしなければ良いと思っただが…。

返って深雪の怒りを招き、周辺に冷気が及び始めた。

「っ!? 氷の美貌じゃなくて。本当に凍り始めてますよ」

「よっぽど事象干渉力が強いからねえ」

（中条先輩は二人の会話に軽く腰が引け、意外なことに会長はアツサリ引きさがつた。

よほど市原先輩の手腕というか、深雪を説得すると判断しているようだ。

つまらなさそうに残りの雑務を片付けに入ってしまった。

「必要なキーだとしたらですが。私は別に…イノセント・タブーなど気にしませんよ?」

「っ!」

「え…? リンちゃん今なんて…」

「え、ええ…?」

市原先輩の爆弾発言に深雪は絶句。

さしもの会長すらビーブ音を出しながら尋ね返し、中条先輩はキーボードに顔をうずめてるほど顔を赤らめる。

能力と権力を維持する為に近親者で交わるなど、古代史の世界だけだ。

なんとというか生臭い会話だが、いつからここは古代史の世界に入ったのか俺は疑ってしまう。

この際だが、深雪に施術した駄目な方の親父の技術ならば、肉親関係であろうが悪影響が出ない可能性があるとかは無視しておく。

「お姉さま! 私達、仲良くできそうですねっ!」

「み、深雪さん。貴女本気なの?」

「ふええー!」

こちららは見えないが市原先輩の手を取った深雪は笑顔なのだろうか?

会長まで腰が引け始め、中条先輩は思考回路が完全にショート寸前だった。

もちろん俺には、女性の思考回路は理解の範疇外である。

「そのように本気を取られると、冗談だと言出し難いのですが」

「お兄さままでそのようにポカンとされなくてもよろしいと思うので

すが」

「…そうよね、冗談よね？」

あまりの展開に、冗談と言う言葉がシツクリ来る。

深雪は完全に毒気を抜かれ、会長はストレス解消のために俺を弄るどころではない。

とはいえあまりにも気まずいので、俺は強引に話題を転換する事にした。

今朝がたりンを匿った様々なCA調整用の部屋の事を聞いてみる。

「会長、これから例の部屋に寄って行こうと思うのですが、あの部屋は一体？」

「あ、興味ある？ あそこはね、うちの技術チームの活躍を受けて、来年から技術課程が選択できるようになる予定なのよ」

納得できる内容であるが、僅かに引っかけかりを覚える。

確かに五十里先輩の技術は相当な物だし、中条先輩の腕も及第点以上だろう。

だが、昨年の九校戦メンバーやコンペに一年生は参加して居ない。

そして、どちらかといえば、一高の活躍は会長たち選手側に依存して居ると聞いたことがあるからだ。

勿論、彼が今年の九校戦で活躍し、俺が加入することで確かに充実するだろうが…。

この事が意味する謎。

それに会長の活躍で射撃場が新設された事を繋げていくと、ある種の仮説が成り立つ。

「もしや会長の協力者は校長ですか？」

「判っちゃう？ 元もと一科生と二科生の対立を良く思ってた無かったのは校長先生なのよね」

おおよその筋書きが見えてきた。

会長が感情面に対立を許容できないのであれば、校長は理屈的に納得できないと言う差はあるだろうが。

校長は色々と起きた事態を利用し、予測できることを全て利用しながら『第一高校』という学び屋を寄り良くしていくつもりなのだ。

例えば一高が劣っていた技術面で警鐘を鳴らし、五十里先輩たちの台頭を支援すると言う理由で技術系の設備を用意する。

そして彼らが今年活躍し、その成果を助長するのは俺の加入と言う訳だ。

以前から根回ししている状況で、一高の技術スタッフが以前と比べて大活躍したとなれば、反対して居る教師も黙るだろう。

これに二科生すら、技術的サポートで活躍できると言うなら止める方がおかしい。

「参ったな。全て計算尽くだったわけですか」

初日に行った駆け引きは、ようするに全て出来レースだったわけだ。

会長から先生達の性格とデータを聞き出して、裏での調査を補強して話を進めたつもりだった。

だが難関であったはずの校長は、厳めしい顔で文句を言うフリをしていただけということだ。

「…ですがこれならば桐原先輩の提案を呑めます」

「桐原くんがどうしたの？」

俺は道中で桐原先輩に出会い、情報提供を受けたこと。

何か問題が起きそうな時は、積極的に行動を起こして『剣道部が俺に近づく』理由付けになるとの提案を説明した。

「釘は刺しておきましたが、穏健に収まる保証はありません。取り締まるであろうこちらで何とかするつもりですが…」

「判ったわ。魔法の不正使用に対する嚴重注意で済ませれば良いのね？ あーちゃん達は知らないフリをするか、近くで起きた時は離れてちょうだい」

「わ、判りましたー！」

桐原先輩が勝手に言い出したこととはいえ、そのまま退学でもされては寝覚めが悪い。

予め根回しする事で、学校内の記録を抑え、証言も何とかする。

こうして俺達は、これから起きるであろう学内の問題に対処する事にしたのであった。

包囲網の形成

●情報の共有

「ゴメン達也君、遅れた」

「これで全員だな。始めるぞ」

別件の入ったエリカが七宝の別宅に合流し、俺は情報の共有を始めることにした。

スムーズに片付けるつもりならば知らずに済ませるのもアリだが、洗脳の危険があるので警戒してもらう必要がある。

ここに居るメンバーはチームとして認識しているが、洗脳されてペラペラしゃべられていたらお笑い草だからだ。

「報告は二つ。一つはブランシユの計画概要が判ってきたこと、二つ目はエガリテが潜入してる部活だ」

「昨日の今日で凄えじゃねえか」

レオが感心してくれるのはありがたいが、残念なことにエガリテでは意味が薄い。

下部組織のエガリテの更に使い捨ての工作人員など捕まえても牽制にもならない。

もし意味があるのならば、証拠を捏造してでも介入するんだが。

「まずはブランシユから。リンさんからの情報で、昨日の連中は薬物と手術に寄る強化人間らしい」

詳しく始めようとしたところ、いきなりエリカが苦虫を噛み潰したような表情をする。

「どうやら警察で何かあったな…予定通りか。」

「…その情報、できれば早く欲しかったな。まあ無茶は言えないんだけどさあ」

「ごめんなさいね。私としても貴女たちの性格も判らなかつたし…何かあったの?」

仲良く成り始めたのは今日からで、性格も掴めていないのだから仕方ない。

そう誤りつつも、リンはエリカが何か掴んで居ることに気が付いた

様だ。

「もつと警備の良い場所に搬送しようとしたらしいんだけど、途中で襲撃されて逃げられちゃったのよ」

「をいをい。警察の護送付きじゃなかったのかよ」

案の定、エリカが遅れて来たのはその辺の事情を聞いて来たかららしい。

レオの質問にエリカは呆れた表情で答えた。

「だから強化人間って情報が欲しかったの。普通のテロ屋なら十分なメンツだったはずなんだけどね。軍が近くに居なきゃバかったみたい」

「結局、軍が捕まえたのか？ 良くそんな都合の良い場所に居たな」

エリカの説明に今度は森崎が詳細を尋ねる。

ボディーガードを務めるこいつにとつて、警察や軍の能力は馴染みがあると同時に、展開場所の限界を知っても居るのだろう。

「それがね。笑える話なんだけど、怪しい連中を捕まえたって段階で、幾つかの部署と軍が同時に受け入れの手を挙げたのよ」

「なるほど。縄張り争いの結果、警察は部署同士で争って遅れたのか」
釈然としないエリカに俺はフォローの言葉を掛けることにした。

無論この場でフォローするのは彼女では無い、緊急展開した軍…俺が所属する独立魔装大隊の方だ。

想像でしかないが、おそらくは黒羽家の方から各署に連絡を入れて、不自然ではない構図を作り上げたのだろう。

「ひとまず何とかなつて良かったと思っておこう。…続けるが、ブランシユは強化人間の人材確保を計画の中心に組み直しただろうな」

「まあ、あれだけの能力があれば欲しくなるよな」

「外からちよつかい掛けてきた奴がもう数人居たら、逃げられたかもしれないって話だし員数増やしたくなる気持ちも判りはするわ」

俺がディスプレイの上に簡単な計画と文字を描くと、レオとエリカは当然だと言わんばかりに頷いた。

対して幹比古の方が意外だったようで、驚いて尋ねて来る。

「二人とも薬物強化とか手術でロボトミーとか、良く平然としていら

れるね」

「だってねえ…。改造手術って言うけど、魔法師のあたし達が理想論を言えるほどクリーンでもないしね」

「俺だって爺さんがドイツから亡命した理由はその辺らしいしな。そう言う境遇の奴は案外、多いんじゃないか？」

幹比古は強制的な改造手術に不満があるようだったが、魔法師が出始めたころはどこもそんな感じだった。

レオの亡命という言葉にエリカは僅かに反応したようだが、珍しくも無い事例と言える。

実際に俺と深雪は四葉の里で改造・調整されているし、倫理の確立と共に目立たなくなっただけで今も何処かでやって居ても不思議ではないだろう。

「こう言う対応を聞くと、出会った直後に話しておけばよかったと思うわ。警戒されるかもって損しちゃった」

「…吉田君の反応の方が普通だと思うんですけど…」

拍子抜けするリンに対し美月は幹比古側らしい、苦笑しながら説明の続きを待つて居るようだった。

「ブランシュの計画が大事になったのは困るが、逆に言えば隠匿生性の高い計画を変更してしまったということだ。全体としては明るい未来だと思っておこう」

ここで重要なのが事件の規模だ。

当初は秘密のまま進めて会長たちを狙う可能性もあったが、魔法師を浚うならば見てくれは大きい方が良い。

一人・二人であろうと浚えばどこまでも追いかけるのが警察だが、大事件に成ればそちらに目を取られる可能性も高くなる。

当初のままなら気が付かない可能性もあったはずだが、大事件に成って介入するチャンスが増えたと言えるだろう。

「それで、エガリテの方はどうなんでしょう？」

「現時点では不確定だが、とある人物からの話で怪しい部活を教えるもらった」

この手の話に興味があるとは思えないので、何か、気が付い

た事でもあるのだろうか？

俺は領きながら、出来るだけ客観的に説明を続けることにする。

「本当はともかく洗脳までしてるといいう話だ。とはいえそのまま信用する訳にはいかないのよ、生徒会にも協力してもらって裏を取っている所なんだが…」

俺は端末を操り、生徒会の記録からダウンロードした施設予約表をディスプレイに表示する。

まずはここ数年間の部員争奪戦の期間中のもので、先入観を与えない為に剣道部とは表示せずにおいた。

「断定は禁物だがな。…連中が事件を起こしたがってると仮定して調べると、見えて来るモノがある」

二つの部活を並べて表示し、提出日時を脇に記載。

ほぼ横並びの日時が続く中、一か所だけズレている年がある。

「これは新入生を呼び込む為に格技場を予約した部活の、今年を含む時間帯だ」

「何よこれ。いつも先を争ってるのに今年に限って後出ししてるじゃない」

「怪し…い？ いや、ただの偶然のセンも…」

エリカが言うように、常に剣道部と剣術部は争う様に予約を提出していた。

同じ様な部活なのだから当然と言えば当然なのだが、今年に限っては、確実にぶつかる為か確定してから提出して居る。

どのみち例年通りなので最初から争う必要が無いとも言えるが、今年だけ違えば怪しさが出て来る。

「これだけなら偶然かもしれないな。偶然と言う意味では偶々何も起きない可能性もある。…その保険があると思わないか？」

そして次に別の施設予約表を、争奪戦期間中以外も含めて提示した。

「…えーっと、これは講堂の予約者？ あ、ワザワザ部活かも調べたんだ」

「新歓の後の予約を今からかよ。剣道部が討論会ってなにするのかし

らねえが…」

ここで初めて部活を表示し、その中で剣道部所属の生徒から、何故か講堂を使用する申請が出ている。

いまは予約している部活で一杯だが、新入生の確保騒ぎの後に使用申請を出しているのだ。

このレベルで予約して居る部活が無いでもないが、あくまで部活の練習の一環であると記載されている。

「今のところ怪しいのはこの剣道部。騒ぎを起こして大きな問題になればそれをキツカケに、何も起きなければ魔法系を優遇しているという理屈で問題提起する気だろうな」

「でも、魔法を使用した部活って、そんなに優遇されてるんですか?」「そんな事は無い筈だが…」

俺が説明すると美月が首を傾げ、森崎が説明しようとして口ごもる。

思い当たる面がある様な、かといって正当な理由だと言いたいのが半分ということだろう。

「この表示通り、金額だけなら優遇はされている。だが、大会成績と基本費用を含めると…こうなる」

「そうそう。うちの学校はかなり強いんだ。対抗試合だって近くじゃできないしな」

フォローという訳でもないが、大会で手に入れたトロフィーや賞の数や並べて見た。

そして、練習のためにどの程度の費用が掛るかを示し、金額では無くその比率を提示する。

剣道部で言えば近くの普通科高校でも問題無く対抗試合が出来るが、魔法を使う剣術部ではほぼ不可能だ。

CADを考慮せずとも金額は多くなるし、必要性を差し引けばパーセンテージの面では優遇されてなど居ない。

そして格技場や行程の使用率は、魔法系・非魔法系共に同じレベルである。

「騒ぎを起こして生徒会側が説明会を開けば良し、開かないなら自分

達で討論をふっかける気だろう」

「その隙を付いてブランシユが乗り込んで、CADも持たずに油断してる生徒を浚うってわけね」

連中からすれば会長を含む生徒が集まって、風紀や警備職員の日を集められればいい。

貴重な魔法師を五体満足で浚うにしては少し大味で杜撰な気がしたが、この時の俺は知らなかったので仕方が無い。

実際には、もつと非人道的な技術が在り人間の形状のまま浚う必要が無かった。リンがそのことを隠していたと気が付くのは、全て終ってから事なのだから…。

無防備に近い状態で生徒を集め、戦力を保持して突入するので十二分な勝機がある。

人体全てが必要では無いのだから、それで問題ないと踏んで居たのだろう。

「説明を始める前にも言ったが、あくまで怪しいと言うだけだ。証拠が集まるまでは、みんなも勝手に動かずに自重してくれ」

今見せたデータなど、言われてみれば怪しいレベルでしかない。証拠にするには問題があり過ぎる。

迂闊に問い糺したり、隠れて調査されるとその後が大変だ。

証拠を処分してブランシユの方に籠られかねないので、ここで釘を刺しておく。

あくまで洗脳の話をする事で、接触を避けさせる為なのに、飛び込まれては意味が無くなってしまう。

「そういえば美月、なにか言いたそうだったが」

「すいません。最初は勘違いかと思ったのですけれど、剣道部には興味ないと言って居るのに勧誘されたんですよね」

あまり他者の事を言及する性質ではないのだろう、美月は言い難そうであったが俺が水を向けると話し始めた。

「私の場合は修行が目の治療にもなるからって言われたんですよね。そんな筈は無いのに…」

「ノコノコついていったら、洗脳目的だけでなくオモチカエリされ

ちやうでしようね。それでなくても美月は魅力的なのに」

「どうやら俺の懸念は杞憂だったらしく、美月はちゃんと剣道部の話が妙だと気が付いてくれたらしい。」

エリカの視線が胸元に移動したので赤面して黙ってしまったが、ちやんとした警戒心と知識があるようだ。

「洗脳と言ってもちよつとした刷り込みで認識を修正するらしいから、本当にあるかは怪しいが注意は必要だ」

「剣道部なら怪しいのは、さーやの事でしょう？ 桐原先輩との一件は聞いて居るけど、洗脳つてのも納得できる話ね」

エリカの話は桐原先輩の情報を補強するものだった。

特に洗脳とは思って居なかつたらしいが、俺の話でなるほど思ったらしい。

壬生先輩のことを名前で呼ぶくらいなので彼女の方に近いスタンズなのだろうが、それでも洗脳論を支持する辺りは相当に違和感があったようだ。

「もし本当に洗脳しているなら、説得は無理どころか、ミイラ取りがミイラになりかねないから無茶はしないでくれ」

「判ってるわよ。味方に話してるつもりで敵になってたなんて笑えないもんね」

時間や距離などの発動条件はこの際関係ない。

どれだけ難しかというと、有用ならば条件を整えるまでだ。

（問題はどの程度の洗脳能力、いや使い慣れしているかだな。黒を白だと良い含められるレベルかそれとも…）

強力な洗脳であろうと、自殺させたり大切な人を殺したりなど出来ない。

だが話の持つて行き方次第では、それも可能になる。

強力な術なら早い段階で、弱い能力であろうと長丁場で心理を見抜けば可能になるのが、洗脳と言う技術の恐ろしいところである。

「いずれにせよ、今はこちらの様子見だ。おかしい所を見付けても探りを入れずにこちらへ教えてくれ」

こうして俺達は情報を共有し、最後にリンは技術系の会社が機材を

納入・管理する為に派遣したインターンという口裏を合わせた。

生徒を邪魔しない様に、年齢が近い彼女が制服を着ているという設定だ。

こうして一日を終え、明日以降に備えて体を休めることにした。

もちろん夜に何もしないと言う事ではないのだが…。

●バックアップ

「情報の提供を感謝するぞ、達也」

「いえ、こちらも隊の援護をただけて助かりました」

その日の夜、俺は独立魔装大隊からの連絡を受けた。

七宝家のセキュリティはそれなり以上であった筈だが、相変わらずの腕である。

「警察は出し抜かれたそうですが、援護があつたとはいえ、それほどの実力を秘めていたのですか？」

「基本的には達也の戦つたのと同じだろう。だが、短期間であればリミッターが何かを外して強化できるようだな。お陰で横槍を入れるには丁度良かったが」

リミッターによつて保全機能を掛けて居て、あれだけの実力だつたと言う訳だ。

それを解除することで警察は出し抜かれ、オーバーワークで疲労したところを隊が身柄を抑えたということか。

「それと、一高からのアクセス権を一時的に下げることがは無理だそう。代わりに藤林をバックアップに待機させる」

「十分です。元よりセキュリティ突破するほどの時間的猶予を与えるつもりはありませんし、少尉の協力が得られるならば心強いかと」

ブランシュの初期目標が魔法大学からデータを抜き出す事だと言うなら、あえて放置する事も無い。

予めアクセスを封じる事が出来ないかを聞いていたのだが、藤林少尉の腕ならば人知れずブロックも可能だろう。

なにしろこの七宝家のセキュリティをまんまと突破して、俺の元まで繋げているのは彼女の腕前なのだから。

「それで、『彼女』をこちらで保護せずとも良いのだな？」

「無頭竜の勢力を全て断ち切れない以上は、よりマシな頭を残しておいた方が良いでしょう」

隊にリンを引き渡す事は止めておいた。

縁があるから優しくしたいと言う気持ちは持って居ないが、無頭竜に付け狙われたとは思わない。

彼女には今後とも、組織を分断・内紛の種として乱してもらった方が良いでしょう。

「抜け目が無いな。その調子ではさぞや四葉では嫌われただろう？」

「任務に可愛げを求められても困ります。カエサルのは物はカエサルに……で良いかと」

だが人の心理とはおかしなもので、シルバーの名前を出してから四葉での俺に対するイメージが変わったらしい。

どうやら現世利益を求めて人間臭くなったと思われるようで、機械のようだからと嫌っている者の当たりが若干柔らかくなった。

今回の件も、仲間は助ける＝四葉の仲間も同じ目にあつたら保護すると思われるようだ。

身近で有用な戦力ならば保護するのは当然だし、どうしようもない足手まといでなければ人材資源的にも協力するのは当然だと思うのだが……。

「いずれにせよ、これで十分な態勢が整えられます。後はアジトを探り出せば乗り込む事ができるでしょう」

「そのことなのだがな。あくまで軍の行動に君たちが自主的に協力する形を取る。法的には私闘は認められんし、十師族の権威で無かったことにすると何かと煩いからな」

十師族は国家の屋台骨なのだから、権威が合って当たり前と言う勢力。そして中核であつても支配者では無いと言う勢力。

この両方が軍の中にあり、どちらかという独立魔装大隊は後者に位置するらしい。

「全く問題はありません。御当主にも納得いただけるかと」

四葉家はそんなことを気にもしないし、俺の目的には関係ない話な

ので素直に納得して敬礼して見せる。

俺としてはさっさとブランシュと無頭竜の問題に方を付け、今回得られた『紅世の徒』の情報を調べたいという気持ちが高い。

その意味では、軍の方から責任を持って行ってくれるのは願ったり叶ったりであろう。

その夜の会見はそこで終了。

あとはリンをインターンとしたように、藤林少尉はその上司である専門の技術者ということで折り合いをつけて通信を打ち切った。

そして幾つかのデータを読み直し、可能な範囲でプログラムを弄つてからようやく睡眠の時間が訪れたのである。

一方の出来ることと、もう一方の出来ること

●アンダーカバー

「なんで女の買い物ってあんなに長いんだろうな」

「諦めろレオ。必要な手間だ」

朝になってから俺達は再び集合し、必要な物を求めて買い出しに來ていた。

いちいち集まったり、護衛を兼ねて送って行くのは面倒なのもあり、部活の懇親合宿という名目で計画を修正。

その為に買った物では足りず、衣服を中心に買い足しに來ていたのだ。

「でもよ。制服の延長みたいな感じで、幾つかは同じ物でもいいんじゃないかねえか？」

「それじゃあ生活が作業に成る。せつかく知りあったのだし、今のうちに仲良くなっておくのもアリだろうさ」

そう、これは必要な労力なのだ。その為にもレオの愚痴を宥めておく。

何セリンの状況はあくまで自己申告に過ぎないので、頭から信用するのは危険だ。

一族の誰かを人質として要求されて、押し込められたという話だが…。

単に後継者争いをしていて、別の後継者に捕まっただけの可能性もある。

もしそうならば対立後継者を排除した段階で、俺達を裏切ってブランシユと交渉する可能性もあるので、出来るだけ縁を深めておく方が良いだろう。

同時に俺達と組むメリットも大きくし、ブランシユ側に付くメリットを小さくすることで、ようやくリンのことが信用出来るというものだ。

馬鹿馬鹿しい話だが、無頭竜の残党がブランシユよりも先に潰れては困るとすら言える。

とはいえ、それを口にする訳にもいくまい。

話題転換として、別の懸念を口にしておくことにした。

「幹比古。SBを使って居た連中が次に何をやって来るか想像出来るか？」

「術式はチャンポンな組織みたいだから術に関しては返せる自信があるよ。でも物理的な介入に関しては難しいな」

俺に質問に対し幹比古は前置きをしたうえで、息を（意気）を整えた。

「犯罪に便利な魔法を中心としているので、専門として体系化が行われていない。

ゆえにこちらの魔法で相手の魔法に対処はし易いが、人間の搜索は元より人間の方が得意だとか。

「精霊に報告させて躁弾射撃なんて僕には思い付かなかった。もし探偵と組み合わせられたら妨害も無理かもしれない」

「なるほど。頭数を増やして、他人が入り難い場所にだけSBを投入するのか」

「遠方の手掛かりを探偵で探させシンピラを使って近隣を搜索すれば、辿りつくのは無理でも範囲を絞るのは簡単だろう。」

「そうして絞ったホテルなり別荘を、SBで虱潰しに探して行けば、いずれは此処に辿りつくかもしれない。」

「犯罪組織のシノギや抗争を考えれば、縄張りを荒らす奴や相手の拠点を探り出すノウハウがある可能性すらある。」

「いや、平常の暮らしを中断できない以上は、どこかでその線が交わる事もあるだろう。」

「相手の動かしている搜索網に、こちらの行動が引つか掛る可能性だけだ。」

「取り返す筈だった戦力が軍に拘束されてしまった為、失地挽回を考える可能性もある。」

「注意しないと、意外なほどの速さで見付けられてしまうかもしれない。」

「だとすると森崎に注意をしておいた方がいいな。俺の方は予め偽物

の予定とアドレスが組んであるが、やつの家業を考えると完全には資料を隠くせまい」

「暫くはリンに付きつきりだから問題ねーんじゃねーか?」

「この場合は護衛中だって特定されたら困るってことだよ。学校には来てる訳だし追跡されて一発だもの」

俺達の視線は女性陣の護衛に付いている森崎の元を集まる。

奴の家業は護衛業で、『子供の護衛を任せたいので、できれば若い子が良い』と聞かれたら、嘘であろうと適齢の者が居ると返すだろう。

その時に、丁度良い年齢の者が『既に長期契約があるので動けない』などと言ってしまったら、怪しまれるのは間違いが無い。

目で判断するのは流石に知識のある者でないと判らないが、誰かを守っていることが判れば、素人に任せたとしても追跡して見続けることで容易く特定出来るだろう。

「でもよ、他所の家業に顔を突っ込めるのか?」

「ブランチュを潰すまで特定されなければいい。要は『専属で護衛して居るから手を貸せない』という返事をしないように言ってもらえば良いんだ」

「そうか。リンさんを護衛中なのに、『パートタイムなら護りに行けませ』なんて言う筈が無いものね」

ある種、逆転の発想である。

森崎家はボディーガード派遣業なので、リンが戦力として雇い易い候補だから真っ先に確認するだろう。だがそう突っ込んだ質問をされるはずもない。

ならば予め、任務の都合上で特定されたくないことを伝えておけば、あとは向こうで勝手に偽のスケジュールを組むと思われる。

その辺りは森崎家もプロであり、本当に予約が入れば一門の誰かを向かわせれば済む。

いつまでも騙し通せるモノでもないだろうが、この際はブランチュ日本支部を壊滅可能な算段が付く段階まで保てればいい。

そうすれば予め戦力を配置した上で、一発逆転狙いでおびき出しても良いだろう。

(…俺の顔を一目でシルバーだと気が付いたならば、それはそれで構わないがな)

『精霊の目』である程度を把握して居るので、確実にやるなら四葉の戦力を呼び寄せて片づけてしまえばいい。

その後はリンには報告せずに、行方不明で済ませて住まえば良いので、一番手が掛らない方法だと言える。

もつとも、そこまで把握できる奴が俺の顔を見た上で、護衛を連れている可能性を考慮せずに特攻して来るとも思えないが…。

やがて女性陣が買物を終え、森崎を伴って戻って来たので先ほどの話を告げる。

そして奴の実家と折り合いが付いたところで、俺達は学校に向かった。

●ハニトラ剣道部と、裸刹朴人拳法

その日の授業はとくに大過なく、無事に放課後を迎える。

再び嵐の様な喧騒が始まり、俺や森崎も巡回に駆り出されて行く。

(視線を感じるな…。だが腕章やエンブレムには焦点が当たっては無い)

純粹に俺の動向を見守る視線が、途中途中に感じられた。

周囲の視線が風紀の腕章と紋の無いエンブレムに突き刺さっているのに対し、この視線の持ち主『たち』は俺自身に向いている。

(察するに例の剣道部か、それとも桐原先輩の剣術部がタイミングを合わせているのか。まあいい、いずれ判る話だ)

特に道筋は変えず、決められたコースで格技場に向かう。

すると視線の厚みが減って行くのが判り、『この件に関して』は予想が大きく外れて居ないのが判る。

外れている予想は俺を巻き込む為の騒動が、肝心の俺を待たずに始まってしまったて居ることだった。

「ふざけんなよ壬生！俺の癖をあいつに教えやがって」

「冗談言わないで。貴方の事で渡辺先輩の他に主将にも相談してただけよ。お陰で一年で決勝まで行ってるのに、どっちがふざけているのよ」

到着する前から、大声で罵り合う痴話喧嘩が聞こえて来た。

聞こえて来る他に他にも色々言っている様だったが、互いに遠慮のない口ぶりで気心が知れているからこそ容赦ないのだと窺えた。

「それであいつも大会に出てりや世話ねーよ！ 普通の剣道大会なら分野違いだからここまで言うかよ!!」

「魔法力で劣っているのが悪いって言うの？ そういう所が傲慢でついていけないのよ!!」

次第に激昂して来る言葉は、別に近づいているからだけではないだろう。

どっちも本気の罵り合いに突入しており、口になっている言葉に自身を追いつまれているかのようだった。

「その魔法力だって主将に負けるくらいなんだから、大したことはないのにね」

「ああくん？ あれだけ徹底したシフト取ってなに寝言いってやる。そんなに確認したいなら、見せてやるよ！」

売り言葉に買い言葉はついに最終段階に突入する。

壬生先輩は激昂すると判って居て挑発し、桐原先輩は本気で怒りながらも事前に用意しておいた手加減で場を整える。

桐原先輩の竹刀から旋風が生じて、風が周囲に逆巻いて行く。

（あれは範囲型のストーム・ブレードか。師匠は不動剣とか言っているな）

衝撃波を拡大する魔法は大きく二つに分かれる。

広い範囲にそのまま風を叩きつける足止め魔法と、線状に練り合わせてカマイタチを作る切断魔法だ。

師匠の所では前者を不動剣、後者を明王剣と呼び、合わせて大技の不動明王剣という竜巻状のソニックブレードを作るらしい。

（見切りで回避する相手への対策であり、同時に手加減をする為か。一方の壬生先輩は構築は早い、強度や使用法に難ありだな）

壬生先輩は情報強化で防御し影響を押し留めようとしている。

だが叩きつけられる風は二次的な物な為に全て防げず、更に魔法強度で改変レベルに劣っているため、あつという間にボロボロになって

いく。

その不利を補うために、ジリジリと格技場の外へ移動して回り込もうとしているようだ。

当然ながら桐原先輩がそれを許す筈も無いのだが、そこに伏兵が伏せられて居た。

あえて言うならば二人の戦いは桐原先輩に軍配が上がり、全体としては『剣道部』の方が用意周到だったといえるだろう。

外へ出て来た二人の周囲に、ホースから水がまかれて文字通り水入りに成る。

驚く桐原先輩よりも先に、伏兵達から罵倒の言葉が飛び出した。

「口で勝てないから魔法で言う事を効かせようなんて、最低！」

「そうよそうよ。それだけ我儘な性格しておいて、主将の紳士振りに勝とうなんて男の風上にもおけないわね」

∴いつのまにか剣道部のメンバーのうち、女子が外に待機していた。

そして口々に壬生先輩の肩を持ち、剣術部のメンバーが援護しようにも中に居る剣道部男子と睨みあって動けない。

外を通る生徒は剣道部女子の一方的な言い訳のみを聞く状態で、次第に剣術部が追い詰められていくのが判る。

理不尽な言いがかりをつけられ策で追い詰められ、完全に怒りの連鎖した剣術部が魔法を使用するのも時間の問題だった。

そこへ俺が駆け付けてしまっている構図であり、このままでは救いようのない一方的な断罪が決定するだろう。

(自主的に申し出た桐原先輩がどうなろうと自業自得だが、このまま剣道部が勝利を収める構図はマズイな。予定通り介入するか)

俺は鳥の翼が羽ばたく様なイメージを構築し、つかつかと歩いて行く。

そして腕章を付けた左腕を前に出し、右腕を跳ね上げた。

「双方そこまで。これ以上は事前に申し出のあった格技場の範囲を越えます」

「売られた喧嘩なんだ、風紀は黙っているよ！」

翼の形状に範囲を決めたグラム・デモリッションが、桐原先輩のス
トーム・ブレードを粉碎する。

既にかき乱された乱流はどうしようもないが、継続しなければ大し
たことは無い。

「てめえ、俺の魔法を消しやがったな？ 壬生に加勢する気か！」

「これは剣術部と剣道部の話なんだよ。余計なお世話だ、ひっこんで
ろー！」

「そうだ、黙っているウイードが！」

もう一度、同じことをして撃墜しても良い。

だが、それでは剣術部だけがやり込められる図式に変わりはない。

それに剣道部が俺に着目して、エガリテに誘おうとする契機として
は薄いだろう。

(ここはアレを使うか。間違っても犯罪組織に流すモノじゃないが)

全ての責任を桐原先輩に押しつけることにして、俺は両腕にある二
つのCADを同時に起動する。

そして剣術部が魔法を構築しきるよりも先に、干渉波を作り出して
無理やり中断させて行つた。

既に発動させた桐原先輩の魔法はどうしようもないが、どこかで掛
け直すタイミングを捕まえれば良いだろう。

(あの揺れは高周波のヴィブロ・ブレード：いや、振動波のショック・
ブレードか。考えてはいるようだな)

高周波で小刻みに揺らして切り裂くヴィブロ・ブレードと違い、鈍
い振動で防御越しに揺さぶるショック・ブレードは殺傷レベルが低
い。

前者を使えば最悪、退学を免れない可能性もある。

だが、これならば押し当て続けられない限りは危険は低く、同時に巧み
な防御を誇る者を追い詰める能力を持って居た。

手を切り割られないこともあり、俺は竹刀を握り込みながら干渉波
を放つ。

そして桐原先輩が干渉波に含まれるサイオンに寄っている間に、軽
く投げ落して腕を取ってホールドを決めた。

『こちら司波。格技場前で魔法の不正使用を確認。当該者は取り押さえましたが担架を擁します』

手加減はしておいたが地面はアスファルトである。

流石に無傷で済ませるのは無理で、ヒビくらいは入れてしまった確信があった。

とはいえ彼に同情する暇などなく、サイオン酔いから立ち直った剣術部が向かってくる。

「をい！ やりあつてたのは剣道部もだろうが！ 喧嘩両成敗って知らねえのかよ！」

「魔法の不正使用が理由だと申しあげました。剣道部の方は強度の問題で既に魔法が終了していましたし」

向かってくる剣術部のメンバーをいなし、あるいは誘導して同士討ちでぶつかる様にし向ける。

途中で再び魔法を使おうとするメンバーに対し、やはり干渉波をぶつけて消し去っておいた。

これで問題は桐原先輩一人で収まるし、魔法の不正使用で済むだろう。

加えて横入りで叩きのめされた剣術部に、それなりの同情が集まって大事に成る前に止められたと思う。

：名前や権威に泥を塗られたと思うかもしれないが、付き合いきれないので、そこは諦めてもらおうしかあるまい。

全て終わったところで俺は事後処理に入る。

ここで全てを話す事も出来ないだろうし、剣道部の連中がこちらに渡りを付けるキツカケを作っておくためだ。

「すみません。事情聴取という訳でもありませんが、後で少しお話をお願いします」

「え、ええ。構わないけど…ここで済ませてしまっても良いんじゃないかな？」

「そうそう。ワザワザ風紀まで移動するの面倒だし、こっちが悪いわけでもないんだから」

「せかつくだし、さっきの体術とか教えてくれない？ 魔法はともか

くソツチは行けると思うんだー」

予め狙って居たのであろう。

剣道部の女子たちは俺を囲んで和やかに見える雰囲気を作っていた。

だが、決定的に日常に会わない事があるため違和感が拭えない。

俺は彼女達から視線を反らし、務めて真面目な対応を取ることにした。

「申し訳ありませんが、みなさんの姿は刺激的に過ぎます。時間の開いている方が代表者で構いませんので、着替えてからお願ひします」
「え？ あ？キヤツ!？」

「あ、そう言えば…濡れてったんだっけ」

「アハハ。そりゃ男の子には目の毒よね。後で誰か行くから…」

先ほど桐原先輩を止め、一方的に話す為に水をまいていた。

一番水を被っていた壬生先輩を中心に、数名の女性メンバーも透けてしまっている。

健全な男子としては問題があるし、そうでなくとも周囲からの視線が痛過ぎる。

ある種のハーレムかもしれないが、これだけあからさまな罨だと食指も動か無い。

それに師匠に聞いたことがあるのだが、『良し来い!』と堂々と色気も無しに挑みかかって来る相手は、それほど魅力的な相手では無いそうなのだ。

恥らいが必要だとは言わないが、ハニートラップを魅力的に思えないのは同感である。

●春の香り

被害者なのに学校では詰問に見える…。

と言う理由で、学校帰りに喫茶店で話を聞くことになった。

「サーやこつちこつち！ ここのケーキが美味しいって話よ」

共通の知り合いであるエリカ『達』を連れ、壬生さやかを帰宅途中にある喫茶店へ招待した。

「別に尋問ではありませんのでお気楽に。一品だけなら奢りますよ」

「後輩に奢ってもらうのは気が引けるけど、天下のトールラス・アンド・シルバーに遠慮しない方がいいかしら」

湯上りのシャンプールの香りが仄かな色気を醸し出す。

上気した顔はやや上目遣いをしており、恥入る表情を見れば師匠などはさぞ喜ぶのだろう。

とはいえあれだけの罫を剣術部、それも付き合って居たこともある桐原先輩に仕掛けてると言う事実が興味が失わせてしまう。

これならばまだ、会長の小悪魔ぶりや中条先輩の小動物っぽさの方が好ましいだろう。

「付き合ってたこともあるからって、言いがかりをつけて来るなんて酷いと思わない？ さーやは可愛いんだから、あんなのに引つかからないようにしないと」

「もう止めてよ…恥ずかしいじゃない。なんというか、悪い人じゃないんだけど真つすぐ過ぎて」

齒に衣を着せないエリカに対し、壬生先輩は別れた男だと言うのに弁護に回り始める。

未練があると言うか、別れただけで好意は感じている様に思われた。

もしこれで嫌っているのだとすれば、好きだからこそ許せないという線なのかもしれない。

それからも取り止めの無い話題の中に、剣道部や剣術部。そして二科生と一科生の差別の話題に移って行った。

「授業でも部活でも二科生は一科生と差別されているのよ。おかしいと思わない？」

いつしか壬生先輩は今日の話題を置き去りにして、不満に思う事をぶちまけていく。

「授業は同じ物ですよ。ただ、悩みがあれば教師に相談したり、明らかな問題と改善点があれば指導する点が大きく違いますけどね」

「そ…うなの？ でも、その問題に自分では気が付けないからこそ、教師が居るか居ないかは重要だと思おうの」

こんな感じで問題点を指摘したとしても、揚げ足取りで差別の問題

に繋いで話して行く。

授業中に聞けないだけで、休憩時間や休日に聞くことは可能だと思うのだが、その点は無視して同じ話題がループしていくのだ。

「そういえば達也くんはあたし達にアドバイスくれたこともあるわよね？ さーやには何か思い付かない？」

「遠慮なしに言うならば魔法の持続時間が致命的だな。だが構築速度は早いから、持続的に使う魔法よりも一定時間の付与系の方が向いていると思う」

ループする話題に焦れて来たエリカが、何度目かの繰り返しで口を挟んで来た。

俺はそれに乗っかることにしてナイフを脇に置いて、ティースプーンとケーキ用のフォークを並べて皿の上に置く。

「壬生先輩の能力ならば刀や自分を強化するよりも、小柄や短刀に付与して投擲する方が実戦向きだと思います。この方法ならば桐原先輩とも互角に戦えますよ」

「うわっ。刀で戦う相手に、刀で戦うなって言っちゃうわけ？」

「でも、そうすれば…桐原君とも戦えるの？ 二科生の私が互角に…」
手早く魔法を構築して、付与した短刀を投げるならばかなり強力な戦力に成る。

だが、生憎と魔法持続力が足りず、強度も高いとは言えないのが問題なのだ。

彼女の能力を活かすならば、刀にこだわるよりも投擲術の方が向いているだろう。

魔法師の誰しもが瞬間的に防壁を張ることが出来ない事を考えるのであれば、刀にこだわるのは害悪とすら言えた。

「確認するけど持続力が無くても、あたしやレオみたいな戦法は無理なの？ 一瞬だけ使うとか、断続的に展開するとか」

「気休めはよせ。お前の最大の能力は感覚の棲息速度域だ。それにレオの方は速度や得意以外の系統が問題なだけだからな」

瞬間的に最善を判断する能力がエリカは恐ろしいほど早く、逆に壬生先輩は遅い。

加速魔法と加重魔法を一瞬だけ使用して切りかかることは可能であるが、変化に対応できるエリカと出来ない壬生先輩と一緒に話れない。

また、レオは硬化魔法に限っては一科生を上回る強度と管理能力を誇っており、足を止めた戦いでは一級品だった。

ここで話題が一度切れたことで、ようやく共通の知人の『二人目』が動き始める。

「ところで司は、『何を聞き出してこい』と言ったんだ？」

風上に居た渡辺委員長がCADなしで一瞬だけ魔法を使用する。

ポケットからナニカを魔法で取り出すと、風に乗って壬生先輩の元に漂って行った。

「ええとですね…主将は…」

「難しく考えるな。別に壬生の邪魔をする気は無い。私達も興味を持って居て、協力しよう言うだけだ」

臭いは情動に作用する効果がある。

複数の香料を混ぜ合わせる事で、強く思っていることを聞き出す様な一種の催眠効果をもたらしたのだろう。

それだけでは足りない為に、協力しようと言う言葉で補っている。

「うわっ、えげつな。うちの兄嫁は自分を信用してる相手を洗脳してるし」

「それは司にも言ってやれ。それに壬生の為に協力したいというのは本当ではあるがな」

CAD抜きなので大した魔法は使えないが、香料と説得で行うのであれば十分と言えた。もしかしたら司兄弟の洗脳も同じような使い方が出るのでないだろうか？

だとすると、例えばCADを持っていなくとも出会う時は警戒が必要だろう。

強力な魔法抜きでも洗脳ができるならば、話術が得意な相手の場合などはそちらの方が厄介なのだから。

「春香の術ですか。委員長が忍者の素質があるとは知りませんでした」

「九重先生の弟子に言われると恥ずかしいな。まあ強度としては、手習い程度の魔法だよ」

とはいえ魔法を使用したことには変わりない。

町に設置されているセンサーに反応するかは判らないので、後で藤林少尉にお願いするでしょう。

そんな風に考えていると、壬生先輩の口がようやくやく開き始めた。

「私は魅力的…だから、楽しく話して、シルバーに協力してもらえばいいって。…あとは、格技場で使った、アンテナナイトを使わないキャスト・ジャミングがあれば…二科生でも一科生と…」

うつらうつらと、船を漕ぐように言葉を紡ぐ。

最初の部分が繋がりが悪く後の方が明瞭なのは、壬生先輩が自分の魅力に懐疑的であり、キャスト・ジャミングの方は断言されたからだろう。

しかし…良い香りのシャンプーだとは思ったが、魅了の為の準備が渡辺先輩の香料に気が付くのが送れたのならば、皮肉でしかない。

「そんな魔法まで使えるのか？ まったくグラム・デモリッションだけでもしまったと思っただが、それ以上だな」

「魔法と言うよりは応用技なのでオフレコでお願いしますよ。誰でも使えるモノを迂闊に使ったら、どんな事故が起きるかも判りません」

「私も聞きたいけど、そういうことなら聞かない方が良さそうね」

渡辺先輩はそのまま必要な事を聞き出すと、今度は逆にリラックスさせるタイプの香料を使う。

今度は起きた事を忘れさせる為なのだろうか…。

これほどの隠し技があるのなら、七草会長がしつこいほど生徒会メンバーの協力を仰げと言う筈である。

もしかしたら市原先輩の方も、伶俐な頭脳以外にとんだ隠し技があるのかもしれない。

「ねえ達也くん。どこを襲撃する気だとか、何を考えてるか聞き出さなくて良かったの？」

「その辺りはプロテクトが掛っている可能性が高いからな。それに何処を襲う気かは予想が付く」

それに次期に関しては、今週以降に起きることで変更される可能性が高いだろう。

ここは余計な危険を背負わず、推測している事態を固定する事で予想外の出来事を避けるべきだろう。

この一日は様々な情報が得られたし、やっておくべき布石を置くことができて有意義に過ごした。

満足して次の変事に備えておくべきだろう。

朝がた話したように無頭竜が襲撃を仕掛けて来たり、スケジュールに意外な進展が起たりすることがないとも言えないのだから。

ブラツクリスト

●討伐計画

「綺麗どころまで用意して、秘匿技術を盗み出すそうとか剣道部は完全なクロってわけね」

生徒会室で昨日起きたことを報告。

七草会長は嬉しそうに渡辺委員長が上げた成果を確認する。

「ねえねえ、達也くんはどう思う？」

ニコニコとした表情は楽しげで、実に小悪魔ぶりを発揮して居る。

おそらくは自分が見込んだ生徒会メンバーを、対ブランチユ・チームに何度も押していたからだろう。

とはいえ部下の活躍を喜べる上司と言うのは貴重だ。

うちの親父や小百合さんを見てみると、余計にそう思う。

もつともあれはあれで常識的なのところが、駄目な方の親父と比べて好感が持てる訳だが。

「会長の方が上でしたよ」

「えっ？」

話を流す為に適当印行つたのだが、会長は意味をつかみ損ねた様だった。

「半裸の綺麗どころよりも会長の笑顔の方が上だと申し上げました」

「えっえっ？ えー!?!」

直球の表現に慣れて無いのか、会長は顔を赤らめて戸惑っている。

あるいはいつものコケティッシュな雰囲気は作り物で、ストレス解消用にからかつて居るのだろう。

「中条先輩の可愛らしさや深雪の静かな佇まいは、ガラスケースに入れて置きたくなる人もいるでしょうね。その面に置いて生徒会側が剣道部を圧倒して居るのは確かです」

「達也くんのイジワル。…でも、あえてリンちゃんを外して表現したのは、もしかしてわざとかな？ お姉さん気になっちゃう」

流石に冗談だと気がついて落ち付いたのか、せめてもの反撃とばかりにこの間の話題を蒸し返して来る。

仕方無いので俺は苦笑して説明を付け加えた。

「凜とした佇まい…だと二重の意味で被りますね。だからと言って他の表現では文系美人の表現になってしまいますが、市原先輩は理系ですから」

「リンちゃんだけに凜とね…つちえ。面白くないわ」

七草会長は上流階級にそぐわぬ仕草で、つまらなさそうに舌打ちをする。

もしかしなくてもこちらの方が素なのではないだろうか？

先ほどの会長への表現を訂正するのであれば、今の表情の方が一番上で、一番下が剣道部のアマゾネス達で間違いが無い。

「じゃあさ、リンちゃんの方はどうなの？ 満更でもないんじゃない？ 年下だけどお金持ちよー？」

「会長。少し想像の翼を広げてください」

からかう対象を切り替えた会長であるが市原先輩は涼しい顔で切り返した。

「私と司波くんだと、ベットでも子供の前でも研究の話ばかりだと思えますよ」

「あー見えるようだね。絵に描いたような情緒不適合者の夫婦生活」

「俺の事をどう考えているのかが良く判りました。…本題に戻りましょう」

平然とした調子で入力続ける市原先輩に会長はアツサリと撃沈された。

俺は二人のやり取りを愉しめる立場にないので、さっさと用件を切り出して置く。

「ブランシュの計画そのものは読めます。というより戦略目標は魔法科大学からの知識、戦術目標は二名の魔法師のみです」

「会長と十文字くんですね。そのどちらかを確保せねばならぬとしたら、おのずと絞れますか」

「も、もしかして私なの？」

俺と市原先輩の視線が会長に集まる。

遅れて他のメンバーも同様に見つめているのだが、顔をあからめる

どころか気後れしてブルリとしていた。

無理はあるまい。浚われてDNA情報を奪われたり人体改造されるなど想像したくもあるまい。

「場所の固定がし易いですからね。その意味もあって、二科生と一科生の対立を助長し対処に迫らせる気でしよう」

「対立を納める為に全校集会を開かせ、CADを持たずに講堂へ集まったところを抑えれば用が足りますね」

「ど、どうしよう…納めない訳にはいかないし、特別閲覧室も考えたら人でなんて足りないじゃない…」

自らがメイン・ターゲットとあって、先ほどまでの強気の姿勢が下降する。

自覚してもらう為に説明したとはいえ、必要以上に委縮してもこまるのでここでフォローしておくでしょう。

「閲覧室の方はセキュリティの関係もあって時間の猶予を与えなければ大丈夫です。それでも不安ならば専門家を雇えば間違いがありません」

許可を出せる教師は普段から接触し難い対象なので、洗脳したり浚ったりも難しい。

パスワードを抜いてセキュリティを突破するような時間を与えなければ良いのだし、専門家が無効化に掛ればまず防げる問題である。

テロリストの中にICEブレイカーが居ないとは限らないが、やはり素人で得意な者と専門家の間には高い壁があるものだ。

「次に居場所を固定されて襲撃されることですが、逆に言えば戦力を集中して護れると言う事です」

「判っている襲撃は対処もし易いですからね。いつでも何処でも襲撃される方が厄介かと」

「二人ともイジワルね。そこまで言われて震えて居られないわよ。こんな所までお似合いなんだからっ」

催眠ガスやフラッシュグレネードをいきなり投げ込まれば確かに脅威だが、判って居れば封じる魔法は幾らでもある。

それを風紀や生徒会の複数名が入力しておき、咄嗟に動ける誰かが

対処するのはそれほど難しくはない。

人間は驚きと立場に寄って行動を大幅に制限されるが、来ると判っている奇襲ならば全員が動けないなど稀なのだから。

●疑似餌ルアー

「で、でもですね。例のテロ用CADを持った十人くらいの中から協力したら大変なんじゃ？ それに強化人間にするなら会長でなくともどこかで誰かを襲撃とか…」

「あのCADに関しては服案があります。襲撃できなくもないですが、吸収された組織にも都合があるでしょう」

「面倒を見てやるからお前達の技術をよこせと言われても、流石に渡せないわよね」

大丈夫だと思つて安心したのか、会長は不安がる中条先輩を宥めに掛つた。

その様子は先ほどまで軽く震えていたとは思えないが、表面上であれ取り繕つてみせるのが十師族なのだろう。

それに無頭竜が即座にブランチュに強化人間手術の術式を渡さないと言うのは、それなりにありえる話なのだ。

衰退しかけた組織がおいそれと屋台骨の技術を渡すわけもなく、現にリンとて全てを俺達に話さないどころか部分だけを語っている可能性すらある。

この時は気が付かなかつたのだが、もつと強力な技術を隠す為強化人間手術を守っていたらしい。

「その辺りを考えると成果物である強化人間を現物で渡すというのが精々でしょう。ということは人数が多ければ多いほど、追跡者は少なければ少ないほど良いということになります」

強化人間を複数製作し、貢献度に応じて渡してやるということならばメンツも技術も保たれる。

実質的に渡さざるを得ない状況だとしても、それにこだわるのが人間と言うものだ。

「要は襲撃が判っている状態で護り切れれば問題無いということよね。じゃあさつき言つてた服案に関して教えてくれる？」

すっかり落ち着いた会長は頷いて必要な対処手段を求めた。

俺は頷いて一高の地図を指差しながら説明を続けることにした。

そこには風紀委員の巡回コースが描かれており、幾つかを持ち回りで担当して居る。

「予め剣道部員たちの魔法傾向を確認した上で、俺が狙い易いコースを回ることになります」

「囿という訳ですか。確かに司波くんが使ったというキャスト・ジャミングの効果を見るには良い機会ですね」

「そっか。グラム・デモリツションはチャージタイムがあるのが一般的だし、キャスト・ジャミングの方が咄嗟に使い易いわねえ」

グラム・デモリツションは最強の対抗魔法と言われているが、相手よりも魔法を視認して上手く当てないといけない。

キャスト・ジャミングであれば、サイオンのコスト的にも波の大きさ的にも相手の居る方向へ乱雑に放つても問題は無い。

となれば有用性を確かめる為にも、俺が一人で巡回して居る時に狙い撃ちたくなるだろう。

「じゃあそこを捕まえる訳？」

「いえ。剣道部の周囲で確認いただければ幸いです。追って捕まえるよりも誰が動いているのか特定し、追うにしても包围を絞ってCADの隠し場所のエリアを特定した方が早いですね」

剣道部の誰かが来るまでは今の段階で特定できているのだ。

ならば剣道部から出た者・戻って来た者、移動経路を確認すれば良い。

後は全校集会をした時に剣道部所属の者を警戒しておくなり、CADの方は風紀が偶然見付けたことにして事前に回収しても良いだろう。

「でも、そこまで上手く場所を特定できますかね？」

「魔法を使用しても問題無いだけで、学内にも魔法を検知するセンサーはありますよ。一度だけ襲う訳でも無いでしょうから何度でもチャンスはあります」

もつとも、俺はその前に対象を絞るつもりで居る。

先ほど事前に魔法の傾向を確認してからと言ったが、あれは嘘だ。俺が持つ『精霊の目』で魔法の投射パターンを軽く把握しておき、巡回中に襲ってきたやつとデータを照合する。

人が少ないコースを通るのは、襲撃させ易くする為ではなく、特定し易くする為と言った方が良いだろう。

なにしろ精霊の目による魔法性質の確認は、複数が近くに居る場合は相手が魔法を使用しないと確認し難いのだが、一人で居るなら何とか魔法を使わずとも成功する場合があるからだ。

「シンパを使うとは思いますが、もしかしたら司・甲自身が動くかもしれないですね。そうなってくれば後が楽なのですが」

「ならセンサーの方はこちらで掌握しておくわ。達也くんは怪我しない様にね」

百山校長と話がついているのであろう、七草会長は準備を快く請け負ってくれた。

後は風紀や部活連の中から信用のおける数名を選んでもらって、剣道部の周囲に配置すれば理想的だろう。

● 予定内と想定外

数日して、嵐の様な帰還が過ぎ去った。

魔法の不正使用や喧嘩以上の事件は無く、特に目立つ事はそうそう起きはしない。

∴俺を襲撃する件は別にして。

「大変だったそうだね。それで成果はどうかな？」

回収したセンサーのデータを（繰り返し使用すす為の）処分する前にコピーして、五十里先輩と解析を始める。

「まさか仲裁の方で腕試しをされるとは思いませんでしたよ。お陰で死に掛けたんですが…」

予定外だったのは、桐原先輩を取り押さえた俺に挑んで来る者が居たこと。

二人で喧嘩するという演技をして、俺が止めに入る所でワザとこちらに誤爆するのだ。

精霊の目で見ても魔法式だけでは対象が判らないので、流石にこれ

を回避しきるのは難しかった。

「代わりにという訳でもありませんが、剣道部のメンバーが残したデータはこの通り確保できました」

「この短時間で良く把握できるね。僕なんて一致した波調データを見せてもらって、ようやく判るくらいなのに」

俺はセンサーから取り出した波形データを、予め測定した剣道部メンバーの中から特定して見せた。

良く判る一部を参考にその部員の全データを見せると、五十里先輩も暫くして特徴を掴んでくれる。

「おそらく指導の先生の方がもつとうまく出来ると思いますよ。俺が可能だったのは、予め特徴を掴んでいたからです」

当然嘘の言い訳で、予め調べていたのはエイドスへの魔法投射パターンだ。

とはいえそれを説明する訳にもいかないなので、サンプルデータを見せて納得させる。

「それって君が教師クラスのデータ把握力を持って居るってだよ。それはそれで凄いなと思うよ」

「俺にはむしろ、突然言われた解析をその場で実行できる五十里先輩の方が凄いなと思いますけどね」

これは嘘では無く、本当に感心して居る。

俺が精霊の目というカンニングを元に言い訳して居るのに対し、先輩は本当に比較で特定して居るのだ。

「やっぱり主将の司先輩は加わってないね。それと精鋭である幹部も」

「物がモノですし使い捨ての尻尾にやらせたんでしょう」

テロ用のCADを使って試した自覚があるからか司・甲は襲撃を行って居なかった。

僅かに所属する一科生も同様で、こちらは理由を付けて拘束したかったので残念ではある。

これだけ用意周到だと、CADの隠し場所を見付けても迂闊には回収しない方が良いかもしれない。予備どころか本命が隠してある可

能性もあるのだから。

測定データとセンサーのデータから実行犯と司・甲の波形を除くと、他の剣道部が測定データに残り、センサーからは完全に別物のデータが残る。

「でもこっちのデータの無い人は誰だろ」

「そっちは他の風紀委員が特定してくれました。非魔法系クラブにも影響力を残していたようです」

これは完全に不意打ちだった。

魔法系クラブに対する非魔法系の不遇を理由にいちやもんを付けるところまでは予想していたが、まさか実行まで協力するとは思わなかった。

「そういえば関本先輩が得意げだったわえよねえ」

意外そうな顔をする千代田先輩であるが、俺としては見付けてくれた関本先輩には感謝の念しかない。

「得意げに剣道部が怪しいと言っておいて、他の非魔法系もとは思わなかったので汗顔の至りです」

「そこまでかしくまることもないと思うけどね。君が居なければこうして特定することすら難しかったんだし」

恥ずかしさで顔から火が出るようなことは無いが、思考の穴に陥っていたと言うべきだろう。

本当に非魔法系にまで根を張っているならば、もっと多くのクラブに影響して居る可能性もある。

もちろん杞憂であり、使い捨てだから襲撃させた、使い捨てではない人材として他のクラブから一科生を引き抜いて手元に置いた…と考えられなくもない。

（ここはプラスに考えるべきだな。最後まで温存された方が危険だった訳だし、調査の成績を誰かと競っている訳でもない）

怪しい剣道部との接触を見付けたということ、発見者の関本先輩は意気揚々と成果を誇っているらしい。

俺が測定したデータがあると知るやソレを要求したとのことで、今頃はパターンの解明に勤しんで居ることだろう。

市原先輩は若干不満げな様であったが、後で会長たちと一緒に宥めておくとしよう。

「話が変わりますが、先日のデータを元に改良品を設計されましたよね？ 今日になって製造ができたそうです」

「じゃあ良い機会だから週末にでも何処かで受け取らせてもらっても良いかな？ どんな物に仕上がったか興味があるんだ」

この日の最後に、俺は五十里先輩から受け取ったデータを元にラボで製造したCADの件を話した。

押収したCADを元に刻印魔法で改良したものであり、テロリストがどこまでの品を持って居るか…という検証の為に作って見たらしい。

もつとも五十里先輩が途中で暴走したようで、刻印魔法専門家による魔改造バージョンもあるというのが笑える冗談なのかもしれない。「構いませんよ。俺もデータの入力をしてみて、そこから更にブラッシュアップしてみたいですからね。せっかいですから一緒にラボに行きましようか」

「悪いね。天下のトールラス・アンド・シルバーに他所者がお邪魔させてもらって」

「ちよつと司波くん、人の婚約者をデートに誘わないでくれる？」

俺と五十里先輩は千代田先輩の様子に苦笑しながら、適当に待ち合わせを決めて下校する事にした。

リーヴス・フオウ・フオア・リーヴス

● シールド・デバイサー

週末までの間に転居先の資料を揃え、リンと森崎に渡しておいた。そろそろ七宝家の別宅から離れておいた方が、場所の秘密保持としても勢力的にも良いだろう。

その上で俺はレオとエリカを連れてFLT社に赴いた。

「俺も連れてつてもらって良かったのか？」

「まあな。レオに渡す武装一体型CADもあつたし、慣れる為の練習も要るだろうと思つてな」

俺の方から五十里先輩に渡したデータもこちらに帰つてきている為、当初は予定の無かつたレオも連れている。

特定の魔法に特化したCADを、刻印魔法を使用して更に特化したフルカスタム・モデルだ。

「あー、こないだ話してたやつ？ 五十里先輩と相談で来たら作るとか言つてたつけ」

「そう言うことだ。こつちもレオのデータから色々フィードバックするから気にせずに使つてくれ」

「くれるつてんならもらつておくけど、ロクにデータ取る前から壊しても文句言うなよ」

武装一体型CADのウリは強度なので、データ検証中に壊れるはずもない。レオなりの照れ隠しなのだろう。

「エリカは刻印魔法を使ったCADの熟練者だから、感じたことは何でも教えてくれ」

「構わないけど食事くらいは奢つてもらおうわよ？ もちろん食堂の昼食以外で」

エリカのウインクに俺は肩をすくめて請けおつた。

専門家を雇えば時間幾らの費用が掛るし、そのくらいは安いもんだ。

「でも生徒会の人も合流するなら、せつかくだしリン達も連れてくれば良かったのに」

「どこで見咎められるかも判らんし用心に越したことは無いな。逆に別のメンバーで吊るんでいる姿なら見られてしまう方が良い」

確かに戦力的には十分だし、リンの気晴らしを考えれば考えその物は悪くない。

だが、何を考えているのか判らない相手をFLTへ連れて行く気は無かったし…。無頭竜が搜索して居る可能性を考えれば、用心しておいた方が良いだろう。

やがてコミュニケーションで待ち合わせのターミナルに訪れると、同じ様なサイズのコミュニータが去って行くところだった。

「こんな所まですみませんね」

「いえー。あのフォア・リーヴス・テクノロジー社。それもトーラス・アンド・シルバーのラボに行けるとなれば、千里の道も一步に過ぎません!!」

そこに居た三人のうち中条先輩が元気よく駆け寄って来た。

ことわざの引用が微妙に間違っ居るような気もしたが、デバイス・オタクであるならばそのまま四方を掛け回りそうな気がした。その姿はまるで…。

「…? 何か失礼な例えをしようとしませんでしたか?」

「いえ、特には。今日は春にしては暑くなりそうですし、さっさと入ってしましましょう」

部屋中を走り回る子犬の様だと思ったところで察した中条先輩が制止に来る。

苦笑すると判ってしまうので、俺は率先して社の方に向かった。

「では失礼しますね」

「失礼しまーす」

俺のIDでみなのお客様パスを発行すると、五十里先輩を筆頭に一同が入って来る。

そのままラボの方に移動し牛山主任の訪れを待った。

「これはこれは御曹司。今日は随分と綺麗所をお連れで、どのお嬢さんが意中のお相手ですかい?」

「そういうのじゃなくて一高の仲間達だよ。それと五十里先輩は男だ

し千代田先輩はその婚約者だから」

軽口を叩いていた牛山主任が怪訝な表情を浮かべた。

いかにも驚きだと言わんばかりに、意外だと大仰に肩をすくめて見せる。

「おや、こいつは驚きました。先日にも奥様が本部の方へお見えになられたので、御成婚の準備かと」

牛山主任は小百合さんのことを、社長夫人と呼ぶか本社の部長と呼んでいる。

「という小百合さんでなくて、お袋の方が？　…まさかな」

となれば駄目な方のお袋…いや、四葉の当主として訪れたのだろう。

幾つかの会社を経由して居る為にFLTへ姿を現す必要も無いことから、間接的なメッセージがあると思われた。

「牛山主任。みんなを集めてもらえますか？　本部…いえ本社の連中に知られたくないので、こちらが試運転を済ませている間に適当なペースでお願いします」

「へいっ。とうとう来るべきモノが来たってことですかい…」

かねてから考えられてきた開発三課の追放劇が軌道に乗り始めたのだ。

そう時間が掛らない内に、実行に移されるに違いない。

「立て込んでようなら出直そうか？」

「あたし達は町へデートに行くから遠慮は不要よ？」

「差支えなければ居ていただけるほうが助かります。もちろん、口止め料もタツプリ弾ませていただきます」

五十里先輩が上目遣いで確認して来るが、見学とCADのテストに没頭して居る方が本社へのカモフラージュになる。

急に課の者を呼び集めてしまうよりも、色々と試験運用や質疑応答などで誤魔化している方が望ましい。

「でも、何があったんです？　凄いい機密が盗まれそうになった…とか？」

「どちらかと言えば、ソレを開発できそうな目途が立ったところです

ね。本部の連中がピリピリしてるところを見ると、やり過ぎてしまったようですね」

中条先輩がおずおずと尋ねて来るが、問題無い部分で話しながら考えを整理していく。

元もと切り離す話は聞いていたが、…こちらが飛行魔法の目途を立てたばかりであり、心の奥底を見通しているのかと思うほどに恐ろしいタイミングである。

「研究中のメンバーを呼び集めるのは上から頭ごなしに言われるのと、予め聞いておくのでは皆の対応が違うので説明会を開きます。突然の事で上手く話がまとめられるか不安ではありますが…」

準備はしているが万全とは思えない。

開発チームに愛着を抱き、研究を続けたいと思うように誘導はしている。説得材料もネームバリューも、新しいCADシリーズの採算も立ってはいるのだが…。

問題なのは全てを決めるのが人の心だと言うことだ。

金や立場で釣ったとしても、企業本体である本社の安心感や向こうの用意する材料に比べようはずも無い。支社化だからベンチャービジネスを立ち上げるよりマシとはいえ、都落ちで福利厚生や待遇面が下がる事を喜べるとも思えないからだ。

約束出来るのは唯一つ、自分が望むままに研究可能だと言う環境だけである。

それは俺が自分の研究の為に確保して居る大前提であり、逆に言えばそれだけしか保証できなかった。

「じゃあ司波くんが考えている事をそのまま話せば良いと思いますよ？」

「中条先輩？」

突然の提案に考えが真っ白になった。

「どうやればこれだけ楽観的な見解を持てるのか？ 理屈で言えばマイナス面の方が多はずなのだ。」

それに対する答えは実に情緒的だった。理解の外と言っても良い。「だって天下のトールラス・アンド・シルバーが凄い研究を成功させたん

です。これに着いて行かなきゃ技術者じゃありません！」

「偉れえ、良く言ってくれましたお嬢！」

「牛山主任：戻ってたんですか」

中条先輩が断言するのを、伝達を終えたらしい牛山主任が力強く固定する。

「何人かに伝言ゲームを頼んできましたよ。それにしても水臭え、御曹司はどっかりと構えて『黙って俺に着いてこい』とでも言ってくれりゃあ良いんです」

「それじゃあどこかで勘違いする者も出て来るでしょうに…」

理屈にもなっていない言葉。

だが不思議とありがたい気がする。それはおそらく、俺がそう信じたいからだろう。

「判りました。今はその言葉に甘えさせていただきます」

とはいえ賽は既に投げられており、やれるだけのことはやったと信じる他はない。

協力を要請するなり謝礼を渡すにしろ、後で可能な限り配慮すべきだろう。

デバイス好きの中条先輩には牛山主任と一緒に、ここの資料館を愉しんでもらうとして…。

まずは本社へのカモフラージュを兼ねて試作品のテストを始めることにした。

●フライ・イン・ザ・スカイ

「お、浮かんだ。前に毛布で試したやつか？」

「ああ。原理的に言うて固定しているだけだな」

レオが概念練習用の剣にサイオンを通すと、剣先が浮かんで定まった位置に固定される。

やがてサイオンの供給を止めたところで元の様に一對の剣に戻った。

以前、七宝家の別宅に来たばかりのころに試したことがある硬化魔法の使い方だ。

レオは首を傾げる代わりに、カッチンカッチンと何度もサイオンの

供給を流したり止めたりしている。

「あの時に使った硬化魔法の応用で、柄元の延長上に刃があるのだと思えばいい」

「前に達也くんが説明してたでしょ？ あつたま悪いわねえ、サイオン流したまま剣を振ってみなさいな」

「こっか？」

デフォルトだと柄から2 m程度の差に合わせてある

エリカが言った様にレオが起動と共に剣を振るうと、剣先が2 mの距離を開けてコンパスのように半円を描いた。

「すっげ。毛布と違って自在に動かせるぜ。2 mの剣…っていうには中間がねえが」

「武器としては剣と言うより鎖鎌、あるいはフレイルやモーニングスターの方が近いな。固定する長さの方は最初の設定である程度は調整できる」

実際の武装と違い、一度起動させれば2 mで固定したままだ。

サイオンの供給を半端にして途中で短くなったりはしない。

「今は供給が必要だが、完成品はサイオン流す段階で時間の方も固定する予定だ。使い方は判ったか？」

「ああ。実物の剣でも柄元で切ったりしないし、ほぼ剣として使えばいいんだろ？ なら楽勝だぜ」

エリカなら柄元の切れない部分で戦う事も出来るだろうが、余談なので突っ込まないでおいた。返答を受けてターゲットを順次立ち上げていく。

カタンカタンと立ち上がる人形モドキが四つ、右に二つ左に二つだ。

「あれを標的に試し斬りをしてくれ。幾つか切ったら適当に持ち方を変えて、態勢が変わっても同様の位置であることを確認してもらおう」

「あいよっ。いっぺん忍者スタイルってやってみたかったんだよな」

初めに右側の標的を正眼に構えて砕き、次いで逆手に構え直して跳ね飛ばして行く。左が折れただけなのは単に態勢が不十分で力が乗

りきらなかったただけだろう。

もし下から上に切り上げるような振り方であれば、逆手持ちでも十分に折れた筈である。

「これに何の意味があったんだ？」

「決定した相対位置が変わらないということ覚えてもらいたかった。完成品なら扱い易い配置を決めるべきなんだろうがな」

あくまでこれは練習用であり、刻印魔法によるサポートも入れても見たいところだ。

本命はあくまで次の試験であり、惜しいがここで時間は潰せない。「次は音声入力と位置変更のテストを兼ねてみる。そこの黒いテールクロスの上にあるナツクルガードをいつもと反対側に付けてくれ」「ちよつと小さいけど……まあ飛ばすオプションが重要なら小さくても良いのか」

レオがいつもの籠手より小さなナツクルガードを付けると、いつでも良いぜと握り込む。俺は頷いてからスイッチを音声入力しモードを立ち上げた。

「起動コマンドは『シュバルツ・シルト』で、相対位置変更は『アイン』・『ツヴァイ』・『ドライ』だ」

言いながら声紋をレオに調整し、その間に改めて奴が音声認識を同期させて行く。

不思議なのは渡したCADを弄っている五十里先輩の所へエリカが移動して、何かを囁き合っているのだがここからでは聞こえるはずもない。

「良さそうだな。なら掌を正面に向けてからアインの位置を試験する」

「そんじゃ行くぜ。シュバルツ・シルト、アイン！」

俺の指示通りにレオが掌を正面に向けてから叫ぶと、黒いテールクロスがふわりと浮かんで盾のように視線を遮った。

驚くレオに対して、あの二人はいかにもと言う表情を見せていたが……。なるほど、布に刻印魔法を刻んで入れていた事に気が付いていたのか。

「あの時に毛布で試してたやつより、ずっとスムーズになってるな。しかもビシッと決まってやがる」

「刻印魔法を刻んだおかげで魔法が入り易いのと、形状を最初から決めているからだな」

硬化を相対位置にかなり持つて行かれた毛布の時と違い、今回は強度もかなりあがっているはずだ。もし戦闘に成れば自在に動かせる盾として心強い存在に成ってくれるだろう。

「次に位置変更を試すがツヴァイは握り拳で、ドライは特にないが周囲に誰も居ない状態で頼む。それと一度起動したら位置変更は番号だけで良いぞ」

「こんな感じで握れば良いのか？ なら前のが切れたら試すな」

説明が終わって暫くして最初に使った魔法の設定時間が終了。こういうのを見ると、長い時間設定よりも断続的に仕様を継続する方が硬化魔法には合っていると理解出来る。

魔法全体としては逐次展開は古臭くて不便という印象はぬぐえないが、一部の魔法には相性が良いものもあるのだろう。それに：概念だけをループキャストやパラレルキャストと組み合わせても面白いと思う。

「シュヴァルツ・シルト、ツヴァイ！」

レオが拳を突き出しながら魔法を使用すると、手の甲の位置に合わせて布が飛翔する。

続けて周囲に誰も居ない位置に移動して、連続で相対位置の変更を行なった。

「アイン、ツヴァイ、ドライ！」

再び掌を突き出すことで前面に、拳を構えて握ることで側面に、最後に両手をぶらりと下げた所で背中側に黒い布が連続で移動して行なった。

「おっもしれなあ。これもさつき見たいな剣として使うのアリなのか？」

「ああ。初期設定しているのは防具として戦闘中に良く使いそうな場所に固定しているが、やろうと思えば好きな位置・形状にできるぞ。

それこそ白兵戦闘メインの奴と射撃系が得意な奴じゃ全然違うしな」
レオの要望を入れて位置や形状の修正を行って行く。

正面のアインは拳の開閉に関わらずに前面、ツヴァイは少し丸めた状態で側面として裏拳用の玉として使うことにした。

さっきの試し斬り用の標的でスイングを確かめた後、ドライは畳んで移動・待機状態としランドセルに入れて背中での防御を兼ねることにする。

それで終わったかと思ったのだが…。

「ちよつと閃いた。さっきの標的を出してくれよ。別にこいつの設定は修正しなくていい」

「構わんが、何をやる気だ？」

標的を出し直すとレオは直接に布へ硬化魔法を使用する。

そして逐次展開で少しずつ形状を変更しながら適当に持ち易く修正して行つた。

「おらよつと！ シュヴァルツ・シルト、ツヴァイ！」

「ブーメランというか巨大手裏剣の方は中々だな。マジックハンドの方は微妙だが、キャッチ代わりには問題無いか」

レオは両手を使って硬化させた布を放り投げ、外れそうになったところで形状を変形させた。

今回はひっかけただけであるが、何度か練習すれば当てる事もできるし、握り込むのは無理でもキャッチするだけなら問題ないだろう。脳筋に見えて頭が回る所は面白い奴であるとも頼もしいとも思う。

その様子を見ていたエリカ達の会話が、今度は場所が近い事もあってちゃんと聞くことが出来た。

「近くで確認したかったのか？ 何の相談をしていたのか知らんが」

「いやね。薄羽蜻蛉って魔法がうちにあるんだけど…」

「これと同じ様な刻印魔法を使った布へ硬化魔法を掛けて、剣にする白兵用魔法なんだよ」

…なるほど。

布に魔法を掛け、掛り難いのを刻印魔法で補強するのは便利使い出来ると思つた。

だが便利であるならば、同じ突破口を誰も考え付かないという理屈はない。薄羽蜻蛉という魔法は剣の魔法師としての千葉道場が暗器として携帯するにはもってこいと思われた。

「と言う訳で、コレの習熟が終わったら薄羽蜻蛉を教えてやっても良いわ」

「ウゲー。それって延々と努力しろってことじゃねえかよ」

「ボヤくな。慣れ易いように今から適当に白兵用のを入力しておくから」

上から目線のエリカであるが、奥義を教われる以上はレオとしても断わる義理はあるまい。

俺はさきほどのレオの使い方を見て、思い付いた新しい形状を早速入力しておくことにした。

「へえっ。さっきの会話だけで新しいのを思い付いたの？」

「レオがやったことの焼き直しですからね。それを白兵用に応用するだけなので別に特殊な事じゃありません」

「あー。布で折り紙やるわけね。素人独自の発想と言うか、突き抜けたら意味があると言うか」

「てめえはその上から目線を何とかしろよったく」

新形状といっても、上手く捻じ込んで棒状にするだけだ。

この形態を形状登録し、次に相対位置を握り込んだ拳同士の延長上に置く。

そして再び元の一枚布の状態に戻し、ランドセルの中にしまっていた。

「レオ、今度は剣の柄を両手で持つように握って見てくれ。コマンドはヴォルフズ・コルヴァンだ」

「出るー！ ヴォルフズ・コルヴァン!!」

留め金を掛けて居ないランドセルは蓋を跳ね飛ばし、緊急展開して両拳の先に延び上がる。

それは槍と言うには歪で、どちらかといえば狼牙棒に似ていたので適当に名前を付けておいた。

色々途中で増えたものの、これで当初のスケジュールも無事に終了

だ。

「五十里先輩。この布に施してある刻印魔法をもう少し改良したいのですが、なんとかありませんか？」

「形状によっては捨捨選択する必要はあるけど可能だと思うよ。今日貰ったCADを見るついでに少し考えて見ようか」

「えーっ。まだやるのー？ せっかくの週末なんだからデートにいいよー」

技術系の五十里先輩には楽しい作業かもしれないが、千代田先輩には面倒だったようだ。渋い顔をされてしまう。

急がないのでフォローを入れることにして、残りの時間は開発チームのみんなを説得する内容でも考えるか。

「別に直ぐにいじる必要も無いので、持ち帰ってからで構いませんよ。レオの方は最初に渡した剣で練習してもらいますから」

「そうしてくれるとありがたいかな」

「悪いわね。こんど精神的に埋めあわせするから」

なんとというか、この精神的な埋め合わせで補充してもらった例を聞いたことが無い。

俺は表情だけで笑って済ませると、可能な限り急いで資料と『あの魔法』の準備を始めた。

● 追い出された場合の移設候補から始まって、研究に置けるメリツト・デメリツト。

他にも支払い可能な給料や用意できる福利厚生。『あの魔法』の目途が立ちはしたが、どの程度で実用化出来そうかを打ち込み始める。

中条先輩や牛山主任は大丈夫だと言ってくれたが、この世の中で自分ほど信じられない者は無い。俺が俺を信じられるのは他ならぬ深雪が俺を信じてくれるからだ。

ならばギリギリまであがき、データを揃えてから運を天に任せるしかないではないか。

「御曹司。垂れ流してる馬鹿以外はみんな集まって来やしたぜ」

「ありがとうございます。こちらもなんとか終わりましたよ」

どうやら牛山主任の方で本部にこちらの情報を流していた奴を特定してくれていたらしい。

そのことに御礼を言おうとすると、首を振って不要だと言ってくれた。牛山主任は俺の才能あつてと言ってはくれるが、こういう面でも俺は彼にはかなわない。

なにしろ俺は十六の子供にしか過ぎず、改造されたことにより意思決定を始める年齢が早い事を踏まえても、社会人としての経験が圧倒的に足りないと言える。

だが彼らのサポートを受けることはできる。特に最も足りない思いと言うモノ、ここに来た時に主任や先輩から受け取ったことで自分を強引に舞台に立たせることが出来るのだ。

俺は自分が優れているなどと一度も信じたことは無いが、俺ならばやれるという深雪や牛山主任たちの言葉があるからこそ信じたいと思う。

「現在、俺が研究中の魔法が暫定的ながらも完成し、目的としている所へ到達する目途が立ちました。しかし…」

これは嘘だ。

完成版よりも先に、簡易版を強引に成立させているに過ぎない。

だが皆を説得する為のインパクトとしては十分だし、他の研究所では出来ない研究であれば残ってくれる可能性は高いだろうと見せる気に成っただけの話だ。

「それは俺とこのラボの立場を大幅に引き上げるモノになると予想され、この事を嗅ぎつけた本部がこれまでにない圧力を掛けようとしています」

「御曹司、これまでも圧力なら目いっぱい掛ってました。それ以上の圧力を掛けなきゃならない魔法って何すか？」

俺は牛山主任が入れてくれた相の手に頷き、さきほど強引に仕上げたCADを取り出す。

研究用に作られた大容量・小形の物で、記録装置が付いている優れ物だ（その分だけ高価だが）。

これを貸してもらおう段階で、ある程度は彼に話しているのだが、話

題をスムーズに移行させる為に知らない振りをしてきているのだろう。

「まだまだ試験用で、サイオンが多く制御力の高い深雪くらいしか使いこなせませんし、俺もかろうじて使える程度ですがやってみせましょう」

これも嘘だ。

自分にも使わせてくれと言い出されない為に、あえて最高レベルの魔法師である深雪に絞り、動かす程度ならばという前提で俺が使用する。

もともと研究段階なら今の段階で十分なのだが、やはり自分が使用してみて不自由だとガツカリ感が多いと判断して誤魔化す事にした。

CADのスイッチを入れ、サイオンを自動吸引モードにして魔法を起動する。

ゆっくりと俺の体が持ち上がり、決めておいた位置で固定した後、ゆっくりと旋回していく。

「飛行魔法…っ」

「飛行魔法が完成したのか!？」

「と言っても、まだまだ不恰好で浮いていると言うレベルですけどね。時間制限と起動式関係の壁はクリアしました」

これは嘘では無い。

重ね掛け不能な魔法に魔法を重ねるという矛盾が、飛行魔法の完成を妨げていた。浮くだけならばともかく、姿勢制御の度に魔法を打ち消して魔法を掛け直したのではまともに使用出来る筈が無い。

大きい魔法式は負担が大きく、かといって小さい魔法式ではCADによる補助が効き難い。これをクリアするために、ループキャストで繰り返し返すという手法を使ったのだ。

「肝心の姿勢制御がまだまだなのが難題です。ですが、本部は自分達の資材や施設を利用して、自分達が追い込まれるのは許されないと考えたようですね。追い出して子会社化を考えているようです」

「そんな…。成果を上げてる部署を追い出すなんて無茶苦茶じゃないか」

「重力魔法の三大難関を突破しかかっている…。いや、もうこの段階で既にクリアしてるんだぞ?」

「でも判る気がするわ。だってこれが実用レベルで完成したら他の課どころか本部の立場なんて有っても無いようなものよ」

嘘と誠が半分ずつ。

この情報を当主に伝えたのは俺自身だが、小百合さん達はどんな魔法なのかは知らないはずだ。俺達が増長しているのに、これ以上成功したら立場が無いくらいに思っているのだろう。

課員の研究者たちが口々に騒ぐ声が好意的なこともあり、俺は止めずに放っておいて今のうちに着地しておくことにした。

「そんな訳で今にも追い出されそうな訳ですが、付いて来てくれますか? 俺に約束出来るのは可能な限り良い環境を整えること、給料も最大限に配慮すると言う努力目標しか掲げられません」

「いつも言ってますが水臭いですぜ御曹司。本当ならば俺たちやそのへんで飼殺しにあつてたんです」

「…そうだな。残つてもそのうちに追い出されるか延々と窓際を温めるだけだよな」

「そのくらいなら飛行魔法で成功が約束された新会社つても悪くないわよねえ」

迷っている者も多い様だったが、牛山主任に近いメンバーからぽつぽつと肯定的な意見が出て来る。

もちろん、他の研究課どころかまったく無関係な研究所が先に飛行魔法を完成させる可能性はあるので、楽観論であることは拭えない。

「大丈夫です! シルバーさんならきつとやってくれますし、私達も九校戦で使えるように努力しますから!!」

「そうか…九校戦でのデビューつてこれ以上ないほどのアピールだよな」

「飛行魔法があつたらワンツーフイニッシュどころか上位独占も夢じゃないわよ。だってこれまでのルールを覆すんだもの」

「スペックの問題でしたら、五十里家としても刻印魔法の面で協力させていただきますよ」

「じゃ、じゃあ私も千代田家として……じゃなくて、風紀として学校で機密が漏れないようにします！」

中条先輩の言葉を皮切りに、その場が一気に肯定意見に傾いて行く。

九校戦での使用は俺も考えてはいたが、完成度の問題で危ぶんで……。いや、よそう。言い訳などせずとも気後れしている俺を先輩達が励ましてくれたのだ。

「それにしてもよ。来た時の感想と一緒になんだが、俺なんか聞いていても良かったのか？」

「構わないよ。それにさつき見せた暫定版にはレオが教えてくれた硬化魔法の使い訳を入れたんだ」

「進行方向を一定に保つやつだね。……熟練者ならともかく、初心者はアレで吊り下げるくらいの方が良いかもしれない」

「用途は立っていたが、姿勢制御に関してまるで完成がしていなかった。」

これを強引に突破する為、頭が常に天頂方向に向く様な硬化魔法を併用したのだ。

「不要な魔法が増える分だけ制御に負担が掛るが、高速機動をしない初心者ならば十分だろう。」

「任意方向への姿勢制御を完成させるのが目下の所の急務ですが……。ここまで至れたのも皆のお陰だ、ありがとう」

「実感はねーが、どういたしましてだな。水臭いつての」

「今日は良いモノを見せてもらったよ、こちらこそありがとうだね」

「そ、そういえば！ いま研究中の魔法のサンプルをいただけるんですよね？ ということは、飛行魔法の実用一号サンプルがこの手に！！」

照れくささを感じながらも俺は皆に礼を言うことにした。

今を逃せば言う機会を無くしそうだったし……。実際にその通りだったのだから苦笑するしかない。

FLTの帰り道に厄介な敵が現れたのだから。

本格的な戦闘

●混戦

「それじゃあこれは家で弄らせてもらうよ」

「五十里先輩の都合の良い時間で構いませんので、よろしくお願いします」

千代田先輩に引きずられるように、用件を終えた五十里先輩達は帰ることを決める。

町へ遊びに行く二人に例のCADや魔法陣入りの布を渡し、家に戻る中条先輩には生徒会向けの資料を渡すと、俺たち三人だけが残る計算になった。

「まさかコンピューターが無くなっちゃうとはな」

「御客や他の研究者も使ってるからな。それにFLTの近くは元もと多くないからその辺は仕方ない」

無人タクシーであるコンピューター、そして小形電車ともいえるキャビネットの導入により交通の便はかつてと比較にならない。

だが全てが改善されるはずもなく、運行会社が想定する以上の利用客が居れば足りなくなるのは道理だ。

特にこの辺りは研究員の他には相談に訪れる客がメインで、不特定多数の大規模客が存在する訳でもない魔法系の会社となればその傾向がある。

何かの行事で付近のコンピューターが使われて居れば、残る数台を取り合うのも道理だろう。

「だけどよお次のが来るまで随分あるぜ？ どこかで時間でも潰すか？」

「そうだな。面倒でなければ少し歩くのはどうだ？ 協力してもらった御礼に何処かで飯でも奢らせてもらうが」

「やっぴり♪ ちゃんと覚えてくれたのね。それなら幾らでも歩くわよ」

自動化により改善されたポイントの一つとして、いつ来るか判らないタクシーと違って予想時間が読める。

勿論、車両ゆえに込み具合にも寄るので一概に良い点ともいえないが、今日の様に歩ける選択肢があるなら良い目安だ。

こうして俺達は適当な店に寄り、そこで食事をしながらコミュニティーが来るのを調整する事にした。

：別に油断して居たつもりはない。

ちようど安心して戦える者ばかりであり、何か問題が起きるなら足手まといが居ない今の方がありがたいくらいだった。

：だが結果として厄介な敵に遭遇してしまったので、油断していたと言う事なのだろうか。

だとしたら、深雪がこの場に居なくて良かったと思っておこう。

それが誰にとつての幸いかは別にして…。

「ヒュウっ！ 兄ちゃんたち随分と可愛い子連れてるじゃねえか」

「エスコートを変わってやるから男だけで帰りな。つーか邪魔だから帰れ」

始まりは今時珍しい、十名弱のチーマー集団だった。

全員が防弾防刃チョッキやパワーアシストのインナーをラフに着崩し、あるいは遮光グラスや暗視ゴーグルを付けた準ミリタリールックの連中というのが一風変わって居るだろうか。

武闘派集団というには中途半端で、ファッションというには身につけたメタルパーツが浮いていた。

肩に担いだコンポのリズムに乗って、手にするパイプやバットで地面を叩き口笛や指を鳴らして取り巻き始める。

「どうよ嬢ちゃん。一緒に付けてきたら夢見心地にさせてやるぜ」

「ひゃひゃひゃ。腰が抜けて帰りたくなくなるかもしれねえけどな」

退廃的で後ろめたい用事を隠す事も無く、暴力と数に任せた有利を微塵も疑っていない様だ。

その脳天気で救いようのない頭脳には、開いた口が塞がらずどう対処すれば良いか逆の意味で思い付かなかった。

「うわっレオの他にこんな時代錯誤の絶滅危惧種が居たんだけ」

「古臭いのは認めるが、こんな連中と一緒にしねえでくれよ」

「ああん？ 俺らを馬鹿にしてやがるのか？ うらなり瓢箪と木偶の

坊が居たところで役にも立たねえぞ」

エリカとレオの会話をチーマーの一人が聞きつけて、止せば良いのに怒り始めた。

因縁を付けているのではなく本気で怒っている当たりが救いようが無い。

「聞いた？ うらなり瓢箪に木偶の坊だつて！ そんな難しい言葉良く知ってたわね。意外に学があるのね〜」

「このアマっ！ 黙って聞いてりゃ、ふざけやがって！ 相手しただけで帰れると思うなよ！」

くだらなさ過ぎて迷っている俺と違い、エリカの方はさっさと態度を決めたようだ。

冷静さを奪う…というよりはワザと挑発するような言葉を掛けている。

「どうするよ？ 俺は構わねえけど面倒だな」

「アレは使うなよ。それとエリカ、できれば無傷で収めたい」

レオに持たせておいた訓練用の小通連は武装一体型だが、そのままでも打撃武器として使用できる。

形状が剣に見える事もあって、過剰防衛にならないように釘を刺しておいた。

それは当然、エリカの方もだ。

「はあ？ こいつら無傷で帰れるつもりだぜ？」

「頭沸いてんじゃねえの？ この人数に勝てるつもりかよ」

「プツプー馬鹿ねー。無傷つてのはあたし達のことじゃなくて、あんたらのこと。怪我させたら可哀想だつて心配されちゃったの」

自分達が無傷で居るのはもはや当然だ。

ならば心配するのは過剰防衛であらぬ噂が立つことである。それだけでなくとも魔法師を目の仇にするブランシユが近くに居るのに大事にはしたくなかったのだ。

あまりにも圧倒的な実力差ゆえに、俺はそんな甘い事を考えていた。

もし深雪がここに居たら、そんな余計な躊躇などはしなかつただろ

うが。

「このアマ、本当に頭おかしいんじゃないか？」

「顔と体が良ければオツムは気にしなくていいだろ。どうせ薬でハイにするんだし」

「タカさん、こいつらもしかして魔法師じゃないですか？」

エリカがどの程度の強さを持つか想像することすらせず、自分達の優位を疑いもしないチーマー達も、流石に魔法には恐怖を覚えたようだ。

「ま、魔法師だつて!? ど、どうするよ…」

「慌てんな! お、俺は知ってるぞ。こちらの魔法はチャカと同じなんだ。俺ら一般人に使ったらサツに捕まるのはてめえらなんだからな!」

怯える舎弟達を鼓舞する為、リーダーらしき男はことさらに言葉を荒げた。

そしてこちらを恫喝する為、自分達が暴力や薬で恐喝して居ることなど気にも留めずに一方的にわめいている。

「勘違いが三つある。一つ目は自衛目的ならば制限が緩められる。二つ目は攻撃する為の魔法でなければ咎める可能性は低い…」

「三つ目はあたしに言わせてよ、達也くん」

溜息つく俺の言葉を遮って、エリカがウインクしながら振り向いた。

「…あんたら如きに魔法は必要無いっての。足腰抜けるまで付き合っ
てあげるから掛つてきなさいな!」

「言つたな、このアバズレ!」

「困んでフクロにしろ!!」

エリカの易い挑発に乗ってチーマー達が一斉に襲いかかる。

頼むから手加減はしろよと声を掛けて、俺達も参戦する事にした。
そこから先は一方的な展開だ。

千刃流の達人であるエリカが素人相手に苦戦するはずも無い。

(一番弱い所から落とすのか…定石だが、物騒な女だ)

エリカくらいになると活殺自在なのだろう。

あつという間に一人・二人と脱落させている。峰打ちで気絶させられた一人目はともかく、二人目が軽い打ち身なのに復帰を躊躇っているのは、実力の差を自覚してしまったからだろう。

何しろ鉄パイプを持った奴やパワーアシスト機構を使った奴を無視して、悠然と弱い順位に倒れているのだから仕方あるまい。

復帰すれば真っ先にやられるのは自分、運が悪ければ一人目の様にアツサリと気絶させられてしまうのだから。

無傷で自衛するどころか、一人も逃さない…。

全員にエリカの意図が伝わったのは、三人目を打ちすえてからだ。

「ど、どうしようタカくん。こいつら…こいつオカシイよ!」

「ちっ。仕方ねえ、バイ^買に来てた連中を呼び戻せ!」

怯える舎弟たちを勇気付ける為というか、激怒のあまりこだわりを無くしたのか。

他のチーマーを呼び寄せて、俺達…特にエリカを叩きのめす事にしたようだ。

しかしこれで、コミュニーターが品切れだった理由も判った。

「まだ遠くに行つてねえはずだ。そのくらいの役に立て腰ぬけが!!」

「す、直ぐに連絡するっ」

連中は周囲に家が少なく、パトロールも研究塔周辺にすることを活かしてドラッグの売買をやっていたらしい。

顧客である他のチーマーに金なり追加の薬を約束に、言う事を聞かせるつもりのようなのだ。

「うわっ。聞いた? 信じらんない。こいつら芋蔓式に一網打尽に成つてくれるんだってさ。…少し本気出していいかな?」

エリカはどこまでも上から目線で構えていたが、ドラッグ売買を一気に叩き潰せるとあつて考えを変えたようだ。

その時に唇を舐めたのは鬨の予感に興奮したのだろうか、不思議と厭らしさを感じさせない。

「じゃあ俺も万が一に備えてあつちの方を試すとするかね」

「それよりも美月の言っていたフォーメーションを試そう。一人前に置いて二人が脇で支えて専念させるやつだ」

レオは鞆から籠手型のCADを取り出すと、上着を脱いで硬化魔法の準備を始めた。

「どうやら小通連の方では無く、布の方の使い方を試すらしい。魔法陣が無い分だけ手こずっているようだが、間にあわなければ使わなければ良いだけなので問題はあまるまい。」

そして思ったよりも近くに居た奴らを中心に集まり始め、やがてその数は膨れ上がっていく。

「やつらが魔法使わないって本当なんだろうな!?!」

「チャカぶつ放すようなもんだからな。薬はたっぷり弾むからちよいと頼まあ」

「そういうことならタカ達に貸しを作るのも悪かねえな」

「俺は薬よりもあの女が良いなあ。反応が無くなるのはつまらねえから、順番待ち無しか完全に壊れる前にくれよ」

まったく深雪が此処に居なくて幸いだった。

エリカなら良いと言う訳でもないが、こんな連中の目に俺の妹が晒されると思うと耐えられん。万が一にも危害が及ぶとあれば手加減もしたくなるからな。

「きゃー助けてーヒーヒー言わされちやうー。…まあオモチカエリされるのはこいつらの方なんだけどさ」

連中の下卑た視線もなんのその、エリカの方はむしろ楽しそうだった。

負ける要素を全く考えて居ないと言うか…。まあ唯一の危険性である後方を俺たちがカバーする以上は危険などあるはずもないが。

「作戦を説明するぞ。エリカはアタッカーで落とすことに専念してくれ。俺はフォローしつつチャンス次第で当て身を。レオは攻撃よりもバックアップだ」

「少しは乱戦を愉しみたいんだけどなー。まっこいつらじゃ実戦の代わりにもならないか」

「おーこえ。それはともかく護る方はまかせとけ。俺のは誤魔化し易いしな」

エリカを頂点に置いた三角形のフォーメーションで、両脇から俺と

レオがカバーに回る。

剣の腕があるエリカは攻撃に専念することで、ひたすら気絶させて行けば良いということだ。

一回の攻撃で確実に一人、運が良ければ俺加わって二人ずつ気絶させれば、逃がさないようにというのは無理でも壊滅させるのは簡単だろう。

この態勢を維持する為にも、体格が大きくタフネスなレオには攻撃よりもカットインの方が良い。

やがて遠巻きにこちらを見ていたチーマー達も、バットや角材などの即席の武器が揃ったのか…。

あるいはこちらが魔法を使わないと納得したのか迫って来た。その勘違いを指摘する意味は無いので勘違いさせておこう。

「俺から行くぜ！ 一番乗…り」

「はい、終わった」

押し倒す権利を争った愚かモノが、最初の犠牲者に成った。

エリカは驚くべき早業で自分から相手の方に接近すると、バットを振りあげた手を軽く押さえ一撃入れて気絶させてしまう。

「ゴメンねえ。あたしの方が待ちきれなくて先に入れちゃった♪」

(縮地の術理は幾つかあるが、今のはカウンター移動か)

相手から見ても二・三步の距離だとしたら、敵が踏み込む一步に合わせてもこちらも一步。

少し前に出て振り被ったつもりなのに、いきなり距離が詰まって驚いただろう。キスしそうなくらいに顔が急接近して居たのに気が付く暇も無かったかもしれない。

そして崩れ落ちる体を盾にして、今度は反対側の奴が驚いている間に踊りかかった。

もはや一撃離脱というよりは手当たり次第である。

「速ええ、もう二人…いや三人か。恐ろしい事に積極的に動かなきゃ、こっちの肩鳴らしも終わらねえぞ」

「一人で全員倒すなど忠告が必要かもしれない…」

社でやった硬化魔法の応用を、実戦で見て見たいと言うのもあるが

…。

俺は別の意味で簡単に状況の推移が起きることに躊躇を覚えた。特に通報した覚えは無いが、これだけの暴漢が集まって警察が動かないなどありえない。

チーマー達の一部が他で騒ぎを起こして、警察の目をそちらに呼んでいるのならばまだ良い。

(問題は第三者がこの騒ぎを利用しようと、周囲にカモフラージュをしていた時だな)

一番あり得るのはシルバー狙いの他国エージェント。

次にあり得るのは剣道部の連中、そして引いてはブランシユ達だ。

「二人とも。愉しむのは構わんが、余計なことは話すなよ」

「あー判った。『こないだの送り狼』さんたちが居ても困るもんね」

「ん？ 家……ああ。そういうことか、了解」

リンの事はしゃべるなよと最低限の釘を刺し、俺は対処を考え始めたが少しだけ遅かったかもしれない。

追い詰められたリーダーが、メンツを保つよりも事態の打開を測ったからである。

●楽勝からの暗転

「はいっぎー、並んでならんでー」

「くそおー」

それは既に戦いと呼べるモノでは無くなっていった。

エリカの特性はスピードではなく知覚能力にこそあり、咄嗟に行動変更できるのが最大の長所だ。

実力的にも一対一で対抗できる者がおらず、トランプで言えばエースをすれば前に数字札と絵札くらいの違いがあるのが同じこと。

倒せる奴は倒す、倒せないなら隙のある奴を狙うことであつと言う間にチーマーが倒れて行く。

「こっちの数は十倍じゃ効かねえんだぞ！ 何やってる！」

「全員が一度に掛ってくればの話だな」

戦闘は数がモノを言うので困れば別なのだろうが、俺たちは分断に徹して背後のカバーをしているので状況は変わらない。

「早過ぎたつての追いかけるこつちの身にもなれよ」

「あはは、ごめーん。こいつら御話にならなくて」

エリカからしてみれば普通の乱戦と違って隙を作らないように守る必要が無く、気絶させることが可能な奴を狙うだけで良いのも大きいだろう。

次々にチーマー達が転がり、むしろ動き回って囲むのを難しくしていた。

当初は遠慮なしに前に出るエリカに合わせて必死に追いかけていたものだが、今では余裕すらある。

だが思えば対処を決める前にやり過ぎたのだろう。

やつらのリーダーからしてみれば増援を呼んだはずが薬物売買の証人を増やすだけに留まっておろ、メンツを立てるところかこれ以上ないくらいに追い詰められて居たのだから。

最初は銃を取り出していつ使おうとかと思っていたようだが、既にそんな状況では無い。

「…う、黄^{ウオン}さんに頼むつきやねえ。お前ら連絡が取れるまで俺を守れ！」

「薬の仕入れだけじゃなくて尻ぬぐいまで頼むのか？ 幾らとられるか判らねえぞ？ それに客の前に呼ぶのは…」

こうなれば数の優位など意味がない、警察が来たら一貫の終わりだと気が付いたリーダーは携帯を取り出して電話を掛け始める。

薬物売買の黒幕らしき男の名前が、つい最近になって聞いた名前だと気が付いた時は遅かったのだろう。

「ウルセー！ 今パクられたら何もかもおしまいだろうが！ こいつらには他の連中よりも安く売れば済むだけだ！」

「うわっ。今さら気が付いた揚句に保護者まで呼ぶとか。プライドつてもんはないのかしら」

怒鳴り散らして納得させるリーダーにエリカは呆れ顔だが、俺はそれどころではなかった。

黄^{ウオン}というのがダグラス・黄^{ウオン}のことであれば、笑って見て居られる状況ではないからだ。

「こいつらはともかく、その保護者を舐めて掛らない方がいいぞ。地元の連中で聞いた名前じゃない、マフィア崩れかもしれない」

マフィアがチーマー相手に薬物売買というのも情けないが、小集団というものはそんなものかもしれない。

資金を稼ぎイザという時に動かせる人数を増やす為に、情報収集を兼ねて少しずつ何かで稼いで置くのは常套手段だからだ。

「その可能性はあるか。ゴメン、ちょっとはしゃいで見たい」

「骨のある奴との戦いか。一気に目が覚めるな」

そのことに気付きエリカ達も先日の強化人間との戦闘を思い出し、気を引き締めていた。

そして警戒して居た人物は意外なほどの早さで現れた。

警察が来ないのが人払いの結果だとすると、様子を窺っていたのかもしれない。

「ガキどもの世話を押し付けられた時はどうしようかと思ったが…。

ミスター・シルバーが手に入るなら話は別だ」

出て来たのは恰幅の良い初老の男だ。

葉巻をくわえ高級そうなスーツがこの場と比べて浮いているが、少し大きめのアタッシューケースを持っているのでやり手のビジネスマンに見えない事も無い。とはいえビジネスがドラッグであるならば笑いごとでは無いのだが。

（なるほど俺のことに気が付いて、介入のタイミングを窺っていたのか）

となると人払いをしているのはこいつだろう。

俺の目に結界構築の反応が無かったのは、強度的に能力が足りないか、離れた場所で複数の場所に設置したかのどちらかと思われる。

魔法師としての腕前よりは、俺達の思い付かない技術との組み合わせだっただけ荒事の知識の方が厄介かもしれない。

「黄さん！ こいつら何とかしてください。金ならなんとか…」

「金なら私の方から出そう。後ろに居るあの男を逃がさないように手助け出来たら、参加した一人に付き百万くれてやる」

「ほっ本当ですか!?! 俺らは逃がさないだけでいいんすね?」

ニヤリとした笑いを黄は浮かべ鷹揚に頷いて懐に手を入れた。

「本当だとも。前金代わりにさっきの金を返そうじゃないか。逃がさなければ構わないが…、聞きたいことがあるからな意識不明の重体というのは困るぞ」

財布を取り出したように見えるが、簡単な魔法を使ったことからC ADをオンにしたのだと判る。

「そういうことでしたら…。よしお前ら！ この金で今夜は豪遊だ！」

「おう、任せとけ！」

男が投げ捨てた財布を、タカと呼ばれたリーダーが拾って豪語するが大したことは無さそうだ。

むしろ連中自身が出した金と約束手形の後金だけで、下降気味だった連中の士気を煽って見せた黄ウオンの方が危険だろう。

これで奴は壁役と追撃役の両方に使える…捨てても良い捨て駒を入れたのだから。

「大した自信だけど、オジサマを捕まえれば終わりで良いのかしら？」

「薬に関してはそうだな。私が捕るほどなのに、無理して端下金を稼ごうとも思わないだろう。それよりも聞きたいんだが…」

一見すると不思議なことでも、幾つかの情報を知っていると推測できることもある。

例えば黄ウオンがエリカの質問に応えながら悠長に話しているのは、緩やかな風を作る魔法でナニカを飛散させたからだ。

チーマー達が回り込む時間稼ぎと見せながら、渡辺委員長のように香料か何かを飛ばしているとしたら…抜け目のない試合巧者と言う他は有るまい。

「キャスト・ジャマーの技術を解明したそうじゃないか。私に教えてくれるなら幾らでも金を出そう」

「何よソレ。知らないし言ったところで無事に返してくれる保証も…」

「薬か何かをまくための時間稼ぎだ。付き合うことは無い」

そしてキャスト・ジャマーという言葉に関してもそうだ。

俺が使った干渉波に適当な名前を付けたのか、どこかの軍が開発した技術なのかもしれない。

それに付いて質問したように見せ時間を稼ぎつつ、強い言葉を刷り込むことで後で暗示を掛け易くしているのだろう。

洗脳系の魔法は万能ではないが、こうやって段取りを踏むことで条件が変更可能な性質がある。

ブランシユと無頭竜の繋がりを知らなければ俺も戸惑っただろうが、知っているからこそ、黄^{ウオン}の言葉を関連付ける証拠として認識した。

アンティナイトを使わないキャスト・ジャミングの技術を手に入れたら、チーマーの抗争に介入する意味もあるということだ。

あるいはその可能性を高めるために、人氣が無いなら何処でも良いはずの取引を、この近辺でやったとすら思われた。

「自分の力じゃなくて薬に子分、あげくに時間稼ぎとはオジサン情けないんじゃないの?」

「なんとでも言ってくれ。それにもう……遅い!」

エリカが加速魔法で黄^{ウオン}に切り掛る隙を窺うよりも早く、やつは息を吸って大きく煙を吐き出した。

煙草の煙のほずなのに濛々と拡がる様子は尋常ではない、だが重要なのはそこではない。

「幻覚だ」

煙が見せる異常なまでの拡がりや光振動を移動させる幻影に過ぎない。

黄^{ウオン}が使った風によって煙草の香りが拡げられており、一見してソレと気が付き難く目と鼻を同時に迷せる。

「仕掛けて来るぞ。態勢を崩すな」

「判ってる!」

他愛ない幻覚魔法を段取りを踏むことで強力に見せているが、それはあくまで手品と同じレベルで意表を突いただけだ。

最大限に生かしてはいるが、大した魔法では無いからこそ次の札が伏せられているべきだ。

やがてキン！ という音と共にエリカが警棒で宙を切った。

「含み針？ 絶滅危惧種とつるんでるだけあって、随分と古風でコースのね」

「いやいや、これが実に有効だね。並の相手ならばこれで十分だったんだよ」

ここまでの段取りを踏んだにも関わらず、エリカがアツサリと対処したことを黄は少しも悔しがっては居ない。

むしろ良くやったと褒めているかのようで、少しは本気を出すかという風情だ。

「さあ、レッスンといこう。手順は先ほどと同じだぞ」

先ほどの攻撃は煙を広げてから放ったが、今度は即座に行われた。

更に違いと言えば、先ほどよりも澄んだ音がしてナニカが落ちた音がしたくらいだ。

「うわっ胡散クサっ。どの顔して信じてくれって言ってるのよ。察するに無香ガラス製の針だろうけど御約束にも程があるわ」

だが地面には何も見受けられず、ソレが先ほどとの差なのだろう。

武技としての駆引きとして判断するならばエリカが言うようにガラス針というのは十分にあり得た。

（妙だな。煙以外に何も撒き散らした効果が出て居ない。色と香りを誤魔化すだけにしては大袈裟過ぎる罠だが）

煙からは知覚や体感を上げ下げする様な薬物は見受けられない。

深くエリカの状態を目で視ても体調に変化は無く、黄の方にも差は見受けられない。

（…今度は練り込んだサイオンが妙に多いが、俺の介入を警戒したのか？）

「やれやれ、これでも駄目かね？ 棒振り芸以外でもきちんと仕込ま

れているようだ。では次の…」

黄は三度同じ攻撃を繰り返す。

だがサイオンが多く練り込まれ、加重や移動といった魔法が小さく併用されている。

現代魔法の常識で考えれば、グラム・デモリッションや領域強化に

邪魔されないようにしたとした思えないのだが…。

移動魔法は針か何かを操作するとして、補助として使用した加重魔法は何に使ったのだろうか？

「させるかってのー！」

「待て、迂闊に飛び込むな！」

勝負の掛け時だと思っただのはエリカもらしい。

これまでにない詐術か武技が含まれていると判断し、先制して飛び込んだ。

そして加速魔法による踏み込みで一気に接近しはするが、手前で着地して軌道修正し奴の口元を狙う突きに変更する。

今までと同じ攻防であれば、連射であろうが遅延発動であろうが倒していた筈だった。

そう、今までと同じ攻防であればの話題だ。

「遅かったな。同じ攻撃なら一巡前に様子見せずに飛び込むべきだった。まあそれならそれで手を変えたがね」

「…あ？ 影打ちじゃ…ない？」

再びキンと言う音がした後、エリカの体がバタリと倒れる。

針は近くに落ちており、もう一本か二本刺さっている様には見えない。

しかし速攻性の薬が注入されたとしか思えず、効能によって体調が変わっているのが見て取れた。

「エリカー！ パンツァー！」

「おっと、いかせねえっての」

レオがバックアップに回ろうとするが、有利と見たチーマー達がワラワラと近寄って邪魔された。

連中の攻撃力はレオのを傷つけるには程遠いが、他がエリカを確保するには十分な時間だ。

「高い授業料だったな。…お前らはその女の相手をしていて構わんぞ」

「さすがは黄さん、話が判る！」

「へっへへっ。さっきの御礼をしねえとなあ。気絶した連中も叩き起

こせ！」

「こお、の、げすど……も」

筋肉が弛緩し始めているようで、エリカは抵抗どころか徐々に呂律が回らなくなっている。

目を使ってもソレを裏付けるだけで、先ほど何が起きたのかが判らない。

浚われて日が立つならまだしもまだ戦闘中だ、チーマー達はこちらが一气に取り返しに来るのを警戒しながら、エリカから恐怖を引き出すべくゆつくりと服を剥ぎ取っていた。

俺の固有魔法である『再生』を使えば薬物を取り除いた状態まで戻すのは簡単だが、カラクリが不明なのでエリカには悪いがもう少し可哀な被害者役をやってもらおう。

●魔人の戦い

全て終わったところで殴られる覚悟を決め、俺は簡単に救出できるエリカを放置して話題を振ることにした。

「幻覚魔法だけでよくもやる。筋肉弛緩剤系の薬品を組み合わせる速攻性になっている所までは判ったが」

「化成体といっても判らんか、…どうかねミスター・シルバー。何が起きたか説明しても良いし、交渉次第であつちの中断をさせても良いが」

人質を取ったことで、絶対的な優位を確信したのだろう。

黄は少しだけ情報をもらすことで、交渉が出来るのではないかと錯覚させようとしていた。

勿論それは偽りの姿で、先ほど同じ魔法を感知され難い様に準備し始めている。

（こちらも乗ったフリをしておくか。俺が自白剤なり睡眠剤で狙われているなら再生で無効化できるし、弛緩剤でレオを狙われても薬の効果が同じだからエリカと同時に起こせる）

使用している薬は薬剤として危険な濃度にして効能を高め、複合して相乗効果を持っているのだろう。

だが、『再生』は元の状態に戻す魔法なので問題はない。

情報を引き出しつつ、少しずつ間合いを詰めて黄ウオンを捉えられる位置に移動しようとした。

「干渉波で邪魔するということ基本は同じだ。コツは三つほどあるが、一つ目を話す代わりにまずその女から奴らを少し離してくれ」

「まだ手を付けてないなら何人か少し離れてやれ。ああそうだな、どんな姿をしているか見せてやってもいいぞ」

俺が交渉に乗ってやると、黄ウオンは顎でしゃくってチーマー達に指示を出す。

もちろん行為を中断させはせず、視界を少し開けさせたに過ぎない。

そこには服の一部が剥ぎ取られ、途中で面倒になったのか脅しを兼ねてナイフが顔近くの地面に突き刺してあった。

エリカは汚されてこそいないものの、半裸の状態で足や腕の一部を掴まれている。

「だ、……め。たつ……」

(…あの連中救いようが無いな。黄ウオンは俺達が何かしても良い様に捨石にしているだけなのに、優位を信じて疑っていない)

実際のところ黄ウオンは交渉する気も無いし、連中を留める気も無い。

何故ならば現在進行形の暴行を留めなければ俺たちは焦るし、強力な魔法を隠していたとしてもその暴発でエリカの救出を測る様に仕向けている。

その間に先ほどエリカを倒した魔法を、出来るだけ気が付かれ難い様に隠して発動準備を整えているのだ。

「さあ、離してやったぞ？ コツを話してもらおうか」

針を俺に打ち込みさえすれば、後はどうとでもなると思っているのだろうし、連中も交渉モードキも全てはその時間稼ぎに過ぎない。

俺がコツを三つと言った事すら、自分が欲して居る時間を稼ぐために利用して居る。

さきほど試合巧者だと思っただが、なるほど無能では無頭竜の上層にはなれんか。

「どうした？ 理論がまとまらないなら、そうだな。服が一枚一枚剥

がされて生まれたままの恰好になるまでなら待つてやろう」

「へへっ。お愉しみタイムだぜ…」

「…っ」

^{ウォン}黄はあいかわらずチーマー達を使って状況を動かしている。

こちらに余裕を見せたようにみせて、追いつめているつもりなのだろう。

「コツの一つ目は波調の絶対強度を抑えて全員の無力化を諦めることだ。どうせグラム・デモリッションや戦術魔法級の使い手にはあまり意味が無いからな」

「ふむ。確かにそのクラスだと無効化手段があれば身につけている可能性はあるからな。コントロールに全力を注ぐのか」

これは嘘ではない。

干渉波で邪魔する方法は、対象はともかく調整自体には精緻なコントロールを必要としているし揺さぶるには速度勝負なのは間違いが無い。

相手の位置を掴む必要はないのでステルスしていても無効化できるが、上手く調整しないと意味が無いのは本当なのだ。

（助けさせると言って距離を稼ぐか。服を全て剥がれた上に薬で足手まといと思えば、本当に渡してくれる可能性もある）

そこまでの期待はしていないが、^{ウォン}黄に接近できれば何の魔法を使ったか誤魔化して倒す事も出来る。

せめてあと一歩か二歩、できれば距離を半分まで縮めておきたいところだ。

この距離だと少なくとも再生行使が必要で、倒す為にはそれ以上の秘密がバレる可能性がある。

^{ウォン}黄だけならまだしも、バックアップがチーマー達の中に隠れていれば秘密を探られる危険性もあった。

そう考えて距離を稼ごうとした時、意外な声が掛った。

「次のコツだが、話す前にその連中を本当に遠ざけてくれ。助けさえてくれるなら三つ全部喋っても…」

「達也、もう良い。後は俺がやる」

感情を押し殺してなお、漏れ出る殺気がレオから零れた
さきほどまで黙って見ていたのは、焦っているからでも、解決策を
思い付かなくて茫然としているからでもなかったようだ。

意外なことに、俺と同じ様に距離を稼ごうとしていたのだろう。
その手段を思い付かないから必死で考え、それでも思い付かないか
ら俺の言葉を見守っていたに過ぎないのかもしれない。

しかし、視界が開けたぐらいでレオに何かできるとは思えないのだ
が…。

その認識は、レオの実力を相当に見謝っていたと言えるだろう。
得意分野だけなら、レオは一科生を上回る。

「はっはっは。これは傑作だ！この状況で何が出来るね？ 仲間は一
質に取られ君らも完全に囲まれているじゃないか」

心底おかしそうに黄は笑^{ウオン}い出し、抜け目ないことに魔法を急ピッチ
で完成させた。

レオが何かしらの切り札を使うと見て、なりふり構わず魔法を仕上
げたのだ。

レオはそれには答えず、振り回していた上着を投げ捨てるとタック
ルをするかのような構えに入った。

「指を一本ずつ投げ返してやれ。そうすれば大人しくなるだろう」
「え？ 指い？」

最後までチーマーを壁と囷にすべく、容赦ない言葉を投げかけた。
スプラッタな要求にチーマーの方が対処に困るが、ナイフを取りあ
げるよりもレオの魔法の方が早い。

「ジークフリート！」

何故かレオはぎこちない動きで走り出すと、続けざまに硬化魔法を
放つ。

一つ目は今一ピンとこない使い方だったが、二つ目は俺が教えた使
い方だけに良く判る。

そう、今日ラボで散々試した、あの使い方だ。

「シユバルツシルト、エリカ！」

上着に掛けた硬化魔法が、相対位置を一定に保つ。

その対象は呆れたことにエリカであり、投げ捨てられた上着が拡がった状態で彼女に覆い被さった。

レオはその間も走り続けているが、動きは鈍くチーマー達に袋叩きにするのは当然のことだ。

連中が動き出すのを待ってから黄も魔法ウオンを放ち、続けざまに高速で二発目を準備し始める。

だがしかし…。

「き、効かねえ!?!」

「まるで鉄を殴ってるみたいだっ」

「馬鹿な。私の『煙針』すら効いて無いだど?」

あらゆる攻撃を弾き返し、レオは突進を掛けた。

バットや鉄パイプも、ナイフや銃弾に至るまで無効化している。

黄が使ったと言う『煙針』がどんな魔法かしらないが、その変化も薬の効能も一切が効いて居なかった。

(固定して居るのは肉体の基礎状態か! 皮や内臓などの体組織全ての基礎情報を固定して居る)

不壊の肉体。

あらゆる干渉を跳ねのけ、あるがままの方向にしか動かす事が出来ない。

ゆえに体は鋼鉄の如くに干渉を跳ねのけ、刃や打撃どころか薬品でも基礎状態から動かせない。

目を突けば眼窩と目の中間に、口を狙えば喉にネジ込むことはできるが、一切のダメージは入らないだろう。

(唯一動かす方法は、無理やり筋肉で操作するだけだ。しかし何キロもの加重が全身くまなく掛っているのと同じだぞ…)

体の組織は元の姿であろうとするが、肉体というのは元もと動くようにできている。

だから重量物と化したと思えば動かせないが、凄まじいカロリーを無駄使いしているはずだ。

「不死身の肉体…。まさかローゼンはブルゲ・シリーズを完成させたのか? くそ、今の装備じゃ殺しきれん」

「黄さん!? どこいくんすか!」

流石にマフィアの連中は一味違う。

危険だと判断した瞬間に、黄は平然と逃走を選んだ。

サイオンを練り込んだ煙が立ち塞がり、俺の目を持ってしても一時的に確認できなくなる。

少し逃げるのが早い気がするが、このまま放置すればレオがタツチダウンを決めるのは確実で、それはエリカが目標と判って居ても無敵の肉体を倒す事ができないからだ。

それではいつか自分も倒されてしまう可能性があるとして、チーマーという肉壁を利用して逃げ出した。

上層部暮らしが長くて意気地がないのかもしれないが、いつそ清々しいくらいの逃げっぷりである。

俺としてみれば消し去る機会が失われた訳であり、運は奴に味方したと言えるだろう。

「ち、近寄るな化け物! このナイフが見えないのか!」

「そうだ女の命が欲しかったら…」

「ナイフ…。それはどのナイフのことだ? お前が持っているナイフのことか?」

俺は馬鹿が混乱している間に、再生を使ってエリカの肉体情報を薬物が入られる前に戻しておいた。

となると当然…。

「え? ナイフって…。ひあ!」

「ゆ、指がああ!!」

「よくも、ひんむいてくれたわねえ!!」

エリカは顔の近くに突き立てられたナイフを引き抜いて、側に居るチーマーの指を切り割いて行った。

先ほど黄がやれと言った事を、立場を変えて実行したらしい。

「あれは相当に怒っているな…。仕方無い。後で一緒に殴られるか」「そうだな。そのくらいは仕方ねえ」

俺とレオはできるだけだけエリカの裸身を見ないようにして、チーマー達を蹴散らしに掛った。

当然ながら全員を捕まえることは出来なかったが、これだけ居れば薬物売買を調べるには十分だろう。

そして不自然な笑顔を浮かべたエリカに、問い詰められるのはそう遠い話しでは無かった。

「見た？」

「見たが…」

「見るだけだな。記憶するような余裕はねえよ」

余計なことを言ったレオが、余計な分だけひっぱたかれた。

「記憶しようとすんな！ あと、後ろ向け!!」

俺が一発でレオは往復。まあ妥当な所だろう。

引き裂かれた服の代わりに、サイズの大きいレオの服を羽織ってエリカは事後処理を始める。

今日起きた恐怖を忘れるには、忙しい方が良いかと思った訳だが…。

現実には、エリカという女はもう少しタフらしい。

「何も出来なかったのが悔しいのよね」

「活躍してたじゃねえか。物凄い勢いで蹴散らしてよ。一人で十人どころのスコアじゃねえぞ」

「これが戦場なら立派なエースだな」

エリカは涙を流していたのを隠しもせず、赤い目をこすって地元警察と本庁のエリート達に連絡を付けたようだ。

恐怖の涙ではなく、悔し涙というのがらしいところだろう。

「雑魚なんて星勘定に入らないわよ。親玉も含めて自分より下と思っていた奴に、実際には勝てなかったのが悔しいの」

「なあ、自分よりしたって俺も含めてないか？ お前の方が強い恩は確かだが…あ痛て」

止せば良いのにレオはエリカに軽口を返し、今度はゲンコツで殴られていた。

おそらくは、レオが最後に使った不壊魔法と言うべきアレを指して、勝てなかったということだろう。

…その時の俺は、本当にそれだけの事だと思っていた。

エリカとレオの間に妙な縁があるなどと、知る由もなかったのだから…。

色彩の陰る日

●黄の残光

エリカは剥ぎ取られた服の代わりにチーマーから奪い取り、警察に詳細を連絡しだしたので俺は心残りを片付けておくことにした。

「何やってんだ？ 手が必要なら手伝うぜ」

「さっきの黄ウオンとかいう男が使っていた魔法を少しな。針が落ちていると思うんだが…」

調べる俺にレオが声を掛けて来る。

まあ当然と言えば当然か。いきなり地面を探し出したら何か落としたのかと思うだろう。

視力矯正手術が一般化する前は、コンタクトという補助具を落とす事もあったそうだ。

結局、見つかったのは金属製が三本とガラス製が一本。

「誰かの服にでも刺さってんじやねえか？ それか魔法で回収したとか」

「服の可能性はあるが魔法は無い。移動系の魔法は三回目とお前に使った時だけだ」

分析用としてはシルバーとして活動する為の支えにはなってくれたが、戦闘中だとそこまで詳細な把握ができる訳ではないのだ。

だがそれでも魔法の種類や、移動ならその方向くらいは判る。

その情報を元にすれば、この辺りに落ちている筈なのだが…。

対して成果が出ない内にエリカの連絡が終わったようなので、念の為に尋ねてみることにした。

「エリカ。参考までに聞きたい。『影打ち』というのはどういう技なんだ？」

「んー。ダミーの後ろにもう一つ隠す投擲術の1つよ。さっきのは幻覚だったから無視して本命を叩き落としたけど」

俺の質問にエリカは右手で掌を広げ、下に左手で人差し指を伸ばした。

「剣技とかに流用する場合は、二刀とかで弱く見える方を魔法で主力

にするの。蹴りとかでもいいけどね」

「刀と魔法の掛った小太刀や蹴りか」

今度は右の人刺し指を伸ばし、左手は拳一つ分。

長さで言えば人差し指の方が長く、拳は威力がある。これのどちらに魔法を掛けるかで、強い方は入れ替わるだろう。

『影打ち』という技法は意識の陰陽を利用する技のようで、目立つモノとそうでないモノの認識を扱うのだろう。

「ダミーを無視して本命を落とすつもりで、実はその逆だったとかは？」

「ちゃんと幻覚だったわよ。でなきゃ無視なんかしないっての。：あーあ。勝ったと思っただけだなー」

エリカの言いたい事も判る。

だがダミーと本命の組み合わせで良いなら、金属針とガラス針でも良い筈だ。わざわざ幻覚で針を作る必要があるとも思えない。

ゆえに肝はそこなのだろうが、幻覚の中に小さな針を隠したとしてもエリカが見逃すだろうか？

その危険性があるならば大きく避けていた筈だ。確実に針はないと知覚出来たからこそ避けなかったのだから。

「あとは帰って幹比古に聞くしかねーんじゃねえの？」

「そうだな。黄^{ワオン}という男も精緻なコントロールで実行するタイプだ。どんな細かい作業をしたか判らないし詳しい人間に聞く方が…」

奴の能力は概ね把握した。

エリカの時は堂々とやっていたが、レオに使う前は別の使い方をしていた。

俺との会話に隠れて、魔法発動の兆候を隠しながら最低限の出力で練っていた。もし俺に特殊な目がなければ気が付かなかったという程のレベルだ。

細かいコツがあるのならば、そこまでは判らない。

そう続けようとした時に、離れた場所からこちらに来る者の反応を見付けた。

それも、最近会ったばかりの連中だ。

「どうした？ まさか奴らが戻ってきたのか？」

「いや。この気配は剣道部だな」

「あたしにはまだ人が来てるってくらいしか判らないけど、本当に良く判るね」

エリカはあきれ顔だが、連中が来た意味を考えると舌打ちしたくなる。

事態は思ったよりも深刻なようだ。

「おそろくだが、^{ウオン}黄が事前に教えておいたんだろう」

「何のために？」

随分と焦って移動しているようだが、一人だけペースが乱れないモノが居る。

その事を踏まえると、おそろくは予想は外れて居ないはずだ。

「チーマー達が役に立たない場合は剣道部へ親近感を持たせる為に勝てそうか、こちらに会長が居た場合は挟み討ちに切り替える為だろう」

もし剣道部と連中の関係を知らなければ、背後を任せて後ろから襲われていたかもしれない。

その状況も問題であるが、俺達がエリカを前に置いて脇を固める戦法を取ったのを、顔見知りを利用して挟撃するという策を即座に思い付く辺りは^{ウオン}黄を侮れないだろう。

「いくら洗脳してても流石にそこまでは出来ないんじゃない？」

「段階的に深層暗示に切り換えるため、管理権限がある者を脇に置いている可能性がある。この場合は部長だろうな。そいつが後ろから襲い、部員は説得するなり後述催眠用のキーがあるなら刷り込み待ち状態にすればいい」

洗脳魔法というのは矛盾する使い方はできない。

渡辺委員長がやった時も、あくまで会話の流れの中。それも本人の意識の延長にあったからこそ。

だからこそ、対象の意識をコントロールするためにキーワードが必要になる。

日常の中で丁度良いタイミングを掴まえ、そこで認識を新たにすれ

ば調整は可能だ。

「例えば壬生先輩と桐原先輩が好き合っていたとして、別れさせて他の人間と組み合わせるのは不可能だ。だが腹を立てて痴話喧嘩の最中に、『反省させる為に浮気したフリが必要』と思いこませれば可能になる」

「なるほど。その時に洗脳し直す為に、意識が失い易い様なサインを用意しておくのね」

「そんな段階を踏まえるのには、部外者であるブランシユの司・一では不可能だろう。」

だが部長である司・甲であれば簡単だ。

だとすれば、俺を救う為に剣道部を率いてやって来ており、場合によつては襲う為の準備を整えていたと思われる。

「えげつねえなあ。テロリストやマフィアだから当たり前なんだろうけど」

「想像でしかないが、間にあわなかったのは都合良く時間が合わなかったのか、あるいは功績争いによる不具合だな。後者だとありがたいんだが」

レオの言葉に同意して苦笑するがとうてい笑える状況では無い。

初見殺しとはいえ、黄は自分より強いエリカをアツサリ倒して見せた。

加えて俺達のフォーメーションを逆手に取る様な策まで思い付く以上は、時間を与えるのはいかにもまずい。

早いうちに連中を潰さないと、いつ深雪が対象になるかもしれないからだ。

「もう直ぐ此処に來ると思うけど、逃げちゃう？」

「それだと薬物取引を潰したのは剣道部の功績になってしまうので巧くない。：仕方ない、この状況を逆に利用して連中を油断させるか」
俺の眼だけならまだしも、エリカが気配に気が付くくらいだ、そう時間も残っていないだろう。

迂闊に動き回るよりは、策に気が付かないフリをした方が良く。

「剣道部の相談にのってるから、エリカは服を替えた後で合流してく

れ。検査は信用のおける病院でな」

「偽者にブランシユの元に連れてかれても困るもんね。りよーかいつ宴会までには戻るわよ」

「そこだけはちゃん覚えてるんだな。チャツカリしてらあ」

警官や医師に化けるのは古典的だが有効だ。

そこまで手の長い相手かは別にして、警戒しておいて損は無いだろう。

そうして剣道部の連中が姿を現したのはさして時間が経った頃ではなかった。

●白地に太黒を落とす

エリカを警察に預けた俺達は、剣道部との茶番に挑む。

「こちらの地区に居られる高段者の方に習い出したのですが、不審者に襲われてると同門の方に連絡を受けまして」

「練習帰りでお疲れなのに、御心配ありがとうございます」

司・甲と名乗った眼鏡の男は予め考えておいたであろう言い訳を使った。

まあ実際に練習に来ているのだろうが、信用出来るはずもない。

とはいえ今の状況は笑って見ていられるはずもない。

黄の手引きで剣道部は俺の窮地に駆け付けたことになっており、仮に第三者が真相を知らずに聞けばそう思うだろう。

「同じ一高生徒として当然ですよ。例えば相手が不良や一科生であったとしてもね」

(深雪は当然として、生徒会のメンバーや桐原先輩にも一応は連絡を入れた方が良くない)

突き離す訳には行かず、連中を誘導するにはある程度付き合った方が良い。

となれば裏切ったのではないと早い段階で申告する必要があるが、どうにも消極的に過ぎた。

連中の策に嵌って行動を制限される様な物だし、既に俺の名前を騙って誰かを呼び出されかねない。

意図して黄ワオンに協力するように言い渡していたなら、思想テロである

ブランシユは外堀を埋めるのが上手い。

(俺の名前で会長を呼べるかは別にして、消極策に切り替えられたらコトだな)

前に中条先輩が生徒会室で言っていたが、数人だけ浚って潜伏する事は可能性がゼロでは無い。

やってないのはこれまでに掛けた成果に見合わないからだが、『シルバーがコーチを』と言って有望な一科生を呼べるだけ呼ばれたら面倒なことになる。

生徒会のメンバーはまだしも、深雪の友人や元から剣道部と仲の良い個人などは引つ掛る可能性がある。

個別に合っておいて、俺の名前を騙る奴が居ると先に言っておくべきだろうか？

「そういえば、今日はどんな研究をされていたんですか？」

(いや、逆か。今の時点で積極的に誘導するんだ。なら材料は何が良い？ こいつが聞きたいであろうキャスト・ジャミングは論外だが…)

俺は司・甲に適当に話を合わせながら、仕方無く一部を披露する事にした。

当然ながら飛行魔法でもなく、今日考えていた中でテロ用CADに見合った物だ。

「壬生先輩に説明した術式に着想を得まして、シンプルな術式を使いこなすのも悪くないかと思いましたが」

「わ、私の？ コレの事かな…」

俺が話題を振ると壬生先輩は恥ずかしそうにした後、担いでいる少し大きな竹刀袋を開いた。

そこには通常の竹刀の他、脇差や小太刀サイズの竹刀が入れている。

「ああ、投擲術が向いていると言う話題でしたね」

「壬生先輩に剣以外に使う術を勧めたのは、剣道部だから合わないと言う建前ではありません。純粹に適正の問題だったのですが、そういう術を一つ『使いこなす』のも面白いかと」

言い訳でもあったが、脳裏に閃いたのはレオや黄^{ウオン}たちの使い訳だ。立った一つの魔法を使い分け、あるいは同じ技を色んなバリエーションで使用して居る。

派手な術も使い様だが、信頼できる技を一つというのも悪くないかと思えて来た。

「どんな状況でも使用可能な。最終的にはCAD無しを想定し、今は性能の悪いCADでも十分なレベルを目指して練り上げます。自分の得意技なら一科生ですら追いつけないほどの練度で」

「それは面白そうですね。何時でも素晴らしいCADがあるとは限りませんし。：それでわざわざ普段は扱わないCADを製造に來られたと」

「粗悪なCADなんてミスター・シルバーが持つてる筈ないですもんね」

例のCADに入る程度でそれなりに使える魔法を示すと、司・甲は俺の話に興味を示す。

だがキャスト・ジャミングに未練があるようで、再び用件を元に戻してきた。

（面倒だな。だが、こいつらとの付き合いを長引かせたくないし、今月中に撃発するように仕向けるか）

元から連中の計画では今月中に事件を起こし、何も起こせなくとも来月には討論会をふかつける気の筈だ。

となればその勢いを後押しする、あるいは今月中に動きたくなくなるネタを仕込めばいい。

「それもあります。が、せっかく一高に入ったのに来月から閲覧室の資料が見難くなるかもと聞きまして、今の内に参照したいデータの摺り合わせに來たんです。FLTのラボでも持ち帰りは不可ですしね」

嘘ではないが本当でもない。

俺が一高からのアクセス制限や、セキュリティ強化を申し出たりしたのは間違いない。

もつともそれは却下されており、念の為にエージェントを派遣するレベルだ。校長の方でも見回りを検討して居るだけだろう。

「閲覧室と言うと、特別閲覧室ですか？」

「ええ。事前申請しないと入室許可が下りなくなるかもしれない。あるいはアクセスの際の手間が増える可能性を説明されました」

そうなる可能性は低いですが、実際に提案した事なので調べれば担当教諭から『提案はあった』と返ってくるはずだ。

例えば可能性が低くとも、万が一を考えれば今月の計画を実行に移す方が確実だと思いいくなる。

後は駄目押しに、後押しするキーがもう一枚か二枚あればいい。

そしてそのキーは俺の手に在った。正しくは、俺がキーだと言うべきなのだが。

「それにしても流石はミスター・シルバーですね。特別閲覧室の入室許可が出るとは」

「私たちじゃ何のためについて聞かれるのがオチよね。入った事もないわ」

「入れたら入れたらで成果を求められますよ。シンプルで扱い易い術式を調べたら、教師でも生徒でも質問にも答える様に言われる筈です」

「その研究で一番助かるのは私達なのに、先生に習える一科生もってブルーイ」

先ほど簡単な魔法を説明してみせたが、ここで剣道部の話を聞きながら誰それにはこんな術が良いのではと提案してみる。

全員が納得する訳ではないが、幾つか説明した段階で素振りしたりしてみる者が現れる。

(これで俺を浚う、あるいは洗脳する意味が出て来た筈だ。例のC A Dに丁度良い魔法をインストールでき、事前申告すれば閲覧室にも許可が出ると知ったからな)

七草会長と十文字会頭を同時に襲うのは難しい。

だが、風紀の俺と会長ならば難しくも無い。事件を起こして説得に来た所でも良いし、その後の討論会でも良い筈だ。

二人揃ったところを強襲しまずは会長を抑えるついでに俺を浚っても良いし、そこでまた俺を助けて見せて兄である司・一に合わせれ

ば良いと思う可能性は高い。

(もちろん、その前に俺と会いたいと申し出て来てくれても良い。：偽者だと洗脳までは無理だろうしな)

エガリテに入会したとしても、洗脳魔法で作った偽者の指導者と出逢わされる可能性がある。

よって潜入コースはやるべきではないが、司・甲のツテで向こうから俺に接触する場合は別だ。

最悪でも洗脳魔法が：この場合は催眠程度でも使えるメンバーを繰り出して来る必要性があるだろう。

それば基幹メンバーに間違いがなく、そこから指導者である司・一を辿るのは難しくない。

「こんな所で話すのもなんですし、どこかに入りませんか？」

「そうですね。エリカやレオに食事を奢る約束をしましたし、暫く歩いた場所に在るレストランにでも入りましょう。助けてくださるうとした皆さんにも奢りますよ」

「ええ、良いんですか？ やったー！」

「間にあつて無いのに悪いわね…」

おそらくはラボか知り合いの道場にでもと言おうとしたようだったが、俺は先回りして適当な店を選んでおいた。

条件はただ一つ、ラボのメンツが行きつけにしてない場所だ。

そこで接触されて潜入経路を作られても困るし、どうせならCADを簡単に弄りながら実演でもして見せればよいだろう。

「問題無ければエリカの方に連絡しておきます」

「問題なんてありません！ どんな店ですか？ 中華？ イタリアン？」

「もう、あんたつてば食い意地が張ってるんだから。少しは遠慮しなさいよ」

ここで俺はレオの方に視線を移す。

喫茶店で良いだろうとか、道場でお茶でもと言う言葉を打ち切る為だ。さっきの不壊魔法でかなりのカロリーを無駄使いして居るはずなので、乗って来るだろう。

「レオは何処が良い？ 喫茶店でも料理屋でもいいが」

「とにかく沢山食える場所ならどこでも良いよ。さつきから腹が減って腹が減って」

予想通りの答えが返ってきたところで、周囲から明るい笑い声が漏れた。

●対白の用意

食べ易い大皿の問題で、イタリアンでパスタとピザを何種類か頼む。

そしてエリカに集合場所のメールを送るついでに、ラボのメンツ用に牛山にも釘を刺す形で発送。生徒会用には込み入った話になるので市原先輩を選んで電話を入れる。

『なるほど、今月中に事件が起きる可能性が高まるということですね』
「はい。それと例の資料を元に反論考証を勧めておいて頂けると助かります」

七草会長では無く市原先輩を選んだ理由は単純だ。

討論会が起きるとして、魔法系クラブを優遇して非魔法系クラブを差別して居ると吹っかけて来るのは判り切っている。

ならば今のうちに反証を用意しておく方が確実というものだ。

僅かな溜息が聞こえた後で、厄介事に対して愚痴が漏れるのは仕方のないことかもしれない。

『五月にはコンペに向けての討論があるのですけどね、仕方ありません。時間を割いておきます』

「申し訳ありません、お詫びに今度食事でも奢りますよ」

俺がプレイベート保護用の遮音壁越しにレオ達を眺めながら提案すると、即座に御断りの通知が返ってきた。

『それは止めておきましょう、会長たちがまた面倒なことを言い出しそうなので』

「察するにそちらも会長と御一緒ですか？ では何かの形で御礼を。では」

良く良く聞いてみれば、市原先輩の方も遮音壁の中から電話して居る様だった。

どうやら会長が誰かと出ていた時に通話してしまったらしい。

月曜からまた面倒くさくなるなど思いつつ、俺は苦笑いでない笑みを浮かべて通信を切った。

遮音壁から出ると、バジルソースの香りが薄く漂っていた。

温度差を感じないので、おそらくはシーフードと野菜をベースにしたサラダパスタだろう。

「レオには物足りないんじゃないか？ ピザか何かを適当に頼めばいいのに」

「ここは本格的な窯で焼いてるから、時間が掛るんだと。全部食っちゃう訳にはいかないからな」

「あはは。これが一番簡単に作れるやつなんだって…」

剣道部の女性陣はこじんまりとした量でピザやサラダパスタを少しずつつついているのに対し、レオの方は複数ある大皿一つを完全に占拠して居る。

厨房から薫るミートソースの香りを考えれば、次は大量のポロネーゼが出て来るだろう。それもこの調子では何分保てるか心配だ。

「それで、俺達に見合った魔法ってどんなんだ？」

「個性にも寄りますが、そうですね…」

同じ剣道部でも女性陣と違って男性陣は直接的で、面白くもなさそうにコーヒーでピザを流し込んで居た。

俺が女性陣の接待を受けている格好なのが気に入らないのか、あるいは主将から男女別パターンで聞き出せと言われてるのかもしれない。

「例えばレオが一科生に上回るのは硬化魔法だけですが、数パターンに絞って習熟して居るので、フォローさえあれば九校戦に出れるレベルですよ」

「本当かよ…」

「まあBS魔法師に近い奴っているよな」

レオのことを黄^{ウオン}がどこかの実験部隊の作品ではないかと疑っていたが、言われてみれば軍隊にはピッタリの性質をしている。

俺がそうであるように、開発計画の意図した戦場に置いて万全の能

力を活かせるようになってきているのだろう。

「硬化魔法にそこまでの適正では無くとも竹刀が鉄の強度を持った
り、振動系であれば2 m程度の衝撃波を放てれば随分違います」

「そりゃな。攻撃魔法ほどの射程がなくても、2 mもあれば剣の間合
いとしちや十分だ」

盾として使える竹刀、あるいは槍の間合いを持つ竹刀。

もちろん実戦とあれば竹刀である必要は無いので、強度も威力も相
対的に上昇する。

「後はいつでも使えるような心構えと習熟。それと何にでも使える発
想の転換ですね。例えば硬化魔法でビニール傘を強化できるならば
攻防共に理想的ですよ」

「あー。傘だと手軽な鉄扇って感じですよね」

「フリル付きの日傘でやってみたーい」

硬化魔法で強化したビニール傘は、名実ともに機動隊のシールドを
上回る。

広げれば広範囲を守ることが出来るし、畳めば鉄棒として威力を発
揮するのだから。

そしてそこに必要な魔法式は、そう大した物ではない。

二科生でも十分にコントロール出来るし、適正次第では恐ろしいま
での隠匿性と戦闘力を引き出せるだろう。

「でもそこまで魔法式をダイエツトする必要があるのかしら？ 授業
や試合でそんなに制限されることないわよ？」

「常在戦場という訳でもありませんが、小さな魔法式で組み立てられ
れば、残ったスペースに補助式や予備の魔法が入れられますよ」

ここでの性能は、九校戦などの学校単位での公式試合で用いられる
CADだ。

魔法剣術大会やレース競技などでは万全の高性能CADが使える
が、学校単位で平等に扱う試合ではそうもいかない。

極力性能を抑えておくほうが色々拡張できるし、そうでなくとも軽
い魔法の方が扱い易いのは確かだ。

「例えば壬生先輩の投擲術を例にすると、徹鉄する対物タイプをメイ

ンに余力があれば衝撃を与える対人タイプも使えます」

「ああ、その辺なら同じ投擲術の練習だけで済むな」

あくまで車両レベルの対物貫通を念頭に、人間を痺れさせても良いし、戦車クラスの貫通力を考慮しても良い。

「もちろん加速や加重の強化版でもいいですけど、両手投げするか連投した方が早いでしょうね」

「確かに加速すると、剣道と剣術でクセに差が出るのよね。剣を極めると言う意味では分けて考えた方が無難かな」

当然ながら加速系で対人専を剣で戦っても良いのだが、習熟すると言う意味では投擲術に絞った方が良いでしょう。

命中精度の一刀投げに数を撃つ両手投げに連投など、確実に当てる為の訓練を積む方が使い分けが出来る。

(…まあ、こんなものか。これで討論会に成った場合でも、俺が連中にフオローしそうだという期待も持たせられたかもしれない)

そこまで都合特思わせられないにしろ、俺が剣道部に対して親近感を持つて、色々アドバイスするつもりがあると見せられれば十分だ。

魔法を使うことを全体に話していたので、キャスト・ジャミングの事で尋ねられ難い土壌も出来た。

後は適当に相手しておけば良いでしょう。

食事がスープ・パスタに移るころにはエリカも合流し、デザートをつつきながらの話に移行した段階で、飽きて来た男性陣は引き上げ始める。

そうなるかと保護者役の司・甲も居難くなり、次第に解散ということになった。

「モテモテじゃない、ちゃっかり女子全員のアドレスまで聞いちゃつて。ハーレム狙い？」

「勘弁してくれ。自由闘争のアマゾネスに興味は無いさ」

重要なのは端末を目標に相手の位置を特定する事もできるということだ。

怪しいメンバーが居たら、藤林少尉が暇な時に追跡調査してもらおうのも良いだろう。

そうして一日は過ぎ去り、俺達はリンや森崎達に土産のケーキを追加注文して帰還する事にした。

これは剣道部を中心に連中が撃発する、数日前の出来事である。

激論と激戦と【前編】

●化生体

あれから数日。拠点を七宝家の別邸から、七草家が複数所有するセーフハウスの一つへ移動して居た。

剣道部の連中は付かず離れず、こちらの空いた時間に押し掛けるようになっていた。

俺が肩入れしているかのように周囲へ窺わせつつ話に出しておいた魔法式を作らせ、頻繁過ぎて嫌がられない程度に間を開けたつもりなのだろう。

「ようやく化生体に付いて判明したよ。まったく灯台もと暗しというか…」

「幹比古。すまんが本題から頼む」

研究職を何人も見てるので説明したがる気持ちは判らないでもないが、生憎と俺にはそういう感情は無い。

幹比古の悲しそうな顔を無視して、ストレートな説明を頼んだ。

「…化生体というのは幻覚に実体を持たせる様な物なんだ。厳密には違うんだけど、それと名前の方は大陸名じゃなくて和名」

「どういうことだ？」

やや不満そうな幹比古だが、宥めている余裕は無い。

何しろ幻覚に実体を持たせるなど埒外だ。

「精霊でも対抗する時に姿が無いよりもある方が対処し易くなるよね？ それと同じで幻覚に添って魔法を使う事で、圧倒的にコントロールがし易くなる」

「エリカがやられた時で言うと、幻影の針に添って薬剤を運ぶということか」

俺の質問に幹比古は頷き、実験用に幾つか呪符を書き始めた。

時間はかかるがその場で色々出来るのも、古式の良い面なのかもしれない。

「んー。そこまでしなくても、元からコントロールの上手い奴には要らねー気もするけどな」

「全員がそうでもないし、遠視や他人との合作だと違うんじゃないか？ 精度の面に関しては何とも言えんが」

「ここに幻影で人形を作ってみたけど、コレにペンを持たせて運んでみるね」

幹比古は俺たちの話に対し幻覚で小さな人形を作り上げた。

その次に加重系を展開し、移動系を僅かに行使する。

「右、右、左、左。と戻って来て、クルッと回してもう一度キャッチと言う感じでやってみるね。もちろん、要望があれば修正する」

「お、本当に動いてるな」

「もう一度繰り返し返して…：反復動作から戻った後で上に二歩、下に一步入れてくれ」

幻影の人形が幹比古の言った通りの動きをし、俺が途中から指示した事もやや遅れはしたが達成できた。

もしこれが自分が意図した通りの命令改変であれば、さほどの遅れは無くやってのけるかもしれない。

「エリカに使った時は幻影をマーカー用にしてたんだろうね」

「薬剤と一緒に使うなら付けるのは僅かな傷で十分だし、元からある傷を目掛けたり、なんなら口元で十分か」

「さすがに何度も倒された時の事を言われると恥ずかしいわね…。あとき、そんなに便利な使い道できる薬って相当にヤバイわよ」

「注射するやつと塗布・経口するやつを混ぜた薬ってことだもんな。よくトリップしなかったな」

ウォン 黄は腐ってもマフィアだし、相手の事を思いやる気は無いだろう。

薬の強度を高くしておいて、オーバートゥースなどおかまいなしだ。

その意味ではエリカは無事で良かったと考えるべきだし、ウォン黄が時間を掛けたのも時間稼ぎ以外に、俺の頭が飛ば無い程度に抑える為だったのかもしれない。

「名前の方は多分、日本で知ったんじゃないかな？ 『あれは大陸の連中が使っている化生体だ』とか。もとは日本の研究者が使ってる言葉なんだよ」

「幹部になった後で日本支部に移り、調査した技術情報の一つなのかもしれない」

最後に化生体という名前に関して、大陸名かと思っていて調べたら日本での名称だったので調べるのが遅れたらしい。

自分で調べて居て時間がかかり過ぎたので、身内に相談したらアツサリ聞けたと言う笑えない話だ。

だが、剣道部の連中が仕掛ける前には間にあったので、問題無いとは言える。

そして剣道部では無く、壬生先輩を中心とした非魔法科クラブの有志が行動を起こした。

放送室を占拠して全校放送で自分達の主張を流したのである。

●ブレイクアウト

『みなさん、聞いてください！ 私達は…』
とうとう来たか。

俺としてはむしろ遅いと思ったが、連中は連中なりに試行錯誤して準備を整えていたのだろう。

壬生先輩の声をスピーカー越しに聞きながら、予め定めておいた中間地点に風紀のメンバーが集合して行く。

俺もその一員として出動しつつ、端末を操って藤林少尉の配置とリオンが無事だと言うマーカーを確認した。

(それにしても剣道部ではなく、いきなり非魔法クラブの連合で来たか)

非魔法系クラブの中には、文科系を中心として一科生もそれなりに存在する。

隠し玉に取って置き、後から同じ意見だと後押しする気だったと思うのだが意外だった。

おそらくは俺が介入して撃発させようと援助したことに対し、剣道部とシルバーの関わりを捨てるのが惜しくなったのだろう。

ビリヤードのように思惑が変化したといえればそれまでだが、説得中に横槍を入れられる可能性を考えれば面倒だった。

そして後から見れば、俺の介入は色々やり過ぎたのだと言える。

まさかブランシユに対処した後も、九校戦まで続く問題になるとは思ってもみなかった…。

「鋼太郎たちは例の場所を人の目と最大級の遠視で確認しておけ、絶えず魔法使用を監視されていることを忘れるな！」

「了解っ!!」

渡辺委員長の指示に遠視を使えるメンバーを中心に、部活連出身の風紀委員が出動して行く。

このメンバーは連携もスムーズだし、移動系が得意な者も多いので何かあった時に飛び出して取り抑えるのに向いている。

「僕らはどうする?」

「関本たちは特別閲覧室を窺う者やその交友関係をそれとなく確認してくれ。だが同行を求めるなよ? この手のは泳がして置くことに意味があるんだ」

「まあ証拠も無いのに捕まえられませんよね」

教師からの推薦組は才能こそ高いが連携には不向きだ。

どちらかといえば探偵のように個別に分け、不必要な介入を留めておけば十分だろう。

関本先輩の様に特別閲覧室を利用する者も居るので、こちらの監視には向いている。

何しろ今回は戦闘ではなく、あくまで動向を確認し、討論会で起きる事件の準備なのだ。

今の内に何処が怪しいかを調べ、こちらが把握して居るよりも隠し場所・シンパが拡がって居たら対処する時の準備でしかない。

まあ誤認したり、逆にこちらの態勢を確認されても困るので、その辺りは徹底して臆病なほどの距離を取る段取りになっていた。

「司波は予定通り連中に接触してくれ。こちらの交渉が手詰まりになった辺りで頼む」

「了解しました。七草会長や十文字会頭は応じるが、教師陣が納得してない…という筋書きでよろしいのですよね?」

剣道部が怪しいと言うことと、連中が俺の名前を使おうとしている事は生徒会や風紀のメンバーには予め伝えてあった。

おかげでスムーズに行くし疑われることがないのも助かるが、こちらの交友関係の内側にスパイが居ると厄介でもある。

その為に、全体としてはあちらにも益があり、肝心な場所の手綱を澄める形で包囲網が作られていた。

今回で言えば、基本的には通してOKなのだがと言いつつ、教師陣の抵抗というありもしない理由を付けている。

「ああ。二科生や非魔法クラブを差別する気は無いし、改革したいのは真由美も十文字も同じだからな。その意味では同志とすら言えるんだが…」

「ブランシュやエガリテに唆されているのでは、どうにもなりませんね。それでは手筈通りに」

差別の是正を図るのは良いが、それが暴力であつたり最終的に魔法師抑制論に繋がるのでは意味がない。

壬生先輩には悪いが、ブランシュが『結局、魔法師は悪』と誘導するのでどんな理想も意味がないのだ。

やがて渡辺委員長に遅れる形で放送室に辿り付き、ワザとらしく現状を確認して居ると、剣道部の連中がやって来る。

「壬生が立て籠もっていると聞いたんだが…」

「正確には志同じくする数名の中に、壬生先輩がいる。という形ですね。現時点では本人の意思なのか雰囲気の流れされたのか判りません」

司・甲が申し訳なさそうな顔を作って話しかけて来たので、俺は極力中立的な立場で状況を報告した。

「壬生は真面目で正義感のある子だ。根拠のない事は言わないし我慢するはず」

「その我慢の限界に達したのよ。だから私達は宥めに来たんですけど…」

そこに対し誘導して来る当たりが、連中の自作自演を示している。「二科生と一科生にお互いの差別意識と、悪しき慣習例があるのは本当です。しかし、一部の趣旨に明らかな矛盾があるようですし混乱されているようですね」

俺が連中の言いたい目的と現実的な矛盾を織り交ぜて指摘すると、

反論の為の反論をするつもりだった剣道部の面々は押し黙るか粗ぶった同意の声だけになってしまう。

やはり洗脳されてしまうと思惑が極端になって、誘導し易くなっているらしい。

問題だったのは自由意志がある司・甲だけだったが、奴も黙ってしまったところを見ると、俺が向こうの味方をしたようにも見えるのは好都合だったのかもしれない。

あるいはどう言う切り口で、自分達が望む方向に修正するかを考えているのかもしれない。

ならば座して視ている手はあるまい。

事を起こして一気に場を転換させ、連中自身に行動の是非を見届けさせるべきだ。

「ここで司先輩に出逢ったのは僥倖です。俺は学校側が交渉のテーブルに付くようお願いしてきますので、今の間に壬生先輩たちを宥めてください。アドレスは大丈夫ですよね？」

「あ、ああ。部活の連絡網があるから問題無い」

司・甲自身が誘導しようとしたことを俺が言ってしまったせいか、やはり頷くばかりだ。

ここで壬生先輩が暴れ出すように指示されても困るので、素早く風紀のメンバーにトスしておく。

「渡辺委員長。俺の方からもお願いしてきます」

「頼む。真由美や十文字は話し合っても良いと言ったんだがな、先生方が渋い顔をしてるんだ。その点、お前なら上手く口も効けるだろう」

こんな所でシルバーの名前が役に立つとは思わなかったが、使えるモノなら使ってしまうおう。

幸いになことに剣道部も風紀の面々もおかしいとは思っておらず、俺が席を空けることに違和感が生じて居ない様だった。

「司先輩も壬生先輩の説得にあたってくださるそうです。俺が先生方を説得できるかともかく、宥めるのをお願いしますね」

「そうか、あたしにも壬生は知らない仲じゃないし頼む」

「体制に不備があるとしても壬生のせいじゃないからな。やらせてもらうよ」

俺の仲介で渡辺委員長と司・甲は端末に向きあい、親しい者同士の会話を始めた。

その口調にいささかのギコチナサを感じるのは、我ながら人が悪いと言わねばだろうか。

いずれにせよ、此処まで来たら後は可能案限り予定通りに終わらせるだけだ。

データ方面の藤林少尉だけでなく、SBを視てる幹比古と美月の二人からも連絡がないので、ホっとしながら今度は会長のもとに向かう。

「校長の方はどうですか？」

「バツチリよ。この機会にうんざりする流れを終わらせてくれですつて。あ、あとねー。愛しのリンちゃんの方も資料揃えておいたって」

会長から百山校長からのゴーサインを確認すると、後は適当に時間を潰して戻るだけだった。

「その冗談は後で聞きますよ。：以前に抜き出しただけのデータより精度が上がって居ますね」

「ちえつ。そっけないんだから。そういう点もリンちゃんソツクリね。面白くないったら」

念の為に渡してもらった資料を読み込むと、予算の要求と実現度の幅、用途ごとの代替性などが追加されている。

これを見ると魔法系クラブの要求が通り易いなどはなく、他で足りるモノをわざわざ高額の品の購入や遠出していないと理解出来た。

(例外は剣術部が千葉道場に行っていないことくらいだが、あそこに行くのは県警に稽古を頼むよりも難しいからな。壬生先輩がそこに気が付かないはずもないだろう)

後はコレを数値に詳しくない者に判り易く説明する事くらいだが…。

まあそれは会長の役目だ。俺の役目じゃないし不備があればそれこそ市原先輩がフォローするだろう。

「…十文字会頭の方は？ お見えに成られてない様ですが」

「先生方に壬生さん達の処分軽減の嘆願をしてるんだけど……。『何があってもこちらで面倒を見るから、好きにやれ』…だそうよ。とても同じ歳とは思えない貫禄よね」

「どうやら部活連の長である十文字会頭は、剣術部と剣道部のいさかに端を発して居ると思つて、事後のフォローに奔走して居るらしい。」

「撃発させるために事前に組んで居た予定なので、後でフォローしないといけないとは思つていたが、その辺を全てやってくれるとのことだ。」

「真面目な方なんです。…もしワザと野放しにしたと知れたら暫く頭が上がらなさそうです」

「良くも悪くも天然なのよ。外面の厳めしさこみで戦国武将だと言っても通じるわ」

随分な言い様だが、お陰でイメージはし易い。

戦国武将が実直だけで務まる筈は無いが、その辺も含めて事後処理などは得意な方なのだろう（陰謀に向かないだけで）。

「では頃合いですし放送室に向かいますよう。一連の事件を終わらせるためお願いします」

「言われるまでも無いわ。二科生の差別、ブランシユ、魔法師誘拐の可能性。全ての可能性を断ち切らないとね」

俺達はいかにも教師陣を苦勞して説得してきたという体を装い、放送室へと向かった。

「会長！ どうでした？」

「先生たちを説得して来たわ。全校集会に近い形の討論会でこの問題を取りあげても良いそうよ。十文字君やリンちゃんたちは手続きに行つてる所なの」

風紀が中心になって会長を出迎える。

「聞いたな、壬生？ お前達が上げた内容を含めて討論会で取り直される。もう立て籠もる必要は無いんだ」

「ほ、本当なの？ 一科生は二科生を差別したいんじゃない？」

「そう言う心無い人も居ると思いますが、会長や委員長達は別ですよ。みんなこの問題をなんとかしたいと思っただけなんです」

その内容は事前に打ち合わせており、まるで生徒会や風紀こそが二科生問題を是正したいかの様だった。

主客の逆転を起こすことにより、立て籠もり犯を利用したとも言える。

「…出てきたら捕まえますか？ 剣道部の部員がしでかしたことです。なので、こちらで協力させていただきますが」

「なんでそんな事をする必要があるのかしら？ 私達は一高の改革を望む同じ生徒同士だし、壬生さんは方法こそ問題だけど、何も間違っではないわ」

「そ、そうよね。差別が問題なんだし問題なんか…」

司・甲の質問を毅然と会長が否定する。

もし俺に普通の感情が残って居たら、笑い出すのを我慢するのが大変だったに違いあるまい。

我ながら人が悪いと思うが、剣道部の面々が自分達の要望が叶ってしまつて呆けているのが滑稽だった。

ここで暴力沙汰にもならず、弾圧も起きないとあつてはさぞ司などは腹が煮えくりかえつて居るに違いあるまい。

他の剣道部と同じ表情を装うのに成功しているようだが…。

何か、違和感がないか？ その疑問を押し流すのは、やはり俺が描いたシナリオだった。

後で考えれば、もう少し確認をしておくべきだったろう。

「壬生、そちらが都合の良い日を指定しろ。放送室の端末にも表示するように言っただけだ」

「わ、判りました。そこまで言っただけなら…」

こうして最後のピースが嵌り、残るは討論会とその後のブランシュ・無頭竜退治だけになった。

良くも悪くも、予定通りスピーディに決まったことになる。

● 予定されたデイベート

七草家のセーフハウスは潜入対策が強いので、帰りに寄り道をする

ことで野暮用を済ませておく。

「意外に近いな。まあ洗脳や誘拐をするならその方が良さいんだろうが」

「環境テロリストのアジトだったそうですわよ。同じスポンサーだったのかもしれないわね」

ヨル（亜矢子）達の報告を受けて、ブランシユのアジトを特定した。予定通りとはいえ…いや、予定通りだからこそ先制して叩き潰しはしない。

「捕まえる予定のテロリストが吐いたことにする。二人は黒羽の手の者を率いてアジトから逃げる奴らと使えそうな資料を奪ってくれ」

「判りました。最優先はブランシユ日本支部の長である司・一、次点で資料。最後に無頭竜の孫を抑えます」

俺の言葉にヤミ（文弥）が提案して来るが、問題無いのでそのまま頷いておく。

リンの話の真偽はともかく、孫とか言う奴は無頭竜の有力候補の一人に過ぎない。放っておいてもブランシユを叩き潰せば立ち枯れるだろう。

むしろ手駒である黄^{ウオン}と朱^{チユウ}の方が問題なくらいだ。

孫が無能と知ればアツサリ切り捨て逃走し、他の候補やスポンサーに付く可能性すらある。

それよりも一高を取り巻く環境を作り上げたブランシユの司・一だ。

奴が取り仕切った以上は枝（潜伏したエージェント）を他に残している可能性も高く、洗脳で身代わりですら用意して居ることもありえる。

黒羽家を使って確実に始末するとしたら、こいつだろう。

「では御武運を」

「お前達もな。SBや化生体とやらもある、全てを追えば出し抜かれるくらいに思っておけばいい」

今のうちから敵のアジトを監視し、人の出入りを確認するという二人を見送る。

ヤミは撫でると素直に嬉しそうな顔を見せるが、ヨルの方は一人前のレディとして扱って欲しいと言う辺りは同じ双子でも対象的だった。

それから数日して四月中に討論会は開かれる。

『魔法系クラブに対する優遇を…』

『優遇して居るとのことですが時間や敷地は平等、グラフを見ていただければ予算に置いて…』

非魔法系クラブと魔法系クラブの差別に関しては、元から言い掛りなのと資料を予め用意しているので見守る必要すらない。

どうやっても会長が理論で押し負けることはありえず、感情面での攻勢に関しても勢いが付けば問題は無い。

連中はサクラを使ってこちらを煽ろうとしているが、それに関しても予め交友関係を調べているので、個別に対処が可能だった。

…それと重要なことを連中は忘れていたようだが、サクラならこちらも用意できるのである。

『制度上の問題だと思います。二科生と一科生という括りそのものが不平等の温床では無いのでしょうか？』

「それに関しては同意します。御存じの方も居られるとは思いますが、元もと二科生という区分は一時的な物でした。制服のエンブレムも単に間に合わなかっただけです」

感情の無い(薄い)俺ですら、この話を最初に聞いた時は衝撃的だった。

一般の生徒では驚くなどという方が難しいのか、ザワついて、あちら側のサクラですら追及の手が止まる。

教師たちには頭が痛く、生徒会から見れば生徒と共感できる話題なので、上手く流れが会長の方に回った。

『制度が決まってしまったのは、単に生徒数の伸びに対し、教員の数が伸びなかったからです。教育原理に基づく生徒と教師の絶対比を考えれば、一科生ですらまるで足りていないと言うのが現状です』

魔法師が一般的になり、社会に認知されるに従い様々な職業での採用枠が増えて行った。

適正が見つかり魔法師を目指す生徒数が増えるのは当然だが、教師を目指す者はそう増えなかったのだ（給料面や、戦争から来る軍の員数も起因している）。

会長が言う教育原理に基づく人数というのは…。

大きく才能を伸ばす個別指導は、三名から五名。平均的に延ばす教室で二十名〜三十名。座学を多めにしてもその倍程度が限界らしい。確かにそのレベルの人数差であれば、一科生を育てる人数すら賄えない。

画像通信形式で、問題があるたびに顔を出す今の形式が妥協案だったのだ。

『二科生の方にも能力の延び次第で一科生に上がれる方もおられますし、事実、二科生制度を持つ三つの魔法科高校全ての資料を探せば、不幸にも魔法能力を失った方の代わりに繰り上がった方も居られます。まずは教員の絶対数が問題と覚えておいてください』

ここまでは教師陣にも伝えておいた、体勢が我が見ても仕方のない策の範囲だった。

逆に言うならば、ここからが会長の暴走、反逆とも言える内容だ。最初に服案を聞いた時は、思わず苦笑が漏れたモノである。

『抜本的な教員数の増加は時間を待たねばなりません、『成果次第』で試験的に教師を中心としたコーチ陣のチーム性の導入を学校側に求めたいと思います』

「チーム性…?」

「コーチってというと、部活で呼んだりする、あのコーチ?」

「でもコーチって結構、元二科生の人居るわよね…」

会長の用意した策とは、指導計画そのものは教師が担当するのだが、個別指導は特化型のコーチがそれぞれの専門分野で教えて行くということだ。

スポーツの面において、特に社会人チームでは特化型の魔法師がポジションを占有するのは当たり前になっている。

もちろん一科生だった者で得意分野がある者が上位に来る場合もあるが、複数のメンバーから交代性にする場合は元二科生のメンバー

も多いのだ。

そしてコーチとして招かれる者の中には、当然そういった人も居るので割りとは周知されていた。

『これで人数的な問題は打開できるかもしれませんが。無論、『成果』であれば導入する検討すら上がらないかもしれませんが、九校戦など特化型の選手が活躍し易い環境ならば成果を残せると思います』

「おいおい、九校戦に二科生を入れるつもりかよ……」

「でもスピードシユーティングやクラウドボールだと、人に寄るんじゃない？」

「それって二科生がライバルってことでしょ？ やだー校内予選なんて面倒……」

当たり前だが場内は騒然とし、ハッキリと会長に対する不満を口にする者も居る。

だが完全に状況は決まり、剣道部が用意した論客たちの意見など通りもしない。

今更になって生徒会や一科生が二科生を差別して居るのではないかと糾弾しても、何の意味も無い。

なにしろ会長自ら、今までの制度をぶち壊しに来たからだ。

俺も色々やり過ぎたおかげで、一部の生徒に睨まれて九校戦がやりに難い状況になるとは思ってもみなかった。

（だが成功すれば会長からのオフアームも果たせるし、検証データも多く取れる。何より二科生制度が無くなれば深雪も悲しい顔をしなくなるしな）

もちろん、ここからの妥協案も事前に用意してあった。

魔工科などの専門分野ごとの選択授業を用意して、梓自体を増やすのだ。

今までの画一的に数値を求める一高の授業よりも、幾つかの選択肢から選べる事で満足度が向上する目論みだ。

上手く行くかは別にして『成果』があがればそれに付いてくる者も居るだろうし、反対者も減る筈であった。

（会長派一本にまとめて議論を終わらせるのは無理になったが、茶番

めいた討論会はこれで終わりだな。…そろそろ連中が突入して来るはずだ)

外からこちらにやって来る反応が幾つか見える。

まだ魔法を使用して居ないか、魔法師ではないかもしれない。いずれにせよ急にこちらを目指す集団というのは非常に怪しいと言わない。

「会長に伝言を。妙な連中が校内に侵入したそうです」

「それなら問題無い。既に服部達が動いている…が、その必要があったかな？」

渡辺委員長のニヤリとした笑いを問い正すまでも無く、事態の急変によつてその回答が得られた。

バン、パリーン！ という音の連続と共に、ガス弾が機能し始める。

それに対して服部副会長が即座に空気を操つて、拡散を抑えて外へ放り投げるのが見えたが…。

驚きはそんな物ではなかった。

「世界が燃える…。これは…」

「そうか、お前は見たことがなかったな。これが吉田先生の『封絶』だ」
若草色に燃える世界。

二重構造の情報体を書きこまれ始め、片方が記録の開始時を、もう片方が記載し始めたリアルタイムを更新して居る。

(そうか。記録を二つ作る魔法式で補完する事で、『再生』に近い状況を作りだしているんだ)

情報体が二つあるのは、状況やコストに応じて何もしない方が良い可能性があるからだろう (現にガス弾は状況固定されていない)。

そうすることで『再生』よりもコストを抑えるのであろうが、この方式だと先に展開しないと意味がないので再生の様に後から使用する事が出来ない。

一概にどちらが良いとは言い切れないが、実験用に使うならばこちらの方が良いだろう。親父や小百合さんたちが俺を手放す事に納得した理由も判る気がする。

それほどまでに『封絶』とは特異な魔法であった。

ブランシユとの戦いの前ではあるが、この魔法に関して知りたいと
思う気持ちが留められなさそうだ…。

激論と激戦と【中編】

●逆襲開始

『幸いにも生徒の殆どはこの講堂に居ます。校内に侵入した不審者に
対し、風紀委員を中心に有志でチームを組んで対処してください』
『生徒会を中心とした有志で講堂の防衛とオペレーターを実行します。
システムの立ち上げまで二十…十…キック』

七草会長の放送と共に、市原先輩が『予め』作っておいたMAPと
マーカーを起動した。

そう、予めだ。

今日この日を選んでテロリストがやって来ると判っているのに、何
もしない手は無い。

剣道部や非魔法系クラブが狙うつもりだったのはただの討論会
だったのに、あえて全校集会に準ずるレベルで行ったのはそのため
もある。

不審に思われない為に強制こそしていないが、何らかの『用件があ
る者』以外はほぼ此処に集まっている。

有志と名を打っているのは、単にエリカ達を戦力に加える理由と…
洗脳された連中に汚名を着せない為の処置でしかない。

『既に校内放送を行いました。渡辺委員長は講堂正面で迎え入れる為
の準備を。風紀委員の巡回チームをベースに此処まで連れて来て貰
いますね』

インカムに中条先輩のアナウンスが流れると同時に、端末に各チー
ムのマーカーが現れた。

関本先輩ほか数チームが校内を巡り、森崎ほか有志（エリカ達）が
技術施設。

辰巳先輩と沢木先輩のチームが移動しているのは、おそらく司・甲
を追尾しているからだろう。

「侵入者の数が多くて手が足りん。すまんが司波も関本たちの応援に
行ってやってくれ。相方はそうだな…」

「生徒会の方で問題が無ければ、妹を連れて行っても良いですか？

連携となるとその方が確かです」

「まあお兄様だったら以心伝心だなんて…」

渡辺委員長が予定通りにこちらへ指示を出して来る。

敵本隊は『一高の生徒会長』と『シルバー』をメインターゲットにしているはずなので、おのずと俺たちが主力に成って潰して行くはずだ。

(司・甲は初動の失敗を見て逃げ出したのか？ 随分と思いい切りが良いな)

まあ固執した所でこちらは準備万端で迎え討っているので、結果的に正しいと言える。

テロリストが分散し始めているが、こちらは各個撃破して合流できる場所を選んで待機して居るのだから…。

「達也くん今朝ぶり！ 退屈かと思っていた高校生活がこんなに充実して居るとは思わなかったわ」

「物騒な奴。まあ俺も遠慮せずに行けるから人の事は言えねえけどな」

「施設の方には来なかったぞ。…いつまでも残って居たら判らないが」

エリカとレオは楽しそうに、森崎は不満そうに声を掛けて来た。

その後ろにリンと美月が追従し、後方を幹比古がSBで探知しながら移動して来たようだ。

「幹比古、何か判ったか？ こちらは先行した連中を講堂に残っていた風紀が押さえた所だ。多少の自供もあったが、まだ怪しいと言う範囲だな」

自供するも何も聞く前に出てきたが、後で証言を捏造するつもりなので今のうちに布石を打っておく。

「今のところこちらに三隊。閲覧室と部活棟に一隊ずつってところかな？ 人数が少ない所は『協力者』が居るんだと思う」

「怖がりな中条先輩が泣いて喜ぶデータだな。正面を片付ければ残り二か」

幹比古がSBは他に居ないと言って、既に調査した員数を教えてく

れた。

一番の問題は不意打ちで倒されることだ。

魔法師は精神的にも魔法の発動速度的にも速攻に弱く、万全の体勢さえ整っていれば少々の物理的なパワーを粉碎できる者も居る。

「二隊十名としても三十名を計算の外に放り出すなんて、達也くんは随分と自信家ね」

「学内でなければそうは言わんさ。深雪、カメラのデータをこっちにもらって火力を封じてくれ」

「承知いたしました、お兄様」

口笛を吹くエリカはスルーして、深雪に火薬の動きを凍結させる。

襲撃が判らなければ俺が眼でフォローしたところだが、予想できているので、敵がこちらを窺っている場所は丸判りだ。

データゆえに多少の精度は落ちるが、ある程度の範囲を取ることのできる深雪はアツサリと重火器を黙らせて行った。

「終わりましたお兄様。テロリストを攻撃しなくて良かったのですか？」

「殺し合いがしたい訳じゃないからな。確実に勝てる以上は、お前に無駄な血を流して欲しくない」

「何度見ても慣れないわね。…実は血が繋がっていないとしか思えないわ」

「そうですね…。もしそうなら素敵なんですけど…」

俺と深雪の会話を聞いて、何故かリンと美月が顔を赤らめていた。

そんな空気を隠すように、森崎がこちらに抗議の視線と文句を付けて来る。

「本当にリンさんも連れて行く必要があるのか？」

「マフィアのボスは他に顔が判る者が居ないんじゃないでしょうがない。それにSBや内通者のことを考えればむしろ置いて行く方が危険だぞ」

「シユン、もういいわ。既に納得してるし、もう来ないって確認しなきゃオチオチ帰れないもの」

確実に護りたい森崎には悪いが、俺には…いやリンにも計算して居ることがある。

無頭竜の連中を確実におびき出し、ここで倒すか、絶対に勝てないとまで思い知らせておく必要がある。

延々と騒動が続くのは俺としても面倒であるし、リンとしても支援者を増やす為には『敵対する候補を蹴り落とした』という実績が必要だろう。

「それに危険性から言えば目の前の連中の方が問題だからな。これでも頼りにしているんだが」

「言われなくてもやってやるさー！」

こういつてはなんだが、テロリスト崩れの兵士を倒すには森崎の気絶魔法はうってつけだ。

即座に発動し誰も傷付かず、改変も少ないからサイオンの消費も少ない。

「全員倒さないで欲しんだけどな」

「エリカの出番は直ぐに回って来るさ。協力してる剣道部の連中からCADを取りあげてないからな」

同時に数名居る場合を除いて出番が無く、つまらさなそうにしていたエリカだが敵が残っていると聞いてニヤリと笑った。

当然ながら黄たちも居ることだし、雪辱戦を頑張ってもらおうことにしよう。

●空に聳える黒鉄の城

そうして敵主力から重火器を奪い、地道に蹴散らして行く中…。

俺達は信じられない者を見た。

『不審者達よ！ 此処は学生達の学び屋、即刻立ち去るが良い！』

「魔法師だ、撃て！」

「おい、あれはターゲットだ。あまり傷つけ…」

部活棟の最上階に、仁王立つ一人の漢が居た。

拡声器を利用して警告しているつもりなのだろうが、あれでは銃器の良的だ。

あちらに向かった一隊は封じて居ない事もあり、何人かが射撃を開始する。

「…今のは誰だ？ 防御に随分と自信があるようだが…」

「部活連の十文字会頭だ。ふあ、『フアランクス』があるから心配ないんだろう」

俺の質問に森崎が視線を反らせながら答えた。

感情の無い俺でも信じられないくらいだ、常識人には辛い状況に違いあるまい。

まさかメイン・ターゲットである重要人物が、ノコノコと顔を出すとは…。

「きつと部活の準備で動いているメンバーが逃げ込む時間を稼ぐために、ああして矢表にたっているんだろう」

「いや、弁護は良い。確かにあれなら遠慮はいらん」

テロリストの放つ銃弾は、ライフルだろうがハンドバズーカだろうが届いていない。

途中に展開された防御壁が全てを弾き返している。

「恐ろしいことにフアランクスじゃない。つまり、まだ上の防御があるということだ。味方は士気があがるし、調べているなら敵の士気は落ちるだろうな」

「…フアランクスじゃない？ あれだけ凄い防御なのに…」

攻撃を防ぎ止めているのは、砂鉄か何かを浮かべた領域だった。

「詳しいことは守秘義務があるから言えんが、似たような魔法を開発したことがあると思ってくれ。アレは単に砂鉄か何かを浮かべて何種類かの魔法を重ねているだけなんだ」

「ひえー。俺がやろうとしたら相当苦労するし、それだって一系統が精々だぜ。さすがは十文字家だ」

「まさに空にそびえる黒鉄の城ですねっ！」

俺が七宝に用意した『ピリオン・エッジ』に比べれば大味だが、フアランクスを温存する為の物理防御としてなら十分だ。

感心するレオと美月に頷きながら、俺は頭を冷やす事にした。

磁性を帯びた砂鉄の集合体が、相互に密度を保って防壁を築いている。

（俺が考案して登録された魔法を参考に取り入れたんだろうな。アイデア次第で自分が考え付くことは他人も考え付くということか。飛

行魔法も急がないと…)

自分だけが優れていると言う安易なプライドを持って居た訳ではない。

それでも俺にシヨックを与えるには十分だったし、今は慢心を戒めるキツカケにしようと思っただけ決意した。

ここで驚いているよりも、援護の必要がないと喜ぶべきなのだ。

「あの様子だと適当なところで砂鉄をぶつける気だろう。俺達は予定通りに閲覧室を目指す」

「関本先輩も流石にテロリストと生徒の保護は難しいでしょうしね」

ただ防壁を浮かべただけで、全てを制してしまった漢。

策に頼る俺を嘲笑うようなホンモノに驚愕して居る暇などない。

布石を敷いたのなら回収を急ぐだけだと言う俺を援護する為、深雪はことさらに関本先輩の名前を出して見せた。

まああの人も風紀としての腕前と、閲覧許可が出るほどの頭脳を持ち主だが…。

流石に実戦経験まではそうもいかないだろうし、案内して居る剣道部や非魔法系クラブの連中の方が問題かもしれない。

人質のフリをされたら即座に判断できないだろうし、一緒に気絶させてしまえば良いと思っ切りができる性格でもないだろう。

そして、その予想はそれほど外れては居なかつたのである。

閲覧室に向かう為の道の途中で、関本先輩達が牽制攻撃から身を隠していた。

「遅くなりました。大丈夫ですか？」

「司波か、すまん。壬生に中に入られた。ウ：連中に足止めされて居なければな」

このタイミングでウイードと口走るほど迂闊ではない所を見ると、思ったよりも冷静なようだった。

単に成績へ瑕疵が付くのを恐れたのかもしれないが、大した自制心だと思っておくことにしよう。

「連中の得物は『飛び剣』ですか。それとテロリストが閲覧室を破壊しない程度の銃？」

「そうだ。多少だが恨むぞ。まさか二科生が戦力になるなんて思っ
て無かったからな」

俺としては肩をすくめるしかない。

どんな魔法を教えたか関本先輩は聞きもしなかった。

まあ竹刀を飛ばすだけの魔法と聞いて居ても、笑い飛ばしたかもし
れないが。

「要は使い様ですよ。幹比古、SB：精霊を飛ばして様子を探ってく
れ。銃を持っている奴の位置情報だけでいい」

「判った。ちよつと待ってね」

「お願いします。判明次第に無効化しますので」

先ほどテロリストを片付けた要領を見たこともあり、幹比古は詳細
を聞かずに頷いて軽く目を閉じた。

「：銃を持つてる奴は場所的に壊すのを警戒してるのかな、奥で周囲
の様子を探ってるだけ。こことここだね」

「洗脳してる連中を矢表に立たせるのは、どこの卑劣漢も同じとい
うことだろう。：用意はいいな？」

幹比古が地図を指差すと、深雪が頷くのが見えた。

それを合図に、俺達はいつでも帯び出せるように身構える。

関本先輩が防げなかったのは、既に加速した竹刀に対し、領域防御
の類は意味を為さないからだ。

ならば加速した攻撃を弾きつつ、進軍すれば解決である。

「手順は深雪の合図を待ってから五秒。二撃目以降は俺が無力化する
が、初速に入った『飛び剣』は無理だ。レオが弾いてエリカと森崎が
気絶させろ」

「あいよー。あれから練習したんだぜ」

俺が特化型CADを構えてサイオンを練り上げている間に、レオが
硬化魔法を上着に使用して脱ぎ捨てた。

「行きますー！」

「シユバルツ・シルト！ アイーン！」

深雪が銃器を凍結させ、レオが上着を掌の前方数mに固定する。

俺はその間にグラム・デモリッションを廊下の向こう側に放った。

術式解体は物理障壁に関係ないので、サイオンや魔法など全ての干渉を跳ねのける重要施設：この場合は閲覧室の壁以外では防げない。異変と同時にこちらに飛ばしている、恐ろしい速度の竹刀を除いて。次弾以降の魔法は消え去った筈だ。

「あらよつとー！ はっ！」

レオの制服が初弾を防ぐため、当たるコースの一発を完全に防ぎ二発目を強引に弾じく。

「上手いわよ。あたしは右のをやるから！」

「…何時の間にこんな魔法を。了解した」

その間にエリカが切り込んで、残るもう一人を森崎が容易く気絶させた。

こうなればもはや趨勢は決まった様な物で、廊下での戦いは程の無く決着する。

「やれやれ。一年に全て持って行かれては立つ瀬がないな」

「たまたまです。用意した策が当たったから良い様な物ですが…。それでも十文字会頭なら顔を出すだけで済みそうなのを見てしまつて自信を無くして居るところです」

部活棟で見た十文字会頭の件を出すと、肩をすくめて『あれは反則だ』と苦笑していた。

他愛ないやり取りで意気投合したつもりであったが、…これが関本先輩と親しく(?) 会話した最後になるとは思ってもみなかった。

九校戦での校内予選で、先輩は一科生側のブレーションに回ったからだ。

その間に市原先輩の相談に乗って居たことで溝を作ってしまったのか、残念ながら疎遠になってしまふとはこの時の俺には知る由も無い。

●小さな野望の終焉

廊下を守っていたメンツは全員が奮戦せずに、何人かが戦わずに降伏した。

せつかくなので、ここで野暮用を済ませておこう。

その為には、目撃者が出来るだけ居ない方が良い。

「幹比古。連中は失敗を悟って、今まで落とされたデータだけでも持ち出す為に時間稼ぎをするはずだ。森崎達を連れて押さえに行ってくれ」

「それは構わないけど達也は？」

どうするんだと言う問いに、俺は他愛なさ下に笑って見せる。

「状況的に壬生先輩が来るだろうからな、エリカとレオだけで行ってくる。万が一に備えて深雪はこちらのバックアップを、美月は外組を見張っておいてくれ」

「親しい者だけならこちらが油断するかも…という隙を突くのですね。判りましたお兄様」

「では、私は精霊が居ないかを…あ、『姿隠し』も見ればいいんですね！ そのくらいなら大丈夫です！」

妙に美月が大仰な魔法を知っているが、まあそれ以外は予想通りだ。

幹比古や森崎も特に疑うことは無く、頷いて移動を開始した。

そしてエリカとレオに閲覧室の扉を任せ、テロリストや協力した生徒を縛りあげている最中の廊下にまで一度戻ることにした。

その中からあえて他の風紀委員が後回しにしている…気絶して居る奴を軽く尋問する。

「お前達はどこから来たんだ？ 何…？ そんなに近くにあったのか！？」

ワザとらしく声を上げ、ショックを受けた風を装ってそいつからバサリと手を離す。

「何が判ったんだ？」

「連中のアジトは近くの工場だそうです。ええ、目と鼻と先の。流石に一時的な集合場所でしょうが、まだバックアップ部隊が居る可能性はあります」

「そりゃあ本拠地は離れた場所だろうけど…でも放置する手は無いよな。生徒会に伝えて来る」

…これで良い。

特別閲覧室を抑えたら、あとはブランシユと無頭竜の残党を潰しに

行くだけ。

データ自体は藤林少尉がダミーを噛ましているはずだし、隊の方で百山校長なり七草会長なりと交渉を開始しているころだ。

そして幹比古から配置に付いたとメールが来た段階で、俺は何食わぬ顔をしてエリカ達の元に戻る。

「何かあったの？」

「連中のアジトの一つが近くにな。マフィアの連中が居るならそこだろう。…生徒会や駆け付けた専門家が詳しく聞き出すだろうが、本命は警察なり軍なりに任せよう」

「俺達と関わりある奴は、そこで成果を待つて居る可能性が高いってことだよな？ いいぜ。最後まで付き合ってやるよ」

あくまで苦し紛れに集合場所を教え、近くだからそこを抑えに行くだけ。警察や軍の部隊には本命の場所をお願いする…ということにしておく。

捏造はしたが情報は本物であり、偽の自供かと思っで一応で行ったら本当になつてしまったただだから仕方は無い。

部隊や機材を隠し待機するというのは十分にあり得る話なので、レオ達も納得した様だった。

そうしてこちらの様子を窺っていたのか、あるいは待つている間にエリカが声でも掛けたのか…。

壬生先輩が滑り易い靴とソックスを脱ぎ、両手に武装した状態で現れた。

今までと違うスタイルなのは、こちらのアドバイスを真摯に聞くと同時に、自分なりのアレンジを加えたのだろう。

「ふうん。小太刀…二刀流か。あれっで達也くんが教えたの？」

「いや、自分で考え抜いた末だろう。出なければこの土壇場で自信を持って対峙はすまい」

二刀じゃなくて、多刀流だよな？

ああ、多刀流で間違いないだろう。

そんなニューアンスを交えて俺達は頷きあった。

俺が勧めたのは投擲術で、壬生先輩自身が極めたいと思うのは剣で

ある。

ならば一本が最大の剣腕を發揮できるであろうし、ならば残り…二本目だけではなく、『飛び剣』で放置された竹刀も予備の武器と思うべきだろう。

あくまで一本で戦い、他は牽制の為に投げ捨てるというのが考え付いた結果だと思われる。

「司波くん、私達を騙っていたのね」

「騙っていたのは司先輩…いえ、ブランシユの司…一です。出なければデータ強盗などするはずもない」

怒りに燃える目と、なぜ自分がこんなことをという疑念の目が交互に現れる。

「私達は学校を少しでも良いものにしようとしたのに…。二科生とか一科生で差別されることなく…」

「差別と区別は違いますよ。ですが生徒会も改革を目指していました。先輩達は聞いておられないかもしれませんが、講堂では二科生を九校戦に出すと言う話題で大変です」

ふと強い瞳に戻るのは、決まって改革とか良い学校にという言葉が出る時だけだ。

「二科生を九校戦に？ 嘘でしょ、そんなことが出来るわけがない」

「お陰で針のムシロだから嘘は言いませんよ。ただ校内予選をして負ければ当然として、競技も相性次第で無理でしょうね」

願いが叶ったかもしれないのに、いや、だからこそ壬生先輩は信じない。

徹底して反抗するように仕込まれているのか、何を言っても敵対しようとするだけだ。

口では何を言っても通じない。

そんな手詰まりの状況に対し、エリカは笑って道を示した。

「真面目な話、あたしがあの女と剣で勝負してみせれば楽勝なのよね。競技によっては二科生が一科生に圧勝できるって一目で判るから」

「…？ そりゃエリカちゃんは強いと思うけど、そんなに強いのか？」

エリカが話したのは、壬生先輩にも判り易い内容だ。

俺の言う様な理論とか布石の話などではなく、壬生先輩が望む方法で確実に判る方法を口にした。

「あの女はうちの道場の目録であたしは印可。当然義理許しじゃなくて実力ですよ？　もし一撃でも入れることが出来たら、人前で仕合でもうちの道場への推薦でもやったげる」

「それは魅力的ね。判り易いし…一撃で良いなら私にも出来そう！」
エリカの易い挑発に、壬生先輩は姿勢を傾斜して身構えることで答えた。

何時でも良いと見せつけはするが、それで不意など討ちはしない。しかし奇妙なのは、出て来た時から素足でありながら何故か上着を脱いでいないことだ。

それは大した時間も無く判明する。

「行くわよエリカちゃん！」

「挨拶なんて要らないから掛って来なさいな」

片方の小太刀を投擲し、壬生先輩は即座に体を横に倒した。

エリカの攻撃を警戒したのではない、足元に転がっている竹刀を取りに行くと『見せた』のだ。

距離を詰めようとするエリカに対し、壬生先輩は一回転しつつ制服のポケットに手をつ突っ込んだ。

「悪いわね！」

「暗器くらい遠慮は要らないって、ぼっ」

もしエリカが壬生先輩と同じタイプの素質ならば、ここで勝負はついただろう。

だが実際には術式の速度で押すタイプではなく、反応の速さ・知覚力こそがウリである。

強化されたシャーペンをあっさり弾き返し、同時に放った未強化の紙手裏剣を避けて見せた。

「信じられない。何も強化してないから軌道が不規則になるのに」

「判り難いだけで不規則じゃないわよ。でもありがと、あたしの言葉を信じてくれて」

一撃でも当てたら模範仕合を見せても、推薦しても良い。

更に一撃入れるためなら何でも良いという言葉。それら全てを信じなければ、壬生先輩は紙で作っただけの手裏剣など投げはしなかつたろう。

どこでも調達できる材料だが、魔法で強化さえすれば恐るべき武器になる。

とはいえ口約束を信じないならば、そんなことをしても無駄なのだから。

俺が真実を口にしても信じてもらえなかつた言葉を、アツサリと信じさせるエリカのコミュニティ能力には、嫉妬を覚える前に羨ましく思えてしまう。

「ああそうそう、せっかく信じてくれて悪いんだけど…。ちよつとだけ修正するね。でも上方修正だから安心してよ」

「何かしら？ 二科生が一科生より凄いつて見せてくれるならなんでもいいけど」

警棒を担いでウインクするエリカに、壬生先輩は小太刀を正眼からやや斜めに持ちあげて身構える。

突きでの攻撃を意識しながら、エリカの踏み込みを迎撃する算段か。

「あたしに一撃入れたらじゃなくて、コレを食らって立って居られたらで良いわよ！」

「えっ？」

エリカのスローな踏み込みが、壬生先輩に打ち込む寸前にブレて見えた。

使用したのはただの加速魔法、それも小さな移動強化。だが、瞬間的に小刻みな『歩』と『振り』を刻む事で打ち込みの反応が前後にブレて見えたのである。

「急所に来ると…判つて…たのに」

「使ったのはごく普通の加速魔法よ。奥義に繋がる使い方ではあるけどね。…判つてくれたかな？」

「判つてくれたさ。しかし、あれが千葉家の『すり足』か」

以前に『すり足』と言う加速魔法の使い方を尋たことがある。

その時は、師匠が見せた使い方を教えるつもりだったのだが……。完全に使い方が違っていった。

「同じ呼称でも随分と違ったものだな」

「おおかた、次の移動先を読ませない使い方だったんじゃない？うちのは見えての通り受けさせないことに特化してるの」

言われてみれば、師匠に見せてもらったのは場を制する攻防一体の動きだった。

「達也くんのお師匠って忍者の九重先生だって？ 陰流とかタイ捨に近いんじゃないかな」

「本人は忍者じゃなくて忍びと行って欲しいと言ってたがな。…レオ、何か変化はあったか？」

「剣道部の主将が捕まったつてよ」

そんな他愛ない話で、意味の無い戦いに意味を無理にやりに持たせる。

ここで何をしようが記録には残らないし、何の成果にもならないのだ。全ては本人たちの主観でしかない。

そして無理やりついでに強引な話題転換を図ると、予定通り司・甲を取り押さえたとの報告があったらしい。

人の目・機械の目・魔法の目。

幾つもの目で剣道部…特に司・甲は監視されていた。

テロ用CADを取りあげもせず奴を拘束もせずに泳がしていたのは、予備の保管庫や予備の計画を含めて抑えたかったからだ。

現行犯で取り抑えた以上は、黙秘を続けたとしても渡辺委員長が例の方法で全てを聞き出すだろう。

後はブランシユと無頭竜だけだと区切りを付けたところで、軍や警察から遅ればせながら駆け付けて居る所だと連絡が入った。

俺達は交渉した七草会長・十文字会頭の指示により、工場へ向かうと言う大義名分を得ることになる。

当初の予定は全て計画通りに進行し、司・甲も洗脳されていたということだけが唯一の誤算であった。

激論と激闘と【後編】

●臨時編成

駆け付けて来たという触れ込みの軍関係者は、真田中尉と元から近くで待機していた藤林少尉だった。

共に技術士官としての趣が強く、技術部隊ゆえに戦力が足りないから学生達の申し出を受け入れるというスタンスを糊塗するものだ。

「一時的に皆さんを受け入れさせていただきますが、秩序の問題から全ての命令系統と責任はまず軍、次に魔法師団体が負います」

「異論あろうはずありません。我々は学生です」

十文字会頭が厳めしい顔で頷いているが、とても学生とは思えない。

戦力に数える様に交渉に参加して、責任免除の代わりに命令に従うという形を取ったのだから普通の学生というには程遠いが、動いて良い範囲としてはやはり学生と言う限界があるのだろう。

「志願された方の中で詳しくない方にぎつくばらんに説明しますと、漫画の様な独自行動権無し命令拒否するならお帰りいただく、その代わりに全ての責任は軍が持つということです」

さすがに此処で馬鹿なことを言い出して、追い出されるような奴は志願して居ない。

というよりは風紀や有志を中心とした、先ほど侵入したテロリストへの対策へ当たった者達だけしか話をしていないのだから当然とも言える。

「今回の出勤範囲は第一高校近くの工場偵察、テロリストの排除ですが無理を行う必要はありません。警察の魔法師隊も駆け付けて居ますので、存在して居た場合は報告のみや追い出すだけでも構いません」

志願したのだから今更怯える者はいないが、説明されて安堵の声が聞こえた。偵察の結果を伝えるだけ・見つかったと知らせ、拠点から追い出すだけで構わないだけなら危険は少ないからだ。

「工場へは正面搬出口と側面資材搬入口の二隊に分けて圧迫していた

だきます。裏口は追い出す為に空けておいてください」

「もちろん、こちらで裏口に監視要員を付けておられますので皆さんが逃げていく者達を心配する必要はありません。何か質問は？」

「ありません」

実際には質問があるのかもしれないが、十文字会頭が無いと言った後で口に出す者も居ない。

体育会系も文科系も軍より会頭の圧力に呑まれたかのようだった。

頼もしさという意味では、存在だけで全ての問題を払しょくしてしまいいそうな雰囲気があるに在る。

二両の車に別れ十文字会頭や桐原先輩たちの三年組が正面、俺たち残りの者が側面担当になった。

「幹比古が居てくれるのはありがたいが、美月と一緒に残らなくて良かったのか？」

「止めてよね、今更置いてくるとか。それに偵察って言う意味なら精霊は役に立つよ」

実際の話、SBによる詳細の把握はとて役立った。

時間が掛ると言うのがネックだが、そんなものは意味を為さなくらいに価値がある。

探査魔法で撫でる程度の調査をするのと、詳しい内容を肉眼に準ずる形でジツクリ調べるのでは雲泥の差があるからだ。

加えて相手の探知に引掛かり難く、見つかったも生命の危険が低いというのでは使うなと言う方が嘘である。

(九校戦に使えるな。だが校内予選でメイン競技のモノリス・コードやサブ競技のステイプル・チエースがあるとは限らん。刻印を使用した呪符の準備を急ぐか)

二科生を活躍させるという難問に対して、ほぼ一科生の幹比古は原則級の腕前ではある。

しかしぶっつけ本番で戦わされたら、試合巧者の選手には負ける可能性が高いだろう。

その前に、速度差を埋める為の刻印呪符を作っておく必要があった。

しかしソレは先の事だ。

今は確実にブランシユと無頭竜を潰すべく手を打っておかねばなるまい。逃がすだけで良いと言うのは俺にとっては建前なのだから。現に見知った反応が二つ、工場手前の小さな林の辺りに潜んでいるのが俺の眼には見えている。

暫くして裏口を中心として気配が攪拌されていくのは、黒羽家のチームが待機したからだろう。

「確認する。少し前に調べてもらった化生体だが、精霊にも組み合わせられるのか？」

「可能というかソレを目的にした術式もあるくらいだけど、どうしたの？」

戸惑う幹比古には悪いが時間が無い、俺は眼で見たことを伝えるべく運転席に連絡を取った。

「先ほどの別れ道で探知しました。正面口方向に伏兵です、おそらくは……」

「もう遅いみたい。今日は最初から姿を現してるみたいよ」

伝え終わるよりも先にエリカが空を指差した。

そこには狗の首が飛翔し、あちらへ向かう車両に襲いかかっている。

反撃の魔法が二・三発飛んでいるが、さして効果が無い様だった。

「幹比古、簡単な対処法をメールで転送してくれ。俺はその間に以前に起きたことを説明する」

「了解。説明と同時に術を使えないのがもどかしいな」

「んー。こういうやりとりを見ると、魔法師は古式を捨てるのが早過ぎたって気がするぜ」

なんとも呑気なレオの言葉だが、案外それは真実を示している様な気がする。

これだけ絶対的な奇襲性・偵察性は他には代えがたい。捨てたというよりは組織編成の過程で向こうが現代魔法に距離を取ったと思われた。

「有効な手段がこちらにあるなら援護に行くか？」

「いや、そうもいくまい。別口がこちらに迫っているからな」

当然と言えば当然なのだが、リンにはS Bの目を誤魔化す護符の類を外させている。

幹比古が遅延魔法を使い続けるようなものなので負担になるだけという理屈だが、実際には相手に探知させてこちらに来させる為だ。

失点続きの無頭竜としては、ここで迎撃のついでに始末しておきたいと思わせておいた。

そしてその図式は上手く当たり、正面口へ遠距離型の朱《チュー》が牽制へ。

黄が林ウオンを通ってこちらへ向かっているということだろう。

●ソーサリー・ブースター

「しかし、気に成るのは奴が言っていた対抗手段だな。レオの奥義は硬化魔法と言うより不壊魔法と言った感じだったが」

「使うと凄く腹減るから使いたくねーんだけど、必殺の奥義っていうほどのもんじゃねーがな」

どちらかと言えばコストの良い魔法である硬化魔法が、急激に力ロリーを消費するなら不便ではあろう。

だがそう言うのを状況に合わせて上手く使う事で、奥義と呼べるような使い道は出来ると言うことだ。

そして必殺では無いにしろ、無敵の防御に対し何を用意したかが気になった。

(奴には実戦経験があるとして俺ならどう対処する？ 俺なら消耗戦に持ち込むか最初から勝負なんて…)

その時、俺の眼に映ったのは幻覚魔法・加重魔法・障壁系の魔法が幾つか。

詳細までは判らないが車両に対して使う罫はそう多くない。地雷でないのであれば…アレに移動中の車両がぶつかればただでは済むまい。

「レオ、合図したら前にインストールした車両ごと覆う硬化魔法を掛ける。即席バリケードが来る」

「へっ？ 練習なんぞしてねえぞ。そりゃ入れっぱにしてるが」

「お兄様、衝撃吸収の方はこちらで。決して衝撃を残しません」

車を潰してまで練習する様な必要性はなかったので仕方無いが、今に成って見れば覆う訓練だけでもさせておけば良かった。

そうしておけば最低限、外からのダメージに耐えることが出来るのだから。もはや遅きに失した判断であるが嘆くだけでは意味が無い。

「今だ！ 他の者は衝撃に備えろ！」

「ぶつつけ本番かよ、ヨルムガント！」

レオの硬化魔法が車両を覆ったところで、突如現れた紐にぶつかった。

紐にぶつかったと言うには強烈な衝撃が襲うはずであったが、深雪が衝撃を緩和する事で大事を避けることに成功した。

だが以前の黄ウオンとは違う力強い魔法力に、俺は少なからず衝撃を覚える。

（これが奴の言って居た、殺しきれぬ装備の威力か？ だがどうやって魔法力の強化を…）

前に合った時は精巧さと隠蔽を重視して居ただけなのか？

それとも専用のCADを使っていたのだろうか…。その問いを考えるよりも先に次の魔法が確認でき始めた。

仕方無く呼び出していた通信を利用し、念の為に確認を取る。

「問題が無ければこちらに来た足止め要員の迎撃に向かいます」

「お願いしますね。繰り返しますが無理は構いませんので」

今回の工場制圧は出来るだけ記録には残さないように成るはずだった。

あくまで軍・警察を中心とした臨時編成の治安行動の一環とされるはずだが、それでも悪意を持って調査されたら完全に無かったことに居するのは難しい。

可能な限り早く終わらせて、居ないことに気が付いた他の生徒の記憶に残る前に片付けたい所だ。

その為の建前をもどかしく思いながら、停止した車両から出るべく扉を開けた。

前と同じ四人で出ることにして、森崎たち…特に時間の掛る幹比古

を伏兵に置いておく。

「随分と手荒い歓迎だなダグラス・黄^{ウオン}。無頭竜はそんなに暇なのか？」

あえて無頭竜の事を口にして視線を奴が隠れている方向に移すと、面白がっている風を装って黄^{ウオン}が出て来た。

「おやおや。私の正体がバレていたとはね。君の調査力に驚くべきか、それともお嬢様に聞いたのかね？」

前回と同じスーツ姿に大きめの鞆を持っている。

だが前と違うのは、さつさと上着を脱ぎ捨ててシャツと奇妙な板の付いたサスペンド・バンド姿に成ったことだ。

装甲板というには薄いようだが…。

「どちらでもないさ。だがまさか一人ではあるまい？ ジエイムズ・朱^{チユ}はあちらで足止めにあっているようだが」

俺は視線を奴の背後にある林に移した後、正面口で起きている戦闘に話を移す。

あちらでは躁弾射撃を留める為だろうか砂鉄の壁が展開しており、こちらと同様にバックアップが一人黄^{ウオン}に付いている。

能力に優れた戦闘員が四名も居るならば、常識的には遅延戦闘よりも片方の突入を確実に打ち破りそこから脱出すべきなのだが…。

相当の自信があるのか、それとも遅らせている間に裏口から逃げれば済むと思っているほど、無頭竜の新ボスは頭が悪いのか保身重視なのかかもしれない。

「そうか、朱^{チユ}の名前からという訳だね。そこまで知っているということは、君も表社会だけの繋がりだけではないようだ」

黄^{ウオン}は舌打ちを交えながらも、笑顔豊かなビジネスマンと言った風を崩さない。

そして鞆から円筒状のナニカを取り出すと、サスペンダーの板にソレを取りつけ背中側に回して行った。

その間も終始笑顔のまま、援護は隠れているもう一人だけだと言うのに余裕の表情だ。

「なんでもう一人は出て来ないのかな？」

「信じがたいが一人で相手するつもりなんだろう。万が一の保険に足止め役として残してるのさ」

確かにこちらは戦術級魔法師はおらず、一科生も森崎しかいない。だがそれは結果論であり、最低でも一科生数名を覚悟すべきなのだ。

「ということ、黄^{ウオン}自身が戦術級魔法師級の実力があるとしなければ勘定に合わない。」

「その奇妙な物体が自信の源か？　とうていレリックには見えんが」「そうとも。まさか子供相手に『ブースター』を使う羽目に成るとは思わなかったよ」

黄^{ウオン}が使ったのは相も変わらず、風と幻影の術式。

だが規模と力強さが段違いで別人かと思うくらいだ。悠長に集中して居るなら術式解体で吹き飛ばすところだが、素早く使用できる範囲で何度も実行して居るので介入し難い。

会話で様子を窺いながら速攻で仕立てる組み立ては。この男のモノであり余人の関与できるタイミングとも思えなかった。

「いや、それとも後ろのバックアップが遅延術式を事前に使っておいて合わせたのか？　そう考えれば辻褄が合うが…」

本人の能力をスムーズに使う為のツールがCADであり、大幅に強化するものではない。

薬物を使用するなり何らかの反則を使用したとしか思えないが、後少しで正解に辿りつけそうな時に衝撃が俺を襲った。

「だが、このM・エクスパンダの実戦データ^{データ}の記録でも取らんことには“徒督”の元には戻れん。ミスター・シルバーはともかく他の者には覚悟してもらおう」

「その“徒督”とやらがスポンサーか？　無能な上司に巻き込まれて右往左往するのは気の毒な事だな」

ドラマじゃあるまいし黄^{ウオン}がうっかりスポンサーの情報を漏らす筈は無い。

黒幕が居ると臭わせて、自分の勢力を強大に見せつつ、場合によってはそちらへ調査の追及をさせて自身は暫く潜伏する気なのだろう。

俺としても使い走りよりは、大本を断ちたいと思う訳だから間違つた方法ではない。

にこやかな笑みをニヤリとした厭らしいものに替え、黄ウオンは小出しにしてきた魔法を大掛りなモノに変更する。

「さてね。もし私を捕まえられたら考えてみよう。出来たら、の話だがね！」

「やらせると思うか？ 同じ手口ならば規模を替えた所で……」

同じことをやって来るとは露ほどにも思わないが、ここは奴の思惑に乗ったフリをしておく。

俺達が引つ掛つたとしても、幹比古が居る分だけこちらが有利だ。「罫を用意してるみたいだし、こないだの魔法は隠しといた方がいいかもね」

「使わなきゃ死ぬ時は仕方ねーが、まあ使い難い魔法だし俺はどっちでも構わねえよ」

（記録しているというのがやり難いな。実戦テストなら当然とはいえ、『分解』を使う訳にはいかん）

奴としても商品の情報を漏らしたのは意味があるはずだ。

エリカが釘を刺したように、俺達の切り札を使い難くさせたのもあるだろう。

レオはまるで気にして居ない様だったが、アレがローゼン・マジクラフトの秘匿技術ならば後で厄介なことになりかねない。

だがそんな悠長なことは言っても居られない。

奴が煙草を啜えた瞬間にグラム・デモリツションで幻覚を初動で打ち崩すと、何故かもうもうと煙で覆われたのだ。

「うお!? 目の前が見えねえ!」

「くっ。…まさか何も無い光景で煙幕を隠していたとはな。姑息な真似を」

「年の功と言ってくれたまえ。まずは今のうちに前衛の二人組みを何とかするのだろうか」

一足先に光学系の幻覚でナニカを隠していたところまでは気が付いていたが、今から煙幕を張ろうとする所へもう一枚の煙幕を隠して

いるとは思わなかった。

二枚壁の煙幕を使って、攻防一体の陣を敷こうとしていたのに違いあるまい。

（俺が術式解体を使うことを見越しているとは……。手の内が知られていることがこれほどやり難いとはな。四葉の隠蔽体質にも意味があつたと言うことか）

FLTに載せている情報に記載して居るとは言え、こうも見事に出し抜かれるとむしろ心地良さを覚える。

全体としては有利な状況に在り、今のうちに経験を積みれば九校戦などで活かすこともできるだろう。

「お兄さま、わたくしがまとめて吹き流しましょうか？」

「構わない。それよりも深雪は後方への領域防御を頼む。このくらいは俺でもできるさ」

二丁の特化型CADのうち片方には、前の戦いの経験から気流を操作する収束系を入れておいたので簡単にだが吹き払って行く。

黄^{ウオン}が煙幕を垂れ流しているのが風上の為、完全には無理だがこれでは戦うには問題無い筈だ。

もちろん、俺が吹き払うことなど前提の上だろう。

新たな魔法が既に発動しており、それはエリカとレオに絡みついていた。

「申し訳ねえが動けねえ。ちよいとなんとかしてれ」

「判った。だが硬化魔法を掛ける準備はしておけ」

そういつて余裕のあるレオよりも先にエリカの周囲へグラム・デモリッションを撃ち放つ。

だが細い幻覚の糸が煙のラインを伝わり、まるで阿弥陀籤のように複雑な絡み方で、数本解き放つても別の数本へ拘束の比重が移されていった。

そして俺が次の糸を消し飛ばす頃には、別の糸が絡みついて雁字搦めにしていく。

何も無い空間でそれをやるには具体的なイメージが必要だが、煙というマーカールがあればそう難しくは無いのかもしれない。

「ちよつとー。逆に動けなくなつたんですけど」

「悪いな。化生体にするとコントロールが上手くなると言うのは本当の様だ」

俺が術式解体を連射することを踏まえて、糸はペースを替えながら四方八方から延びて行く。

エリカは直ぐに動けると思つて大人しくしていたようだが、それが幸いして網の中に飛び込んで居ないと言うだけに過ぎない。

「ふむ、流石に口が滑つたか。そこまで調べられているとはな。うっかり私が丸裸にされるまえに、女の子の方を丸裸にするとしよう」

「このエロジジイ！ 前もそんな事言つて無かつたつけ！ あとでぶん殴つてやるっ」

（どつちみち殴る事実に変わりは無いとは思うが……。しかし面倒だな。奴の手の内を一手めくることに俺の方が丸裸にされそうだな）

術式解体を単発の連射から、バーストモードに変更して面制圧を開始した。

すると幻覚の中からピアノ線が数本見つかり、いつの間に張り巡らせたのか驚くほどだ。

（なるほど、エリカはこれを察知して動かなかつたのか。迂闊に動かなかつたんじゃないやなくて動けなかつた訳か）

仮にさつきの障壁を使った即席バリケードも、このピアノ線に沿つて使つたものと仮定するとバイクでやってきた場合は首が飛ぶ可能性だつてあるだろう。

もちろん魔法で無理やり結んだ物だけに、それほどの切れ味はない可能性もある。

しかし自己加速で走り回ればそれだけで切り刻まれかねない。エリカは無駄に飛ばすタイプではないのが幸いした。

とはいえ余裕ぶるのもこのくらいか。

「ではまずは一人目だ。もう一人にはそのまま動けないままでもいいからおう」

本格的に対処しなければならなくなつて来たのは確かだ、なにせ今度は特大のギロチンを用意して来たのだから。

黄^{ウオン}が空中で煙草を一回転させると、エリカの周囲に円形の刃が作り出された。

それがピアノ線を強化したものか、それとも加重システムを使ったものかは知らないが、喰らえば命の危険があるのは間違いない。

逃げられない状況でこれを食らえば即死だが…。

「シユヴァルツ・シルト、アイン！ エリカを護れ！」

「おっと、そうはいかん。その魔法は以前に見せてもらったからな」

レオが上着に硬化魔法を掛けてエリカのガードに入るが、黄^{ウオン}は強引にレオを持ちあげて位置をずらしてしまった。

以前に見せたパターンと固定位置が違うのに見抜く辺りは、コピーして売り捌く時の為に研究でもしていたのだろう。

「ここまですな。…エリカ、物心ドウジ斬りの要領で振るってみろ。サイオンを多めに発散して刃を創るつもりでな」

「アレを？ ああ、そういうことね」

以前に勧めたS B対処用の魔法をアレンジして使うように指示すると、エリカは納得入ったところで警棒を振るった。

最初は手首だけの動きであったり、サイオンの収束が上手く行かずに散漫であったが慣れてくれば問題無い。

鋭い殺気が練り上げられると、魔法で作った糸もピアノ線も断ち切られて行く。

「んー助かったのは良いけど、なんで？」

「幹比古が何度か言ってたろう。化生体は術の完成度を大幅に助ける役目があるとな。その連携を崩してしまえば逃げ出すのはそう難しい事じゃない」

警棒状のグラム・デモリツションが、化生体を打ち砕いたことで魔法の明確なイメージが出来なくなったのだ。

もちろんぶつつけ本番で上手く行く筈は無いが、俺がバーストタイプで散々にふき飛ばした後である。

黄^{ウオン}が俺との綱引きから、攻撃用の魔法に力の配分を移したこともあって、エリカの脱出を防げなかったのだ。

「これでハッキリしたな。何故か魔法の強度と持続性が大幅に向上し

ているが、操る精度はお前の実力を上回るものじゃない」

なんらかの反則で黄は疲れ知らずの力を手に入れている。

だから全力で振るいながらも延々と魔法を実行出来るのだ。しかし出力が上がっているだけで実力的にはそう替わっている訳ではないのだ。

「くっ…。だが封じられたのは駆け引きだけだ、普通の撃ち合いではまだ負けては居らんぞ！」

今度は煙草を横薙ぎに振るってシンプルな煙の槍を創り出して来た。

そのワントempoを置く分だけ精度は確かな物だし、元から精緻なコントロールを誇る奴なら上手いモノだと感心するくらいだ。

「まあそれは確かにそうだな。しかし、お前は忘れていることがある。撃ち合いならば俺でも出来る。そして…」

グラム・デモリッションで撃ち落とし、次々に繰り出して来る槍をバーストモードで撃ち落として行く。

そして視線を深雪に移し、軽く頷くのを見てから指示を出す事にした。

「撃ち合いなどしなくても範囲ごと吹き飛ばせばいい。深雪、奴の後ろの辺りからバックアップもろともニブルヘイムで凍結するつもりでいくんだ」

「はい、お兄様」

ギョっとした顔で黄が動き出すのが判る。

目に見えた奴の姿は前方数mに移しだした幻影であり、本体はその後ろに反応があった。

流石に知らない相手であったり、魔法を使うタイミングを肉弾戦と組み合わせられたらそうもいかないが、悠長にしゃべっているのだから丸判りだ。

●カウンターアタック

「黄お前はやはりマファイアだよ。大した幻覚だったが俺の師匠には及ばん」

「今果心と比べたら可哀想だと思っけど…。あ、別に可哀想でも何で

も無かったわ」

「師匠なら俺の判断力を奪うように、あるいは気配を掴ませないようにやっただろう。」

「頻繁に位置を替え、時には大胆に目の前に立ち体術と組み合わせ襲いかかって来た筈だ。」

「優位に立って居るからと過信するのはナンセンスという他ない。」

「とはいえ奴がまだ健在なのは確かだ、あわやの所で逃げ出して別の場所に潜んで居るはずだ。」

「ここで視線を車両の方に戻し、魔法の遅延魔法の反応を確認してから声を掛ける。」

「幹比古、後は任せていいか?」

「構わないよ。防壁も張ったし、そいつのやり口はジツクリと見せてもらったからね」

「幹比古は数枚の札を手に現れた。」

「そしておもむろに一枚を取りあげて天へ掲げ、二枚目を大地に投げる。」

「遅延発動によりタイムラグを伴って次々に行使されて行った。」

「『天つ風、雲の通ひ路、吹き閉じよ』：煙に匂いを付けてるのは相対位置を把握する為だよな? 自分でも危険な物もあるし」

「最初に力強い風が短く全体を揺らし、次第に緩いが継続して一定方向に煙も香りも吹き流して行く。」

「短歌の上の句を詠んで居るのは、化生体の代わりなのだろうか?」

「そして三枚目と四枚目を同時に放り投げ、次の魔法を行使する。」

「『唐紅にくくるとは』『紅葉の錦、神のまにまに』：面倒だから色を付けさせてもらったよ、これで間違えることは無い」

「今度の魔法は深紅のフラッシュが焚かれたかと思うと、僅かな明滅で陰影をハッキリと地面に投射した。」

「何も無い所へ紐が映るのはピアノ線だろうし、赤い男はもちろん黄ウオンに違いあるまい。」

「納得いかない：今度はミキが全部もってった」

「お前はなんとか斬りを試したじゃねーか。俺なんか良いところ無し」

だぜ」

「僕は幹比古だっけっていつてるだろ。…二人とも仲が良いね」

エリカとレオがギャーギャー言い始めるのを幹比古は眩しそうに笑っていた。

おそらく今の魔法は会心の出来であり、強敵相手に自分が思い通りの魔法が振るえた事に満足して居るのだろう。

(このまま成功裏に終わらせてやりたい所だがな…。 そうもいかんか)

上から目線で導けるほど、俺にも余裕がある訳ではない。

こちらを窺う森崎を目線で制した後、油断なく黄^{ウオン}が居る位置と後方の林に二丁のCADを突きつけておく。

(何せ逃げるだけなら普通の爆弾一つで十分だからな。 加えてバックアップがまだ生きている。 例の強化人間だろうし厄介だ)

深雪の魔法から逃れるのは咄嗟の判断だったはずだが、それでもまだ生命反応を残していた。

消えゆく命と比べて魔法力は急上昇していく。

「チッ。 諦めの悪い男だな、ダグラス・黄^{ウオン}」

「死ななければ次があるということさ。 ジェネレーターのリミッターを解除した。 お前達を倒すのは無理だろうが足止めくらいは期待できる」

ジェネレーターというのは強化人間のことだろう。

黄^{ウオン}は赤い間抜けな恰好のまま走り出し、代わりにバックアップが無茶苦茶に魔法を使用しながら飛び出してくる。

「許容範囲を越えて魔法を使ってくるぞ。 絶対に捕まるなよ！」

「そういうことは早く言ってくれ！」

俺は連発して来る魔法を何とか防ぎ止めつつ、視線を黄^{ウオン}の方に向けてるが奴を倒すだけの余裕が無かった。

せめて誰も見て居なければ『分解』で始末するのだが、色が付いてしまったこともありそう言う訳にも行かない。

コミュニケーションを広げれば出来る事も増えるが、思い切りよく非常手段をとれないのはもどかしくもある。

「逃がしたのは残念だが、なんとか無事に切り抜けたな」

「正面口の方も終った見たいだね。歩調を合わせて工場の中に向かうとしようか」

黄^{ウオン}が逃げ出したことで朱^{チユウ}の方も逃げることにしたようだ。

十文字会頭の防御魔法との相性を考えればもつと前に決着が付いており、逃げた責任を押しつけるためだけに様子を窺っていた可能性すらあった。

いずれにせよ向こうが動いた以上は、こちらも移動するべきだろう。

●白竜の墜ちる日

工場に向かうにつれ、想定していた敵の作戦や人物像とかけ離れて来る。

指導者である司・一が踏み留まって指揮を行いつつ、徐々に後退して居るのだ。

加えて気配を攪拌していた亜矢子の魔法が徐々に遠ざかることを考えれば、見えて来るモノもある。

「リン、後退してるあのグループの中に無頭竜のボス候補は居ますかね？」

「当たり前のようにロバート叔父は居ないけど……。嫌な予感がするわよね」

対立候補に良い印象は無いようだが、俺と予想は一致しているようだ。

既に遅延戦闘をさせている状況で、今更のようにリーダーである司・一が陣頭指揮に立つ必要が無い。

「察するにあれは影武者でしょうね。思ったよりも奮闘して居るし、洗脳魔法で自分がリーダーだと思ひこませているのかな」

「どうする？ あたしたちで追いかけてやうのも悪くないけど」

エリカが言うように追撃したい所ではあるが、そうもいかない事情がある。

建前として以上に軍の指揮下にあり、後に人権団体が文句を言ってきたりも誤魔化せるように矢表には立たない様に配慮されているのだ。ここで勝手に追撃を掛ける訳には行かない。

「敵は偽者のようだ」と『目撃者』が言っております。こちらで追撃を掛けますか?」

「……。そうしたいは山々ですが、生憎と先に戦線を押し上げておかねば苦勞するのは正面組ですからね。もう少し待って居てください」
軍が知らない情報を持っているとは言え、戦術には素人の俺達が気が付くくらいである。

藤林少尉も同様に思っていたようだが、影武者一行が奮戦して居る以上はそうもいかないようだ。

少しだけ残念そうな顔を浮かべて目線で『分解は使うな』と訴えて来るので、頷いてこちらでもできるだけ悔しそうな顔を浮かべておく。
「しかし、向こうはなんであんなに苦勞して居るんだ? 一科生があんなに居るつてのによ」

「おそらくキャスト・ジャミングを交代で掛けてるんだろうな。：高価な物だしそれができるとなると、ブランシュ日本支部のバックはかなり絞られてくる」

とはいえそんな事が判つてもあまり意味が無い。

ジリジリと時間を消費しているが、計画的に逃走して居るからか亜矢子達からも連絡が無い。このまま逃げられる可能性も出て来た。

「そうだ、ミキの精霊でおどかしてもらえば? 注意が分散すればやり易いかも」

「いや、それなら先行して追いかけてもらった方が確実だろう。悔しいがこつちに向かっている警察に任せることもできる」

エリカの言うことももつともなのだが、そももいかない事情がある。

SBの奇襲力はまだまだ一科生に隠しておきたいし、影武者を倒しても意味が無いのだ。

「僕は幹比古だつて言ってるだろう。：この場合は達也の方が正解だと思ふ偽者は何処まで行つても偽者だからね」

「ブー。どつちだつていいじゃない。ああやだやだ、可愛い幼馴染の提案を無視するなんて、そつちのケがあるんじゃない?」

「どつちのケだ。：まあ冗談は置いておくとして、逃走方向だけでも

頼む。潜伏している場所が判れば言うことは無いがな」

情報があれば警察よりも先に黒羽家の追撃部隊が補足できるだろう。

そのことは告げずに、敵をSBによる奇襲を使わずに倒す方法を考え始めた。

エリカが言う、注意力を割くこと自体は正解の筈だが…。

「折衷案ですね。出来るだけ遠距離で通じるエリア魔法を使って側面から牽制しましょう。もちろん事前にタイミングと範囲を説明しておく必要がありますが」

「それしかなさそうですね。司波くんはグラム・デモリッションを放つ場所を探しておいてください、ソレだけはバッテリーングすると困りますから」

藤林少尉と俺は結託し、SBで仕入れた情報を追撃隊に送る算段を決めた。

警察に悪気がある訳ではないが、少しでも汚職や脅しに屈する可能性を考えれば身内で固めてしまった方が早いだろう。

もつともエリカが手配して千葉道場の関係者だけを送ってくれているなら、そんな心配は必要ないのだろうが。

「エリカとレオはこつちから踏み込める場所を探してくれ。俺と深雪は交差射撃可能な場所を探す。タイミング的には俺が吹き払った後に前後から仕掛ける形に成るな」

「おっけ。こつちは純粹に抜刀隊で良いのね。ならレオ、あんたの上着で足場を作つてよ」

「足蹴にされるのは気に食わねえが、仕方ねえな」

俺は手早く作戦を組み立てると、幹比古がメモし始めた情報を眺めつつ、眼を使って正面組と足止めしてる連中の相対位置を確認。

そして適当な襲撃位置を決めるだけ決めておき、情報を素早く亜矢子達に送った。

その間に深雪は抱きつくような格好で自分の姿を使って俺の手元を隠してくれている。

(やはり細かい分担は気心が知れている方がやり易いな。妙に嬉しそ

うなのはきつと気のせいだろう)

そうこうするうちに簡単な通信が返ってくる。

『最追撃を掛けますわ。今度はあんな単純な光学魔法に引かかったりはしません』

どうやら亜矢子達は捕捉に成功しかけていたものの、洗脳魔法をアレンジした魔法で出し抜かれていたらしい。

(光学魔法と言うと光振動で簡単な催眠を掛ける『イビルアイ』当たりか。あれは効果こそ低いが速攻性があるからな…)

『イビルアイ』はいわゆるサブリミナルを利用・重篤にした魔法で、洗脳としての強度は低いが簡単な指令であれば信じ込ませることが出来る。

薬剤や他の拘束魔法を併用すれば、逆らえないのだと段階的に刷り込むことすら可能。

どちらかといえば入口に当たる初歩的な魔法であるが、洗脳のプロが使えば恐ろしいほどの強度に達すると知られていた。

亜矢子達も肉体を支配したから動けないと言われている間に、車か何かで逃走でもされたのだろう。

「準備はいいか？　これが最後に成るかもしれんが追撃に加わる可能性もある、気を引き締めて行くぞ」

「了解！」

「りよ、了解…。僕は精霊も向かわせておくよ」

こうして俺達は足止め部隊を蹴散らし、あっけない終り方でブランシュ・無頭竜との戦いを終えた。

●アフターフェスティバル

無事に司・一やロバート・孫を捕まえ、資料を除いて軍に引き渡したが…。

その辺りの取りモノや、この後に来るリンと森崎の別れ話などは当事者たちに任せておくことにしよう。

唯一つの誤算は、剣道部が洗脳された被害者だったという構図が明らかになったことだ。

「お疲れさん。頑張った割りには報われて無いんだって？」

「桐原先輩が囿に成って対立の構図を使うと言った時に、特にフオーロしなかったバチでも当たったんでしよう」

連中から情報を抜き出し、先んじて学校の被害を抑えたつもりだった。

しかし加害者であったはずの剣道部が、関係者の中で同情される立場に成ってしまった形になる。

剣道部は敵味方に利用された存在であり、敵が居なくなった以上は恨むには値しない。

後に残るのは味方でありながら徹底して利用しかして居なかった、俺ということになる。

「そういう事にしとけって言ったのはお前さんなんだろう？ 壬生の奴が足を向けて寝られないと言ってたぜ」

「寝相の悪さは先輩が何とかしてください。そうする形が一番判り易いというだけですよ、利用したのは本当ですしね」

別に美談にしたつもりはない。

二科生の中でもデータを揃えて能力開発の方向が判って来た剣道部を、つまらないことで潰すのが勿体なくなつて来ただけの話に過ぎない。

加えて司・甲も被害者だったのが大きく、精神的なケアを含めて責任を取って止めるといふのを止めているくらいだ。

せっかく司・一が能力に合わせて色んな才能を磨いて居たのである、これから一科生との予選になるのに捨てるのは馬鹿のやることだ。

「そういう事にしておくさ。それで…俺に何が出来る？ お前さんに一杯借りを作っちゃまったみたいだが」

「借りにした覚えはありませんが…。そうですね、もうそう思っただけなら暫く反発しているフリをして居てください」

桐原先輩は俺の提案に怪訝そうな顔をしてきた。

当然と言えば当然であるが、こちらにも事情があるのだ。

「一科生と二科生のスポーツ対決という、健全な対立が『選手同士』では始まります。しかし俺の腕や見解がそこまで役に立つか疑う者も

出て来るでしょう」

「ミスター・シルバーにそんな事をいう奴は出ねんじやねーか？ いや、その役を俺がやっても良いのか」

俺は頷いて見せたが、ある種の戦犯扱いである。

実利的に二科生は敬遠してこないでも、一科生はあからさまに攻撃して来る可能性もありえた。

ならば今のうちから布石を言っておく方が無難だろう。

「判った。『そんなにでかい口を効くなら、実力を見せろ』とでも言うことにするよ」

「そんな感じでお願ひします。では今回の件で得られたデータを精査しますので」

こうして俺は本当の意味でお祭り騒ぎを終えることになった。

「お疲れ様です。今夜は何にしますか？ 何処かに食べに行っても良いと思いますが」

「せっかく二人きりだしな、夕食は深雪の自信作を頂くことにするよ。友達と一緒に探したケーキショップでもあるならそこで幾つか買って帰ろう」

この所は常に誰かの別宅やホテルに拠点を移す生活を続けており、深雪は嬉しそうに献立の事を話し始めた。

俺としては何でも良いのだが、せっかく御機嫌なのに水を挿す必要も無い。頷きながら久しぶりの我が家に向かうことにした。

九校戦編

九校戦、校内予選

●受難の始まりと、空港で見た妖精

「一条君、なんだか元気ないね」

「どうも恋わずらいしてるみたいよ」

一高に注目する三高の問題。

そして三高を揺るがす恋の事件の始まりは、女の子達の何気ない会話からだった。

「嘘…でしょ？ あ的一条くんが？ どういうことなの吉祥寺くん！」

「その話は僕も後から聞いたから良く知らないんだ。何せ将輝はずつとあの調子だし、東京に行った時のことだと思っただけ…」

問い詰められた吉祥寺・真紅郎は事情説明に追われることになった。

渦中の人である一条・将輝と親友である彼は、良く一緒に居るが常に…という訳でもない。

現に彼の東京行きには同行して居ないし、その辺りの話が耳に入つて来ないという状況を考えると、考えられることは少ない。

「東京で？」

「僕も一緒に居た訳じゃないし、他の生徒から詳しいことを聞いたことが無い。つまりは用事で東京へ行った時くらいだよ」

「ということはその時に一緒に居たメンバーに聞けばいいわけね！ あたし探して来る！」

止せ。とは誰も言わなかった。

親友である真紅郎も気に成っていたし、九校戦に向けての選考が始まるこの時期に将輝がボケっとしているのは問題だからだ。

もっとも恋だと言うのが本当だとして、応援しようとする者と反対する者では事情が違うであろうが…。

『証言者Aの言葉』

『あー、あの時の三人娘の誰かだと思うよ。印象の違う美人が三人いたし、他じゃビシつとしてたから』

『どんな娘かだつて？ どの子もいずれ劣らぬ美人だったけど…。雰囲気の間が無い子と、妖精みたいな凄い可愛い子と、可愛いのに服を嫌がってる子だったと思う』

「妖精の様な美人？ 一高の生徒会長は確かに妖精みたいな美人だけど、家の用事で何度も会ってる筈…」

『いや違う違う、“エルフィンスナイパー”じゃないよ。もつと凄かったと言うか、一年じゃないかな』

『証言者Bの言葉』

『最初はそこまで気にしてなかったんだ、こつちも戻る途中だったしな。…そこで妙な奴を見付けたんだよ』

『あそこに居る奴、妙じゃないか？ ストーカーにしては変だし…。つてとここで、誰かが護衛じゃないかって言つて、そういえば“森崎”に違いないって判つたんだよ』

『そうそう、その森崎。だから金持ちとか名家の子なんだろうなーとは思つてたよ』

『ということは隙のない子も護衛だったのか、あるいは狙われてるかもしれないからかな』

『警戒してる感じは無かつたし、この子が金持ちなんじゃね？ でもさ、なんだかエキゾチックで目を離せないのに、不思議と気に成らないんだ』

『証言者Cの言葉』

『そうそう、言われてみればそんな感じかな？ 妖精みたいな子はそうだな…身についた雰囲気張りが詰めてて、でもずつと自然な感じで…。マサキやお前さんに近いと言うか…』

『うん、そうだな。こいつやる！ つて一目で判る感じ。多分だけど魔法力も凄いなと思うよ。“エルフィンスナイパー”を見たこと無かつたら、俺でも誤解するね』

『服を嫌がってた子？ 確か、なんで自分がとか、他に適役は居なかつたのかと言つていたよ』

「ふうん。同じ様な外見で雰囲気が違う三人…。じゃもう一つ質問、その子の声は高かった？」

『どっちかといえれば低かったな。怒って不機嫌だったからかもしれないけど…』

『一条・将輝の証言』

『なんだよジョージまで。：妖精みたいなの？ そうだな、見ただけでも魔法力が高いと判るから、そう誤解してもおかしくないと思う。だから違うって…』

『まあ、確かに妖精かと思うくらいに美人だったのは確かだよ。：なんで三人も居たのに、その子だけに注目するんだ？』

『え？ “先生”と比べてどっちが？ この場合はあの先生だよな？。：甲乙付け難いな。もちろん実戦経験では先生が上だろうけど』

「なるほど、これで全て謎は解けた。相手が誰なのかも判ったよ」

「え、本当？ スゴイ」

「流石は吉祥寺くんね。どうして一条君の好きな子の正体まで判ったの？」

「オレが好きな子かはともかくとして、どういう理屈で解明したかは興味があるな。本当だって…』

真紅郎がデータをまとめていた端末をパタンとしまった時、誰もが驚いた。

彼は研究のついでに聞いており、本気で聞いているとも思えない質問だけをして居たからだ。

『吉祥寺・真紅郎の推論』

『第一に、“森崎”。彼の家業は有名だし、試技は僕だけでなく見たところがある者は多いから本当に護衛だったと思う』

『確証はないけど、雰囲気の違い子が何故かお揃いの服装だったんだろ？ 嫌がる子をワザワザってことは、第三者に特定させない為だと思っよ』

（一人目の除外）

『まず美人なんだけど何故か目が行かない子。これは気配を消す魔法

を使つてたんだと思う…。この子に注目してるなら調べようとムキになつてゐるはずさ』

(三人目の除外)

『次に嫌がつてゐる子。多分、この人は人数合わせで連れて来られた無関係な友人か、…子じゃなくて人つて呼んだ理由なんだけど、おそらくは無理やり女装させられたんだ』

『文化祭とかだと女顔で女装させられる人は結構いるけど、本職の女形だと凄い美人に見えるらしいね。まあ無理やりだからその趣味は無いとして、将輝の眼を惹くほどとは思えない』

(二人目の特定)

『あの“先生”と比較できるほどの美人で凄い魔法力の持ち主を、別件で知つてたつてのも大きいかな』

『もともとはその子じゃなくて、兄の方が僕らの業界じゃあ有名な人だけだね。九校戦でライバルに成るかもしれない男で、その妹だから覚えがあつた』

『ジョージ、お前がライバルだと目する男。それも今年からつてことは、同じ一年なのか？』

『うん。あの“トールラス・アンド・シルバー”の、ミスター・シルバーだよ。今年、第一高校に入学してるのと、妹さんは主席だったから少し話題に成つたんだ』

二人の会話を聞いていた少女たちが、次々に騒ぎ出す。

恋のライバルが出現とあつて大騒ぎする者と、競技者として静かに注目する者に判れながら…。

『うええミスター・シルバーが敵なのかあ』

『シルバー自体は別に良いんじゃない？どこまで行つてもエンジニアだし、二科生並なんですよ？』

『え？ミスター・シルバーつてグラム・デモリッションが使えるつて書いてあるよ？二科生なのにできるの？』

『サイオンの量だ問題だからできるんじゃない？それにしてもデバイスの天才と主席の子が兄妹だなんて…』

FLTの紹介ページを見ると、確かにミスター・シルバーは同年代

の少年の様だ。

遠目に取りられた写真には、彼個人と一緒にスタッフや：妹である美少女の写真もついでに載っていた。

「こいつがシルバーか。：油断ならないかもな。この資料もらつていいか？」

『将輝が気にするなんて珍しいね。それともその写真の：。ゴホン。軽く調べておくよ。あと、兄妹だから不思議でないことと、証明できることが幾つかあるけどね』

「どういうこと？ 聞いたことも無い家だけど」

「百家の中に司波つて家なんてないよね」

これまで話を挟まずに居た何人かが声をかけて来た。

別に将輝の恋に興味は無いが、名家に生まれた才能を伸ばす苦労を味わっている者や、それに劣らぬように必死の努力を続けている者も居るのだ。

『確かにそうなんだけど、百家の中に古式の名家は入つて無いよね？ それに口に出して無いだけで、分家やそれに準ずる家つて可能性はあるよ』

「その線は確かにあるかもね。うちの兄妹をこのメンバーにくつつけたらそのくらいの家は量産できるし」

「あんとと義理の姉妹とか止めてよね。政略結婚つても今時つて感じだし」

「その点、一条君と吉祥寺君はどうなの？ イ・チジョーとキ・チジョーで名前も似てるし、ただの他人である可能性もあるけど」

最後の質問には、あえて口を出さずにスルーしておいた。

真紅郎としてもデリケートな話題なのだ。

ロリコン疑惑は避けたいし、かといってその気は全然ないと言うのも憚られる。

『ともあれ、カリキュラムに評価されない能力つてのはあるもんだよ。デバイスの開発能力なんて座学はともかく実技の点数には関係ないし、術式解体もそうだね』

「まあ連射になるとオレでも無理だな。正確には他の魔法に力を割け

なくなるって意味も含まれるが」

「九校戦は厳しくなりそうだね。今年こそ王座を奪って金沢に持って帰らないと」

こうして一条・将輝の恋の行方に関する件はお開き、一高の動向に注目しておこうということを決着が付いた。

この事は半分くらい偶然であるが、カーディナル・ジョージは既に着目して居た。

同様に政治力に優れた二校や、技術の四校なども注目しているというのである。

いずれにせよ第一高校油断ならずと、周囲の意見は一致して居たのであった。

●レギュレーションは波乱の開幕

その頃、第一高校の会議室では紛糾して居た。

生徒会と部活連の間で、選考会に関する意見が食い違ったからだ。

「どういうことかしら？ 納得してくれるって話だったと思うのですけど」

「理論に納得するということと、無条件に方式を受け入れるという事は違うと言うことだ」

七草会長からすれば、既に根回しが済んで居ることへの反発は予想外だろう。

俺らはまだ多少であるが、散々話し合った当事者からすればさらなる驚きと打撃の両方を味わっているはずだ。

「二科生も特定の協議次第ではというのは判らんでもない。だが現実に出場枠を奪われるのは、内定しており調整して居る者たちだ。感情面はともかく筋としては違うだろう」

「それはそうだけど。まだ内定の段階で、決める前に今回の選考の話題は出していた筈よ」

十文字会頭の重厚さと安定感、味方になると頼もしかったが敵と成れば恐ろしい相手だ。

内容も正論から攻めており、会長の方も根回しゆえに口約束が主なので強くは出難い面がある。

「別に選考会を開くことにも、その結果で梓を割くことにも文句を言っている訳ではない。だが七草、お前や渡辺達が主力に成って牽引したのでは二科生の実力とは関係ないだろう」

「二科生が一科生よりも活躍できる競技に限って良いから、メンバーに加えようと言う話だったのよ？　今更方式を変えって言われても……」

旗色は明らかに七草会長の方が悪い。

十文字会頭は最初から論点を整理して、前例を利用して『二科生の実力を測る』事だけに焦点を絞っている。

対して会長の方は、突如として混制チーム案の為の選考を否定され、どうやって押し通すか悩み始めた所だからだ。

仕方無いので冷静さを保つ市原先輩と共に、この場を切り抜け繋がる話題転換を図ることにする。

「十文字会頭のおっしゃることも当然なのですが、取り決めていた方を急に変更したいと言われても困惑します。せめて双方の納得行く形での修正が必要かと思われませんが」

「構わない。文句を付けたい訳ではないからな」

まず市原先輩が記録を持ち出し、部活連の決定でも二科生をメンバーに加えるかどうかの選考会に納得していることをデータとして示す。

十文字会頭としてもそこを問題にしている訳ではないので素直に頷きはするが、即座に切り返してきた。

「だが具体的にはどうする？」

（結局、俺が説明するのか。…まあ泥を被るなら最後までそうするべきだな）

周囲の視線が俺の元に突き刺さる。

一科生と二科生の対立を強引に収める結果を作ったのは俺だし、会長としてもこちらを頼りたい気持ちもあるのだろう。

更にはブランシュの件から部活連をパージして、生徒会主体でやってしまったのはこちらにも非がある。

双方の問題を納められるならば、こちらでやっておくべきだろう。

「僭越ながら…。まず二科生のデータを測ることに意味はありますが、選考会までに急遽、員数を揃えるのは難しいと思います」

「それは仕方無いな。一科生に匹敵する二科生は居ない訳ではないだろうが、探すのに手間取るのは理解出来る」

「ここで『おや?』と思つたのは、十文字会頭が特化型の二科生自体の存在を否定して居ないことだ。

「とはいえ時間が無限にある訳では無い。何か方策はあるのか?」

「どの競技で確認するかや、あるいは臨時に男女を考慮せずで構いませんか? 競技をこちらで選び、それを一時的な混合ダブルスで良ければなんとかなるか?」

「ああ、そういうことか。…確かにそれならば何とかかなりそうだな」

「ここで沈黙して居た渡辺委員長が口を出してきた。

「おそらく念頭にあるのはエリカのことだろう。」

「実戦形式での試合では距離を空けない限りは連敗続きとのこと、極論、エリカともう一人…幹比古辺りを組ませればなんとでもなる競技はあるのだ。」

「もつとも、そんな例外中の例外を基準にする気は無い。」

「エリカの反応速度はは畏を見てから避けるか、それともワザと喰らった方が良いのかを判断できる。」

「加えて幹比古は精神的な問題と古式ゆえのスピードで割り食っているだけで、ほぼ一科生で通用する実力を持っているからだ。」

「つまり此処で重要なのは男女混合ではなく、もう片方。」

「…クラウド・ボールでは男女混合の競技もあるからな。問題無いだろう。他の者もその条件で良いな?」

「問題ありません」

「部活連は十文字会頭が納得した段階で素直に了承したようだ。」

「そこにある言葉の陥穽に『彼ら』は気が付かなかつたようだが…。(会頭は気が付いたかな? まあ気が付いて頷いたのなら『こちら』側とみなしてよいだろう)」

「実のところ、この条件を通した段階で問題は解決したものだとは俺は考えている。」

気にして居たのは『とにかく駄目!』という感情論であり、何を言おうと二科生のデータなど見ないと言う方が問題だったのだ。

協議を無事に終えて安堵しつつ、パニックってる会長をどう宥めるかを考え始めた。

●メンバーではなく、競技の選考

「もー! 十文字君だって納得してたし、部活連にも利益があるって話なのに!」

「…案外、十文字会頭も納得ずくで誘導して居たのかもしれないよ?」

思慮を見抜けた訳ではないが、あえて問題無いと言いきることにした。

どうせ心中を聞くのは無理か、全て終ったの話だ。適当に理屈を付けておけばいいだろう。

「どういうこと? 徹底して認められないって言っていた気がするんだけど」

「認めないのは、会長や委員長が主力に成って選考会を終わらせることですよ。極論ですが、十中六点を御二人で獲れるでしょう?」

「身も蓋も無い戦術でいくならそうなるな。そこまでのことをするつもりは無かったが…」

十文字会頭というか、部活連が問題にしていたのはそこだろう。

二科生の実力関係なしにねじ込まれて、足手まといに枠を食われては問題だということだ。

彼らも競技者であり、実力で枠が奪われること自体は否定して居ない筈だ。

「それに相手の論に乗るメリットはありません。これまでは選考で生徒会主催側が部活連主催側に勝ち、なおかつ九校戦でも目立つ必要がありました」

「確かに二科生のデータを見るだけの競技に絞れば、我が校内だけなら通用する成果ですね」

「でも、それだと全国での九校戦で活躍できるか不明なのは、同じだと思いますけど…」

市原先輩が納得したと言う顔で頷き、中条先輩が不安げに顔を上げた。

内の評価と、外の評価。

この両方を手にしなければならぬのだ。

「外に関しては委員長が考えていたであろう、勝てるメンバーで強引に勝ちに行きます」

「ということは校内戦でエリカを使わないのか？ あえてエースを下げる意味は無いと思うが」

俺は頷きながら、端末を操作して九校戦のデータをピックアップしていった。

チョイスするのは競技。

ここ数年のモノと、全体のモノ。これを今は提示せず、時間差を付けて説明開始した。

「極論を言えば、エリカや剣道部の司先輩が組めばクラウド・ボール辺りなら楽勝でしょう。ですがそれでは例外で済んでしまいます」

「お兄さまがアイス・ピラーズ・ブレイクに出場しても同じですよ。グラム・デモリッションが使えるから当然と思われるでも仕方ないかと」

俺の意図を組んで深雪が具体的な例を上げる。

自然冷却した氷は無理だが、術式解体を使えば魔法で作った氷柱などは一瞬で砕ける。

だがそれでは、グラム・デモリッションを使える二科生は例外だと言われておしまいなのだ。

「簡単に言うとしールド・ダウンやロアー・アンド・ガンナーで勝負を決めます。場合によってはステイブルチェース・クロスカントリも行けるかもしれません」

「それって今年の競技じゃないじゃない。しかもここ数年選ばれても無い筈よ」

「ですが一理あります。特化型の二科生の実力を示す事は可能ですし、昨今の流れにそぐわないので選ばれていないだけですから」

俺が上げた競技は、軍事色が強いとか準備が手間などで外れる事が

多い競技だ。

更に競技に習熟する、対策を立てて己を磨く観点などから以前と同じ競技が続いている。

外れている競技は特定の状況に偏っているだけに『学生の競技』として選ばれない理屈も正しいモノだ。

だが、特化した二科生が活躍できると示すには、丁度良い競技と言える。

例えばレオはシールド・ダウンに向いているし、ロアー・アンド・ガンナーはハズレ弾に関する記述が無いので連射できる魔法師なら誰でも良いとさえ言える。

「そういうことです。別に今の競技だけから選ぶ必要はありませんし、来年以降と誤解してもらえば、まさしく『補欠』ということで納得してくれるでしょう」

「二科生だけに補欠か……。では九校戦に選ばれるにはどうする気だ？」

「そしてどう活躍する？」

服部副会長が厳しい突っ込みを入れて来る。

二科生が中心になって、来年以降に入ってくる競技に備える。

そのことに校内を納得させるデータは残せても、対外的に納得できるデータは揃えられないからだ。

「ブランシユ対策の時に、何人かの二科生が行動で実力を示しましたからね。一科生の中にも見ている者は居ますし……。九校戦の方はそれこそエリカや俺が出ますよ」

「優勝でなくベスト4の量産ならば行けそうですね。この辺りが落とし所かと」

「その線で攻めるしかないか……。まったく面倒なことになっちゃったわ」

「こう言つてはなんだが、桐原先輩だけではなく森崎たちにも口裏を合わせている。

実力が無ければ認めないが、実力があるならその範疇で認めるはずだ。

というよりも、幹比古のSBの使い勝手を考えれば、モノリス・コー

ドのような策敵・遭遇戦があり得る状況でメンバーから外す手は無い。

校内予選で使って見せれば、向こうの方で勝手に選考してくれるだろう。

競技に関する協議と交渉は進み、モノリス・コードやクラウド・ボードでも選考する：という点以外では概ね満足のいく結果に終わった。

こちらとしては、どうしようもないバトル・ボードやミラージ・バトルを持ち出されないだけで十分と言えた。

こうして波乱含みの九校戦の校内予選は進み、俺達はメンバーの選定に入ることになる。

エースの条件

●挑戦状は、ド真ん中への剛速球！

「やられた。まさかこの手で来るとは」

第一高に置ける九校戦予選のプログラム。

それを古風な紙の手紙で受け取った時、俺はかつてない驚愕とプレッシャーを味わった。

何の変哲もない紙片が、余計な感情が無いはずの俺にこれほどまでの脅威を伝えて来るとは思いもしなかった。

「どうしたのですかお兄様？」

「部活連から予選における競技の開催順番を伝えて来たのだけだね。最初に来る競技が問題なんだ」

俺が減多に見せない狼狽を現したことに、深雪は心配してくれる。

朝の心地よい光と風、そして深雪の笑顔が背中に感じた汗の不快感を和らげてくれた。

プログラムにあった最初の競技は、まず…。

『アイス・ピラーズ・ブレイク』

幾つか並んだ後で、最後に次の競技が来る。

『モノリス・コード』

ただこれだけの文字列が、俺に十文字会頭の計画と精神性を伝えて来る。

まぎれも無く、会頭は俺に真っ向からの勝負を挑んで来ているのだ。

待遇も何もかも用意する。だから逃げずに戦え、引き受けた以上は全力で成果を出せ。そう言っているとしか思えない。

「あの？ 第一の競技にアイス・ピラーズ・ブレイクというのは幸先が良いのではありませんか？」

流石にこれだけでは意味が判らないらしく、深雪はおずおずと尋ねて来る。

他の情報を考慮しなければ、確かにそうだろう。

だが他の学校での有望生徒の待遇や、一高内における一科生の反応

を考えれば一目瞭然だ。

「それとも、四葉内部での命令のように勝つわけはいかない事情が起きたのでしょうか？」

「いや。俺にとつて有利な競技には違いないし、本気で行く理由はあつても手を抜く理由がないから全力で取り組むしかないのだけだね」

自然冷却をせずに魔法で仕上げる以上は、アイス・ピラーズ・ブレイクは俺にとつて絶対的な優位性を持った競技だ。

もしこれが、後半に来ているのなら何の問題も無く…場合によっては嬉々として挑んだだろう。

しかしイの一番であり、影響度を考えれば頭を痛めるほかは無い。

「ではなぜ？」

「グラム・デモリッションを使う二科生は、二科生の例外。だから一科生に失意はない、むしろ対抗心で燃え上がるはずだ」

あ…。と言う声が深雪から漏れる。

戦意のコントロールについて言及した段階で、ようやく気が付いた様だ。

『油断して居る一科生』にひと泡吹かせるのと、慢心を捨てて挑んで来る『専門の競技者』に勝つのでは難易度が大きく異なる。

「この際、ワザと負けて…いえ、ありませんね」

「そうだ。数少ない確実に勝てる競技であり、絶対的な優位性を知らしめる事が出来る。ここでダブルスコアを見せつけければ、俺の発言力は三高における“プリンス”や“カーディナル・ジョージ”に匹敵するレベルに成るかもしれない」

だから絶対に手を抜くわけにはいかない。

不服を持ったままでも選手たちがサボタージュすることはないにしろ、デバイス調整の他に勝てる選手としても登録されて居れば話を聞かない筈は無い。

九校戦本戦で徐々に示すのではなく、ここで実力を示して置くだけで作戦を聞いてもらえるならば、手を抜く理由があるはずなのだ。

十文字会頭にしてみれば、何割かを占める戦力外の二科生が戦力に

なるなら損のある話題ではない。

七草会長もそう言っていたが、策も無く小細工も無く直球の勝負だけで勝負に載せようとしている。

「こんな序盤で十文字会頭が選手として登録される事など無いだろう。ならば最終種目に会頭は必ずや待ち受けている」

「お兄様の實力を見せろ。勝つて一科生の士気も二科生の士気も、共に盛り上げて見せろ。そう要求されているのですね」

俺は黙って頷くほかは無い。

深雪の推測にだけではなく、十文字会頭の無言の挑戦にもだ。

(俺に勝てるのだろうか？ あの巖のような漢に…)

脳裏に浮かんだのは、ブランシユとの戦いで見た砂鉄の壁だ。

磁性を帯びて相互の位置を保ったあの防壁は、術式解体で崩したとしても、暫くは同じ場所に留まり続ける。

つまり邪魔する壁は消えて無くなる訳ではない。仮に『分解』を使ったとしても一部では意味が無く、あの量の砂鉄を消して注目を浴びない訳が無い。

加えてあの魔法は、十文字家が誇る『フアランクス』ですらないのだ。

厄介な防壁を乗り越えた所で、さらなる脅威が待つて居るのは間違いが無い。

「ですがお兄様…」

「ん？」

深雪が俺の袖を掴む。

だがその手は震えてなどおらず、確固たる意思と共に袖から俺の掌へと滑って来た。

「ですがお兄様。深雪はこの試合に勝つて、お兄様が胸を張って迎え入れられることを望んでおります」

「深雪…」

澄んだ瞳が俺に突き刺さる。

掌を通して伝わってくる心と肉体の熱さは、深雪が本気で行っていののだといやでも理解させられた。

「四葉の中では良い扱いどころか備品も同然。ですがこの試合で、九校戦の本戦でも勝てば自らの手で切り拓いた確固たる地位として胸を張ることが出来ます」

深雪はソレが悔しいのです。そして新たな姿のお兄様がこの上なく晴れがましいのです。

言葉には出てはいないが、その言葉はハッキリと伝わってきた。

深雪がいかに俺の事を思ってくれているか、俺が知らない筈は無いのだから。

「それにお兄様は仰ったではありませんか。高校生活を十分に愉しめば良いと。その高校生活の中には、お兄様との時間も含まれるのですよ……」

「深雪……」

俺と共に深雪の心があるというのであれば、もはや逡巡して居る暇などない。

そのありがたさに涙が出る思いがするが、啼くよりも先に高速で回転を始めていた。

「…判った。そこまで深雪が言ってくれるのであれば、俺も決心をしよう」

「お兄様！」

この時まで、俺は依頼を果たせる状況を作りあげて終わりにするつもりだった。

二科生の中にも一科生に優位に立てる者がおり、全体として一科生の優位は揺らがなくとも、二科生の才能を埋もれさせるほどではない。

そんな『流れ』に持つて行くだけなら容易いし、例え一度も勝てずとも、脅威さえ認識させれば条件はクリアできると思っていた。

一科生を育てるだけの教師しか居ないのは同じだが、二科生出身のコーチを揃えることで埋め合わせ、才能を伸ばす事は可能なのだろうか。

その流れを利用して俺がやりたいこともやり易くなるし、俺を取り巻く環境が激変すればもしかしたら気分が良くなるかもと言う程度

だった。

そこまでの段取りを付ければ良いと思っていた認識は、今日ここまでにしよう。

「登校し次第、生徒会や初期選考しているメンバーを集めてミーティングを開く。まずはエリカやレオたちだな」

「はいー」

既に歩きだしているので顔色は窺えないが、その嬉しそうな声を聞けば疑う余地は無い。

俺の為に輝いている笑顔を、曇らせないようにするとしよう。

●テニスコートの手紙

フランス革命の時代、彼らはテニスコートで誓い合ったらしい。

だからという訳ではないが、すっかり顔なじみになった二科生組を学校と無縁のテニスの競技場へ集めた。

もともと理由は単純にアイス・ピラーズ・ブレイクや、クラウド・ボールの説明がし易いからなのだが。

「こんな時間に呼び出すなんて、何か面白い事でもあったわけ？」

「部活連から手紙でプログラムが届いた。幾つか懸念事項もあるがそれ以外は想定通りだ」

「懸念事項？」

会長からのオフアートを果たすだけでなく、絶対的な条件を勝ち取る為にはすべきことがある。

それは全体構造を判り易く理解し、勝利の為の明確なビジョンが見えることだ。

それを共有することで、士気は空元気から実感へと変わっていく。ゆえに俺は一部の情報開示だけに留めつつも、端的に状況と意味する内容を突きつけることにした。

「十文字会頭は勝負に乗ってきた。むしろノリノリで真っ向から仕掛けて来る気だ」

「これか…？ 随分と聞いた事無い競技で一杯だなあ」

「あんたは殆ど知らないでしょうが。後で教えたいから黙ってなさいよ」

プログラムのコピーを眺めていたレオから奪い取る様に、エリカは目を左右に走らせて行く。

此処に居る者はどこか居場所を探している様な…、そんな雰囲気不思議と共通している。

だが流れ付く場所を探す様なレオと、激しく吹き荒れる様なエリカでは違った方向に見えた。

「ふうん。随分と戦闘向きのばかりじゃない。幾つかは達也君が提案したんでしようけど」

「…まあな。外しても良いと思っていたモノを含めて、ここまで意見を取り込んで来るとは思わなかった。

『アイス・ピラーズ・ブレイク』

『ロアー・アンド・ガンナー』

『クラウド・ボール』

『ステイブル・チェース・クロスカントリー』

『シールド・ダウン』

『モノリス・コード』

「この中でクラウド・ボールだけ浮いてるわね。スピード・シューティング外してるし、これも消して良かったのに」

「おそらく、二科生が最も能力を活かせる競技だからだろうな」

「最も活かせる？」

俺はテニスコートの中央添いに立って、右と左の地面に『一』『二』と描く。

言うまでも無く一科生と二科生のサイドであるが、その下に幾つか小石を置いて行った。

「クラウド・ボールでは領域への干渉が禁止されている。あくまで自陣内にあるボールの周囲と自身の体だけだ」

「まあそうよね。自分の陣地だからって風を吹かせ続けたら勝負にならないし」

「だから私が出場したとしても、アツサリ負けてしまう可能性が大きいでしょうね」

広域展開を得意とする深雪は、こういう制限の中で力行使する競

技に向いては居ない。

だから取って不可能なわけではないが、自衛の訓練では無い以上は無理にやる必要も無いだろう。

「使っても良いとされる魔法は多くても百程度、その中でも有効な魔法は二十を越えないだろうね」

「そっか許可が下りたとしても、硬化魔法なんてやっても意味が無いか、やった瞬間に負けだもんな」

古式魔法の幅広いバリエーションを封じらえる格好になるからか、幹比古はあまりこの競技にノリ気では無いようだ。

話を聞いたレオも、その時点で考えを切り捨てている。

まあ幹比古としても魔法の展開速度での難点を克服できてない以上はその気にならないだろうし、別の競技で活躍してもらおう予定なので、その気になっても困るのだが。

「そういうことだ。主に自己加速や跳躍力・反発力と言ったテニスに近い肉体的な魔法と、ボールに干渉する射撃的な魔法に限られる」

肉体強化に関しての制限は無いが当然相手のコートでは役に立たないし、ボールに干渉する方も自分のコートの中だけだ。

この僅かな時間、それも複数のボールをコントロールしなければならぬ。

一科生だからといって必ずしも有利ではないし、特化した能力を活かせるならば二科生でも活躍できるのは間違いないだろう。

「七草会長は押し返す魔法だけで勝つことも多いそうですよ。そういう意味で向いている能力があるなら二科生に向いて居るでしょうね」
「その向いている能力を持って居て、体力のある人探すのが難しいと…思いますけどね。私だとちよっと…」

「あー。美月は立派な西瓜を抱えてるものね」

美月のコンプレックスを晴らす為、エリカはセクハラ発言で場を混ぜっ返した。

レオは呆れ幹比古は顔を赤らめと、少し場が和んだので休憩代わりに説明を止めておく。

だが、『向いている能力』と体力の共有が難しいのは事実だ。

そんな人間はそう多くないから、偏見だから二科生にやらせなかったというよりは、体力を魔法によつて補える一科生が選ばれた理由でもある。

「選手の追加はこれから探すとして……。エリカ、クラウド・ボールの攻略を頼みたい」

「えー!? これだけ戦闘向きの競技が多いのに……?」

「どうやら目当ての競技が既にあつたようだ。」

幾つか競技があり、やってみたい候補があるのに、全て無視して一番戦闘向き出ないのを押しつけられるとは思つてもみなかつたのだろう。

「クラウド・ボールは試合数の多い競技だからな。全体の戦績を上げるためにもこれを落とすたくない。埋め合わせに他の枠を優先的に回すから頼む」

「本当に、ホントーだよ? これで『他は埋まりましたー!』なんて言つたらただじゃおかないんだから」

掌を合わせて拝んだ格好を見せると、不承不承ながら頷いてくれた。

隠れた不満は古い追いかかすとしても、とりあえずは一難去つた形だ。

「それで、あたしは何をすればいいわけ?」

「まずはテニスの範囲で見せておいてくれ。一番先に持つて来るから他の選手が見本に出来る様なのを頼む。後半は……好きにしていぞ」

「ここでのテニスとは自己加速に魔法を絞つて、他の選手でも真似出来るような用法だ。」

「一つの魔法の使い方に習熟して球をスピードだけで処理し、相手コートに押し返して行くだけ。」

「当然ながら相手にも対処し易い戦法だが、クラウド・ボールは全ての球を返す必要の無い競技だ。」

「相手が処理しきれなくなるまで、速球を返すだけでいい。」

「後半は好きにして良いって……。達也君、相方に根性が悪いわね」

「なんとでも言ってくれ。向こうのブレーンがこっちの用法に気付く

まで専念出来ればいいし、他の方法もできると気が付くのは最後の星勘定の時で十分だ」

エリカは自己加速に習熟ではなく、極めて居る。

ただ単に移動するだけでなく、ちよつとした歩幅で調整したり、撃ち返す方向も微調整可能だろう。

誰が一科生側のブレーンに成るのか知らないが、テニス式の用法しかやってこないと思ひこんだ時点で、こちらの思うつぽである。

「まあ飛びまわる無数のボールを追い掛けるわけだし、集団戦の訓練だと思つておくわ。相手が居る分だけ機械よりマシでしょう」

「そう言つてくれると助かる。これで二つの競技では白星が稼げそうだ」

「二つですか？」

「お兄様はアイス・ピラース・ブレイクに出場されるつもりなのよ美月」

「あー。グラム・デモリッションがあるもんな」

プログラムのコピーに、軽く二本の線を入れて周囲に見える様にしておく。

これで残るは四つの競技であり、残る内から一つか二つは白星を多めに奪つておきたい所だ。

「それで…。こんなことを僕の方から言うのは恥ずかしいんだけど…」

「専用の刻印符だな？ 幹比古にはモノリス・コードやステイブル・チェースに出てもらうつもりだからな。ぶつつけ本番になるがなんとか間に合わせた」

「前に五十里先輩に頼んでたやつ？」

幹比古の使う古式魔法はその場で組み立てる上に、幾つかのフェイク情報を経由して組み立てているために時間が余分に掛る。

この不要な情報を取り除いた上で、刻印魔法を使うことで極めて特化型CADに近い呪符を作ることが出来た。

もちろんスピードでは特化型CADには及ぶべくは無いが、幅広い応用が出来る古式魔法を選んだ一部とはいえCADに匹敵できるの

だから天地の差が生じる。

「まだ完成したばかりだし、ここからブラッシュアップしなければならんことは多いが……。予選で出た不具合を修正するくらいで構うまい」

「勿論だよ！　これがあればブランシユとの戦いでも何とかなっただかもしれないのになあ」

「そうかな。そう都合良く……。いや、いつか。頑張っただね幹比古君」
嬉しさと悔しさが混ぜ合わさった様な幹比古の顔を、茶化そうとしたエリカが微笑みながら見守っていた。

そういえば二人は幼馴染だそうだが、スランプで苦勞して居た次期を良く知っているのだろう。

「幹比古はそいつでSBだか精霊だかの補助をするとして、俺は何をすればいいんだ？」

「レオは一番忙しいぞ。幹比古のに加えてシールド・ダウンの候補でもあるからな。抗議は聞かんから他の選手が増えるのを期待しておいてくれ」

「楽しそうな競技ばかりでいいじゃない。あたしなんて替わってあげたいくらいよ」

レオの役目は成績じゃない。

あの不壊魔法を含めて、硬化魔法の使い分けによる無敵ぶりを見せつけることだ。

その姿は印象深いモノであるし、一つの魔法を完全に習熟すると言うことがどれだけ意味のある事か一科生にも二科生にも見せつけることが可能だろう。

十文字会頭が見せつけるであろう、一科生の強さ。

その一部である防御力での剛健さをこちらもやることができる。

本人の性格も陽性であり、俺や幹比古が言っても無駄な事を、レオが言うだけで雰囲気を変えることが出来るかもしれない。

そして、高度で理解出来ないフランクスではなく、硬化魔法という比較的扱い易い魔法で見せるのは地味ながら意味が大きいはずだ。

こうして俺は一つ一つの競技に能力を知っている仲間を当てること、判り易い判例をまず作り上げた。

そして勝ちパターンの一つを共有し、他の方法を模索する事で二科生側生徒全員に周知する方程式を作りあげていく。

その方程式をある程度完成させたところで、俺は七草会長たちに持って行くことにした。

時間の問題もあて全てではないが、生徒会側はまだ『善戦ができれば良い』と考えているので十分だろう。

本気で勝負を挑むのは、俺と十文字会頭だけが知って居れば十分だからだ。

「概ね了解しました。これらのパターンが出来る人や、まったく別パターンを提案してる人を組み入れていけば良いのですね」

「はい。慣れている人の方が頼りになりますし、全く別のパターンを提案できる人ならそれはそれで大歓迎です」

流星に市原先輩とは話が早い。

俺の言った事に頷きながらも、幾らか提案を組み入れて話の流れを作ってくれた。

「現段階で可能な範囲に置いて、概ね問題無い『光景』が展開出来ると思われれます。いかがでしょうか?」

「そうね。ローアー・アンド・ガンナーの対策が出来てないのが残念だけど…。今の段階じゃこれ以上を望むのは難しいかな」

そう、光景だ。

現段階で作りに上げたのは、奮戦を期待できるという作戦案に過ぎない。

ゲームと違って、競技には相手が居るのだ。

更には相手方のブレーンがあり、こちらの作戦を崩して来るだろう。

できればもう一押し…。

「ローアー・アンド・ガンナーに関しては面白い穴があるので、それを試したいと思います。完成できればですが、二科生向きの競技になるかもしれません」

「っ!?」ということとは、ミスター・シルバーの新しい魔法ですか？ それは一体どんな魔法でどんなCADを！」

「これまえ大人しく聞いていた中条先輩が、突如立ち上がった興奮し始めた。」

俺はそれを駄目ながら、ガツカリしそうだなと思いつつ事実を口にする。ここで気休めを言っても仕方ないだろう。

「残念ながら既存の魔法の応用ですよ。より正しく言えば、コストカットして扱い易くするだけですけど」

そう言つて俺がとある魔法を説明すると、中条先輩はガツカリするのではなく驚いた表情をするのであった…。

●一足早い来訪者

USNAからの到着便が、空港を訪れる。

途中でヨーロッパを経由したコースのせいか、乗客たちの中には疲労している者も見えた。

そんな中で三人ほど、軽い足取りで荷物を受け取りに移動して居る。

「チャールディングなワタシはUSNAから来た、リレイ・スナイパー。デース」

「プリティなワタシは、同じくUSNAのマリィ・スナイパー。デース。二人合わせてスナイパーシスターズ。ネ」

「…まあそんなものだろう。二人とも、学校ではその調子で適当に頼む」

記載された名前を改めて確認し、二人の女が荷物を受け取った。

ワザとらしい英語訛りという触れ込みの日本語を話し、連れの男に妙なアピールを盛んにしている。

「そうそう、私の事はそうだな…。仕事に失敗して飛ばされた主任ということにしよう。ジョン・スミス主任というのはどうだね？」

「せめて部長か特別室の課長デハ？」

「問題無ければどの呼称でもお呼びシマスが…。どちらへ？」

苦笑する男は肩をすくめて、二人の女を置いて荷物を引きずってキャビネットの方に向かい始めた。

「墓参りを兼ねて第一高校の視察にね。ライバルになる強豪校だそうじゃないか。色んな意味でお前達の相手に成る者がいれば良いのだが…」

ジョン・スミスと名乗る技術者は、そういつて東京行きのプレートを示した。

氷が融けて霧となり、雫が現れる

●異なるコースを走るモノ

ついに始まった九校戦予選。

学内行事でもなく、部活連主体の動き。しかも余裕の相手とあつてそれほど騒ぎにはなつて居なかった。

「既に生成されたピラーにグラム・デモリツションは効かない。だから落ち着いて行けば勝てる」

「はいっ！」

冷静に行けば一科生が二科生に負けるはずは無い。

一科生側のブレインの一人、関本・勲の言葉に一年生の選手が頷いた。

「と、関本先輩は仰ってますが…。大丈夫ですかね？」

「術式解体が効かないのは本当だろうさ。しかし…何か見落としてる様な気はするんだよな」

森崎・駿が少しも信じてない様子で尋ねると、桐原・武明は肩をすくめて苦笑した。

特に親しい訳でもないが、司波・達也を知る者として漠然とした不安を感じえないで居た。

「あの野郎が余裕ぶっこいてる以上は何か策を用意してると思うんだがな」

「二年総代の司波さんがあいつを尊敬の目で見てる姿を見かけたことがありますよ。…普通は同年代にそこまで慕わないと思うんですけどね」

二人とも口には出さないが、達也から公正な目で意見してくれと頼まれている。

つまり公正な目で見て、二科生側が優秀な成績を叩き出せる自身があるからだ。

得意分野に限つてのこととはいえ、相当な自信が無ければ言う筈が無い。

「尊敬ねえ。沢渡とかが十文字会頭を見る目がそんな感じだが…、逆

をいやそれだけのナニカが無いとしねーよな」

「司波さんは頭がおかしいわけじゃありませんからね。何らかの根拠がある筈です」

戦闘力で言えば『あいつ一人で良いんじゃないか?』というくらい
の強さが無ければ同年代に尊敬など抱き難い。

人格的にも大人物な(決して良い意味だけでは無い)十文字会頭は、
良くも悪くも男惚れする長所短所の多い人間だ。

十文字会頭と沢渡先輩くらいの差が必要なのか：と森崎は風紀の
先輩を引き合いに出しつつ、苦々しい目で会場を見た。

そこにはアイス・ピラース・ブレイクの為に用意された氷製のピ
ラーが立ち並んでいる。

どちらかといえば威力より精度重視の森崎としては、どう攻略する
か期待する面もあるが、裏口的な手段でもあるんじゃないかと疑いの
眼で見っていたのだ。

「親父が海兵隊なんだがな。たまに荒れるボートレースで言うんだ
よ。『ああ、こいつは別のコースを走ってるな』って」

「別のコースですか？ でも同じコースを走るのがレースですよ
ね？」

ボートレースは魔法が一般的になった現在でも継続して居る公式
賭博だ。

あまりにも広いエリアで、様々な障害がリアルタイムで継続する為
に、魔法の介入の余地が少ないからかもしれない。

「中止を危ぶむほどの荒天だとみんなペースが落ちるが、もともと荒
れる海の出身だったら話は別だろ？ 別に暗礁が多いとか波が高い
でもいいんだが」

「ああ、そういうことですか。確かに陸上でも高所出身者とか難所出
身者はそういう場所で早いですよね」

微妙に異なる例えを出しながら桐原と森崎は頷き合った。

グラム・デモリッションがあれば、普通の選手には選択できない戦
術もあるのだろう。

それを邪魔できる十文字会頭・七草会長クラスの干渉力なら話は別

なのだろうが、今回の予選選考にはあまりエントリーしてない。

他の競技にも言えるが、どちらかといえば一高に与えられた三枠に入れない可能性の高い選手が、ここで実績を残そうと三枠目の争いをしていると言える。

競技者三名のうち二名がそんな選手で、あとは一年のホープに経験を積みませようと言う意見が多数を占めていた。

二科生を舐めていると言えるが、この認識で正しいくらいが実力の差という現実でもあるのだ。

二人はお互いに達也との縁を話す訳でもないが、認識した不気味さからどうなることやらと見守っていた。

●フィールド・アタック

一方、俺の方でも二科生側の選手に似たような事を話していた。当然ながら楽観論にはなりえなかったが。

「この際ですから胸を借りるつもりで思いっきり行きましょう。何、全力で行けば一か所・一か所では俺達の方が干渉力は上です」

「そうだな。司波の言うとおりだ」

「普段威張り散らしてるやつらに目にも言わせないとね」

今回集めたアイスピラーズ・ブレイク用の選手は、干渉力だけなら一科生以上の選手ばかりだ。

魔法の同時展開数が少なかったり、発動が遅かったりするが威力だけなら問題無い。

その二名に先駆けて、俺が第一試合で思い切りの良い前例を作るつもりで居た。

同じ様に二科生側は他の競技でも、勝ち易いエースメンバーが先行。

残る二名がそれを参考に、自分が一科生に勝って居ると思わしき能力を振るうと言う作戦になっていた。

ある程度の博打はあるが、一科生側が舐めているならば十分に通用する策だ。

(まあ、その意味でも十文字会頭が最初にこの競技を持って来た意味は大きいな。次の競技ではそうもいかんかもしれん)

俺向きの競技とも言えるこの試合で、ダブルスコアを付けて圧勝するつもりだった。

そうすることで一科生にも一目置かせるつもりだったが、向こうのやる気を出す為に会頭から利用されているとも言えた。

「ところで、この格好は本当に必要なのか？ ただの学生服にも見えるが」

「アイス・ピラーズ・ブレイクは花形なんですよ」

「リンさんの見送りの時に、人数が揃わないからって僕に女装させたんだし、そのくらいは着て貰わないと」

俺は美月たちによってたかつて、いわゆる学ランに着替えさせられていた。

ただし背中に逆向きの北斗七星が龍のように描かれており、双子星が怪しく輝いている。

それだけでも不良学生と言う感じだが、オールバックにさせられており微妙な気分だ。

しかし試合開始と共に、俺はCADを用意し気持ち切り替える。
(とはいえ初手だけは二対一だからな。俺の方も油断は禁物か)

俺は用意した通常型一つと二丁のCAD特化型のうち、術式解体と『もう二つ』を込めた特化型をアクティブにする。

ただし、向けるのは氷のピラーではない。もつと下だ。

(この競技が夏の華で良かった。まあ冬場に氷を砕いても面白くもなるともないが)

夏場に魔法で無理やり氷を作っている。

その事実が俺に大きなアドバンテージを用意して居た。

魔法で存在を許容して居る以上は、たった一つの魔法を打ち砕くだけで勝利の天秤は俺に傾く。

七草会長も渡辺委員長もこちら側であり、会頭が試合相手ではない以上は負けるつもりなどない。

試合開始を告げるランプが灯ると、俺は『相手フィールド』に術式解体を撃ち込んだ。

(魔法式を把握。次はもつと少ないコストで可能か。さて、相手選手

の魔法を迎撃するでしょう…)

術式解体で試合会場を覆う二枚の保護フィールドのうち、相手側のモノだけを打ち砕いた。

これによつて熱から零度まで簡易遮断されたピラーに、自然の熱が伝わり始める。

通常はあり得ない事態に、担当の教師が事故かと慌ててフィールドを張り直す…。

そんなことを許しては面倒なので、今度は難しい代わりに手早く使える『術式解散』で手早く吹き払った。

(よし、これで俺がフィールドを崩したことに気が付いたな。こちらも攻撃に参加出来る)

相手の相手をしながら教師の魔法を崩すのは手間があり過ぎる。

よつて残りの手数は全て迎撃に充てていたが、もう攻撃に回つても良いだろう。

相手側だけ保護フィールドを崩したことにより、持久戦では俺の方が有利になった。

ただ、氷と言う物は大きくなつたらそれ自身の存在が保護を行つてしまう。

小さな氷は簡単に融けてしまうが、大きな氷はお互いに補い合うのでペースが落ちるのだ。

だから俺の攻撃は熱風で融けるのを助長するか、振動を与えて打ち砕くかになる。

(相手側の防御は満遍なく情報防御を掛けて、狙われ易い場所には少し密度が濃い。…無難な選択肢だが、この場合は悲しいほどに間違いだ)

俺は情報防御を術式解体で打ち砕くと、待機しておいた通常型を立ち上げた。

収束魔法で周囲の光と熱を集めて、相手陣地全体の熱量を徐々に上げていく。

工程が少ないだけに地味な魔法だが零度に保つ保護フィールドが無い以上は効果が大きく、放っておけば融ける…という程度から保護

し直さないと試合中に融けるかもしれないというレベルまで温度が上昇する筈だ。

ここで俺は汎用型をサスペンドして、待機させているもう一丁の特化型を立ち上げる。

(相手が集中防御して居る場所はバレバレだからな。今ならそこを外して撃つても問題あるまい)

同一対象に対する対象設定を実行。防御して居る場所を外した上で対象数を増やした。

もう少し行けるが、ひとまず八つほどの対象を目標に振動系の魔法を射出。これを邪魔する相手選手の魔法をやはり術式解体で迎撃する。

タイミングを変えて振動魔法を連射して、アツサリとピラーを打ち砕いて行った。

残る四つのうち幾つかは防御が掛ったままで俺の能力では破壊が難しいので、術式解散で一斉に崩して同様の行程で振動系を確実に撃ち込んで行く。

全てのピラーを崩すのに、それほど時間は掛らなかった。

「凄いじゃないか、あんな短時間で」

「相手が何をするか、ほぼ判っている状態だからな。実験室と同レベルの環境なら行けなくもない」

「それだって凄いことに替わりありません。お兄様は偶には胸を張って成果を誇るべきです」

この競技が俺向きなのは、夏場に氷と言う元から無茶のある舞台だということ(今は五月だが年々暑くなっている)。

次にお互いを対象としない魔法の撃ち合いであり、術式解体を攻防に利用すれば一方的に攻撃が可能なことだ。

そして、ほぼ同一の状況と魔法が続く為、実験室以外では成立しないと言われている術式解散：グラム・デイスパーションが成立してもおかしくないことである。

術式解散は精密な事が出来る反面、タイトな設定が必要で確かに成功し難い対抗魔法だ。普通に使ってもまともに成功しない。

だが俺は『眼』で見た情報を元に成功させることができ、その眼の情報を隠すには状況の動か無いこの競技はうってつけなのである。

今回は誤魔化せそうにないし不要だったから使って無いが、相手の魔法で視界が荒れる場合には『分解』を使っても誤魔化し易いのもあるだろう。

「ひとまず次の試合も大丈夫だろう。試合らしい試合に成るのは最終戦。深雪の友人だけに気が抜けないな」

「雫は正式な選手ですからね。でもお兄様なら大丈夫です」

一年の一科生でも、次に戦う二年の控えの選手より強いらしい。

だが、深雪によると強度が高い反面、精度が苦手なタイプとのことだ。

構成力も高いので大型の魔法式を自在に使いこなせるらしいが…、この手のタイプは自分が得意な魔法に頼る傾向がある。

それが『共振破壊』であることも深雪から聞ける環境にあるので、最初から術式解散を試してみても（流石に一射目から成功するのはマズイ）おかしくはないだろう。

（共振破壊は出の早い魔法だが、精度に欠けると言うことは俺と違って多数同時実行が高速のままでは不可能だと言うことだ。そこにつけ込む機会がある）

出を遅くして一気に処理しようとするれば術式解体で叩き潰せる。

なら術式解体よりも早く実行できる個数で次々に潰して来る筈だ。その途中なら術式解散を成功させても問題無い。

そういう意味では深雪の友人である北山・雫という少女は、俺の『眼』を隠すのにうってつけの人材だろう。

彼女のお陰で術式解散の難易度も説明出来るからいつも使用しなくて済むし、得意魔法が知れ渡っているなら成功するまで試みたと言いつてい訳できる。

しかし共振破壊か。専用の魔法とCADを作っても…。

「お兄様。もしや人の友人を口説こうなどと思っはいませんか？」

「まさか。共振破壊は滅多に見ないから面白いなと思っただけさ。ピラーの準備を手伝うんだろう？ 行っておいで」

妙な質問をする深雪に気のせいだろうと促して、俺は二科生の選手の様子を見に行くことにした。

一人目と二人目の選手は問題無いだろうが、三人目の北山選手も強度重視とあって不安を感じたからだ。

事実、北山選手と当たった方は早々に敗北が決定してしまっている。

「すまん。ほぼ完封されてしまった」

「問題ありませんよ。もう一人の選手には通じた作戦ですし、このまま全体のスコアで押しに行きましょう」

「そうそう。めげてないでどの程度の強度で押せば壊せたか教えてよ。二つ三つは成功したんでしょ？ こっちのデータも教えるからさ」

嬉しい誤算は敗北した三人目の先輩が途中から数本だけ護って時間を稼ぎつつ、あとは攻撃のみに切り換えてデータを測ってくれたことだ。

これで北山選手の防御を抜くのに、どの程度の労力を回せば良いかが判って無駄打ちしなくて済む。

二人目の選手は完全な攻撃重視作戦で行ったらしいので、そのデータを元に絞って攻撃して行けば善戦できるだろう。

結局、北山選手の圧勝で調子を取り戻した一科生側は、二戦目で俺以外の二科生との戦いでは接戦で勝ち越されてしまう。

だが前評判を考えればこれでも十分。俺以外は白星一つではあるが、内容的には二科生側健闘のまま最終戦を迎えた。

●北山・雫

三戦目の第一試合、俺の相手は北山選手だ。

部活連も本命対決として、お互いの情報が知れ渡った所でぶつかる様になっているのだろう。

現在の勝利数は、六戦のうち俺の二つともう一つで半分納めている。

ここで俺が北山選手にも勝てば九分の四、残る二人のどちらかが勝ってくれば勝ちこせる。

既に、二科生も状況次第でやれる…という成績ではある。

しかし例外中の例外である俺だけが勝利し、残る一つが偶然と言われかねない状況だ。

(ここでもダブル・スコアで勝てば一戦目のように一科生側が調子を崩す事もあり得るが…。少し厳しいかもしれない)

何しろ今回の相手は一年生のホープであり、残り二人の選手と違って正式な九校戦選手に選ばれているそうさ。

地味な勝負に持ち込めば確実に勝てるだろうが、それでは他の一科生にシヨックを与えるほどはないだろう。

例外中の例外と認識されるのは、そういうことなのだから。加えてこちらの手の内がバレているのいも痛い。

共振破壊は調査の為に余分な一手を打ち込む必要があるのだが、俺の方もフィールド破壊で一手目を使用するからだ。

結果としてお互いの一手目が固定された状態で、俺の術式解体よりも早いペースで共振破壊が飛んでくるだろう。

更に俺が連射で打ち込む振動魔法は威力が弱いので、ギリギリまで密度を薄くして高速型に切り替えた防御で弾いて来るに違いない。

(まあ、そこまでは手が読めるからな。こっちも防御重視にすれば千日手にできるだろうが、それじゃ意味が無い)

俺が防御に徹したとしても、能力的に防ぐのは難しい。

結果的に術式解体と併用しての防御でズルズルと時間を掛けるだけだ。

フィールドを破壊して居る分だけ消耗戦は有利なように見えるが、そうなればこちらの二科生がやった超攻撃型の作戦で全面攻撃を仕掛けてきかねない。

それを防ぐためにまた新しい手を…と、こちらが受け手に回ってしまつて、結局は優勢勝ち以上が狙えなくなつてしまうのだ。

そうなれば心理戦に持ち込めるはずも無く、調子を保つたままの一科生側が勝利を収めるのは間違いが無い。

(もつとも…。それは俺が魔法を変更してなければ…の話だ)

術式解体・術式解散・『分解』である雲散霧消を込めた無系統と、熱

の収束を収めた汎用型はそのまま。

変更したのは当然、弾かれると判っている振動系だ。

振動系の系統設定はそのままに、熱量を増幅する振動魔法に入れ換えている。

相手も同じ魔法式ながら高速型に切り替えて居るはずなので、中立サイドの教師陣に提出して居る以上は、お互いさまと言えなくもない。

(さて、お手並み拝見といこう)

対する北山選手の装束は、紫色が映える娘袴だ。

奇しくも大正時代の学生対決のようで…と考えて軽く笑いそうになった。

とはいえ教師陣の張ったフィールドを破壊し、入れ違うようにこちらの振動数を測られているので笑って居られるような状況では無い。(思ったよりも遅いが力強い魔法だな。術式解体で落とすには早過ぎ、九校戦の本戦で使わせるには遅すぎる)

おそらくは調査の為に精密に測るのが苦手なのだろう。

二科生と戦うには問題無いが、九校戦で精鋭と戦いぬくには少し不安の残る荒削りさがあった。

この後に同じチームになったら、やはり改良した魔法式を考案する必要があるだろう。

(二手目。…早速来たな。俺も対応を開始するか)

俺が熱の収束を複数から敵陣に向けた時、こちらのピラーが早速打ち壊された。

当然ながら、俺が無理やり放った術式解散は波調を合わせることが出来ていない。

あと数個こちらが壊されて、北山選手の能力をギリギリ把握したと思わせられるまで迎撃は見合わせるしかないだろう。

問題は粗削りな北山選手が、この後で壊すたびに尻あがりにペースを早めることだ。

二科生側は俺が把握に間にあうか不安だろうし、一科生側は手に汗握って勝利を待ちわびている事だろう。

(もつとも、それより先に俺が別の方法を試すがな。…焦ってこちらが手を変えていることに気が付いて無いといいんだが)

俺はまず、敵陣に向けた熱の収束を二か所に増やした。

一つは相手陣地の上層で、これは場所を増やしても熱を奪い合うだけで意味が無い。

ならば、もう一か所はどこか？

当然ながら、俺の陣地から相手陣地に向かう方向だ。

ここは零度に保たれているので、意味は無いが…。

(作戦開始と行こうか)

「なっ、あれはマグナ・ブラスター!」

俺が用意したのは振動によって熱量を発生させる魔法の、わりと下位に当たるモノだ。

フォノン・メーカーを用意する事もできなくはないが、俺の実力では使いこなせない。

下位互換に当たるこの魔法が精々だが、この場合に利点が他に在る。

「でもなんで自分のピラーにまで…」

(普通なら意味は無い。だが、こちらで発生する熱量もそちらへ向かって行く。そして…)

同一目標への射撃を、ピラーではなく場所に複数同時に発生させる。

対象は北山選手のピラー周囲や、既に砕かれた俺のピラー周囲にもだ。

仕掛けられた熱収束により、下位の魔法であるマグナ・ブラスターでも悪くない威力を次第に発揮し始める。

加えて既に砕かれたピラーから立ち上る蒸気が、相手陣地を覆って把握が難しくなり始めていた。

(今なら分解を使ってもバレないか？ だがまだだ。念には念を入れて、術式解散を合わせ全体を動揺させてからだ)

こちらのピラーを砕くと、それも使って蒸気が立ち上る。

数度繰り返すたびに、術式解散の波調があつて来るのではないか？

そのことが北山選手を、そして一科生側の心理を追い詰めていく。
「オン・マケイ・シヴァラヤ・ソワカ：」

無意味なマントラを唱えることで、俺は精神を強制的にプリセットする。

今使つて目撃処理に問題は無いのか？ 見られる可能性は、そもそも必要あるのか？ 再計算して不要だと頭の片隅でささやく声がする。

「…そうだ、まだその時では無い。俺はまだ全力を出して無い。ならばそれ以上はもつと後だ」

今発動しても問題無いとは思うが、見る者が見て居ればまだまだバレル可能性があるだろう。

機密であるならば徹底的にそれを守るべきだし、無くても勝てるならそのそも使うべきではない。

まずは振動系のCADを待機させて汎用型を再びアクティブに、敵陣周囲を探ると熱収束が吹き抜けて無駄になっている作用点にも収束魔法を仕掛けて陣地の中に熱を戻して行く。

同じ様に無駄が多いとは知りつつも、熱が外に出て行かない様にドームを作りあげて状況を加速する事にした。

後は再び特化系をアクティブにして、マグナ・ブラスターを撃ち込み続ければ勝てるだろう。

もはや術式解散を成功させても、蒸気で満たされた場の派手さの方に目が行っているのだから。

「流石は深雪のお兄さんだね。最初は勝てるかともか思ったけど、驚いた」

「こちらこそ、まさか共振破壊をあのペースで実行されるとは思わなかった。驚いたならスローダウンするかと思っただが」

最終的に北山選手はマイペースに事を進め、こちらのピラーが半分壊れるまで意地で破壊をし続けた。

壊せば壊す程、俺が使う材料が増えると思わせたかったのだが、そこまでは無理だったようだ。

とはいえ霧を発生させて目を奪い、他の一科生を驚かせたので十分

な成果と言えるかもしれない。

「そうだお兄さん。隣のクラウド・ボールでほのか…私の親友が試合をしてるんだけど、見に行かない？ 九校戦で絶対に役立つはず」

「悪くないな。こっちもエースを任せたエリカがどうなってるか興味あったんだ」

「お兄様…。あれほど私の友人を口説かないで下さいと…」

握手したまま試合観戦の話をしていると、深雪が怖い顔で笑っているので二人で宥めることにした。

帰りにケーキを一緒に食べながら、あくまで深雪の紹介と言う形で詳しく話す事になる。

なお、残りの二試合は残念ながら敗北。

逆にクラウド・ボールは優勢なようで、胸を撫でおろしながら観戦に向かうことにした。

陽差し零れる夕日に、ほのかな灯火

●光井ほのか

クラウド・ボールの会場ではまだ最終試合が始まって間も無い。俺が担当したアイス・ピラーズ・ブレイクが十二本のピラーを倒せば終わりなのに対し、テニスに近い形で数セットあるからだ。

無論、氷のピラーの準備に時間が掛るなら別だが深雪やってしまえるので問題無い（そういう意味で二科生側は練習し易かった）

見ればエリカが相手の光井選手を追い詰めているところだった。

「もうちよつとラリーしたいから、ラストになんないようお願いね」
「この、馬鹿にして！」

エリカは一科生側の正面に二球、臭いコースに一球打ち返している。

それに対して光井選手は息を切らせて正面二球だけに専念することにしたようだ。

先に打ち返した一球目は閃光を発し、続けて放つ二級目は分裂して見える。

「閃光球フラッシュボールに分裂球スプリット…、もしかして光井選手はエレメンツなのか？」

「二目で良く判るね深雪のお兄さん…」

眼で確認するまでもなく、異様に魔法の組み立てが早い。

同じ振動系の光波投射パターンの差でしかないとはいえ、これほど高速の連続魔法は類を見ない。

「ん…。ああ他意は無いんだ。これほど見事な高速詠唱は他に考えられないからね」

「そう言っただけならば、ほのかも喜ぶと思うよ」

エレメンツというのは系統魔法と十師族より以前に作られた調整・分類で、特定の属性魔法があるものとして設計されていた。

まだ魔法に系統があるとは思われておらず、魔法師が強化人間として実験体の域を得ないころの名残でもあり、差別意識を持つ者も居るので失言だったかもしれない。

それを謝る意味も込めて告げると、北山選手は首を振って親友であ

る光井選手の方をジッと見ていた。

豊かで健康的な肢体が、ボールを追い掛けて玉のような汗を流している。

その度に見学して居る男子生徒から溜息がこぼれるが、俺にとって重要なのは能力や特性の方だ。

体力はそれなりにあるのだろうが、エリカの速度に全く付いて行けてない。

アツサリと二球ほど打ち返された上、次の球まで追加されて必死で追いかけている。

「それにしても一科生側のブレーンは何を考えてるんだ？　彼女はこの競技に致命的に向いて無い」

「それも判るんだ？　…ほのかは元もとバトル・ボードとミラージ・バットにエントリーしてたんだけど、今回は無いから」

なるほど、エントリーして居た競技が無いから替わりに補欠の適性検査を踏まえてこっちに來たのか。

そうしてみるとチグハグなこの状態にも頷ける。
体力にだが迂闊に挑発へ乗ってしまうところからも精神的に強いタイプではないように見えた。

器用さや魔法適正から全体の盤面を見るには向いているが、深雪とは別の意味で制限された環境の競技に向いて居ないのだ。

「せめてダブルスの方に回せなかったのか？　幻覚系はこの競技に向いている様に見えるが、アレは使い方に寄るんだ」

ダブルスで後ろに控えて居れば、汎用タイプのCADでベクトル反射辺りと組み合わせることで本人は移動せずに済む。

だが走り回りながら打ち返しつつ、幻覚でボロが出ない様にするのは至難の技だ。

高速で魔法を組み立てると、相手の認識を騙すのでは全く別の能力が必要になって来る。あれならばまだ、一種類の幻覚を使いこなした方がマシだろう。

エリカが割りと簡単に見抜いているのも…、ボロが出て居たり癖があるからなのだから。

「そっちはスバル：別の友達が外せなくて、ほのかと致命的に合わないから……。詳しいことは言えなくてゴメンね深雪のお兄さん」

「なるほど。明日の競技に参加するのか、不躰に聞いて済まない。それと俺の事は達也で良いよ」

ダブルスの方も『担当者』が確認して居るだろうが、そのスバルと言う選手はどんな能力で何に向いているのだろうか？

授業と準備での時間的な都合もあり、土曜である今日にアイス・ピラーズ・ブレイクとクラウド・ボールにシールド・ダウンといった個人競技のみ。

時間の掛るロアー・アンド・ガンナーとステイブル・チェース・クロスカントリーは明日の日曜日一杯を使い、一試合だけしかないモノリス・コードは月曜日に回されている。

（光振動と相性が悪いと言うことは、^{ステルス}潜伏系の魔法師か何か？ その相性差を考えたのなら、もう少し考慮すればこの事態を防げたのかな）

迂闊に光景をコピーしてテクスチャとして移動させると、隠れている選手が浮き彫りに成る可能性がある。

だからダブルスにしなかったのだろうが、その組み合わせの差は今の幻覚にも言えるのだ（後ほど判ったが魔法では無かったので、この予想は半分ほど外れていた）。

最初に放った閃光が分裂させて見せる球の影を鮮明にしており、先ほどのコンボは失敗したと言える。

あれはたまたま連続で放っただけなのかもしれないが、何度か出し抜かれれば途中で気が付く可能性は高い。

なにしろ他の試合で情報を収集してる事もあり、癖の類が見つければ『担当者』が報告して居るはずだからだ。

「こっちも雫で良い。……それにしてもあの娘も良く返すね。練習だと上級生でもかなり苦労したのに」

「では雫と呼ばせてもらおうか。……偶然もあるな。エリカは幻覚で痛い目にあって訓練してたところなんだ」

流石にデータ収集の為に担当者を設定して、癖を見抜かせていると

言う訳にはいかないもので、事実の半分だけを説明した。

エリカはダグラス・黄ウオンの小技にやられたのがよほど悔しかったのか、幹比古に幻覚を用意させてかなり特訓して居た。

だから訓練していたというのは嘘ではないし、こっちの方を説明して運が悪かった、星の巡りが味方したのだと言うことにはしておく。

「ほのかは本戦でこの競技に出ないと思うけど、達也さんならどう言う作戦にする？」

「そうだな。微調整が不要な魔法一つに絞って、隠し技でもう一つかな？ それを見抜かれて来た頃に投入した方が安定すると思う」

見抜かれても反応し難い魔法を選び、対策された時に隠し技を使う。

あるいは同じ魔法の別の使い道を出来るモノにして、『本当にあの魔法なのか？』と疑わせる方が気楽に出来るはずだ。

例えば…

「光井選手がどれだけ特化した能力を持って居るかにもよるが、場合によってはベクトル反転をメインで使用する方が良いかもしれない」
「振動系の魔法で幻覚使うんじゃない？ …あ、そっか。得意な魔法をいつも使う必要は無いんだ」

俺は北山選手…零の言葉に頷いた。

要所所でCADが不要な程度の単純な幻覚を使うか、特訓次第でパラレル・キャストできるならもう一つCADを持つのも良いだろう。

「パラレル・キャストはコントロールの面もあるが、相性も大きいからな。やって見て可能な範囲で簡単な幻覚を被せた方が勝率は高い筈だ」

「そうだね。ベクトル反転をメインにするなら走らなくて済むし、単純な魔法を一つだけなら出来るかも」

もちろん森崎がやっていて、俺も取り入れたようなサスペンドを繰り返すのも手だろう。

普段は必要だけ使用して、精神的に余裕のある時に時々スイッチを入れて切り替えるなら心理的な負担も軽い。

「さつきみたいな時に返されるのを覚悟で素直な返球をして、一球にだけ…そうだな。遅れて見えるとか少し上に見える、ディレイ画像とかな」

「…さつき話しただけの情報だけで思い付くなんて、本当に達也さんは凄いな」

凄いと言うよりは、その程度の能力でなんとかするしかない状況が続いたからだとも言える。

師匠の元に預けられて修業させられただけでなく、四葉の裏工作などでも借りだされることがあったからだ。

「このセットが終わるようだ。行かなくていいのか？」
「ん。ほのかと一緒にはまた後で」

深雪が居た時にみんなでケーキを食べながらと約束して居るしていることもあり、雫を迎えに行かせてその場を離れた。

エリカに駆けよって大丈夫かと聞く必要は無いが…。

別の試合を見ていた『担当者』から話を聞きたかったからだ。

●生徒会側と部活連の温度差

「先輩、ご苦労様です」

目上には使うには問題のある表現をあえて使って出迎える。

「まったくだ。こんなにコキ使うのはあの義兄だけかと思った。しかし、こんなことをして居て良いのか疑問に思うが」

「七草会長も同じことをされてる筈なので、司先輩は無理には構いませんよ？ それだけに、対象しない一科生側が怠惰なのだというしかありません」

司・甲、元剣道部部长。

洗脳されていたことが判明したのとその能力を惜しんで休学は勘弁してもらった。

流石に部長職は責任の問題で辞したようだが、その能力が無くなった訳ではない。

調べてみるとブランシユの司・一は巧みな話術と洞察力で誘導するのが上手いタイプで、洗脳魔法が強力なわけでは無かったらしい。

会話を割り込んで光振動を使う『イビルアイ』により、キツカケを

使ってその都度、軽度の洗脳を重ねて認識を書き変えて行つたのとことだ。

洗脳によって苦手意識を強制的に克服し、彼の眼で魔法を見抜くことを訓練されているので駒として使うには中々悪くない存在だ。

ゆえに経過をこちらで診る＝監視するというところで、当局から委託されている。

裏では隊や四葉の存在もあつたとは思うが、押しつけられた任務でもあるので今回は有意義に使っていた。

元もと二科生の扱いに不満だつた可能性もあり、ゆつくりと治療するのであれば同じ路線である方が良いだろうと言うのもある。

「怠惰か…。言われてみればそうかもしれない。他に試合やダブルスでも同様の『練習試合』だつたよ」

「まだ部活連側も本気になつていないのでしようね。明日からはそうもいかないでしょうが、今日の所は利用させてもらいます」

司先輩から受け取つたのは、相手のアレンジ・パターンだつた。

一科生側の選手は光井選手が使つた幻覚パターンの他、ベクトル反転・こちらと同じテニス型の身体強化系の三パターン。

アイス・ピラース・ブレイクの選手層と同じく、三位争いが二名、一年生のホープ達という組み合わせだ（複数形なのはダブルスの分）。

生徒会側が二科生を活躍させる為に本気で取り組んで居るのに対し、部活連の方はどうせ勝つのだし試合をしてやれば我が儘を聞かずに済むくらいの認識なのだろう。

予想通りではあるがそれを予想した十文字会頭の策もある、今日の試合結果を見て明日には認識を入れ換えて居るはずだ。

「…ダブルスに登場して居る里見・スバルと言う選手、どうでした？特に眼ですが」

「魔法の方がが跳躍で派手な動きをするかと思うと、意外な場所に待ち構えて居たりする」

里見選手は眼鏡にラケット型のCADを持った姿をしている。

身体強化系で一足飛びに動き回るタイプのようだが、どうして光井選手と組めないのかが気に成つた。

光井選手が動かずに汎用タイプでフオローするなら丁度良いのに、先ほど聞いた話と整合性が付かないのだ。

過敏症の眼が強力過ぎて、見入ってしまうと言うことだろうか？

もちろん雫が咄嗟に誤魔化した可能性もあるが、彼女の性格上、喋れないなら喋れないと素直に言うだろう。

「隠しているのじゃなければ眼鏡の方は伊達みたいだな。義兄に言われて魔法を確認出来るメンバーを増やす様に言われた時に声を掛けたことがある」

「治療の話にも食いつきは無し？ ファッションなのか」

一科生の能力に加えて、霊子を見切る眼と仮定するならそれは声を掛けるだろう。

だがこうやって否定するところを見ると、純粹に伊達眼鏡なのかもしれない。

司先輩の眼を疑われない様に伊達眼鏡を掛けてもらって、試合以外では幹比古の符で抑えている状態だ。専門店に行けば伊達眼鏡が沢山置いてあるというのは確認済み。

ということとは、やはり潜伏系のステルスだろうか…。

「先ほど意外な場所に居ると言っていました。魔法ですか？」

「いや、別の…体術か何かだと思う。移動後に魔法を使って、ようやく気が付いたこともあるからな」

霊子放射光過敏症では魔法の詳細は判らない。

だが魔法を使ったかどうかは判るので、ブランチュに利用されていた時はやはりこの眼で風紀の魔法的な監視を出し抜いていたとか。

その先輩だからこそ見抜けたのかもしれない。

「後は試合序盤の様に、七草会長や深雪の情報も入れて精査してみましようか。御協力、感謝します」

「…本来ならば学校に居られない所だったからな、このくらいは何でもないさ」

剣道部は騙されて利用された被害者に成っていることを言っているのだろう。

司先輩はこちらを振り向かず、手を振って立ち去って行った。

他の試合の様子と全体的なスコアを確認すると、クラウド・ボールは一試合目がこちらと同じ二勝一敗。

二試合目・三試合目がこちらと逆に二科生側が勝利数が多く、ダブルスで敗北して居る分やや平均化した様な感じだ。

十戦中、六勝四敗と言うことで勝ち越したまますの結果だった。

●ジョン・スミス

会場が遠い事もあり中々見れなかったシールド・ダウンは、レオ以外はパットとした結果の無い残念な結果だった。

白星が無いではないが、慣れない競技で相手の反則負けや勇み足による場外で、両者引き分けの方が多いのだから笑うしかない。

無理に良かった点を探すと、レオの新バリエーションを見れたくらいだろう。

それと、偶々試合を通り掛った技術者が見て関心をいだてくれたのもか。

「その動きは見切った、これで終わりだ!」

「まだまだ。カレドヴルッフ・ツヴァイ!」

以前に提案したバリエーションで自由自在に位置を変更して居たレオだが、隙を突かれて盾を跳ね飛ばされた。

(盾を回転させるとは器用な奴だ)

面白かったのはそこからで、盾が回転しながら相手の盾目掛けて飛んでいく。

そこに自分が飛び付き五秒ルールをなんとかするという強引な展開だった。

「なんだあれは!? あんなことも可能なのかよ。あの籠手は特化型じゃないのか」

「ああ。多分、あれも硬化魔法ですよ。さつき、シールドバッシュを空中固定で回避して居たでしょう?」

驚く一科生に声を掛けたのは、試合場の外から観戦していた部外者の様だった。

見学中との認識票を付けていたが、どうやら魔工師のようだ。

これを期に、外でも二科生に注目してくれる動きが出ると助かるん

だが…。

「あんた…、いえ貴方は先ほどの原理が理解できたのですか？」

「ええ。硬化魔法の応用には目が無いモノでね。アインが前、ツヴァイが側面、ドライが後方待機でしたか。回転の理屈ですが…」

（…良く見ている。流星に本職は違うな。俺も油断は出来ん）

専門家なら当然なのだろうが、ジョン・スミスとプレートを付けたこの技術者は即座に応用方法を見抜いていた。

もし分解を見られて居たら見抜かれたかもしれないと、少しばかり肝が冷える。

「おそらく、表面状態Aと裏面状態Bの位置情報で断続的に切り替えたのですよ。逐次詠唱ならではの用法ですね」

「ありがとうございました、部外者の方なのにすみません」

「シールド・ダウン用の魔法を用意したのか…。流星はミスター・シルバー」

褒めてもらっても嬉しくないのと、FLTで微妙な時期なのでこの場は退散する事にした。

さっさと抜け出して、雫たち深雪の友人と話す為に喫茶店に向かうことにする。

何故こんなに警戒して居るかと言うと…。

社内でラボが浮いていたのだが、とうとう支社化を通告されて追い出されることになっていった。

飛行魔法の完成は秒読みで、支社の社屋・研究塔も見付けてあるので時間の方は問題無い。

だが、妙なキツカケを元に察せられても面倒なことになるからだ。

三大難関ゆえに同じ魔法を研究して居る者は多いし、そうでなくとも技術者ならば気が付く可能性はあり得ると警戒しておいたわけだが…。

俺は他の者を舐めているつもりはない。俺が気が付く様な事は他の研究者でも可能と常に警戒して居たつもりだった。

だが、飛行魔法に関しては思わぬ所から、それこそ風が吹けば桶屋が儲かる様に判明してしまうとは思ってもよらなかった。

ならばやはり俺の警戒心は緩かった。他の研究者…いや学生を舐めていたのかもしれない。

その意味では、俺も一科生絶対有利を信じる部活連と替わりがないと後に自嘲することになる。

幕間での苦心、苦勞の活かし方

●もう一枚の手札

「それじゃあ、私も達也さんと呼ばせて頂きますね」
「構わない。こちらもほのかと呼ばせてもらう訳だし」

光井選手：ほのかと挨拶を交わし、コーヒーを待ちながら会話を始める。

とはいえ校内予選の帰り道ともあり、何気ない会話であつても自然と限られてしまう。

ほのかの出番はこれまでともあつて、今日の反省もすませておきたいらしい。

「でも、それだけで良かったんですか？ 確かに先輩たちからは幻覚の順番とか気を付けろとは言われてましたが」

「この場合は同じ条件の勝負なのに、もう一枚自分だけの手札があることが重要なんだ」

言いながら俺は、店のウィンドウに並んでいるケーキを指差した。
当然ながらそこには、無数のケーキが並んでいる。

「ほのかが今日使った魔法は全て相性の良い光振動の幻覚魔法だけど、あそこのケーキから五秒以内に一つだけと言われているようなものだ」

「…見てたんですか？ 恥ずかしい…」

「ほのかは時間かけ過ぎ。そんなに気に成るなら盛り合わせを頼めばいいのに」

雫が言うように、ほのかは無数のケーキから何を頼むか悩んで居た。

見えて可愛らしかったが、決断力が高くは無い方なのだろう。

「高い才能も時には良し悪しだ。咄嗟にどれを使うか悩むくらいなら、一つだけこれだけはと自信が持てる方が良い。判り易い例で言うと七草会長だな」

「会長と比べる何んて酷い…。あの人は何でも出来るじゃないですかっ」

俺から見れば、ほのかも何でも出来るタイプなんだが…。

まあそれはヒガミになるから、黙っておこう。

「会長はベクトル反転と、たった一つの魔法をCAD無しで併用しているよ。それを使う時と使わない時を選んでいるだけだ」

「それだけだったんですか？」

「全く動か無いスタイルだから誤解を与えてしまうようだけど、そうなのよ。私も驚いたわ」

ほのかが驚くとすかさず深雪がフォローを入れて宥める。

ここは生徒会同士で会長と何度も顔を合わせ、時折練習時間に声を掛けておくこともあり説得力が違う。

「そうだな。同じ魔法を時間の余裕に合わせて、全く別の使い道に用いていると言えれば納得してくれるかな？ ほのかも同じように余裕に合わせて一つの魔法だけを使い分ければ楽だったはずだ」

「えっと、確か画像の遅延処理のタイミングだけの方が良いって言うてたよね」

「確かに一つだけなら何とかかなりそうですね。パラレル・キヤストかあ」

会長は視点を追加するマルチスコープの魔法を、最初に短く一度、余裕がある時にジックリ切り替えながら使っている。

まずは全体を俯瞰する場所からレーダーの様にボールを確認し、余裕があると判った時だけ、ベクトル変換の方向を変えるために別の場所から見ているのだ。

当然ながら余裕が無い時は視点の追加もせずに、ただ同じ方向に反射して居る。

「さっきは迷うことをケーキで示したけど、今度はその余裕をポーカーで説明するのでしょうか。雫は普通に五枚、ほのかは六枚引いて後は普通通りに」

「一枚余分に引かれたら対等の勝負に成らないよ達也さん。…でもそういうことだよね」

「それだけで雫に勝てるとは思えないけど…でもそれなら少しは気楽かな」

雫は落ち付いていて顔色が替わり難いので、ポーカーフェイスは得意そうだ。

ほのかが言うほど大きな差があるとは思えないが、それでも同じ条件で自分だけ一枚多いというのは大きな安心要素だろう。

「これが最初では無く、チエンジする時に余分に一枚引けるという場合はもつと替わるんじゃない？」

「そうかなあ…」

「まあ雫相手ではないと仮定してみてください。双方ともに同じ条件で、自分だけが使えるならそれは大きなメリットだ」

この辺りの反応は、武道をやってるエリカとの差だろう。

エリカであれば、同じ条件での小さなハンデをとっても大きな物として認識していたに違いない。

対等の能力がある者同士であれば、その僅かな差が全てを決着付けかねないからだ。

「難しく考える必要はないさ。例えばミラージ・バットだが、光に対してあれだけ相性が良いなら余計なことをするよりも、先にボールの出現地点を察知するだけでもいい」

会長の視点切り替え作戦を参考に、光振動を感知する術式を使っても良いだろう。

「お兄さまの仰る通り察知だけでも凄い差が出るわよ、ほのか。ミラージ・バットは汎用型を使うんだし、他の選手よりも先に場所を把握するだけでもスピード勝負に有利なはずよ」

先に全体を把握し、他の選手が探している間から、ジャンプするために加速魔法を準備する。それだけで絶対的な有利になる筈だ。

「それはそうなんだろうけど…。深雪、ミラージ・バットには貴女も出るの忘れて無い？」

「深雪の構築速度は特化型並だもんね」

ほのかは深く考え過ぎて落ち込む様なので、少し別の話題を入れることにした。

それは警戒して居たことの一つであり、杞憂に終わったことだからだ。

「しかし、二人とも明日の競技には出ないんだな。特に雫はバイアスロン部と言って居たような気がしたが」

ボード・バイアスロン部の活動は魔法でボードを浮かせて移動し射撃すると言う、ロアー・アンド・ガンナーに近い競技だ。

雫のプロフィールを見せてもらった時、最初は気にも止めて居なかったが、調べてみると警戒を要する情報だった。

「私は出たかったんだけど…。先輩が恥をかくから辞めておきなさいって……。ほのかは良いなあ」

「体型は魔法と関係ないんだし、達也さんの前で睨まないでよ……。恥ずかしいから」

…本当にそうだろうか？

雫は胸のサイズを比較されるからと受け取ったようだが、仮にも部の先輩がそんな事を気にするとは思えない。

むしろ…。

「なるほど、専門家の読みは凄いな。一科生側の情報交換が上手く言って無くて助かった」

「え？」

「お兄さまはロアー・アンド・ガンナーで必勝法を考案されたのよ。先輩はそれを推測されたのでしょうね」

だから出場しなくて正解だった。

驚く雫たちに深雪が微笑み、簡単な説明を付け加えた。

気にはなつたろうが、明日の競技に関わることもありそれ以上の踏み込みはお互いにしない。

それに辺りはすっかり更けて部活帰りというにはもう遅い。

俺達は気に成ったケーキを追加で持ち帰りで頼んでから帰ることになった。

まさか同じ時刻に、別の場所で深刻な対策会議が始まっているとも知らずに…。

●矜持とプライド

北陸は金沢に在る第三高校。

そこでは九校戦に関わる重要な問い合わせを確認する為、部活連を

中心に関心を抱く生徒で賑わっていた。

「まさかこんなに問い合わせた早く答えが返ってくるなんてね」

「なんでも設置委員会がどう対応するかとの会議するよりも早く提出されてたようよ」

「流石に専門家は仕事が早いな」

本当は質問状を提出するだけに留め、帰宅する予定であった。

だが、既に求めた質問状の答えが存在し、他校に回す処理の都合上、要約文を作成して送られて来ることになったからだ。

本来は数日後にどうするかの方針が伝えられ、相互のやり取りを考えば九校戦の直前になってもおおかしくない質問であったのだが…。

「それでどんな答えだったの？」

「そうそう。あの“トールラス・アンド・シルバー”がどう関わってくるか次第で考えることは一杯あるんだから」

「少し待て。直ぐに端末に回す」

責任者らしき三年生が、受け取ったデータを部活連の総合端末で解放した。

次いでディスプレイに移す処理を実行しながら読み上げるのだが…。

「要約すると工房としては関与しない。持ち込む物は規定に沿った物で、製品は事前に販売した物の一部だけ。技術格差の確認を求める場合は、前提付きで受け入れるというものだ」

一同が警戒して居たのはチーム“トールラス・アンド・シルバー”全体が、工房を上げてバックアップすることだ。

規定内のCADを使う限りは厳密には反則とは言えず、積極的な技術向上を図った時代には良くあったこととも言える。

「なーんだ。心配するほどじゃないのね」

それが一同の共通認識と言えた。

「でもそれならプロが関わるのも止めて欲しいけどな」

「それを言ったら僕も参加できないよ」

「集大成である十師族の俺が言うのもなんだが、研究所と密接な関わりのある魔法師の誰かがソレを言うのも妙な気がするしな」

こう言ってはなんだが、増えている一般の魔法師は除けば誰かしら紐付きの学生は多い。

ナンバーズばらば十師族だろうが百家に関わらず、多かれ少なかれ手厚いバックアップを受けているともいえた。

「そう言われたらどうしようもないわね。で、その前提条件って？」

「審問中だったら条件出せる状況でもないでしょうけど、問われる前の条件なら何があっても驚かないよ」

「大したことでは無いな。日常的に妹のCADを調整して居るから、制限する場合でも一年、あるいは一年女子は認めて欲しいそうだ」

その条件を聞いた時、周囲の殆どは拍子抜けした。

てつきり何かの技術利益を委員会に渡して、丁々発止の取引をしているかと思っただくらいだ。

「なーんだ。心配して損した」

「自分のパーソナルを相手に渡す様な物なのに、妹のを日常的にるのはシスコンなんじゃない？」

「そら仕方無いな。あんな美人で、しかもデータ調整し甲斐がある相手なら一日中でもやってられるさ」

ミスター・シルバー自体は二科生で、妹は新入生総代。

その大きな能力差や、外見情報を調べて居た事もあり概ね納得行つたという表情だった。

事実、忙しい者を中心に退出する者が出ている。

残っている者は、片付けの処理が残っていたり責任者や…そして一人の研究者だ。

「ジョージ：まだ何かあるのジョージ？」

「…本当にそうなのか？ …ならば何故事前に？ 万が一にも言う自体を避けたいとしたら、九校戦で…」

「どうしたの吉祥寺くん？」

ぶつぶつと考え事を国する吉祥寺・真紅郎に一条・将輝ほか仲の良い者が話しかける。

だが反応は相変わらずで、ちつとも離席しようとしなない。

「帰るぞジョージ。考え事なら明日でも…」

「将輝。もしかしたら、今年はミラージ・バットを捨てないといけないかもしれない」

「ハア!？」

本人としては考えをまとめるために、推論の一つを何気なく口に出したつもりなのだろう。

だが時と場所が悪かった。

「ソレってどう言うことよ！　せっかくメンバーの選定だって始まったところだったってのに」

「ミラージ・バットは九校戦でも点数の高い競技よ。いくら相手に凄い技術者が居ても降りるわけにはいかないわ」

「それに凄いと云っても、調整技術の効率や経験だけだ。CAD自体に差は無いし、魔法師と作戦でなんとでもできる！」

周囲は全員が九校戦に関わるメンバーで、それも遅い時間まで居残って情報を確認するほど熱心な物ばかり。

これで非難が殺到しなければ嘘だろう。

真紅郎が作戦を練る担当者の一人でもあり、その意見が重要視されるとしても…だ。

「ジョージ、お前の推論を否定はしない。だが、説明はしてくるんだろう?」

「もちろんさ。ただし、現時点では小さな情報の積み重ねで確証が無いと言う事。そこは理解して欲しいし、埋める情報を持って居たら提供して欲しい」

将輝が促すと真紅郎は部活連の長に目を向けた。

「みんな座れ」

「思う事があっても、頭からの否定はするなよ」

「りよ、りようかいです…みんな座ろ」

部活連会頭だか牽引役の上級生だかの言葉で、一同は黙って…というには程遠いが着席し始める。

「技術で上回るには二つの方法がある。一つは卓越した技で圧倒する事、もう一つは全く新しい技術・概念だ」

「みんなが警戒して居るのは前者として、ジョージが推測したのは後

者と言うことか？」

ここは使いの長い将輝が女房役を務めて話相手を受け持つ。

その方が話し易いし、案をまとめ易くもある。

「でもなんでミラージ・バットなんだ？　新しい技術や概念と言っても未成立だったモノは色々あるだろ」

「着目したキツカケは詰問される前からスタンスを現していたこと。技術立証で枠制限されたとしても女子だけは、その枠を確保したかったことなだけど…」

「…女子専用の競技で、かつ点数が高いミラージ・バット向きに絞ったのは判るけど」

「…今さら何の技術って言われてもねえ」

口を挟むと言うよりは、漏れ出たというレベルで声が漏れる。

それも先ほどと同じ内容で、固定概念から抜けだせないとも言えた。

真紅郎はそれには構わず、息を吸って結論を出す勇気を徐々に振り絞る。

何しろ考え付いた自分ですら、信じられないからだ。

「他の競技と違いミラージ・バットには、一つだけで段違いに点数を向上できる魔法があるんだよ。僕も考えたことはあるけど、有力な実験の失敗を知ってたから消したアイデアなだけど…」

シルバーが隠した布石に、真紅郎が気が付けたのは簡単だ。

同じ研究者の目線として、出来たら面白いだろうなと想像していたに過ぎない。

重力魔法のコードを発見した彼ならば、実際に研究するかは別にして考慮まではしておかしくない魔法だった。

「勿体ぶるなよジョージ。その魔法は何なんだ？　二校のエースを止められるほどなんだろうな？」

「あ、そっか。あそこにはミラージ・バットの申し子とまで言われた子が居るもんね」

「その子を簡単に止められるレベルの魔法なら、警戒を要するのは判るけど…」

「話にならないよ。だって勝負に成らないからね」

長くなりそうだったので将輝がせかすと、他の生徒達も口々に乗って来る。

真紅郎は溜息を突くと、至高のモラトリウムを捨てて結論を出す事にした。

「飛行魔法さ。空を飛んで頭上を行かれたら、点数を競うところじゃない」

「ひ、飛行魔法…!?!」

今度は一同が絶句する番だ。

言葉を出す事すら躊躇われて、言われた単語を認識できないで知る。

かろうじて発現できたのは、常日頃から付き合いが長く、他愛ない言葉も覚えていた将輝だけだ。

「待て、有力な実験が失敗したからジョージも諦めていたと言ってたよな？ 飛行魔法の実験なら幾つか知ってるが…」

「もしかしてイギリスの事後干渉でキャンセルするやつ？ あれは干渉力の減少どころか増大したって…」

絞り出された言葉に、誰かが情報を捕捉する。

「おそらくその失敗理由を悟ったんだろ？ ね。そして逆方向のアップローチを決めた。彼の得意技を考えれば、そっちの方が早いってのもあるけど」

「というグラム・デモリッション？ それって効率悪くない？」

「いえ、この場合は違うでしょうね。…ループ・キャストのことでしょう」

ループ・キャスト。

その単語に対し、周囲の生徒は押し黙る。

小さな魔法式を連続で発動する補助式であり、数ある難門技術の中でもトールラス・アンド・シルバーが完成させた有名な技術だ。

「大型魔法に効率化を図る大型装置で、無理やり行使する方法は限界とも言われているのは知ってたけど…」

既存の問題では、最大100までの処理が出来る超一流魔法師が5

0%シエイプ出来る機械で、20の魔法を10までシエイプしても10段階が限界というもの。

「そう、ループ・キャスト。ここまでくれば僕にもトリニティが失敗した理由も判る。事後干渉は処理のキャンセルが出来て居ないんだ」

2段階目に前の10が残っている内に、20の内の10を消してしまえば10になる。3段階目の30であれば20になる…はずだった。

途中で処理し続ける限り、限界は来ないのではないか？ そう考えたのがトリニティ・カレツジの失敗ということらしい。

実際には魔法式は消えておらず、更に10に+10し続けて・20・30…。

いや、増大したと言うことだからシエイプも失敗して10に+20ずつかもしれない。

「シルバーの干渉力はともかく、処理数は二科生並ということだから小さい方を繰り返すべきと考えるのは当然かもね」

二科生の処理能力が最大30として、20%程度の小型機械では10の小形魔法を8にシエイプするのが限界としても…。

一度目の魔法が三回目までに終るのであれば、十分に処理し続けられる。

小さい魔法では構築速度が遅くなるという欠点を、ループ・キャストの繰り返しで補えるから問題も無いということだ。

理論派の先輩達が納得し始めたことで、一同は改めて騒然となった。

「ど、どうするんだよ！ ミラージュ・バットを全部一位取られたらたまらねえぞ」

「争ってギリ負けるのと、ダントツに圧勝されるんじゃ士気にも関わらわよ！」

答えに成らない答えの中で、ある程度の打開性を備えたモノはどちらかと言えば後ろ向きだった。

「なあ。そこまで判ってるなら、先に吉祥寺が飛行魔法を発表するってのはどうだ？ 間にあわないにしても牽制くらいは…」

「止めてってば！ 確かに無理やりなら出来なくもないけど、殆どあいつの理論で組みあげたら、盗んだと思われるじゃないかっ！」

どちらかと言えば諦め気味だった真紅郎が、ここに来て顔を真っ赤にして激怒した。

アイデアを予想して作戦に推論を立てるのは三校の参謀として当然だが、研究ドロボウには成れない。

当然と言えば当然の言葉に、一同は再び顔を見合わせる。

「ジョージを盗人にするくらいなら、頭を下げて飛行魔法をコピーさせてもらった方がマシだよ。さっきの条件だと事前に発表…いや、CADだけなのか？」

「魔法の方はなんとも書いて無いな。それだけに安心できるような、CADだけに指定してあるのが逆に怪しい様な？」

「コピーさせてもらえばなんともなるけど、勝負の前に頭を下げるのはおかしくないか？ それならミラージ・バットを捨てた方が…」「だからミラージ・バットを捨てようって提案だったのね…。りよーかい」

ここに来て、ようやく一同は真紅郎の考えに追いついた。

それは袋小路にも思えたし、先に辿りついた彼が打開案を閃く可能性があり、時間はまだあるのがせめてもの救いだ。

「どうするべきだと思う？」

「まず本当かの確認かな。事前の根回しが怪しい、一年女子の指定が怪しいくらいじゃなんとも。せめてもう一つあれば確定だけど」

現段階では推測だけ、本当だとしても理論だけかもしれない。

勘違いなら笑い話で済むし、本当だとしても理論だけなら対策は来年まで良い。

そんな希望を、粉々に打ち砕く情報が投げ出された。

「…ビンゴ」

「え？ 何か知ってるんですか先輩」

長くて言い難い難い名前の三年女子が、ポツリと呟いた。

僅か一言が、不思議と染み渡るのは誰もが聞きたくないと思ってるからかもしれない。

「これは独り言なのだけど…。私は父の仕事を手伝うことが偶に在るのよね。そこで聞いた他愛のない話を思い出したわ」

「そういえば株や土地の売買で、小遣いだけじゃなくて専用のCADも自分で買ったとか言っていましたっけ」

その先輩は、体重を軽減する魔法が得意で当然ミラージ・バットの選手でもあった。

それだけに冗談を言っっては居ないと思われる。

「トールス・アンド・シルバーが新しい場所に引っ越す。しかもその規模が工場の効率化にしては大き過ぎると言う事で、もしかして支社化するって邪推も出たのよ。主に私だけだ」

買い取った土地の物件は優良ではあったが、サイズの問題で大型工場よりもオフィス・工房向きには違いないなかった。

あちらとしても確認した権利者の一人だったはずで、先輩の方も今回の話がなければ忘れていたらしい。

「だから私は思わずこう尋ねたわけ『もし上場するならば是非に売ってください。実はファンなのです』と。ああ…もしかして本当に発売されたら、全力で買い走るべきなのかしら」

「…先輩。それってインサイダーじゃないですか、ヤダー」
笑うに笑えない生臭い話に、後輩達は苦笑する。

もちろん、事態の深刻さを受け止めている連中は絶句を継続するしかなかった。

「助かりました。これで確定ですね。今後を考えないと」

「何のことかしら？ 私が守秘義務を漏らす筈がないから、勝手に吉祥君が確信を持っただけでしょ？」

九校戦でお披露目するからこそ、事前に色々な布石を打っておいた。

そう考えれば怪しいどころの話では無い。

株価は当然値上がりするだろうし、支社としての格も相当に上昇するだろう。子会社レベルから親会社を支える外郭企業まで行く可能性すらある（大企業と呼ぶには魔法関連はニッチだが）。

「どうします？ 他の魔法もある可能性を考えると、洒落になりませ

んよ」

「落ち付け。『先生』がいつも言っておられるだろう。自分の…自分達の使える智慧と技を総動員して、それでも駄目だとしても、諦めるより先にすることがあるとな」

「あの酔っ払いにしごかれたのを感謝する時があるとは思いませんでした」

腕の良いコーチを雇うのはどの学校でもやっているが…。

最近、三校は腕利きの実戦派魔法師を雇っていた。

別件でその地方に居る間だけという約束であったが、それでも腕利きだけに実力も経験も段違いだ。

叩き込まれたのはただ一つ。最後まで全力であがくこと。

「御礼にとびつきりの幸運を祈るとして…まずは魔法登録も事前登録をお願いしよう」

「無理なら俺達だけミラーズ・バットを避けるか、他所にもこの話題を持ちかけるかってところかな？」

「理事や他の部活連にも飛行魔法を臭わせるのはアリかもな。少なくとも四校辺りは食いついてくる筈だ」

先輩達が具体的な方針を話し始めた所で、下級生達は口を閉ざした。

途中から交渉事的话题に突入しており、付いて行けないのもあるだろうが…。

とはいえ点数調整による共闘を持ちかけようとはせず、あくまで実力で勝とうというのが三校精神であろう。

「その路線で行こう。吉祥寺、すまんが理論と仮データを頼む。理事に見せるにしろ説得力が違うからな」

「…仮組みだけなら構いませんが、念の為に一高行きの許可をお願いします」

少し考えた後で、真紅郎は一つだけ条件を付けた。

先輩達は信用しているが、話を持ちかけた他所の学校や、検証する為に持ち込んだ研究所が発表してしまう可能性はある。

彼らから情報をさかのぼれば、発信元が彼であることは誰にでも判

るだろう。

ならば大事に成る前に伝えに行くのが、真紅郎としての矜持でありプライドである。

「結局、奴に頭を下げるのか？ 仕方無い、俺も付き合ってやる」

「将輝…。これは僕の気持ちの問題なんだけどね。でもその気持ちは嬉しいよ」

「なら二人で行って来い！ 代わりに泥は俺が被ってやる」

部活連の会頭は将輝と真紅郎の肩を叩いて、その場を締めくくった。

明晰なる智慧は、地上の昴が如く

●見えない弾丸

「私がロアーでえ本当に良いんですかあ？」

ロアー・アンド・ガンナーの会場で、選手の一人が不安を訴え掛けて来た。

この競技は一チームずつの場合と競争しながらの場合の二パターンあるが、競争に成ってしまったことも不安材料なのだろう。

とはいえ競争パターンの方がありがたかったので、ここは宥めておくでしょう。

「直線でもおカーブでもおスピードも出ませんでしたしい…」

「構いませんよ。最初は遅れている方が都合良いくらいです」

この選手は能力傾向は平均的な方で、二科生の中では高い方なのだが一科生には遥かに及ばない。

要するに典型的な器用貧乏であり、今回の競技には魔法能力の方は向いて居ないのだ。

あくまで単独の魔法能力に関しては。だが。

「重要なのはロアーとガンナーの相性です。先輩はどんな状況でも安定して力が出せるタイプですのでピツタリですからね」

この先輩はノンビリしている性格で、あまり焦らないタイプ。練習時に何度かアクシデントがあっても、一番落ち着いていることもあって選んだ。

何しろ初回は勝利ではなく、目的が少し違う。

「それにこの競技は速度もですが、的を射抜く方で挽回できますからね。初回はこっちのお披露目が重要です」

「そうよ。私の方が処理力に少し不安あるから、落ちついて行ける方が助かるの」

ガンナーを頼んだのは、構築速度が早い壬生先輩だ。

今回は的を射抜くだけなので、強度や持続時間は関係ないのでガンナーに適した能力と言える。

発動：は一応大丈夫として、命中させることに失敗したとしても連

射で補うのも早いからフォローし易い。

「さーやもそう言うなら良いんだけどお。今回はお願いねえ」

「ええー！ 司波くんへの借りを返したいし頑張らせてもらおうわ」

「別に貸したつもりはありませんけどね」

実際のところ、俺としては毎回収支の範囲で行動して居る。

むしろ利用したという噂は間違いないと思うくらいだ。遠慮する事は無いのと思うのだが、まあ良しとしよう。

「俺が参加するステイブルチェースの開始はまだ先ですが、会場が遠いので途中から居なくなりますが大丈夫ですよ？」

「はーいい。問題ありませんよお」

「こっちは作戦通りに行くから、気にしないで大丈夫よ」

俺に不安があるとすれば別の試合に参加する上に、双方とも時間が掛る競技で相談に乗れないことくらいだ。

場合によっては渡している『虎の子の魔法』も予備で良いくらいだが、無理があるから切り替えるという指示のタイミングを見て居られない。

この辺りは市原先輩の冷静なデータ管理や、七草会長の眼に頼るほかあるまい。

試合が始まり、滑り出しの加速ゾーンに入った段階で俺は移動の準備を始めた。

「二科生の連中で遅れてるぜ。まっ当然か」

「でもカーブとかこっちより危なげなかったし、安定した選手選んでるんじゃない？」

「というと射撃重視か？」

昨日にあった試合なら、おそらくはもつと二科生を侮蔑した目で見た感想が多かったのだろう。

だが、耳に入ってきて来る声の幾つかは、状況を冷静に観察して居るものもある。

もちろん選手層だからライバルを油断なく見ているだけで、一般観客席の一科生は別の視点もあるのだろうが…。

それらの声が悲鳴に変わったのは、一科生に遅れて射撃ゾーンに

入った頃だ。

「全弾命中!? 安定したボードとはいえ二科生が?」

まずは当て易い場所に一か所、次いで徐々に難度の高い場所に幾つか。

点数の高いのは基本的に、迂闊に撃つと相手の的を射抜いたり、急カーブや高速帯の中で撃たねばならない場所にある。

「嘘っ!」一科生でも命中率の高い明智さんが幾つか外したのにな?」

明智選手は高い能力に加えて、持ち前の射撃能力で高難度も当てていたが、それでも全弾は無理だった。

狙撃魔法の使い手ならば当てられる難しい的に、普通のタイプが移動しながら・相手の的を撃たずにというのはそれだけ難しいのだ。

今日からは一科生側も腕利きやホープを最初から当てて来ているが、今のところは作戦が当たったようであらうで安心できる。

騎乗射撃に慣れている狩猟部の明智選手であのくらいの点数ならば、的を射抜く勝負に限定すれば今日は圧勝出来るだろう。

「つーか、今の弾見えたか?」

「出が凄く速い魔法なんじゃない? それともまさか…」

「それこそまさかだろ。二科生が『不可視の弾丸』インジブル・フリットを、ただでさえ焦る水上移動中に使えるわきやねーだろ」

これがこの競技の面白い所だ。
壬生先輩が普通に使用する場合、高難度の魔法を戦闘中に使用できない。

せいぜいが演武している時くらいで、他の魔法と併用したり、移動しながらの魔法使用は無理だ。

だが今回は移動に関するコントロールを、全てもう一人の先輩が安定重視で担当している。

魔法自体にとある隠しデータが含まれているので、気が付くことができればシェイプできるの…。

特化型のCADも玄人用の命中補助ではなく、初心者用の処理の補助機能を拡張した物を使っているので撃つだけならなんとかなる。

他の生徒はどうやら本当の仕掛けに気が付いていないようだ…。

「ねえ達也くん。他に理由があるんじゃない？ ロアー・アンド・ガンナーは外れた弾にペナルティは無い。だから連射に気が付かれない様に工夫するとは聞いて居たけど…」

「流石に会長の眼なら気が付きますか」

七草会長のマルチスコープは、いわゆる視野移動系魔法『魔法の眼』ウイザード・アイを簡略発動できるといふものだ。

さすがにCADを使わないと特殊な視野魔法を重ねて夜目などではできないが、離れた数か所を次々に見ると言うのには向いている。

「いくら『不可視の弾丸』インジブル・ブリットの連射だからといってあの命中率は異常よ」「余波も少ない様だしエリア系型や射線型には見えない…ですか？」
あれらは相手の的を射抜く欠点もありますしね」

そもそも誤射の危険があるので一チームだけがやるならともかく、複数のチームが同時にやる場合はエリア型も射線型も禁止ではある。爆裂を得意とする三校のプリンスがこの手の競技に関わらないと聞くのは、そのせいもあるだろう。

もう問題無いなど判断し、俺は荷物を抱えて立ち上がった。

「焦らさないでっばっ」

「会長の眼なら、二周目以降も見て居れば気が付くと思いますが、あれは散弾型に改良したんですよ」

手をばたばたさせて抗議して居た会長の手が止まり、キョトンとした顔を見せる。

こういう仕草は可愛いと思うので、いつもの悪女というか小悪魔スタイルは控えればよいのにと思わなくもない。

「改良？ でもあれっただでさえ容量も多いし処理も複雑だし、この手の競技に持ち込むのも難しいって聞いたけど？」

「公開データの中には身内にしか判らないフェイクも混ざって居るんですよ。研究者が良くやる手です」

実の所、カーディナル・ジョージこと吉祥寺・真紅郎以外に使い手が少ないのもその辺が理由だ。

元もと重力を発生させるといふのは使い勝手が悪いが、フェイクデータで容量や処理が複雑化して居れば使わなくて当たり前だ。

先ほど一科生の誰かが二科生には無理だと言ったが、この辺りの複雑さを解決すればそうでもない。

壬生先輩も最初は使うだけで精一杯と言っていたが、軽くしてからは文句も言わなくなった。

「それでは時間ですので、後はお任せします」

「あちらは難しいと聞いて居ますが、点数差が離されない様にお願ひしますね」

もう話は終わったとばかりに、俺は歩き出した。

目線を市原先輩に滑らせると、諒解したとばかりに会長の手を取って説明をしてくれる。

ことさらに頑張れというのではなく、現実的に点数を離されるなど言うフオローはロマンこそ感じないが非常にありがたいものだった。

●不動の壁

「アレはなんなのよも、もー!」

そのころ、部活連側（一科生サイド）の陣営は混乱して居た。

特化した選手が組めると言っても、それはこちらも同じだと本気で挑んだ筈なのに…。

二科生相手にと言われることを覚悟した割りには、点数差が離れて居なかつた。

「ボーリングじゃあるまいし、全目標皆中のボーナスなんて初めて見たよ」

「一か所ごとなら割りと見るんだけどな」

話題は二科生が全ての的を命中させたことだった。

それも一科生の的に当てることなく、最小限の範囲でやってるらしい。

「もう直ぐ一周を終えて帰って来るけど、何か伝える?」

「今のところ勝ってる。慌てるなどだけ伝えろ!」

生徒会側（二科生サイド）が作戦が当たって良い雰囲気なのに対し、こちらは勝って当然だったとあって焦りが生まれていた。

有利に進行して居るはずなのに、ちよつとしたミスがある度に点差が減っていくと言うのはそういうことだ。

「それじゃあ点数成り、取り変えてるの的を見たら驚くわよ。あの子たち」

更に的を設置する調整側が成れない競技ともあって、一周ごとにピットイン時間を設けて的を設置し直している。

逆に言えば選手も点数を見る時間が取れる為、迂闊な説明は致命的だ。

上手い説明は無いが、何も説明しないのも問題…。

その状況を救ったのは、この場に居ない責任者だった。

『うろたえるな！』

力強い響きがその場を支配する。

通信越しであるというのに、思念さえ伝えたかのようにだった。

『生徒会側は今後とも全弾命中という仮定で作戦を組み直せば良い。できるな？』

「そうか、ローアー・アンド・ガンナーは到着時間でも大きな点数が入る。高難度ゾーンで無理に留まらなければ…」

「みつともない所をお見せしました、会頭」

あれほど慌てていた面々が、十文字会頭の一言で落ち着きを取り戻す。

敵にすれば恐ろしいが、味方にすればこれほど頼もしい人物は居ない。

もしかしたら一報を入れた直後は驚いたかもしれないが、少なくとも画面では一切その様子は見られない。

的確に可能なことだけをやれと要請し、最小限の介入で事をすませってしまった。

『今の試合はこれで良いとして…。正体は判るか、関本？』

「おそらくは、いや間違いなく『不可視の弾丸』^{インジブルブリット}だと思う」

部活連側に付いたブレーンのうち、一番理論的なことに詳しい関本・勲へ十文字会頭が尋ねた。

よどみなく答えを見せて下級生からは流石と言う言葉が漏れるが、長く付き合った者には悔しさが隠せないで居る。

「問題は、そこから何をしているかが検討付かないことかな。何かこ

の競技の攻略法があるとしたか思えないんだが」

「攻略法を思いつくだけでも凄いけど、それを隠す為だけに『不可視の弾丸』インジブル・ブリット っていうのも凄いわよね」

「敵はシルバー、専門分野なら凄くて当たり前だろう。残りも油断しなければ勝てる」

既に任せた事なので、任せる…とは口にしなかった。

その場に居るメンバーでやれると知っているからこそ、十文字会頭は任せただ。

期待に応えるべく、一科生側も動き始めていた。

「ひとまず、相手チームはスピードを捨てて命中ボーナス狙いだと伝えてくれ。範囲魔法なら反則勝ちだ…くらいの冗談を添えてな」

実のところ、監督役の教師が確認して居るので範囲魔法であるはずがない。

スペースの問題で同時進行か、一チームずつか議論はあったがそれも予選前の事とあって、混同が許される筈がない以上、生徒会側も弁えているだろう。

「そうしておくわ。落ち付いて先行すれば良いって伝えておくわね」

とはいえ一年生をリラックスさせる為の冗談なので、それで十分なのだ。

「作戦は思いつくだけではなく、その先が肝心か。勉強に成ったよ」

「魔王技術に一科生も二科生も無いってことは確か…かな。ぼやぼやしてると、二科生にエンジニア枠を奪われかねない…かも」

その会話を聞いていた一科生の一人が、思わずこんな風に口にした。

「それを言われると痛いな。選手と違って実地で試せる分だけだし、平河さんの言う通り油断しないでおくか」

「少なくともウチは技術面が弱いと言われてたしね。気を付けるとしましよう」

気が弱いのか本人としては恐る恐る口にしたつもりなのだろうが、周囲は茶化してリラックスさせるつもりだと思っただようだ。

そう受け取ったのは、きつと当人達こそが気休めを欲して居たのか

もしれない。

そして、冗談交じりのアドバイスを受け取った選手の方は…。

「いつ『不可視の弾丸』を解析したの!? ふやー。ムキに成ってアレを使わなくて正解だったかも」

明智・G・英美ことエイミイは薄い胸を撫でおろしていた。

赤毛と言うよりはルビーゴルドの髪を、解れても居ないのに編み直す。

緊張感を維持する為にそうしないとやって居られなかったからだ。

「明智さん、次はスピード重視だつて。少し揺れるけど大丈夫?」

「問題無いですよ。私の方もパーフェクト狙いは止めとこつかなーと思つてたところです。あははっ」

真面目な話、急場で組んだペアにしては上手くやれているというレベル。

パーフェクト狙いなどやっても出来ないとは思っていたが、二科生の方がパーフェクトを実行して居るといふのはそれなりにシヨックではあつた。

しかし、ここで笑い飛ばす事のできる前向きさこそが、エイミイの強さなのかもしれない。

こうしてローア・アンド・ガンナーの勝敗は、一科生側が速度勝負に出たことで巻き返したかに見えた…。

● 索敵偵察と威力偵察

「しかしよお達也。あつちは良かったのか?」

「出方が読めている上に、メンバー構成が予想通りだったからな」

実の所、『不可視の弾丸』を使用したのは驚かす為のデモンストレーションではない。

相手の作戦を、速度勝負のみに誘導する為だ。

ローア・アンド・ガンナーはタイムから点数を引いて形状する競技なので、速度で点数を補う事が出来る。

ということは、こちらが全弾命中するのであれば、速度勝負に出るのは当然の事だ。

「二組目からは『不可視の弾丸』を使わずに速度勝負に付き合うんだつ

け？」

「ああ。一科生側は昨日と違って一番優秀なペアを最初に持つて来たからな。後は点数が下がるだけだ」

「こちらはお披露目の為に安定型で遅めの先輩を配置して、速度で負けることを前提に心理的な圧迫を加えることを前提にしている。」

「速度で負けることは判って居るのでこちらに動揺は無く、相手は勝って居ても命中率の差を見て動揺する可能性が高い。」

「そしてこちらは二組目からが本番と言う訳だ。」

「相手が点数を下げてでも速度を上げるなら、こちらも命中率を確保して速度を上げるまでだ」

『インジブル・ブリット不可視の弾丸』を使わなければ、無理して安定した状態で連射する必要も無い。

「こちらでも速度を出せる選手を配置して、相手よりも遥かに高い命中率の状態で（流石に全弾命中は難しいと思われる）先行とは言わずとも徐々に追いあげて行けば良いのだ。」

「まあ勝てるならそれで良いさ。しかし、あつちもこつちも軍事訓練みたいだな」

「ロアー・アンド・ガンナーが海兵の上陸射撃訓練を元にして居て、ステイブル・チエース・クロスカントリーは陸軍の行軍偵察訓練だからな」

「幹比古のSBが動いている間は暇な事もあり、レオが頻繁に言葉を投げて来る。」

「それでも雑談ではなく全体的に関心のあるのを選んでるのは、レオなりに気を使つての事なのだろう。」

「この競技は主に二パターンあって、同じコースを少数のチームで巡るモノと、一定人数以上のチームが課題をこなす為に手分けするモノの二つある」

「今回は後者で、課題をクリアして行くんだっけか」

「本当ならば前者の方がこの競技を訓練としてする場合が多いのだが、今回は監視・設置に当たる負担の問題で後者に成っている。」

「専門のスタッフでもないのに、一々やっていられないという教師の」

言い分も判らないこともないが。

今回に関しては、俺達にとって良い面と悪い面の二つがあった。良い面は幹比古の偵察能力とレオの防御能力を組み合わせられること。悪い面は攻撃を大幅に禁止されてはいるが対戦形式になっていることだ。

人数はもう少し多いし攻撃手段は限られているが、ある意味モノリス・コードの前哨戦になってしまっている。

「自由設定したキングを護衛して指定ポイントを回ること……だな。キングを攻撃して良いのはアタッカーだけだから部活連側を見かけても注意しろよ」

「わーってるって。とつとつ、そろそろ良いみたいだな」

今回は三つの役目を割り振られている。

一つ目は、指定ポイントを回ると大きな点数の入るキング。

二つ目は、キングを攻撃でき、殺傷威力が低いならば幅広い攻撃手段を許可されているアタッカー。

三つ目は、指定ポイントを広く把握でき相手チームの役目も確認出来るスパイ。

指定ポイントを回りさえすれば一人一点入るので、チーム全員が生き残ればかなりの点数が入る。

だが、キングは半数以上の点数と互角のポイントを叩き出せるので、自チームから落とされ相手にだけ残しておくと厄介だ。

相手チームへの攻撃自体は禁止されていないが、アタッカーを除けば大幅に制限されている（教師が危険を監視・介入し易くする為）。

いかにキングを温存するか、あるいは相手のアタッカーを早めに仕留めるかがカギに成るだろう。

「最初の指定ポイント付近には、何種類かのトラップが仕掛けてられてたよ。地精の報告だから落とし穴とかも間違いないと思う」

「幹比古、マーカー用のトラップはどれだ？そこを避けながら魔法は俺が、物理障壁はレオが排除しつつ向かうとしよう」

今回のルール上、一番問題なのはこちらの選手を落とすマーカートラップだ。

地雷代わりの範囲型や、攻撃魔法代わりの光線型がある。

「んじや、トラップは任せたわね。誰でもいから早く来ないかなあ」
相手チームの魔法にやられなくとも、倒された扱いに成ってしまうので最も警戒せねばならない。

逆にソレさえ気を付ければ、『トラップに関しては』それほどの脅威は感じなかった。

「相手のキングを落とせない以上は、できれば来ない方がありがたいんだがな」

「判ってるって。でも対戦して良い以上は愉しまないと損でしょ。試してみないとモノリス・コードも危いんだし」

エリカはノリノリで攻撃する予定だが、十文字会頭の防御力は脅威だ。

砂鉄に寄る防御も脅威だが、それをなんとかしても『フアランクス』を展開されるだけなのでどうしようもない。

「相手が来たら対応は任せるよ。じゃあ移動しようか」
できれば先行してゴールし、スコアに色を付けて戦わずに済ませておきたい物だ。

こちらを監視して居る『誰かさん』を極力無視ししながら、俺達は移動を開始した。

ここで視点は切り替わる。

達也たちからかなり離れた場所に、何者かが潜んで居た。

「動き出したか。…しっかし重要なのは判るけど、こんな地味な作業はしたくないんだけどなあ」

注目を浴び難い・印象が高くないと言う特性を持つ里見・スバルを、生徒会側の監視に回して居た。

視覚を強化する魔法で遠距離から監視して居たスバルは、加速魔法を利用して部活連側に合流することにした。

最初の接近を気が付かれていなかったのに、移動用の魔法で気が付かれたとも知らずに急いで駆け戻る。

「戻りました。森の一部を迂回してますが、偵察用の魔法でもあるの

か一気に走り抜けるみたいですよ」

「ふむ。動き出すとかなり迷いが無いな」

スバルの方向を受け、指定ポイントに向けて移動しながら罫を探して居た部活連サイドも足を止める。

「森崎。確かブランチシユ戦では連中と行動を共にして居たな。何か判るか？」

「確かSB……。精霊を召喚して偵察させていたと記憶して居ます」

この競技には人数が投入出来る事もあり、部活連サイドはスバルの他に森崎もメンバーに加えている。

森崎としては借りがあるので黙っていても良かったが、達也からは口止めどころか本戦のアピールになると言われていたので問われれば説明する事にして居た。

「トラップに引つかからない偵察兵って、この競技の為に在るようなもんですね……」

「MAP構成によつてはモノリス・コードもだなこいつは相当に厄介だぞ」

沢木や辰巳のような猛者にとって、魔法での勝負はそれほど気にしては居ない。

だが自分達が苦勞して居るトラップ探知を、簡単に済ませてしまう精霊魔法には脅威を覚えすには居られない。

「明日のモノリス・コードまでに判つただけでも良しとしましょう」

「そうだな。なんでこんな頼もしい奴と戦わなくちゃならないんだという気もするけど、本戦で楽になったと思つておくか」

これが点数の高いモノリス・コードでの勝負であつたらと思えば、事前に判つただけでも良しとするべきだろう。

そして、達也の思惑通りではあるが九校戦本戦を考えれば、第一高校の戦力が増えたことを喜べる寛容さが彼らにはあつた。

「会頭、我々はどうしましょうか。連中の動きの速さを考えれば、トラップを確実に無効化出来る自信があればこそですが」

「そこはこちらも習うとして、手を分ける」

十文字の会頭は、個々の能力の高さに任せて複数班での同時攻略を

行うと言うものであった。

「という、複数の指定ポイントを同時にクリアするんですかい？
点数が低くなっちゃう可能性もありやすが」

「相手と同じ戦術では遅れを取るだけだ」

指定ポイントの中には、到着した全員に点数が入る物も、その後
消えてしまう物もある可能性があった。

当然ながらキングを含めた全員が多く場所を巡る方が、総合的な
点数は高くなる可能性がある。

だが到着と同時に消えてしまうポイントが多ければ、相手に渡さな
い分だけ班を分けた部活連サイドが有利になるだろう。

個々の能力を考えれば、生徒会側には取れない戦術だけに上手く行
けば有利になるはずだ。

「ただし、生徒会側はこちらの分断を望んでいる可能性もあるから、推
す班と退く班は決めておくがな」

「会頭の班はオフエンス、こちらはディフェンスと言う訳ですね。了
解しました」

十文字は頷きながら、キングのマークを沢木に渡す。

確実に護るならば十文字が持ったまま逃げるのが安全だが、彼が攻
め手に回るならば持つて居ない方が万が一の防御に繋がる。

部活連側が分散する事を誘導して居る可能性も考慮した以上は、多
重の罠に嵌められることも想定しておくべきなのだ。

相手を舐めない、本気で掛るといふことはそういうこと。

前日にはまるでやらなかった生徒会側所属の二科生を調べる事も
含めて、彼らは本気でこの競技に挑んで居たのである。

こうして二日目の競技は、思考誘導に嵌ったロアー・アンド・ガン
ナーと、逆襲を開始したステイブル・チエース・クロスカントリー
でクツキリと別れることになった。

人克己して路を進む

● シークレット・ゲーム

指定ポイントに辿りついた俺達は、交代で課題をクリアして鍵を開ける。

教師考えた問題は様々な能力を要求されるが、基本的なことだけにクリア出来ないモノは存在しない。

一科生は持ち前の能力の高さで複数人が分担し、二科生は特化した者が交代することで時間を掛けずに突破できるだろう。

「ねえ、こっちを着けてる覗き屋を退治しに行っていない?」

「ルールの全容が把握できるまでは止めてくれ。この端末に一通り書いているはずだから…」

エリカは干渉力や構築力には縁遠いからか、盛んに先鋭攻撃を提案して来る。

紙面でもらった基本ルールで十分だろうと言うのだが、俺としては提案した教師の意地悪い顔が頭から離れない。

何しろ指定ポイントには幾つかルールがあり、一度通ると消えてしまふ場所などの重要な事項を、紙面では無く口頭で補足して来るぐらいいだ。

何かしら性質の悪い仕掛けが施されていると覆った方が良かった。

「反応が来たっ。オープン・セサミだ」

「速く読んでよ、あたしは暇なんだし」

「判ったから待て。たったの三ページだ……」

簡単だが対処が面倒だな。

僅か三ページのルールを垣間見ながら、俺は簡単に要約する事にした。

「二ページ分は共通事項。目次的な物と指定ポイントの全ルール。最後のはこのポイントの詳細だな」

「目次って、ただし書きとこのトランプ模様のやつよね。どんなルールがあるの?」

この後の影響を考えれば、このルール把握こそが重要だろう。流石にエリカも茶化しはせず俺の解説を待つて居る。

「指定ポイントはトランプに合わせて十三か所。二番から十盤までの数列は、基本的に回ると点数が上がる類だ」

序盤の二・三と中盤の六といった、単独型は一点。

四・五や七・八などペア物で最初は一点だが、両方回ると点数が高くなり二点以上に変わるといふ物だ。

十はコンプリートすると二十点もあるが、消えてしまうポイントがあるので実質的に全員が得点するのは難しいと言える。

「残りの絵札は全てが高得点だが、どれも癖があるモノばかりだ」

到着が早ければ早いほど点数が高く、遅いと点数が低くなるJ。

その逆で、一定人数が居ないと換算されないQ。

誰かがポイントに到着すると消滅するK。

最後に、行動不能に追い込んだ選手が多いと点数が高くなるA。

「ようするに出来るだけ回れってことよね。逆に回れなくしても良いんだけど」

エリカは最後の条件に目を輝かせながら、考えることを放棄した。

決して頭が悪いわけでは無いのに割り切って考えるのは、自分が切り込み役だと自任して居るからだろう。

戦いだけでなく、話題に関しても積極的に意見を振って行くようだ。

だが、いずれも一か所だけで考えると簡単に見えるが、他のポイントを回ることや相手陣営を考えれば一筋縄でいかない。

自陣営だけがKを回ろうとしたり早めにJを回ろうと分散すると、

QやAで痛い目を見る。

かといって全員が集団で行動すると、KやJを攻略するのはかなり難しいだろう（しかもAでまとめてなぎ倒される可能性もある）。

「判り易いっちゃ判り易いが、ペア物は一人でもOKなのと分担OKのどっちなんだろうな？」

「回った者にだけ点数が入る。他のルール……例えば先着ボーナスがある少数チーム戦だと、通信機を手に入れた班だけ分担が可能にな

る」

当然と言えば当然の問いに今回のルールでは、と前置きを置いて説明した。

今回は監視役の教師が安全性を確保する為、最初に聞かされた配役を追加する必要性があったので、他のルールは採用されてないのだそうだ。

もつとも点数を加算するキングを守り、多様な攻撃手段が緩和されるアタッカーを保持する事を考えたら、これ以上は複雑過ぎるのだが…。

「サバイバル物みたいでそっちの方が面白そうじゃない。回りは全て敵って事ね」

「物騒なことを言うなよ。そういう場合は難しいコースを戦闘無しで回るんだよ。きつと」

残念なことに戦闘が無いと言えないのがこの競技だ。

基本的に軍事訓練の応用であった為、様々なルールを用いて参加者に緊張を強いている。

「恐ろしいことにその場合は毎回運営が決めるらしい。まあ基本は罠や遅延魔法だらけのコースを巡るだけだがな」

「どおりで魔法が使えなくなる奴が出るはずだぜ。ヒヤつとした瞬間が続くんじゃな」

「驚いて魔法を使えなくなるような感性があんたにあるとは思えないけどね」

エリカはレオを茶化しているが、軍はともかく学校側としては魔法が使えなくなるのは大問題だ。

腕の良い魔法師を育てるためとはいえ、一人の精鋭を作る為にその何倍もリタイヤを作りかねない。

しかも出来あがった競技者が、必ずしも軍の精鋭になってくれるわけでもないのです、ステイブル・チェース・クロススカントリーがお蔵入りになっている理由も判る気がする。

●勘違い

「あまり時間を掛けてもしょうがないし、もう行かない？」

「近くまでは精霊で視てるから、そこまでは行っても良いとは思うよ」
エリカが促すと幹比古が怪しい場所を指差して歩きだそうとする。
それを止めたのは、俺が後回しにして居るのを覚えていた司先輩だ。

「基本的に賛成なんだが、少し待ってくれ。千葉がさつき言っていたが、着けている『あいつ』をどうするんだ？」

「そういうえばそうだったわね。付け回されて報告されるのも面倒だし、やっちゃおうか」

俺は少し考えた後、論点を整理してそれを止めさせることにした。

チェイサーをくつつけて移動するのはどうかと思うが、里見選手の特性を考えると正解では無い気がしたからだ。

「逃げられた揚句に起用方法を変えられると困る。暫くは放置して確実に仕留められる機会を待つ方が良い」

「起用方法？」

俺は頷いて里見選手の特性と誤解を説明する。

「部活連側は誤解しているのかもしれないが、里見選手の特性は一人でポイントを回られる方が脅威に成る」

あるいは判って居て、こちらの情報を正確に把握したいということだろうか？

それは思い上がりだろうと自戒するが、後から考えればその可能性も捨てるべきではなかった。

「彼女の能力は確かに認識し難く、パッと近寄られても遅い事もある。だが注意して居れば把握できない訳じゃないからな」

こちらが邪魔出来ない状態で、一人で全てのポイントを確認して報告されれば相手陣営だけ情報が手に入ることに成りかねない。

それでは、ただでさえ尖った方向に絞られている二科生側の勝利は危いだろう。

「それって尾行されてる方がマシだから放っておけてこと？」

「こつちが辿ったポイントの位置を知られちまうぜ？」

「僕は賛成。やってるのが大事と思えない…。くらいにはされてしまいかもしれないけど、一科生と言うだけで十分脅威だもの忘れるは

「さすがないから対処は考えておけるよ」

消極的な案だが、絵札に当たるポイントの情報を把握されて待ち受けられたらどうしようもない。

Aで待ち伏せされ、あるいはJとKを可能な限り早期発見されると点数勝負で勝ち目が無くなるからだ。

結局は幹比古の意見もあり、俺の意見が通ることになった。

今回のルールを考えれば、俺の提案の方は間違っっては居なかった。

だが、この時の俺は次々と作戦を成功させ里見選手の特性を理解して、良い気になっていたのかもしれない。

●前哨戦

俺たちは順調にポイントを攻略していた。

練習用とも言える二番・三番の単独ポイントだけでなく、四番と五番のペアを揃える。

「拍子抜けするくらいに簡単に抜けられたな」

「だが安心はできません。ここまで接触が無かったということは、部活連側も速度を上げているはずだ」

里見選手がこちらに張り付いているので、部活連側は接触を避けながらポイントの位置を探る事も出来る。

攻略速度は精霊を使える分だけこちらが早いと信じたいが、効率よく行けているのはあちらもだろう。

それを考えれば、里見選手を早々に排除すべきなのだが流石に迂闊な位置に移動してはくれない。

「なんとなく何処に潜んでるか判るだけにムカ付くわね」

「本人の特性と希望が必ずしも一致する訳じゃないからな。深雪の話ではむしろ目立つような振る舞いが多かったらしい」

任意にコントロールできず、常時発動して居るとしたらどうだろうか？

他人から無視されることは慣れていないと苦痛だ。

俺は深雪が居るから他の人間が居なくともでも構わないが、誰も俺を必要しなければ愉快だとは思えない。

無論、その他大勢として扱われるタイプの認識阻害と、居ることす

ら認識されないタイプの認識阻害では意味が異なるが…。

どちらにせよ、感情の無い俺でもあまり楽しい光景には思えない。普通の精神性を持つ里見選手が愉快であろうとは思えなかった。

特性がそちらの方向であろうとも、身の入らない訓練に意味は薄い。

「やはり偵察兵として里見選手を使うのは間違いだな。本人の希望通り移動系魔法を活かしてメリハリの効いた作戦を立てた方が無難だ」
「今は相手の選手のことなんて考えなくっても良いんだってばー！」

本当の決戦は明日のモノリス・コードであり、このステイブル・チエース・クロスカントリーは様子見なのは誰の目からも明らかだ。そのことで俺はどこか気を抜いてしまっていたのだろう。

戦いに来たエリカにとつて、俺が浮かれてどうでも良いことを考えているように見えるのも仕方のないことかもしれない。

だが、油断していたのだろう。

暫く進んだ所で、広域確認を任せて居た司先輩が立ち止まる。

「どうしました？」

「…信じられん。居るはずの無い奴が居る。いや、本人以外に考えようがないがな」

言われて仕方無く、可能な限りポイントの側以外では極力使わない様にしていた眼を起動する。

結果から見れば、見抜かれない為に手控えて居たことがこの事態を招いた。

いや、理論的に考えてありないと過信して居たから使わなかったのだが、それが裏目に出たのだ。

「まさか…あれは十文字会頭なのか…」

俺は一瞬、幻覚魔法を疑った。

眼が相手を把握レベルで確認可能な距離に、反応があったのはまだ良い。

だが遠目ギリギリに見える範囲で、磁性を帯びさせた砂鉄を展開し、待ちうけて居ることを教える必要を感じなかった。

待ち伏せするだけならば魔法を使わずに森にでも隠れ、奇襲を掛け

れば良いのだ。

あるいはポイントの近くで時間を稼ぐために、率先して向かってくると言うならば疑いもなかっただろう。

しかし、今回のルールがある状態で、キングであるべき十文字会頭が正面からやって来る必要など何処にも無い。

真っ先に幻覚であることを疑うのが間違っでは居ないだろう。

「いや、俺から見ても本人にしか見えねえぜ？」

「…凄いな。レオはその距離でハッキリ見えるんだ」

「あんたつてば耐久力だけでなく視力まで人間止めてるワケ？」

レオ達の会話が他人事のように聞こえる。

（どういうことだ？　ここで勝負を仕掛けることに何の意味がある…）

「ねえ達也くん、どうする？　キングが…一人なら今のうちに倒しちゃおう？」

必死で考えを巡らせるが、この時の俺には答えが出ない。

（どう計算してもここで戦うことにメリットなどない。十文字会頭は何を考えて居るんだ…）

「ねえ、達也くんってばー！」

しよせん俺の計算など、ステイブル・チエース・クロスカントリーという競技、単体での計算。

それと今回の九校戦予選全体での、いや九校戦本戦での総合勝利に向けた計算ではまるで意味が異なるのだから当然と言えば当然だ。

思えば十文字会頭は、この予選を通して最初から俺たち二科生の意思力を問うて来たのだろう。

そのことに気が付くのが遅れたことで、恐るべき状況に追い込まれていたのだ。

圧倒的な暴力で眼を覚まされたのは、その時だ。

「起きろ、達也！」

「っ!？」

「どうしちゃったのさ。これからどう対応するのか決めないと」

ボディーブローが俺の懐に突き刺さっていた。

どうやら俺が考え込んで居るのを、茫然としていると勘違いしたレオが手荒い目覚ましをくれたらしい。

(まったく、計算して居ると言わなかった俺も悪いが、いきなりこのレベルの鉄拳とはやってくれる)

そう思いながらも、俺は考えをシンプルに切り換えることにした。

「なにと、殴られて笑うなんて気持ち悪いわね」

「笑っていたか？ いや、単に計算中の考えがレオのお陰でまとまっただけだ」

「うえ、考えてたのか？ そいつは済まなかった。てつきり驚き過ぎたのかと思っただぜ」

俺は思わず顔をやりながら、シンプルになった思考で考えをまとめ直す。

余計なことは、もつと情報が集まった段階で後でまとめて考えればいい。

今はこの場を確実に処理するだけだ。

ここで出た障害はこの場で排除する必要は無い。

そんな蛮勇をする前に、一時的に切り抜けて確実な対処をすべきだ。

「コースを変える。幹比古、すまんが先に行って五分以内に幻覚を構築してくれ。十分後にそこに逃げ込んでやり過ぎす」

「構わないけど、大丈夫？」

俺は頷きながら、キングである幹比古を逃がした。

今回の競技での成功は、幹比古の精霊や古式魔法に掛っており万が一にも倒されるわけにもいかない。

真っ先に逃がすと同時に、十分後には逃げられるという保証を立てておくことにした。

「十文字会頭の防壁は正直対処が思いつかん。情報戦でなんとかする他あるまい」

「そういうことじゃないんだけど…。まあエリカとレオが居るなら大丈夫かな」

「そーそー。さっさと行った行った」

どうやら幹比古の心配は戦力ダウンの方だったらしい。

エリカが手を振ってさっさと行けと言うと、難しい顔をして懐に手をやった。

取り出したのは遅延魔法が掛っていると思わしき折り紙折って無い用紙が一枚、折ってる方は良く見るとヤッコ人形の様だ。

「僕の幻覚を残して行くから、できれば当てられない様になんとかしておいて。十分後…八分後には何とかしておくよ」

「無理を言つてすまん。司先輩、毘である可能性もあるので幹比古をお願いします」

「辰巳たちを相手にだと怪しいが、直前で逃げるくらいは何とかするさ」

俺達は頷きあつて分担を決め、即座に行動を始めた。

この場に俺たち三人が残り、幹比古を守って司先輩ほか残る全員が付きそう。

当然ながらこちらの役目は足止めである。

『…司波、お前の覚悟見せてもらおうぞ』

遠くに居る十文字会頭の言葉が、嫌にハッキリと…聞こえた。

将は道を輝き照らす

●ダイラタンシー流体

「あの魔法の限界が知りたい。まずはレオが近づいて、エリカが離れた位置から頼む」

「つてことは、俺はそれに合わせて軽く戻るんだな？ いいぜ囿になつてやるよ」

レオは俺の提案に頷くと、近くの樹に対して硬化魔法を設定して居る。

最初は何の意味か判らなかつたが、戻る為に意味があると考えれば推測するのはそう難しくは無い。

「それはあたしの方はちよつとだけ全力を出しちやおつかな。あの女も会頭には勝ち越して無いみたいだし」

「構わないが油断するな。全力で行つて通じないくらいに考えた方が良い」

殺すなよ…などとは言わない。

その気で行つて当然のように防がれると思うべきだ。

アタッカーであるエリカには常時、教師が見張つていて殺人にならない様に注意して居るはず。それを考えれば手加減を考える必要も無いだろう。

第一、こちらにそんな余裕があるとも限らないのだから。

「そんじゃあ、いくぜえー！」

レオが硬化させた布を使い、いつぞやの即席手裏剣を作り出した。ある程度の速度で接近しながら、勢いを付けて投げつける。

『来るが良い、それが通用すると思うならな』

ゾブリ。

砂鉄の塊が変形し、容易く弾いて反らせてしまう。

砂であるがゆえに勢いすら殺され、その辺に落ちそうになったところを……。

「シユバルツシルト、ファイアー！」

レオが硬化魔法で設定していた手元の位置まで引き戻す。

これが鉄板ならこうも行かないが、布製で軽いだけに容易く回収できた。

「おうら、もういつちよー！」

『ふむ。通用しないと理解できないと思えんが……。まあ、そう来るか』

「……っ」

レオが突進を続ける中で、エリカが逆方向から声も無く走り出す。その速度はレオの比では無く、瞬時に十数mの距離を詰める。

「確かに渡辺並の早さだな。だがそれも通用せんのは判る筈だ」

「じゃ、加速するけど…着いてこれるかしら、ね！」

速ではなく早さ。

高速ではあるが、恐るべきは到着距離の自由自在さを使いこなす力量だ。

エリカは小太刀型の武装一体型CADを二本使い分け、加速と急加速を使いこなした。

一度目の着地は周囲が思うよりも手前で、そこから二段階目のステップは更に短い。

だがその速度は先ほどの非ではなく、さらなる三回目、四段階目のステップでU字状に回り込んだ。

「それっつー！」

『分身…それも四つ身か。体術だけでソレとは…訂正しよう。渡辺以上の早さだ。しかも速さに関しては及びもしない』

恐ろしいことにエリカは魔法を使った巡航速度を利用して、体術を掛けた。

左右に移動するステップにメリハリを付け、忍者漫画のように分身して見せる。

これを可能とする種は、あの小太刀型のCADだ。

あの中に減速や態勢のコントロールは入って居ない。

右手は加速の魔法だけ、左手は加重系統の衝撃緩和によって体に負担が掛らない為の魔法しか入って居ない。

これを使いこなせば、エンピツを高速で振る様に分身してみせる

ことが可能ではある。

だが、理念では可能であっても、使いこなせるかはまた別の話。

「硬つたと思ったらありやしない！」

エリカは布手裏剣の攻撃に合わせ、接近して斬撃を浴びせることに成功した。

だが、本体より別れた防壁の一部に阻まれ、1ダメージすら入って居ない。

「でも、この対応速度ならいける！」

『分身を減らして速度と精度を上げたか。確かにこれなら追いつけないが…』

驚かす為は無理やり作った四分身ではなく、二つ、動きのバリエーションが格段に増える。

その速度コントロールの前に、砂の防壁は置き去りにされ、護るために本体の一部から更に動員されて行った。

(さっきの斬撃も防がれはしたが、テロリストの射撃に比べて歪んだ部分が多かったな。おおよその分量が見えて来た)

あの魔法は一見、無敵の防壁に見える。

変幻自在で高速で飛来する弾丸には硬化し、緩やかな格闘戦には歪んで衝撃を逃がしてしまう無敵の防壁。

砂鉄に磁性を帯びさせて領域をコントロールする為、術式解体で解除したとしてもその場に防壁が残ってしまう。

さらに磁性を帯びて居るといふ現象自体が、数種の攻撃を緩和するからだ。

だがしかし、その効果はダイラタンシー流体を保つ粉粒体であればこそ。

固形はないからと自由自在に変形させることができるが、前後左右に拡がり過ぎて一定量の密度を保てなくなれば意味がなさなくなる。

薄く拡がった砂の幕など、防壁の意味もなければバリケードにもならない。

「レオ、足場！ もらったああ！」

体に負担が掛らない状態にして、高速で移動しつづける。

その速度に砂の防壁は完全に置き去りにされ、布手裏剣を足場にショートジャンプを掛けて真つ向唐竹割りに振り降ろした。

「…千葉。もしやお前は渡辺が同じことをしてないと思ったのか？」
数枚の防壁を飛び越えて肉薄するエリカに対し、十文字会頭はあくまで冷静だった。

『来い。ジャイアント・ローブ』

十文字会頭の言葉と同時に、分散されていた砂鉄がコート状に集積する。

展開速度もだが、視認していないことを考えれば、これは予め入力して居たコマンドと思われた。

「嘘っ…音声…入力？」

『できない理屈はあるまい？ ちよど良い研究対象がそこに居たのである』

予定して居た形状に、自動制御された砂鉄が砂鉄製の甲冑を作る。

ザン、と硬い音を立ててエリカの小太刀が弾かれた。

『それと、参考にしたのは一つだけでは無い。叩け、ジャイアント・ローブ』

十文字会頭がキーワードを呟くと、砂鉄製の甲冑から一部分が巨大な腕を作りあげた。

それは会頭が動かす手をそのままトレースして、先ほどよりも素早くエリカを追い掛け始める。

「ちっ、今度は相対位置のコントロールもかよ！ 一度引くぞー！」

「なんてインチキ！ これでフアランクスさえ出して無いなんて！」

布手裏剣の後退コマンドを遅めにして、エリカが捕まるのを待った後でレオは一気に引き戻した。

『西城、千葉。お前達は魔法師の戦いを知らなさ過ぎる。もう…遅い！』

「足元から!? あれで全部じゃ…」

サラサラとゆっくり移動して居た砂鉄が、ザーアと急速に移動・集結。

魔法の恐ろしさとは、思い付く使い方次第で自在に変化させられる

ことに在る。

もちろん魔法のルールの範囲内に限られるが、このくらいの分離コントロールはお手の物なのだろう。

(…それにしてもコントロールが上手過ぎる。複数の防壁を操るフアランクスの十文字家の妙と言うやつだな)

流石にここで、俺も介入することにした。

下手にやると二人の魔法を邪魔するだけだったが、このままでは組み付かれるだけだろう。

一方で会頭の方は、砂鉄による甲冑をまだ解除して居ない事もあり、走れないだろうと言うのは見て取れた。

「もう良い！ 撤退するぞ!!」

「悔しいけど、仕方ねえな。アーガトラム！」

「ちよっ!!? どこ触ってんのよ!」

俺がグラム・デモリッションで追いつがる方の砂鉄を撃つと、レオは布を丸めた形状に変形させてエリカを強引にホールドした。

相対位置の関係で、モロにレオの腕にエリカの体重以上の重量が掛るが、気にせずに走り出す。

『思い切りの良い判断だ。しかし、間にあわんど?』

「んなことたあ判ってるよ! 引き寄せろ、シユバルツシルト、ヌル!」

即座に再構築される磁性魔法に対し、レオは最初に位置を定めた硬化魔法を起動する。

樹に定めた初期位置にレオは引きずられるように加速した。

もちろん、その速度は加速魔法には及ばない。

だが、砂鉄の一部にしか過ぎない程度の塊の力では、捕まえておくことができないのは確かだ。

レオが自身でも走るたびに、少しずつ付き離されて行った。

『良し! まず合格でしょう。だが、ここからが本番だ!』

「付き合ってもらえるか、逃げっゾ!」

「だから、おーろーせー!」

レオは回収したエリカを抱えて、多い急ぎで全力疾走。

よくもまあ、人一人を抱えて走れる物だとは思いますが、俺も悠長に見ては居られない。

二人の援護をしながら移動を開始し、予定の区画へ向けて走り始めた。

●迷いの森

「お疲れ様。成果はどうだった？」

「砂鉄による防壁は限界を把握した。どの程度で寸断すれば、元の強度を保てないかは判る」

まあ、問題はあの防壁を突破できるというだけだ。

フアランクスは片鱗すら見て居ないし、十文字会頭は別にBS魔法師ではない。

あれら反則級の魔法以外に、普通の魔法が使えなかったら笑い話でしかあるまい。

「明日のモノリス・コードは十中八九、市街戦か河川ステージだ。今の内に幻覚のパターンを試してくれ」

今日、森林ステージを使った。

更に、二科生が圧倒的に不利と判っている平原ステージもありえない。

「そうだね…。みんなを逃がす為の幻影が通用してるし、調子に乗らない限りは何とかかなると思う」

俺達が逃げた方向には、先ほどまでなかったはずの林があった。

そこに達した瞬間、周囲を覆う木々が追加され姿を覆い隠している。

それで無事に振り切れたのだが、やはり防壁の強度やコントロールと幻覚を見抜く力は関係ない。

今日の所は幻覚魔法をフルに使って、十文字会頭を足止めするに限るだろう。

「…水を使ったトラップは明日使いたい。霧の発生以外で頼めるか？」

「土剋水？ 流石に古式魔法の知識もあるんだね。了解、方向感覚を迷わせることにするよ」

河川ステージが理想的だが、市街地ステージでも水がある場所はあるだろう。

砂鉄など水を浴びせてしまえば、重量の問題でコントロールし難くなる。

もちろん一部ならば別だろうが、少量ならば分断できるのは試した通りだ。

「勘違いじゃなければ、精神魔法も防げるんじゃないか？」

「付け加えるなら、あからさまに使うと相子ウォールで術式解体も防げるはずだ。頭が痛い限りだ。…どうだ？」

「問題無いよ。僕の魔法の中には音や視覚を組み合わせるものもあるからね」

幹比古は少し考えた後、周囲を見渡して似たような木々を指差す。

「石兵八陣を使おう。同じ様な特徴の樹や岩を使って、場所を誤解させるんだ」

「お、それって俺でも知ってるぜ。恰好良い名前だよなあ」

「ばか！ 今そんな状況じゃないでしょう」

レオがポムつと手を打って感心するが、顔を赤らめた表情のエリカがツツコミを入れる。

よほど、さつき抱えられて移動したのが恥ずかしかつたらしい（後で、お姫様だつこが問題だと聞いたが）。

「ということは、太陽が見えない場所が良いのか。上手く誘導できるものか？」

「その辺も含めて術師の腕の見せどころですよ」

司先輩が眩しそうに見上げると、幹比古は太陽の位置や影の方向も利用するのだと口にした。

場合によっては、一度見破らせておいて、その向こうの通路にも一枚の幻覚を用意することもあるのだという。

「…せっかくだし、着けて来てる人を利用させてもらおうか。十文字会頭ともども足止めして一気に突き放す」

「あー。アレね。覗き魔さんには良い気味だわ」

「おけーおつけー。勝ち難い相手に、まともに戦う必要無いもんなつ。

足止めして間に…あ…?」

俺が丁度良い場所を探しながらいどうしようとか口にする、悪巧みに乗ってきたエリカはともかく、レオが奇妙な顔をした。

思いついたと言うか、ついさっきまで忘れて居たという風情だ。

「あによ、つまらないこと言ったらブツわよ? 凄いアイデアなら、ほっぺにキスの一つもしてあげるけど」

「ツッコミ入れてから言うなよ。ってーか、そんな安いこと言つて後悔すんなよ? スッゲー情報なんだからよ」

エリカがジト目でツッコミというか、エルボーをレオに叩き込む。

もはやそれは、肘鉄と言うレベルでは無い。

だが、レオは気にした様子も無く、快活に笑っていた。

「どんな情報なんだ? それ次第では少し作戦を変えるが」

「アイデアアツーか、気がついたただけだな。苦戦してた揚句に逃げ出したから、忘れてた」

レオはポリポリと頭を書きながら、核心であり、重要な情報をようやく口にした。

「さつき接近した時に気が付いたんだけどよ、十文字会頭はキングじゃないぜ? エリカと同じアタッカーだった」

「えー!?!」

結局、この日の勝負を決めたのはレオの証言だった。

幻覚魔法で十文字会頭と里見選手を足止めをしている間に、部活連側のキングは沢木先輩だと探し当て全員で強襲。

空気甲冑は強固であったものの、十文字会頭に比べれば対処し易い相手だった。

後はひたすらに速度勝負に切り換え、逃げ回りながら点数を稼いで勝利をもぎ取ったのである。

●プレゼント交換

「ミキに続いて今度はレオが持ってた! なつとくが、いーかなーい!」

学校に戻ってきた所で、エリカの不満が爆発した。

約束通りレオの頬にキスをしたからもあるのだろうが、そんなに嫌

ならなければ良かったのと思わなくもない。

まあ、そこはレオが遠慮したらこそ、逆にムキになったのもあるのだろう。

とはいえそんな雰囲気もここまでだ。

みな緊張を取り戻し、ローア・アンド・ガンナーの勝負や、明日の報告を受ける。

俺はCADの調整もあるので防護服をさっさと着変えたが、何人かはそのまま書類を取りに向かった。

「こちらは予定通りですが、そちらは健闘したようですね。十文字君の厳しい顔が見られそうです」

「殆ど逃げ回ってましたから、向こうは向こうで実質的な勝利だと喧伝して居そうですがね。：明日のステージは？」

出迎えてくれた市原先輩と言葉を交わしながら、必要なことを尋ねておいた。

河川ステージなのか、市街地ステージなのかで作戦が変わって来るからだ。

「丁度良い廃屋が見つかったので、市街地ステージだそうですよ。ただ、検討をする前に司波くんは応接室をお願いします」

「応接室ですか？ 生徒会室ではなく」

市原先輩は頷いて、こちらの会場で使ったCADのチェックを装いながら耳元で軽く囁いた。

俺はCADからストレージを外しながら、同じく耳元で囁き返す。

「三校の一条君と吉祥寺君が尋ねて来ています。司波君に重要な話があるそうですよ」

「プリンスとカーディナル・ジョージが？」

こと更に秘密にする案件とも思われませんが、先に知った市原先輩には思い当たるフシがあるらしい。

俺はストレージを懐に入れて、そのまま応接室に向かった。

とはいえ、ブランシユの件が終わった以上は、俺と市原先輩の間で秘密にせねばならない情報などそうはない。

直ぐに思いつかなかったのは、まさかという気持ちもあるが、でき

ればそうなって欲しく無い悪い予測だからだろう。

応接室では七草会長が主に話し込んでおり、プリンスこと一条・将輝は適当に話しながら深雪の方にチラホラと目を向けて居る。

(そういえば、深雪や亜矢子の相手の候補に挙がったこともあったな) 戦闘力のある魔法師であることから、プリンスは四葉でも注目されていた。

だが、とり重要だったのは、深雪や亜矢子が当主になった時の婿候補の一人であることだ。

十師族であるだけでなく、同年代の強力な魔法師でありリーダーシップを取れる男子で、妹が居ることから家を出る選択肢もあると有力候補であった筈…。

だからと言う訳ではないが、違和感その物は無い。

前から並べて考えたことはあるからだが…。

大切な妹の相手と考えると、少しモヤモヤした物を感じる。

感情が無い俺ではあるが、こと深雪に関しては例外なのでこういうこともあるだろう。

「達也くん、向こうも終わったのね？　こちらが第三高校の一条・将輝くんと吉祥寺・真紅郎くんよ」

七草会長は、紹介するまでもないかな？　と冗談めかしてウイंकする。

会長の性格を知っている俺は適当に受け流したが、真面目な一条達は戸惑ったようだ。

「挨拶はお互いに不要として、まずはジョージの話を聞いてもらいたい」
「そうしてくれると助かる。お互いに予定が詰まっているみたいだからな」

ワザワザ金沢から来ている一条たちも、本来であれば九校戦の準備を開始した頃だ。

彼らがメイン・スタッフに選ばれるのは確実であり、予選やっているこちらほどでもないが忙しい筈である。

おそらくは、十師族の用事で来たついでに寄ったのだろうか…。

だが俺の楽観的観測は他愛なく崩れ去ることになる。

「協会経由の情報で、君の研究が漏れた。主に僕が調子に乗って推測を喋ったせいだけど、一応は謝っておこうと思ってるね」

「…何、それこそお互い様だ」

動揺しないで居られたのは、感情が無いお陰だろう。

今日は十文字会頭の強襲でタップリ驚いていたことも、関係して居るかもしれない。

「研究畑に居ると良くあることだけど…、うーん。これ以上は言い訳になるな。僕なりにまとめたデータを進呈しておくよ」

研究用のカーディナル・ジョージこと吉祥寺・真紅郎は大容量ストレージを取り出して、テーブルの上に置く。

七草会長は何のことだろうと戸惑い、事情を知っている深雪は口元を押さえて驚いていた。

「そうか。…せっかく金沢から来てくれたのに何も持たせないのは気が引けるな。持って行ってくれ」

壬生先輩に後でお詫びをすることにして、彼女のストレージを吉祥寺の前に置いた。

「それは？ 何をジョージに渡したんだ？」

「散弾型に改良した『不可視の弾丸』だ。処理容量の方も軽くしてある」

「っ!? やってくれる、やってくれるね…」

自分の研究データのコア部分を暴いただけでなく、改良したことに吉祥寺は顔色を変える。

とはいえ既に公開されているデータを渡すのと、本来は秘密で無ければならない研究を暴かれたのでは重みが異なる。

第一ラウンドは俺の負けだろう。

余裕ぶって紳士らしく振る舞いに来た男へ、ささやかな返礼をしたに過ぎない。

「この決着は九校戦で」

「望む所だ」

俺達は短く言葉を交わし、睨みあいながら涼しい表情を作ることに

務めた。

そこで新しい話題を切り出したのは、一条の方だ。

「二人が納得しているのは良いのだが、こっちの会頭から要請があるんだが、良いか？」

「何を言いたいかは想像が付く。…九校戦が始まるまでに飛行魔法を公開するでしょう」

今度こそ七草会長も驚きの表情を浮かべた。

この魔法に関しては極力秘密にしており、生徒会や風紀の中でも少数にしか教えて無いのだから。

（しかし、とんだことになったな。…完全版の公開はまだ先としても、完成させたことは届けた方が良いな）

その後も色々あったが、大事は存在しなかった。

パーソナルデータごと渡してしまった壬生先輩に埋め合わせを約束し、その日はなんとか過ぎ去ったのである。

年輪は古きと比べ、幹を太くする

●飛行魔法

「深雪、すまないがいつもどおり転送しておいてくれ」

早朝だというのにシルバー充ての端末へメールが二通。それも間髪いれずに。

同じ場所からの連絡と、添えられた書類か何かだろう。

この時間に送ってくるとは意外に早かったな……。というのが正直な感想だ。

「僭越ながらお兄様。中身を確認されなのですか？」

「おおよその内容は予想できるからな。魔法協会からだろう？」

疑問系に疑問系で返すのは良くないが、この場合は断定できるので問題あるまい。

深雪はおずおずと頷いて、転送ボタンを押していつも通りの処理を行った。

あとは生徒会室なりで、関係者以外は居ない時に確認すれば良いだろう。

「どのような内容なのでしょう？」

「以前の段階で、飛行魔法に関して牛山主任と結論は出しておいたからね。他の研究者が気配を見せた時用に公開準備はしておいたんだ」

エリカ達をラボに連れて行った時、飛行魔法の雛型は出来ていた。

ブランシユとの戦いまでに姿勢制御を突貫工事で終わらせて、条件付きのロックを掛けて新魔法として魔法協会に提出しておいたのだ。

「新機軸の魔法なので危険性もあり、現段階では公開する予定はありません。しかしながら、特許の問題で貴方がただけには……というやつだな」

それなのに昨日までは公開しようと思わなかったのは、消費サイオンなどの問題が山積みだったからだ。

現段階ですら商品として出せないレベルであり、プロトタイプ領域を出て居ない。

FLTを追い出されて子会社化する時期に合わせて、直ぐに商品と

してラインナップに並べたかったというのもある。

「ロツクの解放条件はこちらから連絡を入れて、あちらの役員が複数名揃うこと。まさかこんなに朝早くから揃うとは思わなかったが……」
もちろん正規の登録手段ではないので、先に正式な公開を他の研究者にされたらアウトなのは同じだ。

だが俺としては研究成果としての先を争うよりも、商品としての第一を争いたかった。

少なくとも、まともに使えないモノを世に出して、勝手に実験されて事故と言うのは好みではない。

例え自己責任と言えど、トーラス・アンド・シルバーが公表するモノは、可能な限り万全な状態で送りだしたかったのだ。

「どんな魔法か臭わせておいた役員も居るし、もしかしたら三校の連中から聞いた者もいたのかもな。秘密を暴かれて悔しくないと言えば嘘になるが……」

感情が無いのだから悔しい筈は無い。

「悔しいと言う割りには、お兄様は楽しそうです」

楽しいとも思えないが、やり甲斐は感じていた。

「これまでは無関係の分野には先人は居ても、同じ分野でライバルは居なかったからな。楽しく見えるとしたらそのせいだろう」

これまではルール・キャストなど他者が諦めた分野で、自分が適正があるからと突き進むだけだった。

これからは、他者が自分を出し抜いて来るという前提のもとに切磋琢磨をせざるを得ないのだから。

「そう言う訳で、協会からのメールは一通が提出しておいた資料を見たと言う物。もう一通は正式に公開するのは何時にするか……という提出書類か何かだろうな」

「そうですわね……。他の方が既に公開に近い形で協会に飛行魔法を見せているなら、その旨の通知だけで構いませんもの」

送られてきた感想は、賛辞かもしれないし、もっと早く教えてくれるという苦情かもしれない。

だがそこに意味は無いし提出書類を正式に出すのは、牛山主任の方

で担当して居るサイオンの吸引スキーム関連が終ってからだろう。

それが完成すれば、安全弁としてのプログラムを付け加えての公式公開となる。

「…吉祥寺さんの飛行魔法は、お兄様の魔法と比べてどのようなものだったのですか？」

「俺の理論を予測したもので同じ課題で躓いていたな。だから姿勢制御や高速飛行を全てオミットして居た。どちらかといえば説得用だと思う」

カーディナル・ジョージが寄こしたのは加重魔法で作った天盤を動かすようなモノで、飛行と言うよりは既存の浮遊魔法を発展した形に近い。

俺の魔法がへりだとするならば、奴の魔法は気球と言う訳だ。

この辺りは奴の得意分野転というだけでなく、飛行魔法の可能性に気が付いて、第三者にループ・キャストを使えば飛行可能だと説明する為のものだろう。

どちらが良いと言う訳でもないし、俺の理論をそのまま予想して使っていることもあり、自分の魔法として処理しきれなかったのか余分な部分も多かった。

あえて言うならば、色々とおミットした分だけ余裕…。

例えば同意する対象を連れて飛ぶなどはやり易いかもしれない。後で暇を見つけて、二名程度で第三者を連れて飛ぶ魔法を作っても面白いらう。

「場合によっては今日のモノリス・コードが終わった後に飛んで貰うかもしれない。構わないか？」

「お兄様の為ならば喜んで！」

深雪の眩しい笑顔と共に、俺は第一高校へと足を向ける。

出がけに電話が鳴り響いていたが…、間違いなく小百合さんのお小言なので無視して登校することにした。

もし俺に落ち度があるとしたら、深雪用以外にも試作品を用意しておいたので、『深雪も』と言えばよかったというくらいだ。『キャプテン・シルバーとその一味』などと蔑み、FLTから追い出した小百合

さんに話す事は何も無い。

これも予想できた話だが、学校に着くや七草会長に呼び出された。「達也くん…。魔法協会だけでなく魔法大学からも問い合わせが来るんだけど…」

「ああ、おそらくは役員の母体の問題ですね。二足の草鞋を吐いている人でも居るんでしょう」

「そういう話を言ってるんじゃないと思うが…。真由美に聞いて私も驚いたぞ」

七草会長は渡辺委員長と二人して、色々と影響を話しあっていたようだ。

不安があるとしても十文字会頭ならば一蹴しそうな気がするが、部活連と生徒会で対決中なので話していかないのだろう。

「あれ、もしかして飛行魔法を公開する事にしたんですか？」

「なんであーちゃんまで知っているのに、私だけ知らなかったのかしら…」

中条先輩がきらきらした目で見上げて来ると、对象的に会長はどんな目とした目をこちらに向けて来る。

明らかにヒガミだが、放っておいてもロクなことにならないので捕捉しておいた」

「こういう秘密は出来るだけ広めない方が良いでしょう。中条先輩はたまたま五十里先輩達とFLTの見学に来てたんです」

「ということは歌音も知ってるのか。だとするなら良く保った方かな」

なんとというか、五十里先輩と千代田先輩はワンセットという認識なのか。

まあ、あの二人がプライベートで別行動している姿も思い浮かばないが…。

「じゃアリンちゃんはなんで知ってるのよ。やっぱり二人だけのヒ・ミ・ツ？」

「単純にコンペのメンバーに誘った時に、司波くんは魔法の完成に忙

しいと聞いただけです。あとはブランシユに対抗する時の言い訳用ですね」

「なるほど軍が緘口令を敷かなかったら、飛行魔法の実験データを奪いに来たので撃退した事にするつもりだったのか」

いつものように会長は市原先輩をからかおうとしたが、いつものように切り返された。

渡辺委員長はもう納得してスルーしてくれたが、収まりそうにな
い。

「納得がいかないわ！ 私だけのけものにしてズルイ〜」

「エリカみたいなスネ方をしないでください。…せっかくですので、このメンバーで飛んでみますか？」

仕方無いので俺はプロトタイプの飛行魔法用CADを取り出した。

まだまだ未完成で売り物にはならないが、生徒会メンバーならば問題なく運用できるだろう。

「良いんですか!?!」

「まだまだプロトタイプですが、基本的には完成して居ますからね。モノリス・コードが終ったらミラーズバットの試技というのも良いでしょう」

「あつ、それ良いわね〜。私も飛行魔法って興味あったのよね」

啼いたカラスがもう笑ったという言葉があるが、中条先輩が飛びついて来た後で七草会長も機嫌を直してくれたようだ。

対象的に機嫌を悪く下のが……。

「ちよつと待ってください。このメンバーということは、私もアレを着るんですか？」

「いいじゃない。リンちゃんはスタイルも良いんだし、達也くんに見てもらいなさいよ。私や摩利だって毎年着てるのよ」

珍しいと言うかいつも冷静な市原先輩がうろたえていた。

やはり知識系というイメージがあるからか、自分が動くことは想像して居なかったようだ。

「わ、私も恥ずかしいですけど…。飛行魔法ですよ、加重系統三大難関の一つ飛行魔法である！ みんなで一緒にがんばりましょう！」

「中条さんまで…」

新たな問題が発生しそうな気がするが、この場は何とか取り繕えたようだ。

今日のモノリス・コードは勝てるかどうか怪しいし、勝っても強引に行く可能性は大いにある。飛行魔法のお目見得で話題を流すのも良いかもしれない。

妙に静かな深雪の笑顔を見ながら、俺はこの場の問題を棚上げにすることに決めた。

●作戦会議

「幹比古、準備はどうだ？」

「問題無いよ。できれば給水塔があれば楽なんだけど」

授業が終わり、呪符の準備に余念がない幹比古の気配に教室の皆も声を掛け難いようだ。

放っておいては次の授業になってしまうので、作業が折り返しに入り、もっと良い物を用意するか…と悩み始めた辺りで俺は声を掛けた。

「その辺りは期待するしかないな。無ければ無いで、時間を掛けてで構わないからアレを頼む」

「水道水が止められていたらかなり時間は掛るかもしれないけどね。…流石に下水を使うのはどうかと思うから」

俺達は肩をすくめあった。

十文字会頭が使う砂鉄の防壁に対し、水攻めをする気だからだ。

温かい時期なので水を浴びせるのは作戦に入れても構わないと思うが、流石に下水を浴びせるのは気不味い。

「それよりもフランクスはどうするのさ？ 対処法も掴めてないんでしょ？」

「まあな。見るより先に逃げ出したので、ぶっつけ本番になるが…。基本は十文字会頭とは直接戦わない方が良いだろう」

見れてないというのは本当だが、視れてないかと言えば嘘ではある。

『精霊の眼』を使って発動した魔法を確認することはできた。

だがそれで判ったのは、どうしようもないという事実だけだ。

フアランクスをなんとかしようと思ったら、余ほど強烈な火力で全方位から押し包むか、それこそビルでもぶつけなければ倒せないだろう。

要するに殺傷レベルが定められたモノリス・コードでは、倒すのは不可能に近いと言い換えても良いだろう。

(しかし、押し包む…か。チャンスがあれば仕掛けて見るのも悪くはないが…。連携が面倒になるな)

ちよつとした対策を思いついたが、かなり前提条件が難しい。

まず確実に砂鉄の防壁を排除し、残ったソレから引き離さねばならない。

更に十文字会頭の意表を突き、会頭が何とかする前に…となると偶然でもない限りは狙って仕掛けるのは無理だろう。

このアイデアは、砂鉄防壁を剥がせたら検討するでしょう。

「でもよう、昨日使った様な幻覚は駄目なのか？」
「ばっかねえ。対策してるに決まってるでしょ」

「そうだな。最後の方は脱出して追いかけて来るペースが早かったから、あの場で色々とした可能性がある」

俺達に思惑がある様に、十文字会頭にも思惑がある筈だ。

少なくとも、俺達が色々やってくることを九校戦に向けての実戦練習くらいに考えていてもおかしくはない。

問題なのは、会頭は練習だからと手を抜くタイプではなく、実戦さながらにその場で出来ることにチャレンジするタイプだ。

「十文字会頭の得意分野は5W1Hを把握する事だからな。もう方位系の幻覚は通じないと思っただ方が良い」

「5W1Hって、何が何処で何をしたってやつか？」

「そうだね。フアランクスは様々な防壁を組み合わせる魔法って聞いているけど、常に全開で居るよりは、部分コントロールした方が消耗を抑えられると思う」

通常の防壁系魔法ならば誰でもできるから、フアランクスの使い手が用いる必要はないと考える者もいるだろう。

だがしかし、どんな攻撃もフアランクスで防御できると言う自身が
ある者が、普通の魔法を必要最低限だけ使用するとしたら脅威だ。

それは心の余裕であり、対する者の余裕の無さに繋がる。

攻める側は一方的に防がれることが判っており、会頭にとっては多
少出し抜かれても後追いで終える範囲であれば何とでも対処出来る
と言うことだ。

そして、見極める目を持っているということは、攻撃に転じた時に
も差は出易い。

そういう意味で普段は見掛け難い幻覚や術式解体は、丁度良い練習
相手だった可能性すらある。

そして、嫌な予感と言う物は往々にして当たるものだ。

放課後に行われた予選で、時間稼ぎに使った幻覚はアツサリと無効
化されたのである。

●モノリス・コード

ドン！ という鈍い音がして廃ビルの一 corner が揺らめいた。

「今の…」

「砂鉄の壁を一直線に延ばしたみたいだな。期待していたら大変だっ
た」

SBを介して仕掛けたのだが、包囲を誤魔化す為の幻覚を砂鉄で直
接触することで無力化されたらしい。

「さしずめ砂の波だが…」

「あれだとそう時間を掛けずにやって来そうだね」

「しっかたねえ。準備が整うまで俺らでなんとかすつか」

建物から漏れる砂粒を見ながらそう答えると、幹比古が渡した呪符
型のCADを、レオが完成した小通連を構える。

「幹比古。ビルの最上階にあるはずの給水塔はどうだった？」

「駄目。あるにはあったけど空だったよ。止められている上水道を遡
らないと」

俺はここで考えを切り替えた。

音波で三半規管を攻撃しようとしても、雷撃や風で攻撃しても砂鉄
の壁で防がれるだろう。

ならば幹比古に渡した呪符型CADでは有効打にはならない。

「幹比古が上水道を開けて霧を出すまでは、レオの言う通り俺達で粘る。給水塔が無いのは痛い、その分だけ水への考慮を外して居るだろう」

「了解。後は任せたよ」

考えてみれば十文字会頭だつて予測して居るはずだ。

自分が使っている魔法に過信して水に弱いと言うのを忘れているとも思えない。

逆に考えれば、水が容易に手に入らないこの状況で無理やり手に入れて、その上でもう一枚何かの策をぶつけることであろう。

問答無用で攻め立てて、それでようやくなんとか出来ると思うべきだ。

「それで良いとして、どうすんだ？」

「基本的には変わらないさ。攻めるなら残り二人だ。どっちかがモノリスを守って居てくれれば楽なんだけどな」

おそらく昨日の段階で十文字会頭が積極的に攻めて来たのは、今日は守りに徹するからだ。

モノリスの周囲に着た者は排除するだろうが、迂闊に動くとも思えない。

そう考えれば、先ほどの使い方は上手い手だろう。

（正面防御までではなく、そこからもう一步、…実際にはコウモリのソナー代わりということか）

術式解体の脅威など無視して、レーダー兼防壁として展開する訳だ。

これならば、護りに徹したまま、攻撃が出来る。

十文字会頭が防御しかしないと思っていると、砂を踏んだ瞬間に場所を悟られて攻撃されかねない。

「レオ、少しだけ予定を変更する。会頭が幹比古のSBを部分的に使えると想定して、相手のモノリスには近づかないでおく」

「少し警戒し過ぎな気もするけど、構わないぜ」

無効化でき無いモノとして警戒し、水をぶつけて鈍重化させた後で

攻めに入る。

後は会頭に攻撃を浴びせると見せつつ、実際にはモノリスに術式解
体を食らわせ、手の空いた幹比古がS Bでパスワードを読み取ればい
いだろう。

もちろん、倒しきれぬなら先にこっちに向かっているであろう二名
を倒しても良いのだが。

こうして第一高校九校戦予選は、最終戦へと突入する

クール・ド・リオン

●獅子は我が道を行く

相手のモノリスは護り易いが奇襲を掛け易いビルの中。

こちらのモノリスは護り難いが奇襲され難いコンビニの中

「まずは引き離して時間を稼ぐ」

俺たちのモノリスには簡単な幻覚を掛けて見つかりに難くしたので、討つて出ることも可能だ。

だが一科生と撃ち合っても馬鹿を見るだけだ。

ならば自分たちだけが全力を出せ、相手は万全を期せない状況で戦う方が良いだろう。

「確認するが壁を歩いた時の要領で、足元や天井を硬化しながら走れるか？」

「やってやれねえことはねえが、他は何も出来ねえぞ？」

俺はその答えを聞いて素早く作戦を立てた。

「不利になった状態で適当な廃屋に逃げ込む。その時に足元が悪い場所なら床を、上が怪しいなら天井を硬化させてくれ」

「はーん、足跡のトラップってわけだな。おーらい任せとけ」

要するに俺たちは普通に走れる道だが、相手にとっては注意が必要な道になる。

ただ魔法を撃ち合うだけなら不利だが、そういった場所なら形成は逆転するだろう。

「相手を誘いこめるかどうかが重要だから特に上下どちらとも限らん。そこにだけ注意してくれ」

レオが頷いたのを見て俺たちは移動を開始する。

モノリスには簡単な幻覚が掛けてあるので判断出来る時間を与えなければ大丈夫だろう。

幹比古と引き離す様に、ワザと姿を見せながら移動して行った。

(早速来たか。これは術式解体を警戒して居るな)

精霊の眼で探るとタイミングと種類の違う攻撃魔法が展開され始めた。

先行する沢木先輩が同時展開で範囲型の空気弾を幾つか、後方に居るもう一人がタイミングを変えて初速の速い物理移動系で構成している。

一口に魔法での攻撃といっても色々あるが、扱う属性の問題であまり差は出無い。

振動系で火炎を作ろうが凍結波を作ろうが、並みの術者ではそれほど差が出ないのだ。

だからこの場合は使用タイミングの問題が重要だろう。

「レオ、後から来る実弾は任せた」

「パンツァー！」

返事の代わりに硬化魔法の発動。

それに合わせて俺は走るスピードを落とし、代わりにレオがスピードを上げて追い越す形になった。

(やはりな。連射し難いギリギリのレベルだ)

術式解体：グラム・デモリッションは力技であるため、一定以上のサイオン集積が必要だ。

無警戒なら潰すのも簡単だが、簡単には吹き飛ばせない様に構成していればより練り上げておく必要がある。

もちろん、俺の方は迎撃までの時間があるので間に合うのだが…。

ここで沢木先輩が千日手を構成するのはワザとであり、後方に居るもう一人が出の速い魔法で俺が迎撃出来ないタイミングを狙う為だ。

案の定。俺が無システムを入れている特化CADで撃ち落とすのを見計らい石礫が高速で飛んでくる。

「効かねえよ！」

「そっちのもな！」

物体移動で飛ばされた石をレオの硬化魔法がアツサリと弾く。

返す刀で振り降ろした小通連：刃が飛んで射程延長できる剣を、沢木先輩が空気甲冑で弾いた。

初撃の撃ち合いは互角。

だが足を止めたら不利になるのは俺たちの方だ。

「レオ、あそこのビルに逃げ込むぞ！」

「ちっ！ 仕方ねえ」

そのままレオを先頭にしたまますれ違い、もう二つ用意して居る特化CADのうち収束系を入れた方を取り出して追隨する。

建物が見える位置まで移動しながら、無系統の方で牽制レベルで放たれた魔法を迎撃を試みる。

(まあ流石にそう来るか)

当然ながら追撃は熾烈と言うよりは狡猾になる。

こちらの移動すると届かせ難くなる位置に展開し、圧縮空気や物体移動で牽制して来た。

「仕方無い。使うには少し早いです」

既に成立した物理現象は術式解体では無理なので、収束系のCADで圧縮空気を放って迎撃する。

圧縮空気同士がぶつかって気流が発生し、物体移動で飛ばされた石礫はコースを変えて直撃を免れた。

「くっ。そっちも風か？ だが、選ぶ魔法を間違えたな！」

だが圧縮空気同士の激突で吹き荒れる場を、沢木先輩は空気甲冑を操る魔法を応用して大人しくさせた。

先輩達が足を止めたのは一瞬、即座にビルの中まで追いかけて来る。

「レオ、予定通りだ」

「ここじゃ場所が悪い。上の階に上がるぜ！」

とはいえ意図した地形が都合良くあるはずがない。

ビルは堅牢でこそ無いものの、天井も床もしっかりして居た。

俺がこの状況に合った作戦を立てようとする前に、レオは気にすることもなく二階へと続く階段を目指していく。

「達也！ ちょっと無理するけど着いてこいよ！」

「どうする気だ？」

レオは脳筋に見えるがそれなりに頭が回る。

新しいアイデアこそ積極的に思いつこうとしないが、こちらで提案したことは柔軟に取り入れてくれる。

その在り様は中世の武將を思わせ、誰かのサポートがあれば幾らで

も戦えるタイプだろう。

「こつちの窓じゃねえ…。あつた、そこの窓だ！」
「なっ!？」

なんとレオは窓の一角に突進した。

あのペースは明らかに止まることを考えていない。

「いづくぜ、シルト！」

「俺が言うセリフじゃないが、無茶苦茶だな！」

レオは窓を突き破って跳躍すると、足下の家に向かって硬化魔法を掛け始めた。

咄嗟の事なので精霊の眼で詳しく確認する余裕も無いが、俺が頼んだ床強度の硬化だろう(そういえばシルトと言うのは接触対象の効果だった筈)。

レオに続いて着地した時、いつもの逐次詠唱ではなくもう暫く魔法が掛っている状態なのをようやく確認した。

「先輩達が来るぞ。誘導しながら間を開けるっ」

「これでどっこいのレベルでやり合えるってわけだな！」

レオには悪いが真面目に戦う気は無い。

俺は足元に対抗魔法を放って硬化魔法を打ち消す準備をしておく。

先輩達が加重系統で危なげなく跳躍して来るのに合わせて、俺は二丁のCADを構えた。

「追い詰めたぞ！」

「ええ、そうですね」

ここで俺は無系統のCADを水平に構える。

ただし、目標は水平方向に居る先輩達ではない。

先輩達が着地する場所に掛った硬化魔法に対し、術式解散を滑り込ませた。

術式解体では間にあわない僅かな差、先輩達はそのタイミングを凶っているのを承知で魔法を解除したのだ。

「これで終わ…」

「終わりです」

術式解散：グラム・デイスパーシオンは実験室でようやく成功する

レベルの魔法だ。

だがレオの魔法を散々見慣れている俺ならば、成功してもおかしくは無いだろう。

加えて昨日も見た空気甲冑にも試してみるが、疑がわれても何なのでこっちは失敗させておく。

「うわっ!？」

先輩達が着地した屋根が大きく歪んだ。

レオが放った小通連もあり、瓦は数枚まとめて割れ、もし加重系統で調整して居なければ突き破っていたかもしれない。

「ちっ。小細工を!」

「今助ける!」

そういえば沢木先輩はマジック・アーツの猛者と聞いたこともあったか。

巧みな体重コントロールでもう一人を押し上げると、自分だけが滑り落ちそうな状態で家にしがみついていた。

「すみませんがそうもいきません」

「なっ!?! そこまでするか!」

俺は沢木先輩の空気甲冑ともう一人が使う加重操作に対しまとめて術式解体を向けた。

同時に収束系で空気を圧縮してぶつけ、少しでも体力を消耗させる為に連発しておく。

(…さて、ここからが見物だな)

別に二階から突き落として勝とうとは思っては居ない。

そんなセコイ真似をしたのではなく、ここで『俺対策』の魔法を見ておきたいのだ。

もう一人は候補としては下の方だったので時間の問題で詳しくは調べきれず、何か得意な魔法があるからこそ採用されたのだろう。

「調子に乗るな!」

「…なるほど、想子ウォールですか」

もう一人の先輩はサイオンの流れを食い止める想子ウォールを先に張って、術式解体を無効化してから救助をすることにしたようだ。

他の手段で邪魔する事もできるが無理を通して意味はあるまい。

「レオ、ここでの戦いは終わりだ。集合するぞ」

「そろそろ時間だっけか。んじゃアバヨ！」

先輩たちが態勢を崩して居る間に移動してしまう事にした。

救出作業を妨害する為に圧縮空気だけは放ちながら、レオの先導で屋根を伝っていく。

S Bを使って地下水を探したのか上水道をこじ開けたのかしらないが、そろそろ幹比古が準備を終える予定だ。

モノリスの方も走りながら視認で探すならともかく、探知系で調べられると見つかる可能性が高い。

十文字会頭が最後まで動か無いとは限らないので、合流して作戦を進めることにしたのだ。

●二重の霧と、偽の大瀑布

特定されても問題なので迂回しながら元の場所に戻る。

そこでは幹比古が簡単な地図を描きながら俺たちを待つて居た。

「ごめん。大元で止められてるみたいで、この辺り一体の水をコントロールするので精いっぱい」

「十分な量が集まるんだな？ なら問題無い」

確認してみると幹比古が描いていた地図は、コントロールした水を何処なら吹き出させることが可能か判り易くしたものだだった。

どうやらS Bを通して圧力を掛けていので、好きな位置を水浸しにするとかは無理なようだが水道管を通して行えるなら問題無い。

「相手もモノリスに幻覚を使って居たらどうする？」

「問題無い。まずは砂鉄の防壁を剥がす方が重要だ。それに一部はパッシブ・ブソナー代わりにして居る可能性があるからな」

十文字会頭は砂鉄を少量ずつ目立たない様に配置して、こちらの移動を感知・迎撃して居る可能性がある。

こちらのモノリスが見つかって無いのは視覚を誤魔化す幻覚を張っているのと、あえて離れることで注意を向けさせてない事だ。そこに気が付かれたら戦場MAPはそれほど広いわけではないので、時間を掛けずに見つかると思われる。

探し出される前にこちらから仕掛けるべきだ。

(昨日出し抜かれたのに、会頭が砂鉄だけダミーに置いて探し回っているとは思えない。他の可能性があるとしたら正攻法だな)

もちろん完全に見当外れで、十文字会頭は余計なことをしてないというのも考えられる。

単純に消耗を避けて待ち構えつつ、こちらのモノリスの位置を把握してから一気に三人で押し込むだけなのかもしれない。十師族でも上位と言われる十文字家の魔法力と、それを支える一科生の実力を考えればこちらの方が可能性が高いだろう。

「手順を確認するぞ。まずは二重の霧で周囲を覆い一気に水流を浴びせる」

幻覚の霧を出した後、本物の霧を混ぜて攪乱すると同時に砂鉄で作られたパツシブ・ソナーを殺す。

そして水を浴びせかけることで重量を掛け、コントロールに負担を強いれば間違はなく砂鉄の防壁を捨てるだろう。

だが十文字会頭にとってソレはフアランクスの消耗を抑え、防壁を兼ねて便利使いできる魔法に過ぎない。

そこから本番であり、こちらの攻撃はことごとく止められてしまいうくらいでいるべきだろう。

「その後で俺たちも攻撃を仕掛けるが、本命は達也のグラムなんとかだったよな」

「モノリスがあれば僕が精霊でコードを確認。無ければ一度引いて会頭が砂鉄を捨ててから本番だね」

魔法と言うのは別にCADの周囲から放つ必要はない。

その方がコントロールし易いだけで、フアランクスの無い方向から術式解体をモノリスに浴びせてしまえばいい。

自身から離れた場所で展開すると強度が下がるが、それはお互い様なので『攻め手の理』を維持できるならばモノリスに浴びせるだけなら難しくない(流石に本人に攻撃をぶつけるのは難しいが)。

全ての攻撃は術式解体を確実に、モノリスを守る防壁に浴びせるための段取りに過ぎない。

こちらが本気の攻撃を仕掛ける以上は部活連側も本気で防いで来るだろう。

先ほど沢木先輩たちが防がれることを前提にタイミングを合わせた様に、こちらも千日手を挑んでチャンスが来る瞬間を待つのだ。

必殺技が警戒されて必殺技でなくなるのであれば、手を尽くしてクリーンヒットさせるまでだ。

「最後にレオ。砂鉄を引き剥がせたら話なんだが…硬化魔法の相対位置で新しい提案がある」

「なんかいいこと思いついたのか？」

駄目押しとして十文字会頭対策を提案し、俺たちは移動を開始した。

相手側のモロリスがあるはずのビルに向かうと、こちらを見失った沢木先輩達が戻っていた。

予定通りであることに胸を撫で下ろしつつ、合図を送ってまずは幻覚の霧を発生させた。

「…こんな場所で霧だと？」

「駄目だ。幾ら風を送っても効かない。これは幻覚だな」

沢木先輩が圧縮空気弾を入れているCADを使って、収束魔法の偏倚解放で風を発生させる。

当然ながらこの段階の霧は幻覚なので晴れるはずが無い。

(第二段階だ。緊張を煽りつつパッシブ・ソナーを無効化する)

暫くして周囲に水気が溢れ、幻覚の霧の中に魔法で作った霧が立ち込める。

次第に砂鉄を圧迫し、濃度が高まれば僅かに触れた程度では俺たちを感じし難くなる筈だ。

(だが相手が警戒して居る時に仕掛ける必要はない。攻めるのはもう一手を尽くしてからだ)

既に幹比古は作戦の最終段階を始めており、SB経由で水道管内の圧力を変化させている。

押し上げられた水は管内を逆流し、やがて魔法の完成と共に一気に

噴き出すだろう。

「なんだ!?! いつのまにか本物の霧になってるぞ!」

「駄目だ。幻覚の霧も残ってるからサツパリだ。でもなんで仕掛けて来ない!」

(よし、頃合いだ!)

十文字会頭は力強いリーダーであることを求められ、その責務から逃げる事無く体現している。

少々卑怯だがその行動原理を逆手に取り、沢木先輩達を指揮する為に出て来たところを狙わせてもらおう。

「落ち付け。モノリスの護りを解除するのも、信号を撃ち込むのも近寄らなければならん。それよりも予定通りに動け」

「了解!」

(予定?)

部活連側の作戦が気になったものの、今更こちらの予定を変更するのは無理だ。

既に水道管の内圧はビルの一階・二階間で高まっているし、会頭の動きに合わせて吹き出させるだけなのだから。

やがて沢木先輩だけが会頭の側に付き、もう一人が霧の外に出たことで予想は二つに絞られた。

(なるほど。この状況で俺たち狙いとも思えない。モノリスを探しに出たな)

こちらが博打に出て三人で攻めるのは予想できるだろう。

何しろ時間を掛けると見つかって、部活連側が三人で攻めよせると間違いなく守り切れないからだ。

十文字会頭のフアランク스와沢木先輩の空気甲冑だけでも、俺たちと互角の自信があるのだろう。

もう一人を守りながら戦うよりは、二人だけで俺たちと対峙して三人目が探し続けるのは悪くない選択肢と思われた。

「後は時間との勝負だな。行くぞレオ」

「そうするとしますか」

ドドドドと強烈な音が周囲に鳴り響き、その音に紛れて水が水道管

から滴り落ちる音が隠れる。

俺たちもその音に紛れて移動を開始し、霧や滴った水によってパツシブ・ソナーに過剰反応が出た頃に走り始めた。

時折、こちらにも圧搾空気を複数の位置から送り込んで水量を誤解させる。

「うおっ!?! 水が…屋内で滝だと!」

「落ち付け。霧も音も幻覚だ。冷静に対処すればなんとでも出来る」

沢木先輩に声を掛けながら、十文字会頭は重くなった砂鉄の防壁を使い捨てた。

ビルの窓側からモノリスに忍びこめる場所を塞いで、自分達の前を通らなければ進めない様にしたのだ。

「裏口が潰された。同じ捨てるにしても思い随分と切りが良い。会頭は試合巧者だな」

「要するに正面から挑んで来いってやつだよな? 無茶言ってくれるぜ」

本当を言うと最後まで頼ってくれた方が楽だったんだが、所詮は消耗を抑えながら便利使いする魔法に過ぎないと言う訳だ。

重くなった上に磁性防壁も機能し難くなった砂鉄ではなく、フアラシクス駆使して戦う気だろう。

「霧が晴れて…やはり居たか!」

「判ってたでしょうに。全力で活かせてもらいますよ」

俺は沢木先輩と圧縮した空気弾を撃ち合いながら、術式解体で先輩の弾の他にモノリスを狙い撃つ。

しかし想子ウォールで弾かれ、あっけなく戦いが終わったりはしない。

「公開すれば発言力は高まるが予測はされる。世の中そう上手くは行かん」

「自分でもそう思います。決まってくれば楽だったんですが」

十文字先輩ならばこちらの予想を見抜くことも、対処することも簡単だ。

圧縮空気弾も術式解体もサイオンの保有量に物を言わせて乱れ撃

ちにしているが、流れ弾も丁寧に処理しつつ、レオが放った小通連の刃も止めているのは流石と言うしかない。

だが、これは予想できた苦戦だ。

ここから二手三手と先手を取るが全てブラフであり、同時に攻略の一手。

でなければ余裕を持って防がれてしまうだろうし、偶然決まったとしても効果が薄くなってしまいうだろう。

風によって水飛沫が部屋に充満した所で、視野が鈍い閃光に染まる。

「はあー！」

幹比古がこちらに合流しながら放った雷童子が水の上を伝わり暴れ回る。

その余波が冷めやらぬ内に強襲を掛けた。

「距離を詰めるぞー！」

「パンツァーー！」

布を投げつけながらレオは小通連を持って先行する。

硬化魔法で自らを守りつつ打撃効果を狙って振り回したのに合わせて、俺も前進するが電撃の名残でいささか痺れ…だがそんな物には構ってられない！

「言っておくがこの魔法、防御の為だけでは無いぞ？」

「ぐあああ!？」

十文字会頭がタツクルの態勢を取り、自身の正面にフアランクスを形成して走り出した。

魔法が最も強固に使用出来る位置で形作られたソレは、防壁ではなく破城槌と化してレオを強打する。

しかも展開面積は相当に小さく、これならば他の場所にも展開出来る、あるいは連続使用可能だと思わされた。

それは事実その通りで、最も強固で攻防一体なのが自信の前方。

そして、最も効果的なのが…。

「それ、司波。お前にもだ！」

「くっ…攻撃も迎撃も不可能とは」

今度は掌サイズまで絞った防壁が、俺に向かって叩きつけられる。手裏剣を投げる様なものだが、生憎とこの防壁はいかなる魔法も術式解体ですら弾き返す凶器でもある。

タツクルと違って反動が少ないのでレオの様に吹っ飛びこそしなかったが、連続でもう二・三発喰らうと強烈な衝撃が叩きつけられた。「やれやれ。大型バイクにぶつけられて以来だな」

「そうか。俺の方はボクサーのパンチ程じゃない。やっぱり肉体の前面くらいが最適の位置なのか」

「…二人とも何いつてるのさ」

俺たち二人がたち上がるまでの間、沢木先輩の牽制をしてくれた。幹比古が奇妙な声を上げた。

何かおかしいなことでもあったかと思いつつ、最後の攻撃に討つて出る。

「アレで行くぞー！」

俺は温存しておいた三つ目の特化CADを抜きながら、収束系のCADを放り出した。

合わせて幹比古が沢木先輩を牽制しながら、一足先に離脱を始める。

「掴め、アーガトラム！」

「こつちが本命だったか。だがこの程度では意味を為さん！」

レオは布に硬化魔法を掛けて十文字会頭に絡まる形で固定した。

だが十文字会頭の言う通り、相対位置を固定しても会頭を動かす事はおろか、その場に留めることすらできない。

そう、このままの状態ならばだ！

「レオ、そのまま押し込め！」

「あいよー！」

「なに、重力軽減魔法か！」

俺が三つ目として用意したのは、重力系統のリバース・グラビティ。本来は床に使って、その上に立つモノへ上方に向かって反重力のよきな影響を与える為に使うものだが、俺の能力では重量軽減として使うのが精いっぱいだ。

効果は薄いがループ・キャストによって継続使用できるし、床に掛けるから十文字会頭が自身を守っても意味が無い。

次第に会頭が押されて持ち場を離れ始めるが、ここでもう一人を放っておくこともあるまい。

「沢木先輩にもプレゼントです。当然ですが、その甲冑も解除するとしましょう」

「性格悪いな、お前！」

レオは会頭を押しこんで行くことに精一杯なので、小通連で攻撃はできない。

だが沢木先輩からはそのことが判るはずもないので、モノリスや会頭を狙う傍らついでに狙っておいた。

同じ様に足場を不確かにし術式解体を撃ち込んで行く。

「いつまでもこんなことが通用すると思っているのか？」

「ええ、通用するとは思いません。…下がるぞ、レオ」

俺が放った術式解体は会頭の思子ウオールで止められてしまう。

例えば体重を軽くされ硬化魔法の相対位置で押しこまれようとも、軌道が見えるならばその前に張るなど容易い事だろう。

だから、ここで俺は会頭から見えない位置を基点として術式解体を放った。

魔法は別にCADの先から放つ必要はなく、威力を気にしなければ他の位置を基点にできるのだ。

もちろん相手の魔法を解除しようとするれば少し話は異なる。障壁魔法ならば自分の前面だし、射撃系の魔法攻撃ならばCADから放つ方が強度が増すのだ。

しかし強度の問題になるのは、対抗して来る相手の魔法のみ。

「しまった、モノリスの防壁が…」

「よし、後は幹比古に任せるぞ」

教師が事前に掛けておいた魔法は持続時間を前提にしたものだ。

強度はそれほどではなく、解除され難いだけで術式解体を目標レベルにしてはいない。

俺たちは牽制攻撃を放ちながら、SBで視認したはずの幹比古が範

囲内の何処かでコードを入力するのを待つだけだ。

先に離脱したあいつはビルの何処かに潜んでいるはずなので、探されない様に時間を稼げば俺たち二人が倒されても問題無い。

…はずだった。

『それまで。部活連側の勝利です』

「なに!？」

時間を稼ぐために態勢を立て直そうとするより先に、スピーカーから無情なアナウンスが聞こえて来る。

「はあ!? さっきの先輩がオレ達よりも先に探し当てたつてののかよ」

「…それは違うぞ西城。既に場所は探し当てていたのだ」

十文字会頭はレオの魔法が切れたことで、布を取り払いながら部屋から出て来る。

「まさか、アクティブ・ソナーとしても使ったということか…」

「そういうことだ。俺は動か無かったのではない、動いていたのだ。間にあうかヒヤヒヤはしたがな」

序盤に十文字会頭はビルを守って出てこなかった。

だがそれは擬態であり、少量の砂鉄を動かして接触探知で探っていたのだ。

俺は近づく者を探知する為だと思っていたが、会頭は消耗するのを覚悟で地味にエリアを一つずつ探っていたのだろう。

「お前たちが動き回っている場所には無い可能性が高かったからな。最初に吉田の居たエリアにモノリスが無くて焦りもした」

「そうは見えませんが…。いえ何を言っても負け惜しみですね。完敗しました」

魔法の眼による探知は七草会長の十八番だったが、まさか十文字会頭が似たようなことを出来るとは思わなかった。

アレは生まれつきの才能ゆえに同じことは出来ないからこそ、別の方法で代用手段を探っていたのかもしれない。

そういう意味では、昨日に視覚を誤魔化す幻覚を使った事で、会頭は視覚を切り捨てて接触探知のみに絞ったのだろうか。

いずれにせよ、九校戦予選はこれで終了。

後はお披露目である。
後はアトラクションを兼ねたミラージュ・バットで、一足早い飛行魔

追い求めるは、至達にあらざる也り

●妖精たちの輪舞

「お前達さえ良ければこの後で、今回の校内予選検討会でもやらないか?」

「せっかくですが…。この後は生徒会メンバーがミラージ・バットの試技を行いますので調整に行かねばなりません」

メンバー選定に関わることなので参加はしたい。

だが初の飛行魔法集団運用とあって、俺が外すわけにはいかなかった。

「やらないかと会頭がせっかく仰っているんだし、調整なんか他の…」「止せ。司波にも司波の都合と言う物があるだろう。それよりも聞きたいことがある」

部活連側の主要メンバーらしい先輩の言葉を、十文字会頭が遮って首を振った。

「市原が珍しく不機嫌な顔で『生徒会は全員が義務』と言っていたが…。まさか俺や服部まで数えては居ないな?」

気難しい顔でジョークを言うとは思わなかったが、おかげ周囲のメンバーの緊張も解れた様だ。

先ほどの先輩も肩から力が抜けた様にガツクリ来ており、一年の中には笑い出す者も居た。

「…当然ながら違います。よほど自分の参加が気に入らなかったようですね」

「そう言う事もあるだろう。だが注意しておけ。アレは普段静かだがそれだけに怒らせると何をするか判らん」

情報封鎖したまま訓練できる参加者が限られているので、市原先輩や中条先輩も飛ぶ訳である。

会頭も情報の封鎖に文句を言うつもりでそんなジョークを言ったのだろうが、あまり冗談が上手い方では無いようだ。

……恐ろしいことに、十文字会頭が冗談を口にしていないという事実が直ぐに明らかになった。

校内放送でミラージ・バット『ほか』の試技が発表されたからである。

『間もなくエキシビジョンとして生徒会一同によるミラージ・バット試技と、ミスター・シルバーによるCAD調整試技が行われます』
(なに?)

俺は聞いて居ない…。

慌ててマイクを持った市原先輩に目を向けると、恐ろしいほどの笑顔をこちらに向けて居た。

傍から見れば微笑んでいるように見えるが、深雪と同じタイプの怒り方なので俺には良く判る。

「そんな予定は無かった筈ですが…。仕方無い行つてきます」

「早速やられたな。逃げれない様に仕組んで来るから、怒らせるのは止めておいた方が良い」

できればそうしますと会頭に対して軽く頭を下げ、調整装置が置いてあるテントまで移動する事にした。

ほのかや雫が走つて来るが、おそらくは先ほどの放送を聞いて推測したのでだろう。

しかし、ほのかは何を慌てて居るんだろうか？

「たつやきーん！ 大変なんです、助けてください！」

「何が起きたんだ？」

「…ゴメン。うちのお父さんが原因なの」

ほのかが涙目になって訴えかけて来るが、サツパリ要領を得ない。

そこで事情を知っているであろう雫に対して質問すると、父親であり企業を経営する北方・潮が関わっていると告げた。

「FLTから達也さんたちのラボが子会社化したでしょ？ お父さんに上場した株を買っておいてとは伝えただけど…」

「なるほど。対象と一人当たりの購入数を制限したから、ほのか名義でも買ったのか」

「そうなんですよ！ しかも、その株を売ってくれて朝から集まっちゃって…。わたしの物じゃないのにー」

俺はこの後の騒ぎを予想してみた。

「雫、すまないが明日から暫く、ほのかの送り迎えをできるか？」
「構わないし時々そうしてるけど…?」

幾つかのルートを想定してみたがどう考えても、ほのかに安息は無
いだろう。

何しろこの後、飛行魔法のお披露目をやるのだ。

急上昇した株価に対し、市場に出ない以上は持っている個人に対す
る直接交渉しかあるまい。

ようするに、今朝以上の騒ぎが彼女を襲うことになるだろう。

しかも直ぐに名義を移すと色々問題になるので、ほとぼりが冷めた
ころに雫名義に書き換えるまで時間が掛る。

「少し面倒なことになりそうなんだな。…俺は急に試技をやれと言わ
れたからもう行かなくちやならない」

「そんな、たつやさーん！ え…?」

出来るだけ目を合わせない様にして逃げる様にテントに向かい始
めると、ほのかが首を傾げた。

「なんであんな位置でやるんだろ。ちよつと高すぎないかな」

「流石だな。もう感知したのか」

「…? ああ、ミラージ・バット用の光球だね」

ほのかの視線がある位置に目をやると、テスト用にチカチカと光が
輝いて見える。

上手く映せるか、それとも再調整が必要なのかチェックしているの
だ。

「どうしてあの位置なんですか? もしかして、達也さんがジャンプ
力強化の魔法式を考案されたんですか?」

「それはボクも興味あるな。ステイブル・チェースでみたかもしれ
ないけど、ボクの十八番は跳躍だね」

「少し違う魔法だ。しかし里見選手も使うことになるから、見ておく
のは損じゃないと思う」

移動しようとした俺の前に里見選手が回り込んだ。

少しワザとらしい格好付けであるが、十分サマになっている。

「なにになに? シルバーくんの新しい魔法の話?」

「明智選手まで…。さつきほの放送を聞いて居れば判ると思うが、俺も試技で呼ばれているんだ」

里見選手に続いて明智選手まで現れてしまった。

当然ながら二人につられるようにして、彼女達の友人や仲の良い先輩達が詰めかけるので身動きが取れなくなる。

そしてとうとう、恐れていた事態に巻き込まれることになってしまった。

「あ、深雪だ」

「七草会長も！ はやーいつ」

生徒会の先頭を切って、深雪と会長が空に舞う。

最初の光球に対して争って飛んで行き、深雪が先に叩くと判った瞬間に会長は別のボールに向かい始めた。

「あれ？ 二人とも降りて来ないよ」

「あ、こんどは会計の市原先輩と風紀委員長の渡辺先輩が…」

「スバルも素敵だけど渡辺委員長もステキだよね」

「あ、あんたそう言う趣味？」

深雪と会長が空中から降りて来ず、タイミングを変えて市原先輩と渡辺委員長が空に向かう。

二人とも深雪達との勝負は捨てて、高得点の光球だけを狙い撃ちにすることを決めた様だ。

「今度は初期の中条先輩と…あの人は風紀の…誰だっけ」

「千代田先輩でしょ？ あの人も人気があるんだよつ。でも…」

「なんでみんな降りて来ないの？」

これで直線的な動きだけであったり、加重魔法で天盤を作成しその上を跳躍する形式も数は少ないが見受けられる。

ソレを使いこなせるかは別にして、テクニクがあり、かつ演算と処理が高い生徒会メンバーならば問題無く使用出来る。

だが、ゆるやかにカーブを描き、あるいはダンスを踊る様に動き始めると全員気が付き始めた。

「まさかアレって…」

「飛行魔法!?!」

その場に居た全員の視線が、俺の元に突き刺さっていた。

周囲に居た全員が詰めかけ始め、俺の到着が遅れたことに疑問を覚えた部活連メンバーが到着するまで…。

俺は一步も動くことが出来なかった。

●ミスター・シルバー

「ひ、飛行魔法…だど?!」

テントの中で一人の男がガツクリと椅子に崩れ落ちた。

「しかも校内予選の片手間で…? ははっ。ようやく僕の誘いに載らなかつた理由が判つたよ…」

誰もが彼のことを痛ましい目で見ていた。

彼はことあるごとに、自分達とミスター・シルバーこと司波・達也との間に差は無いのだと口にして来た。

存在するのは危険と、プロの技術者とのコネクションであったり、企業が蓄積して居る知識の差なのだと言って来た。

これまでそういつて、部活連側スタッフの心に発破を掛けて来たのだ。

「コンペなんかで成果を出す必要も、選ばれるかどうか焦る必要も無かつたんだ。…:はははは」

もともとコンペ選考会に提出する為に忙しい筈の関本・勲が、九校戦の校内予選に力を貸して居たのは司波・達也に対する対抗心だと言つてよかつた。

機会さえ与えられれば、面白いテーマの研究さえ完成させれば、自分だつて上手くやれると思つていたのだ。

「元から僕らなんか相手にして居なかつたんだな…。なのに勝負しようだなんて滑稽だ…」

「関本くん、貴方…疲れてるのよ」

平河・小春はうなだれる男に休むように提案した。

その時、彼のナニカが砕ける音を聞いた様な気がしたが…。生憎と彼女に、そこから先の言葉を出す勇氣は無かつた。

それに、彼女にはもつとすべきことが先にあつたからだ。

「お、お姉ちゃん…。飛行魔法だつて。私と同じ二科生なのに…凄

…」

「千秋にも出来るわよ。嘘じゃなくて市原さんも言ってたのよ、司波くんは天才肌で穴が目立つから、千秋ならきつと並べるって」

妹のキラキラとした目は、いつ依頼だろうか？

自分のことを尊敬してくれているのは知っていたが、いつしか期待に満ちた目で活躍するのを当然の様に思われていた気がする。

重荷だと思つて否定する前に、妹が二科生として入学し、導いて欲しいと頭を下げられて引くに引けなくなっていたのだ。

「この後に試技があるって言つてたけど、一緒に参考にさせてもらおっか？」

「う、うん。…一緒に勉強するのって久しぶりだね」

ずっと重荷だった妹の目が和らいだ気がする、平河・小春は肩の荷が下りた気がした。

そしてテーブルの一つを二人で並んで占拠する頃には、…すっかり男の存在を頭の片隅から忘れ去っていたのだ。

やがて部活連スタッフにより、司波・達也が生徒たちから救出された。

もみくちやになつて質問責めだったところを、勇気ある（無謀と言いつても良い）突入により連れ出したのである。

「では何方かの競技用CADを、九校戦レギュレーション下のCADで再現してみましよう」

「えっ!？」

「ん？ 凄いやと思うけど、そのままコピーじゃいけないの？」

達也の説明に技術スタッフは驚愕し、理解できない門外漢は首を傾げた。

どうして自分達がやつてるように、パッとやれることを試技にするのか判らなかつたからだ。

「基礎能力の違うCAD同士でデータを移す事はあまりお勧めできません。専門家がおらず多少能力が下がったとしても、再調整をした方が良いですよ」

「種類の違う材料でレシピ通りの料理を作る様なものよね。気が付いたら味が違いすぎてるとか良くあるし」

「昔の車とかでもそうだっていうよな。カーブ用と直進用で全然違うっていうし」

話していると詳しい誰かが、車に例えたり料理に例えたりとフォーローが入る。

とはいえここでは、オススメ出来ないということだけ伝われば良いだろう。

「なるほどー」

「でも競技用CADと大会用じゃスペックが違い過ぎるけど…」

「おもしろえ。そんじや俺のCADを頼むわ」

「ちよつと桐原くん、ズルイわよ！」

話が進む前に桐原・武明が手を上げた。

彼にしてみれば、以前からこういう時に協力を約束して居たので丁度良い機会だからだ。

「でもまあ、以前にモメたことのある桐原なら適役かな？」

「同じ様に使えなくなつて、庇う必要ないもんな」

サクラであることを知らない生徒達は、仕込みだとは気が付かずに納得しているようだった。

彼らの推薦もあり、何人かの希望者の中で選ばれる。

そうして、フル・マニュアルで調整すると言うマニア向けの試技が始まった。

大きな画面ボードに全体の工程を映し出し、小さなボードに何をやったかの説明を赤字で付けて解説して行く。

当然ながら、技術スタッフにコツを教えて全体技術を引き上げるためである。

こうして表ではミラージュ・バットによる飛行魔法のお披露目が行われ、裏ではミスター・シルバーの実質的なスタッフ・リーダー就任が決まったのである。

●暗躍

「先生のお力でなんとかありませんか？」

調に態勢を整える第一高校があるならば、対抗する者たちが蠢き始めた。

「私としても毎年行われる九校戦は愉しみしております。ですが九島閣下ならいざしらず不詳の身に何が出来ますやら」

「御謙遜を…」

横浜にある高級中華料理の店で、その会合は行われていた。

招待された長髪の青年の前に、数枚のデータカードが置かれた。

「無記名のゴールドとプラチナです。この予算で票稼ぎをお願いしたい」

「先生が『博打』を止めたのは存じ上げていますよ。その手腕で何人か動かしていただきたいのです」

ゴールドやプラチナというのは通称で、金貨・白金貨のことではない。

足のつかない口座という意味で、交渉事に使われる単位の一つだと思えば良いだろう。

「あれは単に第一高校の優勝が決定的だから、『博打の胴元』など止めた方が良くと助言しただけですよ。…ですが、どんな方向に持って行けばよろしいので？」

ここで言う博打とは九校戦を対象に行われていた賭けの事である。

無頭竜が急速に力を失ったとしても、儲かるなら他の組織がやろうと思うかもしれない。

それに先だって青年が止めさせた発言力を買っているであろう。

「先生がおっしゃった一高絶対優位が関係しているのですがね。いやあ、我々も身内で博打をしております。このままでは勝負にならないと」

「そうでしょうねえ。十師族の若者に加えてミスター・シルバーまで加わっているのでは一方的に過ぎます」

「しかしみな学生です。参加するなというのも妙な話では？」

青年は持ちかけた連中の話を鵜呑みにはしなかった。

既に賭けの対象にならないほど、第一高校とその他の高校の力量がかけ離れているのだ。

素の実力が圧倒的であるのに加えて、これまで欠点であった技術ス
タッフが揃ったのである。もはや勝負にならないとまで言う者もい
るくらいであった。

ハッキリいって、母校愛や郷土愛でも使わなければ賭けの対象にす
るのには難しいだろう。

そのくらいであるならば第一高校を無視した上で、二位以下を使っ
て賭けをした方が面白いくらいだ。

もっとも一位が固定とあつては勝負の推測がし易いかもしれない
ので、興冷めかもしれないが。

「例えば『不幸な事故』でもおきれば別でしょうが、それはそれで参加
する方が文句を言われると思います」

「いえいえ、そのような物騒なことを言っているわけではありませんよ。
せつかくの大会なのです。良い勝負をみたいと思ひましてね」

招待客が喫する煙草に付き合つて、青年は趣味の良い細巻きに火を
点けた。

そして『不幸な事故』という言葉に合わせて、ゴールド相当のカー
ドを指差してみる。

そのレベルの工作ならばゴールドで十分ですが？ という彼の仕
草に招待客は首を振った。

「第一高校優勢というのは、既存の競技・既存の採点方法が固定化して
のもの。その辺りに変更がなされれば少々変わってくるのでは？」

「確かに面白い御意見です。しかし、既に競技の内容は各校に通達さ
れたと思いますが…」

「何、競技の内容を変えねば良いのですよ。参加競技数や選手団の人
数調整次第でなんとでもなりましょう」

要するに、七草・十文字・渡辺の三巨頭が問題なのである。

彼らが率先して参加可能競技全てで優勝し、影響された有力選手も
良い点数を叩き出す。

競技内容も変わらないから、一高の方針である成績重視になれた生
徒でも取り組み易い。

だが、一人一つの競技であつたならばどうだろう。

あるいはチームを編成する段階で二つのチームに分けて、片方に補欠メンバーを入れる必要があれば変わってくるのではないか？

「そういえば…投票する時に選挙区を好きなように変えることを、UNNAではゲリマンダーとおっしゃるそうですね」

「確か日本でいうと大山椒魚に近い形だったそうですね」

「まったくまったく、UNNAというのはほとんどもない所ですなえ」
青年が直接的に確認すると、ようやく招待主たちは首を縦に振った。

彼らは青年を使うことで、九校戦の準備委員を動かして欲しいのだ。

好きなようにルールをネジ曲げ、第一高校と他の魔法科高校のバランスを取ろうとしている。

確かに、彼らの言う方法でならまだ変更は可能な筈だ。

オツズはともかく賭けの対象にはなるだろうし、観戦する方も面白いかもしれない。

「何が出来るか判りませんが、微力を尽くしてみましよう」

「ありがとうございます、周先生。チヨウそうおっしゃっていただけると思っていました」

チヨウ周と呼ばれた青年は、笑って頷きはした。

だが全くもって彼らを信用しておらず、話を鵜呑みにもしていない。

そもそも彼らがこの様な持ちかけをして来ると、知っても居たのだ。

単に引き受けた方が都合が良いから一応は難しいと言っておき、最後にしぶしぶ頷いて見せたのである。

「ようやく帰りましたか。〃 徒督〃、連中は何がしたいんでしょうかねえ」

「一高が苦戦から挽回する様子を見たいのでしよう。できるだけ色々な技術を見せて欲しいのだと思いますよ」

姿を消して居た男、黄ウオンが声を掛けると周チヨウは笑って肩をすくめる。

そして火など点いて居ない細巻きを灰皿の上に置き、指を弾いて幻

覚の煙ごと消してしまった。

「朱チユウからの報告では、ミスター・シルバーが飛行魔法を実用化したとか」

「…そういえば連中も手を入れてましたか。『人の』技術を盗み売りしようとは底意地の悪い」

所詮は学生の遊びだと思っていたが、飛行魔法が実用化されたとあっては話が違ってくる。

此処まで来れば黄ウオンにも言いたいことは判った。

大会に潜り込んで居るスタッフを通じて、学生でも使えるように改良された飛行魔法や、様々な技術を盗み出そうと言うのだ。

ミスター・シルバーがそれほどの素晴らしい研究者であるならば、苦戦が続けば色々な魔法やコツを示してくれるだろう。

「そこまで判って居て、何故連中を放っておかれるのです？ 『我々』の技術を盗み出されてしまいますが」

実のところ九校戦のスタッフ枠に手を付けているのは周チヨウたちも同様であった。

その利益を掠めようと言うのを、黙って見逃すのか？

「彼らには判り易い悪役で居て貰いましょう。何か不幸な事故が必要になった時はダミーは幾らあっても足りませんからね」

その問いに青年は微笑んだ。

すぐ変える首は幾らあっても良いモノである。この先にコンペマであるので丁度良い黒幕候補であった。

「しかし、そうなると連中と繋ぐモノが必要になって来ますな」

「せっかくです。ここは孫スン大人の甥御さまの要望を叶えるとしてもしょう」

第一高校に恨みを持つ、無頭竜の首領候補であったロバートス孫が移送中に姿を消すのは、それから暫くの事である。

波乱の九校戦

●トラフィックス

とあるビルの一室で、俺は居並ぶ学生達に説明をしていた。いずれもが将来を嘱望される技術者肌で、当然ながらカーディナル・ジョージも含まれている。

「…以上が飛行魔法を扱う時の手続きと注意事項になる」

公開した飛行魔法を学生向きに調整して、説明と共に手渡すのが今回の『表向き』の趣旨だ。

産業スパイが狙っている技術だけに、手渡しというアナクロな手法を全ての学校が納得して送り込んで居た。

「カスタマイズは構わないが、落下防止システム類を削ることは推奨でき無い」

「心配しなくても俺たちには無理さ。カーディナル・ジョージや四校の連中には別だろうけど」

俺が最後の注意事項を念推しすると隣に居た学生が肩をすくめた。

「出来なくはないけど、選手に合わせるだけにした方が早そう」

「僕だってそんな無茶はしないよ。選手が落下したらそれこそ魔法師生命にかかわる」

既に学生向きに調整したモノを供給した為か、修正可能な者たちも同様の回答を示した。

選手の個性や他の魔法との兼ね合いで微調整は可能だが、無理は禁物と判ってくれるので話が早い。

(ようやくここまで来たか…)

そう思うと感慨深い。

表向きの理由は飛行魔法を渡すだが、こうした交流会を続け情報網の中心に居座るのが本来の狙いだ。

『紅世の徒』

今では社会の裏側に潜んでしまった。

その中でも…俺たち技術者を狙った個体を探し当てるために必要なことが幾つかあった。

自然と情報が集まる状況を構築し調査し易くするだけでなく、同時に発言権を持った俺が『効率の良い』になることで焙りだす為である。

上手くすれば特徴や逃げ込んでいる場所を絞れるかもしれないし、それが駄目だったとしても、所詮は学生である俺ならば狙えるだろうと『紅の徒』の側から襲い易くするのが目的だったのだ。

また飛行魔法の公開に対して、変数などのデータをこちらに渡す事が条件にしている。

これは誰でも魔法を使えるような世界を目指し、いつか魔法師という存在がただの特徴になることが俺本来の目的でもあるからだ。

集まったデータで重力制御型熱核融合炉への道筋が付けば、大きく前進することになるので、今回のことは重要な第一歩になるだろう。

「吉祥寺。この間に置いて行つたデータをもとに、複数人で多数を運ぶ術式を構築してみた。利用料が入った場合はどこに回せば良い？」
「…バックボーンとかのからみが面倒だし、そっちの技術を利用する時の費用と相殺してくれればいいよ」

「もう色々考え付いてたの？ 流星は吉祥寺くんね」

カーディナル・ジョージは流星に色々と気が付いているな。

飛行魔法に関する目的とは別に、『四葉』が付け加えた目論みまで辿りついているようだ。

見れば感の良い何人か…、研究所や十師族から情報の提供を受けて居そうな連中も同様の顔をしていた。

「なあ、例の噂って…」

「何のことは判りませんね。推測するとしても…俺は応える権限を持っていませんよ」

殆ど応えたも同じ回答だが、肯定でき無いのは同じことだ。

断言するとそこから加速度的に、俺が『四葉』の関係者だと言う情報が広まってしまう。

臭わせる程度であれば、噂話で留めておく必要があった。

(そう、このつまらない問答がFLTから独立させられることになったもう一つの理由だ)

飛行魔法を実用化した会社に注目が集まるのは当然だ。

だがしかし、その部門と本社で仲が悪く、追放された当てつけのように飛行魔法を公開すればどうなるか？

四葉かもしれない疑惑は業績の低迷するFLTには無く、ラボと俺個人に集まることになる。

(これでFLTが四葉の資金回収企業であると言う疑惑は薄れた。俺個人が狙われるのは仕方がないしな)

深雪が最有力候補からほぼ次期後継者として決定に近い形になった為、今回の様な手が打てる。

どのみち『紅世の徒』に狙われるつもりなので、企業スパイやテロリスト如きは覚悟の上だ。

表立って色々と手配ができるようになるので、今回の件は色々必要の流れだったと言える。

「そうだ。うちの先生…コーチの女性が、九校戦で少し話をしたいと言っていたよ」

「コーチ？ 覚えが無いが」

去り際に掛けられたカーディナル・ジョージの言葉に俺は首を傾げる。

コーチと言うからには特化型の元二科生か、一科生・二科生に関わらず三校の気風を考えれば戦闘専門の魔法師だろうか？

当然ながら身に覚えが無いが、続けられた言葉は意外なほどに重要なモノであったのだ。

「因果の交差路で会おう。…と言えば判るとしか聞いて無いな」

「…そっち方面か。判った。とびきりの幸運を祈るとしよう」

カーディナル・ジョージが判らないのも仕方があるまい。

因果の交差路で会おうとは戦闘に特化した魔法師集団である、フレイルムヘイズ間で使われるフレーズだ。

似たような言い回しで切り返すと、少しだけ驚いた顔をしたので、そのコーチも同じ言葉を使っているらしい。

九校戦で出逢うのが誰になるのかは判らない。

だがいずれにせよ、ここでの会合を経て俺にとっての事態は大きく

動き出した。

●対シルバー・包囲網？

同じころ、とある料亭で会合が持たれていた。

「君のくれた情報通り、富士の会場で精霊が見つかったそうだよ。それと…電子金蚕もな」

「それは重畳です。これで九校戦は予定通り行われ、予定通りに終わる事でしょう」

主賓である老人の言葉に招待者である青年は恭しく頭を下げた。

予定通り。

結果まで予定通りとは、いかなる意味か？

スポーツ試合であるのに、八百長でもする気なのだろうか？

いいや違う、この青年はこのままでは大会を開くほどの意味が無いほど、第一高校が圧勝してしまうと暗に言っているのだ。

「それで、君は私に何をさせたい？ 何を目論んで居るのかね」

「まさか。そのような腹つもりなどございませぬ。ただ…私は意見が異なる御方の言い争いを悲しく思うばかりです」

青年が揶揄したのは、九校戦の準備委員会で行われている茶番だ。

平等な理念がどうの、ならば対する方にも平等差が…とか、出口の無い答えに奔走している。

まとめるのは最初から難しいのだ。

トーラス・アンド・シルバーが傑出した技術者集団なのは便利で良い、学生に腕の良い技術者が居るのは将来が楽しみなほどだ。

だが両者が一つであり、もともと優れた魔法師が偶然に集まっていることで、第一高校が圧倒的なのが問題なのである。

第一高校が関東圏あるから生徒が集まり易いと言うメリットを越えるレベルであり、勝負が決まった大会をそのままにすることはできない。

これだけでも痛いのに、司波兄弟が四葉であるという噂まで流れている。

十師族級の魔法師が複数名所属し、サポートする技術者は国内随一。

かといって競技の告知はとつくの昔に行われており、シルバーが居た所で影響の無い競技があったとしても、もう遅いのだ。

「もちろん私は大会を裏から操ろうなどと思ってはおりません。いわば契約した方の執事のようなものとして、滞りなく運営するお手伝いをさせていただきたいのです」

ここで青年は依頼主から頼まれて票工作していることを打ち明けた。

どうせ察せられているのだ、隠して居る意味は無い。

「では君は私の何を解決してくれると言うのだね？」

「九島閣下もまたお悩みだと思えます。魔法師が発展するのも、四葉や七草が失われた力を取り戻すのも望ましい。ですが必要以上は好ましくないと」

老人が長年に渡って頭を悩ませている内容を、青年はズバリと指摘した。

余計な言葉は迂遠であり、時に発言する機会を失わせてしまう。

もちろん言い過ぎては怒らせてしまうので、匙加減は重要であるが…。

「完全に元に戻って七草と四葉が対立し、あまつさえどちらが突出するのを望んでは居られませんまい。できばずつと今の状況のまま…」

「ソレを狙って居たわけではないがね。知っているだろうか？ 二人とも私の教え子なのだし」

現在の魔法師社会において、勢力バランスは絶妙であった。

突出した力を持つ四葉家は精鋭集団。だからこそ『紅世の徒』討伐戦で大きく力を失ってしまった。

同様に抱える人数の多い七草家も力を失ったが、特に大きいのは裏を担う名倉という人物が消失したことである。

結果として四葉家・七草家の勢力は同レベルで下降しており、十文字家が防御特化ゆえに生き残った人数が多いので拮抗しているのだ。

このバランスを維持したまま魔法師全体が発展し、再び四葉家・七草家が暴走しない様にコントロールしたいというのが九島と呼ばれた老人の望みでもあった。

「まあ良い、君と契約しよう。…ところで、執事ならば教えてくれないかね？」

「なんなりと」

上手く行つた流れか？

青年は僅かにそう思つた後で、樂觀論を捨てることにした。

なにしろ九島と言えば、トリックスターとして世界を震撼させた男である。

油断すればどんなしつぺ返しが在るかも判らない。

そう身構えていたからこそ、老人の質問に涼しい顔で答えることが出来たのである。

「例えばそう…大亜連合の日本に関する計画だよ」

「承知いたしました、ご主人様」

さも他愛ないモノを要求するような口振りで九島は尋ねた。

青年は恭しく頭を下げ、持ち掛けられている工作人員の潜入計画を売り払つたのである。

こうして呉越は同舟し、九校戦は波乱含みで開催されることになった。

やがて会議は最高顧問といえる九島が出した、一つの提案にしがみついて態勢を立て直す。

諸校は納得して胸を撫で下ろし、代わりに第一高校の首脳陣は紛糾することになった。

「どう言うことよ！ 今になって大きな変更をするなんて！ 十文字くんは黙つて受け入れたの？」

「少し落ち付け七草。大会委員会の決定をこちらから否定はできん。それに…メリットもあつたしな」

慌てる七草・真由美に対して、十文字・克人の方は落ち着いたものだ。

もともと物ごとに動じない男であるが、同じ十師族の女性と婚約してからには更に大人びた様な気がする。

「競技そのものは全く変わっていない」

「当たり前よ！ 六月も半ばだというのに競技が変わったら困るどころの話じゃないわ」

「だから落ち付け真由美。…それで変更は具体的にどうだったんだ？」

チャーミングで落ち着いた可愛らしい少女というのは外向きの顔だ。

付き合いの長いメンツには彼女が感情を抑えているだけ、小悪魔顔して微笑むのが好きなだけだと知っている。

突然の出来事があれば慌てるし、驚きもするのだ。

「変更されたのは複数参加の制限と新枠組の設定、それに伴う人数の増員だ」

「全員が一つの競技だけに集中しろ？ こりやまた反論し難い変更だな。それで…新しい枠組みってなんだ？」

「……っ」

変わって渡辺・摩利が尋ねると、真由美は落ち付くべく思考を冷静に務めるようにした。

彼女とて十師族に連なる者として家を背負っていく身なのだ、いつまでも子供では居られない。

「大きな魔法に頼らず、必要最低限の魔法とCADで攻略する別枠だ。新人戦とほぼ同じ点数で構成されている」

「なんともまあ露骨なシルバーメタだな。だが…」

老師と呼ばれる九島好みのレギュレーション。

やるなら生まれ持つての才能頼りでは無く、自らを運営する努力で勝ち取れということなのだろう。

切磋琢磨する大会の趣旨にはあっているし、露骨に反対するのも憚られた。

「そうね。校内予選をやったうちなら反動が少ないかも。確かに許容範囲だけど…ちょっと出来過ぎな気がするわ」

「きつと落とし所を探ったところになっただけさ。もしかしたら百山校長が申し出た案なのかもしれないぞ」

「どちらもあり得る話だ。だが俺たちがすべきなのはそこではない。

メンバーを選定し大会に備えることだ」

三巨頭が納得すれば話は早い。

疑惑を後回しにして三人はメンバーの選定に入った。

校内予選で活躍した二科生や、省エネ向きの魔法を使える一科生などが選手として。

そして柴田・美月や平河・千秋のような技術者を目指す二科生なども技術スタッフに加わって、大会に向けて始動したのである。

金色の女

●ヘル・ダイバー

九校戦に向けての壮行式と訓示が終わった後の事。
俺は十文字会頭から一つの用事を押しつけられた。

「司波は風紀委員でもあるからな、魔法使用に関する事は全て任せろ」
「お兄様なら無事に運営できます。そうですね？」

深雪の曇りない笑顔を見ると、断ろうとしていた気持ちが薄れて行く。

面倒だと思ふ気持ちよりも、妹の期待に応えたいという方が断然大きい。

「…判りました。可能な範囲で善処します」

とはいえ月並みな答えだがそれ以外に応えようがない。

面白味を求めても仕方が無いし、見て居ない生徒の監督責任まで任されても困る。

「シルバーくん、判ってるわよね!？」

「今年は三台に分乗ですからね。イザと言う時の警備を兼ねて特性で配分しましょう」

途中で千代田先輩が強引に捻じ込んで来た事もあり、メンバーを適度に分散させる。

コネで頼みを引き受けたと言うよりは、どのみち一科生・技術スタッフ・二科生と分けるのは問題しか生まないので、それに便乗した形だ。

まだ確定事項ではないが、とある懸念事項をエリカ経由で聞いたのも大きい。

中央に遠距離監視が出来る要員として美月・幹比古と行ったメンバー。千代田先輩や沢木先輩ほかをそこに張りつけ…。

先頭車両に十文字先輩や桐原先輩、最後尾の車両にエリカやレオを配置して、それぞれの車両に防御魔法と白兵戦が出来る者を組み入れておいた。

これで前後から襲撃されたりバスジャックされても、他愛なく制圧

できるだろう。

「ゴメン達也くん。明日、家の用事で少し遅れるわ。間に合わない時は現地で合流するから先に行っても構わないわよ」

「少々でしたら待ちますよ。ごゆっくりされるには連絡をくだされば構いません」

七草会長が自らのスケジュール変更を申請して来たので、何時までに連絡が出来るそうなのかを確認しておく。

(それはそれとして、明日の点呼が面倒になりそうだな)

今回は前年までと違って、低スペックCADと少ない工程の魔法で活躍できるメンバーが増えている。

それに伴って技術スタツフも増えているので(一高は少ないのでどうしても希望者になるが)、バス三台分になっっているのだ。

「明日はよく晴れるそうだし、大会に備えて朝に予行演習と行こう」

「何をするの達也さん?」

「わ、私に出来る事なら何でも協力させてもらいますね」

雫とほのかがやる気を出して居るようなので、カンフル剤として利用させてもらうことにした。

彼女たちが率先して手を挙げた所で、釣られた何人かに消耗度の少ない魔法を要求しておく。

「各車両の点呼係は最後まで外に居ることになる。それを踏まえた上で、持続時間の長い魔法を使って見てくれ」

「私、そういうの得意です! 斜光壁とか建てれば良いんですね?」

「うっ。細く長く…か。達也さんイジワルだ」

ほのかは光のエレメントであるので、その辺りをコントロールするのは得意中の得意。

逆に雫は微調整が苦手で、大容量の魔法はともかく繊細な魔法を使うのは苦手としている。

「ほのかみたいに得意な者はCADの要求水準を下げて。雫の様に苦手な者は少しでも慣れてくれればいい。上手く行かない場合は車内で待てるからな」

他のメンバーにも得意な属性を伸ばしたり、苦手な属性の訓練にな

るように作業を割り当てることにした。

もちろん俺も実験台である点呼係なので、文句を言う者は少なかった。

当日になってやはり七草会長は遅れ、俺を始めとした点呼係は外で待ちぼうけだ。

しかしみんなが張ってくれた結界のお陰で光や熱気が届き難いことから、別に不快と言うほどでもなかった。むしろエリカが教えてくれた最新情報を元に、全員に注意事項を伝える時間が取れて幸いだっただとも言える。

やがて七草会長が到着すると、予定範囲の遅れの後に出発する。

「それにしても警備要員の配置なんて徹底してるわね。何かあったの？」

「無頭竜の首領候補だったロバート・孫スズが脱獄しているそうです。念の為と思っただけだよ」

直ぐに動くか判らないが狙うとしたら第一高校だろう。

恨みがあるかは別として、報復しなければ彼のメンツが立たない。さすがに粛清対象にはならないだろうがレースから脱落するだけだ。

「懸念事項ではあったのですが、今朝がた確定しました。会長が来る前に関して全員に注意事項を伝えていましたので、待った…と言うほどには待っておりません」

「達也くんはイジワルだと聞いていたけれど、本当ね。…注意事項と云うのは魔法の相克？」

そういう噂を率先して流して愉しんでいたのは会長だと思おうのだが、あえて口にすることもないだろう。

俺は頷きながら段取りを説明しておいた。

「何かあった場合は所定の担当者が、防御魔法・状況鎮静・白兵対策を取ります。会長も遠視魔法くらいにしていただけだと幸いです」

「判ったわ。自分の魔法で混乱を助長しても自分が苦しいだけだものね」

同じ場所に魔法が乱れ撃たれると効果を発揮するどころか、発動前

に相殺しあつてしまふ。

サイオンの嵐を越えて魔法を放つのは難しいので、予め手順を決めておいたのだ。

それでも万全とは言えないので、一番狙われ易い先頭車両に俺が術式解体を使う為に陣取り、限定的ながらも術式解体を使えると言う十三束選手を三両目の最後尾に回して居る。

十文字会頭の防御魔法やレオの硬化魔法もあることだし、極論を言えば魔法による直接攻撃であれば、ほぼ無力化する事が可能だろう。(後はロケットランチャーでも持つて来るか、パワーライフルを乱れ撃ちにするくらいか?)

すれ違い様に上手く当てるのは難しいが、あのジェネレーターとかいう強化人間は厄介だろう。

とはいえ魔法師に有効な手段は限られているので、可能性を一つ一つ潰しておくことにした。

確実に今日襲つて来るとは限らないが、可能な範囲で準備は整えておきたい。

バスで高速移動という、十文字会頭の砂鉄による防壁が使えないこのタイミングを狙ってくる可能性があるからだ。

『幹比古。SBを使ってバスの前方に精霊を配置する事は可能か?』
『硬化魔法の応用で相対位置を固定すれば何とか。もつとも…そこまですると今日は殆ど何もできないけどね』

俺はメールで幹比古に問い合わせると、暫くして可能だと言う答えが返ってきた。

そこで素早く連絡を入れ直し、ひとまずの対応を終える。

『螺旋状に登る場所とか、立体的に見え難い場所だけで良い。あとは何とかする』

『了解』

少し過剰な警戒態勢だとは思うが、深雪を守ることに繋がるので手は抜けない。

そう思っていたのだが…。

やはりロバート・孫はこの移動中を狙つて来た。

「それですね、達也さん…」

「…っ！」

対向車線から僅かに上がる魔法の反応。

精霊の眼を使って居なければ気が付かなかったであろう、僅かな時間。

「静かに！ 会頭、手筈通りをお願いします」

「え!？」

「っ！」

俺が声を挙げると、ドン！ という音がして対抗車線で派手な打突音が聞こえる。

みれば大型車が分離帯に激突して火花を挙げ始めた。

「判った。全員、ここは司波の指示に従え」

その時にもう一度、更にもう一度魔法の反応を確認した。

会頭の防壁が張られたのはその時で、ややあって車がスピンすると同時にこちらに飛んでくる。

「市原先輩、ありがとうございます。深雪は消火活動を」

「いえ。問題ありません」

直撃コースであったはずだが、予定通り市原先輩が車の移動速度を調整。

会頭が張った数枚の防壁が余裕を持って受け止める。

「終わりました、お兄さま」

担当が決まっていることで速やかに行動が開始され、深雪が瞬時に車の火を停止させる。

その頃には車のブレーキが完全に機能しており、仮に爆発しても問題無い位置で停止できた。

「流石にアレは予想して無かったな」

「思いつける質量攻撃は体当たりか交差路での落下が精々ですよ。…何人か連れて証拠がないか行ってきました」

十文字会頭の冗談に答えながら、俺は調査可能な魔法を使える者と共に飛び出した。

その後で会頭が砂鉄を入れておいた容器を開放し、バスが止まった

ところに狙い撃ちする可能性へ備え始める。

こうして少しだけ予想外であったものの、襲撃を退けて俺たちは富士にある九校戦会場へ辿りついた。

●幻術師の悪戯

「つたく、車酔いだなんて情けないわねえ」

「あれからずっと精霊で監視して居た僕の身にもなつてよ」

エリカが芝生で倒れている幹比古に声を掛けた。

後半からとはいえSBでずっとバスの前方を見張っていたこともあり、サイオン消費もだが酔いでグツタリとしていた。

「まー。その代わりに役得で膝枕なんかしてもらってるんだから良い御身分じゃない。ね、美月？」

「えっ!? こ、これは吉田君が辛らそうだったからっ…」

「……………」

ニヤニヤとしたエリカの笑いに、美月と幹比古が顔を赤らめる。その様子に他の生徒から痛いほどの視線や、クスクスという笑いが追加された。

（それだけ辛かったのか嬉しかったのか知らんが…。衆人環視の元では度胸のある奴だ）

俺もどうかと尋ねる深雪の配慮を断り、そのまま委員会に報告しに行くことにした。

面倒事は一度で済ませておきたいし、大した証拠が取れたわけでもない。

その後は事故現場と同じ報告を大会スタッフにした後で、スタッフは機材を設営し選手たちは練習可能な場所を探しに行った。

それら最低限の作業が終わったところで、各人は部屋割りに従って移動。

ホテルの大宴会室で、各校共同の親睦会が始まった。

入室して暫く射る様な視線がこちらに飛び込んで来るが、二人ほど気にせず歩いて来る。

「災難だったそうだな。シルバー」

「プリンスこそ耳が早いな」

一条・将輝とお互いに異名で呼び合う軽いギャブの後、お互いに肩をすくめて止そうということになった。

あだ名という奴は本人の意思を無視して居ることだし、公共の場で呼ばれても楽しいモノでは無い。

…この時はそう思っていたのだが、あだ名のことを徒名と書くことを失念して居た。俺も油断して居たのかもしれない。

「吉祥寺の方に確認するが、アレはどうだ？」

「問題無いよ。カスタム化の内容までは教えられないけどね…」

同じ様に吉祥寺・真紅郎と挨拶を交わしたつもりだが、何か言いたそうな顔をしていた。

察してく領き、少し離れた場所を顎でしゃくる。

「せっかくだしあつちでどうだ？ …深雪、一条の相手を頼む」

「すまないね。…じゃ将輝、司波さんとよろしく」

俺としては複雑な気持ちだが、深雪の相手候補なので時間を割くのも良いだろう。

そしてこの間の話題の続きをするために、人が居ない場所まで移動する。

「それで…前に話に出たフレイムヘイズは？」

「先生はこの後で用事を済ませて来るって。ここだと注目されちゃうし、一手間を掛けるとか言ってたよ」

前回のやり取りである程度は調べていたのだろう、吉祥寺はスムーズにこちらの質問に答える。

しかしここで疑問に思ったのは、注目されると言う事。そして一手間を掛けると言うことだ。

「ということとは日本で…いや、世界的に有名な人物なのか？」

「そういうこと。まあ、うちのコーチを頼んだのもバリバリの戦闘系魔法師だからってのもあるけどね」

フレイムヘイズは数が少なく偏屈な者も多いが、確かに戦闘に置いて傑出した存在だ。

紅世の徒に復讐する為に日夜追い続ける彼らは、練度も心構えも違

う。

戦闘面を重視する三校としては、確かに優れたコーチになるだろう。今回の九校戦では油断できないかもしれない。

技術屋同士、暫く話して用件を済ませた頃を見計らってエリカが声を掛けて来た。

「参謀同士で何やってんのよ？　どんな悪巧みかしら」

「人間きが悪いな。論文コンペで俺はメインで参加しないと伝えて居ただけだ」

「…もしかして千葉家の？　よろしく」

エリカの隙の無い佇まいを見ただけで、剣の魔法師である千葉家の出であることを吉祥寺は見抜いた。

三校にもいるのかもしれないが、こちらの陣容を研究しているのかもしれない。

直ぐに気が付かなかつたのは、一科生ではないからマークを外して居たのだろうか。

適当な理由を付けてそのことを探ろうとしたところで、周囲の電灯が落ちる。

そしてカツカツという作動音と共に段階的にステージに光が集まって行った。

(この魔法は…)

注目を集める為のスポットライトが照らされると前後して、小さいが精神干渉魔法の反応が窺えた。

「ねえ、達也くん。何か変じゃない？」

「そういえば、幻術返ししの訓練をしていたな。…老師の悪戯だよ」

エリカは何が起きているか判らない様だったが、視線を固定する魔法が使用されている。

特殊な才能が無いと何なんのかは判らないが、干渉強度が最低限で抑えられたとても効率的な魔法だ。

これをスポットライトやもう一つの仕掛けと共に使用することで、最大限に効果を発揮する。

「…金髪の、女性？」

「老師じゃないのか？」

ザワザワと皆が声を挙げるのも無理は無い。

姿を現したのはビジネススーツに身を包んだ美女で、挨拶するはずの九島老師ではないのだ。

あまりにも懸け離れた姿に皆の注目は女性へと集まり：直ぐ後ろに立つ筈の人物へ気が付かないでいる。

「まずは、悪ふざけに付き合わせたことを謝罪させてもらおう」

（ん？ 今度は逆の：認識度を下げる魔法か）

老師が挨拶を始めると、再び小さな精神干渉魔法が発動された。

先ほどの女性はそれに合わせて退場し、周囲には突如入れ替わったとしか思えないだろう。

強さの目安である干渉強度に頼らない魔法だけで、これほどの人数を手玉に取るとは大したものだ。

皆は老師の言葉に驚いて聞き入り、逆に堂々と出て行く女性のことをまるで気にもかけて居ない。これでは道中で出逢ったとしても、この余波で気が付けないかもしれない。

余興だから良いものの、もしこれが実戦だと思いと身がすくむ思いがする。

自分だけならばまだしも、ここには守るべき深雪が居るのだ。

最高にして最巧と呼ばれた老師の手腕に、俺は無い筈の感情を揺らして居たのかもしれない。

●紅世の文法と、徒名

静かな興奮も冷めやらぬ間に、一同は解散して休養や自主練習に向かい始める。

技術スタッフも調整に借り出されていたが、俺は吉祥寺に呼ばれているので断りを入れてから後で向かうことにした。

言い訳になるが、俺はフレームヘイズや紅世の徒に直接合った事が無い。

まともに話したことが無いので、失念以前に知らなかったのだ。

彼らの本質が名前では無く徒名の方であることは知って居ても、どう呼び合うかまで…。

そして彼らのカテゴリーからすれば、俺もまたフレームヘイズであるということを知らないで居た。だからこれは、俺の失敗であり秘密にする為伝えないで居たお袋の失敗でもある。

先ほどステージに居た女性が、大きな本を担いでこっちに来たのだが…。

『よう“摩醯首羅”、直接会うのは初めてだっけか?』

陽気な声が書籍型のCADからする。

大型とはいえ本が喋る…それは良い。

コンピュータに言葉を喋らせるなど、二十世紀ですら可能だったことだ。

だが俺を絶句させたのは、秘密にせねばならない筈のことがいきなりバラされたからである。

「なん…:…だと」

「うそ…:…だろ」

俺に続いて一条が唸った。吉祥寺はピンと来てないようだが、さすがに家経由で聞いているのだろう。

驚愕する俺たちをしり目に、ゴツンと書籍型CADに鉄拳が降り注いだ。

『あいて! 何するんだこの呑んだくれ!』

「このお馬鹿マルコ! 少しは空気を読みなさいって」

マルコと呼ばれたAI:いや、フレームヘイズが契約して居る『紅世の王』だろうか?

そいつに金髪の美女が色々と説明をしている。

「司波…お前が沖繩の? 女性だと聞いて居たんだが」

「お前と同じ状況だが、俺の方は顔を隠すスーツがあったからな」

一条が佐渡でクリムゾン・プリンスと呼ばれた様に、俺も沖繩で摩醯首羅と呼ばれた過去がある。特殊性から俺の方は秘匿され、一条は十師族として名を上げたのだ。

「本当は秘密だったんでしょ? 二人とも、できれば他では話さないでくれるかしら?」

「俺も十師族ですから理解はできます。マージョリー先生」

「っ！　そうか、どこかで見たと思ったたら、マージョリー・ドー！」

先ほど、老師の挨拶の時にあった精神干渉魔法による認識阻害。

それは彼女：世界一とも目されるマージョリー・ドーへの注目を隠すのも兼ねていたのだろう。

なるほど、言われてみれば、あのタイミングで掛ければこの会場に居る殆どのメンバーが気が付かない。

「面倒なことになったけど本題に入るわ。こっちの情報も渡すから、あんたが追いかけてる徒ともがらの情報してくれる？」

「了解です。俺が最初に追い掛けてたのは技術者を餌さ場にする奴で、最近になってもう一つ……」

俺は興奮を抑えながら、書籍型……いや世界最初のCADとも言われるマルコシアスに目を向けた。

マージョリー・ドー美女であるが生憎と深雪や七草会長で見慣れている。

それよりもCADの元となり、様々な術式を定型管理する形となった最初期の存在に注目するのは当然のことだ。

先ほど秘匿情報を暴露されたことは念頭から追いやり、精霊の眼でも確認しながらついでのように説明を続けた。

「ふうん、技術者と裏組織か……。これは同じなのか偶然なのか」

「……確認すべきほどの差があるのですか？　気づくことがあれば教えて下されば助かります」

マージョリー女史には何かのアテがあるようだ。

追い詰めるにしても情報が足りないと思っていた俺に、想わぬ光明が訪れる。

最重要で最後まで隠す必要のある戦略魔法はともかく、俺の異名がバレたくらいならば補えるかもしれない。

沖縄戦での俺の情報は、あくまで再生魔法と単発の分解魔法までだからだ。

「可能性としては二つになるわね。一つは最初から二人組……

仮面舞踏会の居残り組」

仮面舞踏会という紅世の徒の最大の互助会。

そこに所属するモノは、イエーガー 搜索猟兵とヴァンデラー 巡回士が二人一組になっている。

確かにこいつらであれば、浮上して来た情報が重なり合っていてもおかしくはない。

だが俺が瞠目せねばならないとしたら、もう一つの情報だった。

「もう一つは技術者で裏組織を持つ集団を探してるって事。心当たりがあるでしょ？」

「…四葉家を狙う？ なるほど、その可能性は有りますね」

かつて大漢が滅びるきっかけになったのは四葉だ。

四葉がそんな事をしたのは大漢のせいではあるが、それを恨みを持つモノも居るだろう。

恨みの螺旋は果てしなく、どちらかが滅びるまで消えて無くなることはない。

いや、滅びても系譜を繋ぐモノに引き継がれて行く事すらある。

そのことを考えれば、可能性は限りなく高いだろう。

「まあ当時は大亜連合にしても大漢にしても仮面舞踏会やフレームヘイズが一杯入り込んでたからね。調べてみるけどその辺だと思っていたら良いんじゃない？」

「心しておきます。色々とありましたが、今回はありがとうございますました」

俺たちは一条と吉祥寺に堅く口止めをして、再び別れることになった。

「いずれ因果の交差路で」

「それまでとびきりの幸運を」

そう言って作業車に向かい調整作業に没頭する。

『お母さんも話は聞いたわ。伝えて無かったし、今回だけだからね？』
夜分遅く訪れたメールに苦笑して気分良く眠りに付いた。

九校戦本戦、前編

●トリシユール

朝になって俺は残った作業に取り掛かる。

使う気が無かった全力を試合で使う為には、十分な調整が必要だからだ。

前から使っている魔法だから事前公開が不要とは言えとは言え、このパターンは初めてだというのものもある。

「おはようございませす。お兄様」

「おはよう深雪…」

俺は昨日の事を伝えようかと迷ったが、気苦労を掛けるよりも知らない方が危険なのでやはり話しておくことにした。

「深雪。その…なんだ。昨日、フレイムヘイズと出逢ってな」

「まあ。珍しいこともあるのですね」

驚いたのか深雪が口元に手を当てる。

それはそうだろう。もともと絶対数が少ないのに、『紅世の徒』が姿を消してからは見付けだす為に奔走したり、行き場を無くして暴走する者が多発した。

俺も昨日までは見たことが無いし、もう少し広いカテゴリーの自在師ですら吉田教諭ほか数名である。

「その時まで知らなかったんだがな。連中は本質を示す徒名の方で呼び合うらしい」

「…」

いまいちピンと来ないのだろう。

俺自身、昨日呼ばれるまで理解して居なかったのだから。

「無知は言い訳にならないが、俺と深雪もフレイムヘイズのカテゴリーに分類されるらしい。そこで、な。『摩醯首羅』と呼ばれてしまったわけだ」

「っ!? お、お兄様…。それは…」

ようやく事態が呑み込めてきたらしい。

俺が『摩醯首羅』と徒名される、沖縄戦の立役者であることは知ら

れていなかった。

その名前が知られると、大亜連合の連中に目を付けられるだけでなく…。

最低でも戦術魔法師級であること、マテリアルバーストの事を知っている極一部の者には戦略魔法師であることが判明してしまう。

「事情も似ている一条と吉祥寺だけだったので助かったが…。深雪も気を付けておいてくれ」

「承知いたしました。私はともかく、お兄様の名前を名指しされると危険ですものね」

無事に事情が伝わったことに安堵し、俺は最後の調整に入った。

深雪が居ながら作業を優先するのは珍しいのだろう。

いつもは邪魔しない妹が、少しだけスネた様に尋ねて来た。

「お兄様。それは？」

「バレたといっても出来るだけ情報は隠蔽したいからな。誘導する為に『トライデント』の紛い物を作っている」

三連分解魔法『トライデント』。

同格同士の戦いで有れば、必殺の攻撃など防がれて当然。

ゆえに俺が分解魔法を使う時に、相手が防御すると仮定してクリーンヒットさせる為の術式を所持していた。

「実験室レベルでしか使えないグラム・ディスプレイションを、なんとか可能な様に計測して行く魔法…ということにする」

術式解散を三つ同時に放ち、変数を変えながら一つの魔法式に押し当てる。

術式解体ほど確実ではないが、あれほどのサイオンを消費しないしタイムラグも少ない。

「これがあれば俺が試合で成功させてもおかしくないし、似たような名称にするつもりだから、中途半端に知っている者を誤解させるつもりだ」

三叉の槍トライデントの別枠、あえて名前を付けるならトリシューラだろうか？

いや、紛い物にするのだから、少しもじってトリシューラくらいが

良いかもしれない。

いずれにせよ名前は誘導できれば良い程度なので、似ていれば何でも良いだろう。

しかし、そこまで話した段階で深雪に目を馳せると…。

先ほどまでのスネていた顔はなりを潜め、どことなく嬉しそうな笑顔が見え隠れする。

「どうした？ 御機嫌だな」

「お兄さまのお力が周知されていくのは、深雪にとっても嬉しい事なのです」

知られてしまった事で色々問題も生じるだろう。

だがしかし、感情の俺の代わりに喜んでくれる深雪が、これ以上ないほど喜んでいるのを見て満足する事にした。

●手札の切り合い

初日のカードは苦戦から始まった。

「押されていますね」

「想定内だ。問題ないだろう」

同年代のはずなのだが、平河先輩の妹である平河・千秋は何故か俺に敬語を使ってくる。

ラボに居る時に牛山さん達を思い出すが、学校行事でやられると不思議とこそばゆい。

「まさかバトルボードが壊滅だなんて…。クラウドボールは健闘しますけど」

「バトルボードはエースを他の競技に移したからな。他校も逆張りするよりはこっちの競技を抑えに来たんだろう」

今回の九校戦では選手が複数競技に出ることを禁止している。

バトルボードのエースである渡辺委員長は、ライバルであった七高の選手との兼ね合いもあって飛行魔法の経験でミラージ・バットに専念。

一年で巻き返そうにも、ほのかや雫たち実戦投入出来そうなメンバ―も他の競技に回っている。

俺たちの動きを予想して居たのか、他校はこぞってこれらの競技に

エースを投入して居た。

クラウド・ボールも似たようなものだったが、こちらは校内予選で気を引き締めていたからか善戦している。

桐原先輩が籤運悪く三校のエースとぶつかってしまったが、他の選手が上位に食い込んで居た。

女子の方はエースである七草会長を残したことから、圧倒的な勝利を掴んで居るのも大きい。

「それになんだ…午後から巻き返すから問題無い」

「あ、さつき提出していたアレですか？ 凄いですよねー」

「千秋ちゃんも判りますか!? あれって一年前のデュッセルドルフで発表されたばかりの技術なんですよっ!」

話がCADに移ったためか中条先輩が話題に加わる。

二人でワイワイと楽しそうな様子は、女の子の談義というよりは子犬がじゃれあっているようだ。

「汎用型に照準装置を組み合わせるなんて凄いですよね」

「流石に俺もドイツでやってなかつたら、無理には試そうとしなかつたろうな」

スピードシューティングは主に特化型CAD…特に照準装置を利用する。

起動速度の差と照準補正の両方を兼ね備えていることを考えれば、特化型CADを使わない手は無い。

だが逆に言えば特化型の欠点である、複数系統の魔法を組み合わせられないと言う問題を残したままだった。

大型の魔法を使う時にこの問題はネックになるのだが、照準装置を汎用型に組みつけることで解決する事が出来る。

「明智選手は射撃が得意だ。それを上方補正した以上はまず負けることは無いだろう」

実のところを言えば、入学した頃に編み出した浮遊機雷系の魔法を組み合わせれば万全だったかもしれない。

しかし、あの魔法は渡辺先輩の家用に登録してしまっている。

逆にこのCADの概念はデュッセルドルフで公表されたものであ

り、あちらの研究所に申し送りする以外は滞りなく使えると言うのも大きかった。

「実行委員会の人たちも驚いてましたよ。検査に行ったら問題無ければジツクリみたいって言っていました」

「専門の研究者じゃないと無理だと思えますけど、良く離してくれましたね。私だったらずつと見てますよ」

二人の会話を聞きながら俺は低スペックCAD戦の準備を始めた。殆どの競技は魔法の内容を絞る、可能な限り処理数を落とすだけだ。

車のレースでいえば低燃費レースに挑む様な物で、重視する項目こそ違えどやることに差は無い。

だが、たった一つ。

従来の九校戦とは趣を変える競技があった。

「十三束。新人戦の方に出たいだろうにすまないな」

「構わないよ。この競技じゃなきゃ選ばれなかっただろうし、僕が向いているのは確かだからね」

十三束選手は接触型の術式解体が使える。

殆どの選手がCADスペックの低さに苦戦し、複雑な魔法で攻撃できないことを考えれば、見える魔法を全て防げる彼は非常に有利に戦える。

更に付与型で足止めするタイプの罫も、踏み込んで捕まった瞬間に抜けさせることから、非常に向いているどころの話ではない。

もし、もう一人のダークホースが居なければ…。

十三束選手は低スペック戦の申し子とまで言われただろう。

「心配しなくても、僕と西城くんが千葉さんを守るからね」

「そういうこと、任せとけて」

「別に無理して守ってもらわなくても良いんだけどな」

モノリス・コードの低スペック戦は、軍で導入される特殊訓練だ。

必然的に男女の区別が無く（参加者は絶対的に少ないが）、更に打撃戦までは許可されると言う特徴があった。

どちらかといえば剣術大会やマジック・マーシャルアーツに近い

レギュレーションと言えるだろう。

複数参加可能ならば渡辺委員長や桐原先輩も本当は参加したいのだろうが、あの二人は低スペックCADに向いていないので断念している。

「今更ダメなんて言わないでよね？」

「クラウドボールは終わりかけてるからな。無理に捻じ込む意味はない」

「打撃戦が許可されるのであれば、エリカは本来に近い戦闘力を発揮する。」

歩幅の短い自己加速を状況に応じて使い分けられることから、移動をキャンセルする為に他の魔法を使わねばならない選手よりも遥かな有利にある。

十三束選手にも言えることだが、目に見えないタイプの複雑な魔法攻撃が扱い難いので、視認して回避できるのも大きいだろう。

こうして俺たちはバトルボードやクラウドボールの失点を補うべく、午後の競技に専念することにした。

モノリス・コードの低スペック戦は会場の問題もあり、初日から実行されている。

意外だったのは四校が勝ったということだ。

「確認してなかったんだが、四校はどうやって勝ったんだ？」

四校は複雑な技術重視とあって失念して居た者が多い。

本戦ならまだしも、低スペック戦は一応の参加だと思ってる者が多かった。

かくいう俺もその一人だが、まあ忙しきにかまけていたのは理由にならないだろう。ようするに全員が油断して居たのだ。

「レオみたいに叫んで加速していたよ。流星にコマンドワードは違ってたけどね」

「音声認識型？　レオが居なければアナクロだと思っただろうが…。世界は広いな」

まさかそんな奴が他にも居るとはどうてい思いもしなかった。

だが、驚くのはそこからだ。

「それがですね。活躍したのは女性なんです！ 留学生の方なんです！ 留学けどスラツと素敵でした」

「留学生…？ ああ、一応は規定が無いのか」

まあ本戦に留学生を出すのは傭兵みたいでよろしくないということかもしれない。

だから低スペック競技に参加したのか、それとも元から特化した二科生級だったのか。

「ともかく幹比古と美月が見ていてくれて助かったよ。画像だけで判断するとしても傾寄りができるからな」

「それにしても…どうして二人つきりなのかしら」

「エ、エリカちゃん!？」

俺が礼を言っていると、エリカが途中から割り込んでからかった。

何と言うかこいつは話題まで攻撃的というか…それとも単にこの手の話が好きなのだろうか？

「別に二人きりってわけでもないよ。…というか、選手とスタッフで時間がある者は手分けしようってことになったじゃないか」

「あーら。そんなことは十分に知ってるわよ？ あたしが知りたいのは、どうしてペアなのかなーってことよ」

幹比古が必死で言い訳をするものの、挙げ足を取られて簡単に逆転されてしまう。

なんとというか殺伐とした緊張を持たなくなるが、何かあったら幹比古もエリカも瞬時に引き締めることができる。

例えば突然の来訪者が現れた瞬間に、先ほどまでの和気あいあいとした会話が収束したのだ。

「誰？」

「ワオーウ！ 後ろから近づいたのに見つかりマシタ！」

「NINJYA！ ジャパニーズNINJYAなのですか？」

エリカが振り向きながら尋ねると、そこには気配も足音も消した二人組が立って居る。

「あ、さきほどの話で出た留学生の方です」

「四校の？」

なんとも似合わないチョイスである。

気配や足音を簡単に消せるような連中が、技術の四校に入るとするのは奇妙だ。

これが戦闘面を重視する三校なら判らなくもないのだが（選手に成れるかは別にして）。

「チャーミングなワタシはUSNAから来た、リレイ・スナイパー。デース」

「プリティなワタシは、同じくUSNAのマリイ・スナイパー。デース。二人合わせてスナイパーシスターズ。ネ」

双子というにはあまり似ていないので二卵性だろう。

それはともかくこれで四校が勝利できたというのが腑に落ちる。

一人くらいではどうしようもないが二人、それも連携が取れる姉妹であれば隊としての戦闘力が保証されるからだ。

「それで、何をしに来たんだ？」

「私たちと同じタイプのソルジャーが居ると聞いて驚きマシタ。ステイツでもヴォイスコマンドはレア。デース」

「そこで挨拶を兼ねて偵察に来たのデース」

信じ難いことにこの二人は本気で挨拶に来たらしい。

これで本当に偵察だったら間抜け過ぎる。

実際にこちらの様子を窺うよりも、レオやエリカにからんで話をすることの方がメインになっていた。

「エリカとレオはステディなのデスカー？」

「ばつ馬鹿言わないでよ。なんてこんな奴…」

「そういえばレオくんとエリカちゃん、時々二人で居なくなるわよね。も、もしかして…」

そんな風に他愛のない会話をしている様子を見ると、やはりスパイには見えない。

しかし、美月がこの手の話題で逆襲するとは思わなかったな。

「あれは単に技の一つも授けてやろうと特訓してるだけよ！ ほら、レオも何か言いなさいよ！」

「うーん。こういう時にムキになって否定しない方が良いぜ？ まあオレとしちやあもう少しお淑やかになってくれねえと、こっちの身が保たねえ」

焦るエリカだけなら困ったことになったのだろうが、レオがのんびりしているのもそれ以上の誤解を生んで居ないようだ。

やはりこう言う時は無理に否定しない方が良いのか。

俺も同じ様な目にあってる時は、参考にさせてもらおう。

「ワーオ！ やはりNINJYAなのですな！」

「ニンポーを学んでいたとは、さすが私タチのライバル。デース！」

「誰がライバルよ！ 今日知りあつたばかりでしょ!？」

エリカがやり込められているというか、右から左に流されているのは珍しい。

普段はからかわれる立場の幹比古や美月も加わって、その日の日程は笑い話と共に過ぎて行つた。

● 蠢くモノ

暗い部屋の片隅に仄かに輝く蝶が訪れる。

どこから来たのか、何故か輝いているのかなど家主は気にも留めない。

蝶の輝きは次第に変化し、人の首が現れた。

『食いついたようです。いかがいたしますか?』

そいつが口を開くと、喉では無く大気が振動して声が漏れ始める。

家主は満足そうに頷いた後、僅かに思索して傍らに居た男に声を掛

けた。

「黄^{ウオン}。申し訳ないのですが、孫^{スン}大人の甥御さまを暫くお願いできますか?」

「兵器ブローカーの元に逃げ込むまで…ですな? 承知しました」

ここまでのやり取りは、予め決めておいたことだ。

ロバート・孫^{スン}は既に用済み。後は兵器ブローカーを巻き込んで消えてもらうだけだ。

では、何を思索したか?

『「徒督」。私は何をすればよろしいので?』

「朱桓」は追い掛けている部隊を見守ってください。逃げ切るようなら適度に証拠を残しつつ：主要な人物を探ること」

それが首を操る者の本名なのだろうか？

ジェームズ・朱チユーの使いに対し、家主である周チヨウ・公勤ゴンジンは命令を下した。

『全て終わった後で、そやつらを始末すればよろしいので？』

「いえ。その友人くらいにしておきましょう。時間を掛けて悩みを聞いて居る間に、緩々と仲良くなっておけば便利ですからね」

マツチポンプでロバート・孫スンらを処分する。

その過程で浮上して来る九島の影響が強い部隊に入り込み、自らの手札にしたいと周チヨウは口にした。

そうやって十師族に入り込み、時間を掛けて目的を果たすつもりなのだ。

『承知いたしました』

命令を理解したことを告げると、首：『落頭民』と呼ばれる化生体は姿を消したのである。

「しかし、名倉さんは惜しいことをしましたね。用意周到に準備したのに自決されてしまいました」

彼の地位を奪えれば楽だったのですが…。

周チヨウはそう言いながら、今も自らの一部に食い込んだ針の痕を眺めながら部屋を後にする。

闇の中で蠢くモノたちの活動は、まだ始まったばかりであった。

九校戦本戦、中編

●氷中に響く

大会日程が進み、俺たちはアイス・ピラーズ・ブレイクの応援に来ていた。

「心配要らないのに」

「そもいかないさ。ソレを造ったのは俺だしな」

雫は襷で袂を縛った後、とある小物を大事そうに懐へしまった。

ソレは母親の影響から『共振破碎』を使いたいと言う雫のために、校内予選が終わった後に北山家に納入しておいたものだ。

「…大丈夫。パラレル・キャストも出来るようになったから」

「そうなんですよ。雫ったら私の付き合いで練習始めたのに、先に覚えちゃって」

最初の予定では、ほのかにパラレル・キャストを覚えてもらう予定だった。

低スペックCADでも光振動が操れる彼女は、ミラーズバットで断トツの有利さを確保できるからだ。

「それは仕方無いな。ほのかにやってもらっているのはCAD抜きの状態だし、慣れるまでが関門だから」

「一度覚えたら簡単なんですけどね。…改めて七草会長の凄さが判ります」

ほのかが低スペックCADでのミラーズバットで行う作戦は、七草会長の『マルチスコープ』と良く似ている。

光振動の探知を短くレーダーのように行い、他者に先んじて跳躍するということだ。

シンプルだが余計な手間を入れない分だけ确实だし、感知なら会長と跳躍なら里見選手と特訓できるのも良い。

「ともあれ雫の勝利を見守ろうか」

「達也さんは気が早過ぎだよ…」

「…勝つのは否定しないのね」

表情が変わり難いが、これで雫は負けん気が強い。

おそらくは一足先にパラレル・キャストを覚えたのも、ほのかに負けまい。そして母親が得意だった魔法を覚えたいと言う気持ちゆえだろう。

そして、試合が始まると早々に会場を湧かせていた。

アイス・ピラーズ・ブレイクは様々な衣装を着るが、涼しげな色の着物は実に似合っている。

危なげなく端末型CADで自前の氷柱に情報防御を掛けると、早速アレを取り出した。

『二度振るえば昏倒す』

ちりん。

雫が取り出したのは鐘型の特化CADだ。

銀色の鐘が鳴り響くと、相手フィールドに掛けた探査用の振動を拾い始める。

『二度振るえば岩砕く』

チリンチリン。

その音が鳴った瞬間に、相手の氷柱にヒビが入る。

歓声の中で肉声など聞こえないが、注視した音を拾うカクテルパーティ効果で…。

いや、ピックアップを開始したのか中継が特殊なマイクを使って雫の眩きを放送して居た。

『二度振るえば死に至る』

チーン。

澄んだ音が響いた瞬間に、相手方のフィールドでガタガタと音が続いた。

気が付けば全ての氷が一斉に崩れ落ちたのだ。

一瞬遅れて観客席から、もの凄い歓声が周囲に木霊する。

外見には注目したが魔法までシチュエーションに合わせて来るとは思ってた居なかったらしい。

「凄い凄い！ でも…。あのCADって鈴の形をする必要があったんですか？ それとも市原先輩に対するアピールとか？」

「ほのかまで会長の真似はやめてくれ。…地面への介入返しをされた

時用だよ」

「そういえば市原先輩の名前は鈴音だったか…。」

「迂闊だったなと思いつつ、簡単に説明を入れた。」

「勝負である以上は対策されて当然だ。切り札として取っておくならまだしも、緒戦から使うんだからな」

「情報を調べれば得意魔法も判るかもしれませんが…。」

北山家はともかく北方のセキュリティそこまで低いとは思えないが、全ての勢力が出来ないとも限らない。

それに大会だけで使用するならまだしも、家の方に納入したことでひよつとしたら自衛で使う日が来るかもしれない。

共振破砕なんて物騒なモノを使う火が来てほしくないが、イザという時は深雪も巻き込まれるだろう。そのこともあつて対人向けでは無く、対戦車級のCADを用意しておいたのだ。

「ほのかは午後からミラーizziバットだろ？ レオ達の調整に行くから応援にいけないが、本戦になったら必ず行くよ」

「はい！ 先に勝ち上がってお待ちしますね」

豪語しているように聞こえるが、ボールが出るよりも先に探知するとはそういうことだ。

低スペックCADでは飛行をはじめとした大きな魔法が使えないのもある。

流星に本戦になればBS魔法の使い手も居るかもしれないが、予選であれば上位入賞で良いので確実だろう。

対してモノリス・コードの方は、例の留学生込みで見たいところだった。

●阿修羅system

午後から始まる低スペックCAD戦のモノリス・コード。

ここでも入場時に歓声が木霊していた。

ピックアップされているスクリーンには廃屋ステージに現れた四校の生徒がいる。

「今日はフル装備ですね。モデルみたいでステキですけど良いのかしら」

「レオも魔法陣を持ち込んで居るからな。…しかしコートにマフラーか」

四校の留学生たちはボディーマーの上から、それぞれに異なる服装をしていた。

美月は溜息をつきながら、スラリと長い容姿を褒め称えている。

髪型をアップにしている方はカチューシャにリボン、夏用のジャンパーを羽織りミニスカートを履いて、指抜きグローブやブーツには拍車のような飾りが付いている。

ウエーブの髪型の方はニット帽にマフラー、コートを着てロングスカートを着こなして居た。

夏冬をイメージさせる服装だが、夏場に冬物は熱くないのだろうか？

「あちらも魔法陣入りの布を？」

「自分達以外は出来ないという過信で負けたくはないな。それと大会スタッフが止めないから問題ないんだろう」

ルールにはスペックに対する規定はあるが、何を持ち込んで良いのかなどは決まっていない。

アイス・ピラーズ・ブレイクの仮装などはその良い例だが…。

例えば閃光対策にゴーグルを付けたら駄目という規定は無いし、試合ごとに決まって居るルールに抵触しないなら構わないのだろう。

低スペックCAD戦は軍隊の訓練でも取りあげられているので、むしろボディーマーよりも普通の服の方が違和感が無い。

「もしかしたら、来年以降は護衛志望という理由で流行るかもしれないね」

「…戦闘に関係しているならありえるな。まあ暗器を持ちこんだら禁止されるだろうが」

迂闊なことに布型魔法陣や鈴型CADを用意しておきながら、服飾にからめるというアイデアは思いつかなかった。

リストバンド型が人気なものもおしゃれと携帯性を兼ね備えているからだし、先にやられたのを見るとコロンブスの卵だ。

そして…思わぬ機能がもう一つ隠されていたのである。

『ウインダム。ソーサル・アーマード・シルエット!』

『イエス。マスター』

ウェーブの方がコマンドワードを発すると、小さな魔法式が連続で発動。同じ魔法を異なる用法でパラレル・キャストしたのが視えた。さざ波のように硬化魔法が拡がり、コートやマフラーを鎧に変えて行く。

『ミラクル! ソーサル・ガーダー・シルエット!』

『イエス。マスター』

今度はアップしている方がパラレル・キャストしたのが視える。ただし魔法の構成が少し違う。

先ほどと違い今度は硬化魔法が三割で自己加速が七割。

先行して場所を抑えに行くことで、まずはこちらのモノリス位置を把握しに掛つたらしい。

「なるほど。暗器じゃなくて複数のCAD:それもどんな特化型なのかを隠す為か。考えたな」

「複数のCADですか?」

「低スペックで戦い抜くにはパラレル・キャストは有効ですからね。特化型だと得意分野は見た目で判ります」

俺の眩きを拾って美月だけでなく平河(妹)が反応する。

「そういえば、なんで特化型は形状で変化するんですか? よく見るのは銃みたいのですけど」

「その。照準装置の他に、システムが特化しているのは判るんですけど…」

美月の質問に平河(妹)が唸った。

専門書だと長い上に、人に聞くとそういうものはそうになっているのだと教えられる事も多い。

普通のエンジニアには不要な知識なので、まあ仕方無いだろう。「誤解する者も多いが、特化型は標準型以上の能力を持っている。歪な方向にはあるがな」

「射撃系の魔法時には照準装置を前提に偶に拡大装置とか、飛行魔法だと省エネ用とかタイムレコーダーとか色々専門的に特化してます

よね」

俺はその答えに半分だけ頷くと、残り半分を部分的に否定した。装置の付け替えで変化するのも当然だが、もっと根本的な問題があるからだ。

「装置の構築内容も関わってくるが、特化型の妙味は魔法式のシンプリ化にあると俺は思う」

照準装置はその延長線上にあると言っても良いだろう。

だが銃の形状をしているのはそれだけではない。

「まず魔法式を文章だと思つて5W1Hを少し考えて見てくれ」

「えっと。何に対して、何時、どんな風に、魔法で何がしたいか…」

「詳細を挙げると八系統xプラス・マイナスコードで十六種類の属性…のどれであるか、ですね」

美月の説明を平河（妹）が補足する。

「実際には系統外もあるが、ここでは置いておこうか。特化型の場合はまず『属性』指定が不要。銃型の場合は『対象』と『タイミング』指定も不要になるな」

「あっそうですよね。銃口を向ければ良いんだし、トリガーを引いたら発射ですものね」

特化型には一つの属性しか入れれないが、だからこそ指定が不要になる。

最初の指定でプラスコードなのかマイナスコードなのか、場合によつてはそれも機器で絞ることが出来るので、設定その物がシンプルだ。

5W1Hで言えば、実に5分の3が指定不要と言うことになる。

「系統外…やぱり司波さんって凄いですね」

「研究畑に居たから実例を沢山見る機会があっただけさ。まあ殆どはBS魔法だけだね」

俺自身も使用可能だが口にする必要もないだろう。

嘘では無い範囲で、FLTのラボで見たとだけ説明しておこう。

「こうして特化型では汎用型よりも魔法式が小さい。さつき平河さんが言っていた装置は、そこから何を拡大するか…ということになる」

「それでよく見かけるタイプは銃の形状をしているんですね。私知りませんが、平河さんも凄いです」

「いえ…私なんて大したことは無くて…」

美月が褒めると平河（妹）は照れたようだ。

俺と比較したのだろうが、こちらは親に放りこまれただけなので調べている彼女の方が凄いとも言える。

「そう悲観することもないさ。俺が飛行魔法を開発できたのも、自分の魔法が弱いと向きあったからだ。平河さんには平河さんの能力があつて、ちゃんと向き合えれば自分だけの世界が広がるはずだ」

益々照れたようだが、俺は別に褒めたつもりはない。

自分の能力と主観を元に、自分だけの世界が広がると言うのはソレと知られた理論でもある。

それを付きつめていくことで、他者にはない自分だけの魔法に辿りつくのだ。

そうした会話を続けるのも良かったが、暫くしてこちらメンバーも四校の連中を見付けた様だ。

『ガンヘッド！』

『効かないよ。もらった！』

髪をアップにした女：リリイだったか？ 先行する彼女の迎撃に十三束が現れる。

拳の一撃を増幅して放つ衝撃波を、接触型術式解体で無効化。

そのまま殴り付けるために飛び込んだ。

『それっ！』

『グラム・デモリッション!?』 ですが、まだまだデース

殴りつけた瞬間に硬化魔法と自己加速を共に解体。

瞬間的に術式解体を中止し、強化を掛けて本命の二撃目を放った所でバックステップで離れながら受け止められてしまった。

『あれ?』

(やはりレオと同じか。似ているというよりソックリだな)

リリイ達の魔法は断続的に再展開して居る。

解体したはずの硬化魔法と自己加速が再構築され、二撃目が決まる

前に下がられたのだ。

とはいえタイムラグは存在するので、バックステップでかわさなければ直撃を食らった筈である。

見切って受けたのではなく、無理やりかわしただけでも言えるだろう。

『いきマース。マーヴェラス・カノン!』

『そうはいくか! パンツァー!』

援護に出たウエーブの髪型：マリイの放つ衝撃波を、レオが全身で受け止める。

先ほどリリイが放ったモノよりも強力だが、レオの硬化魔法ならば何なく弾けるレベルだ。

「威力が強過ぎませんか? 幾らパラレル・キャストで負担を分散しているにしても、今回スペックだとギリギリのはずです」

「おそらく…という推測に過ぎないが、聞くか?」

「お願いします」

精霊の眼で確認したとは言えないので、あくまで予測という言い訳を付けておいた。

「コマンドワードを処理する特化型CADは、あくまで命令用だ。そこから複数のCADに指令を出して居るに過ぎない」

「え?」

「嘘…」

実際に確認して信じられないことだが、まあやっている以上は可能なのだろう。

「パラレル・キャストは覚えるのが難しいが、実は同時併用を諦めると案外簡単なんだ。この順番ならば問題無いと言うタイミングで切り替えればいい」

「それが出来る人もあんまりいないと思うんですけど…」

「でも、それなら判ります。だからこそその入力専用のCADなんです
ね」

俺の言葉に美月は半信半疑だが、平河(妹)の方は納得した様だった。

「つまりあれは線路の分岐器と同じなんだ。列車が来る時にプログラム通りに線路を切り替えているだけ」

「タイムラグの問題が出ますけど、特化型を三つくらい並列に繋げばかなり楽になりますね」

平河（妹）言葉に頷き、簡単に図で描いて見せる。

最初は一本の線だが、そこから三本の線に分岐し異なる命令を優先順位添って処理して居るのである。

「今回の試合では、『普通なら』コンマ一秒で差が付く様なシビアな戦いじゃないからな。不安ならさつきみたいに後退すればいい」

「まるで三首のケルベロスとか、仏像の阿修羅像みたいですね」

美月は美術部らしく、俺が描いた線に簡単な絵を付属させた。

そして、この顔は硬化魔法、この顔は自己加速、この顔は振動魔法と説明を付け加える。

「世界は広いですね〜」

「まさかこんな突破口があるとは思いませんでした」

かじっている最中の美月はともかく、熱心に勉強して居る平河（妹）は驚いているようだった。

「俺もだ。…しかし面白くなって来たな」

「え？ でも苦戦しちやいますよ？」

技術面での敵が、カーディナル・ジョージに続いてようやく二人目が出て来たと言えるだろう。

これまでは飛行魔法の提供にみられるように、一方的に供給する立場だった。

だがこれからは、俺も気を抜けないし追い掛ける事もあるだろう。

「達也さん、なんだか楽しそうですね」

「そうかもしれないな。少し面白いことを思いついたんだ」

「もうですか!？」

俺は頷きながら、指を口元に立てて静かにするように伝えた。

本来ならば教える必要はないが、まあこのメンバーで見て居なければ思いつかなかったことだ。

アイデアくらい教えても問題無いだろう。

「素早く複数の特化型CADに命令を伝えているわけだが…。普段の生活だと不要だよな？　つまりシンプルに汎用型一つにだけ繋いでも良いんだ」

「汎用型を特化型で操作する…ですか？　それってどう意味が…」
流石に研究をしていないと直ぐには気が付かないか。

飛行魔法のメドが付く前に、幾つか考えていたことがある。

その一つはパラレル・キャストの普及化だが、もう一つ…完全思考型CADが持つ問題を減らすというものがあつた。

俺は試合をしている連中を指差して、そつと二人に耳打ちする。

『バヨネット！』

「例えばあの魔法は手刀から放つ衝撃波と、指先自体の硬化を併用して居る。音声コマンドに必要な完全型だと偶にミスが出るのにな」
「っ!？」

勿論、音声と動作の両方で補っているというのもあるだろう。

だがあの並列処理型CAD…美月の言葉を借りるならば阿修羅システムは、問題無く完全思考型CAD処理して居る。

「もしかして、完全思考型CADの誤動作を減らす為に？」

「そういうこと。特化型とは言え並列処理を問題無く運用できるんだ。汎用型一つくらいなら何とかできると思わないか？」

俺は頷きながら決着の付きつつある試合の行方を眺めた。

そこではレオと十三束に対して、リリとマリイが最後の勝負に挑んで居るところだった。

『エリカが居ないと言うことは、モノリス優先デスカ？』

『悪いな。これも勝負だ』

流石に男たち二人で足止めして居ることに気が付いたようだ。

自己加速のコントロールが上手いエリカは、四校のモノリス周囲で迎撃を最低限の動きで避けているところだった。

放っておけばそのうち一撃入れて勝負にケリを付けてしまうだろう。

『仕方ありません。テストを急ぐべきデスネ』

『OK。せっかくのプレイ、中断するのは惜しいデース』

ここで二人は技術の四高らしく、勝負よりも実戦テストを優先したようだ。

間にあわないかもしれない帰還よりも、大技に打って出る気だ。

『スタンダップ！ バスタード・モルドレット』

『スタンダップ！ ワイルドハント・アーサー！』

『イエス。マスター！』

二人が所持する複数のCADがフル稼働を始める。

コートは甲冑となって全身を高速突撃に耐える破城槌に変え、ミニスカートやアクセサリーは衝撃を周囲に撒き散らすブレードに変化する。

断続的に継続する魔法式は術式解体でも完全処理は難しく、この攻撃にどうするのか普通ならば悩むだろう。

しかし、俺は絶好の対処手段があることを知っていた。

『来いよ！ ジークフリート！』

レオが十三束の前に出ると全力で不壊魔法を使用する。

場合によつて強力なその魔法もまた、状態を維持する硬化魔法に過ぎない。

使い勝手が難しいこの魔法も、相手が突撃して来るのを防ぐならば問題無く使用出来るだろう。

やがてレオが二人に押し倒されるころ、エリカが四校の護衛を気絶させるのが表示される。

こうして低スペックCAD戦におけるモノリス・コード予選は、一高が一位通過、四校が二位通過でこちら側のブロックを突破した。

九校戦本戦、後編

●星勘定の読み合い

九校戦が終盤になり、点数差の面では一高が巻き返して居た。しかしそれは各校がお互いの得意分野に絞ることで、星勘定の奪い合いに移行し結果として平均化したせいもある。

それ以外に今回の大会で変わったことと言えば、実験的な魔法やエレメント出身者に特化タイプの生徒を投入して来たことだろう。

やはり考え得ることはみな同レベルであり、一步先を読むか意表を突くかどうかが戦いの分かれ目になっていた。

「まさか二校が化生体を使ってくるとは思ってもみなかったが……。本戦ではいけると思うか？」

「大丈夫。先輩達には伝えたから次は負けないと思うよ」

驚くべきことに昨日行われたモノリス・コード予選の最後試合で、二校は化生体を使用し奇襲によって一高を破った。

十文字先輩を極力無視して引きつけるだけにして、残りのメンバーを圧倒したのだ。

対処手段があるのに伝えて居なかったのは迂闊だったが、予選は総当たりなので危なげなく本戦に出場できている。

勝ち抜け方式である今日から行われる本戦で確実に対処しておけば良いだろう。

現在行われている二校と三校の試合も三校にすれば、対処可能な確率は高いものと思われた。

「黄の煙ウオンに比べて未熟だが、考えてみれば京都にある二校が古式魔法を覚えないというのもおかしい話だ」

「ことはそう簡単じゃないよ。他はともかく九島のお膝元である二校とだなんて……。誰かが仲介したんだと思う」

古式魔法師が隠れ住む京都にありながら、これまで二校は縁が無かった。

それというのも魔法師を牽引してきた九島家は、自分達を裏切り抜け駆けした相手だと言う認識があったからだ。

幹比古が言う様に何者かが手引きしたと考えるべきだろう。

「化生体だけ使える奴が売り渡したただけかもしれないが、過信は禁物としておこう。古式魔法は使えて当然と思うべきだ」

「その方が良いね。副会長にも一応は対処手段を伝えてある」

俺は幹比古の判断に頷きつつ、雑務に当たっていた深雪を手招きした。

「お兄様。何か御用でしょうか？　もしや新人戦で不都合でも？」

「正確には俺が出場するモノリス・コードじゃないがな。：里見選手に伝言を頼む」

俺が警戒したのは、二校が化生体を利用したことで亜種的な使い道をする可能性を考えたのだ。

「ミラージ・バットですか？　承知しました。スバルにはどのようなお伝えすればよろしいのでしょうか？」

「里見選手に用意したアレを、二校も覚えている可能性が出て来た」

新人戦のミラージ・バットに用意したのは、飛行魔法のアレンジではなく跳躍系のアレンジ。

飛行魔法は消費するサイオンが大きいし、新人戦では使わないか短時間に留めておいた方が良いとの判断だ。

だからこそ元から跳躍が得意な里見選手をそのまま起用し、飛行魔法は混戦時の処理などに回予定だった。

昔から天盤を造ってそこを台座にジャンプする方法があるのだが、俺は化生体を応用して扱い易くした。

そのことによりこれまで上方に跳躍する手助けであったが、横や下などアクロバティックな使い道が出来るようになる。

「対処されること前提として、ほのかとは違ってコースクラッシュを警戒するように伝えてくれ」

「承知いたしました。その様に伝えておきます」

ほのかが低スペックCAD戦でやった作戦は、光振動を感知してボールが出現する場所を事前に把握するだけのシンプルなものだ。

だからこそ、視線を読まれた場合に備えて嘘のモーションを入れるのは容易かった。

里見選手は探知では無く天盤を造って足場にするのだが、飛行以上の速度で横移動や急降下を行う為、フェイントを入れる余裕はない。そこで警戒しておき、頭に入れることでスムーズに入れるべきは混乱が起きた場合の行動だ。

二校の選手も同じ様なジャンプを行うかもしれないと伝えておけば、間違えて衝突したり、他校とからんで空中で立ち往生する事態に備えられるだろう。

そんな指示を出しつつ自分達が出場する新人戦を待つて居ると、新人戦の二校と三校戦で再び意外な状況が待つて居た。

いや。予選とはいえ一校を破った昨日の試合を考慮すれば、三校が警戒しない筈が無い。

新人戦とはいえ、うちと同じ様に備えていたと考えるべきだろう。

「幹比古はどう思う？ あの動き」

「かなり動きを読んだね。化生体対策も出来てたし…。場合によっては幻覚を使った戦闘の経験もあるのかも」

三校は化生体を生成するまでのタイムラグや、その効果について具体的に知っていたと思われる。

昨日の試合で沢木先輩が空気甲冑ごと組みつかれて、物理作用が無い幻覚部分を空振りしていたのに対し、明確にどの部分が問題なのかを理解して防護していた。

更に解除も堂に入ったもので、スムーズに撃ち破って自由の身になっっている。

「三校のコーチは『あの』マジョリー・ドーだ。幻覚を使った訓練くらいしておかしくはない」

「マジョリー・ドーってあの？ 世界一の戦闘系魔法師の…」

「え!？」

幹比古が反応するよりも大きな声で、見学に来ていた明智選手が絶叫する。

そのまま掴み掛って来たので、手を払って首回りを自由にした。

「それって本当なの!?! 世界的な有名人じゃん! あー会いたかったなあ。グランマのお友達だって言うのに会った事無いんだよね」

「フレームヘイズは常に戦場に居るような存在だ。できれば会わないに越したことはない」

言いながら明智選手がイギリスの有名な古式魔法師の家柄であることを思い出して居た。

混血による能力強化を図った時代の縁談だったそうだが、戦闘を重視する魔法師ならばフレームヘイズと交流があってもおかしくはないだろう。

「しゃべっても問題無い範囲で教えてくれるとありがたいが、どうかな?」

「いーよー! といっても私が知ってるのは有名な『即興詩』と…幻覚だと『トীগ』くらいなものだけだね」

“ 弔詞の詠み手” マージョリー・ドーが得意とする、『皆殺しの即興詩』はシンプルな詠唱式だ。

CADが無かった時代に魔法式の雛型として、古式魔法を圧縮するために考案されたものと伝えられている。

恣意的な対象調整はCADを使っても一番時間をロスする部分だが、そこを即興詩によって微調整して居る…らしい。

「トীগという魔法は着グルミみたいな感じで、さつき言ってた化生体に近いらしんだけど。他に分身とか爆発させたりするんだって」
「なるほど。体の延長をメインにコピーして端末にするのか。うまい使い方をするもんだな」

話を聞く限り化生体を使って、格闘や強化系の魔法を使う時に体のサイズを延長したりするらしい。

そして幻影で造った姿だけに、コピーして分身するのも中に炸裂系魔法を詰めこむのも簡単なようだ。

「トীগって語源的にはギリシアの方の長い衣でしたっけ? ということは…」

「そうだが。何か使えそうな作戦を思いついたのか?」

話を聞いていた平河（妹）が何やら考え込み始めた。

流石に今すぐ使える様な案では無いだろうが、後の試合に参考になるなら聞いておいて損は無いららう。

「いえ、試合とは関係ないんですけど、四校のアレと合わせてちよつと閃いただけで」

「そうか、なら終わってから…」

「それってどんなのでしょう？ 私、気になります！」

謙遜というよりは形になっていないらしく、この場は切り上げようとしたところで美月が食いついた。

目を輝かせているのは単に面白がっているのか、それとも…。

「四校のアレってCADを隠す意味しかなかったじゃないですか。一応は最終形態用に関わってましたけど」

「そうですね。冬用のコートは重装甲で夏用はブレード付きくらい？」

美月の勢いに押されて平河（妹）が少しずつ喋り始めた。

とはいえまだ形になってないアイデアなのでうまく説明が出来ないようだ。

「つまり服も含めて意味のある連携型CADにしたらって思ったんです。どうせ特化型は1つか2つの魔法しか入れられませんでしたし」

「ヒーローのスーツみたいにしたらどうでしょう？ それです…」

「…長くなるようなら俺たちは出るぞ。後は任せた」

二人の話は長くなりそうだったので、俺たちは試合会場に向かった。

まずは七高を倒し次に待ち受ける三校の対策をせねばならない。

明智選手がこちらに向けて行って来いと掌を振るのを見ながら、溪谷ステージへと入場する。

●妖術、七人御崎

溪谷ステージで海の七高と相對するのも面倒だが…。

当然と言えば当然ながら、七高は七高で新戦法を導入して来た。

「どうやら隠し球を使うみたいだな。その意味では二校は切り札を使うのが早過ぎた」

「そうだね。今日使ってきたら先輩達是对処するのは難しかったかも」

七高のメンバーは後先構わず川の側に直行し、何やら用意したツールを準備している。

ややあつて聞こえて来たのは、小さく繰り返す低いリズムだ。

ドーン、ドーン、ドーン。

ドーン、ドーン、ドーン。

「我は川の源、流れる水を言祝ぐモノ。小澤のタケルこれにあり。この川は、母なる川に似た良き流れなり」

太鼓が聞こえ始め、二人目、三人目が追従して徐々にペースを揃えて行く。

「我は川の流れし麓、その恵みを守るモノ。小湊のタケルこれにあり。この川が母なる川なれば、この地もまた故郷なり」

一人目が口上を述べると二人目も続けて唱えるが、そこに特に意味は無い。

精霊の眼で見ても大きな差は生じて無かった。

「我は川の勲し、荒ぶる勇しに乗りしモノ。小崎のタケルこれにあり。故郷の川であるならば何者にも遅れまい」

三人目の口上と共に、三人の魔法式が連携を持って起動し始める。

その展開はスムーズであり、言葉には意味が無い様だがリズムには意味がある用だった。

「どうするんだ？ このまま見守るのか？」

「海の七高が川辺に居るんだぞ？ 黙って受けるのは巧くないな」

森崎が不機嫌そうに尋ねて来るが、俺としては首を振るしかない。

見ては見たいが、最後まで確認していたら手痛い目に会うだけのことだろう。

「幹比古、なんとかできるか？ 霧はその後で良い」

「じゃ、こつちでなんとかするよ」

予め建てておいた作戦では、霧で覆ってその間に各個撃破する予定だった。

七高が川を利用するのは読めて居たし、川の側であれば霧を造るのは難しくないからだ。

やがて幹比古が幻術を用意し始めた頃、目に見えて様子が変わり始

めた。

三人が展開する魔法式は他愛なく一致し、その動きに乱れも綻びも無い。

「まさかあれは乗マルチプリケイティブ・キャスト積マルチプリケイティブ・キャスト魔法、いや儀式魔法用の連唱式か。これはいかんな」

乗マルチプリケイティブ・キャスト積マルチプリケイティブ・キャスト魔法は特殊な例でしか見られないが、掛け算と言っても良いほどの効果を発揮できる。

非常に労力の掛る魔法式の展開と事象改変を振り分けることで、圧倒的な能力を示せるのだ。

これに対し儀式魔法用の連唱式は、得意な能力を持つ者が担当を分けるだけの方式。

掛け算には及ばない足し算ではあるが、それでも高校生レベルでは圧倒的な能力であると言える。

乗マルチプリケイティブ・キャスト積マルチプリケイティブ・キャスト魔法が特異な関係のある者同士でなくてはならないのに対し、親和性・協調性のある者というもう少し広い範囲で同調できるのも大きい。

『見るが良い、妖術七人御崎！ 受けるが良い、母なる川の流れを!!』

ドーン、ドーン、ドーン。

ドーン、ドーン、ドーン。

太鼓の音が鳴り響き、音が大きくなるにつれて川が膨らみ始める。

明らかに魔法師一人の許容限界を越えた水量が、堰を切った濁流と化してうねり始めた。

もし、俺たちが防御系の魔法を展開して待ち受けて居たら…。

その時は押し寄せる水によって、文字通り為す術すべなく流されていただろう。

高きから低きに流れて来る水は、ただの自然現象。

既に事象改変から自然現象になり変わった時点で、どんな対抗魔法も意味を為さない。

だがしかし、それは防御系の魔法で対抗したら…の話だ。

『やったか!?!』

同調したことで『川上』にも声量も大きく聞こえて来る。

だが彼らは知るだろう。

そこに俺たちが最初から居ないことを。

「なにっ！ 幻だと!？」

「探せ！ 近くに……」

「うわあ……、霧が。早く消さな……流さないと」

俺達と同じ姿をした偽者が、弱まっていく濁流の中に見え隠れする。

あそこに居たのは俺たちの姿をした幻影であり、だからこそ微動だにしないのだ。

霧が音も無く周囲を覆い始めるのは、ちょうどそのころのことだ。

水気を帯びた霧はこの段階では、魔法で作ってはいるがまさしく霧ゆえに解除されるはずもない。

「くそっ！ どうして流れないんだ！」

「もう一回やるか？ 同調を……」

次に烈風を起こしたのにも関わらず、霧は晴れることもない。

最初こそ造った霧だが、今は幻覚の霧だからだ。

そして霧の中で聞こえる声は二つ。

「なんで返事をしないんだ！」

今度は一つ。

精霊の眼で確認するまでもない。防御の薄い二人を森崎が移動系魔法で気絶させたのだ。

俺も合わせて領域干渉の強力な三人目に対し、何度目かの術式解散を試みる。

(やっと成功したか。さすがに精霊の眼を使わないと実戦では難しいな)

三つ連続で展開し、繰り返す毎に変数を自動調整する三連術式解散トリシユール。

これがようやく機能し始め、精霊の眼を使用せずになんとか成功するに至った。

現段階では、今のような余裕を持って繰り返せる時くらいしか使い道が無い。

(いや魔法の鍵や、場所を保護している様な固定化された魔法なら、試せなくはないのか)

そんな考えをしている間に三人目も倒れ俺たちは危なげなく勝利した。

「やはり強力な魔法には最初から対抗しないに限るな」

「校内予選で逃げ回ったのが役に立ったな。：水に強い七高の連中が戸惑ってた」

「偽者に気を取られて焦ったのもあるかもね。とりあえずはナイスファイト」

森崎が憎くまれ口を叩いたが、満更でもない様だった。

それほどまでにあの濁流の勢いは凄まじく、乗積魔法マルチフレイク・キャストではな

いものの連唱式の強大さを窺わせる。

リズムで合わせる為に時間が掛る上に人を選ぶことから条件が難しいが、面白い術式だったと言えるだろう。

●ヘリオスのチャリオット

新人戦の最終ステージは岩場が選択された。

ランダム性なので同じ溪谷や、他にも闘い易い森林・市街もあり得たが…。

「まあ平原ステージでなくて良かったと思っておくか」

モノリスコードの決勝は、通常枠も新人枠も一高と三校の対決だ。

今頃行われている筈の十文字会頭たちは、おそらく勝利を収めるだろう。

「ここまで接戦になるとは思わなかったな。会頭たちのおかげで圧勝かと思っただのに」

現在の総合得点は一高が僅かに優位、続いて三校、僅かに遅れて二校が続いている。

朝の試合で会頭たちは二校に勝利を収めており、新人戦の三位決定戦は切り札の相性問題で七高が二校に勝つと予想されるため、ここで二校は勝利争いから脱落。

ここで俺たちが勝てばミラーズバットを待たずして総合優勝、逆に負ければミラーズバットが全てを決すると言う微妙な点数差だった。

「それだけ掛け持ち禁止の効果が大きかったということだろう。来年も：似た形式になる可能性は高いな」

今年度が始まって暫くの下馬評では、七草会長や渡辺委員長を含めた三巨頭のおかげで一高勝利は確定とまで言われていたらしい。

才能が突出したメンバーが揃うということは、それだけ圧倒的なのだ。

それがまともな勝負になっただけ、今回試行された効果は大きいと言えるだろう。

本当に教育的な効果があったり平等なのかはともかくとして、大会実行委員会が興味を覚えるのは間違いが無い。

「それともかく達也、今回もメインで幻覚を使うのかい？ 一応はアレも持ち込んでるけどさ」

「さすがにプリンス達も許してくれんだろう。今朝がたの二校戦を見ても幻影対策は万全だと思っ方が良い」

「ならどうするんだ？ 正面から殴りあつたら勝ち目なんてないぞ」
念の為に尋ねて来る幹比古に返事をしていると、僅かな不安を滲ませて森崎が尋ねて来る。

どちらかといえば森崎も気の強い方だが無理も無い。

会頭たちの精強さに匹敵する能力を、同じ十師族である一条は持っているのだ。

「幹比古。霞む程度の幻覚と音での攪乱に合わせて、音波を調整できるか？」

「複合幻術を囷に三半規管を狙う訳？ できなくはないけど一度やってみるし対策されると思うよ」

「予選でやったアレか。確かに今回の大会はそういう展開が多いよな」

予選において森林ステージで戦った時、音波を浴びせて三半規管を麻痺させたことがある。

そののアレンジだが、二人が警戒して居るのはどの切り札も一度見せたが最後、対策されてしまうということだ。

初見殺しはあくまで初見殺し、判明した時点で終わりと言うのには

同感だ。

「拮抗する状態を造って足止めしてる間に、精霊を行かせるってのも少し難しいと思うどっちの制御力も甘くなるからね」

「惜しいな。途中までは当たりだ」

俺が狙いたいのは拮抗状態を作り出すことだ。

こちらの策を潰させることで一手先を行きたい。地力で劣る以上は読み合いだけでも勝ちたい所だ。

「足止めということとは…。一人ずつやる気か」

「そうだ。相手の出方は予想できるからな。逆手にとらせてもらう。以前に渡したアレを使ってもらうつもりだが…」

森崎の確認に俺は頷いた。

千日手で状況を固定し、拮抗状態になったところで各個撃破を狙う。

もちろんソレを三校も警戒して居るだろうが、だからこそ盲点が存在するのだ。

「おそらく最も干渉力が強い一条のワントップで、吉祥寺が全体のフォロー役。三人目がモノリスと一条に想子ウォールを掛ける担当だろう」

「そこを狙うってわけか。良くもまあそこまで悪辣な事を考えるよ」

どういたしまして。という他は無い。

こちらが見えない弾丸対策で幻覚を使う様に、相手も想子ウォールで守りを剥がされない様に戦う。

戦力が同レベルの戦いである以上、対策を立て合うのは当然。

後はどこまで先を読むか、あるいは意表を付くかでしかない。その意味において地力で勝る三校は、地味だが堅実な手段を取って来るだろう。

問題は俺たちが一步先に行く作戦を立てる様に、相手も何らかの作戦を立てるはずだった。

これにどう対処し、いなしてこちらのペースに嵌めるかが重要に違いない。

こうしてモノリスコード新人戦の最終戦は始まった。

結果としてお互いが相手の作戦を読み合ったことで、一周回って手札の交換になったと言える。

「ホバリング移動？ 高速で突っ込んで来るぞ！」

「仕方無い。幹比古は幻覚だけでも頼む。森崎はチャンスが来たらグラビトンに切り換えてくれ」

「了解。なんとか間に合わせるよ」

吉祥寺は重力軽減の魔法で浮かび上がると、三人をまとめてこちらに突っ込んで来た。

それはさながら古代の戦車が、御者・弓手・槍使いを載せているかのようなのだ。

対してこちらが用意した切り札の一枚は、リンが居た頃に森崎に渡した見えない弾丸のカスタム魔法だ。

威力は殆どないが衝撃圧が強いので、かすただけでも仰け反る効果がある。

今は厚い情報防御で抜けないが、術式解体を当てるか振動系を何発か当てて森崎でも抜けるレベルまで強度を落とせば通用するだろう。

「どうやらこちらが陸津波くがつなみ辺りを使うと思っただけならいいな」

「まあこの地形だとそうなるよね。防がれ易い衝撃系よりも実弾を当てた方が早いし」

吉祥寺は無数の土砂をぶつける陸津波を警戒していたようだ。

物理的な攻撃は領域干渉が通じず情報防御も効き難い。岩場ステージゆえにそれを真っ先に警戒したようだ。

使う気が無かった為、それは半分ほど意味が無かったが別の意味でこちらの意表を付いた。

各個撃破するつもりの戦術が、三人同時行動によって無効化されてしまったのだ。

また高速移動する事で、こちらの音波攻撃が間にあわなかったのも痛い。

「こうなったら、こっちが正面戦闘を挑むしかない。釣る瓶撃ちにするから幹比古も幻覚が切れない程度に頼む」

「軌道が低いけど飛んでるのか…。了解、なんとかするよ」

俺は術式解体のバリエーションをバーストモードに設定し、同時にトリシニールを収めたCADも立ち上げる。

代わりに振動系を入れた補助用のCADを待機させ、まずは相手の防御を剥ぎながら迎撃を行うことにした。

「まったく。コレが無かつたら今頃は大変だったんじゃないかな」

幹比古は以前に渡した札型の簡易CADを取り出し、扇状に並べて行く。

その中から行使するのは雷童子や風魔法が幾つか。特に強力なのは確か荒風法師だったか？

どちらもタイムラグがある魔法なので、フェイントを兼ねて弱めの風魔法から使用する様だ。

左右から続けざまに使用しつつ、一部には遅延魔法を入れることで四つの魔法を連続で使用して居た。

(ならそれを邪魔しない程度に撃ち込まないとな)

俺は相手の攻撃に合わせて術式解体のバーストモードで迎撃し、トリシニールは相手の情報防御を一応の目標に設定しておく。

迎撃には成功するものの、案の定、想子ウォールで術式解散は防がれてしまう。

とはいえ三連の術式解散は駄目もどだったので、想子ウォールを多少なりとも削れたことで良しとしよう。

「こちらが幻影で見えない弾丸インジブル・ブリットの妨害すると読んだんだろうが、逆に言えばアレは手数が減る。攻め続けるぞ」

高速移動し続ける浮遊戦車は、こちらの精霊や攪乱攻撃を封じては居る。

だがその制御で吉祥寺が手一杯であり、幻影を解除して直接視認が出来る様にならない限りは無理に足を止めて手を出してこないだろう。

「気楽に言ってくれるなっ！ このままだとチャンスなんて一生来ないぞー」

「まあ確かにそうだな。もう一枚手札を切るか」

まだ見えない弾丸インジブル・ブリットを掛ける意味が無いので、森崎は振動系の魔法を

連射して居る。

それに合わせて俺も時々トリシニールを待機させ、振動系に切り換えて放った。

当然ながら相手の情報防御を貫くほどでは無く、強度が削れて来たところで一度離れて掛け直されると言うありさまだ。

確かに一方的に負けはしないが、勝機もまた薄かった。

「幹比古、アレを用意してくれ。目に見えたチャンスが来るから森崎はいつもで使える様に頼む」

「アレ？ 気が進まないなあ」

「西城が使ってたやつか。なるほど」

幹比古は魔法陣を織り込んだ布をマントのようにして羽織る。

そして移動しながら、その布に短時間しか継続しない幻覚を掛けながら岩から岩に移動を開始。

三校側から見れば幻覚の効果が増幅されているのが判った筈だ。

この効果を見破らせることで、強力な幻覚攻撃を仕掛けるのだと錯覚させる。

しかしそれはブラフであり、実際には幻覚魔法を強化させるつもりはない。

視覚を遮断し、一時的に覆い被さってくれば良いのだ。

「いけー！」

「そんなの当たる訳ないだろー！」

「避けるジョージ！ 回り込んで来るぞー！」

幹比古が投げつけた布は、アツサリと回避されてしまう。

だがそれは狙った効果であり、荒風法師用に使役して居るSBが布に風を浴びせてコントロールしている。

とはいえこのままでは当たることもないし、当たったところで効果は薄い。

そう、このままならばだ。

「よし、やれー！」

「判ってるさー！」

インジブルナブリット
衝撃力に特化した見えない弾丸が、布に直撃して機動を変える。

それは浮遊戦車の一角に引つ掛り、三人目の選手を跳ね飛ばし、同時に全体をグラつかせた。

開戦当初に連中を各個撃破しようとしたのは、役割が決まり過ぎて誰が欠けても連携を為さないことだ。

一条が欠ければ攻撃力を欠くし、吉祥寺ならば全体を見据える視野が失われる。そして三人目は想子ウォールを上手く扱えなくなるのだ。

当然ながら俺はこのタイミングに合わせて振動系をトリシユールに戻し、術式解体と術式解散を乱れ撃った。

「くそっ！ まさかここでも見えない弾丸インジブル・ブリットを使って来るなんて！」
「悪いがこの勝負はもらったぞ」

布越しに重力が掛り三人目が跳ね飛ばされながらもがいている。

その間に想子ウォールごと情報防御を剥がし、森崎が移動魔法で気絶させる為の隙を狙う。

当然ながら幹比古も黙っている訳では無く、先ほどまでは使えなかった地列魔法で術式解体を迂回しながら拘束に掛っていた。

同時に距離を三校側のモノリスに向かって詰めることで、直接解除する機会を窺っておく。

なにしろ相手はクリムゾン・プリンスにカーディナル・ジョージだ。一筋縄で行く筈もない。

地列魔法の拘束を自分たちに重力魔法を掛けることで脱出し、狙い澄ませた雷童子による降雷を新しい情報防御で防いでいたのだ。

「…粘ったな。だがチェックメイトだ」

一条たちは疲弊し、防御を間に合わせるので手いっぱいだ。

そして三人目は布の拘束から脱出したものの、跳ね飛ばす為の魔法ゆえ距離が離されている。

モノリスに向けて術式解体を連発し、予め掛けてあつた想子ウォールを粉碎しながら何度目かの射撃で解放した。

あとは幹比古がSBを使ってパスを読み取り、撃ち込ん終わりである。

『それまで！ 第一高校の勝利です』

アナウンスが流れた後、その場に居る六人は荒い息を突きながらへたり込んだ。

ネクスト・ジエネレーション

●戦乙女の騎行

暮れなずむビルの間をチラホラと人影が映る。

もし外を見ている者が見て居たら、目の錯覚かと驚いていただろう。

「今頃は富士でも飛んでるんでしょね。あつちは平和でいいなあ」

「その平和を守るのが私達だ。口を慎め」

制服を始めとしてダークスーツやビジネススーツに身を包んだ女性たちが、骨伝導無線機越しに会話して居る。

本来ならば必要最低限しか話さないはずの彼女達も、日本初…いや世界初の任務とあつて緊張を隠せない。

話し掛けた女も答えた女も、他の仲間の緊張を解す為にやっているのだ。

「術式をこっそりコピーした連中がこの真下に居る。男どもが仕掛けたら我々も降りるぞ」

「この飛行術式を開発したのは高校生なんですっけ？ 世も末だな」

「それを言うならネクスト・エイジですよ。新時代の若者たちのために頑張るとしましょう」

彼女達は全員が警官ではあるが流石に空挺降下の経験者は居ない。ミラーズバットやそれをハードにしたような競技で鍛えたメンバーだった。

いきなりの強襲作戦に際して集められたメンバーは顔見知りばかりで、軽口を叩きたくなくなるのも判る。

「うー寒っ。保温に回せるのはギリギリだし、どうにかならないかなあ」

「トーラス・アンド・シルバーにでもスーツでも開発してもらえ。スーツはスーツでも軽環境スーツだろうがな」

「軽口はそこまでだ。『エインヘリアル』が動いた。我々『ワルキューレ』もバックアップに回る」

了解！

一番序列が上の女性が指示を出すと、次々に降下を始めて行った。足下では礼状を持った刑事を先頭に、魔法師が兵器ブローカーの包囲作戦を敢行して居る。

とはいえ彼女達の役目はとつくみあいではない。

SPやモメ事担当に任せて、裏からコツソリ逃げ出すVIPクラスを不審者として取り抑える予定だった…。

その頃、富士の演習場でも乙女たちが空を飛び駆っていた。

九校戦の最後を飾るミラーズ・バットの決勝戦、軽やかに艶やかに空を舞う。

「そろそろ決着が付きますね」

「そうですね」

事実を告げた言葉に肯定の意見が返る。

そこに判断の余地はなく、もはや試合は決定的だからだ。

「サイオン量もですが練習量でも深雪が勝っていたようです。殆どの選手はもう飛べないかと」

「そうですね」

勝因を分析する男の声に、女は同じ様にそっけなく返した。

冷徹で伶俐というよりは、仕方無く義務的に答えている感じがあ

る。
「もー。ヒト揉めあったのは判るけど、いつまでも怒らせてたら駄目よ」

「判ってますが校内予選と共に終わったことだと思っていました。これほど不機嫌になるとは」

ひそひそと七草・真由美に話し掛けられ、司波・達也は仕方無く声を落として答えた。

直ぐ近くに居るのだから意味はないと思えるのだが。

「コンペの選考で再燃したでしょ」

「コンペで争ったのは俺じゃありませんよ」

真由美は形の良い眉を軽く跳ねたが、キョトンとした顔は一瞬だけだった。

意地悪げな顔でにやりと笑う。

「またまた見え見えの言い訳しちゃって。達也くん以外でリンちゃんも争える人なんていないでしょ。終わったら優しくしてあげなさいな」

「だから俺と先輩はそんな仲じゃありませんよ。というよりも、そんな事を言ってるのは会長だけです」

何を馬鹿なことを口にする達也に真由美はあくまでペースを崩さない。

顔を突き合わせて小悪魔めいた微笑みで追撃を掛ける。

「ホントー？ 照れ隠しじゃなくて？ 誰がそんな事を言ったの何時分何秒？」

「十文字会頭ですね。お前は十師族になるべきだ。七草なんてどうだと先ほど真顔で言われましたよ」

その言葉を聞いた時、真由美は近さによく気がつき顔を赤らめて後ずさった。

どうやら達也と女の子の間を揶揄することは多くても、自分の事は計算外であつたらしい。

「二」というか会頭の御相手の候補に、会長も当然リストアップされてるのだと思いますが、そうでもないようですね。必要ならば狙ってみましょうか？」

「アハハハ。十文字くんはもう婚約者居るし。…その狙うって、十文字くんのことじゃないわよね……」

攻守逆転した二人の攻防は、勝利が確定して司波・深雪が戻ってくるまで続いていたと言う。

●陰と陽のダンス

第一高校が優勝し表彰式が終わった。

低スペック戦や新人戦の表彰を個別に行うと、去年よりも二校や三校が接戦を行っていたこと、四校が意外な活躍をしていたことが判る。

「まさかあんな手で来られるとは思ってもみなかったが、遠距離戦に終始しなかったんだな」

「チャリオットは先生に教えてもらったフレイムヘイズの自在式を参考にしたものだし、攻めきれない可能性があったからね」

なんでも代々“極光の射手”と呼ばれるフレイムヘイズが、あんな感じで戦ったらしい。

浮遊戦車どころか空を自在に飛びまわったそうで、火力もそれに比例して強大だったそう。

流石に吉祥寺としても、リスペクトはしても全て真似るほど厚顔無恥ではなかったのだろう。

「攻めきれないと言うのは、ひよつとしてアレか？　だとしたらすまないな。表に出す術じゃないんだ」

「そうは言っても無警戒では居られないよ。それに、不慮の事態が起きたら使ったろう？」

どうやら術式解体に加えて、再生の魔法を警戒して居たようだ。

確かに暴走か何かで誰かが大怪我になったら、使う羽目になったかもしれない。

それに逃げ回ると俺との相対距離が開くので、術式解体で迎撃できるから攻めきれないというのはあながち間違っではないだろう。

逃げ回って勝てるならまだしも、勝利しないと三校は総合優勝を奪えなかったので仕方無い決断だったかもしれない。

「それはそうと不愉快な話を聞いたけど本当かい？」

「…？　ああ、兵器ブローカーの件か。確実に取り押さえるのに飛行術式を使わせてくれと、大会委員会を通じて当局から連絡があったのは確かだ」

九校戦の裏側で兵器ブローカーが送り込んだ手先を通じて、各校が試した色々な術式をコピーしていたらしい。

我ながら迂闊だったが、大会スタッフの中に不埒者が居て中抜きをしていたようだ。

彼らが利用して居た者の中に、無頭竜の後継者候補であるロバート・孫^{スン}が居たそうで、他人事ではなかった。

深雪に何もなかったから良い様なものの、やろうと思えば怪我人を出すなどの工作が出来たかもしれない。

そう思うと腹わたが煮えくりかえると共に、安堵する余裕が俺の心には出来た。

そんな折に雫が四校の生徒を連れて来る。

「達也さん。ちよつと良いかな？ この人は私の従兄弟なんだけど…」

「別に構わないが…はじめてまして」

「こちらこそはじめまして。鳴瀬・晴海と申します。御迷惑でなければ、よろしくお願いしますね」

雫が言うに母方の従兄弟で、四校のエンジニアをしているらしい。

この間の飛行術式を渡した時には、見なかった顔だが…。

そう思った時、ピンと閃くものを感じた。

雫が紹介したいだけなら、遊びに行く予定になって居る時に引きあわせた方がじっくり話ができるはずだ。

誰かにせつつかれていているか、今日でなければならぬことがあると思われた。

「もしかして留学生の子を担当していた？ あの連鎖する特化型C A Dを組んだ方ですか？」

「そこまで判るんですか？ 御言葉通りみんな忙しかったので僕が担当しました」

堅苦しい言い様に俺は苦笑して首を振った。

「同世代で敬語は無しにしましょう。それに俺の方が年下ですよ」

「といつても、もともとこういう性分なんですよね。でも助かります。今日来たのはあの二人から言い訳を頼まれたのもあって…」

なんとというか頼まれると嫌と言えないタイプらしい。

双子は隅の方からこちらを窺っていたが、視線に気が付いた段階で手を振って来る。

「言い訳と言うと、もしかして例の件ですか？」

「ええ。兵器ブローカーとはあくまで別件だと伝えてくれと。完全に無関係ではないけれど…と迷惑してたかな」

無関係ではないがデータ泥棒ではない。

…察するにUSNAから実戦データを集めに来たというところだ

ろう。

レオの術式と似ているので、何らかの関わりがあるのだろうと思われる。

しかしこんな余計な情報をバラすあたり、特に敵対はする気が無いのだろう。

そんな風に話し込んで居ると、平河(妹)と美月が話し掛けて来た。

「その、私達も加わって良いでしょうか？ あの服飾を使ったCADでアイデアがあるんです」

「迷惑でしたら遠慮しますけど…」

「迷惑だなんてことはないですよ。それに飛行術式を公開した人の前で嫌とは言い難いかな」

予想した通り鳴瀬という男は流され易い用だった。

吉祥寺の様に参考にしたモノがあるのかもしれないが、気軽にアイデアの使用を許可する。

「それで二人はどんなのを考えたんだ？」

俺は話の水を向けるとともに、アイデアの方を先にしゃべるように仕向けた。

こういつてはなんだが、基本動作やコツをタダで持って行くことに気が触る人間も多い。

この男は大丈夫だとは思いますが、先にアイデアをもらえば口にし易くなるだろう。

「私の方はですね。どうせなら特化CADを入れる場所込みで可愛い物・恰好良い物をトータルでコーディネートしたらどうかと思うんです」

「…美月。頼むから俺をモデルにするのは止めてくれ」

スケッチブックに描かれていたのは、俺が仏像風の鎧を着ていたり

騎士…いや銃士風の装束を着ている姿だ。

執事風の燕尾服もあるがどこか退廃的な雰囲気漂う。

「ちゃんとレオくんや吉田くんのもあるんですよ？ 部活でもみんな

は人気なので」

「そういう問題じゃないんだが…。しかし、こういうのは従姉妹たち

が好きだったな」

フルプレートの甲冑を来たレオに、陰陽寺にしか見えない狩衣の幹比古。

スケッチをペラペラと捲る内に、やたらとゴージャスな格好をしたエリカや渡辺委員長の絵もあった。

(しかし苦勞して暗器にするよりは、一から飾りとして設計した方が無難なのは確かだな。アクセサリーにまで気が及ぶのは流石に女性というところだが)

内心の汗とは別に、悪くないむしろ良いのではないかと思わなくもない。

以前に風紀委員会の備品で見付け、森崎に渡した指輪型CADなど小さくとも使い様はあるのだ。

それに四校の双子が使った総合術式を見た、衝撃波のブレードを亜矢子が裏の仕事で着るゴシックドレスに組み合わせても面白いだろう。

「達也さんの従姉妹ですか？ 凄い素敵な魔法師なんでしょうね」

「俺よりも深雪に似ているからな。…それはそれとして平河の方はどんなモノなんだ？」

「わ、私のはですね。ある人からヒントをもらったんですけど、干渉を及ぼさない小さな魔法式を組みわせてみようかと思いましたが」

詳しい話を避けるために、亜矢子たちの話題から平河(妹)に振る。すると彼女は、思ったよりも具体的な話を考えていた。

「特化CADはそれほど魔法式は入りませんが、逆にいえば咄嗟に使う魔法もそれほど数は有りませんよね？ それ専用にして小さくまとめてしまってもよいかと」

「なるほど。エリカの方が詳しいと思うが、咄嗟の勝負には一つか二つあれば十分だからな」

先ほど思い出した指輪型CADを元に専用機を考えて見た。

あれは在る程度の種類が考えられる作りだから補助機構は無いが、一つだけに絞れば入れる事も可能だろう。

あるいは指輪型のCADで指令を出して、連鎖型のCADで個別に

解決させても良い。

「場合によつては連鎖型を前提に、強化時だけ連携してそれ以外は簡略コマンドで使うことにすれば小さいけど強力な物ができるかと思うんです」

「そういえばうちの先生に聞いたことがあるな。『ゲマルティア』と言う組み合わせ型の自在式があつたつて」

「それで干渉しないことを前提にしているのか。確かにそのアイデアは良いかもしれんな。名前を流用するなら『コマンディア』とかかな」

例えば袖のカフスには手刀など接触オンリー、ネクタイピンには防御系、帽子やサングラスには視覚強化などだ。

それぞれに形成する魔法に合わせた補助機構を組んで、仮にネクタイピンに入れる防御系にはとにかく速度強化で即死を免れれば十分だと言えた。

吉祥寺が聞いたような自在式があるならば、干渉しないレベルの魔法を組み合わせて戦闘することもできるのだろう。

一科生・二科生のような能力差よりもセンスの差が重要なので、今後の魔法師には期待が大きいかもしれない。

「良いですね。御二人のアイデアは組み合わせられるんじゃないですか？ それとも相談されて？」

「私は相談した時のままですけど…」

「お姉さんだとは思いますが、もしかして関本先輩辺りか？」

確か先輩は部活連サイトへ助言に回っていた筈だし、平河の姉も部活連サイドのスタッフだったはずだ。

そこで出逢つて居れば助言をもらうには十分だろう。

既に諦めたそうだが基礎コードを探す為に、術式を細かく裁断して調べるといふのは研究としてやって居そうな範囲でもあった。

だが…。

返ってきた答えは、俺の背中に汗を走らせるものだった。

「お姉ちゃんは九校戦で忙しいから邪魔になっちゃいけないので、他の人です。…その、関本さんって方は存じ上げませんか」

「なに…？」

「もしかしてその人って、男の人ですか？ 千秋ちゃんが気になる人だったりしますか？」

平河の言葉を聞いて俺は絶句した。

だからこそ、続く美月の言葉で会話が流れて行ったのである。

（馬鹿な。あの人は部活連サイドに居た筈だ。単に出逢って無い？ その可能性の方が高いが…）

驚愕する。

もし俺が考えている通りだったならば、いつのまに『連中』の魔の手が近くまで忍び寄っていたのだろう。

その考えが正しいのであるとすれば、俺が浮かれている間に校内の人間が狙われたと言うことでもある。

深雪が狙われたかもしれないという可能性と共に猛烈な怒りが湧き出し、同時にこれはチャンスだと囁きかける自分が居た。

警戒レベルや情報落差で狙われたのだとすれば、連中の手口がグツと掴めて来る。

（しかし…。関本先輩が『紅世の徒』に喰われたと言うのに、悲しいとも思えないのか…）

親しくもなんともないが、出逢い方が違えばそうだったかもしれない人物だ。

仮に年度が一つだけならば、話し合う回数は相当多かつたろうと思われた。

そう言う人物が消えたのに悲しいとは全く思えないことが、深雪を悲しませるだろうと思うとたまらなく悲しかった。

「吉祥寺。プリンス…いやマージョリー女史の方に伝言を頼む。M I A 案件が一校で発生したかもしれないとな」

「…察するにさつき出て来た関本とか言う先輩かな？ 判った。こっちの先輩に聞いてから、先生には伝えておくよ」

コンペや研究会などで知っているはずの三校の先輩に尋ねるらしい。

確かにその方法ならば確実だろう。

俺は軽く頭を下げた。調査と伝言を頼むと、関本先輩への感傷を投げ

捨てて再計算し始めた。

(校内予選が終わるまでは無事だった筈だ。…その後何かあって基礎コードの研究を諦めた。その前後か…)

市原先輩や中条先輩に五十里先輩は黒羽家を通じてエージェントを付けていたが、関本先輩にまで手は回らなかった。

黒羽家自体の戦力が落ちていたのもあるが、関本先輩がコンペ前に脱落したことで護衛を護衛を付ける必要が無いと判断したと報告が入っている。

(偶然ならばどうしようもないが、故意に狙ったなら思ったよりも近くに居るかもしれんな)

ミスによって知人を失ったと言う悲しみや自分への怒りよりも、敵を捉えたという高揚感の方が大きい。

他愛のないことに今更のように気が付いた。

妹に関連しない限り感情の無い筈の俺が、高揚感を抱いている。

思えば一条や吉祥寺たちがライバルが現れた時もそう思ってたはずだ。

薄く弱わ弱わしいが、確かに感情というものがある。

(やはり感情を消すとゼロになるだけで、増えない訳じゃないんだな。マイナスが無いから減らないだけで)

関本先輩が消えたことで悲しいとは思わないが、感情があると気が付かせてくれたと思えば、不思議とありがたい気がする。

現金なことだが俺にはそう考えるしかない。

だからそう。

世界の誰もが彼のことを忘れたとしても、俺だけは覚えて居ようと思っただけだ。

●現代のマリー・セレスト号事件

関本・勲が消失したことは、事件にすらならなかった。

データが無くなったからでは無く、記憶を有している人々が関心を動かす程の、もっと大きな事件が起きたからである。

『こちらワルキューレ01。どうした?』

『こちらワルキューレ02。やられました。もぬけの殻なのですが』

…』

あれから一カ月も経たない間に、当局に正式な強襲部隊が組織された。

ワルキューレ・スワットと呼ばれる特殊部隊は、その貴重性から教導隊であると同時に第一線級の部隊でもあった。

『02、報告は正確にしろ。逃げられたのか、それとも『先を越された』のか?』

『後者です。大亜連合の連中はおそらく全員が喰われています。アンチ・ミュータント・ポリスに管理の移行を進言いたします』

偽装貨物船に降下したワルキューレ・スワットのメンバーが見たのは、誰も居ない無人の船。

そして、焼却処分される途中の手帳だけであった…。

横浜操乱編

葦原を草薙ぐ剣（ウイードクラッシュ）

●新しい季節

九校戦が終わり、生徒会長・部活連会頭・風紀委員委員長も一新された。

とはいえ優秀者が生徒会を締めると身内での指名に近いものがあり、一部の不満を除けば概ね無風の選挙だったと言えるだろう。

「ではコンペまでの護衛は市原に服部、平河に司波、五十里に千代田をメインとする」

「了解しました十文字先輩」

「とーぜんですよね！」

論文コンペはデータを盗もうとする不埒者が現れる為、十文字先輩が責任者となって護衛班を作りあげた。最初の話し合いは出席者の護衛割り振り……と、いうことになっている。

もつともこれは嘘だ。

実際には根回しした通り、予め組んでおいた予定通りに議論が進行しただけのこと。

（これで負担を増やさずに、技術スタッフの護衛を手配できたな）

九校戦後に発覚した『紅世の徒』による被害の露呈。

その確認と対策に追われた俺は、仕方無く色々な方面で主導する羽目になった。

「司波には公私で負担を掛けるがすまん」

「いえ。ウチにとつても助かるので問題はありません」

中条先輩を生徒会長に推し、平河（妹）を俺の研究助手に招いたという縁で平河先輩にはラボの一室を貸し出すことで、護衛に回す人手を減らして居たのだ。

そういう意味では千代田委員長のセリフではないが、今回の配分は当然と言えた。

「啓がシルバークんの所に顔を出すかもとか言ってたけど、例のア

レって上手くいつてるの？」

「ええ。前世期の軽環境スーツサイズでなら実験が成功したので、今後は小型化を目指します」

平河（妹）と美月が九校戦で口にしていた、服飾にCADを取り入れると言う手法。

話題の一つでしか無かったのだが、当局から飛行用スーツの打診があった事と『紅世の徒』対策も兼ねて本腰を入れている。

ひとまずは3m弱、ほぼロボットサイズでなら実現させた。今後は最低でも2mまでスケールダウンを目指して居る段階だった。

「いやいや、啓がシルバーくんを手伝うんだから成功して当然でしょ？ 私と言いたいのは可愛くできるかってこと」

「その辺は門外漢ですから。美月が美術部の先輩達に協力してもらって外装を考えていますよ」

この間まで感情が無いと思っていた俺にとり、外面の良し悪しなど区別が付かない。

顔を晒す事無く、急所を覆って居れば良いのではないかと思ってしまうくらいだ。

必要なのは機能性であり、機密性の高い任務に用いるのならば隠匿性もどうか思えない。

「シルバーくんに聞いた私がバカだったわ。空飛ぶウエディングドレスとかできないかなーと思っただけけど…」

（千代田先輩も大概だな…）

口の悪さもだが発想が俺と大差ない。

こちらが武装の一環として捉えているのに対して、自分が着たいモノを念頭に考えているだけなのだ。もっともファッションを考慮して居るだけ、男の俺よりはマシンなのかもしれないが…。

●キャプテン・シルバーとその一味

企業化したトールラス・アンド・シルバー。

そこにあるラボで、今日予定する二つの実験のうち一つが始まっていた。

「琢磨、ビリオン・エッジをフル・マニュアルで頼む」

「はい、お兄様！」

俺が指示すると、白い陣羽織を着た七宝は意気を整えた。

そしてトランス状態に入ると、祝詞と共に魔法式を構築し始める。

「腕に十種の神宝。八握剣、蛇の比礼、蜂の比礼、品物の比礼。沖津鏡、辺津鏡。生玉、足玉、死返玉、道返玉……」

用意された大量の紙片が空に舞い、幻想的な光景が作りだされた。

古式に近い用法で使用された魔法式は、陣羽織に編み込まれた魔法陣や各種CADの力を借りながら精密に操作を始める。

以前は紙の刃を空気で出来た袋詰めで浮かせるだけであつたビリオン・エツジが、明確に十のグループに分かれて行った。

「ひ・ふ・み・よい・む・なな・や・このたり
「一二三四五六七八九十……」

「天叢雲の剣、八咫の鏡、八尺瓊の勾玉。いずれのグループ化も確認しました」

「ここまででは順調だな」

十のグループが三つに数を絞りながら、徐々に密度と意味を強化する。

七宝の右側・左側・上方。この三か所に配置しつつ、微弱な振動や対流現象を帯びて行くのだ。

魔法陣入りの服が陣羽織になった理由は簡単で、研究用の大型CADを省略する為に何枚の布が必要か判らなかつたからだ。

十二単のように重ね着をした後、一枚ずつ剥がして実験をし直して居る。

CAD単独に比べて多量の準備をしているが、それでも3mサイズの軽環境スーツよりは遥かにマシであろう。

「ふるべ、ゆるゆらと、ふるべ
布留部、由良由良止、布留部」

「変化止まりました。これ以上は延びません」

今はこれで精いっぱいだが術者が成長し魔法式を完全把握した段階で、振動や衝撃をまとった紙の刃を攻防に用いることが可能になるだろう。

しかし更に枚数を減らして、次の段階である侍袴だけになるのは無

理そうだ。

精霊の眼で垣間見た通りであったため特に悔しさはない。

予想されることと同じだけであり、実験は次の段階に移行する時だ。

「第二段階に移る。どれでも良い、今度はオート操作に切り換えてくれ」

「了解です。…来い、草薙ぎの剣！」

七宝がコマンドワードを唱えて右手を掲げると、紙片は右側のグリップを残してバサバサと落下。

直刀のように密度を高めた部分と、その死角を覆う三枚の護拳・布状に形成される。

デフォルトで掛っているのは相対位置を固定した硬化魔法だが、新たなコマンドワードを使用すれば振動する剣に変わるだろう。

少量に絞ったとはいえ大袈裟な詠唱などの準備や、ともすれば危険になるトランス状態に陥ることなく、コマンドワードによる連鎖型CADの制御だけでやってのけたのである。

「草薙ぎの剣の成立を確認！ 実験は成功ですね。た：達也さん」

「千秋が協力してくれたおかげだ、ありがとう。小春先輩が研究室を使っている間だけとはいえ、助かったよ」

何故か平河（妹）は下の名前を呼ぶということに躊躇いがあるようだ。

名前など記号の様な物で、ここには姉妹二人とも揃っているのだし恥ずかしがる必要はないと思うのだが。

「常に再定義され続けたレリック。十種の神宝のように随時更新し続けて行こう」

「はい！」

七宝や平河（妹）だけでなく、協力を申し出てくれたスタッフ達の声が唱和する。

ここまではきつと全員の重いが一致したところだったろう。

「理想を言えば普段着サイズになるか、誰でも使用可能になれば良いんだが」

「お兄様：いきなりそこまでの成功されたら七宝家の立つ瀬がありませんよ」

流石に高望みだったのか七宝が苦笑する。

「拡張性を排除して、小さいブレード・サイズならいけると思ったんだがな」

「そりやうちの家の奴なら、経験もありますし能力的にも可能だと思いますけど」

適性の問題だと言うのだが、それでは少し意味が無いのだ。

「確かにそうなんだが。琢磨が使うような複雑な魔法ですら上手く管理できるようなれば、一科生・二科生に別れる必要が無くなると思っただんだ」

「もしかして、二科生の枠組みを無くすおつもりなのですか？」

俺は七宝の問いに頷いた。

それが今年の目的であり、俺自身の目標の第二歩だからだ。

「飛行術式の条件付き公開により、様々な期間や個人の研究者が使用例を送って来てくれた。これで重力式の変数管理も可能になるし：」

飛行魔法で移動する場合には、ループ・キャストによる変数の変更が不可欠だ。

常に小さな魔法をかけ続けることで、条件の連続更新という最も負担の掛る項目をキャンセルする必要があるからだ。

俺は飛行術式を使用例を送るという条件で、各友邦国の魔法研究機関に無料公開した。

「千秋が考案した術式のシンプル化も合わせれば学習が容易くなる」

「シンプル化は定数にすることで、扱い易くすることでしたよね。でも、それだけだと条件はみんな一緒なのでは？」

平河（妹）の考案した魔法式のシンプル化は、最も多用される数値に定型化してしまうというモノだった。

そのことにより射撃的な発現をする魔法であれば、弓や拳銃のように距離設定をせずとも、術者がちゃんと使えば設定を省略して使用出来る。

仮に最も使用頻度の高い距離を定数として、10mなら10mに設

定。

特化型にインストールできる魔法式の一つとして完全固定し、必要ならば二次的な頻度の距離：例えば30mを二つ目の魔法として設定する。

魔法が拳銃化・弓化する訳で、魔法を以前よりもコントロールし易くするものであった。

もちろん距離以外にも定数化し、それらを組み合わせて単純な方式で魔法を組み立てるのだ。

「確かにそうだ。しかしな琢磨。二科生の二科生である所以は能力ではなく、自らの個性に向きあう為の補助役。：教師が居ない事なんだ」

「私も知らなかったんですけれど。入学試験で実技だけは上の二科生と微妙に下の一科生だったのに、二年・三年になるにつれ決定的な差が出るそうなんです」

俺の話で平河（妹）が補足する。

彼女は何処で聞いたのか知らないが、そんな例を持って来て案の方向を示したのだ。

当時、まだ会長職に合った七草先輩が調べてみると、確かにそのような状況は多かつたらしい。

「能力が延び悩む…ということですか？」

「そうだ。仮に同格の二人が一科生と二科生に別れたとする。領域干渉・情報強化という防壁に阻まれた時、二科生の生徒は突破する方法を尋ねることも出来ない」

処理速度が上回るならば先に撃てばいい、干渉強度に優れるならば強引にこじ開ければいい。

あるいは二次的な現象を引き起こし、作成した物体で殴りつけるのも有効だろう。

だが、二科生はその単純な相談すらできない。

例えば暇な教師を探して質問されたとしても、一科生だけで忙しい彼らが『常に』質問に答える訳にもいかないのだ。そして常に答える事が出来ないのならば、一度だけ答える訳にもいかないとなるのも仕方

あるまい。

「干渉領域は判り易い例えだが、これが能力を伸ばすと言う問題だともつと複雑になるな。どの能力を伸ばすべきか、そもそも自分の限界が何処なのかすら判らない場合が多い」

もちろん限界が判って居て、教師役が居てもどうしようもない事態も数多い事だろう。

俺なら俺が処理速度を向上させることは不可能だ。二科生だからではないし、一科生だったとしても深雪が制御力を向上させるのも難しい。

何故ならば深雪は『封印』に制御力を使っており、俺は深雪の監視に処理能力を割いているからである。

まあ、俺と深雪は可能性を焼かれて限度いっぱい拡張された人(神)造フレイムヘイズだ。

作成物だからこそ、割り切って判断出来るだけとも言える。

普通の人間であれば、もしかしたらまだ延びるかもしれない…と無駄な努力をする場合が多いだろう。

「しかしだ。自分の定数を理解していれば、自ら気が付くことも可能になる。七草先輩の計画したコーチ制次第で相談も可能になる」

「無限の可能性とは言いますけれど、五里霧中な状態では不可能。でも限界が判れば考えるのは簡単ってことですね。なんか自分で言っていて悲しくなりますけど」

定数化すれば現時点での自分の実力を理解する事が出来る。

どうやっても10m以上は伸びず、9mだと安定するならばひとまず10mにしておけばいい。

その上で他の項目を調査しておき、9mに設定すればその能力を伸ばせる場合、9mにしてしまえば良いのだ。

射撃戦など強度や速度よりも距離が優先されるならば、その項目を下げて距離を10mにしてしまえば良い。

たったそれだけの判断をして、自分が何をするか二科生は指針を得られないのである。

そして定数化と変数化を両立する事で、可能になったモノは他にも

あった。

それが予定されている、二つ目の実験である。

●ローゼン・マギクラフト

一つ目の実験が終わって暫く、エリカとレオが三人の客を連れてやって来た。

正確には二人も客なのだが、既に入り浸っている。

「連れて来たわ。それと、これが例の遺言書よ」

「これが『開かずの箱』か。スナイパー姉妹に問題がなければ、早速やってしまおう」

エリカが持つて来たのは細工箱だった。

精霊の眼で確認すると、小さな留め金に魔法：おそらくは情報強化が掛っている。

構造上ソレを外さないと他が開かないというシンプルな物で、だからこそこれまで誰も開けられなかったらしい。

留め金だけに魔法が掛けられているのは、あくまで遺言書を守る程度の意味に過ぎず、同時に長い年月掛け続ける必要性があったから：との事だ。

割りと無駄の多い魔法式に見えるが、術者はレオと同じタイプの硬化が得意な魔法師とあれば仕方が無いのだろう。

(軽く見たただけだどこの程度だな。…もう少し深く読んでみるか?)

俺はホンの少し逡巡した。

精霊の眼は万能では無く短時間の確認では、エイドスを経由する時を除けば魔法が掛っているかどうかだ。

それでも他に掛っている魔法と比べることで、どのような魔法なのか、どのような変化なのかを推測する事が出来る。

そこが限界の能力なのだが、他の能力：俺が持つ固有能力である『再生』と併用する事で違う側面から見ることが可能になる。

魔法式だけでなく『再生』する段取りを途中まで行うことで、物体の構造なども読み込みかなりの情報を調べることが出来るのだ。

精霊の眼はあくまで併用を前提としており、組み合わせるのが術式解散ならばパッと見でも良いのだが…。

「ソーリー。どうせ実験するなら…。レオにお願いしても良いデスカ？」

「お、オレ!」

「構わないよ。仮に君たちが縁者だという可能性があるならば、赤の他人である俺よりそっちの方が良いだろう」

リリイが頭を下げて来たので、俺は思考を中断して頷いた。

急に話を振られたレオが驚いているが、この際無視しておく。

（丁度いい。俺以外でも可能かどうか調べる事が出来る。…こっちはまた後にしよう）

実験の段取りを変更しながら、俺は箱を元に戻した。

ここで深入りを強行しなかったのは、これまでの『パッと見』では済まないからだ。

本格的に調べれば詳しい事も判るが、何も得られないかもしれないかもしれない。

だが、深く読み込む為に集中すれば、誰かが気が付く可能性が出て来てしまう。

それこそ専門分野の魔法師でなければ理解できない筈だが、兆候を覚えておけば何かしらのヒントになる可能性もある。

それに…老師クラスの魔法師ならば、間近で見ただけで判ってしまうだろう。

「ジョン・スミスさんもそれでしょうか？」

「ええ、構いませんよ。私としては彼女達に受け継がれた遺産ならば、彼女達の自由にすべきだと思います」

俺はスナイパー姉妹ではない、三人目に視線を移した。

この男が老師クラスの魔法師であるとは思えない、だが研究者の視点を持つ魔法師であるとは理解していた。

それと同時に、今回の話に胡散臭い物を感じたのも確かなのだ。あからさまな偽名で、視野の広さや知識を窺わせるのに課長職だという。

彼の主張を完全に嘘と決めつける気はないが、好奇心の為に俺の能力を見せてしまうわけにもいかなかった。

「改めて説明するぞ。今回の実験は『術式解散の成功』を再現することだ」

術式解散、グラム・デイスパーションそのものは別に難しくはない。魔法式を破碎するのは走りながら小さな針に糸を通す様な物で、まず成功しないだけである。術式解体はサイオンの塊をぶつけることで面制圧に近いから可能なのであり、それだけにサイオンの問題が常に付きまとう。

「魔法式は勝手に組み上がる様になってるから、柄を握ってサイオンを放射し続けてくれるだけで良い」

「その放射し続けるってのができないから、普通は無理ってことなんじゃないかと思うがよ」

レオが握り締めたのは馬上槍ランスのような武装一体型CADだった。

柄からは長いコードがコンピューターに連なり、白が三つ連なった穂先が独自に回転するのが違いと言えるだろう。

「まあいいや。んじゃ、始めるぜー」

「データ計測開始。三連術式解散が起動し始めました」

白の先から迸る術式解散が固定化され、それが回転する事で波調を強制的に変更する。

本来ならば三度も試さねばならないが、この方法によって大幅に短縮できる。

「九校戦では名前をもじってトリシユールと名付けたが、もうトリシユールの方がいいかな」

「どちらかと言えばダイヤルロック型のシリンダー錠を一つずつ回してる感じだけどね」

どうやら俺は名前にセンスが無いらしい。

三俣の槍で例えたのだが、即座に突っ込みが返って来た。

「サイオンの消費量が術式解体を越えました。破錠はいまだありません」

「ここまでは予定通りだ。計測と調整を続けてくれ」

七宝の言葉ではないが、一足飛びに成功したは苦労はしない。

まずは出力限界でサイオンを高められない者でも可能にすること、

次に消費量、サイズはその次になるだろう。

時間と労力の問題は、当面先だと言う他はない。

「側距データに感あり！ 再調整と収束に入ります」

「データの計測はそのまま続けてくれ。ここからが山場だぞ」

走りながら針に糸を通して、同時に何本もやれば成功する可能性が出て来る。

もちろんそれだけでは実用には遠いので、裁縫で言えば『指抜き』にあたる仕掛けが必要だった。それが三連術式解散に使用して居る、変数差を持つて撃ち込むたびに計測し直すデータである。

今回放射し続けたデータ、そして破綻される魔法式の具合によって、次回以降に大きな手掛りが残せる筈であった。

「開錠です！ 魔法式の破綻行為に成功しました！」

「了解した。一応はそのままデータを取り続けて居てくれ。レオ、確認出来るか？」

「あー。ちよつと待ってくれ。いまこいつをなんとかしとく」

俺が声を掛けると、平河（妹）はデータを計測し続けレオは馬上槍を脇に置いた。

「…ドイツ語かあ。えーつと、二人の爺さんからかな？ 子供あての内容の他は、国とローゼン・マジクラフトの話とか書いてあるぜ」

「十分だ。後は二人のプライバシーに関する事だろう。後で聞ける範囲だけ聞こう」

レオはぼかして話したが、やはりプライバシーに関することがメインだったようだ。

ローゼン社などの件は、おそらくレオ自身が聞いている事もあって、その通りだと断言する意味で口にしたのだろう。

「それで、細かいことをツツコム気はないが大丈夫なのか？」

「まあオレが聞いている範囲ならな。つってもローゼンの血族の中に話が判る人間が居て、逃がしてくれたってくらいだけだよ」

レオの知っている話しと、先ほど垣間見た内容を照らし合わせることで、次の様な内容らしい。

血族の中で有力者であり研究者であったルーカス・ローゼンが、人体実験の非道さと成果に疑問視して行動を起こした。

ほとんど壊滅的な安定度であったが、可能な限り生存可能なメンバーを安定している間に同盟国へ技術交換要員として派遣。

そしてレオの祖父など動くことが者を、日本などへ亡命させたらしい。

「その亡命計画は成功したのか？」

「俺がピンピンしているのが不思議なくらいじゃねえの？ あの子らの許可がねえと話すわけにはいかねえが、USNAも人体実験だったが比較的マシだったとか書いてるからな」

ようするに計画がザルだったと言う訳だ。

技術士官として派遣されたが、最初から検体としてデータ収集されたのだろう。

まあ当時を考えたなら仕方無い向きもあるし、計画した血族の有力者とやらがお坊ちゃんだったと思われる。

：あるいはそれらデータ提供という形での派遣は、あくまで保険と囷だったのかもしれない。

亡命可能なレベルで安定している者は可能な限り確実な方法で逃がしているのだし、ほとんど余命が無いから駄目もとで提供した。

それを知っているからUSNAでも寿命を延ばす為という名目で人体実験は続いたし、ドイツに居続けたまま切り刻まれる運命よりはマシだったという考え方もできる。

そして亡命を試みて数少ない成功した例が、レオの祖父ということだ。

他に居たかもしれない数名は失敗したか、成功しても名乗り出て居ないのだろう。

(まあ筋は通っているか。レオの祖父以外に成功例は無く、あの双子は提供された遺伝子でより安定した兵士を作る時代の産物？)

そう考えれば不思議なことはない。

偶然でレオの祖父は生き延びた、あの双子の祖父は失敗したがUSNAの計画変更というよりは、世界的な流行の変化で放りだされただ

け。

その世代を境に、遺伝子操作やら血統操作は流行から外れた。

日本でもエレメントや十師族の元となった実験体世代は、流行から外れたせいで急激に減っていく。

(しかし、釈然としないな。あまりにも条件が整い過ぎている。やはり調べておこう)

術式解散は走りながら針に糸を通す様な実験だと口にした。

それを考えれば、レオや双子の件はもっと高い可能性だろう。

だが推理小説を後から読む様な『整合性が整いすぎている』感触が拭えないのだ。

「とりあえずは血族のルーカスって人の派閥が残って居るか、探せつてことか?」

(話はレオに任せておくか)

自分に関係ない事もあり、俺は部外者だからと席を外そうと口にした。

相談したいから居てくれと言うレオに対し、隣の部屋に居るからと小声ならば聞こえない程度の距離を開ける。

そうして精霊の眼と再生の魔法を併用し、あの箱のデータを詳細に読み取ることにした。

…答えは黒だったと言っておこう。

(だがそれを問題にしてもしらばつくれるだろう。あれが全部ウソでも俺が困る訳じゃない。もう少し様子を見るか)

当て物のコツは、証拠が見つかった時点で口にしないうことである。

慎重に二つ三つと用意しておき、相手がボロを出したところで畳みかける方が効果的なのだ。

そうして他人事のように眺めていると、エリカの視線がいやに強く感じられた…。

炎の花（アマリリス）

●組み上げられたパズル

エリカは一瞬だけ強い視線を見せた後、さっさと部屋の中に入って行った。

そしてソファアーの一つにどっかりと座り、長期戦の構えを見せる。「ルーカス・ローゼンの派閥なんて調べる必要なんてないわよ。この部屋に居るから」

「え？」

エリカは肩をすくめて、ジョン・スミスの方を睨んだ。

「あんた。ローゼン社の出向なんじゃない？ そう考えればその子達をの面倒をワザワザ見ている理由も判るわ。いろいろ知りたいんでしょ？」

「……っ」

ジョン・スミスだけでなく、レオや俺の顔にも緊張が生まれたことだろう。

今更過ぎて急な話だからではなく、エリカがハンドサインを出して居たことだ。

それはブランシユ・無頭竜騒ぎの前後で、戦闘目的で切り込む時用に決めたシグナルだった。

幾らエリカが短気な方でもこんな状況で話を急ぎはしない。

警察関連で『紅世の徒』に関する被害確認を頼んだが何か掴み、その結果として急いでいるのだろうか？

「否定はしませんが何を根拠に？」

「しらじらしいわね。ルーカス・ローゼンが駆け落ちで日本に来た事。その孫があたしだつてとつくに調べてんでしょように」

「なっ……」

レオは驚いた顔を向けるが、俺は納得していた。

確かにエリカーがルーカス・ローゼンの孫娘であれば、苛立つだろうし見えて来るモノもあるだろう。

（確か当主が危篤状態の筈だったな。既に引退はしているようだが

…)

急に自分の動向を確認する気配が見えた後に、ローゼン社絡みの話題が出て来たのだから疑って見て当然である。

そして、エリカがハンドサインを出した理由も見えて来る。

判り易い情報に飛びついて見せることで、俺に情報を精査する時間を与えてくれているのだ。

まさしく切り込み役ではあるが…。どこかしら焦った様子が見受けられた。

相当に腹にすえかねているのか、それともやはり『紅世の徒』の問題が起きているのだろうか。

「そう言われると立つ瀬がありませんね。ルーカス叔父の肩を持ったために、日本語でいうと窓際に飛ばされてしまったわけです」

「自業自得だとは思うけどね。でもお生憎さま。あたしはローゼン社もローゼン家もどうでもいいし、何の口を効く気もないわよ」

(ん？ いやに素直に認めるな。この男もローゼン一族のようだが) ローゼン一族の者だから、偽名で活動中に『紅世の徒』に食われたくはない。

そう思えば納得はできるが、やはり出来過ぎな気もする。

それにこの程度の情報を引き出す為であるならば、エリカだって焦りもしない…はずだ。

(やはり散りばめた情報を拾わせ、こちらに都合の良い組み立てをさせる為だろうか)

一部を暴かせて、それを認め話題を誘導する事でミスリードを誘う。

良くある手だが、もしそうならば上手く嵌められているだろう。

ジョン・スミスと名乗る男の情報を否定する材料は何も無く、また彼をつまみ出すにはピースが足りない。

ここまでの流れを考えれば、エリカがローゼンの血を引いている事も含めて、情報を集めてから押し切るべきだったろう。

(まあ、その辺りがエリカにとって相談し難いことなのかもしれない。例えば深雪も俺が備品扱いされていることに過度に腹を立てて居た

様な気がする)

感情の無い：いや、少しずつしか増えて無い俺には判らないが、人としてのこだわりと言うモノは簡単には解決し難いのだろう。

業なかりせば人非ずと言うが、どうにも俺には理解しがたい。

「ルーカス叔父はかねてから超人兵士を目指すブルゲ・シリーズに関して反対をしていました。それで国を守り人々を守るならまだしも、まったく安定して居ないならば単なる非人道的な実験に過ぎないと」

「そりやそうでしょ。調整体魔法師がそんなにうまく：つて、その時は判らなかつたんだっけ」

「そうだ。安定して居るエレメントはそれほどの力を持たず、九島老師が奇跡的に生命を取りとめた以外は強力な魔法師を目指した者は全て死亡して居る」

ドイツは世界で一番速く調整体魔法師の計画に取りかかっている。それゆえに失敗も多いわけだが、流石にエリカも後付け知識を持ち居てまでローゼン社を挑発する気はないらしい。

バツが悪そうな顔をして、その話題を打ち切りに掛った。

(エリカには悪いが、この話題は助かったな。ようやくジョン・スミスの計画が見えて来た)
おそらくだが、ドイツとローゼン社は調整体魔法師を諦めては居ない。

四葉家も諦めて無いからそう思う事もある。それに以前に無頭竜ウオンの黄と対峙した時に、『ブルゲ・シリーズが完成して居たのか：』と驚いていた。

確か不壊魔法と言うべき硬化魔法のジークフリートを最初に見た時だった気がする。

(ということは経過観察したいのはエリカの相続問題じゃなくて、レオの安定度と魔法強度か。：少し調子に乗ってカードを見せ過ぎたな)

俺が持つ秘密は極力見せない様に心がけている。

術式解散や精霊の眼の初期作用はともかく、『雲散霧消』や『再生』

は使わずに済ませることが出来た。

その為に色々レオやエリカに協力して来たわけだが、硬化魔法のバリエーションや剣術補助用の術式は平然と使ってみせた。

自惚れでは無いのであればという限定で、もしかしたら九校戦の低スペック戦で見せた双子のバリエーション。

あれは俺が開発してレオに使わせたモノを、ジョン・スミスなりに改良した。あるいは四校の鳴瀬たちに開発させたのかもしれない。

(双子の能力は便利だが、一科生を凌駕するほどのスペックじゃなかった。つまり：この男が真に望んでいるのは現段階の力を有効利用し、かつ次世代を強化することでのナンバーズ化だ)

エレメントのように強力では無い者が居て、その中から日本人への偏見が無いとか、話題をスムーズに切り換えられる共感性の持ち主を連れて来た。

そう考えた方が、偶然にUSANで見付けた素材というよりもありえる可能性だろう。

そして魔法先進国である日本が辿ったように、エレメントから十師族・百家のようなナンバーズを作りあげたいのだと思う方が、自然な回答だと推測出来る。

現在も生き残っているエレメントにも色々居るが、ほのかは一科生の中でも上位であり、血統を管理する事でナンバーズを生み出せるならばもっと増える目も出て来る筈だ。

同系統の血筋ならば確実性増す筈だが、現段階で取引を持ちかけて来ないということは、実行可能ならば試す程度の策なのかもしれない。

(おおよその計画は把握できたな。…さて、どうしようか)

こう言ってはなんだが、犯罪を未然に防いでも利益には繋がらない。

まして犯罪などジョン・スミスを名乗る男は計画もしておらず、混乱を見守ることで俺の編み出す魔法やレオの成長を参考にしたいたけなのだ。

利用されるのも、レオを実験道具にされるのも気に入らない。

しかし防ぎ難い策略を無理に妨害して、こちらが損耗を受けるのは馬鹿馬鹿しい。

かといってこちらの生活をひっかきまわされるのも御免こうむるし、万が一にでも深雪を浚われたりしたいたとは露ほどにも思えない。何らかの思考誘導を、こちらからも仕掛けるべきだろう。

（この男が現在求めている新技術を合法的に手に入れることが出来て、かつ、レオや平河たちと交流できる場所を用意するか）

ここで俺たちが警戒し、経過観察を中断する羽目になったら強硬手段に出る可能性もある。

その危険性を排除し、こちらも利益を出す方法を模索するべきだ。そうした仮定の末に、婚姻を結ぶなどの深いつながりが起きる要素があると誤解させておけばいい。本当に気に入るかは本人同士の問題なので出逢いの場だけあれば良いだろう。

そこで俺は、彼らの帰り際に声を掛けることにした。

「いや、全く騙されましたよ。主幹クラスの方がまさか支社の課長を名乗られるとは。普通は逆だと思うのですがね」

「窓際だと申し上げませんでしたか？」

この場合の主幹とは準課長的な意味合いでは無く、主流派の長という意味だ。

ジョン・スミスを名乗る男はニュアンスを間違えず、重役の中でも有力者だと言う指摘に、怪訝な顔をして見せる。

この期に及んで否定するのではなく、疑問に疑問を返す形でお茶を濁して韜晦している。

「日本語で主幹と言えば下位の主任の長ですよ。上位と言う意味では無いのですが…。まあ冗談はここまでにして商売の話にしましょう」

「商売…ですか？ どんな御用事かお聞かせください」

本当に課長職であれば、自分が所属する会社の商品名を上げるだろう。

だが俺が持ちかける話に興味を持ったのか、交渉のテーブルに乗って来た。

「今回の案件に関して、条件付きで技術提携に応じるつもりがあるということです」

「ほう…。キャプテン・シルバー社の。ですか」

俺は頷いた。

四葉の技術でも無く、ローゼンの技術でもない。

FLTから独立した子会社である、キャプテン・シルバー社の技術を出しても良いと言っている。

その中でも今回の件と伝えた以上は、定数化した魔法とバリーエション、ソレを前提としたアーマード・スーツの開発だ。

「平河にアイデアを流したのは貴方ですね？ その過程で生まれた技術であるならば貴方が思いついてもおかしくはない。どうせそうなるのであれば、本格的に技術交流しても悪くはないでしょう」

「私だけではないがね。それで条件とは何かな？」

否定するでもなく肯定するでもなく。

ただ態度がその表に現れる。巨大な企業であるローゼン社の一員としてつまらない交渉ならば受けないと言っているのだ。

「時期はこちらが完全思考型CADを出す前が良いですね。：名目は提携する子会社でも服飾店でも構いません。交換する株式・転換社債の類を買い戻させてください」

「か…完全思考操作型CADの新作を？ 確かにその情報を手に入れられれば…」

今思い付いている新しい完全思考型CADを商品として提示した。

ローゼン社も当然ながら最初に開発したメーカーとして開発しているが、マキシミリアン・デバイスと争っても居る。

トーラス・アンド・シルバーはカスタムメイカーでもあるので、技術提携して自社のCADを改良出来れば一時的に勝利する事もその期間を維持する事も可能だろう。

「しかしそれだけの技術なのに、報酬はそれで良いのかね？」

「現段階では本社の以降が強過ぎて困っているんですよ。ああ…そうですね、既に適当な名前で株の買い付けしているならそれもお願いします」

新会社設立に対し、株式を交換して資本提携とすることはままあることだ。

そして転換社債を優先的に発行することで、将来発行する予定の優良な株式を取得することも。

だが重要なのはそこではなく、この方式ならばFLTの意向を気にせずに、俺たちの元に自社株式を集中出来るということである。

この取引が成功すれば、将来に置いてFLTが自分達の都合の良いように役員を送り込もうとしても、拒否して完全独立することも可能になるのだ。

だからこそ、この男も妥当な取引だと判断すると推測した。

「他人の迷惑を気にする必要があるのは面倒か…私にも覚えがあるよ。キックバックではなく買い戻しならば妥当と判断しよう。どうせ作る会社ならばブティック型の方がありがたいな」

「そういえばローゼン社もアーマーを開発する会社を有して居ましたね。ではその方向で調整します」

ブティックであれば、服飾名目で女性陣を送り込む事が出来る。

平河姉妹や美月を雇うことで、護衛を付けずに見守ることもできるだろう。

あちらもレオや日本の魔法師の関心を引いたりするために、双子やその他の女性タイプの調整体を送り込むつもりなのだろうが、こちらにも利益があるので気にしないでおく。

「そういえば名前を名乗って居なかったが…。まあ今は止しておこうか」

「ジョン・スミス氏と司波・達也が話をした。それで良いと思います」
ローゼンの血族と四葉の血族が交渉を持って居れば、それはそれで不穏な話になってしまう。

俺たちは肩をすくめてその場を後にしたのであった。

●別枠

週が明け、ローゼンの関与がほぼ終結したことでエリカは落ち着きを取り戻した。

だが元の鞘に収まっていない女性もまた存在した。

「手伝つてくれると言う話じゃありませんでしたっけ？ …うそつき」

市原先輩は真顔のまま立ち上がると、俺の顔も見ずに生徒会室から出て行った。

部屋に入った段階でコレとは、相当におかんむりの様子だ。

「まだ関本先輩と俺を混同して居るんですかね？ ちゃんと説明した筈なんですが」

「…あのね達也くん。思いがけない事態になっちゃてるのよ」

説明をくれたのは、会長職を辞した筈の七草先輩だった。

何故ここに居るかは問うまい。どうせ中条会長が泣き付いたのだろう。

「どういうことですか？ 俺は護衛時以外は市原先輩に協力して重力制御型核融合炉の問題に取り組む予定の筈ですが」

平河先輩に施設をレンタルしていることも含めて、俺の目的に近い市原先輩の研究には前向きで手伝うつもりだった。

それが嘘吐き呼ばわりされては割りに合わない。

「それがね。達也くんたちが放課後にやってる話が、いつのまにか協会だけでなく学校にも広まっちゃってるの」

「そういうことですか。ですがアレはあくまで余暇でのこと。学校に居る間は少なくともこちらの手助けに専念するつもりです」

人の口に戸口は立てられない。親族に関係者が居れば噂が広まっているのはまあ仕方ない。

とはいえ予定は重力制御型核融合炉の可能性に向けて、その基幹技術を魔法で代用して見せることであつた。

一部の回路を実際に製作し、動力ではなく魔法で実行することで可能であると立証する為にメンバーは動いている。

そしてメンバーとはメイン執筆者の市原先輩とサブの平河先輩・五十里先輩だけではない。各部活に所属する部員達も自分が可能な範囲で手助けを申し出ているのだ。

部活連や風紀委員会もその一つであり、俺もその範囲で協力をして居る…はずだった。

「協会にもって言ったでしょ？ 理事の人たちとかすつかり乗り気だし、百山校長先生だつてそうよ。各校の選外でも提出が認められるのは知ってるわよね？」

「選外で提出しても、結局のところ認められて呼ばれたケースは無いと聞きましたか？」

各校推薦の一枚をコンペ前の六月に提出し、それを学内選考に掛けて提出すると言う段取りだ。

一応は研究資料ともども提出して、学校の推薦なしでも落ち込む手がなくはない。

だが、手間以前に認められて、コンペに呼ばれるほどの論文は無かったと聞かされていた。

「今回はその逆よ。向こうの方から速く登録しろつて催促が来てるの。あーちゃんなんかすつかり混乱してるわ」

「それで先輩に相談してたんですね…。なんとも迷惑な話だ」

関本先輩などはコンペに選ばれる為に奮闘して、それでも叶えられなかったのだ。

それを協会の方から学校とは別枠で提出して良いと言われるのだから、恵まれてはいるのだろう。

贅沢な話だとは思わなくもないが、本心としては断りたかった。

余暇を使つて並行して可能な研究ではあるが、俺の目的としては融合炉の方がメインだからだ。

自身の目標に近づく大きな一歩なのに対し、おまけに傾倒しろと言われた揚句に協力体制にあった市原先輩が激怒しているのではまるで割りに合わない。

「俺の目的は重力制御型核融合炉を実現させて、魔法師が兵器の立場から脱却する事です。俺以外も含めて時間もありませんし断りたいと思います」

「そういう所までそっくりなのね。リンちゃんは魔法師の経済的な独立と言つてたけど。これだけ相性良いんだから…：本当に付きあつたりしないの？」

会長はなんでもロマンスにからめたがるが、実のところ俺は冷めた

目線で市原先輩との同一性を見ている。

良く似ては居るが、あまりにも似過ぎていてる。

ここまで類似性があるのだとしたら、外的要因が似ているとしか思えない。

「もしかしたら市原先輩の家は……。いえ何でもありません」

俺が四葉の分家の出であり、実験体であったように市原先輩も同様の立ち位置を持って居る可能性はあった。

四葉以外に分家があると言う話を聞かないが、隠して居るだけで存在する可能性はあるだろう。

だが、それを知って何になるのだろうか？

同病隣れみ傷を舐め合う様な正確でもないし、仲直りにによって、目指すべきは融合炉に向けてすべきだ。無意味なことは聞かないに限ると会話を打ち切ることにした。

だが、結果的に俺の目論みは失敗に終わる。

理由としてあげた担当者たちが、不眠不休で試作案などを作りあげてしまい、後は採寸とCADの仮り組みだけまで行ってしまったのである。

サンプルとして描かれた、『炎の花』^{アマリリス}と呼ばれる飛行魔法採用型ウエディングドレスを見て、俺は苦笑するしかなかった。

聖なる契約（ホーリーオーダー）

●魔性の潜む影

協会から振られた急な話題には覚えがあった。

九校戦の時も裏で『代わりにやっておいた』とばかりに、こちらの都合を無視してくれた人物が居たのだ。

その人物に連絡を取ることは今までなら躊躇われた。

俺は『紅世の徒』対処すると伝えながら、関本先輩が食われた時のいきさつが判らなかつたので詳しい報告が出来なかつたからだ。だが調べ終わったので問題無く連絡を取ることが出来る。

『あら、達也ちゃんからなんてお母さん嬉しいわ。それで何の御用事？』

「かねてからの任務である『紅世の徒』に関する中間報告と、論文コンペに関する問い合わせです」

しらじらしいと思いつつ報告を入れると、クスリと笑う音がする。

秘匿回線独特のタイムラグの後、妖艶な笑顔が思い浮かんだ。

『では聞かせてもらえるかしら？』

「目標は大漢に協力して居た『紅世の徒』の一組で二体。予測される目的は主に四葉への復讐でしょう。また…」

ここまでの情報は大したことではない。

前回に連絡があった時には知れていた。あえて言うならば大亜連合の作業員が食われたことで疑念が固まったというくらいだ。

（以前の俺だったらそこで情報が止まっていただろうな。情報を手入れし俯瞰することができたのは、シルバーの名前を出した影響だろう）重要なのはここからで関本先輩が食われた一件だけではなく、調べてみると似たような事件が起きていたと判明したことだ。

魔装大隊経由で軍、エリカ経由で警察関連、北方で経済界、吉祥寺経由で研究者関連など。様々な経路で調査したところ同様のケースが多発していたのだ。

そこで関本先輩の件を詳しく調べ、類似する件も似たようなファイルで再チェックを掛けて見た。

学生間・企業間などごく狭い分野で名の知れた魔法師が、いずれも研究に頓挫したり選手生命を断たれて目立たなくなつてから食われている。

産学スパイなどならやる気を無くした研究者など放つておくのだけれうが、『紅世の徒』にとっては影響力と実力を持つ魔法師であれば良い餌さなのかもしれない。

とはいえその影響度はともかく名声のマイナーさに関しては微妙な所で、軍や警察ですら後から指摘してようやく気が付くレベルの情報である。

それらの情報を効率良く調べられるとしたら何処に潜むべきか？
幾つかの仮説と追跡調査を経てとある推測に辿りついた。

「…現在は魔法協会に近い筋に潜伏して居ると推測されます」

当然と言えば当然だが、協会ならば有名無名に関わらず有意義な研究機関やスポーツで活躍する魔法師をチェックしている。

特筆する様な物でなければことさらに取り上げたりはしないが、新魔法や扱い易いバリエーションを開発するとその都度に魔法大全に登録するか議論するほどだ。

もちろん他の可能性もあるし再計算する為に色々と調査を試みましたが、やはり魔法協会を利用するのが『今注目を集めているかどうか』を把握するのはやり易いだろう。

『協会に近い筋…ね。ならばどうすべきかしら？』

「本当に協会なのか、あるいはナンバーズの何処の家に潜んでいるのかを確認する必要があります。似て非なる情報を各筋にバラまくことで、特定すべきかと」

可能性が高いだけで魔法協会とは限らない。

確かに協会に潜伏しているのであれば、確かに詳細情報を調べることが可能だ。

だが同じことを十師族を含めたナンバーズも知ることが出来る。言うまでもないことだが彼らが協会に理事を送り込んで居るのだから。

この推測が正しいのか、正しいとしたらどの家を利用して居るのか

？

それを更に調べ特定する為に、微妙に異なる情報をバラまいていく。

例えば完全思考型CADに関して、ローゼン・マジクラフトから来たあのジョン・スミス氏に渡す情報と、エリカとレオに渡す情報、雫の従兄弟である鳴瀬に渡す情報でバラバラの話をしたとする。

特定の人物にしか口にしていない言い回しや細かい情報を、他の人物が話して居たら、その人物が口にして回っていると特定出来るだろう。

『まあその辺はこちらでやっておくわ。でコンペに関して何を聞きたいのかしら？』

（やはり何かを掴んで居るな。ローゼンや北方との提携の事ではあるまい。紅世以外となると…）

試す様な口ぶりは、良くできましたと言う前振りの様な物だ。

四葉の当主にしか知りえない何かしらの情報を掴んでおり、その対処の一環で俺の介入を誘っているとしたか思えない。

とはいえ俺が知り得る情報は少なく、そのどれに対応して居るのかで大きく変わってくる。

「…大亜連合に対する手はずを整える必要があるかを確認したいと思ひまして」

『お願いするわ。いきなり部隊を展開するのも変な話だし、関係者一同が関わってもおかしくないようにしておいて欲しいわね』

やはりというか、残った案件で手つかずの事件はソレしかない。

ローゼンの影はあくまで様子見と経過観察であり、援助を申し出る北方を含めて俺の一存で対処できるレベルだった。

残るケースはただ一つ。

潜入して来た特殊部隊がまるまる食われたなど、大亜連合にとつても良い恥さらしだ。

符徴や暗号は全てが処分されない状態で残っていたと言う話だし、それらを一新してから本格的に兵を送り込んで来る可能性が高かった。

紅世の徒に関して俺と同じ疑念を抱いているかは別にしても、コンペの開催日に有望な魔法師ごと横浜にある協会の支部を強襲しても不思議ではない。

『…そうね、達也ちゃんのところまで研究して居るウエディング・ドレスで結婚式なんてどうかしら?』

「確かに外装案の一つに在りますが…。本当に結婚式を挙げるのですか?」

思わず疑問系で尋ね返してしまった。

非礼に当たることよりも、確定しない流れと言うのは好きなように介入を許してしまう。

あえてこちらから、適当な流れを提示してコントロール可能な範囲で留めるべきだった。

『勝成さんと琴鳴ちゃんの結婚式をやってしまいましょう。せつかくだし渡辺家と千葉家のもやっちゃったらどうかしら? それに絡めて希望者以外もみんな着ちゃっても良いかもね』

「おめでとうございますと言いいに行かないといけませんね。…それはともかく大事になってしまいそうな気もするのですが…」

お祭りイベントで希望する数組が合同結婚式、着たいと希望する人間がみんな着る…。

頭が痛い光景であるが、確かにソレならば関係者各位…この場合は防衛省に所属する魔法師が多数来賓として招かれても問題無いだろう。

説得に成功できるかは別にして、渡辺先輩とエリカの兄が結婚式を挙げるとなれば、剣の魔法師たる千葉一門から数名では効かない参列者が来るはずだ。

観光客に紛れて投入するレベルならば十分鎮圧は可能であるし、陸戦隊を用意して居るとしても軍が来援するまでの足止めくらいは可能だろう。

「判りました。可能かは別にして最大限の手配をしておきます」

『101はともかく、響子ちゃんに声を掛け忘れちゃ駄目よ?』

師団としての101はアンチ十師族というスタンスだが、中核であ

る魔装大隊は現実主義でナンバーズの関係者も入っている。

その中でも藤林・響子はエレクトロン・ソーサリスと呼ばれる電子戦の達人だ。

大亜連合の戦力がどの程度かは判らないが、彼女であれば有力な支援を行ってくれるだろう。

いや、町中での不正規戦闘に限定するならば、これ以上に心強い味方は居ない。

●お見合いの季節

翌朝になつて方々に予約のメールを入れながら、家を後にする。

早速お袋から得た許可を使って戦力交渉の準備というわけだ。

(今なら大亜連合も暗号書き換えで動けまい。コンペ当日に重ねる様にイベントを予定しておこう)

そんなつもりで俺は魔装大隊や黒羽家充てにメールを作成入れると、詳しい話は後日と銘打って面会スケジュールを入れておいたのだ。

協会ないしナンバーズに入り込んでいるならば用心に越したことはないだろう。

「どうされるのですか、お兄様?」

「面倒だが受動的に動いても流されるだけだ。ならばこちらで特定の状況を作る様に動いて行くしかないな」

複数存在する情報ネットワークの中心に立つことで、ナニカが隠れている『枝』を把握する事が出来る。

協会の近くに『紅世の徒』が潜んで居ると推測できたのも、これまで行動して来た結果だった。

同様に様々な流れの中で自分が動き易い状況を想定し、そこに至るまでのキーを各地に設定すれば『紅世の徒』であろうが大亜連合であろうが対処出来るだろう。

だがそれは希望的観測であり、万が一を避けるのであればより絞って行くべきだ。

「大亜連合が横浜を強襲すると仮定して、まずはソレに対処する。『紅世の徒』に関しては特定までいければ良しとしよう」

「横浜…ですか？ 本当にコンペを狙ってくるのでしょうか？」
狙うだけなら他にも候補はある。

そんな深雪の疑問に対して俺は頷きながら説明して行く。

「単なる侵略…というのも妙な言葉だが、フリーハンドなら確かに幾らでもある。しかし日本が先行する魔法技術の奪取や経済圏への直撃など、一度の奇襲で最も効果の高いのは京都か横浜だろう」

各地の研究所などの魔法系施設をピックアップし、最後に魔法協会が持つ施設の中でも京都と横浜にしかないメイン・データバンクを例示して行く。

コンペの開催していることもあるが、特殊部隊と陸戦隊を損耗してまで採算の取れる場所と言うのはそう多くないのだ。

本格的な武力進攻ならば話は別だが、その場合は俺が心配する話でもないだろう。

そもそも一個人で考えるには重く、家や軍などを使って可能な範囲で横浜防衛に手を尽くそうと考えているのも、今回は俺も深雪も行かざるを得ないからだ。

正直な話、まったく攻めて来ずともまるで構わない。こちらが流す情報を拾った『紅世の徒』の動きをゆっくり観察させてもらうだけの話である。

「大隊は大丈夫として…渡辺先輩と千葉家に連絡だな。エリカが仲介を引き受けてくれるなら一気に片が付くんだが」

「それは無理でしょう。下の兄君以外は仲が良くないそうなので」

「そういえば渡辺先輩との確執も次男と先輩が婚約したからだという話だな。」

しかし次男か…。

「そういえば上のお兄さんは何をしているんだ？」

「確か警部さんだとか言っていましたよ。正確な階級までは聞いておりませんが」

…ということは丁度良いな。

結婚して居るといふ話も聞いて無かったし、藤林少尉となら家格も釣り合う。見合いに近い話で自然に横浜に連れて来ることが可能だ

ろう。

「エリカには上のお兄さんを連れて来てくれとだけ伝えるとしよう。次男と千葉家の方は渡辺先輩経由で話してもらおう方が早いな」

「それでは渡辺先輩があのお兄さんの衣装を着ることになるのですか？ さぞや素敵なのでしょね…」

本当に結婚式になるかは別にして、話の流れ的にそうなるだろう。

四葉の分家である新発田・勝成の場合は、既にガーディアンと内縁関係になっていいるという話だし、着るとしても普通のウエディングドレスの方が良い筈だ。

家の都合で振り回された揚句、テスト中の特殊CADでは浮かばれない。

「衣装と言えばアレはCADを隠すのに丁度良いな。装甲材に工夫は必要だが軽い防弾性能くらいは持たせられる」

「お兄様…。ウエディング・ドレスは女性が最も華やかに装う物なのです。例えとして決戦衣装と言われますが、本当に武装と考えられては困ります」

すねる深雪には悪いが、『アマリリス炎の花』と呼ばれたウエディング・ドレスはモデルにした花の影響もあってどちらかといえば軽装の鎧に見える。

派手派手しい花卉の形状と大きさ、色合いといい実に装備を仕込み易かった。

格闘の為に動き回るのは微妙だが、飛行魔法を前提として各種武装を装備するには丁度良い衣装だろう。

「そんなに気に入っているなら深雪にもあつらえるか？ さぞや似合うと思うが」

「お、お兄さままつたら…。深雪にはまだ速いと思いますわ…」

深雪はまだ当主候補だし、相手の方も候補を絞り切つてはいない。

一条あたりが筆頭なのだが七宝や他のナンバーズ、あるいは技術を取り込むと言う意味で吉祥寺ら技術者というセンだつて無くはない。

そう意味において、確かにまだ先の話ではあると言えるだろう。

なお、エリカの返事は実に軽いものだった。

持ちかけた俺が拍子抜けするほどで、次男と渡辺先輩の件も御頼めば良かったと思うほどだ。

「別に良いわよ？　うちのバカ兄貴に見合いなんて勿体ない話だと思うけど…。あ、イベント衣装に白無垢も入れてよ」

「エリカが着るのか？」

どうやら違うらしく、嫌そうな顔で大袈裟に首を振った。

その後で何か思いついたらしく、ニヤリとした笑顔に切り替わっていく。

「あの女と次兄さまが洋式だからって…。なんでもない。バカ兄貴が千葉家でするなら神前でっていうお達しなのよ。でとそうね。どうせ着るならミキと美月なんか良いんじゃない？」

「え、エリカちゃん!？」

「な、何言ってるのさ!？」

エリカの爆弾発言に幹比古と美月は真っ赤になってお互いの顔を見つめ合い、そのまま押し黙ってしまう。

「何よミキ。美月じゃ嫌なの？　それとも幸せにする自身が無いの？」

「嫌な訳在るもんか……って、僕は幹比古だ!」

「あううう…」

俺は溜息をつきながら首を振り、声を潜め読唇を避ける様に内向きで忠告を掛けることにした。

まだ懸念材料ではないが、冗談で済ませて良い状況ではない。

「すまんが冗談で済むのはここまでだ。コンペ当日、どこかの特殊部隊が襲ってくる可能性がある。まだ可能性の段階だがな」

「それってブランシユが用意した連中以上って事よね？　なるほど、それでうちのバカ兄貴か。…戦力に期待してくれても良いわよ」

「そういうことなら吉田家としても協力出来るよ。い、イベントだしね」

流石にエリカや幹比古も神妙な顔になり、コクリと頷いてくれた。

「…と言う訳なのですが、十師族は警戒され見張られていると思われ

ます。申し訳ありませんが必要以上の戦力を持ち込むのは控えてください」

同様に生徒会室でも同じ様な話題を出し、微妙に異なるニュアンスを混ぜて『紅世の徒』が入り込んで居ても良い様にしておいた。

推測と微妙に異なる見解を混ぜることで嘘ではないが本当でもない誘導をして置き、十文字先輩と七草先輩の方にも釘を刺しておいたのだ。

「そうか。ならば俺の結婚式も早めるとしよう。籍を入れ同居するのはまだ先だが、問題あるまい」

「ちよつと待って！ 十文字家と十山家の披露宴って大事じゃない！」

一部斜め上の回答をされた以外は、概ね予定通りに仕組めたと言つてよいだろう。

こうして俺たちは、論文コンペに向けて伏兵を用意することに成功したのである。

光と影（ソル・イ・ソンプラ）

● バーニング・ラバー 灼熱の聖婚祭

相反する二つを実行せねばならないと言う難問が突きつけられた。第三者が聞いてお祭りイベントに見えると同時に、入り込む『紅世の徒』や大亜連合の特務部隊を警戒せねばならないのだ。

警戒を密にすればイベントらしさが疑われカモフラージュの意味が無くなる。それらを隠そうとすれば警戒がザルになってしまい不正規戦闘の専門家には抜け易くなってしまうのだ。

「大亜連合とか新ソビエト対策と、イベントとしての華やかさが両立すれば良いんですね？」

「そうなんだが…。美月には何かアイデアがあるのか？」

念の為に『紅世の徒』関連の情報は伏せて、美月たちにも話は通してある。

その過程で相談したところ、何やら名案があるらしい。

「本当に結婚される方は当然として、百組なり二百組なり登録制で完全なお祭りにしてしまっってはどうか？」

「美月？ カモフラージュのお祭りらしくないから管理し過ぎは問題になりそう…。という事なのだけど？」

曖昧なというか、以前と同じことを言われて深雪も困惑している。登録制という言葉が新しいが、管理性を導入するとイベントらしさが失われてしまうというダメ出しが出た筈だ。

それが出来ないから苦勞して居ると言う議論なのだ…。

「それは普通の人たちが、普通の結婚式風イベントをするからだと思うんです。お試しの見合いカップルだけじゃありません！ 男同士に女同士、兄妹に親子、果てはペット達まで！ 厳正な抽選を乗り越えた全てのカップルが祝福されるんです！」

シーンとした痛いほどの沈黙が周囲を包み込む。

当たり前だ、そんなインモラルな結婚式がどうして祝福されるだろう。

例えばイベント中だけの偽装であろうとも…。

「良いわね、名案だわ。柴田さん！」

「アハハハ！ いーって、いーってソレ！ ナイスアイデアよ美月！」

まず七草先輩やエリカたちが毒された。

「ちよつと待て。いくらなんでもそれはマズイだろう。ほら、深雪も何か言つてやつてくれ…」

「お兄様…。深雪は、深雪もこのイベントに参加してみたいと思います…」

一体全体どうしたんだ!?

それとも俺の常識の方が間違っているのだろうか？

勝手にまき込まれて迷惑している美月や渡辺先輩が暴走するのはまだしも、気が付けば中条会長まで『デバイスとも結婚できるかな?』などと戯言を口にし始めている。

どこかで熱を冷まして、冷静さを取り戻さねばならないだろう。

「とにかく一度落ちついて考えよう。当局から目を付けられそうなアイデアは却下だ」

「これはジョーク・イベントだから問題ないわよ。それこそ十師族や千葉家が関わってるのに、文句言う連中なんかいないって」

「そうそう。それに孫の結婚式が見たいけど、年齢制限があったりして死ぬまでに見れないって御爺様方は応援して下さると思うわ」

「代案無き反対は問題だと常々仰っているはずです。御覚悟くださいお兄様」

ここに来て女性陣は一致団結し、何卒まで身内で確保出来るか、あるいは登録枠をどこまで拡大するかを話し合い始めた。

俺としては不本意ながら、コンペの準備などで一同の時間が潰れて中止にならないか…と本気で考えてしまった。

●塞翁ケ馬

論文コンペの準備は問題無く終わったが、そこまでの道のりは決して平坦では無かった。

産学スパイの影こそあったが特に妨害されることもなく、最後まで無事にやり遂げたと言える。

幾つかの案件のうち、市原先輩との間柄がこれ以上ないくらいこじれたのはまあ良い。生徒会室に顔を出さなくなったのも忙しかったからかもしれないし、以前に頼まれていたループ・キャスト関連はメールで提出して居る。こじれたままでも半年もすれば先輩は卒業するのだから気にする事も無いだろう。

では何が問題だったかというところ、一口で説明するのは難しい。

例えば第三者として『紅世の徒』が横槍を入れないと理解できてしまったことと、当日は大亜連合の襲撃に専念できると同時に判明した。

他には出先機関として作ったブティックが、警察や軍のコマンドと優良な関係でいられるような契約を交わしたら、次の日には乗っ取られて経営権を奪われてしまったりと…良いことと悪いことを内包している案件を抱え込んでしまったからだ。

それと俺個人にとっては残念なことに特殊カップルの結婚式イベントは完全に通ってしまった。当局も協会もこの件に関してはスルーを決め込んでいる。

「申し訳ありやせん。こんなに簡単に乗っ取られちゃって」

「落ち付いてください。あそこは出先機関ですし、こっちが乗っ取られて無いならまるで問題は有りません。それに…」

子会社化したトラス・アンド・シルバーの常務待遇として牛山さんを迎えたが、あくまで技術者だ。M&AもTOBにも縁が無く、発行株数や持ち主の監視報告に目を通すくらいが精々だったろう。

(…それに、このタイミングは内部犯だな。早速リークしたと見える)あまりに都合の良過ぎるタイミング。

FLTの経営陣が揃ってがトチ狂ったのでなければ、四葉家の意向で各方面に情報をばらまいたと見るべきだろう。全て真実の情報を、細切れにして嘘ではない範囲で都合の良い予測と絡めてから広めれば乗って来る者も居るはずだ。

かねてから頼んでおいた、『紅世の徒』がどこに潜んでいるかを焙り出す為の一環と思われた。

「それに？」

「問題になるなら入れている人材を引き上げて、潰してから新しく立ち上げ直せば良いだけです。それまでみんなに約束したポストを用意できないのが残念ですけどね」

「そりやそうだ。違いねえ」

冗談でその場を取り繕うと、最低限の指示を決めておくこととした。アーマード・スーツやCAD関連商品を日常に近いレベルで設計・受け取りする為のダミーシヨップだが、所詮は出先機関でしかない。最悪の場合は本当に潰して看板を付け替えれば良いだろう。スパイ活動などでは良くある話だし、先方に連絡さえしておけば何の問題も無い。

「ひとまず株の持ち主とその意向を洗って下さい。それこそ千葉や三矢が経営権まで欲しいと言っただけなら放っておけばいい」

「そうですね。では早速…なんだ？ 騒々しいぞー！」

千葉は言うまでも無く警察関連の装備に関して力を持ち、三矢は同様に軍に強い影響力を持つ。

共に今回の件では間接的に取引を交わしており、専用装備を設計、場合によってはデリバリーする契約を結んでいる。

もし彼らが欲を出して自分で経営したいというのならば、経営権など手放してしまえばいい。連絡・輸送する手間を自分達でやってくれるように成るだろう。

そうなればこちらは持ち込まれたアイデアを設計して、実現させるだけで良いと言える。

「困ります、今重要な会議中で…」

「関係者だから大丈夫。調べる必要はないわよ。新しいオーナーならば此処に居るから」

「藤林少尉？ ということは大隊…いや、藤林家が仕掛け人ですか？」

藤林・響子はイヤそうな顔をすくめた。

エリカの兄である千葉・寿和との見合いを勧めた時はそれほど悪い感触ではなかったが、何かあったのだろうか。

「どちらかというとうと九島家ね。光宣くんの面倒も見て欲しいと言う話だけど」

「…紅世がらみでの露出なら適当にモデルでもお願いしておきましょう。完全思考型CADが相当お気に召したようですね」

この場合の面倒と言うのは、『紅世の徒』に狙われ難いようにある程度の名声を付与しておくことだ。CADの注文時に聞いたことがあるが、九島・光宣は体調に優れず籠ることが多いので狙われ易い部類に入るらしい。

（それだけにしてはえらく強引だが、現当主の方が老師への対抗心で色々と手を出して居るらしいからな。しかし気になる事もある、確認しておくか…）

老師こと九島・列の影響は強烈で、その息子である現当主はナンバーズの中では空気扱いされることもある。

居ても居なくても同じことという話だが、本人も老師に比べたら劣ると言うだけで魔法師としては問題無いから不満を溜めて居ると言うことだ。

老師が魔法師を兵器化するのを嫌っている反面、今回のような戦力拡充できそうな時に爆発して九島の勢力を伸ばそうとする。

「それだけならば通知が一つで済む筈ですが…。何か急ぎの用件でも？」

「適当でいいから『縮退砲』の試作品を見に行つて欲しいのと、…これは急ぎなのだけどCADに電子攻撃への防備をお願い」

藤林少尉の言葉に俺は内心で首を傾げた。

試作型縮退砲というのは偽の呼称で、俺が使う戦略魔法を使う為の専用CADである『サードアイ』の名前を隠す為の物。

他にもメギドやアブソルートという単語を使つたりすることもあるが、本来こう言ったやり取りは秘匿回線を使う用事の筈だ。

秘密にするべきプロジェクトをことさらに此処で使つたのは、この会社に『紅世の徒』が潜んでいるか焙り出す為…なのかもしれない。そう考えれば判らなくもないし、縮退砲なんて大仰な名前がどこかで出ればトールラス・アンド・シルバーの中に『枝』が刺さっていると思つて追跡調査すれば良い。

だが、電子攻撃というのが奇妙だった。

「CADはハッキングなど受けない仕様ですが？」

「そつちじゃないわ。魔法によるEMP防御の必要性が出て来たの。できればライフラインへの影響も何とかしたいけど、そつちは別口に依頼が行ってるはず」

迂闊にも俺は思考が一瞬空白になった。

EMP攻撃とは『汚ない核』の使用時に電子機器が使えなくなるといふ状況で二次被害の一つだ。今では直接の核攻撃よりもそちらの方が研究目的とされる。

主客の転倒を上手く活かしたとも言えるが、核攻撃の規模が大きいと管理も影響も大変だから、小さくして制御し易くして電子機器が使えなくなると言う二次被害を目的とする訳だ。

核攻撃など論外になった今日では、EMPを起こす魔法の研究もあるし、実際にソレを目的とした戦略魔法も存在した。

正直な話、大亜連合の作戦は魔法技術の奪取のついでにハラスメント攻撃をする程度の介入だと思っていた。

「まさか本格的な武力侵攻…。それも諸外国の非難を無視する形で行う気なのですか？」

「そのまさかよ。エージェントや一部の予想に過ぎないけれど大亜連合は日本も『紅世の徒』も一緒に始末する気みたいね」

別に大亜連合が戦争を目論まないと過信して居たわけではない。

だがしかし、侵攻した瞬間に周囲から袋叩きに合うような方法を選ぶとは思ってもみなかった。

戦略魔法は核に準ずる非難を受けるし、カウンターならまだしも攻める側が使つては諸外国がつけ込む可能性もある。

さらに例の不審船事件で日本が警戒して居る状況なのだ。日本にも戦略魔法師は居るのだしこちらが戦略魔法で報復しないと思ってるのだろうか？

「もしそうならば気を引き締め直さねばなりませんね」

「そうならないのが一番だけどね」

どちらにせよ、今回の件で協会はともかく十師族に警戒態勢が呼びかけられるだろう。

紅世の徒がどこに潜むにせよ、ずっと見守って何もしいか、大亜連合を狙うと思われた。

望む望まぬに関わらず今回の敵は一つに絞られたのである。

● 災いの到来

豪華客船から無数のリタイアードらが降船し、それに紛れて金持ちやら何やらが船のタラップを降りる。同じ仮設橋でも飛行機のソレと異なり、たつぷりとした余裕は護衛を連れても問題無く進む事が可能だ。

「閣下。お手数をおかけしまして申し訳ありません」

船から降りて来る人物を出迎えるのは、これと言って特徴の無い服に身を包んだ人物だ。

隙の無い視線と身のこなしから、容易に軍人と推測出来る。

「ホッ。構わないヨ。これも党のためネ」

対して閣下と呼ばれた小太りな男は奇妙な装束だった。

たつぷりと布地を使った極色彩の服を着た、黒焼き眼鏡を付けた老人。

前世期の香港映画にでも出てきそうな姿で、役柄は胡散臭い骨董屋かさもなければ悪役であろう。

不思議なことに、老人の異様さを見ても誰も注視する者は居ない。

服装の差そのものが二人の力量の差を現して居た。大亜連合でも屈指の実力を持つ男ですら、老人の魔法にはとうてい及ばない。

「呂ルッの小僧はどうした？」

「我々を逃がす為に殿軍を実行してから見ており居ません。武運拙く破れたものと思われませす」

副官はどうしたのかと尋ねる老人に、平静を保って居た男は始めて苦い顔を浮かべた。

それだけ呂と呼ばれた男の武量は優れて居たのだし、彼や他の部下を見捨てて逃げねばならぬとは何と無様なことか。

「不意を討った炎鬼イエングレイと互するとは大したものヨ。呂上尉の技前こそ誇るべきネ」

「はっ。惜しい男でした」

老人は失態をなじる事などしない。むしろ死せる武人は幾ら褒めても構わない。

既に精銳を失っており、ただでさえ少ない戦力を減らして何になるう。まして昨今活動を聞かなかつた『紅世の徒』の行いなのだ。

もつとも責任を取らせるのであれば、せめて有意義な方法で使い潰すべきであろうとか計算が無いではないが…。

老人はチラリと細い目を動かして、周囲に謎の発光現象を作りあげた。

五枚程度の光版に様々なニュースだけではなく、明らかに何処かのカメラらしき光景が無数に移り変わる。

おそらく老人は電子の放出系能力者であり、その極意を極めて居るのであろう。ならばこの程度はなんの問題も無いし、周囲の監視などあつて無きようなものである。

「…ふむ。これは重畳アル。どこにも上尉らしき俘虜ナイ、死体も見つかつてなナイヨ。我々は彼の雄姿を覚えて居る、つまりこれは炎鬼の手から逃れた証左」

「自刃したかもしれませんが…。可能であれば万難を排して合流を果たすでしょう」

ワザとらしいイントネーションで言祝う老人に対し、男の方はあくまで冷静だ。

理想論で部下が生き残っているなどと計算せず、現有兵力だけで任務を遂げる覚悟を決めている。

「ともあれ今夜は長旅の疲れを御癒してください。横浜で一流の歓待を用意して…」

「陳、余計な気回す良くないネ。鮑も神戸牛も船で死ぬほど食べたヨ。ワタシに任せるよろし、焼き鳥でも串あげでもオイシー日本食知ってるのコトヨ」

バンバンと陳の背中を叩き老人がその場を立ち去ると、ズラズラ足音を立てて姿なき何者かが追隨していった。

それは老人達が繁華街では無く下町へ向かつた後も続いていたと言う…。

横浜事変、前編

● 仕組みられた戦い

論文コンペに俺が提出した内容はそう大したものではない。

用意した設備は今までも存在したサポート・システムを大掛りにして、それを賄う為に大用量の動力供給源を付け足しただけのモノだ。だがこれまでのように高い能力の持ち主が、高難度の魔法を使うことを前提とはしていない。

「…むしろ低い能力を基準として自己啓発を図り、核融合炉からのエネルギー伝道をサポートとして得られれば、これまでよりもずっと人々が魔法に親しむ事が出来るでしょう」

これまでと異なるのは高い能力を持つ十師族のような者を基準とするのでは無い。

むしろ二科生や、適性が無いと評価される者を基準として据える。

そしてサポート・システムの方を大用量にする事で、誰もが魔法を使えるようにするというモノである。

この案に対しての評価は大きく二つに分かれるだろう。

既に能力がある者にとっては得られる恩恵が小さく、制約を付けてまで精密にコントロールするほどのことではないと言う論。

逆に現状では魔法を使えない層にアピールすることで、多くの対象者が魔法を得ることに意味があるという論だ。

(概ね軍に近い筋では前者、産業界では後者の意見になるか?)

融合炉を前提としたのでは戦力が特に増えない軍。

魔法先進国の日本ですら3万人しか魔法師が居らず、もっと商業・文化的な対象者を増やしたいと言う産業界。

この二つの意見が異なるのは仕方が無いし、融合炉も目途が立っているだけに過ぎない。

(とはいえここではそれほど関係あるまい。評価はともあれ『予定通り』なら時間も無いはずだしな)

学術コンペだけに一般票として生徒の票(各校の生徒会長になるのが通例)があるし、戦力だの利益だのは関係ない。

それらを排除した投票が行われる筈なのだが、今日この日をXデーとして大亜連合が仕掛けて来ると予想されていた。

午後から予定されている仮装イベントが始まるまでには、仕掛けて来るものと推測されている。

場合によってはいきなり、一つ・二つの論が終わったところで急変する可能性もあったが…。

今の所は特にない様であるが、連合が部隊を動かせば投票どころか議事進行はその場で打ち切りである。

(文弥と亜矢子は配置に付いてるな。…なら問題も無いか)

従兄弟である黒羽家の文弥と亜矢子に一般客を装わせて、それぞれ中条会長と『もう一人』の側に付けてある。

中条会長は情動を操る精神魔法で鎮静化を図れるとのことだし、もう一人はこの機会に『紅世の徒』に狙われる可能性があったからだ。

この場で必要にならなくとも、退避中のどこかで必要になる可能性があった。

そして残すは選外の数論という段階になって、会場に何名かの生徒が入ってきた。

いずれも見覚えがある…十師族などナンバーズに連なる者たちで、事態の急を告げる為に現れたに違いあるまい。

そう思っていると十文字先輩が代表して壇上に登ったのが見える。『自分は警備責任者の十文字です。現在、所属不明の軍隊により…』

大きなどよめき上がるが会場に侵入者は居ないことから、想定内の範囲で収まって居る様に見える。

七草先輩も居るようだし中条先輩に文弥を付けている、放っておいてもこの場は大丈夫だろう。

俺はその場を抜け出し、指示された通りVIP用の会議室の方へ向かった。

「ようやくと言ったところだね…。もうちよつとでロリコン疑惑が全校に広まるところだったよ」

「言うな。俺なんか妹とだぞ」

午後から予定されている仮装結婚式イベントは無事に中止になる

はずだ。

同じく抜けだしてきた吉祥寺と顔を見合せながら苦笑を浮かべた。「二人ともこつちだ。第一報では直立戦車が突っ込んで来たそうだ」「将輝！…直立戦車というと東欧のだね。戦車として見る場合は結局、軽戦車並みで失敗作扱いだと聞いて居るけど」

先が上がっていた一条の手招きでVIPルームにお邪魔する事になる。

そこには藤林少尉を始めとして見知った顔も居れば、そうでない者も多い。

共通するのはナンバーズや、それに協力して居る魔法師（吉祥寺や幹比古など）という点だった。

「無頭竜がソーサリー・ブースターという違法な魔法強化装置を販売して居たらしい。組織の壊滅に伴って供給源が絶えたから、在庫一掃セールのもりじゃないか？」

「人伝てだが、十三使徒である劉・雲徳將軍の投入が予定されているそうだ。EMP攻撃の前に使い潰すつもりかもな」

幾つか初耳の話もあったが、大凡の状況は理解できた。

直立戦車は戦車としては失敗作かもしれないが、攻勢に用いるならばソーサリー・ブースターとやらで強化した魔法障壁があれば、ある程度の防御力を持たせられるだろう。

それを壁役に押し立てて、後ろから軽車両なり装甲車でコントロールすれば良い。直立しているがゆえの被弾面積は被害担当させるにはむしろ効率的かもしれない。

市街地に対戦車砲など用意している筈も無いし、十分に役目は果たせると踏んだのかもしれない。

「劉・雲徳というと戦略魔法の『霹靂塔』か!? 大丈夫なのか…」

「霹靂塔は攻撃力よりも電子妨害の方が問題とされる魔法なのと、横浜支部のデータ奪取を狙っている間は大丈夫だろう。奪取から都市機能の破壊に狙いを変えたら判らんが」

戦略魔法『霹靂塔』は、広範囲な大規模落雷による電磁パルス攻撃だ。

一瞬では無く連続で引き起こされ、更に電気抵抗その物が低下させられるので電子機器は壊滅的な被害を及ぼされる。

魔法攻撃としての火力よりも、インフラに対する攻撃の方が問題だろう。

だが魔法技術の奪取と言う目的が、逆にその足枷となっていると言えなくもない。

破壊工作に切り替えればその能力を十全に活かせるが、国として侵略・テロの汚名（と報復の戦略魔法の危険性）を負ってまでの利益があるとは思えない。

やはり横浜支部周辺の防御力を低下させて、占領ないしデータ奪取までの時間稼ぎをし易くする為の手段と思われた。

ゆえに劉將軍が既に現地入りしているのか、それとも洋上を移動中なのかは別にして、一撃で横浜を大混乱の局地に陥れるほどではないだろう。

●逆襲作戦の開始

やがてメンバーが揃った段階で臨時の編成が始まる。

ここに集ったメンバーの中に否と言う者があるはずはなく、一定のルールの元に全てが合法化される。

『侵攻部隊の脅威が去るまで、皆さんを一時的に軍の指揮下に置かせていただきます。全ての責任は軍にありますので…』

意に沿わぬ命令される代わりに全ての責任を軍が持ち、心理が楽になるというのは奇妙な気がしないでもないが。

『方針として魔法協会の横浜支部を中心に防衛を主目的。残るリソースで安全の確保が出来次第に各校生徒の避難を順次に行います』

指揮系統を一本化したことで、避難効率も格段に良くなったと言えるだろう。

覚悟の出来て無い各校生徒を高校別に逃がすよりも、数校ずつ確実な方法でシェルターや港・ヘリポートまで移動させる。

高校別であれば数名ずつの護衛が一度に十数名に増え、その厚みで慌てるかもしれない生徒が落ち付いてくれるのはありがたいはずだ。

もちろん偶然相談して逃走経路が一致する場合もあるが、運が悪け

れば人数が災いして象の歩みになってしまふことを考えれば雲泥の差である。

だが良い面があれば悪い面もまた存在する。

最も最悪なパターンは全員が同じ思考に陥って、揃いも揃って同じミスに当たってしまうことだろう。

例えば直立戦車は戦車として見れば失敗作だが、威圧用や特攻用として見ればかなりの戦果をあげてしまった事だろうか。

『対EMP攻撃用のアブソルートの設置を行います。この護衛に…』
「大変です！ 直立戦車が何台か囲みを抜けてここまでやって来ます！」

「なんだって!? 生徒の避難はまだ終わって無いんだぞ！」

直立戦車は車高が高く装甲も薄いので普通の攻防にはまともに役に立たない。

だが相手よりも先に攻撃を叩き込む、市街地強襲用のガン・キャリアーとしてはどうだろうか？ 高い位置から視認し高速で突っ込みながら弾を撒き散らす移動砲台。

そう考えて見れば市街地に天敵である戦車やロケット弾などあるはずもなく、大型車両を並べて作ったバリケードなど簡単に粉碎できる。

もつと言えば指揮している者や奮戦して居る魔法師を専門に殺す、使い捨ての特攻兵器として使えば十分なのかもしれない。

「将輝、僕らで何とかして来るよ。頑張ってるね」

「みんなを頼む。そっちも無事だな」

重力魔法を操る吉祥寺に地雷魔法を操る千代田委員長や、それをサポートする為に五十里先輩など防衛戦に向いたメンバーが編成されて即座に投入される。

最も頼りになる十文字先輩が既に魔法協会に向かっていることが残念だが、対応さえ間違えなければ問題無いだろう。

「一条も行きたいだろうに、深雪の為にすまん」

「今更な事を言うなよ。それに都市インフラが壊滅するほどの雷撃が来るなら、司波さんを守ることがみんなを守ることにつながるんだ。

「そうだろ？」

本来であれば一条も十文字先輩と一緒に、魔法協会を守るために向かう筈だった。

だが十三使徒の劉・雲徳が居るかもしれないということで、対戦略魔法の準備が必要になったのだ。

『電気抵抗を下げる魔法』と『雷を誘発する魔法』からなる霹靂塔を防ぐことはできない。

抵抗するはずの防護をランダムに引き下げられ、耐えたとしても何度も浴びせられるのだ。仕方の無いことだと言える。

だが、それは戦略魔法が使われることを知らず、何の準備も出来て居なければの話である。

「お兄様…。万が一のことを考えますと」

「そうだな。他の冷却系の魔法師と協力すれば問題無い筈だが…。いや、楽観論は止めよう。こんな多数の所で見せるモノではないが仕方無い」

おずおずと申し出る深雪の意図を察して俺は跪いた。

協会や増援に人を割いて周囲の目も減っているが、…まあナンバーズ相手ならば仕方無いで済ませられる範囲だろう。

「一体何を…」

「一条、お前ならば説明しても良いだろう。深雪は当主候補で俺はその護衛を兼ねて居る。要するに深雪と俺はリソースを交換し合っていたんだ」

深雪が四葉の当主になることは他の分家の推薦を得たことで既に決まっている。

此処に居る者はナンバーズの中でも有力者と目されている者ばかりだが、一条は深雪の婿候補なので問題無いとしておこう。

「それでは誓約オースを開放いたします。ご存分に、お兄様」

「では深雪も息災で」

深雪が俺の額に口付けると、割いていた監視網などリソースが戻って来る。

逆に俺から力と情報を受け取り、かつ制限する為の力がフリーに

なったことで、深雪の制御力はかつてないほどに高まっている筈だ。
「…俺も当主候補だがそこまでして守られたりはしてないな。…やっぱりシスコンじゃないのか？」

「単に対応する魔法系統が無かったからじゃないか？ 俺たちには吉祥寺みたいな参謀は居ないしな」

ついでに言うとな条のような自由さも存在してない。

その言葉は呑み込んで、互いの配置につくことにした。

「みんな居るな？ 俺たちは遊撃隊と言う訳だ」

「もちのろんよ！ せっかく派手になって来たんだし、逃げるわけにもいかないなら愉しまないとね」

「物騒だよなあ。学校の皆と一緒に逃げるって選択肢もあつたらうに」

「今更だよ。僕は忠告するのも諦めた」

エリカやレオ達が待つて居る所に、俺と幹比古が合流した。

ブランシユの騒ぎの時に行動して居たことや、各人の能力の傾向からして本部待機からのあちこち火消しに回るのが役目になる。

「アブソルートの概要を説明すると大規模雷撃が予想されるので、これに巨大な避雷針で対処する。まあ当然ながら邪魔する奴が出て来る筈だが…」

「そいつらを叩き切れば良いんでしょ？ 期待しちやってくれても構わないわよ」

霹靂塔への対処は至極シンプルなものに収まった。

俺たちが持ち込むCADには対EMP処置をした上で、被害を出来るだけ下げるといふ方向だ。

成功しても成功しなくても俺たちは戦えるし、雷撃による被害が減った分だけ戦況は泥沼化を避けることが出来るだろう。

「なあ。…今、避雷針って言わなかったか？ すっげえ怖ええんだが…」

「大丈夫だ。今回用意した避雷針の大きさは薄羽蜻蛉の比じゃない。というかお前が避雷する状況なら俺達もやばい」

レオが覚えさせられた薄羽蜻蛉は千葉の秘剣の一つで、硬化魔法を使って布を長大なブレードに変える物だ。

今回みたいな直立戦車やコマンド兵が入り混じる戦況ではうつつの技であり、レオが遊撃隊入りしている大きな理由とも言える。

「もしかして…用意した避雷針つてアレ？」

「そうだ。準備期間中に四方八方飛びまわって、どんな形状か良く覚えて居るだろう」

「そ、それはそうですね…」

幹比古と美月が顔を赤らめながらも目を向けたのは、イベント用に改装したビルディングだ（もちろん他にも用意しているが）。

デモンストレーションを兼ねて飛行魔法や、ペアリングタイプの改良型飛行魔法で飛びまわってもらったわけだが…。

このビルの装飾に使った素材は巨大な避雷針用になっている。

これを深雪たち冷却魔法に長けた魔法師が極低温化を保つことで、電気抵抗を一時的に0近くまで下げる。

下げられた電気抵抗よりも更に低い抵抗値0の領域に、超電導による避雷針を打ち立てる。これがアブソルートの仕組みであった。

「結局。あのイベントは最初っから最後まで軍のお仕事だったんですね…」

「そうでもないぞ？ イベントタワーからビルに変更したあたりまではここまで大袈裟じゃなかった。そのころに計画元のブティックが買収されて優勢を余儀なくされただけだ」

ノリノリだった美月には悪いが、俺も計画修正をさせられた身分でこちらに苦情を言われても困る。

顔をしかめて怒られてもどうしようも…。

「あの達也さんと吉田君？ あそこ…何か変じゃないです？」

「…当たり前！ そこに誰がいる！」

「都市迷彩の上から低いレベルの光学系をまとっているのか。しまったな、ほのかにも協力してもらえば良かった」

美月が指差したその先、といっても数十mは離れて居る場所。

その辺りに生体反応と小さな魔法の痕跡がある。

『こちら司波。敵は直立戦車とコマンド兵の陰に隠れて、都市迷彩を施したステルス兵を投入している模様。各自、探知系魔法に留意されたし』

『了解した』

『一部通信途絶。フォローに回ってくれ』

発見した敵兵は幹比古たちに任せ、俺が本部に通信を入れるとよろしくない回答が返ってきた。

コマンド兵による浸透攻撃に加えて、一部の兵をステルス化しているとは思わなかったのか、少なくとも被害が出ている模様だ。

「生きて居たら適当に固定しておいてくれ。このまま他の班のフォローに向かう」

「おっけー！」

俺は走り出しながら、九校戦までは温存して居た固有魔法の使用を覚悟した。

分解魔法と並ぶもう一つの切り札、再生魔法。

これならば衆目にさらしても問題の無いレベルであるし、相手が奇襲攻撃による断頭戦術に出て居るならば巻き返す事が可能だろう。

その代価としての痛みは、この際は看過すべきだと思えた。

だがこちらが用意周到に準備をしたのならば、相手も同じことを考えてもおかしくはない。

『生き残りの直立戦車と車両が自爆！ このままだと防衛戦に穴が開くぞー！』

『こつちでも敵揚陸艦と目される貨物船が自沈。ヒドラジン燃料を派手に撒き散らしている！ 毒素を何とかできるメンツを寄こしてくれ！』

それほど多くない人員を選んで即座に再生魔法を使用、回復を試みる中…。

新たな局面を知らせる報告が、本部経由でもたらされたのである。

横浜事変：中編

●もって呉下の亜蒙に非ず

アオザイを礼服に改めたような服をまとった、その人物に注目が集まったのは朝のことだった。

とある筋の有名人に良く似て居たが、雰囲気も対応も正反対であったことから首を傾げたものだ。普段であれば遠巻きに眺めて裏でひそかに確認を取るであろうが、この日は襲撃も予想されており直接的な対応が求められた。

「失礼。名前をお聞きしてもよろしいですか？」

「リュウモン呂蒙と申します」

礼服のまま呼び出された青年は男の朗らかな笑顔に戸惑った。

とある人物はどちらかと言えば凶悪犯でこそないものの、刃の様な性質として知られていたからだ。納刀された太刀の様に命令無くば人を殺さないが、一度抜けば血を見るまで収まらないとされる魔剣の類。

あるいは密林に佇む人食い虎と呼ばれる男には見えなかった。

これでは姿が良く似て居ても、職務質問で不躰に尋ねるか悩むのも仕方は有るまい。

「三国志の？」

「別人ですよ。大亜連合に呑み込まれた故郷は、その辺りではありませんが」

中国南部であり大亜連合に呑み込まれた国：大漢の亡命者か。

青年はそう判断しながら、『人を殺したことはありますか？』という質問を中断した。

亡命者で有れば元軍人であってもおかしくはない。軍人ならば殺すのが当たり前であり、その通りだと答えるだろう。

「かなりのお手前と窺います。御手合わせを願えば幸いなのですが」

「構いませんがこの恰好では勘弁してください。それに貴方は式に参加されるのでしょうか？ ご細君を悲しませたくはありません」

3 m以内では敵なしとも評される青年を前に、勝つ気でいるとは本来であれば傲岸不遜と言えるだろう。

しかし、容疑の掛っている人物であればその可能性は高いとも評されている。

人食い虎と呼ばれる大亜連合の軍人は、白兵戦に置いて最強の魔法師の一角と呼ばれ、青年と同格の存在ではないかと言われるほどなのだ。

イベントが終われば試合をしても構わないし、警察が疑うのであれば同行しても良い。

平然と言われて仕方無く、結局その時は追求を諦めてひそかに監視を付けるだけに留めた。

だが、この件は思わぬ余波をもたらすのであった。

「呂上尉が目撃された？ 潜伏ないし、脱出したのか……」

陳・山祥は行方不明であった副官が見つかったと言う情報に眉を潜めた。

本来であれば喜ぶべきなのだが、襲撃決行の日に偶然と言うのは出来過ぎて居る。

むしろ呂・剛虎は捕えられており、ワザと脱走させて合流しようとするところを補足する罫だと思われた。

「劉閣下。これは我々の動きを探ろうとする日本人の策略かもしれない。中止いたしますか？」

「今更！ それに党の決定は絶対ヨ。何より…横浜襲撃は囮でしかないネ」

横浜襲撃は囮。

予測されていたながら予定を変えないのは、それが主な理由であった。

首都圏への直撃を警戒させ戦力を誘引し、可能であれば横浜の魔法支部に存在するデータバンクの占拠を目論む。

だが本命は九州地方であり、その過程で対馬要塞は確実に叩き潰す事にある。

「茶番はここまでだ」

そして劉と呼ばれた老人は笑みを消し怪し、極色彩の服から軍服へと着変えた。

一人の將軍として立った一つの命令を下したのである。

「全隊に出撃を命じる」

「是^シ」

劉の言葉に恭しく、陳や周囲に居た者たちが受諾の言葉を返す。

貨物船に偽装した揚陸船よりコマンド達が上陸し、分散して日本に到着していた分隊も終結を完了した。

それだけではない：モノを言わぬ機械たちが唸りを上げ、一同の尖兵として街を駆け抜けたのである。

●龍の巢

『九・天・応・元・雷・声・普・化・天・尊！ 来たれ雷公、霹靂塔！』

古式魔法を現代魔法で補う戦略魔法が、限定的に実行された。

風にのってナニカが撒き散らされ、そのラインに雷が走り始める。

だが二度・三度、いいや！ それ以上の頻度で続けざまに稲妻が落ちるのは異様と言う他ない。

あえて言うならば、稲妻が落ちる場所が限定されているのが不思議であった。

「やった！ 成功したぞ！」

「雷撃は予定通りに避雷針に落ちました。被害は皆無という程ではありませんが、許容範囲内です」

ランダムに抵抗値が低下した場所よりも、ゼロになった場所へ雷撃が落ちた。

超電導効果により被害はおさえられ、対策本部が湧きかえるのも仕方^方の無いことであろう。

だが、それだけの成果にも関わらず一部の魔法師は顔が暗い。

「いかな。一部を吸収できれば恩の字なのに、成果が上がり過ぎて居る」

「これほどに被害が抑えられる筈が無い。連中が横浜支部を壊すわけにはいかないとしても、だ」

「では…」

上層部や研究者たちが冷静さを保ち、むしろ悲観的な話題を始めたことで、その場に居た者たちは静まり返った。

楽観論者が対策班に多い筈もない。現実在即して議論を始めた。

「様子見だろうな。レリックに限定保存しただけで、劉・雲徳は大陸に居る…と言う方が助かるんだが」

「それだと別の問題が出ますよ。連中が様子見して居るなら、次を撃たれる前になんとかしませんと」

攻撃側は小出しに使うことで、序盤は攪乱攻撃でも構わない。

だが防御側は常に全力で冷却魔法を使用せざるを得ず、それですら霹靂塔を封じ込められるとは限らないのだ。

物理現象は守り切れない場合でも防護に応じた軽減効果を得られるが、魔法現象は貫通された時点で防護そのものが無かったことになる。

ゆえに場所と状況を選べるのが奇襲攻撃の利であり、強度の差が戦略魔法の利でもあった。

「後手に回るのはマズイ。各部隊から精鋭を抽出し、遊撃隊に増援を付けて該当区画を制圧すべきだ」

「既に一部を派遣しましたが…。迫り着けて無い様です」

「噂に聞く鬼門遁甲か…仕方無い。既に現地入りしているメンバーだけで劉・雲徳を何とかするしかない」

この場に出来ないからと言って嘆くような人間はいない。

可能な範囲で現実的な作戦を立案し、即座に対応策とメンバーのリストが作成されていく。

ステルス兵に対処して居る達也の元に、新たな指令が届くのはそう遠いことでは無いだろう。

「おそろく幹比古の分野だとは思いますが、何か判るか？」

「多分だけど、電子金蚕の亜種じゃないかな。術の発動を代行するけど特定の…っしかできない。それも使い手の性質を最後のパーツにした形で」

達也が敵兵のCADもどきを渡すと、幹比古は兵士から髪の毛を一

本切り取った。

そして手持ちの呪符と結びつけ、簡単な術を組み上げる。すると幹比古の姿がボヤけ、良く見ないと朧ろげにしか視認でき無くなっていく。

もちろん両者が立ち止った状況でなら見分けるのは容易いが、互いに動き回っていけばそれも難しくなる。

ましてや移動しながら銃撃を当てるなど不可能に近くなる筈だ。

「光学迷彩だけとはいえ、浸透攻撃に併用されると面倒だな」

「CADが使えなくなることを想定して電子金蚕の亜種を使ってるんだらうけど、柴田さんが居てくれて助かったよ」

「あーらあ？ ミキってば美月が側に居るだけで心強いんじゃない？ 君だけは僕が護るよ！ なんちゃって」

「エリカちゃん…」

一同がそんなやり取りで分析して居ると、達也の元に通信が入る。

『聞こ…え…る達也…くん？』

「はい。先ほどのEMPの影響もありますがありますが、なんとかステルス兵を始末して居ます」

このチームは美月が視認できることと、幹比古の精霊もあって隠れた敵兵の討伐も早い。

武装CADは元々単純な作りゆえに電磁波攻撃に強く、エリカや秀才も銃撃さえ受けなければ白兵戦こそが得意分野なので、いわゆる学兵には収まらないスコアを叩きだして居た。

その報告を終えるころには通信回線が整え直され、明瞭な言葉が送られてくる。

『そう…活躍中の所を悪いのだけれど、所定の場所に移動してくれるかしら？ そこに今回の首謀者が待ち受けて居る筈よ』

「了解しました。急襲して敵司令部を直撃、可能であれば討ち取るという優先で構いませんね？」

申し訳なさそうな言葉は、一体誰に向けた者か。

その意味を達也は見逃さなかった。

（秘匿性の怪しい通信で、か。俺たちは鼠を誘き出すチーズと言う訳

だな。まあ再生魔法で断頭作戦を無効化しろというよりはマシンカもしれん)

再生魔法ならば、こちらの中級指揮官・仮説本部を狙ったステルス兵の狙いを阻止できる。

だが再生魔法を使えば、達也が受けるダメージは並大抵ではない。傷こそ受けないが、強烈なショックを何度も受ける羽目になる。

対してこちらでも断頭作戦を実行し、敵にそれを周知させる。

そのことで戦力を引き戻らせて、攻守の逆転を狙っているのだろう。

「それで、劉・雲徳はどうしますか？ 場合によっては防がれることも前提に、過剰な攻撃を叩き込む必要もありますが」

『戦時協定だけ守ってくれば何をしても構わないわ。その場合は秘匿戦力の公示も許可することです。…まあ達也くんのお友達ならば黙っててくれると思うけどね』

降伏した敵兵は殺してはならない、指揮官の扱いは序列に準ずる。

またNBC兵器に反する非人道的な攻撃をしてはならない。

その上で秘匿戦力：達也の力を隠さずについて良いということは、あまりにも明確な支持であった。

(エレメンタルサイトと雲散霧消ミスト・デイスバージョン：場合によっては限定的なマテリアル・バーストも使えと言うことか。まあ、十三使徒相手に手加減する方が難しい。妥当な判断だし手の内を見せておくのは良い機会だな)

心の中でそう呟きながらも、どこまで手の内を見せるか冷静に計算を働かせる。

能力がレアな事を除いても、気が合う者の中でも陽性で自身の闇の部分打ち消してくれる彼らは、達也にとっては本当の意味で友人と言つて良い相手だった。

だからこそいつか本性を出しても見限られない様にしておきたいし、かといって全てを出すのも憚られる。

また秘匿解除の許可を受けたと言つても、全てを晒す許可など出て居ないし、その必要性も無いと言えた。

エリカにも言えることだが奥義の一部を見せて居るだけで、互いに全ての手札を見せ合う仲間でもないのだ。

「ねえねえ、達也君。どんな指示を受けたの？」

「これから向かう先に敵指揮官が居る。そいつを叩けという命令だが、強力な魔法師なので無理に始末しなくても良いという脱出許可だな」

「げえ。それってボス戦ってことかよ」

エリカとレオに説明しながら、達也は地図を広げて見せた。

アナログな紙媒体であるが、電磁攻撃で端末が使い難い状況ではこちらの方が見易い。

「重要なことを説明するが、敵は鬼門遁甲という魔法を外縁に使用しているから増援の当ては難しい。敵兵の進路方向に居る味方に足止めをもらうのが精々だろうな」

「…確か認識を書きかえられて、向かっている方向をズラされてしまっただけ？」

「大丈夫だって、こっちは美月が居るんだからさ。ちゃんとミキが守ってあげるのよ？ 怪我なんてさせたら男として責任を取るよーに！」

「え、エリカちゃん!？」

エリカの茶々入れには苦笑する他ないが、ながち間違っではない。

美月の目は精霊を見抜き、魔法も種類によっては見分けてしまうほどだ。

鬼門遁甲の内部に居る者だけしか敵司令部を叩けないが、仮に撤退する必要が出来たとしても、もう一度攻め入る事が出来るのはこの班だけだろう。

こうして一同は劉・雲徳目指して移動を開始。

予定を早めて動き出した大亜連合艦隊の事を知らないままに、鬼門遁甲陣のなか深くへ侵入するのであった。

●十絶が理の内、木門の戦い

俺たちが移動を開始して暫く、美月の力のありがたさが良く判っ

た。

エリカの言葉じゃないが、居てくれるだけで助かるし、居なければどれほどの被害が発生するか判らなかつただろう。

「そこ、何か隠れてます。多分、糸…かな」

「鋼糸か。ステルス兵以外にもこんな物を仕掛けて居るとは」

「時間稼ぎを目的としてるんだらうね。急がないとまた霹靂塔が撃たれてしまう」

「透明な糸が首に当たる位置や、バイクに登場した場合の位置に張ってあった。」

張り巡らせたという程ではないが、高速移動する魔法師を躊躇わせるには十分だろう。

思念の当射を監視するエレメンタルサイトでは行使するタイミングならともかく、既に張ったマジック・トラップは見分けにくいので視野全体を見渡せる美月の目は非常にありがたい。

「姿を隠した敵兵だけじゃなくて、こんなモノまで用意してるなんてね。…でもこの先に居るつてのは間違いなさそうじゃない？」

「フェイントの可能性も捨てきれんが、そうだと思つて対処する方が良いな。ここから先は護衛として精銳が待つて居ると見るべきだ」

鬼門遁甲は攻撃にも併用できるようだが、本来は防御の陣だらう。こちらの戦力は制限され、あちらの戦力は効率的な場所に配置されている。

厄介極りないが、今回は指令部を直撃だけすれば良いと言うのが幸いだつた。

やがてトラップでは留めきれないと判断したのか、それとも俺達が本部に通信を入れているせいか、敵兵が阻止に現れたのだ。

直接見えない場所だがエレメンタル・サイトに魔法行使が引掛つた後、再び美月が場所を指摘してその場所を教えてくれる。

「今度はあちらです。わわっ、凄い早い」

「っとー！ 今の…飛び剣かな？」

「いや…普通の投擲攻撃だ。気をつけろ！」

眼で見た時に魔法の発動は小さく二回。

双方とも同じ術式だったので、剣を移動させる飛び剣を使用したのでは無く、あれが姿隠しの魔法だろう。

姿を隠したまま接近し、先頭行くエリカに投げつけたのだ。

エリカだから殺気で避けられたが俺なら微妙、他のメンバーでは少し難しいほどだ。

「疾！」

「二連撃？　なんとお！」

「…今度こそ飛び剣だな。投擲攻撃とタイミングを組み合わせる」

それほど多くの装備に魔法を掛けられないのか、それとも攻撃の方に重点を置いているのか。

投げつけられた短剣も、魔法の移動攻撃である飛び剣も肉眼視でき

た。

そう思った矢先、またしても美月のフォローが入った。

「エリカちゃん、後ろ！　さっきの消えてる剣が浮いてるの！」

「ちよつ！　ミキ、あんたの担当なんだから何とかしてよ！」

「やってるよ！」

二重・三重の連続攻撃。

流石に將軍格の護衛らしく、短剣だけで中々に焦らせてくれる。幹比古の雷童子が炸裂し、姿を隠した敵兵を沈黙させるまで気は抜

けなかった。

だがそれでも俺たちは、敵の連携を侮って言たと言えらるだろう。

そいつは必殺にして布石であり、次なる刺客の為の段取りに過ぎな

かったのだ。

「今度は姿を隠してない？　白兵戦上等ってことかしら」

「そんな訳ないだろう。さっきの飛び剣とは違う術式を仕掛けたまま

走って来る。油断するなよ」

走り込んで来る敵兵は、姿隠しが無意味と知ってかそのまま飛び出して来たのだ。

だが短剣には何かの魔法が仕掛けてある。移動系の魔法だろうが、飛び剣とは多少性質が違っていた。

「離！ 飛！」
リイ
フエイ

「跳ね返した剣が戻ってくる？ あーもう！」

「…磁性伝導か。受けるな、出来るだけ避ける」

エレメンタルサイトのことは簡単に説明し、魔法を知覚するのが得意だと説明しておいた。

再生と組み合わせない場合はそんな物だし、ここまでであれば披露しても問題無い。

（だが…なぜ連中は一人ずつ掛って来るんだ？ 悪手の筈だが）

軍隊なのだから武俠小説の様に一騎打ちを挑んで来る必要はない。

もちろん連中にも事情はあり、多方面への警戒と足止めに過ぎないという理由は判るのだが…。

それでも数名の兵士が統制射撃をするだけで、凄腕の剣士であるエリカの戦闘力は無いも同然になる筈だ。

（もつともその為に幹比古を後出しで待機させた上、レオを防御に残してるんだがな）

幹比古ならば姿を隠した相手を範囲ごと薙ぎ払える。

四方に配置してタイミングをズラしたとしても、レオの硬化魔法ならばライフル弾までなら十分に防げるのだ。

流石に対戦車級のパワーライフル相手に試す気は無いが、その場合は取り回しの問題があるので有効射程に近寄る前に対処出来るのだが…。

結果として相手の動きが読めるよりも早く、対処される方が先だった。

相手も軍隊であり、名うての魔法師である。考えて見れば自身の魔法に絶対の信頼を置いており、それに対処出来る特殊性があるならば排除するのは当然であったのだ。

断頭戦術をやっているのだから当然、魔法に寄らない排除手段を連れて来ているということ常念頭に置くべきだった。

パスンと軽い音が身近な場所から聞こえた。

エリカが敵の魔法師を倒す剣戟の音の方が大きいくらいで、ソレが着弾の音だと理解するまで僅かな時間が流れてしまう。

「えっ…」

「どうしたの美月…って、ちよつと！ 血が出てるじゃない」

「柴田さん、柴田さん！」

（やられた。狙撃兵か！）

敵は冷静に、『何故、鬼門遁甲の中を正確に移動できるか』を観察して居たのだ。

考えて見れば当たり前の話で、だからこそレオを美月の防御に当てて居た。

だが遙か遠距離からの狙撃を完全に防げるはずが無い。

つまり目の前の敵が倒されたのは美月の能力を再確認するためであり、狙撃に十分な位置まで移動する為の時間稼ぎであったのだ。

「嘘でしょ美月！ ミキ、なんとかならないの!?!」

「やってるけど…この血の量じゃ…。ゴメン、柴田さん…僕が不甲斐無いばかりに」

「幹比古のせいじゃねえ。…オレがちゃんと守ってやれていれば…」

（護れない場所を選んだ以上はガードして居ても無理だとは思うが…。まあいい、効率を考えれば狙撃兵の排除が先だな）

湧きあがる怒りを感じる。

しかし怒りの感情が俺にもあるのだと、美月がかけがえのない存在の一人だと判断出来たという冷静さを我ながら情けないと思う。

むしろ深雪に合わせる顔が無いな…という気持ちの方が強いのだから笑うしかない。

（絶対にトドメを刺して来る筈だ。そこで場所を把握するしかないな）

俺は美月の周囲の中で、射線が確保できる場所を埋めることにした。

同時にエレメンタル・サイトを最大限に発揮し、場所を変える為の移動魔法であろうと、生体情報であろうと見逃さない様に注視し始める。

「…啼かないでよエリカちゃん。そんなの似…」

「喋らないで美月。こんな傷はミキが直ぐに塞いで…」

「駄目だ…留らない。血だけじゃない気が漏れてる」

啼き邪来る友人たちの声を排除して探査に没頭する。

彼らは人非人と呼ぶかもしれないが、これが最効率だ。

それに…仲間を殺した…。いや殺そうとした奴を許せそうにない。

「ごめん、ね。吉田君。わたし、本当は…吉田君の事…」

「柴田さん！」

「こんな時くらい、名前で呼んであげなさいよ！ この朴念仁！ …

達也君も最後にお別れを…」

「…見付けた」

ライフル弾の衝撃が俺を貫通して、美月に更なる追い打ちを掛けたのが判る。

瀕死だった美月は完全な致命傷状態だ。既に喋る事もできない。

あとは秒読みで死ぬのを待つだけだろう。

「オン・マケイ・シユラヴァヤ・ソワカ。…今日は誰も止める者が居ないようだな」

弾道だけでなく、血の流れや風を元に相手の位置を探る。

エレメンタル・サイトと再生を併用し、自己修復と同時に相手の生命情報も得ておいた。

これで逃がす事は無い。

そして無意味な真言を唱えても、本当の力を隠す意味はないのだと理解してからトリガーを引く。

俺が持つもう一つの固有魔法、分解を元にする雲^{ミスト・デイスバージョン}散霧消が狙撃兵を消し去ったのはその時だった。

「達也君まで!?! 嘘でしょ…」

「いや、俺の方は問題無い。だが待たせたな。今から治療する」

再生魔法により俺の体は自動的に修復されたが、それを説明している暇など無い。

既に青い顔をしている美月に対し、先ほどとは逆のCADを…他人に再生魔法を掛ける為に向ける。

「何を…する気なんだ?」

「黙って見て居ろ。それとレオ、反動で俺が倒れたら万が一に備えて

美月を守ってやってくれ」

「わ、判った。何か…治療する魔法があるんだな？」

俺は答えるよりも先にトリガーを引いた。

再生魔法が即座に美月を癒し…。掛った時間に反比例する形で俺に猛烈な痛みが返ってくる。

「カハッ！ ゴホっ。ゴホっ」

「柴田さ…。美月！ しっかりして！」

「血を吐き出させた方が良いな。ああ、レオはそのまま射線を遮って居てくれ。今の状態だと狙撃兵はともかく…コマンドが群がるだけで危険だ」

「達也くんまで顔が真っ青になってるじゃない！」

ぜえぜえと息を吐く。

美月と俺のどちらが大きいかは判らないが、山場は越した筈だった。

「何をしたのか聞いても良い？」

「型代…じゃないよね？ あれは準備が沢山いるし…もしかして封絶？」

「俺の固有魔法だ。フレイムヘイズが張る結界より有効期間は長い
が、対象者が受けた痛みを圧縮して受け取った。だからまあ、ダメー
ジこそ移さないが…多用はできんな」

「えらく強力だが反動はでかいってやつだな。そりゃ隠し技にするつ
てもんだ。もうちよつと休んでおけよ」

俺は首を振りながら移動を提案した。

ここで立ち止まっては敵の思惑に乗るのと同義語であるし、何より
敵が新たな戦力を送り込んで来る可能性が高い。

逆に逃げる可能性もあるし、ここは美月の回復を最優先にしつつ、
敵司令部を叩くまでに気力を回復するべきだろう。

「…いずれにせよ、連中を許す気は無いからな」

横浜事変：後編

● 巴を描く追撃戦

狙撃された美月が回復するまでの間、追撃部隊を避ける為という名目で、俺たちは弧を描く様に隠れて移動した。

実際にはまとまった衝突力を再編しないと首謀者を狙う意味がないからなのだが、それを馬鹿正直に告げる必要はあるまい。

「…本当にやって来ねえな」

「相手の手札にも余裕がある訳じゃないしな」

周囲の様子を窺うレオに領きながら、俺は移動の再開を告げるビーコンを十分後の時間差で設置しておく。

バイタルを見るとそろそろ美月が復調して居る筈なので、積極的に動いても問題あるまい。

そう思っただけで居る筈の場所に合流すると、互いに口元を赤くしたまま俯き合ってる幹比古と美月が見えた。

「なんだ。直接喉から血を吸い出したのか」

「まーねー。胸の傷を完全に塞いだなんて聞いて無かったし、ひっくり返すわけにもいかなかったから仕方無いんじゃない？」

「……」

エリカの軽口にも反応出来ないでいる二人は置いておいて、俺は次の予定を口にした。

いつまでも見合っただけでは時間の無駄だし、タイマーは既に設置してしまっている。劉・雲徳は電使いなのでモタモタしているとこちらの行動を予測されかねない。

「問題が無ければ移動を再開しよう。美月の様子を見ながらで構わないが、幹比古は臨機行動用の符を作れるか？」

「型代の術は準備が全てだからね。時間さえかければ問題無いよ」

同じ様な事態になっても困るので、緊急起動できる防御用の魔法を設置しておくことにした。

古式魔法で偶に見られる術式なのだが、多くは受けた衝撃を予め定めた対象…人形などに反らす為の魔法だ。

体の中で跳ね回るタイプの弾丸には効かないが、貫通系の弾や魔法攻撃には有効な事が多い。単独でも心強いが他の魔法防御と組み合わせることで意味が格段に大きくなる。

「でもよ、そんなに急いで追う必要があるのか？ 逃げながら移動させてる分だけ連中の邪魔もできてるんだろ？ 時間稼ぎが出来てるんだからもうちよつと休ませてやっても…」

「大亜連合の損得勘定次第……という前提が無ければな」

心配して居るレオや死に掛けた美月には悪いが、相手の採算があるから大丈夫と言うのは余裕の内に入らない。

魔法協会の横浜支部にある膨大なデータを奪うつもりだから戦略魔法である霹靂塔をフルパワーで撃たないだけで、首都圏の経済活動を邪魔するだけならいつでも可能なのだ。

横浜をケシ炭にしても、国際的な非難があるだけだからやらない。ここから東京方面を壊滅させても単独では意味が無く、経済的・工業的なアプローチを同時に実行しないと意味が無いから今は実行しない。

だがそれは決して撃たないことを意味するのではなく、何らかの理由があれば容易く覆ってしまう前提に過ぎないのだ。

「西城くん、私なら大丈夫だから。それに動いて居た方が余計なことを考えなくても済むし…」

「まあ美月が良いんならそれでいいんだけどよお」

死に掛けた張本人である美月がOKしたことで、俺たちは移動を開始した。

かなり時間は使ってしまったが隊としての衝突力は回復した。先ほどレオが言った様に敵も時間を掛けて移動して居ると言う事もあり、そう遠くないタイミングで追いつけるだろう。

行動の結果は実力の行使によって証明された。

待ち伏せと高速突入に対し、こちらも瞬時に即応的な行動に出る。

「ちっ。これが本気ってやつね！ やり難いったら」

高機動戦闘ならば日本でも屈指の実力を持つであろうエリカを、大

亜連合の兵士『たち』が容易く翻弄して居る。

先行した三名による牽制射撃を回避したところで、後続の二名が足止めの射撃。

第三射はタイミングを合わせた一斉射撃で、密度が高くなるよう交差した射線があっけなくエリカを補足する。

「当たらないってーの！」
「っ!？」

それが当たらないのは、単に当たらない位置に移動して居たからだ。

どれほど高速で逃げ回ろうとも統制射撃を上回りはしない。最初から視覚情報と聴覚情報を誤魔化す幻影をまもっていたことで、見当違いの場所を撃たせていただけである。

「ミキ、突っ込むから次のをちようだい！」

「ボクは幹比古だ！」

エリカが僅かにタイミングを変えた高速体術で分身を掛けながら刀を振るうと、幹比古が刃を基点に定めておいた荒風法師を放った。

乱気流で兵士たちの統制が乱れた所で、エリカが突っ込みながら一人ずつ仕留めて行く。

「レオ！」

「わーってるってー！ シュバルツシルト・アイン！」

転がる様にして射線から逃れるエリカと逆行して、レオが投げつけた布が硬化する。

硬化魔法が得意とは言え兵士が放ったのがパワーライフルなら突破されてしまうかもしれないが、面制圧力重視型のサブマシンガンくらいならば問題無い。

盾として機能した布が断幕を阻み、素早く立ち上がったエリカが抜けて行くのを手助けしていた。

「鋼気功！」

普通ならばそれで壊乱状態の筈だが、戦い慣れて居るのか無事な者はそのまま射撃し続ける。

仕方無くそれに対応し、攪乱しながら始末して行くことにする。

「何でも良いから頭を上げさせるな。エリカは任意のタイミングで再突入」

「ウルヴズコルヴァン！」

「そのまま抑えてなさいよ」

俺は効かないのを承知で振動系の魔法を撃ち、レオが棒状に変化させた布で場を荒らした。

とにかく安定して射撃させない事に終始し、エリカは相手の動きから射撃可能な位置を判断してその場を回り込むようにして再投入。急所を切り裂いて無力化した。

「迂闊だったわ。そりゃ銃で攻撃するなら魔法は防御だけに専念できるわよね」

「あれだけ対応できれば十分だろう。普通は蜂の巣にされて終わりだからな」

別に魔法師だからと言って強化しながら攻撃する必要はない。

今回苦労したのは敵が躊躇なく繊細な魔法を捨てて、魔法攻撃に対して防御を固めたからだ。

九校戦の様に魔法だけでなんとかする必要はないので、銃を併用するならば余計なことをせずに銃だけで攻撃するのは良い判断だと言える。

「それにしても達也くんって良くあれだけ相手の対応が判るわね」

「最適解に頼るなら予想するのは難しくない。流星に自爆攻撃とか無意味なことをされると無理だがな」

日本側はハンドガンと魔法だけと判断し、魔法を重点的に防御してハンドガン対策を切り捨てる。一人・二人倒されても残りの者が圧倒すれば良い。

その戦術は確かに手堅く確実だが、それゆえに読み易いのだと：いうことにおいておいた。実際には精霊の眼を使ったのだが、それを説明する必要も無い。

「こちらの味方を排除しながら進む必要がある以上、このレベルの精鋭に襲われるのはあと一回が精々だろう。劉・雲徳を直撃して降伏なり撤退を決意させる」

「その爺さん一人で十分つてのが難儀だよな。まあ足止めはオレが排除するから任せとけ」

「エリカに切り込んでもらうのが確実だろうね。ボクも幻影と間接的な攻撃を準備しておくよ」

「悪いわね、あたしだけが活躍してさ。九校戦の時のウサ晴らしだから勘弁してよね」

劉・雲徳一人居ればデータを奪うのは簡単で、鬼門遁甲があるから一人を送り届けるのは容易。

ゆえに連中にタッチダウンさせない必要があり、早い段階で『撤退する為に必要な部下の数を割り込んだ』と思わせねばならないだろう。

場合によっては雲散霧消で仕留めざるを得ないが、ここに来て味方という人の目がそれを邪魔して居た。

ここまでスムーズに来るには友人たちの力が不可欠であり、世の中は本当にままならないものだ。

●雷迅

鬼門遁甲というやつは本当に厄介だ。

周囲に味方が居る筈なのに援軍が期待できないどころか、誤射を考えれば居ない方が良い。

お陰でコマンド兵の排除に期待はできても、劉・雲徳たちの補足にはまるで期待が出来ない。

「疾！^{チイ}五行!!^{ウーハテン}」

「つこのお！……やるじゃない、油断してたつもりはないんだけどさ」

敵の女兵士が放つ小剣は刃が複数の姿を見せ、その一つがエリカの脇腹に迫った。

咄嗟に上腕を犠牲にして急所を庇いつつ、同時に敵の首を狙っている。

だがその一撃は敵が放っていた幾振りかの小剣に阻まれ、お互いに致命打を浴びせられない。

「あ痛つつつ……原理は判るっ」

「…おそろくだが幻影と姿隠しの他に、衝撃を別位置にずらす移動系の魔法を使っている。実際に切れて居ないのはそのせいだ」

目に見える五本の小剣とは別に、隠された一本、そして斬撃の威力だけが移された一本が存在する。

エリカは幻影の中の本身と隠された一本を見抜いたものの、衝撃圧の見えない魔剣を回避し損ねたのだ。

幻影の小剣の中に化生体の剣があったが、それと同じ構造であつてもワザと映像を持たせてない切り札なのだろう。

だが、化生体は制御力を上昇させる意味があるからこそ姿を形造っている。

衝撃をスライドさせる術式自体は同じでも、威力の再現にまで至つてはおらず、まさしく隠し技以上のものではなかった。

「初見殺しを看破するなんて本当ズッコイわね。まあ助かつてるしいわ、これでこいつも…」

「油断するな。お互いに一対一である必要はないし、当然あつちだつて一度に掛つて来る筈だ」

そう言いながら俺は姿隠しで隠れたままの敵兵に視線を移す。

そいつは完全に殺気も気配も消し去っていたが、精霊の眼で魔法の準備を見抜いて居る為、何処に居るのか見抜いていた。

これまで姿を隠して襲ってきた連中が気配のコントロールまでは不可能だったのに対し、腕前に格段の差がある。

「流石ですね。ここまで閣下を追つて来るだけはある」

「哥哥…」

日本語が話せるのは当然のことだろうが、アツサリと姿を見せるのが油断ならない。

妹分の方は非難する視線を見せているが、どこ吹く風で受け流して居る。

「別に敬意を見せたとかじゃありませんよ。姿を隠している分の制御力が惜しくなっただけです。十三妹」

「是」

身内同士で話しているのは別にこちらに聞かせる為ではないだろ

う。

会話しながら少しでも時間を稼ぎ、同時に命令を言葉の裏に隠して居ると見るべきだ。

お前の言葉くらい判って居るぞと相談を牽制しつつ、自分達は予め定めた隠語で会話するつもりなのだろう。

(十三妹：名前と言うよりは異名か？ それにちなんだ魔法か何かかな)

おそらくはお前も幻影に回す力を他に回せという指示であり、そのの女兵士が十三妹という異名に通じて居る魔法を使えると言う奇才だろう。

問題は何の魔法かだが…。

「達也くん、レオだけ置いて先に行つててくれる？ 多分、相性的にはそれで勝てる…：…なんとかなるから」

「判った。命だけは無駄にするなよ」

こちら時間も無いことだし、相手の時間稼ぎに使いが必要が無いのは同じだ。

仲間だけに意味が通じる言葉でエリカへ忠告を残して行く。

「オレの意志は無視かよ。まあ構わないけどな」

「そこは頼りにしてるってことで、一つヨロシク♪ …薄羽蜻蛉を実践してみなさい」

ためいきを付きながらレオは懐から布を取り出し、硬化魔法で延ばして行つた。

重さ皆無の剣で、隠された魔法に対抗する気なのだろう。

「行つて！」

「止めなさい。十三妹」

「小白龍、大銀龍！」

「やらせつかよ！」

エリカの言葉で弾かれるように俺達は移動し、それを阻む様に敵の魔法が行使される。

何も無い場所で唸りを上げる音が二種類、しかし掛られた魔法はただ一つ。

(単純な強化、しかしかなり練り上げられている。使っているのはガラスの剣と鋼の糸か)

小太刀サイズの強化ガラスと研ぎ澄まされた鋼糸。

この二つが魔法の影響を受けることで、小太刀どころか大太刀と言っても良いほどの威力を持っている。

日本で名前を付けるとしたら呼太刀とでも言うレベルのモノだった。

「達也、何か言ってから移動しなくてよかったの?」

「問題無い、エリカはおそらく魔法を絡めた武技として予想していたはずだ。千葉に似た技があるか自分で思い付いたんだろう」

でなければレオの硬化魔法が有効だと断言する筈はあるまい。

事実、薄羽蜻蛉と呼ばれる布の剣は鋼の糸と同じ威力であっても、女兵士とレオの基礎体力の問題で簡単に押し返して居る。

それどころか長さを利用し、自己加速と格闘戦でこちらにインフアイトを挑んで来たもう一人へ牽制しているくらいだ。

「ここに二名しかいないのは敵にも余裕が無いせいだ。俺達が首魁に近づけばそれだけ二人も楽になる」

「それは…そうだけど」

あの連中は護衛であり、俺達が劉・雲徳に迫ればそれだけで平常心を保てなくなるだろう。

通常ならば焦りなど覚えられない様な訓練をしているとしても、彼らの本分はあくまで護衛なのだ。將軍を討ち取られて面目が経つ筈も無い。

やがて俺達が追撃を続けると観念したのか、単純に追い掛けつことが面倒になったのか、一人の老人が公園で待つて居た。

不思議とその周囲に護衛が居ないが…。

「大亜連合の劉閣下ですね?」

「やれやれ。龍眼を始末できなかったのが此処まで響いて来るとはな」

老人は大亜連合の制服を着て胸元に沢山の勲章をぶら下げて居た。

貫禄のありそうな老人で、九島老師と同じ様な底知れなさを感じる。

「しかし連れて来なかったのかね？」

「閣下こそ護衛を連れておられない様ですが…。お互い様と言ったところでしょう」

美月の目が無いのは痛い、走りまわる戦いに付いて来られるとは思えないし、護衛に人を割く余裕も無い。

予め此処に至る前に、何枚かの護符だけ渡してビルの中に隠れて貰った。

ライフルでも構えて居ると思ってくれば上々だが、まあ向こうも似たようなものだろう。

「援軍の阻止と脱出の問題で鬼門遁甲の使い手が万が一にも負傷しない様に。また戦闘を継続して居る兵士への指揮が途切れない様にと云ったところではありませんか？」

「その通りだが…。ちと頭が固いな」

肩をすくめながら劉・雲徳は呆れて居た。

この期に及んで作戦遂行を諦めて居ないどころか、自分の方が遥かに優位だと言わんばかりである。

「例えばワシ一人でお主らを蹴散らし、横浜支部までの道のりを踏破すれば問題無いとか、な？」

「お戯れを。捕縛させていただきます」

言いながら接近し、油断なくCADを構えて射撃態勢に入る。

自己加速と硬化の準備が始まって居るため、サイオンを練り上げながら撃ち込むことにした。

「はっはははー！」

「替わり身!？」

「達也、うしろー！」

牽制を兼ねて術式解体を撃ち込むと、老人の姿はあっけなく崩れた。

替わりに何枚もの符が散り、幹比古の声で振り向くように見せて、素早く足を払う。

(反応はきつきの位置からだったぞ？ いつの間にも！)

動きは魔法と生体情報で何となく理解出来るが、精霊の眼で知覚してなおカラクリが信じられない。

そして情報体が移動したことで幹比古の助言よりも先に動き始めて居たが、カウンターなど取れはしない。

自己加速を掛けてはいたが格闘距離を霞めるようにして離れて居た。

俺も幹比古も格闘戦を挑んで来ると判断したが、予測を外された形だ。

「せっかく若いのだ、頭が固いのはいかんぞ。常に不可視議を想像したまえ」

「例えば…、ワシが二人居るとかネ？」

軍服を着た老人の他に、怪しげな漢服に身を包み黒焼き眼鏡を付けた姿がそこに在る。

両脇に移動しながら距離を取り、指先から放電を始めていた。

指先は複雑な印を切り、書き変えられて行く常識は放出系の反応だ。

紫電が両脇から一気に襲い掛って来る。

「左右から同時に…分身には不可能だ。本当に二人!？」

「……いや、二か所から放つことを指定する反応があった。情報を移動させる為の魔法もな」

雷撃そのものは予想されていた為、帯電させる魔法と避雷の魔法を組み合わせて防御した。

幹比古が放った一枚目の符で雷撃は一時停止し、焼き切られる前に二枚目の符に移動を始める。俺たちはそれに合わせて回避する事で強烈な一撃を無効化したのだ。

「それじゃあ……？」

「雷撃の前に各種の位置情報を放出している。魔法の構築と発散が恐ろしく早い」

……信じ難いが一人で二人を演じている。

正確には数か所の位置に自分の情報を放出し、その内の二か所から

雷撃を放つ構成を追加したのだ。

二か所の位置情報は映像込みだが、それ以外の位置情報は音と生体波動だけ。お陰で精霊の眼を持ってしても追い切れない。

（九校戦で大きな魔法を出すのにコンマ何秒を争う勝負が見られるが、これは最低限の魔法式を可能な限り高速でというやつだな。数秒だけ騙せば良いなら確かにこれで十分か）

魔法は別に自分の位置から正面に飛ばすだけが能では無い。

その事は知っていたしやったこともあるが、実際に目の前で数段上の事をやられると呆れるほかはない。

もつとも俺達に忠告じみた冗談をやってみせた九島老師を考えれば、このくらいの事は用易にやつてのけるのだろうか……。

「幹比古。九島老師と戦っているんだと思え。そのくらいで丁度いい」

「トリックスターと呼ばれる老師と同格の敵…ね。ありがたくて涙が出て来るよ」

老師ほど幻影の切り替えは上手くないが、雷撃や電子戦の扱いは上だろう。

そのくらいの相手だと思えば驚くに値しない。稽古では無く実戦だというのが笑えない所だが、時間制限や増援の可能性を考えればまあ何とかなるかもしれない。

「九島…ククク。それは良いネ。あのクソ爺のパレードを参考にしたのヨ。君たち金匙が身内で戦う時が来た時の為に経験値にすると良いネ」

「まあ君らが生きて帰れたらの話だが……」

言いながら突っ込んで来る老人二人分の姿は、打突の衝撃と共に飛来する化生体だった。

ひよつとしたら本体は隠れて居る方かと思わせて置いて、そちらには音が無かったり生体波動がなかったり明滅するかのように情報が乱雑に動いている。

これではどれが本物だと判断するのは早計だろう。

「とても一朝一夕で区別できそうにないね。いつそのこと全部攻撃し

「ちやう？」

「賛成したい所だが予想されてそうで怖いな。放った攻撃を掻き混ぜられて攪乱に使われかねん」

「こちららも幹比古が、領域防御を無効化可能な石礫を放って牽制。

俺は術式解体をメインにこちらから格闘を行っているのだが、一向に進展しなかった。

消えて居る場所に撃ち込み、幻影の体を蹴り飛ばしてもそれなり以上の手応えを感じられないのである。

「ハツハハツハ！ モニター見ながら戦っている内はまだまだヨ」

「っ！ こいつここちらの手の内を逆用して……」

途中何度か精霊の眼で呼んだ情報を、逆手に取られることがあった。

詳細まで見抜かれているとは思えないが、類似する幾つかの能力は似たような手口で対策されてしまう。

経験の面で行かれていている間にイニシアティブを取られ続け、対処し始めると益をひっくり返される。横浜支部に行くことを重点に置いて居る為に無理に勝利する必要が無いのか、やり難い相手だと言えた。

（だが時間の経過はこちらにとって有利だ。外では時間を追うごとに大亜連合の兵士が鎮圧され、歩行戦車は破壊されていく。このまま消耗戦に持ちこんでも……）

鬼門遁甲は目の前の相手を見失わせるタイプの魔法ではない。

ハツキリとした目的意識を持って、全包围を取り囲んでしまえば問題無いだろう。

それまでこちらが目を離さず、常に監視を続けるだけでも勝てる筈だ……。

そんな後ろ向きな考えを持ち始めた時、消極的差をあざ笑うかのように自体は変化した。

「ぬうつ!? ワシの結界を突き破って来るだど?」

『大黒特尉に帰投命令。連合兵の討伐は即座に中止。トーラス・アンド・シルバーの司波さんも直ぐに追撃戦を中止し、CAD調整の為に』

帰還してください。繰り返します……」

大亜連合の敷いたジャミングノイズを突き破って強烈な暗号通信が伝達され、暗号文を解いた瞬間に思わず困惑した。

俺に今まで与えられた任務とは百八十度違った命令が通達されたのだ。

(どっちも俺の名前だが、目の前の劉・雲徳を拘束するよりも『アレ』が必要になる事態だと?)

敵に気が付かれても構わないほど緊急を要する任務? それも追いついで居る劉・雲徳を放置して帰還しろという。

一瞬、偽命ではないかと疑ってもおかしくはないだろう。

だがどちらかといえば優位に進めている劉・雲徳がそんな事をする必要も無いだろう。

「どういうことだと思う?」

「…考えたくはないが、横浜は囷だったということだろうな。それ以外に説明が付かん。逆にあのクソ爺がハイペースで魔法を使っている説明も付く」

要請されているのは戦略魔法である『マテリアル・バースト』使用の為に待機しろということだ。

戦略魔法を使われる危険性を放置して、こちらも戦略魔法を使用せざるを得ない理由……。

そんな物は大規模侵攻が起きたくらいしかあり得ない。沖縄か九州辺りが狙われているのだろう。そう考えれば俺が精霊の眼を持ってしても追いつけないほどの速度で、劉・雲徳が放出系魔法を繰り返して居る説明にもなる。

奴は最初から霹靂塔を最大出力で撃ち込む気はなく、関東圏の軍や魔法師を足止めする為に攪乱して居たのだ。戦略魔法師が戦略魔法に使う為の能力を無駄打ちして居るなら、この技量と消耗するサイオンも納得はいく。

「クカカカー! どうとうバレてしまったネ。しかし…サポーターとはいえ重要人物が目の前に居るのは勿怪の幸いヨ。人生万事塞翁が馬」
「攻守逆転と行こうか。テンション上げるとしようじゃないかね」

劉・雲徳は先ほどよりも自分を隠す予備幻覚の数を減らし、替わりに四方から放つ雷電の出力を挙げた。

周囲から烈風も吹き込み始め、隠蔽工作から攻撃へと主体を変え始める。

「吹けよ風！ 轟けよ雷鳴!!」

「起風発雷、来たれよ風伯・雨師！」

「精霊を喚起した!? かなり強力な奴だよ！」

風神と雷神という奴だろうか？

危険な事態と言わざるを得ないが、逆に言えば戦略魔法を放たれる危険はグッと減った筈だ。

深雪が担当して居る超電導システムにおける冷却魔法も必要無くなる。そう考えればどこかホットとしている自分を感じた。

「達也、君の腕がどうしても必要なだよね？ ここはボクが押さえながら行くよ」

「すまん。死ぬなよ幹比古」

こうして横浜での騒乱は終結の方向に向かい、操られたという意味で操乱であったと後に呼称される。

だがそれも後の話であり、俺たちは決死の覚悟でその場を脱出する事を決めたのである。

メルトダウン

●攻守の逆転

「幹比古。どうしても無理だと思っただら降伏しろ。連中もその為に軍服を着て居るからな。それと……」

「なるほど戦時協定だね。……でも、その予測が当たってればなんとかなりそうかな」

達也の助言を元に幹比古は劉・雲徳の軍装を眺め直した。

そしてこれまでに相逢った兵士たちが、護衛のみならずコマンド兵までもがちゃんとした制服を着て居たのを思い出す。

軍装を身に付け正規の命令ルートを構築して居る場合は、国際的な戦時協定が適用され降伏時の取り決めが用いられる。

それゆえに日本の魔法師側も自主参加者は配布されたプロテクターを支給され（魔法科高校の場合は学生服も二次的な軍服とみなされるが）、一応は軍に編入されたというセレモニーを受けて指揮系統に従っているのだ。

同じ様な縛りを大亜連合も順守しており、ステルスはすれど一目でわかる軍服を着こみ、劉・雲徳を最上位指揮官として定めているのであろう。

「準備はいいか？ 後は任せる」

「問題無いよ。走って！」

達也は幹比古にその場を任せ、仮説本部の方に向かい始めた。

当然ながら雷撃が降り注ぐが、放り投げられた折鶴が代わりに引き受けてくれる。

「木気、稲妻！ 汝、黒鉄へと落ちるべし！」

達也の代わりに引き受けた雷を、幹比古は折鶴から近くの鉄筋に移動させた。

瞬時に黒コゲになるはずの紙が僅かなタイムラグで燃え尽き、代わりにビルが帯電してスパークを始める。パンパンと音を立ててガラスが割れ、あるいは建物の一部から焦げくさい臭いが漂っている筈だ。

現実の改変で競り負けると魔法は生じなくなってしまう。

幹比古は格上の魔法師に対して、改変を用いない一段目とその結果を利用した二段目に分けることで対応したのだ。

「ホッ。良くやったと褒めるアル。しかし……」

「風伯と雨師はどうするかね？ アレを止めるのはワシでも難しいぞ」

だが劉・雲徳は強大な精霊を呼び込んでおり、その力は絶大だ。

いかに幹比古が古式魔法に長けていると言っても、あくまで高校生としてはだ。専門家である老人には叶わないだろう。

まして幻影によって分身し、どこに本物が居るか判らないので倒す事も出来ない。

さらに黒雲を呼び起こして稲妻を落とし、烈風が真つすぐ歩くことすら困難にしている。

その力はある種の流れを持っており、そこに精霊としての意識を垣間見る者も居るだろう。

「問題無いよ。二柱も呼び出してくれたお陰でボクにも読めた。あなたは喚起するだけで制御なんてして居ない。ならば同じことをすれば誘導するのは難しくないからね！」

「ちっ。柔よく剛を制するとはいえ、そうそう都合良くは行かんか」

どうやら幹比古の見立てによると、劉・雲徳は消耗を避けて精霊のコントロールをしてないらしい。

一体ならば別なのかもしれないが、それをやるには消耗し過ぎて居ると言う事なのだろう。だから二体を呼ぶだけ呼んで、自分が狙われない様になっているだけなのか。

確かに上位の精霊ならば呼ぶだけで合わない属性は不安定になり、逆に合致する属性はやり易くなる。

（達也の『読み』通りみたいだ。後に備えて温存して居るならボクにも何とかできる）

幹比古が別れ際にもらった忠告は、劉・雲徳には重要な任務がまだ残っているというものだった。

だからこそ自分にとっては問題無いが、他者の妨害になる精霊を呼

んでいるのだ。自分が得意とする雷撃は扱い易くなり、領域防御などは保てなくなる。

それは何故か？ 横浜が囿である以上は海上ルートと空路の一部を封鎖し、援軍を送れない様に足止めし続ける役目がある。

また場合によっては自分達が撤退する時に攪乱攻撃を広範囲に放つ必要があるのだ。その分の余力……サイオンや特殊な装備を温存しておかねばならないのに、強力な精霊の制御などしているはずがない。

言葉の上では精霊を二体も呼んでいるからとこじつけつつ、相手の持つ制限には注釈しないでおいた。

「仕方あるまい。手の内を晒すのは本意ではないが……。少し本気を出そう」

「なっ。五行の配置が変わった？ くっ！」

目に見えて判り易い変化。

劉・雲徳の幻影が一体、幹比古を挟んで指先を達也が走っている方向に向けた。そしてまわりつく紫電を絞り込み唸りを挙げるヴォルテージは一気にクライマックスだ。

そこに雷電の威力だけではなく、周囲の帯電抵抗値が変更されたことまで気が付いたのは、一重に幹比古の研鑽によるものだろう。

そして……。

●封じられたサードアイ

俺は幹比古が行う援護の元、仮設本部へ向かって移動を開始した。

劉・雲徳は強力な魔法師だが、戦術級魔法を数発ないし重戦術級ランクで撃てるだけの余力を残しておかねばならない。

ならば防御に徹する限り大丈夫だろう。

(問題は無茶をしないかどうかだな。横浜が囿ならば少々の問題くらいは放置しても良いんだが)

再生魔法のリミットが一日であることを考えると、怪我しても治るのだから……とアテにされても困る。

別に幹比古がそこまでこちらに頼った戦いをするとは思えないが、逆に俺を守るために我身を盾にしかねない。

友人と言うものを持つと余計な心配が生じるなど思いつつ、不思議とありがたさを感じた。

四葉に置いては備品扱いであり、良くて兵器と言ったところだったからだ。せっかく心配してくれる相手を無碍に扱いたくは無かった。できれば無事でいて欲しいと言うのは贅沢な望みでは無いだろう。

（帰りは俺一人……。別に不安とは思わんが戦力不足だな。だが一人だからこそ可能なことがある）

優れた白兵戦能力持つエリカや、戦場基準ですら破格の能力を持つ硬化魔法の使い手であるレオ。

魔法を見分ける美月に古式魔法の幹比古。彼らの協力が無いという時点で来る時よりも戦力そのものは圧倒的に低下しているが、代わりに人目が無いと言うのは制限が無いということでもある。

目撃者が居ないと言うことは、準軍事機密指定された魔法を遠慮なく使用出来ると言うことだからだ。

（隠れて居る存在が幾つかあるが、無視しながら行くか）

精霊の眼を全開にしてエイドスへの関与を探り、こちらへの対象を設定するものだけ注視しておく。

そして『術式解体』ではなく『術式解散』をデフォルトに設定すれば、少ない労力で迎撃が可能だった。残りの余力で跳躍や長距離移動系の術式を展開し、跳ねる様に移動して行く。

（援護が無くなったからこそ可能な手段とは、何とも皮肉が効いているな）

無視できる相手と無視しない方が良い相手を振り分ける。

銃の射程には極力入らず、範囲や追尾系の魔法攻撃に居関しては術式解散を持ち居ることで、サイオンの圧縮が必要な術式解体では不可能なペースで迎撃していく。

そして明確に大亜連合の所属と判る者にだけ『雲散霧消』を使用することで、速度優先で移動出来たのである。

「掃討作戦中にお手数を掛けてしまい、申し訳ありません」
「構わん。上からの命令もあるしな」

魔装大隊に合流したことでようやく精霊の眼を多用する状態は終

わったが、話が難しくなるのはこれからだ。

今の内に簡単な情報だけでも仕入れておき、気構えを作っておくことにした。

「それで状況は？　大連合は艦隊を動かして居ると思うのですが」

「察しが良くて助かる。連中は高速艦艇を中心に先発させた為、最悪の場合は混戦になりかねない」

横浜が囿と言う段階で嫌な予感はしていたが、当たってしまったようだ。

俺が使える戦略魔法『マテリアルバースト』は、起動速度やコストに優れるが威力と範囲が大き過ぎるといふ欠点があった。

接触前に撃つてしまえばそれは欠点に成らないのだが、混戦してしまつたら躊躇せざるを得ない。

「対象物を小さくすることで調整できなくも無いですが……。万が一を考えると不安ですね」

「そこで調査中だった真田を急遽呼び戻して対処させている所だ」
少しばかり疑問が発生する。

真田大尉は技術者であり、放電現象を超電導システムでの誘導が成功した以上は本部要員として待機して居る筈なのだが……。

「他に何か問題でも発生していたのですか？」

「霹靂塔の使用前に何か散布されていたのと、直立戦車に奇妙なモノが詰み込まれて居てな」
なるほど幹比古が属性がどうのと言っていたが、その件か。

察するに消耗をコントロールする為に散布した素材や、直立戦車の配置を利用した魔法陣だろうか？

そういうアイテムがあると考えれば劉・雲徳が本当に消耗して居るのか、あるいは超電導で霹靂塔を封印し続けられるかという疑問に至つたのは判る。

どの程度の消耗低減が可能なのか、超電導で防御しきれぬかを調べて居たのだろう。

「その件でしたら自分のチームに、古式魔法の吉田家の者が居ます。劉・雲徳に対して遅延行為を行っていますので、奴を抑えるついでに

回収すれば良いかと」

「そういえば特尉の友人で民間人だったな。ならば可能な限り無事に保護するでしょう」

幹比古が冷静ならば時間だけ稼いで逃げて居る筈だが、援軍を出しても損は無いだろう。

俺は逆探対策に置いて来た通信マーカーや、鬼門遁甲を見抜ける美月のことを申し伝えておいた。

現状可能な最大限の援護を友人達に行いつつ、俺は仮説本部に止められたトレーラに乗り込む。

乗り込んだ瞬間に飛行場へ向けて移動を始めた筈だが、簡易的な研究施設でもある為、揺れを感じさせないほどである。

「おつ。来たね。話したいことは色々あるが、こつちを済ませてしまおう」

「真田大尉。サードアイはどの程度使えますか?」

サードアイは衛星とリンクした長距離砲撃システムで、俺の精霊の眼を補完・拡張してくれるモノだ。

コレが使えない状況という訳ではないが、混戦になった場合の影響を配慮してくれるような演算機など付属して居ない。

「まあ、そのままだと無理だね。敵艦隊の本隊に影響を与えて終わらだろう」

「敵艦隊は『奈落』^{アレス}を警戒して分散するでしょうし仕方ありませんね。では集結後に過半を巻き込めるオプションが必要になります」

この場合の『使える』とは、どの程度の補助システムがあれば規定通りの性能が発揮できるかという質問になる。

現状では味方の要塞なり艦隊を巻き込まないサイズにする必要がある為、面倒なことになるといいうわけだ。

敵は戦略魔法である『奈落』^{アレス}に対抗する為、高速艦隊を先行し本隊や支援使隊を分散させる手を取っているようだ。

今後の推移であるが要塞のみならず重要地形には必要な戦力単位と言うものが存在する為、対馬要塞か九州の沿岸のどこかで合流すると予想される。

「頭が痛い所だね。……前々から研究してる中で『メルトダウン』を使うつもりで調整して居るんだ。アレが一番、上の受けが良かったから実戦配備化は一番進んでいる」

「あれは即時性と起動速度を捨てて細部調整に特化したモデルですから、今回の様な自体に向くのは判ります。しかし上が奨めて居たのは意外ですね」

前々から開発して居た補助プランが存在する。

矛盾しないようにプラス減少とマイナス現象が相殺されたことにして、必要とされる臨界時間を短縮する『アブソルート』。

条件付きで味方へのフレンドリファイヤーを指向低減する『メギドの丘』。

小型機を連結させて本来の機能を分散させておく『テイタノマキア』。

そして多段階性の小規模行使の後、大規模発動に進行する『メルトダウン』の四つだ。

この四つは何れも一長一短でどちらかと言えば深雪のように才能がある魔法師が、準戦略級とも言える重戦術級魔法を行使できるようにするためのアブソルートの方が有望だと思っていた。

だが、瞬時に発動するマテリアルバーストの起動速度を劣化させるだけのメルトダウンが推されるとは思ってもみなかった。

「それは……うーん難しい質問だねエ。ぶっちゃけ一人の人間に国家の重要時を任せるよりは、複数の人間が鍵を握って抑えて居る方が安心できるってことなんだろうけど」

「そちらの意味の難しいですか。失礼しました」

どうやら上は子供である俺が戦略魔法を使えることが気に入らないらしい。

そこでコンピューターに演算させながら障害を排除し、時間を掛けながら爆撃調整を行うメルトダウンが採択されたのだろう。

その後にはサードアイをそれに特化して、緊急発動が必要な時は封印を解いて使わせるなり、一発きりの使い切り兵装でも併用する気なのかもしれない。

……四葉が勝手に自作でサードアイを開発しないのであれば、まあ有効な手であるかもしれない。

「ではメルトダウンを併用してサードアイの補助を受けます。その後に限定的なマテリアルバーストを使用しますが、サイズの方は期待しないてください」

「万が一にも味方を巻き込む訳にはいかないからね。コンピュータの予測範囲から出ないサイズで行こう」

研究が進んで居ても実戦で試すわけにもいかない。

当然ながら小規模で放つことは避けられず、サードアイだけで無理やり最小単位で放つよりはマシだと言うところだろう。

だが方針さえ決まればやることは決まっている。

移動中にプランを決め、大隊で今回の任務に参加して居ないメンバーに細かい調整を頼んで俺のやることは現地でマテリアルバーストを放つことだけだ。

この時の俺はやるべきことが決まり、以前からの準備でそれが補われたことで思考が停滞して居たのかもしれない。

よくよく考えればこんな都合良く、研究して居たプランが使える筈は無いのだ。

プランにはそれぞれ元となった……森崎や四校などのアイデアが原型として存在しており、メルトダウンのアイデアは平河経由で誰かが提案したことだというのを結びつけることができなかった。

●都喰らい

強力な魔法師の多い紅世関連で、強大な自在式というものは数多くあった。

そのアイデアを流用した魔法も存在し、個人的な素質を踏まえて自分流にアレンジしている。

十文字先輩の磁砂鉄の防壁は『マグネシア』という自在式であるし、先輩の婚約は『プロビデンス』という自在式を元に大規模防御魔法を横浜戦で行使したそうだ。

そういう見方によると、俺が使ったマテリアルバーストは、フレームヘイズ視点では『都喰らい』という自在式に見えるらしい。

『計測を開始しました。小さい点は超距離設定したミスト・デイスパーション、大きな点は小形のマテリアルバーストをお願いします』
「了解。まずは『雲散霧消』から入ります」

デイスプレーイに幾つかの光点が示され、サードアイを向ければそれぞれに補正が入る。当然ながら大規模様のマテリアル・バーストは使用不可とのサイン。

まずは影響が小さい雲散霧消を使って、計測がクリアになるか試す事になった。

「ミスト・デイスパーションによる対象の消失並びに、誤差修正を継続確認中。指示があり次第に次段階に移行してください」

味方の撤退を妨げている敵魔法師や味方を狙うミサイルなどを並行発動した雲散霧消で順次消去、小さな点が消えて計測が次第にクリアになっていく。

だが依然としてコンピュータの演算では敵艦隊を消滅させる規模ではマテリアル・バーストの許可が下りない。

「了解。最小規模で目標群を破壊します。優先目標を設定してください」

「これより対象群にナンバーと呼称を付与します。段階的に試行を許可、最終段階に対する許可は下りて居ません」

そこで前衛の艦船や航空機などへ小規模なマテリアルバーストを繰り返す事で、敵部隊を段階的に排除。

必要ならば数発撃ち終わった段階で、クリアになった主目的に対する大規模なマテリアル・バーストを使用することになるだろう。

「敵前衛が位置によって突出するモノと、後退して再編するモノに別れました」

大きな点を段階的に消失させる間に、敵は対馬要塞に乗り上げる形で対象を避けた艦と混乱を避けるために交代した艦に分かれた。

文字通り、これが運命の分かれ道と言う訳だ。

乗り上げた艦船は生きた心地がしないだろうが、彼らだけが生きて帰ることになるとは思いもしなかったろう。

「後方の敵を一掃すれば降伏するだろう。再計算が終わり次第許可を

「仰ぐ」

「了解。最終段階に移行したものとして、計測を待ちます」

本来は最終認可を携えて発動する為、発動許可は不要である。

だが今回は混戦になってしまっていることと、段階を分けて管理するとと言う観点から上層部から許可を仰ぐになっていた。

「計測状況、オールクリア！」

「使用許可が居りました」

「マテリアル・バーストの発射を許可する」

俺はその言葉が降りる共に、大規模サイズに拡大したマテリアル・バーストを敵艦隊後方へと向ける。

その位置ならば味方を巻き込まないとされている場所だ。

跳ねる水や残骸の中から、衛星が適当なサイズの対象を見付けだしてはディスプレイに映し出して行く。

「マテリアル・バースト、発動！」

「マテリアル・バースト、発動します」

小さな消失を連鎖させて一気に街を消し去り存在の力に還る『都くらい』は、確かに対象をエネルギーに変換するマテリアル・バーストに似て居なくもない。

最凶最悪の自在式の一つを使つたとなれば、後に俺が狙われることになるのも仕方のない事なのだろう。

ゆえに俺は自らの手で、死刑執行書にサインを入れてしまうことになる。

灼熱の来訪者編 灼熱の来訪者

●彼方からの声

対馬沖に来襲した大亜連合の艦隊はあつけなく半壊した。

何隻かが生き残ったとはいえ要塞周辺に被害を与えない為、日本側が手加減した結果に過ぎない。

もし奇襲に成功して対馬要塞に張り付いて居なければ、艦隊ごと……場合によつては出撃する前の港ごと消し去られたのではないかとその声もある。

だがそれも事情を知る日本と大亜連合の認識であり、諸国は別の切り口での判断を余儀なくされた。

使用された戦略魔法は未知のモノなのか、それとも……。

既知の禍であるのか？ をである。

『……公ゴンジン、公ゴンジン。聞チヨウこえて居るか、周ゴンジン・公ゴンジン』

横浜にある中華街、その一角で不気味な声が響いた。

地下に納められたミイラが突如、唸り声を上げ始めたのだ。

『……我が朋『徒督』、周チヨウ・公ゴンジンよ』

「おや、フィッツジェラルド。どうしました？ 『小霸王』ともあろう者が、いまだき共感魔法などと」

部屋の主人は目を通して居たタブレットを待機させ、ミイラの方に視線を這わせた。

共感魔法により類似する対象に同じ効果を与える……そんな古式魔法が流行ったのは昔のことだ。今では電子技術の発達により、使われなくなつて久しい。

『……技術はより高い技術で抜くことができるよ『徒督』。例えば軍事回線であっても、秘匿性の低い物は信用ならんさ。それと、今は顧グ・ジ傑と名乗っている』

「それは確かに。……で、何の用事ですか？ こちらはまだ十師族に食い込んだばかりですが」

様々な名前と立場を使い分ける『小霸王』と『徒督』の二人は、一つの目的に向かって邁進して居た。

その目的はまだ初期の段階を脱したばかりで、『小霸王』がUSNAで『徒督』が日本で、それなり以上の地位を築いたに過ぎない。

どちらかが自分の勢力を全て引き上げ、もう片方に合流してもまだまだ目的は果たされないのだ。

『例の戦略魔法に関してだが……』

「あれは別に『都喰らい』ではありませんよ？ 初期段階こそ似て居ますがね」

部屋の主は肩をすくめて、対馬沖で使用された戦略魔法に関する資料を立ち上げる。

それは伝え聞くことが出来た情報を打ちこんだ程度のモノで、詳細など無いに等しい。

だがそれでも彼が、『徒督』と呼ばれた男が『都喰らい』に関して間違える筈は無かった。

そしてそれは、『小霸王』も同じである筈なのだ。

「しかし余人はともかく貴方がこの程度の勘違いをするなどとは。いかにUSNAに居るとは言え……何の計略なのです？」

『……ククク。『都喰らい』であることを日本の立場で否定し、情報が漏れないように『可能な範囲』で秘匿して欲しいのだ』

異なことを言うとは最初は思った。

『都喰らい』で無いモノを、『都喰らい』でないと否定して何の意味があるのだろうか。

まして十師族に取り行つたと言っても、協力者であつても役に立つ部外者でしかない。秘匿できる範囲などたかが知れている。

だがここで先ほど、『小霸王』が秘匿回線以外の情報は抜けると言い放つたのを思い出した。

もし秘匿した筈の情報を容易く抜ける者が、断片だけを拾い挙げて独自の視点で組み上げたらどうなるだろう？

「なるほど。それは面白そうです。九島閣下……いえ、九島家の御当主に進言してみましようか」

『頼んだよ』『徒督』。私は上手く痕跡と情報を操作しておく。ではまたいずれ……上手く行ったら私もそちらに行くかもしれないが』

『徒督』と『小霸王』はミイラを介した会話を打ち切り、再び闇に潜むのであった。

そして周・公僅が九島・真言に接近して暫く、USNAでとある重大事件が起きたのである。

●炎の使徒

かつて異世界への扉を開き、その世界の住人と強制的に契約を結ばせるといふ暴挙が起きたことがある。

様々な悲劇が起きた後、その暴挙を起こした存在の消滅と共に消え去るはずだった。

だがその残り火が今、静かに燃えあがろうとしている。

『止まりなさい！ 今ならば脱走の罪には問いません！』

「……」

十二月も半ばを越えて、USNAで軍人の集団脱走が引き起こされた。

中には精鋭魔法師集団であるスターズに所属する者もあり、当然ながら軍は追手を差し向ける。

たちまちの内に逃走経路が割り出され、最精鋭と最新鋭の装備が惜しげも無く投入された。

追撃者たちは発表されて間も無い飛行魔法を使いこなし、逃走者達を追い詰めて居る最中だ。もっとも相手も飛行魔法を使用して居ることで苦戦を始めて居る。

『駄目です。互いに高速で動いているは、キャスト・ジャマーは元よりアンテナイトの焦点を絞れません』

『相手もスターズ、飛行魔法を使いこなせても不思議では無いわ。構わないからスタッフを使用しなさい』

『使える』と『使いこなしている』ではまるで意味が違う。

包囲網を築く為の外陣は追い切れず、既にメンバーの中心はスターズが担っていた。

追手を率いる隊長格の一人は、このメンバーならば問題無いと秘匿

兵器の一つを躊躇なく切る。

その指示に従って魔法師たちは特殊な投げ槍を用意し始めた。

『総隊長。間も無くスタッフで平面展開を仕掛けますが、問題ありませんか？』

『許可します。……抜けようとするところを抑えるわ』

突き刺さった投げ槍を魔法師の杖に見立てて、取り込んだ相手に対し問答無用でジャミングを仕掛ける。

それが秘匿兵器の一つ『スクエア・ジャマー』だ。

その提案を聞いて総隊長と呼ばれた少女は、相手がその包囲網すら抜けて来る事を予想して作戦を立て直す。

こちらが歴戦のスターズであるならば、相手もまたスターズ。

スタッフの事を知らないのであればともかく、知っている以上は即座に対応すると判断したのだ。

その判断こそが逃走者たちを追い詰めることを可能にした。問題があるとするば……。

『投擲開始！ 全スタッフでスクエア・ジャマー展開！』

「……遅い！」

三人以上のメンバーが槍を一齐に投擲し、待ち構えた一人が槍を投げずに突き刺すことで都合の良いフォーメーションを仕掛ける。

動きを止める逃走者たちと、追いつがって包囲陣を立て直す追跡者たち。

だが逃走者たちの一人が、灼熱の焰を放って投げ槍がある一帯を焼き焦がした。

瞬時に逃走を再開するものの、一度でも動きを止めたことで全体として追い詰めることに成功する。

貴重な秘匿兵器を僅かな時間、それでいて何より貴重な時間を奪うことに成功したのだ。

『止まちなさい、アルフレッド・フォーマルハウト中尉！ 逃げ切れないのは判っている筈です』

まず総隊長と呼ばれた少女が追いつき、更に時間を稼ぐ意味で逃走路を薙ぎ払うことで塞ぐ。

その間に他のメンバーも追いつき始め、包囲陣を形成する班の中には攻撃体勢に移っている者も居るだろう。

……ここまでの流れは追手であるスターズ側に有る。

精鋭部隊であり装備も超一流、作戦も判断も上を行って先を読んで居た。

唯一の間違いは逃走者に話を通じると思い、あるいは何かの異変があると推測してデータ集めの為に捕縛しようとしたことである。

仮に……即座に皆殺しにしていれば、その後の運命は大きく変わったかもしれない。

『一体どうしたんですかフレディ。一等星のコードを……いえ。あれだけ職務に励み、皆の模範だった貴方が……』

「……」

総隊長という形書きに相応しい凜として厳しい口調が、説得を兼ねた時間稼ぎとして柔らかい物に変わる。

あるいはこの口調と優しい態度こそが、この少女本来のモノかもしれない。

ともあれ脱走班の中心である男を捕まえるか倒すかすれば、この獲り物は終わりなのだ。

「大義を持たぬ者に語る舌は無い！」

『視線型のバイロキネシスじゃない!』

しかし優しきは爆炎を持って破られた。

アルフレッド・フォーマルハウトと呼ばれた男は自分の周囲から猛烈な火炎を噴出させる。

灼熱の圧搾空気を利用し、その勢いで飛び出す事で一気に少女へ肉薄。狙っていた者たちが攻撃できないコースで包囲網を破った。

逃走者達もそれに合わせて動き出しており、殆どの者は分散して逃走する。

残ったのはアルフレッドと、その救援に来たもう一人の女だけだ。

「ここは私と『龍姫公』^{アスタロッテ}に任せて、貴方も逃げなさいな」

「無謀。……だが君たちの機動力なら判らんか」

(あれはたしか惑星級の？ やっぱり……もう一人いる?)

救援に来たとはいえ、能力はスターズの中でも惑星級のメンバーはあくまで支援要員だ。

アルフレッドが言う様に、戦闘力としては無謀極まりない。だからこそ……もう一人戦闘のプロが支援として留まっていると考えるべきだろう。

「これも使命あつての事。礼は言わん。いずれ……」

「……因果の交差路で。ってね」

アルフレッドが猛烈な爆炎を放ちながら飛んでいくのに合わせて、殿に残った女は逆方向に高速で走り出している。

ワザと包囲網の厚い場所を選んで抜けて行くアルフレッドに対し、その女は攻撃態勢にある班を狙っているようだ。

『使命とは何!? フレディ達は何をしようとしているの? 答えなさい!』

「私はそこまで使命って感じじゃないんだけどなあ。あの事件で『成った』だけだし。……それでも長く戦つてると浮世の義理があるのよ……ねっ!」

情報強化してからの弾丸を受けまいと、自己加速でジグザグに移動しながら牽制攻撃。

それを放置しては追撃態勢も取れないと、少女は仕方無く先に倒す事にした。

『惑星級では一等星級には叶わない! フレディも言っていた筈よ。無謀だつて』

「判つてるわよ。でも魔法師に重要なのは、才能の差では無く戦闘経験の差つて事を覚えておいた方がいいわよ」

並みの魔法師であれば即座に戦闘は終わっている。

遠距離からの魔法攻撃に狙撃、あるいは情報強化で改変できない状態で物理攻撃でも良いだろう。

それが許されるだけの能力差がありながら、女は上手く場所取りをして逃げ回っていた。

その動きを見れば戦闘経験の差が大きく開いているのは感じるが、それでも人数と実力差の壁は埋められない。

まだ決着が付いて居ないのは、隠れて居る者がバックアップしている可能性を考慮しての事。そして言葉を交わしながら実際には追撃班を再編成しているからに過ぎない。

「久しぶりにアレ行くわよ。『アスタロツテ龍姫公』」

『フォトン・ドライブ!? なんて馬鹿なことを……』

少女は驚きを隠せなかった。

それは視線の先に光のラインを描き、それをビーコン代わりに複数名で高速飛行を掛ける連携飛行術。

特殊なテクニクであり複雑な軌道で飛ぶこともできるが、ビーコンを出して居れば予測射撃で叩き落とすのは簡単なのだ。

『馬鹿な、あの突っ込みで機動を変えらだど? くそっ撃ちまくれー!』
(速い上に軌道の変化が複雑……。間違いないわね、もう一人が手を貸してるのは確実だけど……。なんで干渉してないの?)

連携魔法は理論上可能だが、余ほど相性が良くなければ干渉しあつて相殺してしまうか激しい消耗を起こす。

それなのに光の帯は空を翔けたままだ。消耗を気にする状況でもないのだろうが、弾丸や魔法攻撃が追いつけないほどのペースで飛びまわっている。

そのままでは捕縛はもとよりまともな方法で倒せないと判断して、上層部に非常手段の実行許可を求めることにした。

(それよりもこのレベルの魔法師がなんで惑星級なの? 確かに惑星級には支援系が揃ってるけど、これだけの実力があればもっと上でも良い筈。聞きたいことが一杯あるけど……。仕方無いか)

事実改変や速度を元にした魔法師としての実力と、戦闘者としての実力はそれほど関係ない。

だがBS魔法だとしてもこれほどの実力を持つて居るならば、何らかの口添えなり魔法支援で補佐する為の直轄メンバーとしての待遇を受けて居てもおかしくはなかった。

実力を隠しているとしたら何故か? アルフレッドは知っていたようだが、どんな共通項があつたのか?

それを尋ねてみたかったが事実は無常である。上層部からスタッ

フ以上の秘匿性の高い技術を使用する許可が下り、ソレを使う以上は殺さざるを得ないだろう。

『総隊長！ 上層部の許可が居りました』

『そう。準備が整い次第……アレを使用します。情報封鎖の確認と、追撃班の再編成を急いで』

スターズ総隊長アンジー・シリウスこと、アンジェリーナ・クドウ・シールズはこれから続くであろう面倒事を思考から排除し、意識を戦闘にのみ切り替える。

そして彼女だけに許された魔法を使用し、直接戦闘に再び加わるのであった。

幕開けは驚きと共に

●一つの終焉

この日、一つの時代が終わった。

第一高校にて生徒会のメンバーは変わっていたが、三巨頭の存在感は失われていなかった。

それが失われるのはあくまで卒業後、入試を控えて姿を見せて居ないだけ……と言われている。

「そんな、渡辺先輩が千葉に魔法込みで負けるなんて……。これが新装備の力だと言うのか……」

部活連の服部会頭がジャッジを務める中、エリカが渡辺先輩に勝利をおさめた。

横浜の事件が起きる前に活潑して居た、特化型CADを連鎖させる新装備のお披露目が上手くいった形だ。

三巨頭の中で最も判り易い渡辺先輩を選んだのだが、正解だったようだ。

「剣での勝負を延長した感じね。なら実力差が出たって事じゃないの？」

「あたしは手を抜いて居なかったし、実力差と言われたら否定しようがないな。装備に差はあるとはいえ、専用の魔法を持って居るのは同じだ」

渡辺先輩に提供した『雷上動』は旧来のCADを使用したモノであるが、『アクティブ・エアーマイン能動空中機雷』を応用した魔法で簡単に抜ける物では無かった。

分身対策で帯電防御を全周囲に広げた所に、エリカは最低限の護りを固めて突っ切ったのだ。

ソレを突破できたことで、剣での勝負に移行したのだろう。

「同時展開が出来なかったり構築速度の問題で使い分けが良くないだけで、エリカは元々魔法が弱いという程でもありませんでした。そこを同レベルに揃えた以上、仕方の無いことだと思います」

「ちよつとー！ あれこれ足りないかと改めて指摘しなくても良いじゃ

ない」

「エリカの魔法を起動する速度は速くないが、勝負でそれを苦にしているのを見たことが無い。」

「つまりタイミングを読んで上手く使っているのだが、逆に言えば起動式を軽くした専用魔法とCADを用意すればその分だけ速く使えると言うこと。」

「そこで使っている魔法を全て見直し、その全てを別々の特化CADに振り分けて高速化を図り、可能な限り同時展開で許容量がオーバーするのを避けたのだ。」

「しっかしまあ、ウチで研究・秘匿してるCADを丸裸にされちゃった気分ね」

「尽きつめれば考えることは皆同じだからな。俺のところもテクニクを晒してるんだし、その辺は勘弁してくれ」

「千葉家固有の魔法式と、その専用CAD。……特殊な武装一体型CADを使えばエリカは恐るべき戦闘力を発揮するらしい。」

「それと同じ様な事を加速や防壁にも適用して、コマンドワードかオートで処理できるようにしたわけだ。」

「なあ。あたしも専用に調整すれば同じ様には行かないが、それなりに強化できるのか？」

「理論上は可能です。しかし汎用型CADと併用するなら二度手間な上、かなりの手間暇を掛けるのでその辺は覚悟してください。ワルキューレ・スワットにでも配属されれば特別予算でも降りるでしょうけど」

「今まででも同じことが可能だったはずだが、予算や手間の問題でやらなかっただけだろう。」

「重力魔法を調整するただけに吉祥寺を呼んで、CADを五十里先輩と俺が組み上げる様な物だからだ。それも一つの魔法だけではなく、戦闘に併用する各魔法に関して専門家を呼ぶ必要がある。」

「それは……流石に手が出ないな。何か手は無いのか？」

「後はもう、スケールメリットによるとしか。どうしてもというなら発想を変えて大々的にするしかありませんね」

強くなることには興味があるのか、珍しく渡辺先輩が食いついて来る。

だが手間暇かかるので、予算だけならともかく、人材の確保の方が問題だった。

僅かな魔法に限定すれば二科生が一科生と同レベルに至れるとは言え……所詮その程度である。

現状ではデメリットの方がメリットを上回るので仕方無いと言えるだろう。

「と、言うことはお兄様。大規模なレベルで研究成果を共有すれば実現できるのでしょうか？　魔法大全クラスで」

「あら、良いわね深雪さん。是非とも実現しなくちゃ」

「深雪？　七草先輩？」

俺は忘れて居た。

最愛の妹がどれだけ俺の事を考えてくれているかを。

七草先輩がどれほどに一科生と二科生の確執を克服したいと思っているかを。

これが三巨頭体勢どころか、二科生制度が終焉を迎える事件の始まりとは誰も想像して居なかった……。

●第十一研の発足

女性陣の恐るべき手腕により、全校態勢の相互扶助が始まった。

恐るべきは第一高校全てという意味絵は無く、全魔法科高校という意味での全校体勢であると言うことだ。

二科生が一科生級に魔法が使えるように成る技術を公開し、その確立と普及を目指す。

誰かが口にした皮肉から、この試みを『第十一研』と揶揄した。

「まさか君と一緒に研究することになるとはね」

「妹が無理を言っつてすまないな」

コンペの枠外で俺が提案した理論を使っていることもあり、吉祥寺はあまり面白くなさそうだった。

しかしこちらの手の内を全て共有するとあって、興味は隠せないようだ。

「二人とも……ひとまず、お手柔らかにお願いするね」

「せっかく啓が協力するって言ってるんだから、あんまり喧嘩しないでよね」

五十里先輩も当然の様にスタッフに加わっており、その警護を兼ねて特化が判り易い例として千代田先輩も参加して居た。

「メンバーはこんなものかな？」

「二校の連中が遅れて来るそうだが、それを除けば概ね揃ってる筈だ」
九校戦やコンペで見た顔が研究スタッフ側に並び、その逆にテストランナー側には見慣れない顔が加わっていた。

いずれもレオやエリカの様に得意な傾向が判っているメンバーだ。

一科生側にも千代田先輩が居る様に、ほのか等の判り易い傾向のメンツが揃っているのだろう。

「鈴音先輩。司会よろしくおねがいしますー」

『判りました千代田委員長。それでは本研究会を開始いたします。趣旨は登校の七草より説明したとおりですが……』

市原・鈴音という先輩は居なくなつた。

そんな存在は消えて無くなつてしまつたわけだが、不思議なことに鈴音先輩と呼ばれる先輩はそこに居る。

(名前を戻したと言っていたが……数字落ち^{エクストラ}だったのか。そう言われてみれば、あの魔法力にも納得が行く)

何のことは無い。市原家の処分が政治的に取り消されて、一花家として復帰したのだ。

前から知っている者は名前で呼ぶように成つたらしいが……。

『次に……ミスター・シルバーの方から技術の骨子説明をお願いします』

(根に持つてるな。まあ追々に改善して行けばいいか)

七草先輩や昔から縁故のあつた家が協力したのか、それとも百家の方で某かの流れでもあつたのかは知らないが、おめでたいと思つておこう。

『紅世の徒』に食われた影響では無くて、どこかホットしている自分が居る。

コンペでは協力して居る最中で別件に手を取られ、別々にコンペに論を提出してしまつた経緯から仲が疎遠になつたが、やはり知り合いが消滅しないというのは良いことだ。

『特化CADを前提にして、更に随意対象の設定を省略。全て魔法師の個性に見合つた位置に固定し、本人の動きで調整します』

魔法式の設定では五つも六つも決めて行く必要がある。

この中で最も時間が掛るのは随意設定で、あれとこれを狙おう……と任意の対象を狙う事が最も時間を要する。

極論を言えば高速で発動する一条が、対象の数を次第に増やした場合。

俺の発動が遅くとも、最初から対象数を決めて発動した場合には追いつける可能性があるのだ。

随意に選択する範囲を無くした上で、対象を目の前だったり自分だけに設定すれば魔法式はかなり軽くなる。

『質問があると想います。内容が決まっている方、一名だけお願いします』

『では。……要するに魔法の拳銃化・ローラー化なんだろうけど、どうしても数が必要な場合や、長距離設定が必要な場合は？』

サクラを頼んで居た生徒に頼む事無く、順調に会議は滑り出した。

当初から機能を説明し、内容を選択して居たこともあり、狙つた通りの質問がやって来る。

『汎用CADを用意しても良いのですが、最初から特化型CADを複数用意してコマンドワードで使い分けれます。もちろん安価に収まる事が前提に成りますが』

スケールメモリットで安価に納めることが可能ならば、同じCADを二つ持つて悪い道理は無い。

単体・瞬間を選択した特化魔法と、複数・長時間を設定した特化魔法を用意するのだ。それを起動する段階で必要な方のキーワードを唱えれば良いだけのことだ。

『コマンドワードを判断させるのは、発表したばかりの思考型を流用するということですね？ では質問を終わります』

複数の特化型CADを持ってばそれだけ混乱する事に成るが、予めルートを決めておけば問題無い。

コマンドを発した段階で処理されるし、それすらも短縮したいのであればボタンを押せば優先する様にバックドアを作れば良いだろう。

これで戦闘や試合のような、一度に使う魔法が多くないシチュエーションでは二科生と一科生の差は殆どなくなるだろう。

ではもつと別の、様々な魔法が必要とされる場合はどうするのか？

『最終的に得られた登録パターンは個人のパーソナルを除いて登録、公開させていただきませう。いずれ専門のショップでなくとも、自分の家で特化型CADの調整が出来るようになるでしょう』

「そんな……まさか自分の技術を全て放出する気なのか……!？」

「トールス・アンド・シルバー……今はキャプテン・シルバー社だけ？ そのこのノウハウとか全部捨てる気なの？」

ザワザワと騒がしくなるが……。

そんな物は必要ない。二科生が一科生並みに魔法が使えるようになれば、俺の小さなプライドなど欠片も問題無くなる（フラツシユキャストも隠し易くなるし）。

そして二科生の多くは教師不在ゆえに自分の能力傾向に合わせられないから才能を伸ばせないのであり、自分に見合ったパターンが瞬時に判るのであれば伸ばす事はそれほど難しくくない。

むしろ足りないと言われていた俺の能力も向上するし、成果で認められるのであれば深雪も満足してくれるだろう。

……そう。様々な魔法が必要とされるならば、一部の特化型CADを簡単に調整できるようにしてしまえば良いのだ。

遅くても良い状況ならば汎用型CADを使用し、そうでない場合は特化型を簡易調整して使えば良いのである。

瞬間的に幾つもの魔法が必要な状況等はそう無いし、あつたとしても一科生だって苦勞するに違いない。そこまでするなら複数人が協力し合ってしまった方が遥かに早いだろう。

『我が社の利益ならば気にする必要はありません。新しい特化型CADが受け入れられれば、CAD全体のパイが何倍にもなりますしね』

ナンバーズや四葉家が反対して居ないどころか、深雪と七草先輩の我儘を推して居るのはそこだった。

現在の基準だと年間3万人程度しか魔法師は増えない。低位の才能の持ち主が居ても目指したりはしない。予備を含めても5万個売れば良い方で、飛行魔法専用CADなど特殊な物を考慮しても十萬弱。次年度からは相当に需要が冷え込むだろう。

だがしかし、この計画が成功すれば二つのメリットがある。

需要そのものが増え、実用レベルの魔法師が増え、魔法師社会全体に大きな利益をもたらすだろう。率先する四葉や他の家も、多くの利益を享受する事に成る。

当然ながら風当たりも強くなるだろうが、それ以上に一般人という分母に乗った魔法師と言う少数の分母のスケールが変わってくるのだ。

渡辺先輩と話して居た時と逆転し、デメリットよりもメリットの方が大きくなっていく訳である。飛行魔法を公開して調整データを得たように、今回も多くのデータを得ることが可能だろう。

『次に懸念されているのは外見だと想われますが、これは実際に発表用のモデルを見てもらった方が早いでしょう』

『ちよつと達也くん、本当にこのまま出る訳？　せめてプロテクターとか……』

『それじゃダサイって言う話じゃないか。ほらほら！』

一同の中央に引き出したのは、エリカと里見選手……スバルだ。

それぞれにアクセサリーや服装に当てはめた特化型CADを付けており、有る種のファッションショーである。

『恥ずかしいなあ……それにしても美月ったらなんでこんなのにしたのよ』

『ボクは良いと思うけどなあ。騎士の装束でも悪くは無かったけど』

美月たちが悪乗りした結果、その服装はいささか華美だった。

ヘッドギアはどう見てもカチューシャであり、アームバンドはキーが不要なのでスタイリッシュ化している。

他にもコマンド送信信用など単機能のCADはブローチやネクタイ

ピンなどに成っていた。更にこれらは統一したイメージで形造られエリカならば赤、スバルなら青と言う風になっていた（もしかしたら動物か何かもイメージしているのかもしれない）。

こうして会議が順調に進んで行く中、遅れて参加した二校のメンバーが珍客を連れて到着した。

まだ説明と簡単な質疑応答のみであることから、キャビネットの中で聞いていたとかでスムーズに着席する。

見慣れない金髪の少女だけが違和感だったと言っても良いだろう。

「こちらは老師の御縁でクドウさん」

「アンジェリーナ・クドウ・シールズです。よろしくお願ひしますね」

新たな戦いの幕開け

● ネットワーク

入室して来た少女に、部屋の一同はざわめいている。深雪に匹敵する美貌もだが、ここに居るメンバーならば魔法的な資質の方も深雪並みだと理解できただろう。

綺麗に制御された魔力の為す技とでも言うやつだ。

とはいえこの少女の事を、俺は事前に聞かされて知っていたので驚きは無い。

「九島家の縁で二校に留学されているとのことでしたね。社長から窺って居ます」

「……？ 周さんが紹介されてくださったのですか？」

聞き慣れない名前に俺は少しだけ戸惑ったが、首を振って訂正する事にした。

この少女に複数の心当たりがあるとしたら、名前を添えなかった俺のミスだ。

「弊社で社長を務めておりますのは、藤林です」

「あつ。響子さんね。……ここでは普通の学生として接してください」

藤林少尉は横浜の件で、不自然でない様に俺達に近づく意味と、装備を整える意味合いからブティックの方の店の株を買い取っていたのだ。

そのことを知らなかったのか、あるいは頭の中で結び付けて居なかったのかもしれない。

「挨拶はその辺にして、内容の方に入ろうよ。アレの説明を始めても良いんだろ？」

「そうだな。『ライブラリ』の説明をしてしまえば、あとは『ウインドウ』を個人に配布するだけで済む」

吉祥寺に促されて、俺は今回の開発に置ける重要な端末を説明する事にした。

「ライブラリという魔法大全みたいなものですか？ 学校で許可を取って閲覧する」

「そのような物ですね。基本は学校に置くターミナルですが、過去の作例や質問などを一定期間を置いて送受信します」

「ここで一定期間置くのは、数をまとめておきたいのと、一応はプライバシー保護の為だ。」

魔法式のデータは裸同然と想う者もまだ多いので、時間で逆算出来るのでは登録を促す事が難しい。そこで一定時間まとめて送信するわけである。

現時点では俺以外の入力は、吉祥寺や幹比古が暇な時に入力した物が多いので重力魔法や古式魔法が最も多い作例に成る。

「ウインドウの方は家に持って帰ってCAD調整に参照できるアプリケーション。持ち帰ることが可能なデータには幾つか制限が掛って居ますが、代表的なのは機密指定のモノを間違えて持ち出さない為です」

「それと、ここに居るメンバーはともかく一般生徒はデータをもて余すことへの対策でもあるね」

俺の言葉を吉祥寺が引き継いだ。

最初は気にもして居なかったが、どうやら一般生徒は多くのデータを所持するとパンクし易いらしい。

俺や深雪の周囲はそんな事は無いのだが、それは稀有な例だということなのだろう（レオやエリカは得意分野以外を切り捨てて居るので問題無い）。

「初心者はデータの一部分、慣れるに従って少しずつ容量を増やして行けばいい」

「慣れると簡単なんだけどねー」

吉祥寺の言葉にエリカが肩をすくめた。

得意ではない彼女にも判り易い様に、参照と入力方式はシンプルにしてある。

例えば起動速度を速める方法を求めた場合、特化CADを使うのはもとより工程を短くする為の項目をピックアップする。

その項目ごとに説明を設け、戦闘用であれば……自身のみを対象とした防護系、同じ様に武器のみを対象とした付与系と用途を限定すると書いてあるのだ。

随意による任意指定が無いだけでなく、対象を最初から自分や手持ちに絞っていることで工程がグッと短くなる。

「ライブラリの方に質問や判例の要求をしておけば、放っておいても返答が帰って来るようになります。ですが急ぎたい場合は、各校に一人ずつ管理者権限を設けますのでそこから要請してください」

こうして研究会の方で作例を造っておけば、実際に企画を始める時には相当量のデータが蓄積されている筈だ。

場合によってはそれらを統合し、自動的に返答を返す二次判例ソフトを用意しても良いかもしれない。それほど信用が置ける訳でもないが、とりあえずの指針にはなるだろう。

こうして新機軸の研究会を立ち上げ、利益では測れないモノを俺は確保した。

四葉での研究の役に立つのみならず、飛行魔法の説明回から続くこの交流ネットワークがあれば、技術者たちを狩り場に陰から狙う『紅世の徒』の情報を調べ易いからだ。

そう思っただけで作業に没頭して居た時に、想わぬ情報が交錯する事になる。

(これは……検索が古式魔法に偏っているな。珍しいことは珍しいが特に参照して居る項目が……まさかな)

管理者権限の上としてマスター権限が俺や吉祥寺にはあるが、密かに造っておいたアークマスター権限も用意してある。

当然ながら情報収集用の後ろ暗い利用法の為であり、質問者の性格から研究傾向をつかんだり、付近で起きている問題を把握しておくためのものだった。

その権限で映し出された履歴を定期的に見て居るのだが、見逃すわけには行かない上方の流れがあったのだ。

(馬鹿正直に自分のキーで調べて無いだろうが……。頻繁に利用して

居るのが二校というなら一目瞭然か。しかし目的はなんだ？)

足が付かない様に、他の生徒へ『ついでに』検索する様に頼んで居るのだろうか。

留学生というのは日本の生徒では無く、いまいち信用のおけない同盟国の人間なのだから警戒して当然ではある。

(アンジェリーナ・クドウ・シルズ。……何故『自在式』の情報を調べて居るんだ……)

判例や過去例として調べて居たのは、『フレームヘイズ』や『紅世の徒』が使った魔法式だった。

もちろん他の……無意味なモノや、誰もが使うモノも多いがそれはダミーの可能性が高いだろう。

アンジェリーナは何かの目的があつて、二校の生徒を経由して自在式を調べているのだ。

(敵か、味方か……。藤林少尉を経由してひっかけて見るか、それとも直接に会話できる機会を造って誘うべきか……。どうしたものかな)

深雪に匹敵する魔法師が、無目的に興味本位で調査して居る筈が無い。

ここで二つの可能性が持ち上がる。

一つ目はUSNAに関係しており、あくまで諜報活動の囚役と言うもの。

もう一つは彼女もまた『紅世』に関わりある人間で、被害者なり……当事者である可能性だ。

『紅世の徒』がらみの関係者が現れたからといって、迂闊に声を掛けるのは考えものだった。

前者であれば本命のスパイ……例えば周という中華系の名前の人物とかが隠れて調査して居るだろうし、後者であれば被害者やフレームヘイズではなく、場合によっては『紅世の徒』側の人間かもしれないと言うことだ(利用されているだけを含む)。

とはいえ久しぶりに掴んだ動きであり、ようやくネットワークを造ろうとした意味が出たとも言える。座して待つのは悪手だろう。

(吉祥寺経由でマージョリー女史に尋ねるか、それとも思い切って師

匠に窺うべきか)

それぞれに一長一短だと思えた。

女史に聞いても判らない可能性があるのに、リアクションを起こして悟られてしまう可能性。

師匠の場合は知っているだろうが、迂闊に聞くと借りを造ることに成る。

「機会はあるだろうし、何かのついでに吉祥寺に直接連絡を取るか……」

研究会の用件で会う可能性もあり、その時にさりげなく尋ねておくべきだろうか……。

この時の俺は、事態の急変を知ること無く悠長な考えに浸っていたのである。

●光のグレンデル

三学期も順調に過ぎて行く中、にわかに騒がしくなり始めた。

驚くべきことにアンチャツダブルで知られる四葉の近辺で、だ。

「……津久葉で不審火？ 新発田では何も無いんですね？ 了解しました」

「夕歌さんは大丈夫でしょうか、お兄様……」

深雪の髪を撫でながら俺は静かに頷いた。

「幸いにも発見が早かったので問題無いということだ。しかし……名前を出したばかりにこの有様では、文句を言う年寄りも出て来るだろうな」

「登録と同時にナンバーズ入りしたやつかみなのでしょうか？」

『紅世の徒』がらみや、その他の問題で四葉家の権威が落ちて居たこともあり、幾つかの分家を公表。

公表した中で黒羽家はただの分家、新発田家は六塚家の推薦で四葉とは無関係と言う立ち位置ながら百家入り。

その両家に対して、津久葉家は一足飛びに師補二十八家、ナンバーズ入り。

不気味さによる陰の威圧力・秘匿性は薄れたが、既に陰の戦力が損なわれている状態なのでそれほど問題ではない。

陰の業務は他の分家に任せられた事もあり、相対的に四葉家の権勢は大きく取り戻したと言っても良いだろう（もつとも七草家も一花家を推薦したりと、同様の事をしているが）。

「改良版の『誓約』^{オース}は魔法師からも一般層からも好評だったし、狙っているとしたら困らるうな」

互いの承諾が必要なものの、魔法を制限できる魔法『誓約』の使い手として津久葉家はデビューを果たした。

ナンバーズ入りはこの魔法あつてのものであり、その性質上はテロの対象にするよりも生かしておいた方が良さだろう。

むしろ黒羽家を襲う前に、名前を上げた津久葉家の周囲で騒動を起こしたと言う方がありえる話だ。

「亜矢子達には警戒を命じたそうだ。臭わせているだけで公表こそして居ないが、念の為に俺達にも注意する様にと」

「承知しました御兄様。ですが……せつかくの穏当に決まりましたのに騒がしくなるのは残念ですね」

分家の公表と同時に四葉内部では、深雪の次期当主指名が確定した。そのことも誕生日を迎えると共に公表される予定だ。

争うかと思われた他の分家も、公表によって利益があるからか、それとも現当主の意向か特に反発は無い。

深雪からすれば肩の荷が下りたばかりなので、残念そうではあつた。

「もし四葉の実行部隊として黒羽家を襲う気なら、俺たちは大丈夫さ。亜矢子達も判っている分だけ手勢を潜ませや易いしな」

求められた時だけ立ち会い、他者の魔法を制限する津久葉家。そして魔法式やCADを製作する俺は、狙う対象としては優先度が

低い筈だ。
社会的地位とそれに付随する警備システムの都合もあり、無理して狙うのはリスクが高いと言える。

その意味では四葉の警備担当に振り変え……実行部隊として名前を公表した黒羽家の方が狙い易いとすら言える。

戦力は既に計算して居るだろうし、単純にぶつかる相手として認識

している可能性があるからだ。

(とはいえ長引くようなら、いつそ俺が単独行動しているように見せた方がいいかもしれんな)

他者の眼が無ければ、俺の方はむしろ襲って欲しいレベルだった。再生の魔法で万が一の状態を脱出出来る分だけ、亜矢子や文弥を襲われるよりは気分が楽だ。

強力な魔法式も術式解体で対抗できるし……場合によっては雲散霧消で一気に始末する事もできる。

(もつとも深雪に言った通りの推測であつていたら、俺を襲う優先度は低い筈だ。やはり黒羽家に任せるしかないのか……)

この時、俺はとも見当外れの事を考えて居た。

四葉家に恨みを持つ者が、その縁者を狙って力を削ぎに掛つている。

そんな思いこみが、真実から目をそむけさせていたのだ。

奴らが狙っているのは、あの魔法に関することだと言うのに……。

『ミスターシルバー……司波達也だな?』

ある日の帰り道、不思議と人通りが薄れた時。

潜み襲い来る巨人グレンデルがそこに居た。まるで最初からそこに居たかのように。

ただしその巨体は光輝いており、不審者というよりは何かの出し物のようでもあった。

造り物めいたすがたが、いまにも掴みかかろうと腕を伸ばして来る。

「ブロッケンの巨人は影を使った魔法式だというが、元にして居るのは光かな。しかし人払いの結界をこんな場所で組み合わせるとは迂闊だった」

『一目で見破るとは流石だな。降伏しろ、悪い様にはせん』

人目が気に成るならば、一般人のガードマンが気に成るならば遠避ければ良い。

まさか大通りで襲ってくるとは思わなかったので、奇襲としては成功しているのだろう。

『答えはいかに?』

「断る。降伏しろと言われて大人しく従う訳にもいくまい!」

光を媒介にした化生体の腕から逃れる為、フラッシュキャストで覚えている跳躍の魔法式を行使する。

咄嗟に距離を開けながら、鞆からシルバーホーンを取り出し始めた。

ただの営利誘拐ならば様子を見るのも手だが、『降伏』と言うならば軍関係と思われたからだ。

何の情報も寄せとせよと言うのかしらないが、大人しくできるはずもあるまい。

(さて、測らずともこちらを狙って来てくれたが……。軍関係も含めるとアテが多過ぎるな。ひとまず連中のバックアップを焙りだすか) 飛行魔法を始めとして、有益な情報は機密に関わらず多い。

更に新しい魔法の開発をも考慮すれば、可能性は一つ二つではすまないだろう。

術式解散で化生体、そして密かに伸ばして居た姿なき腕をも砕きながら跳躍を繰り返してその場を離れることにした。

そうすることで追ってくる者……。敵の捜査網を確かめようとしたのだ。

だがしかし、思いもよらぬ魔法がその試みを打ち砕く。

『そうか。では腕の一本も覚悟してもらおう』

「忠告はしたぞ? 悪く思うな」

声が二重にしたかと思うと、周囲が朱に染まっていく。

外周では色を無くして灰色に染まり、その領域は藍色で縁どられている。

「封絶だ?!」

今では使う者も少なくなった自在式が、俺と世界を隔絶した。

勝利ではなく、種を捲くために

●グレンデルの襲撃

巨人の名前を冠する魔法式は幾つかある。

面白いこと同じ術式が東西を跨ぐモノもあり、名前だけ違っていたりする。

とはいえ魔法を成立させるに有効な方法は数少ないので、それも仕方無い事なのかもしれない。

同じ発想は同じ魔法に行きつくのだ。

(物理現象への干渉・非干渉を自在に使い分ける『グレンデルの巨人』か。気配なし、しかし物理的な影響力は確かにある。厄介だな)

気が付けばそこに佇み、人をつて喰らう巨人グレンデル。

ベオウルフの物語りに登場する魔物の名前を冠した古式魔法のアレンジ。それが襲撃者の手管だった。

本来はこれを複数人で実行することにより、一人の消耗を抑えつつ威力を發揮しているものだ。

力強い拳が一切の存在感を持たずに殴り掛って来る。

魔法で造り上げて居るのだから当然だが、音は有っても気配は無い。

それでいて壁を素通りし、俺を掴もうとする時のみ影響を發揮し始める。問題なのは複数人が強調しているにしては動きにタイムラグが無いことだ。

(やはり二人での乗積魔法か。以前にモドキを見たことは有るが、アレとは比較にならない完成度だな)

乗積魔法……マルチプリケイティブ・キャストは相性の良い二人で同じ魔法式を分割して管理する方法だ。

以前に戦ったノーヘッド・ドラゴンの黄は、^{ウオン}妙な装備を付けて似たようなことをして居た。

しかしその精度やタイムラグは段違いで、未完成品というか似て非なる力と呼んで良いほど差に開きがある。

「逃げるだけか？ 反撃してくれても構わんぞ」

「ありがたい忠告だが、余計な事をしている程の余裕が無くてね」
実際には記憶した魔法を直接使用するフラッシュユキヤストによって余力を残しているが、ソレは探査の為に残さざるを得ない。

跳躍と術式解散を交互に使用して居るフリをしつつ、精霊の眼によつて周囲を丹念に調べて行つた。

(あくまで気配は一つ、しかしエイドスへの干渉は二つ。隠れて居るのか、それとも……)

可能性は幾つかあるが、判つて居ることが一つだけある。

封絶と呼ばれる魔法……自在式は、情報隠蔽を目的としたモノだ。

一定の規模までなら破壊痕跡を元の状態に戻せるが、それはあくまで二次的な物に過ぎない。外からの干渉はありえまい。

(焙り出すにしても『アレ』だと特定するにしても情報が足りんな。まずはギリギリ撃退した風を偽装しておくか)

このレベルの相手には俺の使う振動魔法などは無意味だ。

しかし牽制だと判り易く使つておけば、連中にそんなことは判らない。

本命は目晦しをかけながら使うとしよう。……まあ相手が『紅世の徒』関係者ならば遠慮は不要なのだが。

「ノッカーを起動しろ」

そして反撃する余力は『まだ』無いと知りつつ、あえてカウンターに出た。

鞆を放り捨てながら振動魔法での攻撃に特化した新方式CADを取り出し、起動用のコマンドを唱える。

この新型は構築速度に特化し距離を銃の様に調整するタイプで、俺でも十師族並の速度を叩き出せる(威力は強度はそうもいかないが)。

「おっと。自分で余裕はないと言つておいて実行するのはどうかと思うぞ。だからこうなる！」

「つち、一筋縄ではいかんか！　だが、しかし！」

隠れて居るであろう場所と、その他の候補を連続射撃。

無理やり攻撃した風を装うことで、当てずにこちらの強度は悟らせないでおく。

とはいえそれだけでは気疲れてしまうので、偽装と目眩ましを兼ねてワザと捕まった。

「実体を持たせていても所詮は魔法に過ぎん！　これならばどうだ！」

「ほう……グラム・デモリッションを全身から放てるのか。つまりさっきのは狙ったわけだ。やるな」

『油断し過ぎだ。当世の自在師が我々の時代よりも劣るとは限らん』
捕まった瞬間にサイオンを開放することで、構成中の実体を破壊する（正確には実体を造る魔法式の破壊だが）。

グレンデル（仮称）は逐次詠唱であるため効果は即座に消えず、それまで造られた実体の圧力で体が軋むが贅沢は言っていられない。

痛みを無視しながら、大きく飛びのいて距離を取った。

（もう一人はオブザーバーなのか？　しかし封絶はそんなに器用な術式では無い筈だ。今までに戦ったどの魔法師よりも巧みな幻術師か、それともアレの二択……）

これまでの戦いから来る推移論が後者だと告げて言うが、確実な答えが出る筈は無い。

ならば焦らせてフォローさせるか、目の前の奴に大怪我でも追わせ撤退させるとしよう。

だが、そのまま御帰り願う訳にはいかなかった。

せっかく現れた紅世がらみの情報源なのだ。役に立つてもらわねばならない。

「場所が特定できたところで、反撃といかせてもらおうぞ！　オン・マケイシユラヴァヤ・ソワカ！」

「ん？　この程度の力で……何つ。まさかグラム・デイスパージョンか！」

振動系魔法に前後して、間断なく撃ち込む術式解散で相手の領域防御を突破する。

本来ならば不要な連射だが、精霊の眼を隠しながら闘う為には仕方の無いことだ。

そして……もう一つ、狙いがあった。

重要さで言えば、こちらの方が傷そのものより余ほど重要だと言えるだろう。

大量のサイオンを練らなければならぬ術式解体では不可能なことを同時に実行する為だ。

「かなり研究が進んでね。数発に一発くらいはクリーンヒットできる。一発ずつデモリッションで破壊するよりは効率が良いし、……安定度を気にしなければこう言う事も可能だ！」

「うおっ!? くそ、最初からこの威力でくれば油断しなかったものを！」

魔法において威力と強度は正比例しない。

干渉力の程度が全てを分け、情報強化や領域防御を上回ることができなければ無意味なのだ。

それを突破する代わりに俺は術式解散で補った。

ゆえに威力を底上げしただけの振動系攻撃魔法を受けただけで、本気になったと勘違いしたのだろう。

「ならばこちらも本気で行かせてもらおうぞ！」

『油断は禁物だとあれほど……』

唸りを上げる手が僅かにブレ、腕が三本に分かれながらタイミングをズラすだけでなく一部は剛力で衝撃圧を発生させる。

俗に言うソニックブームを発生させて俺に襲い掛って来た。

(さすがに自在師は戦闘経験が高いな。瞬時にこちらの手の内に対抗するとは……。しかし予想通りで助かった)

術式解散でいきなり解除されない様にしつつ、同時に攻撃も行う。

そして一部は対抗魔法では排除できない様に、衝撃波など二次的な攻撃を織り交ぜて来たのだ。

それに合わせてこちらも乱射してみせつつ、一発ほど本命を紛れ込ませておいた。

あえて撃つ必要はないが、先ほどのアレを隠す為には本当に本気を出して見せる必要があるだろう。

「ギイ!? 防ぎはしたが、これほどの痛みは久しぶりに受けたな」

「くっ……。直撃はようやく一撃か」

術式解散が飛び交う中で、振動系攻撃魔法に紛れて極小規模の雲散霧消を放った。

いまらさ振動魔法を受けても殴られた程度だろうが、雲散霧消……ミスト・デイスパージョンはモノが違う。

あくまで狙ったのは細胞の一つに過ぎないが、場所によつては大きな痛みを発生させられるのだ。

当たったモノを消し去る雲散霧消は術式解散の上位互換でもある為、僅かにタイミングをズラして連続で放てば防御ごと突破できる。

情報強化と領域防衛では対抗の仕方が若干違うが、消し去るのであればこの際関係ない。サイオンを払う想子ウォールを使えたとしても、勘違いしてくれるだろう。

『下がれ。速やかな確保に失敗した以上は、元より不要な戦いだ』
(やるべきことは終わって居る。そうしてくれるとありがたいんだがな……。上手く雲散霧消『も』隠せたが何度も使って居てはいずれバレル)

できればこの辺で戦いを中断したいものだ。

なにしろこの戦いで、俺がしたいことは既に終わって居る。最初に術式解散を撃ちこんだ時に全てやり尽くした。

戦いなど、それを隠す為に必死で演技しただけのこと。

「ちっ。仕方あるまい。勝負は預けたぞ」

『だから勝負では無いと言うのに……』

燃える世界は消え去り、町に色合いが戻る。

俺としても戦う気は無いので、無言で鞆を取りに戻ることにした。

そして精霊の眼で詳細に視ると、奴の情報に俺のサイオンが混じり込んでいるのが確かに確認できた。

●そして仮面の鬼と出逢う

封絶と時間を前後させて、人払いの結果も消え去る。

一昔前の様に電車や大量の車両でもあれば別なのだろうが、今ではキャビネットに置き換わって居るのでそれほど違和感がない

人々が少しずつ増えて行き、やがて大勢の……。

雑踏が蘇る中で俺は強い視線に気が付いた。

(誰だ？ 封絶に入れなかった……いや、このタイミングということ
は気が付かなかつたのだとは思うが)

先ほど姿を見せなかつた方の相手とは最初から思わなかつた。

魔法を使つてこちらを監視しているようだが、エイドスを経由する
情報の有り方が違う。

もつと強いが精度が荒い。そんなイメージの相手だつた。

(連戦したいとは思わんが、少し誘つてみるか)

今は人が入り乱れて居るから色々と判り難いが、場合によつては俺
が相手では無い可能性もある。

そこで人毛の無い方向に歩きつつ、先ほどの情報を忘れない程度の
精度で精霊の眼を使つて見た。

(面白い尾行の仕方をするな。ストレートに真後ろで有る筈が無いが
……)

その足取りは特殊で、予想よりも斜めに俺の動きを追跡して居る。

そいつ独自の動きなのかもしれないが、ストレートに追つて来ない
のだ。

さっきの奴に付けたトレーサーに意識を振り分けて居る為、詳細な
調査が出来ないのがもどかしい。

いつもならば、どんな魔法式を使っているかそれなりに判るのだ
が。

(となると距離を詰めるしても逃げるにしても、場所とルートを選ば
ないとな。むしろ……すれ違つて様子を確認するくらいの方が良い
か)

今の消耗度では心もとない。

連戦するにしても相手の術式傾向が判らず、本命の相手の情報を抱
えておきたい状況だ。

ここは無理をせず顔見せだけでもらう方が良いだろう。

瞬時に方法を幾つか考案し、それぞれにシミュレートする。

一つ目は丁度良い地形に誘導し、走つてすれ違つて見せる。

二つ目は逆に、相手が独特に行う移動を逆手にとつて移動タイミン
グを合わせる。

三つ目は魔法行使の痕跡は残るが（封絶内の情報は残らないのでこれが初）、跳躍の魔法を使つて移動する。

（緊急性を感じない以上は魔法を使うべきじゃない。もし使うとしたら咄嗟の反撃を受けた時だ。ならば……）

四つ目以降は上記の方法を組み合わせてアレンジする。

今回は一と二の複合、記憶にある道筋と照合し相手が取べきルートを逆算。

可能な限り交差時間が少なくなるタイミングを見計らい、他に協力が居ても袋小路に追い詰められないコース取りを行う。

そして相手が素早く横切ろうとするのに合わせて、俺もそちら側へ走り始める！

「えっ……ええっ!」

「何？ なんだアレは……」

奇妙な物を見た。

俺の真後ろに当たるべき位置に歩く、鬼の様な仮面の姿。

そして、何も無い場所へ上がる眩きと……僅かに遅れて聞こえる『ええ!』という音。

「伝声の魔法……。ということは幻覚か!」

「きやうつ!? グラム・デモリッションですつて!? あーもう!」

鞆の中のシルバーホーンに意識を這わせ、機能の一部だけ使用しながら術式解体用にサイオンを練り上げる。

場所は二つ、一つは仮面に向けて、もう一つは生体情報のある場所に向けて放った。

相手の魔法式に合わせる術式解散と違って、術式解体は万能であるぶんだけチャージが遅い。

練り上げる時間が掛り、仮面の幻影を投射する新しい魔法式を打ち砕いたものの、本体の方は距離を取られてしまった。

「まさか『パレード』を見抜かれるなんて……さすがね」

『即時撤退を。ミスターシルバーは確認段階で手を出して良い相手ではありません』

姿を見せたのは場違いなほど明るい服装を着た金髪の少女だった。

一昔前に流行った帽子で顔を隠しながら、バックステップで距離を取る。

そして姿隠しの魔法を使用し直し、町の一角に姿を消した。

「なかなかどうして不意を撃たれたのに動きが早い。それにあの形状は骨伝導無線機か」

おそらくは某かの訓練を受けたプロだろう。

少女の姿に見えたが、濃密な訓練が必要な事を考えれば見た目通りの学生かどうかは微妙な所だ。

「あれは……いや、まさかな」

本人であれば次に会った時にでも判るだろう。

そう思っただけは、今度こそ帰宅することにした。

錯綜する情報

●USNAの影

考えるべきことは二つ。

光のグレンデルとも言うべき魔法式を行使した襲撃者との戦い。
その動向を探ろうとしていた、仮面の幻影を使う少女。

(今は無茶をする訳にはいかん。探るなら後者だな)

本当のことを言えば『紅世』の関係者であろう襲撃者を、精霊の眼を全開にして探りたい所ではある。しかしながら相手が追跡者対策で移動し続けている可能性を考慮すると、今夜の段階で探るのは得策ではない。

更に精霊の眼による探査を全開にするためには、深雪を守るために振り分けて居るリソースを割かねばならない。少なくとも新たな襲撃の可能性がある今は避けるべきだ。

そこで撃ちこんだサイオン情報を整理して負担を軽くしつつ、帰宅してから秘匿回線を開く。

相手は藤林・響子、電子戦が得意な魔法師でありエレクトン・ソーサリスの異名を取る。そして……様々な背景を持つ女性であった。

『その時間に魔法使用の痕跡はないわ。その前に在ったと言う人払いの結界だけね』

『それで十分に相手を絞り込めます、助かりました』

情報隠蔽用の封絶はともかく、幻影・伝声・姿隠しの魔法までもが使われたことに成って居なかつた。第三者がその痕跡を消した……それも無事林中尉(昇進済み)と同じくらいの腕前が必要になって来る。

と成れば相手の能力と規模が、相当な物だと推測できた。

骨伝導無線機を使っていたことから、プロ中のプロというべき傭兵か、軍隊そのものである可能性が高いだろう。

ならば残る情報は少女が使用した魔法式。

幸いにも近いモノを見たことがある。……劉・雲徳が九島老師から盗み出したと言う秘匿術だ。

存在の隠匿までは完全にコピーできていないが、あの老人はフェイク情報として利用する事で補ってた……。まあ同系統と評して間違いは無いだろう。

「後二つお聞きしたいのですが、まずは九の家に自分の所在を消し、代わりに偽りの姿を組みあげる魔法は存在しますか？ それも本気になつたら本体を探れない様な」

『……ええ。詳しく他言はできないけど、存在することだけは教えても問題無いわ』

最初に遠距離から探知した生体情報の周辺に対し、術式解体を使用した解除は使用が出来た。

その後改めて術式解散で連射しようとする、途端に新しい幻影の方に認識とアドレスが向いてしまうのだ。おそらくは存在の投射その物も工夫して居るのだろう。

最初に成功したのは魔法を直接確認しなかったから……。

本来は先にソレを見せることで、無系統の精神干渉か何かでエイドスへの認識そのものを螺子曲げるのだろう。逆に俺が最初に狙えたのは幻覚を見ずに正対状を探知したこと、そして場所その物に撃ち込んだからだ。

『それで、もう一つの質問は何かしら？』

「アンジェリーナ・クドウ・シールズのファッションセンスについてです」

「御兄様……。それはどういう御要件なのでしょう？ 御考えを御教えになつて下さると幸いなのですが」

可能性の一つを確認しようと言ったところ、何故か深雪が奇妙な状態に成った。

普段は横入りなどしないのに、今回に限っては同じ言葉の中に御を何度も使っている。

『質問の意図が見えないのだけれど……。さっきの話題の続きで良いのよね？』

「当然です。仮面の幻覚はともかく本体の方は深雪と同じレベルの魔法師で、金髪の女性と窺えました。仮にシールズ女史であるならば、

九島の家を出てから適当に買ったのかと思ひまして」

「……そういう事ですか。失礼いたしました、御兄様」

深雪の可愛らしい笑顔は相変わらずだが、不思議と部屋の温度が上がった様な気がする。

おそらくは無意識に下げて居た室温を、元に戻したのだろう。

そういった深雪の微笑ましい所は置いておいて、アンジェリーナである可能性は高い。

能力を制限して居たので精霊の眼で軽く見た程度だが、近似値を持ち……先ほど言った様に深雪レベルの魔法師など中々居ないからだ。『生憎とそこまで留学生活に干渉して居ないのだけれど、後で履歴を追って見るわ』

「可能な範囲で構いません。もしそうなら、気を付けておこうと言うレベルです」

タイミング的に封絶と人払いが解けた後なので、可能性としては俺では無く……グレンデルの方を狙っているのかもしれない。

新システム用のライブラリ履歴を合わせて考えると、追っているのは紅世関連の相手だろうか？

（まあ、そう思わせるだけのブラフの可能性もあるが……。手を組めれば良いんだがな）

「御兄様。いま、何を考えられましたのでしょうか？」

俺の事を心配してくれる深雪には悪いが、戦力は多い方が良い。

帰りに思考誘導を掛けて、こちらを利用しようとする場合でもだ。

考え方としては二つの構図が考えられる。

一つ目はグレンデルが『紅世の徒』でターゲットは俺、仮面の鬼はソレを追い掛けて居る。

二つ目はグレンデルはフレームヘイズで、俺が技術者を狙う『紅世の徒』と疑われている。仮面の鬼は強引過ぎるフレームヘイズへ制限を掛けたい者。

「御兄さま。もし御気になさるのでしたら直接尋ねてみるのはいかがでしょうか？」

「現段階でそこまでの気は無いよ。それと、前に言ったかもしれないが、『当て物』のゴツは尻尾をつかんだ段階では動か無いことだ」
初動で迂闊に触れると、例え確かな物的証拠があっても隠してしまうものだ。

だが逆に幾つもの証拠を揃えて虚言を放つ隙を与えなければ、仮に怪しげな状況証拠を幾つか並べただけでも肯定してしまうものだ。
……まして、相手にソレを隠す気が無ければ。

「それに、どこの組織に所属し居るかは見当が付いているからね」
「組織……ですか？　ということやはりUSNAの？」

ここまで言えば深雪にも理解できたようだ。

シールズ女史は深雪に匹敵するほどの上級魔法師だが、USNAが放っておくだろうか？

法律と自由意志の問題で軍に加入させられないにしても、少なくとも強い要請で動かせる程度の関係で居る筈。スターズとは言わないまでも、俺と魔装大隊に近い間柄であると考えの方が自然だ。

「そもそも重要な戦力として期待されている上位の魔法師が、留学とはいえ国外に出ている時点でおかしい。その辺を考慮するならば……何かしらの理由があると思うべきだ」

「それが御兄様……もしくは襲撃者にあると」

何らかの任務を与えられ、それを拒めなかったというならば話が成立する。

軍人ないし協力関係にある民間人だとして、それを任務として派遣する形ならば国外に留学するというのも妙な話ではない。

そして重要になって来るのが、クドウⅡ九島ということ。

その血筋を引いている以上、二校に留学するというのも不自然さが消えるように見えるだろう。

命令に対して不本意だとしても、日本の有力氏族という血筋的な事を槍玉にあげられれば領かぎるを得ない。

「ただシールズ女史は潜入工作の担当では無いのだろう。あくまで戦力であるか、囷として期待されていると言う方が理にかなっている」
「それで服装の点を質問として挙げられたのですね」

困であるならば奇妙な格好をして居ても留める理由は無い。

また、どんな格好をして居てもあの幻影の魔法で偽装出来るのであれば、駆け付けることも可能だから戦力としては十分だ。

こうして準備を整えていたのだが、事態は思わぬ速度で動き始めた。

●黄金の来訪者

俺はシルバー社をメインに時折にブティックというサイクルで顔を出して居る。

あちらは装備担当、それも女子中心なので門外漢とは言わずともそれほど用事は無いからだ。

だからこの出逢いは、運命でなければ意図しての事であるに違いない。

「いらっしやいませ、CADの御用命ですか？」

「はい。せっかく日本に来たのですし可愛らしいモノを……と思いまして」

藤林中尉の刺し金だろうか？

アンジェリーナ・クドウ・シールズが俺の居る時にやって来た。

話を繕っているような……慣れて無い言い回しだったので、やはり狙ってのことだろう。

「当店はコンセプトに見合った商品を納入させていただきますが、どのようなスタイルを御好みでしょうか？ 速度特化にマルチキヤスト用、サイオン消費を抑える為の物などございますが」

「戦闘を目的として居ませんので、もっと軽装を目的としたモノで構いません」

俺が用意したコンセプトはどれも戦闘重視のものだ。

とはいえ九校戦などメジャーな魔法競技でも重視される範囲ではある。そこをあえて戦闘用と断定したのは……。

(好意的に見るならば彼女の所属する部隊が、こちらと戦闘する気が無いと説明させに来たと言うところかな。悪く見るならば牽制に来たともとれるが)

だが牽制したいだけならば適当に文章なり、仮面の方で脅す手もあ

るだろう。

ここは『本当か』は別にして、こちらと戦う意思は無いと思考誘導に来たと見るべきかもしれない。

(戦闘する気が無いと言う意思表示として、ではどうする？ 乗って見るかそれとも誤魔化すか)

踏み込むと言う意味では、シールズ女史の方が踏み込んで居る。

こちらの勢力内に首を突っ込んで、更に陣地にまでやって来ている。

身一つだと甘く見る気は無いが、バックアップが到着するまで守り切る程度の用意しかして居ないだろう。

(あまり様子見をしても本意が窺えないしな。……こいつは本命と言う訳じゃない。イザとなったらお互いに切り捨て合うレベルの関係を築くべきか?)

仮にこちらの手の内を探るために、仮の関係を構築するのが目的としよう。

それならば最初から、視られて困る手を見せなければ良いだけの話だ。USNAが黒幕だったとして俺を浚ってまで何とかしたいことがあるとも思えない。

……もちろん、俺を戦略魔法の使い手と思って居なければの話だ。

だがカモフラージュは幾重にも掛けて居るし、見付け易い方の関与はCADの調整に関わって居るとミスリードして居る。ならば切り捨て可能なCADエンジンアゴごときを『軍ならば』誘拐など考えないだろう。

「そうですね。昔の戦闘系魔法師は宝具という自分専用の術具を持っていたそうです。戦闘用ならばそちらを目指す方が良いでしょうし、ファッシュョン寄りにしてみましようか」

「昔の戦闘系魔法師というとフレームヘイズ？ ええと……前に聞いたことがあって」

俺が踏み込んで確認すると、案の定、直球で答えが返って来た。

僅かなタイムラグでぼかしたのは急ぎ過ぎだと釘でも刺されたのだろう。この様子ではバックアップ・チームの胃が思いやられる。

「正確には自在師という戦闘系魔法師の中で、最右翼がフレイルムヘイズだそうですね。まあ私には関係ない話ですが」

「最右翼……。そう、そうですね。こんな店を構えてるしバリバリの戦闘系には見えないもの」

相手の知っている情報にからめて、こちらの言いたいことを織り交ぜておく。

フレイルムヘイズの一般情報等は友人・知人含めても知られて困るモノでもないし、俺が直接のフレイルムヘイズでないというのは嘘でもない。

以前にマージョリー女史に言われてあせったが、広義の範囲で一緒に括られてしまうだけで、俺が戦闘系魔法師でないというのは確かなのだ。

「ミスター・シルバーはそういった事に詳しいの？」

「以前に社の者が『紅世の徒』に害されましたね。フレイルムヘイズが居てくれたらと思っただ事は有ります」

これは知られて困る情報でもないので包み隠さず話しておく。

俺は被害者であり紅世の徒でもなければ、それを追うフレイルムヘイズでもないのだ。

「身内の人が……。不躰な事を聞いてしまっただごめんなさい。ミスター・シルバー」

「達也か司波で構いませんよ。それに身内というほどに親しかった訳でもありませんし」

俺にとつての身内は深雪と駄目な方の御袋、そして黒羽姉妹くらいだ。

強いて言うならばレオやエリカ達……。長く手を組んで来た牛山さんまでだろう。アンドウという男は区切りと成るべき人物ではあっても、親しくは無かった。

同じことを深雪にされたらと思うとはらわたが煮えくり返りそうだが、そうはならないので間違っていない筈だ。

「それなら私のこともアンジェリーナと呼んでください。日本のことも色々知りたいと思つてますので、良かったら教えてくださると幸い

です」

「ええ、よろこんで。とりあえずは採寸の為に誰か女子を呼びましようか……」

こうして俺はシールズ女史……アンジェリーナと敵対しないようなので、簡単な情報交換を行う間柄となった。

勿論そう思う様に誘導されている可能性が高く、信用できる相手と思っっている訳ではない。

だが推測を裏付けるようなやり取りが窺えたことで、それなりに満足できる結果だったと言えるだろう。

もし俺が失敗したとしたら……。

アンジェリーナ陣営の情報力の高い部分と低い部分、そして襲撃者の情報力の高低を誤解して居たことだ。

アンジェリーナは当然の様に知って居ることが、襲撃者にはそうでないこと。襲撃者は当然知って居ることをアンジェリーナが知らないことに気が付かなかった。

それが予期せぬ問題を引き起こそうとは、思いもせずに……。

渦巻く螺旋

●ダブルクロス

side-A

司波・達也と分かれた後、アンジェリーナ・クドウ・シールズは日本における拠点の一つを訪れて居た。

その一室はUSANのエージェントが出入りにしており、脱走兵を追う為に情報を集めて居る。

二校に居る間は九島家の厄介になっっているアンジェリーナも、関東方面ではこちらで寝泊まりしていた。

「おかえりなさい、リーナ。何か判りましたか？」

「確かな情報はもらえたけど、発展性と言う意味では微妙ね。流石は四葉と言うべきか、こちらの情報をより詳しくした程度の手掛かりはもらえたわ」

出迎えたシルヴィア・マーキュリー・ファーストの言葉に、アンジェリーナは肩をすくめた。

「戦闘系魔法師……自在師たちの分類、復讐者フレイムヘイズと『紅世の徒』。その殆どは十数年前の決戦を境に姿を消して行方不明。今残っているのは何らかの『使命』がある者たちと推測される……ですか」

達也は確かに知っている情報を渡したが……。

追跡部隊が手に入れているであろう情報を推測し、その補強をしたに過ぎない。

もう少し知って居そうな雰囲気ではあったが、躊躇なく公開したモノには意図的な選択がされていた。

つまりは四葉家にスターズの動向が掴まれているということであり、彼女達が手に入れた情報は正しいと保障する程度にしか進展して居ないのだ。

「凶悪な魔法犯罪者……である『紅世の徒』が本当に消えたか、残存部隊が監視して居るのでしょね」

「そんなストーリーを時代劇で見たような気がするわね。ええと、漢

たちの忠臣蔵だったか女達の白虎隊だったか……」

フレイムヘイズと『紅世の徒』とを特定しないアンジェリーナの言葉を、シルヴィアはフレイムヘイズの事と断定した。

なぜならば彼女達が追っている脱走者は、フレイムヘイズ側だと推測できているからだ。

もつともそれは脱走者であるアルフレッド・フォーマルハウトが口にした『使命』という言葉であり、あるいは彼女達の追跡に待ったをかけようとする一部政治家たちの態度から推測できたに過ぎないのだが。

「あの……。フレイムヘイズが犯罪者を追っているのであれば、和解は難しいのでしょうか？　せめて出頭すれば……」

「それは無理よ。本人達の倫理観はどうあれ、軍を脱走したことは許されることでは無いわ」

情報面でバックアップしているミカエラ・ホンゴウがおずおずと口を挟むが、アンジェリーナはその提案を切って捨てた。

もちろん彼女とて元同僚を殺したいわけではないが、軍規の手前そういう訳にも行かない。

それに自分達の目的の為に軍さえ抜けて行動しているということには、必要なら他の……。他国の力を借りる様な取引もあり得るのだ。

これがまだ日本やドイツのような同盟国であればスターズの恥を晒すだけで済むが、新ソビエト連邦や大亜連合であれば大変なことになるだろう。

単純に『使命』と言えば聞こえが良いが、必要ならば何でもやるのはいつの時代も正義を名乗る者の方が多いのである。

「も、申し訳ありません……」

「謝らなくても良いのよ。それに提案する姿勢自体は否定しないわ。ただ私に与えられた権限では無理だし、目的が本国の役に立つことだったら……。大佐に掛け合うくらいはするけど」

「せめて使命とやらの内容だけでも判明すれば良いんですけどね」

謝るミカエラにリーナは手を振って押し留めた。

別に苛めたい訳ではないし……。支援要員である彼女にそこまでは

割り切れないであろうことまでは共感出来るのだ。

ただスターズ総隊長であるアンジェリーナにとっては、受けた命令は絶対だと言うことである。

結果としてUSNAの役に立つことであれば、実行まで目こぼしをして罪一等を減じる事も……考慮できなくはないがそこまで都合良くはいかないだろう。

「……っ。他に何か判らなかつたんですか？」

「そうねえ。フレームヘイズが使う外界宿アウトローという施設には遮断結界があるらしいから、以前にミスター・シルバーが探そうとした時も無理だったと聞いたわ」

気まずい話題を変えようとしたシルヴィアにアンジェリーナが新しい情報を披露する。

これもまたスターズが推測こそしているが、把握しきつてはしない情報だった。

「ミスター・シルバーが外界宿アウトローを？ いえ……それでサイオン・レーダーが効かなかつたのですね」

「そういうことね。殆ど進展はしなかつたけど簡単に設置できるモノじゃないし、その拠点は昔からある場所だろうからある程度は絞れると思うわ」

USNAが日本よりも優れている技術の一つが、サイオンのパターンを追うレーダーだ。

考えて見れば当たり前なのだが、それらの技術を利用して探せなかつた時点で遮断能力があるのは自明の理だ。

とはいえ狭くとも個人能力で自在に作れるのか、大きな施設にしか設営できない設備なのかで探し方が変わってくる。

達也のくれた知識はその辺りを補強してくれたので、施設を特定し易く放った。

「九島家の他に七草家も協力を申し出てくれてるし、今回の情報を踏まえて見直してみよう」

USNAの工作が日本に対するものではなく、むしろテロリストを捉える為のモノといえる。

そのことを明確にしてナンバーズの中でも長老格である九の家に協力を要請して居る事もあり、流れはスムーズにできていた。

表の魔法師に浅く広く根を張る七草家は軍関係のコネも厚い。時間を掛ければ公式的な場所は把握出来るだろう。

「まずは古い寺社や明治に建てられたビルなどをまず当たってみるわ。それで駄目なら近代の施設も探さないといけないけど」

「……了解しました」

こうして追跡隊は外界宿アウトローを追うことに成った。

アンジェリーナは京都に戻って九島に頭を下げることにして、シルヴィアがその間に交渉担当と共に七草家へ折衝に行くということになる。

そして……ミカエラは、彼女達が慌ただしく動き出してから、折りを見て外出して行つた。

●暗躍

アンジェリーナは京都に戻る便を手配しようと、日本に来てから世話に成っている青年を呼び出した。

連絡を入れてツーコールもしないうちに、相手が電話に出る。

『すみません、周チヨウさん。京都市の便をお願いしますか？ 今から手に入るならば、陸路でも空でも構いません』

「早速、手配しておきます。それと……差し支えなければ老師にもお伝えしておきましょうか？」

アンジェリーナは察しの良い青年に対し、思わず苦笑する他なかった。

連絡だけ入れるつもりだったので画像を送って居ないが、繋げて入れば醜態をさらしたかもしれない。

『ええ、その件も含めてお願いしますね』

「承知いたしました。お任せください」

必要なやり取りを終えると、アンジェリーナは通信を打ち切った。

その向こう側で、彼女が知りたいことの多くが話し合われているとも知らずに。

「徒督。お嬢さんに教えて差し上げなくてもよろしかったんですかい

？ 御宅にネズミが入り込んで居ると」

「ああ、それはですね。不正と言うものは、取り締まるよりも見逃した方が利益に成るからです」

ニヤニヤと嘲笑う黄ウオンの言葉に、周チヨウは多愛なげに応えた。

そして部屋の隅に視線を巡らせ中空に声を掛ける。

「朱旋は貴方の『落頭民』を使ってご挨拶してあげてください。……ただしネズミを殺してしまわない様にお願ひしますね」

「是」

部屋の隅で待機していた生首の幻影が周の指示で動き始める。

その指示を聞いた黄ウオンは、納得が行ったのか笑みを深くした。

何を目論んで居るか、理解できたからだ。

USNAの精鋭たるスターズが、脱走兵を補足しきれないと言うのは奇妙なことだ。

だが単純なフアクターを1つ追加する事で、偶然は必然に置き換わる。

「みんなに早く伝えないと……」

それは単純な図式だった。

軍部に所属するフレームヘイズが全員行動を起こしている訳ではない。

彼女……ミカエラ・ホンゴウの様に戦闘力が高くない者は、他の立場から協力して居たのだ。

ミカエラのアンダーカバーはマキシミアン・デバイズの職員であり、表向きは追跡部隊に協力しながら、情報を伝達していたのだ。

『待ちなさい、ミア。行く手に誰かが居るぞ』

「敵っ、それとも追手!?!」

契約した『紅世の王』が発した警告に、ミカエラは僅かに遅れて反応した。

競歩といえる足早の歩行から、転がる様に近くの壁の後ろにジャンプする。

実戦にそれほど参加して居ない為に遅れることに成ったが、なんと

かギリギリのところまで回避できたようだ。

遠目に頭がボウつと空に浮かんでいるのが見えたかと思うと、何か突き刺さったのが判る。

「ごめんなさい赤蟻さん。貴方の力が無ければ今で倒されてた」

『君と契約して居なければ使えない能力だ。構わないさ。それよりも、襲撃者を何とかしよう』

ミカエラの服には鋭い針が突き刺さっており、それは咄嗟に避けたことで肩口に留まって居た。

避けなければ急所に当たっていただろうし、服の中に造り出した赤い力場を持つてしても防げなかったかもしれない。

『正体が判明すると後の生活に影響を与える。外装を展開して防備と偽装に努めるとしよう』

「うん。それが一番……かな。変身するね」

ミカエラは力場を広げると、その上から物理的なフィールドと魔法的なフィールドを二重展開した。

一見すると白い仮面と赤いラメラアーマーを着用するような分厚い障壁、そして更にその上からフードを被った様な情報偽装を纏って走り始める。

その姿はまさしく赤い蟻で高い防御性を窺わせた。

彼女の動きを留めたのは、針の射撃ではなく、それを補足する生首の幻影だった。

観測射撃で針を撃ち込んでも防壁で止められると理解して、直接に生体エネルギーを奪いに来たのだ。

最初に観測をしていた一つ、次に増援として幾つか。

『何処へ行く気だ?』

『ぬっ!? この反応はまさか……』

「うそっ……燐子!? あれだけ探しても見つからなかったのに」

落頭民と呼ばれる魔法式、その正体をミカエラ達は一目で見抜いた。

それは彼女達フレイムヘイズが、長らく闘ってきた『敵』が使用した下僕であり兵器の名前である。

『……やはりお前は知り過ぎたようだな』

「でもなんでこんな急に……まさか着けられていた？」

『その可能性は否定できんが……。断定するには情報が少ない。ひとまずは脱出と合流を勧める』

燐子は所詮下僕だが、それでも戦闘タイプモノは侮れない。

また遠隔距離から攻撃を繰り返すモノは、やはり油断できない相手だ。

ことにミカエラの戦闘力が高くないことから、彼女の保護者でもある王はひとまずの撤退を促した。

「う……悔しいけどそれしかないかな。情報交換に誰か向かってる筈だから、一旦逃げるね」

『逃がさん。お前達を殲滅するのに、余計な情報は与える訳にはいかん』

襲い来る生首の牙を交わして、ミカエラは蟻の様に小さく体を倒して走り抜けた。

そして今度は体を縮こまらせてから、バッタの様に跳躍する。遠く遠く、一度のジャンプで長距離移動。

着地と同時に、その反動を次なるエネルギーに換えて、もう一度ジャンプした。

『……任務完了』

生首はその様子を見て薄く笑うと、空に融けて痕跡ごと消え失せた。

彼が追い込んだ獲物を求めて、人の形をした獣が蠢き始める。

「こ、ここまで逃げれば大丈夫かな。赤蟻さん」

『紅世の徒相手に油断はするな。帰還して居る時の様に経路を変えて合流する』

何度目かの跳躍を終えてミカエラは息を付いた。

周囲に誰も居ない事を確認すると、追跡者が居る事を前提に何度も場所を変えてから合流地点に向かう。

そしてアンジェリーナが四葉家から仕入れた情報と、その日に限って襲撃を受けた事。

……。
何年も見たことの無かった燐子に襲われたことを報告する為に

流れ行くさなかに

●とんだ春の季節

登校して周囲を確認すると幹比古や美月の姿が見えない。更によれば幹比古の方は家の用事で顔を出さない事もあったが、二人一緒に数日続けてというのは珍しい。

これだけならば疑問に思うだけだが、フレイムヘイズのことで聞く事があるかもしれないので、少し気に成ったので尋ねてみることにした。

「幹比古と美月はどうしたんだ？」

「え……今更？ 二人の仲が急接近したのは達也くんだって知ってるじゃない」

家同士の縁で付き合いの多いエリカに聞いてみると返って怪訝な顔をされた。

「喉に溜まった血を吸い出した事と人工呼吸の話か？ あんなキツカケを踏まえずとも、十分に思いあつて居たと思うんだが」

「そうは言っても中々踏み切れ無いものよ。……まあ本人以外の所で急激に進展しちゃったけどね」

つまらなさそうな顔に切り替わると、右から左に掌を動かした。

その様子で俺の知らぬ場所で何かしらの大きな変化があつた事は推測出来る。

おそらくは周囲の情勢に流される形で、一気に物事が進んだのだ。

「俺が忙しい間に何かあつたのか？ プライベートの問題でなければ掻い摘んで頼む」

「達也くんなら二人も気にしないと思うけど……。ま、どっちみち『吉田家』の公式行事になっちゃってるし調べれば判るから、教えても良いわよね」

「どうやら事は思ったよりも複雑に、そして馬鹿馬鹿しい事に成っているらしい。」

「色々と危険な目にあわせた事もあつてミキが責任を取るとか、正式に御付き合い……ってところまでは良かったのよね」

エリカは恋愛事情の流れを眺めるのは好きな様だが、周囲が操作するのは無粋だと感じるクチのようだ。

茶々を入れて流れを加速させるのとどこが違うのか判らないが、本人なりのこだわりがあるのだろう。

「察するに吉田家の方で待ったが掛ったと？」

「最初はね。だけど途中で何処かの誰かが、美月の『眼』の事を告げ口しちやっただみたいなのよ。そしたら手の平クルーだっけさ」

エリカは掌をコロンと裏返して上向きにすると、ついて行けないとばかりに肩をすくめた。

しかしなんとなく、その先は推測出来る様な気がする。

それはかつて幹比古に聞いたことでもあるからだ。

「なるほどな。水晶眼や龍眼の持ち主ならば幹比古の相手として相應しい。……いや、エリカが不満そうなところを見えると、『吉田家の嫁』として相應しいということになったんじゃないか？」

「達也くんって恋愛感情はサツパリなのに、そういうところは妙に察しが良いのね」

エリカは肯定も否定もしなかった。

要するに細部こそ違えど、そういう流れが出来てしまっているのだろう。

霊子放射光過敏症……水晶眼や龍眼、名前は色々あるが……。

SBを見ることのできる強力な眼、それを古式魔法の家では何より尊ぶのだと言う。

「美月を公私ともパートナーにした幹比古の方が、当主として相應しい。……そんな話に成ってるんじゃないか？」

「もつと馬鹿馬鹿しい話よ。ミキと付き合う気持ちがあれば強いモノではないなら、御兄さんの方と付き合っても良いだろう。いや、素質的に相性の良い相手なら他にも居るって」

確かにSBをベースにするのであれば、術のパートナーとしても最適だ。

遺伝子的に後代に続き易いモノでもないが、あれだけの能力であれば劣化しても十分に有益だと判断したのだろう。

「意味は判るが……。しかし何とも生臭いというか、つまらない話しになったな」

「でしょ？ 本人不在で結納まで済んでるって話の方がまだアリだわ。まあ、これでミキが奮起するなら、そっちの方が面白いんだけど」
何がつまらないといつて、幹比古と美月は想い合っているのだ。

自覚症状が無かったからといってソレが否定される訳でも無い、比較論で言うならばどちらを取るか聞く前から決まっている選択肢だと言えた。

これで吉田家に権力があり幹比古が無能ならば別だが、神童とまで呼ばれた頃の才能を取り戻しつつあるのだから最初から話にもならない。

「つまらんことを聞いたな、すまん。……転任した吉田教諭と連絡を取りたかったんだが」

「美ちゃんなら同じ用件で駄目よ？ 最初はカウンセラーの癖になぜ異性交遊に成りかかったのを止めなかったのかって呼び出され、今じゃ根掘り葉掘り聞かれてる筈だから」

聞かれている筈……か。

残念ながらエリカをしても状況を聞き出せたのは最初だけで、今は連絡が取れないで居るのだろう。

「そういうえばエリカの方はどうなんだ？」

「よしてよね。あいつとはそういう仲じゃないし」

パタパタと手を振りながら即答するエリカだが、答えに成って無いのでもう一度尋ねることにする。

「いや、レオとの仲じゃなくて千葉の方だ」

「へっ……ああ、そうね、そりゃそうよね！ 政略結婚的な流れとしては無くはないわよ？ とういか横浜の話がそのまま続いているから、上の兄貴が時々鼻を伸ばしてる感じ」

何を勘違いしたのかしらないが俺が聞きたかったのは家の事情だ。

だがソレを時分とレオとの間と勘違いして質問を答える辺り、案外、まんざらではないのかもしれない。

「老師の所じゃないにしても『九』の家とお近づきになれるって、うち

の馬鹿親父もノリノリだし、元から継兄上とあの女の話もあるからこれから忙しくなるんじゃないかしら」

「ああ藤林中尉と偽装縁談を進めた話がそのままだったか。まあ忙しくなる理由としてはマシではあるな……」

あの時は偽装というかイベントとしての結婚式を大々的に開催するという理由で、関係者とその縁者を方々に送り込んだ。

パーティ会場の方も仮拠点や避雷針などの設置も扱い易いように取り組んだ結果だが、当時は少尉だった藤林中尉はエリカの兄と見合いをセツティングしたはずだ。

そういえば社長として偶に顔を出す中尉だが、時折、機嫌の良さそうな時がある。

さきほどの幹比古の件とは違い、こちらは周囲の干渉が良い方向に進んだと言えるだろう。

エリカの方も今はともかく時期を置けば忙しくなって家の用事に狩り出されるだろう、幹比古ともども力が借りられなくなる可能性は高い。

少し早いが、とんだ春の季節だと言うべきだろうか。それぞれの思惑は上手く行つて欲しいと祝福できる範囲だ。

もしそれが誰かが意図しての流れでなければ……。

● 枝葉の落ちる音

違和感を覚えたのはその日の夜だった。

刷新された生徒会の話題を、深雪から聞いた時の事。

「七草先輩も？ ほのかや雫の代わりに協力してもらえという予定だったか」

「はい、お兄様。鈴音先輩ともども御家庭の用件で暫く登校できないとの事です」

そのこと自体は問題無いし、当たり前のことだった。

本来は三年生は最低限の確認を除けば、任意での登校のみと成っている時期だからだ。

だが問題なのはそこではない。

ほのかや雫には交換留学の話が来ており、もつと言えば生徒会や風

紀の新メンバーとして引き継ぎをしているところだった。

忙しいから断るかという方向に成った時、七草先輩達が穴埋めとして協力するからという前提で前向きに進んでいたところだ。

いささか階段を外された形ではあるが、今更、全てを無かったことにはできない。

「仕方無いな。深雪は生徒にできるだけ協力しようと言うのだろうか？

なるべく俺の方でも力を貸そう」

「申し訳ありません、お兄様」

条件の合わないか乗り気では無いなら留学を諦めてもらうにしても、生徒会や風紀委員会としては手が足りなくなる事を前提に動くべきだろう。

涙目で慌てふためく中条会長の姿が思い浮かぶようだが、それを見越させる深雪ではないことも良く理解して居る。

「会長や委員長に確認を取った上で、優先度の高い順から片を付けて行くしかないな」

一花先輩……鈴音先輩と疎遠になったあたりではそれほど寂しいとは思わなかった。

もともと他人の事は信用して居なかったし、先輩とは性格が似過ぎて居てむしろ他の方面を担当する方が妥当だと思えるくらいだった。

しかし幹比古やほのかに雫に加えて七草先輩、将来の話をするのであればエリカや渡辺先輩も怪しくなってくる。

これだけの人材が離れて行くと、どうしても戦力と言う意味で心もとなさを感じて来る。

俺だけならばともかく、深雪の周辺を任せられる人物が居ないという自体がそうさせるのだろう。

「他にどうしようもないですね。その意味ではデータ面に強い五十里先輩がおられるので助かります」

「そうだな。先輩とは多方面で顔を合わせるし、千代田委員長経由でも話を通せるからな」

五十里先輩と千代田委員長は二人で一セットのようなもので、魔法に限っていえば実力は十分だろう。

有望な技術者とその護衛として何度も出逢う機会があるし、学校に限らずとも俺が深雪を連れて居る限り戦力としては期待出来る。

(社やブティックの方には平河姉妹も居るし、いつそのこと集まることが決まっている技術者陣で何か……)

そこまで考えた段階で、奇妙なことに気が付いた。

もしもの事を考えるのも良い、戦力を深雪の近くに置いておくことは一番重要なことだ。その一環として技術者チームを当てにするのも悪い考えではないだろう。

しかし多くの事が一つに集まり過ぎて居ることに気が付いた。

魔法開発の技術者は戦力として期待できるが、逆もまたしかりだ。戦力として出て来たところを捕える事も出来る。

技術者ごと深雪が浚われてしまう可能性はあるし、……そもそも何故、これほどに手元の戦力が払底して居るのか？ 技術者をまとめて浚う為に計画して居ると言われても違和感を覚えないだろう。

(いかな。俺一人で深雪を守るとか言っていた癖に、他人を戦力として期待するなど。だが異常なほど状況が重なったこともまた確かだ)

吉田家が動けない、千葉家が動けない、七草家も渡辺家も、結婚式まで秒読み段階の十文字家など地元でも動けるか怪しい。

それに付随して幹比古も美月もエリカも、ほのかも雫も先輩達も皆動けないのだ。五十里先輩と千代田委員長もイザとなれば自分達の無事を優先するだろう。

もちろん俺の心配は杞憂である可能性は高い。

吉田家の事情は幹比古と美月の延長線上にあるだけだし、七草家はともかく千葉家や渡辺家に関しては以前からの流れのままだ。

だがしかし、一端思い付いてしまった考えは中々拭うことができない。

(先に深雪の話聞いて、エリカの話が後だったら別だったか？ 何とも言えんが何かしらの対処が必要だな)

どちらにせよ戦力が心もとないのは確かなのだ。

偶然であれ誰かが利用する可能性が以上は、対策を打たねば嘘

である。

「……お兄さま?」

「深雪。大丈夫だとは思いますが少し考えることがある。明日、エリカやレオと少し今後のことを相談しないとならんかもしれん。少なくとも亜矢子と文弥は呼び戻す必要があるだろうな」

俺の考えを邪魔しない様にしていた深雪が、まとまった事を察して声を掛けてきた。

その問いに答えつつ、秘匿回線を使って黒羽家に要請を送った。

だが俺の動きが遅かったと判るのは、翌朝になってレオが病院に担ぎ込まれたという話を聞いてからになる。

その話を学校で聞いた時にエリカは既におらず、病院に向かったのかそれともその『原因』を見付けに行つたのか姿が見えない。

(まいったな。これで亜矢子達以外に深雪を任せられる連中が居なくなった。この間の津久葉家に起きたボヤ騒ぎも考えればそれすら危うい)

いずれにしても確かなのは、俺が頼める範囲での戦力が黒羽姉弟以外は無くなったと言って良いだろう。

そして津久葉家で起きたボヤが黒羽家のエージェントを割き、場合によっては黒羽家そのものを狙うと見せ掛けたものかもしれない。

ここまでくれば自分の考えが杞憂であるとか、自意識過剰過ぎるなどと考えることはできない。

『紅世』の関係者に襲われたことを含めて、最悪を想定しておくべきだろう。二度目の襲撃はそう遠くないものだと思いなから……。

やがて来る戦いの前に

●迎撃準備

レオが入院したと聞いて、俺は陰謀の可能性を濃く感じた。新装備も含めて接近戦の能力は以前よりも格段に上昇して居る筈だし、生存力に関して俺の再生を除けば随一と思えるほどなのだ。

そのレオが突如入院したと聞いて、陰謀性を疑うなと言う方が嘘である。

(病院で聞き出すとして……。このまま受け身で居るのは巧く無いな。流れは自分で作るべきだ)

場を眺めるべきだったとはいえ、いささか消極的だったかもしれない。

これが仮に陰謀であるとするならば、こちらの判断よりも先を見据えて居る筈だ。

(レオも俺が行くとは思っているだろうが、すれ違いを考えれば先に連絡しておいた方が良いな。それと戦力不足だが……)

上手く行けば飛び出したエリカにも伝えられるかもしれない。単なる暴漢相手ではなく何者かの動きかもしれない……。だから

迂闊に動くなと添えてメールを入れておいた。

そして所属して居る風紀委員の用事を片付けつつ、メンバーの一人に判り易く視線を送っておいた。

「……何の用だ？」

「場合によつては森崎一門ごと雇いたい。無論、話が大きくなった場合だが」

まず目を付けたのはボディガードを家業にしている森崎だった。護衛としてなら腕効きの部類に入るし、家業ということは一門の中に多くの人材を抱えて居るだろう。

「一門ごと？ キナ臭い話は困るぞ」

「安心しろ、そこまでの事じゃないさ。ただ……狙われている対象が俺だけとは限らんからな。ひとまず深雪のことを頼みたい」

都合の良いことに森崎は俺と反目して居るとみなされている。

一時期共闘したこともあるが、その時も表に出して居ない。

そして何より風紀委員として話す事ができ、深雪と同じクラスというのが大きかった。

俺には理解不能だが、世間ではこういう相手を頼っても、協力を持ちかけてもいけないらしい。

プロフェッショナルである以上は、戦力は戦力でしかないと思うのだが。

「司波さんを？ あの人ほどの魔法師ならば並大抵の相手では叶わないと思うけど」

「真正面から来てくれるならばな。それに手段としての誘拐ではなく、脅しとして重傷に追い込む可能性もある」

俺から技術を奪いたいにせよ、四葉の係累と推測して狙うにせよ。

手段としては複数の方法がある方が有用だろう。そして遠距離狙撃や奇襲を考えれば、狙い易いのは場所が特定し易い深雪の方だ。

そして当然、俺が守りたいのも深雪なのだから護衛を付けるとしたら考える余地はない。

「……ひとまず。の間は『二人』でいいか？」

「それで構わない。まあ『大ごと』になったら警察なり軍に頼むとするよ」

この場合の二人とは森崎自身が教室を中心に、男には出入りし難い場所にもう一人女性スタッフを付けると言う意味だ。

森崎一門に頼むとしたら社の関係者もということになるが、それ以上の大ごとはテロ対策部隊でも用意するしかないだろう。

こうして最低限の準備を終えてから、俺はレオの居る病院へと向かった。

「面目ねえ」

「気にするな。それよりも何が起きたかを教えてくれ」

精霊の眼で確認するとレオの生体情報が著しくすり減って居た。

肉体的な傷はそうでもないので、担ぎ込まれた理由はおそらくソレだろう。

「……込み入った内容だから面倒癖え順番だがいいか？ エリカには話してる間に何度もキレられちまったが」

「構わない。妙な誤解が混ざるよりもマシだからな」

レオが珍しく悩んで居たようだが、話す順番を考慮して居たらしい。

暫くして整理が済んだのか、ようやく口を開いた。

「全体としちゃあ組織とかグループが二つ・三つ関わってて、オレがこうなってるのは単に自業自得なんだ」

「……例の不壊魔法みたいな禁じ手でも使ったのか？」

入院理由をこの段階で告げたのは、おそらくエリカが話題の展開に激怒したからだろう。

その上で相手が複数ある事を教えて、事の面倒さを説明している。

「最初に出逢ったのはエリカの兄貴とその友人で、夜歩きの時に出くわした感じだな」

「エリカの？ 刑事をして居ると言う話だったが……」

長兄のことかと口にしたらその場で首を振られた。

あの兄弟は横浜の一件でイベントに巻きこんだために、どちらもプロファイルは頭に入れている。

確か……。

「次男の方だな。軍務つか政府筋つか、微妙な立場だとか言ってた。そんな時に……横浜の件で問題が起きるって話を聞いたんだ」

「ああ……。確かに軍関係だったな。しかしその話しぶりだと、ナンバーズがらみかもしれないな」

レオも同様に感じたようで、言葉には出さないものの渋い顔で頷いていた。

しかしここで横浜の件と言われたことで、俺が警戒せねばならないのは一つだけだ。

何しろイベントや持ち込む為の装備一式、そして避雷の魔法などは所詮その場しのぎに作りあげたオマケだからだ。

問題があるとすればあの戦いで最後に使った……。

「えーと色々話すなって言われんだが、まあ達也なら俺よりもよっぽ

ど関係者だからいつか。……あの時の最後にCADの調整で呼ばれたろ？ アレを奪いに来てる連中が居るらしい」

「……なるほど。厄介な話に成ったな」

悪い懸念は当たるものだ。

どうやら戦略魔法であるマテリアルバーストが関わっているらしい。

調整スタッフという関係者に過ぎないと誤魔化しているが、実のところ俺自身が行使して居るので厄介事を避ける事も出来ない。

「確認するがエリカにはその話をしてないな？ ならいい」

「最初はエリカの兄貴も誤魔化そうとしてただけど、当てずっぽうで言ったら口止め込みで教えてくれてな。そんな時に色々と技やら術も教えてくれたんだが……」

レオは頷きながら難しい顔をした。

横浜の時点で守秘義務を受けて居るし、今回の件で首を突っ込む時にも重ねて告げられた筈だ。

当てずっぽうの話も関係者同士だから通じただけだが、……エリカもまたあの時の話は聞いている事に成る。さらなる面倒が生まれなると良いのだが。

「そんな時に非常用と念を押されて教えてもらった魔法がよ、使い過ぎるとぶっ倒れるってヤツなんだ。オレはこの通りガタイがあるから資格はあると言われたが、確かに使い過ぎるとヤバイわ」

「当たり前だ。サイオンどころか生命力もふり絞ってるぞ。レオだから無事に済んだが普通の人間だったら死にかねん状態だ」

生命力を消費して魔法力を向上させる様な術式だろうか？

古式魔法の仙道系や符蟲道にあったとは思うが、確かにリスクの大きな魔法だ。素人に教えて良い術ではない。

もつともレオが言う様に才能を見越して与えられた魔法であるならば、普通の人間に教えるとも思えない。

あくまで死にそうな時に、脱出用として教えてくれたのだろう。

「それほどの魔法を使って戦わねばならん相手とはどんな奴だったんだ？ 俺の所でも新しい魔法を覚えて居ただろう」

「おう。ありやあ相当に強かったぜ。おまけに途中でマシンガン持った連中まで出て来たからな」

レオに用意した新装備用の魔法、『エクストラ』は戦闘力を純粹に高めるモノだ。

扱い易いが肉体への負担の大きい自己強化系の魔法と、レオが本来得意としている硬化魔法を併用する形で構築して居る。

要するに人間としてのリミッターを外しつつ、その反動を硬化魔法で無効化したモノだ。一般人が行ってもそれなりに意味のある組み合わせだが、遺伝子的に適性のあるレオが行うことで比類ない力を発揮できる。

ハッキリ言つてその辺りの装甲に身を包んだ連中や、薬物程度の強化歩兵で相手に成るレベルでは無い。

そのレオに問題のある切り札を使わせるまで追い込んだ以上、かなりの強敵と思われた。

「九校戦予選で戦った魔法……えーと。動きを反らすような魔法があつたら？」

「ベクトル反射……いや、レオが戦つたのはシールド・ダウンだから軌道屈折操作か。アレを実戦レベルで使う相手か」

クラウド・ボールの試合で多用されるベクトル操作は、方向をそのまま撃ち返すので難度が高くても扱い易い。

対して軌道屈折操作は銃撃戦などで補助的な防御魔法として用いられるモノで、方向性を反らすだけの魔法だが防御用としては有用性が高い。

とはいえ戦闘中に使用するには難度の高い魔法であり、普通は領域の外にのみ使われる魔法だった。

大抵は反らすだけに務め、物理的な障壁であつたり、魔法の領域が重ならないようにして他のモノが別の魔法で防ぐような使われ方をするのが精々だ。

これを試合であるシールド・ダウンならともかく、実戦の格闘戦で使うとなると厳しいと言わざるをえない。それを可能とする魔法師であれば、確かに厄介な相手だろう。

「まあその魔法を使う奴を……。横浜方面で怪しい奴が出入りして居る場所を見付けてよ」

レオは場所を付け加えつつも、詳細に関してはあいまいに説明を入れた。

ボカしているが、情報経路上に居る人物への義理立てなり別の守秘義務で独自に調べたのだろう。

「横浜戦で逃走した大亜連合とでも取引して居たのか？」

「……似たようなもんだな。そんで最初はそいつと出くわして、色々あつて押し問答から殴り合いになったんだ。判り易く不審者だったし、売り言葉に買い言葉だったからな」

横浜戦で逃げ切った部隊が窺っているならば、敵の敵は味方の理屈で情報交換をして居る可能性がある。

そこを突きとめて襲い掛ったか、帰路で追跡するところを待ち構えられたのかもしれない。

「最初は尻尾だけ掴んでやろうと普通に戦ってたんだがよ。途中で別口の奴らが現われてそいつごと俺も撃ちやがった。そこで仕方無く……な」

「銃器は魔法師にとって天敵だからな。しかし無理はするなよ」

今の段階ではレオ自身と戦った相手、どっちを狙ったのか判らない。

やったのは証拠隠滅を図る大亜連合の連中かもしれないし、マツチポンプのあ可能性すらあり得る。

(とはいえ現段階で判ってる相手としては、この間の奴と……USNAか。USNAならマテリアル・バーストを狙う理由もあるだろうが、紅世関連だと意味が判らんな)

襲ってきた奴が『紅世の徒』である可能性と、フレイムヘイズである可能性。

現段階ではどちらとも言えないが、マテリアルバーストを探る意味が見えない。連中にとって現世利益に興味があるとも思えないからだ。

(いや。……大亜連合や大漢には『紅世』の痕跡が見られたのだったか

？ 敵の敵は味方ではなく、本当に味方で呼び寄せたのだとしたらどうだ？)

『紅世の徒』とフレイムヘイズの最終決戦は、日本だったとも欧州だったとも言われている。

だがその前哨戦は大亜連合と大漢が争った紛争の陰に隠れて実行されており、かの地に一大拠点があったのだとも。

それを考えればUSNAに居る同胞を、大亜連合に所属する連中が呼び寄せたのだとも考えられる。

そしてUSNAがその様子を見てしまったとしたらどうだろう？

脱走兵を捕獲するどころか、敵国と共同で当たろうとするならば処分対象と成っても仕方が無いだろう。

(まだ断定は禁物だがそう考えると筋が通るな。対処法だけは常に用意しておくとして、今はどちらであつても防がねばならん)

相手が誰であれ、戦略魔法であるマテリアルバーストの秘密を渡すわけにはいかない。

狙いが判つた以上は、情報と人間を守っていく必要があるだろう。

「それでエリカは？」

「達也がメールくれたから、先に兄貴の所に行つて詳しい事を聞いてくるつて言つてたぜ。まあどこまで真相を聞いてくるか判らねえけどよ」

やはり先々に手を打つて正解だったか。

これで最低限の戦力は整うし情報も手に入った。

森崎一門を全て雇用するにしても研究所では無く人材の方に専念させられる。

深雪と横浜事変の時に関わった技術者たちに張りつけておいて、こちらは打つて出ればいい。

「情報の精査も必要だし、動くとしても暫く先だ。それまでに気力体力を取り戻しておいてくれ」

「そうしとくよ。病院食は薄味なのが偶に瑕だけどな」

差し入れを用意しておくと言つた後、俺は『予定』を考え始めた。

当然ながら情報収集はしておくとして、本当にマテリアル・バース

トが目的だった場合の罨造りだ。

どこかにおびき寄せて一網打尽と行くのが良いだろう。話し合いの余地があれば良し、不可能ならばUSNAも使って確実に潰すべきだ。

(本当ならば部外者の関与は避けたい所だが、USNAと共同で当たるならばシールズ女史の力も宛てにできるだろう。おびき寄せるなら何処かな……)

横浜戦の時に関わった技術者も含めて目立つ形で集め、実際にはそのメンバーには森崎一門を付けて早めに退避してもらおう。

会議中と称して体勢を整え、シールズ女史も含めて迎撃するのが理想的だと思われた。

とはいえ相手にはまだ余裕がある。

罨だと判って飛び込ませるには、まだ時間が掛る可能性が高い。

どこかで前回以上の手痛い打撃を浴びせる必要があるだろう。

……できればそれまでに情報の精査がしたいところだ。

偽りの瑕と、偽りの勝利

●偽の戦略魔法

敵は大亜連合ないし大漢の残党で、USNAにもコネクションがある『紅世』の関係者。

目的は戦略魔法であるマテリアルバーストの情報を奪取、可能ならば魔法式も取得するか技術者の略取。

そう考えれば、しつくり来るモノがあつた。一本の線が通つたと言つても良い。

それに相手が何者であつても、マテリアルバーストを狙うのであれば遠慮は不要だ。

「まずは連中をおびき出す罠が必要だな。……アレを使うか」

秘匿回線に切り替えた後で独立魔装大隊へのホットラインを立ち上げ、大隊の本部ではなく技科を指定する。

ややあつて相手側の防護が整つた後で回線が通じた。

『やあ大黒特尉、今回は何の用かな？ 面白い用件だと良いのだけれど』

「真田大尉。マテリアルバーストを狙っている組織がある様です。

『M・ユニット』の用意をお願いしたいのですが」

横浜戦依頼追加した連絡相手……技科を指定した場合は、情報管制と電子工作を担当しているはずの藤林中尉あたりが良く出て来るのだが……。

今回は不思議と研究三昧の真田大尉が顔を出した。

大尉はこちらの考えを推測したのか、それとも自分でも面倒だと思つているのかその辺りも含めて説明してくれた。

『参つたな。いま響子くんは家の用事で暫く動けないそうなんだけど……。M・ユニットということは、罠に使うのかな』

「はい。偽装の戦略魔法であるメルトダウンをいいます。必要な大型CADとプログラムの輸送計画があるならば奪いに来るか、様子を探りに来る可能性は高いでしょう」

横浜戦ではいざという時のマテリアルバーストの情報を隠す為に、

幾つかの偽情報を用意して居た。

その内の一つが霹靂塔対策の魔法であるアブソルルート、偽装の戦略魔法メルトダウンなのだが、こちらは情報隠蔽の中では相当上に置いている。

横浜戦に参加した大亜連合の連中がハッキングで調べたとしても、関連性があると判るくらいのレベルだ。

あの時に手伝ってもらったシルバー社やブティックのメンバーにも当然伝えて無いし、もしその時の技術者が聞いたとしても、戦略魔法の切り札の本当の名前かと思うくらいだろう。

「それと自分が襲われた話しはお伝えしたと思いますが、最近では自分の周囲で戦力になるメンバーがことごとく封じられて居ます」

『おつと全部は言わなくても良いよ。……そういえば君の所の会社の一つで響子くんが社長をして居たっけ。なるほどなるほど、こいつは面白そうだ』

真田大尉はニヤニヤしながら手元で端末を操り始めた。

転送が始まったので、某かの資料を用意していたらしい。

『こんなこともあるのかと、FAE理論を応用してメルトダウンもそれっぽく化粧しておいたんだ。中身を詰めて持って来てくれるかな？』

「……流石は大尉ですね。判りました、適当に辻褄を合わせて持つて行きます」

FAE理論は魔法の発動タイミングの誤差を応用した理論で、USNAのヘビー・メタルバーストにも使われていると聞く。

確かにそれらしい図にはなるのだが、名前だけのデータをわざわざ研究して居る辺りが真田大尉らしい。

いや、その理論発展をこちらに押しつけて来るのも、らしいといえはらしいか。

ともあれこれで囷の用意が出来た。

大隊の方で手を回した場所に大型CADを輸送してもらって、適当なタイミングでその場所にデータを届けるだけだ。

相手の工作を考えればスパイがこちらを窺っていることも考慮し

て、シルバー社で少しずつデータを組みあげて行くのが良いだろうか。

（スパイと言えば……。封じられた戦力は横浜戦……。いや夏の九校戦以降に『得たことに成っている』コネクションだな。護衛の手配も必要だが……。念の為に監査へ回してみるか）

横浜戦では情報ランクを設けて、レベルによって知ることの出来る情報を分けて居た。

今回の敵がどういった情報を知って居るかが判れば、どこから漏れているのが判るかもしれない。

身内はできるだけ疑いたくないものだが、信じるだけで何もしないのは怠惰だろう。

脅されたりセキュリティの甘い個人宅などをハッキングされている可能性も含めて、対策はしておいた方が良い。

（まったく。こうなつて来ると黒羽家の戦力が多忙なのが痛いな。もつともそれを含めて狙つたのだろうか……）

分家の中で裏事を担当していた黒羽家は、戦力の激減による立て直しも兼ねて表の担当に切り変わって居る。

これが津久葉家で起きたボヤ騒ぎ以降、あちこちの調査や護衛で忙殺されているという状態だった。

森崎一門を雇うことで戦力的には補いが付きそうだが、諜報活動が減耗したままなのが痛い。

現に情報収集が遅れ気味だし、ある程度は判明した今でも確証が得られないでいる。

もつとも黒羽家が変わる諜報力などそう簡単には……。
「待てよ。そうか、情報と状況が固って来た今なら問題無いかもしれないな」

「お兄様？」

口に出した答に反応して、深雪が声を掛けて来る。

疑問を生じたというよりも、対応する事でこちらの考えを固める手助けをしてくれるつもりなのだろう。

「深雪。明日の朝に師匠のところへ窺いに行く。送られて来た進物の

中から適当に用意してくれ」

「承知しました、お兄様。先生が御好きな物を二・三、選んでおきますね」

俺の師匠である九重・八雲は忍の末裔を自称して居る。

その腕も情報網も確かなのだが、迂闊に無知な状態で質問を行えばスポンサーの中の『誰かが考えた正解例』に誘導されてしまう可能性も秘めて居た。

師匠は師匠なりの家業があるとも言えるが、どちらかと言えば相手の熟成に合わせて居るとい方が大きいだろう。

未熟ならば保護し導くのが当然、熟達者ならば信頼して必要な情報だけを渡して来るといのが、師匠なりのモラルなのではないかと思う。

その意味ではここまで状況が確定し、色々と用意した後ならば侮られることもあるまい。

●偽装の撤退戦

師匠の元を訪れてから数日、俺達の作戦は最初の段階に入った。

幾つかの情報交換を行い、とある『取引』を行った事で作戦の大枠は固まったと言える。

「すいません、今日は早めに切り上げてブティックの方に寄って行きます。藤林社長との約束がありますので」

「気にしねえでくださいよ。所長って言う意味なら御曹司だってウチの社長なんすから」

「そうです。席を空けると言っても、納品じゃ仕方無いですよ」

「囮と言っても正規のルートで発注を掛け、プログラムと調整用のCADを製作して居る。」

これならばどこのルートでスパイが動いていたとしても、『流れ』だけを見るならば本物に見えるだろう。

「と言う訳で、お願いします」

「依頼だか……ですかからね。では司波さん、先導しますのでこちらに」
「よろしくお願いしますね」

一緒に社へ寄って居た深雪を森崎に預けて帰宅させる。

同様に俺の方も最近付け始めた護衛を連れて、ブティックの方へ移動する事にした。

警戒レベルという意味ではワザと緩めたりはしない。

丹念にコースを計算し、機械でも人員でも十分な体勢を取った上でそのレベルを維持。輸送日に指定した今日も特には警戒レベルを増減はさせない。

(だが相手から考えれば警戒されるのは当たり前。今までの警備は全て『割に合わない』と思わせる為だ。連中が今日の情報を仕入れて居るならば襲撃する可能性は高い)

M・ユニットは車両で輸送する大型機械であり、設置場所での警戒は最大級なので今は狙わないだろう。

狙うとしたら俺を襲ってデータの一部なりを確保する方が確実だ。調べるだけならばそれで十分だし、失敗したらユニットごと建物を破壊する方に切り換える可能性が高い。

(さて。『奴』が襲撃グループに参加して居るといい良いんだが)

以前に俺を襲撃した、巨人の術式グレンデルの使い手には特殊なサイオン弾を撃ち込んでおいた。

紅世からみの相手が居た時にトレーサーとする為のモノだったが、探査封じの結界に籠って居るらしく中々拠点を見付けることが出来なかった。

(……居た。コースを窺っているな)

精霊の眼を通常の状態から、あまり使うことの無い遠距離探査に切り換える。

以前は横浜近辺で何度か、社の近くで一度ウロウロしているのを確認したぐらいだったが……今日は明らかに特定の場所を目指して居るのが判った。

(あの時は不意打ちだったが、今日は遠慮なく行かせてもらおう) 予め用意したコースゆえに、どこで襲撃すれば良いのかは理解して居る。

単独犯のテロリストにとって狙い易い場所ではなく、こちらの警備体勢を少数の人員で足止めすれば、別動隊によって狙える位置だ。

『申し訳ありません、ミスター。ダミーの方に怪しげな集団がやってきておりまして……』

「問題ありません。予定通り、こちらは別ルートを通りましょう」

案の定、謎の集団によってコース変更を余儀なくされた。

こういった場合の脱出行ではむしろランダム性に富んだコースの方が良いのだが、報告ではそういったコースを塞ぐように展開しているらしい。

結果として一見安全そうであるが、それを見越して襲撃者が待ち構えるなら、一本道と同じくらい予想し易いコースだ。

変更したルートは他の護衛に合流し易く、警察などの援護を要請し易い場所になるが、腕効き魔法師の集団から見ればそんな増援は無いも同じだろう。

まして相手が『封絶』という特殊な結界や認識を遮断する結界を張れるのであれば……。

「そこまでだミスター・シルバー。手にして居る物を渡してもらおう」
(来たな……炎の色が違う。封絶を張ったのは違うやつか)

調べたところ自在師たちの張る結界は、術者の性質により色彩が異なるらしい。

完全に違うのか似たような奴なら色彩も似るのか不明だが、今は以前と違う色とだけ判れば十分だろう。

「荷物を抱えた状態で二体一。抵抗できるとは思わない事だ」

「どうかな？ この結界を排除するだけならやって出来ないことではあるまい」

俺たちはお互いに嘘をついた。

精霊の眼で確認すると三人目が隠れて居る。そいつがバックアツプ兼、封絶などの担当だろう。

判り易く、それで居て対処し難い嘘だ。

そして封絶を術式解体では排除できない事は、予め俺も知って居た。

知って居てあえて口にするのは、三人目に気が付いている事を悟ら

せない事。そして本来は二丁を持つ俺が片手を鞆で塞いでいるのを、信じさせるためだ。

この嘘を付いた上で、最後まで鞆を後生大事に抱えて居れば、それなりに偽情報を信じざるを得まい。

「それに……。二つのCADを持つのに、別に両手を使う必要はあるまい！」

「なに、跳んだ?!」

「落ち付け、君も出来るだろう」

そもそもCADは携帯端末やブレスレットというのが一般的だ。俺がそうして悪い理屈は無いし、そもそも最近は新型装備の研究をして居た。

ゆえに自分専用の特殊CADを幾つか用意して居るし、シルバーホーンとは特化の方向が違うだけで戦闘用に調整してある。

まずは封絶の外縁に向かい、術式解体を試すように偽装する。

当然無駄なことであり、返って自分の手番を捨てるような悪手だ。だからこそ、それを見越して相手は攻勢を仕掛けて来るだろう。

俺の狙いは最初の数手で失敗して見せることで、相手の目論み通りであると思せつつ、終盤で逆転する為の布石を打つことだ。

(まあ、そうそう上手く行くかは不安もあったが……。幸い、あの二人目はレオが言っていた相手と特徴が一致する)

一人目は光の巨人グレンデルを出現させる男。

二人目は姿こそ隠して居るがレオの言っていた特徴と一致する……強力なベクトル操作を使用する男。

三人目の特性は不明だが、こちらが気が付いていないフリをしつつ一気に強襲を掛ければ倒せる可能性は高い。

仮に倒せずとも、封絶を維持できない様にするだけなら何とかなるだろう。

……何らかの防御手段があり、ダメージすら与えられない場合は非常手段を使わざるを得ないが。

「鳴り響け」

コマンドワードを唱えることで新装備による、微妙に異なる二つの

振動魔法を条件起動でアクティブにした。

一つ目は蹴りを条件に射程強化型の振動波を放ち、二つ目は腕による打撃を拡大する威力強化型の振動波を放つモノだ。

そして新装備たる所以は、術式解体や術式解散とリンクして、追い掛けるようにタイミングをずらして使用する。

「邪魔だ。そこで見て居ろ」

「くっ……。この間のアレをもう改良したのか」

跳躍からの着地と同時に、回り込んで来た一人目の男に向けて射程型の振動波を放つ。

変数を伴う数発の術式拡散を放ち、まずは相手の防御を霧散化させる。

流石に一度食らった事があるので、術式拡散を受けた時点で回避に切り換えたようだが、おかげで距離を離す事が出来た。

……とはいえこれは擬態だろう。

俺が術式解体を封絶に放って、脱出に失敗するのを待つて居ると思われた。

となればこちらが行動したと同時に、もう一人の男と共にグレンデルを起動するだろう。

「シルバーはグラム・デイスパージョンを成功させるぞ。気を付けろ！」

「判って居るとも。問題は無い」

(……これか、ベクトル操作は)

相手の防備を解除しつつ直後に蹴りと振動波を放つ。

これに対し二人目の男は逐次詠唱によるベクトル変遷を用いて受け流す。

蹴りから直接撃ち込んだ筈の振動波が、解散後に再構築された魔法式で四方に向けて拡散させられた。

俺は仕方無くバックステップで距離を取りつつ、跳躍術式で迂回しようとするのだが……。

「私の術式は、こういう使い道もある」

「ちっ。ベクトル操作に、それを応用した慣性制御の代用か。厄介な」

そいつは迂回した筈の俺に対し、最低限の機動で追いついて来た。小さなステップから放たれるジャブを受けただけで、俺の跳躍方向が微妙に変更された。

おそらくは発動規模を小さくする代わりに連続して使用し、まずはベクトル操作を自分の足に使用した高速機動を掛け、次に拳が当たった場所に使用したのだ。

追い込まれた事に成るが、俺はこの事態に対抗すべくサイオンを練り上げ始めた。

そして脳裏では精霊の眼を使って周囲の詳細を再確認した。

「だが茶番はここまでだ。……撃ち抜け！」

「無駄だ！」

俺はコマンドワードを起動し、新たに二つのCADをリレーさせる。

どちらも術式解体に見せ掛けたブラフだ。一つ目は独特の発光現象を、二つ目はサイオンの余波だけを造り出して『次』に備えるモノ。

「封絶は障壁型では無いのだよ。申し訳ないが同行してもらおう」

「一気に行くぞ！」

追いついて来た二人目が鞆の方から迫ると同時に、一人目は光の巨人が顕現する。

輝く腕が数本に分かれて伸張し、俺の周囲に迫った。術式解体を放つべくサイオンを練り上げるが使った直後とあつて間にあわない……筈だった。

「言つた筈だ、茶番は終わりだとな」

「何!? 連続使用だと！」

ブラフゆえに最初に練り上げたサイオンは最低限しか使用して居ない。

使用可能な強度まで再チャージし、放射と同時に二人目へ肘打ちを放つ!

急所に叩き込んだ肘打ちだけならともかく、強化型の振動波を受けてただでは済むまい。

とはいえ無用な根性を出されても困るので、ワザと一人目の方へ

走った。奴を倒しても無意味だと知っているならば、今は回復に専念するだろう。

「馬鹿な。チャールズを一撃で!？」

「ベクトル修正に頼り過ぎだ。次はお前だ!」

跳躍術式は使わず小走りに一人目の方へ戻りつつ、精霊の眼で探しておいた三人目の位置を捕捉する。

そして援護に向かうか迷っている間に、一気に跳躍して飛び込んだ。

「そこに居るのは判って居る! 術者はお前だな!」

「きゃあ!？」

「ミアー!」

着地と同時に蹴りを放つのは先ほどもやったが、三人目の能力は防御用では無よう度今度は成功したようだ。

ふらついた三人目に対し、体勢を立て直すと同時に肘打ちからの膝蹴りへと繋ぐコンビネーションを放つ。どうやら女の様だが遠慮は不要!

ここまでは全て計算通り。

もし俺に計算ミスがあるとするれば、三人目の能力が意外なモノだったことだろう。

「だ、大丈夫です。……まだやれます。サリバンさんは大丈夫ですか?」

「すまん。助かったよ」

「……再生能力。なるほど、バックアップには最適だな」

女は小柄で相当なダメージを負った筈だが、ふらつきながらも立ちあがって来た。

そして二人目に掛け寄り立ち直らせたことで、その真価が理解できた。かなり強力な再生能力で自分や二人目を治療したのだろう。

「これで振り出しだな。諦めて渡したまえ」

「い、今ならまだ……」

(ふう。……ここまでだな)

三人目の再生能力がここまでか試す意味は無いだろう。

判って居るのはこのままでは、封絶を破ることが出来ずに捕まってしまうことだ。

もちろん鞆を渡してダミーだとバレるのも困るし、では本当は何だとマテリアルバーストに気が付かれても困る。

ならば遠慮をするのはここまでだろう。ここからは本気で相手をせねばなるまい。

「オン・マケイシユラヴアヤ・ソワカ」

俺は無意味なマントトラを唱えることで、思考の整理と周辺の状況把握を図ることにした。

雲散霧消

●破滅のカウントダウン

無意味なマントラを唱えた俺は、思考をプリセットして考えを改めた。

封絶の中ゆえに人目を気にする事は無く、優先順位からすればこの三人までなら仕方無い。更に言えば始末を行えば問題も消す事が出来る。

最悪の場合、取り逃がす事を考えて誰を優先して消し去るべきか？
そして最後まで残すとしたら、それは誰か？

（最初にベクトル操作を使う二人目、次に最大出力で再生使いの三人目だな）

途中で逃げられてしまった場合、ベクトル操作で機敏に逃げられるのが最も困る。

最大出力で行使され続けると、もしかしたら分解も方向転換される可能性もあった。

三人目は封絶を張って居るので最後まで残しても良いのだが、自主的に解除して逃げる事を考えれば、油断も出来ない。即死させられなければ腕や足が消滅しても再生可能かもしれないからだ。

そして一人目には特殊なサイオンを撃ちこんだままなので、逃げられてもアジトを探せると言ういうチャンスに繋がるかもしれない。ならば悩むまでも無いだろう。

俺は敵の格闘攻撃を捌き、あるいは魔法攻撃から回避しながら、そう結論付けた。

行動は決まった。ならば後は可能な限り、俺が何をしたか情報を与えずに倒すだけだ。

「どうした、本気を出すのでは無かったのか？」

「ならば見せてやろう。裁きの光をな」

コマンドワードにより、先ほど使った光学系の術式を変更した。

あの時は術式解体のサイオン砲弾に似せた輝きだったが、今回光量を引き上げている。

狙うは勿論、雲散霧消の効果を視覚では判断でき無くする為だ（回避され難くするというのもあるが）。

軽いジャンプでバックステップを掛けて、着地と同時に地面を蹴り広域型の振動波を放つ。

それで近寄ろうとする連中に牽制を掛けて、静かにトリガーを引いた。

「メギド」

「散開っ！」

「まっ眩しい……!?!」

閃光には慣れていいのか、グレンデルを操る一人目は仲間へ警告を発しながら距離を保つ。

戦い慣れないらしい三人目は、顔を抑えて逃げ出そうとする。俺はその後ろを追って即座に追撃を掛けた。

「逃がさん。今度こそ、お前を倒す！」

「えっ……? キヤア!?!」

一人目がフリーで誤魔化しも入れれない為、このタイミングで雲散霧消は使わない。

三人目の後ろを取った後で肘打ちを入れ、威力強化型の振動波を放った。

そして転がるそいつに追いうちの顔面蹴りを喰らわせたようにしたところで、目論み通り一人目が割って入り息を突かせる。

「ミア。お前は無事か！」

「けほつけほ。途中から赤蟻さんが防いでくれたのでなんとか。チャールズさんは大丈夫でしょうか……」

見れば三人目の皮膚面に赤い燐光がちらついているのが見えた。

どうやら装甲としての機能がある用で、鱗の様に機能して打撃はともかく振動波を緩和したのだろう。

だが肉体的には魔法で防御で来ても、本人が把握して居ない事は精神的に判断できないのだろう。一人目を無意味な問いで困らせて居ただのだ。

「チャールズは……」

「既に倒した。残っているのはお前達だけだ」

「そ、そんな……一体何が……」

苦い顔をする一人目に対し、三人目は訳も判らずに顔を抑えている。

やはり経験的にも精神的にも戦い慣れて居ないのだろう。つけこむとしたら、そこかもしれない。

「判らん。目を眩まされたと同時に存在が消え去って居た。もしかしたら伝説の宝具、ハッピートリガーかもしれない」

「紅世の王を爆散させると言うあの？」

「何でもいいさ。死にゆくお前らには関係の無い話だ」

トリガーハッピーという単語に聞き覚えは無いが、結果として俺は運が良かったのかもしれない。

連中自身に疑問を解決する情報があった為に、ソレを使われたという懸念が雲散霧消の効果を上書きしたのだ。

(……CADの銃口部分に着目して居るな。トリガーハッピーというのは銃型の様だな。ならばこいつをフェイントとして使わせてもらうか)

幸いにも雲散霧消は俺自身の能力に関わるモノで、新型装備は絡めていない。

光学系の術式をそのまま使って、雲散霧消の方は別の撃ち方をさせれもらうとしよう。

「国家機密を盗もうと言うんだ、倒されても文句は言えまい？」

「ち、ちが……」

「私達の使命をそんなものと一緒にされてもらっては困るな！」

正論に弱いらしい三人目を遮って、一人目は再びグレンデルの巨人を発動させる。

タイミングを変えた鉄拳が三発ほど発生したので、直撃するモノだけを術式解散で消して、残りはあえて喰らうことで距離を離れた。

「何？ ワザと喰らうだと？」

「あ、あれは私の……」

「ふん。再生能力が自分達だけの特権と思ってもらっては困るな」

殴り跳ばされた後、転がりながら立ち上がる。

オートで再生を行いながらCADを構え、九校戦の校内予選など以前に何度か使った事のある方式を脳裏に浮かべた。

雲散霧消を撃つだけなら近距離でも良かったが、誤魔化す為には距離を離して居た方が良く、グレンデルを使えば邪魔できると思えるだけの間合いが必要だったのだ。

「チェックメイトだ、メギド！」

「いかん！ 避けるミア！」

「は……い……」

閃光の中で声が融ける。

俺から直線的に延びるフラッシュに対し、光の巨人が腕を伸ばして立ち塞がろうとする。

その姿に実像が結ばれ、これが物理的な力を持つ魔法であれば、その時点で止まったのだろう。

だが俺は雲散霧消を直線では放って居ない。

三人目の真横から発生させ、直線のフラッシュを囷として使ったのだ。結果として三人目は避けようとした体勢のまま喰らい、言葉の途中で消失する。

「馬鹿な……私以外、倒されただど？」

「これで残るはお前独りだ。振り出しに戻ると言う意味では、前に出逢った時まで戻ることに成ったな」

封絶の外と中を分ける炎が消えゆくことが、何よりの証拠だった。

既に三人目の姿は無く、残るのは一人目と光の巨人がむなしく佇むのみだ。このまま人目が無いなら雲散霧消で消滅させても良いし、逃げるなら追撃してもアジトまで案内させても良い。

「言った筈だ。あの時の段階でチェックメイトだとな」

「黙れ！」

俺は勝ちに驕り油断して居るフリをして相手の動きを誘った。

ここから先は詰将棋であり、相手の取る手段を一つ一つ潰しながら自分のミスを減らして行く。

まずは周囲を精霊の目で詳細に探って……。

(師匠? ……頼んで居た黒幕対策か?)
心が冷えた。

油断したつもりは無かったが、師匠クラスの隠行の達人であれば俺の精霊の眼を誤魔化せる可能性がある。

今は離れた場所に居るが、もしかしたら先ほどの戦いを見ていたかもしれない。それが師匠では無く敵の仲間だったら手の内を晒して居た可能性もあるのだ。

(さすがにそのクラスの相手を想像はしてい無かったな。だが油断は禁物だ、このまま確実に行く)

雲散霧消は瞬時に倒せる時のみに絞るとして、基本は振動魔法だけに留めることにした。

幸いにも再生の使い手は先に倒したし、ここで戦うにしても追撃するにしても十分に倒せるだろう。

「くそっ。せめてあの攻撃の情報だけでもアルフレッド達に届けねば」

「逃さんー!」

敵が撤退を決めたことで攻守が逆転した。

奴は目立つグレンデルを納め、腕だけを出現させて攻防の要とした。俺の蹴りや肘打ちを光の拳で防ぎ、光の腕で振動をかき消して行く。

だが逃走中に全ての攻撃を防げる訳でも無く、更に護衛や駆け付けて来る警察たちの居るコースを避けるとあつては被弾が大きくなつても仕方あるまい。

このまま順調に倒せる、あるいはアジトの方向を探れると思つた時の事だ。

彼方から飛来する存在と、真つすぐに伸びる魔法式の反応があつた。

「ぬぐっ?! 軍か……しまっ……」

魔法式は受けた筈の場所を光の腕ごと分断し、遅れて放たれる二本目があつけなく絶命させる。

そしてサプレッサーで消音された小さな音と共に、サブマシンガン

らしき弾が撃ち込まれて行く。

「お手数をおかけしました、ミスターシルバー」

「USNA……スターズか」

「何の事かは判りませんが、感謝はしております」

飛行魔法を使って現われたのは、日本人離れた二人組だった。

精霊の眼を広げれば騒ぎがあった方向にも何組かが、同じ様にツーマンセルで行動して居る。それを考えれば答はおのずと明らかだ。

「他に数名居たと思えますが？」

「それとテロリストはまだ潜んで居るかもしれません。よろしければお荷物を預かりましょうか？」

「結構だ。それと他の奴は既に始末した」

笑みこそ浮かべて居るものの、銃の安全装置は掛けて居ない。

周囲を警戒するというよりは、まるで威圧するかのように二人ともこちらを見つめている。おそらくはどちらかの情報を寄せせと言うのだろう。

それを中断させたのは、新たな闖入者の追加だった。

他のチームと違い、その人物だけは単独行動。そして鬼の様な仮面を付けた奇妙な姿である。

「協力者に対し失礼だぞ、お前達。……部下が失礼なことを申しました、ミスターシルバー」

「いや、構わない」

「どうやらこの仮装した人物が隊長らしい。」

精霊の眼を詳細に使用しても情報体がおかしいと判るのみで、おそらくは偽装情報だ。これほどの使い手はシルズ女史か師匠しかしないので、女史の方だろう。

「それと調べたいなら少し戻ったところに行ってみると良い。大出力の魔法を使ったが、痕跡くらいは見つかるかもしれない」

「そうさせていただけます。不躰ですが、再びこのような事が起きた時は御一緒させていただいても構いませんか？」

何も残って居ないことを承知で俺は何処で戦ったかを教えることにした。

共闘の要請も、大型CADを巡る戦いではこちらから戦力として要請するつもりだったのだ。嫌応はなく素直に頷いておくことにした。こうして敵の戦力を削り、罨の中に飛び込ませる為の第一段階が終了した。

次の戦闘で決着をつけられれば良いのだが……。

● 割断

そして視点は仮面の人物に移る。

『彼女』は部下と共に指定された場所に移動して居た。

「シリウス少佐。日本人を信用して良かったのですか？」

「それに本国から追加された命令では、戦略魔法の事に関して調査せよとも」

「優先順位は下です。あくまで任務の最上位は脱走兵の確実な処分なのですから」

言葉を強く改めたアンジェリーナは、部下を諭すように機材の稼働を求めた。

世界一の精度を誇るサイオンレーダーが、達也が告げた場所でデータの消失を検知した。もつとも情報遮断の魔法もあるので断言出来る訳でもなのだが。

「それと協力者の周からFAE理論を使ったモノらしいと一報がありました。おそらく戦略魔法はメルトダウンチヨウでしようね」

「メルトダウン?! 分子ディバイダーの戦略魔法版とも言える魔法ですか？」

「馬鹿な！ 日本人ごときがステイツでもまだ未完成な魔法を完成させるなど！」

戦死した前総隊長が完成させた分子ディバイダーは、電子の引力と斥力のうち、引力のみを解除して斥力で断つ魔法である。

この状態を保ったまま仮想領域で切りつけるのだが、メルトダウンが完成した場合は規模と二次被害により莫大な破壊を巻き起こす魔法とされていた。

「仮に事実だとするならば目をそむけて何になるのです。この推測が本当だとするならば、小型化に成功して居る分子ディバイダーのユ

ニットと引き換えに情報を開示する方が早いでしょう」

もちろん無償で手に入れられるならば越したことは無いですが。

アンジェリーナはそう呟きつつ、シルヴィアから送られてくる情報をまとめて居た。

「攪乱に当たって居た者のうち、その場で一名を、追跡中に一名を処罰したようです。これ以上得る物はなさそうですし一度撤退しましょう」

「イエス、マム！」

時間を掛け過ぎると日本側の協力者である七草家でも抑えられなくなる。

警察に強い影響力を持つ千葉家の協力も得られればもう少し何とかなったのかもしれないが、今はそんな贅沢を言っている暇は無いだろう。

スターズは来た時と同じく密やかに帰頭し、次なる情報を求めて動き出した。

視点は再び達也の元に戻る。

独立魔装大隊とのコンタクトを予定通りにブティックで行ったのだ。

「基本は電子の結合を分離するモノです。そこでFAE理論を用いる為、仮想領域に魔法を展開。この領域を移動させるのが分子デイヴィアイダーと言われています」

「そこまでは真田大尉から聞いて居るわ。で、どんな風にメルトダウンまでこぎつけたの？」

祖父である九島老師から過密なスケジュールを押しつけられた藤林中尉が、多忙な時間を縫って社長室に訪れた。

俺は最低限の説明をすべく、それなりの時間を取らせてもらった。どうせ困るので不用な時間かもしれないが、第三者が聞いて不自然でない程度に完成させられなければ意味が無い。

そして今日の会合と今後のスケジュールを大凡掴めるのであれば、身内か九の家に『虫』が入り込んで居る可能性が高いだろう。

「劉・雲徳が使用した霹靂塔のバリエーションを参考にしました。斥力の最大出力そのものは下げて、仮想領域の広域展開用する為の術式を準備に組み入れます」

「確か……。あの時は雷が落ち易くする魔法を使って、消費を抑えて居たのよね？　なるほど二次被害で十分と言うことかな」

極論を言えば、何でも切れる剣など必要無い。

電子を定理に結合させている引力と斥力を分断し、その状態を保つて押しつけるだけで莫大なエネルギーが発生するのだ。

問題なのはその状態を維持し難いだけなので、事前に干渉し易くなる魔法を掛けておく。場合によっては分子ダイバイダーで消し去っても良いだろう。

あの時は敵味方が混合して居た為に、先に分解で邪魔する連中を始末してからマテリアルバーストを使用した。

丁度その時に程近い状態を作り出せるし、あえてこの方法を選択したのだ。

「それでこの魔法が完成して居ない理由って何なの？」

「単純に能力不足ですね。この魔法式に相応しい素質の魔法師がおらず、仮想領域を広げるユニットにはパワーが足りません」

ユニットの完成そのものは試行錯誤の時間を掛ければ何とかなるだろうが、魔法師の資質ばかりは仕方は無い。

都合良く人材が揃うなどはありえないし、簡単に見つかるようならばUSNAが既に別バージョンとして完成させているだろう。

「今回は演習場で試射ということで、領域を広げることはいけません。ひとまず一直線、ないし扇状のラインを引ければ十分でしょう」

「判ったわ。真似ごとで良ければ私が代役を務めるから、後は達也君、よろしくね」

九島の係累は放出系の才能があり、小規模であればメルトダウンの領域を造れるだろう。

後は必要に応じて俺の方でマテリアルバーストを使用すれば良い。「演習場自体は御爺様をお願いして、九校戦でステイブル・チエースを本当に採用して良いのかテストするということで抑えておいたわ」

「ありがとうございます。その理由ならこちらも色々仕込みが出来ますので助かります」

ステイブル・チエース・クロスカントリーは九校戦の正式種目だが、危険度が高いのでお蔵入りに成る事も多い。

横浜戦の影響で軍事色の高いこの競技に注目が集まっていることを利用し、対外的にはソレですませたのだ。そして九校戦を名目にするのであれば、俺たち学生が乗り込んでも不自然では無い。

包囲網を築く外陣も信用のおける人員を頼むし、実際に迎撃する内陣も一応は揃えられる。

とはいえ戦闘系の魔法師である自在師相手だ、幾ら警戒しても足りることは無いだろう。俺はレオやエリカに用意した魔法式を強化する必要を感じて居た。

偽りの最終決戦：前編

● 冴えたやり方ではなく

襲撃事件から数日、俺は見舞いがてらに病院を訪れ、レオとエリカに用意した魔法式をバージョンアップして居た。

戦力が限られている中で二人の実力は貴重だが、少し強い程度ではこれからの戦いでは戦力外だからだ。

「これから二人には劇的に強くなってもらおう」

「それは願ったりだけど……。そんな都合の良いことが出来るわけ？」

そんな物は存在しないが、普段使わない様な魔法ならば存在する。癖を抑えて有利に戦えるタイプではなく、扱い難いほどの癖があっても爆発的な力を発揮できる魔法を選ぶだけだ。

「まずはレオ。お前がもらったという術式、使い道が間違ってるぞ」「そうか？ 自分でもかなり戦えたと思ってるんだがなあ」

エリカの兄経由でもらったという術式は、古式系の増幅魔法だった。

既存の魔法と組み合わせ、生命力を糧に大幅な出力UPを図ると言うモノだ。

レオはこの術式を俺が考案した新装備……身体強化の魔法を出力強化して居た。

「五割増しで動ける魔法を出力強化して二倍というのは、確かに凄いように見える。ただし自己能力としての比較としては……だ」

レオは体格の良い人が機敏に動ける限界レベルで、相当な速さで動くことができる。

元もと体格の良くて素早いレオが身体強化すると、剛力かつ高速で動けるといふ訳だ。それを出力強化したのだから一見、恐ろしいほどの性能を発揮出来たように見えるだろう。

「だがな、それでエリカと勝負できるか？」

「あー言われてみればそうか。時間稼ぎなり隙でも突くなりされちゃおしまいだな」

レオを基準にすればかなりのモノだが、それでも速度タイプであるエリカの標準速度だ。

常人の身体能力を平均は五、最大で十と仮定する。レオは速度が七で筋力が十、耐久力は規格外の十二くらい。これに対してエリカは筋力こそ五だが速度は十、規格外の十二なのは速度感覚だろう。

これでは仮にエリカが身体強化加速系を使ったら二倍どころか三倍でも追いつけるか怪しい。

有利に戦うだけでも五倍、抑え込むほどならそれ以上の出力が必要だろう。ここまで極端な例では無いにしても、最低限五倍を扱おうと言う選択肢も用意しておいた方が良い。

「そうだな。この魔法式を使用して問題無く制御できる範囲が二倍で、五倍以上は長時間使うと危険だとする。それでも後者を選んだ方がお前の特性に合っている」

「まあオレだったら制御に失敗しても一回くらいなら耐えられるしな」

レオは肉体的に優れて居るのもあるが、得意なのは硬化魔法だ。

この魔法は物を固めるだけの魔法では無く、物体の相互位置を固定したり、その応用で肉体そのものの損傷を発生させない様にできる。

制御に失敗なくとも肉体が損壊する様な魔法を使ったとしても、レオならば普通に耐えることができるのだ。だからこそ身体強化の魔法と切り替え・併用する事で、アキレス腱などを損なわずに動けるようにしていたのだ。

ならば十分間ほど優れた人間になるのではなく、短時間でも超人を目指すべきだろう。

今までならそれで良かったがこれからは違う。少なくとも高レベルの相手であれば、耐えて凌げるレベルではお話にならないからだ。ゆえにレオには、アキレス腱どころか肉体全体が損壊しかねない魔法を硬化魔法前提で使ってもらおう。

「んで、あたしの方はどんな魔法にするの？」

「結論から言うとレースマシン。レオとは別方向の無茶といえれば判り易いか」

武装に関してはそっちの一体型CADを使う。流石に千葉家と五里家の連携に勝てる道理は無いからな。

正確には既にあらかた試して居るから、そこを探る余地は無いといふべきか。だからエリカに用意する魔法があるとすれば、今までのバランスを壊した方が早い。

「魔法式は普通使わない様なレベルに定型化してエリカの方で使いこなす。使うタイミングやバランス制御の方で失敗したら、高速で転倒しかねないようなヤツだ」

「おっけ。それなら、あたしの得意分野よ。どんなにヤバくても制御してやるから」

エリカに用意するのは前述した通りレース競技に使うマシンのようなものだ。

レオと違って得意分野であつても強力な魔法を制御する能力がエリカにはないので、魔法そのものは固定式で発動だけは確実にしておく。

後はできるだけ高速で発動する様にするか、数秒後に発動するのをバレないように使うかはエリカの速度感覚次第だろう。

ひとまずこんなものかと思つた時。

思いがけない言葉が俺を揺さぶつた。考慮から外して居たので想定外だと言つても良い。

「各訓練に関しては、まず似たようなタイミングや難度で発動できる魔法を利用する。エリカで言えば加速系ではなく衝撃系とかな」

「いいんじゃない？ それなら自爆しないし、攻撃のバリエーションも増やせるしね」

エリカならば下駄の足が一本しかない状態で超高速で走る様な物だが、それでは練習するだけで危険だ。

まずは同じ様にシビアなタイミングで発動する衝撃系魔法を使用し、タイミングだけを練習する。この魔法は剣圧を放つタイプにする予定なので、加速系を覚えられなくとも攻撃の強化に成るだろう。

エリカが正面3mに限り一条や吉祥寺並みの火力を出せるならば、それはそれで有意義だ。調整した結果、扱い易い直線上ではなく、弧

を描いたりするかもしれないが、ランダム化しなければ目を瞑れる範囲と言えぬ。

「んじゃオレは出力強化を抜く感じでいいのか？ 代わりに加速入れる感じで」

「そうだな。身体能力で五倍を出した時の速度に合わせて、弱めの加速系を入れてスイッチできるようなしておくことにしよう」

レオの場合は練習して居ると疲弊していつまでも復帰できない。

だから通常時は三倍強くらいにしておいて、出力強化した時の速度に合わせた加速系で移動力に慣れて行く。後は体力が戻った時に、保険に不壊魔法を使うくらいで十分な練習ができる筈だ。

「それで深雪にはどんな魔法を用意するの？」

「何？」

正直な話、大いに戸惑った。

深雪は安全圏に置いておきたいという感情と、逆に冷静に考えれば敵のスケジュールを無視できる存在としては大きい。

感情が殆ど無い俺は滅多なことでは揺るぐことは無いが、例外である深雪に関しては感情が冷静な思考を追いやろうとしている。

「私も専用の魔法を頂戴したいです。駄目ですか、お兄様？」

「そうだな……」

だがそれも深雪が頼み込むまでの話だ。

俺の事を心底心配する妹に対し、無関係な所に居てくれとは言い難かった。

「判った。無茶はさせたくないができるだけ……っ!? いや、そうだな。深雪にも積極的に協力してもらおう」

「本当ですかお兄様!? 深雪もお兄様のお役に立てるのですね!」

不承不承であるが領こうとした俺の前で、とあるモノが病室にやってきた。

程度の差はあれ今や病人の基本的な世話の為に利用される存在であり、高品質のモノが学校でも研究される対象だった。

「学校に3Hがあったな。黒幕に見つからない様にアレを買い取って人型サイズのCADとして改造しよう」

「ビューマノイド・ヘルパーをCADにするのですか？」

深雪が首を傾げるのも無理は無い。

いかにCADを大型化しても限界があるのだ。3H……人間型のアンドロイド・サイズでも意味は無い。ハッキリいって深雪の能力であれば汎用型のCADと共に、コキュートスやニブルヘイムの補助特化型でも作った方が良くくらいだ。

「今は意外に思うかもしれないが、深雪も納得してくれると思うよ」
ただし、普通の使い方をするならばの話。

ある一点に置いてCADの大型化は意味があり、だからこそ囿にしているメルトダウンのユニットも車両サイズなのである。

真意を話し、少なくとも黒幕が想っているよりも多くの戦力を用意出来たと、深雪を説き伏せることに成功した。

こうして戦いの準備を行いながら、俺たちは当日を迎える。

●氷獄と煉獄

新しい魔法や装備に関しては、柳大尉や藤林中尉をモデルにした装備を造ることで大隊の協力も得ることができた。

考えて見れば深雪に用意する魔法は大隊の装備にも近い物があり、新しい物好きな真田大尉としては大いに興味が出たのだろう。

また個人の資質に頼りがちなレオの魔法はともかく、エリカの加速系や衝撃系はシビアな『幅』さえ考慮すれば、精鋭である大隊ならば調整可能な範囲だ。

「ミスター・シルバー。御招きに預かり光栄です」

「いえ、こちらこそシリウス少佐の協力を得られて幸いです」

シールズ女史はやはりシリウス少佐だった。

あれから政府を交えた交渉を踏まえて、お互いに譲歩した結果が今の状態だ。

UNSA側がどれだけ偽情報を信じて居るかは別にして、脱走兵討伐の為に戦力を送ってきたという体裁である。

「メルトダウン……我ではそう呼んで居るのですが、その人形は必要なのですか？」

「我々はメルトダウンと呼んで居ます。これは別の魔法の実験用です

よ」

俺の周囲で作業をしている3日を見て、シールズ女史……シリウス少佐がうろんげな目を向けた。

人形遊びの趣味でもあるのかという問いなのだろうが、俺としてはそのつもりが無いので首を振っておく。

「新しい魔法……この期に及んでですか？」

「今だからこそですよ。ニブルヘイムの別バージョン、受信型のヘルヘイムと俺は呼んで居ます」

俺の言葉を聞いて、シリウス少佐の気配が露骨に変わった。

顔色は変わらないが幻影だから当然だろう。だが自爆用と聞いて心静かに聞ける筈が無い。

「俺の世話を焼いているのは動かしているのが妹だけです。中身は戦術級魔法の危機で埋まっています」

仮の名称をニブルヘイム（氷の国）と同じ場所ともされるヘルヘイム（死の国）と名付けたのだが……。

この魔法は俺がサードアイで衛星照準で撃つのは逆に、各種通信機能を使って特定の場所に発生させるモノだ。

もちろん一定の場所にしか発生しないので、トラップにしかならぬ。だが深雪を安全地帯に置いた上で、その協力を得られるのだから研究する意味はあつたと言えるだろう。

「実は俺の師匠……。九重・八雲も今回の襲撃事件に協力を申し出てくれています。しかし、一定の範囲から接近していません。お判りですな？」

「そこまでしてアレを守るとは本気なのですね……」

正確には侵入者を確実に葬る為なのだが、それを口にしても仕方あるまい。

師匠が接近しないのは別の理由……。黒幕対策に動いているからだと思うが、それも伝える必要は無い。

トラップの方向転換が可能なのは言わなかったが、最低限のことは伝えておいた。

後は配置などの相談をするかというところで通信が入った。予想

よりも早い、相手もこちらの想定を上回る為に行動して居たのだろう。

『少佐！ 脱走兵の反応を発見しました！』

「ただちに向かいます。……ミスター、まずはこちらに任せてもらいますよ」

「構いません。先に発見したのはそちらですから」

手柄争いなどする必要は無いし、仮に政治筋で官僚が何か決めて居ても俺には関係ない。

結局のところ襲撃差の戦力が減れば問題ないので、まずはお手並み拝見と言ったところだ。

まずはセオリー通りの迎撃から始まり、隠れて居た本命が進軍を開始。

これを予想して居たらしきスターズが二の陣で無理に対応したと見せて、抜けた所に遊撃隊が襲い掛る。

突破された二の陣はそのまま包囲網として加わるのだが……。

『フォーマルハウトの彼方よりやって来い』

敵の中心人物であるアルフレッド・フォーマルハウト元中尉が古式魔法の詠唱を唱え始めた段階で様相が一変する。

周囲に熱波が立ち込め始め、灼熱の炎を流星の様に引き始めた。

『不浄の森を焼き尽くし、一切の混沌を滅つさんが為。現れ居出よ！』

— 神威召喚!! 魚座に封じられし暴帝よ! —

手元のサイオン計とプシオン計が全て振り切れ、特に霊子災害級のプシオンが零れて居出る。

ソレが現われた瞬間にただの余波で……魔法による炎がノーコーストで周辺を焼き尽くし始め居た。

存在するだけの炎を伴う三味真火。

老いも若きも区別なく焼き払う神の火が、眼前に立ち塞がる全てのモノを焼き焦がし始める。

スターズであろうと物の役に立ってはいない。大量に放射されるサイオンとプシオンで気絶しなかった、運が良い一部の連中だけが高速で逃れて居た。

「自爆覚悟の魔法で状況を打破するのは、連中もだったか……迂闊だったな」

「敵が勝手に減ったのは良いことなんだろうけどよ。達也、コレどーすんだよ」

「炎で出来たクジラというか、それともドラゴンかって言うところね。ちよつと刀で斬るには大き過ぎるわね」

もはや呆れるほかは無い。

存在するだけで霊子災害を引き越し、周囲を燃やすような相手に付ける薬も爆薬も無かった。

あとは嵐が過ぎ去るのを待つのみだが、このまま放置する訳にはいかないのが残念だ。

「二人は一度演習場から出て奴の仲間を見付けてくれ。アレが出て来ると知って居るならば陽動が済み次第に撤退して居るだろうからな」
「達也は？」

俺は首を振ると、深雪が動かして居る3Hを抱き寄せながら地図を示した。

このまま放置する訳にはいかない以上、ここで何とかするほかあるまい。

「奴の目的通りにユニットを破壊させれば気が緩むだろうし、あのまま本体が無事とは思えん。俺は予定通りにここでヘルヘイムを発動させる」

「それって危険じゃない？ なんならあたしが……」

俺はエリカの申し出を断り、吐き出される炎の規模と速度を示した。

ハッキリいって、少々の速度で振り切れる相手ではないのだ。

「アレは速度で何とかできる相手じゃない。前にも話したが俺には再生魔法がある。他人に対する条件と、自分自身に対する条件で難易度が大きく違うから俺だけなら何とかなる」

「……」

実際には雲散霧消で削り取る事も視野に入れているが、正直なところ自身が無い。

フレイムヘイズであれば宿している人間を消せば済むが、紅世の徒である場合は存在の力を削り続ける事が出来るだろうか？　そもそも干渉レベルの差で弾かれかねなかった。

「深雪のヘルヘイムは、今回の命綱だ。任せたぞ」

『は、い。お兄様。お任せ、ください』

俺は3Hを抱えて所定の場所に移動させると、凍気が十分な力を持って機能する位置までアレを引き寄せることにした。

跳躍の魔法を利用して木々の上を飛び跳ね、注意を引きつけながら不規則に移動していく。

「どうやら正気を失っているようだな。……まあこの出力で冷静に行動されたらかなわんが」

跳躍を繰り返しながら、時折、飛行魔法を交えたと面白い様に熱閃を回避できる。

逆に言えば冷静に撃たれたら即死する訳で、苦笑いすら顔に浮かぶことは無い。

だが不運というものはある物だし、相手が冷静さに欠けて居てもやり方次第で当てる事も出来る。何しろこちらの攻撃が殆ど意味を為さないのだ。

「ぐあつ!?　ちいー!」

その内に炎が足を掠め、炭化を通り過ぎて一瞬で消失した。

影だけが足元に残る不気味な姿を残し、転倒しながら俺は再生を行使して再び起きあがる。

「神経ごと焼き払われるのが幸いしたな。苦痛を感じる暇も無い」

そんな筈は無いが、せめてそう言わなくてはやって居られない。

脂汗を流しながら細心の注意で移動し、クジラにもドラゴンにも見える敵を引きつけながら苦心して移動する。

だが何度か受ける広範囲の炎や、超高速の熱閃は避けきれない。辿りつく前に徐々に追い詰められていった……。

偽りの最終決戦：後編

●魔砲合戦

富士演習場が燃え上がる。

迎撃部隊も罨も焼き尽くし、魚とも竜とも区別がつかない赤の化け物が緑の森を蹂躪していく。

「まったく。人間と戦っている気がしないな」

絶叫を上げる炎の塊は、右往左往しながらユニットを目指している。

正気を失ってはいいても、当初の目的そのものは失っていないと言うところだろうか。それとも方向性さえ合っていれば、あの火力であれば問題無いというべきだろうか。

極論を言えば深雪もコキュートスを延々と使えば似たようなことができるが、これほどの長時間に渡って魔法を使い続けるのは危険ではない。

「3Hは無事、レオとエリカは奴の援護を止めに行ってる。……予定通りではあるが保険が全て吹っ飛んだのが痛いな」

精霊の眼で探ると咄嗟に防護し黒コゲで済んで居る一部を除いて、USNAの部隊が根こそぎ消え去って居る。

奴を追い掛けて居たので仕方の無いことだが、当てにしていた戦力が消えたのは痛い。他にも勝手に入り込んで居る国防軍も居るには居るが、連中に戦力として期待するのも間違いだろう。

「となると師匠に頼むか、間に合う内に『サルベージ』するのだが……仕方無い」

師匠にはこちらを利用する形で良いとまで譲歩した上で、黒幕対策を頼んでいる。

ここで迂闊に接触して黒幕に警戒させるのも惜しい。となればリスクを覚悟でもう一つの手段に頼らざるを得まい。

「聞こえて居るか？ 魔法力は失われて居ないなら援護して欲しいんだがな」

黒コゲに成ったシリウス少佐を再生で元の状態に戻す。

湧き上がる劇痛を無視して可能な限り静かに用件を伝えた。

「……………え……………？　生きて、る？」

CADも修復しはしたが、少佐が強く認識して居るモノ以外は無理だろう。あくまで記憶に焼きつくほど把握できている装備だけが取り戻せたに過ぎない。

「俺の切り札は再生魔法だ。コストは有用性に比例して大きいから、少佐以外は相当な取引になる」

「リーナでいいわ。……………残念だけど、あのレベルに対抗できるのは私一人でしょうね」

魔法力が失われて居ない事を、幻覚魔法で素肌を覆い隠す事で答えた。

遠距離攻撃力が重要な状況でソレを行う余裕があるならば、戦力としては当てに出来るだろう。

「作戦は当初の通りだ。メルトダウン本来の使い手も向かっている筈だが、基本的には俺達で倒す」

「ならコースから外れないように余力を少しずつ削っていく必要があるが、りそうね。まったく……………衛星照準も霊視誘導も使えないのは痛いわ」

富士の樹海は元からそういう要素もあるが、何よりこれだけの炎禍と霊子災害が発生している。

今もまきちらされるプシオンとサイオンにより、レベルの低いSBが無数に引き寄せられている。衛星で探るところか、オペレーターに霊視で探ってもらうのも難しいだろう。

「直接視認だと相手の視線照準の方が早いからな。狙いが荒れるのは諦めるしかない。できるか？」

「出来るけど……………。フレディがここまでの力を振るえるだなんて……………」

装備をチェックしてCADを操作し直すリーナに、俺は少しだけ首を振った。

今さら説明しても仕方の無いことだが、迷ったまま戦われるよりは良いだろう。

「君も自滅覚悟でムスペルヘイムを使い続ければ似たようなことはで

きるだろう?」

「寄生して居るパラサイトの生命力を含めて、生き残る選択肢を捨てて全てを破壊に振り分けたってこと? それなら判らなくもないけれど……いえ、それなら戦いようはあるわね」

あくまで奴は自滅を承知で魔法を行使し続けて居るだけだ。

瞬間的に戦術級魔法を使える魔法師自体は少なくは無いが、それを長時間使える人間など殆ど居ない。突くとしたらその辺りだろう。

「ミスターシルバーの再生魔法は消失する弾丸の形状を保てる?」

「レールガンか? 無理だな。物体の方が楽ではあるが、そんな便利な使い方はできない」

電磁砲を魔法で造り出す技術はあるが、専門の弾丸無しには難しい。

適当な物体を弾丸とした場合、早期に摩耗してしまうのでソレを俺の再生魔法で何とかしようとしたのだろう。

「となると分子ディバイダーが頼りね。流石にヘビィ・メタルバートの許可は降りて無いし」

「それならこいつを持って行け。分子ディバイダーとほぼ同じ機能を持つ筈だ」

リーナに投げて渡したのはメルトダウンを放つ際に、邪魔になるモノを先んじて除去する為の分子ディバイダーもどきだ。

計測に不備をもたらす物を排除する為の先導弾として使うことを想定して居るので、魔法で飛ばしてからも十分に発動できる。

「出力の方は使ってみないと判らないけれど……。先に造って居る身としては良い気がしないわね」

「先行する者の不利は今に始まったことじゃない。参考にされるのが嫌なら門外不出にしまっておけばいい」

とはいえそう言う訳にもいくまい。

ある程度隠す必要のあるヘビィ・メタルバートと違って、分子ディバイダーはUSNAの力を誇示する為の存在と言っても良い。

理論はそれなりに外に公表されているし、使い方なども特務部隊を見張って居れば調べるのは難しくは無い。

「レーザーはプログラムすれば勝手に移動を……」

「その辺の説明は要らないわ。こっちは本家だし独自の使い道があるもの。……じゃ、私は行くわ」

リーナは使うと言いながら、実際にはUSNAのデバイダーを使う気の様だ。

自分の装備を確かめた後、念の為に周囲を探って他の兵士が落とした物を予備武器にして居る。どうやらレーザーは余裕がある限り、未使用で持ち帰って解析だけをしようだ。

「……夢見ながら、待ち居たり」

（「遅延術式と目標マーカーを併用するのか。……面白い使い方だな」）

リーナが飛行しながら使用して居るのは、魔法の射出方向を設定する設置型の魔法だ。

例えば分子デバイダーは刀身から真つすぐ伸びるか、刃を覆う様に発動する。だがあの魔法を使用する事で、相手が想っても居ない場所から発動できる。

それも普通に遅延術式で使用したのではコストが大きいが、マーカーだけを設置するのだから数を『置いて』も消耗は少ないだろう。

「ではこっちも誘導を行うとするか……オン・メイ・シユラバヤソワカ」

もはや俺レベルの振動魔法など何の役にも立たない。

加えて奴の撒き散らす熱閃で周囲の監視体制も消えて居る。今ならば遠慮は不要だろう。

「……リーナの電撃もあまり効いては居ないな。だが、目くらましには丁度いい」

雲散霧消で奴のまとう炎の表層を消し去り、電撃の到達距離を手助けしていく。

あるいは気がそれた所で直接本体の細胞を消し去り、リーナに向かった攻撃的意識を再び周囲に散らすようにしていった。

その攻撃は時に無意味で、時にそれなりのダメージを与えて行く。事象改変の及ばない位置で造られた炎や熱閃であろうとも、削り取

りながら使えば効かないと言うほどでもない。

当然それだけ奴の意識が本来の目標から反れ歩みが遅くなるが、リーナはともかく3日周辺に炎を叩き込まれたら意味が無いので丁度良い。コントロール可能な進撃速度で移動してもらった。

「アクテイベイト！ ダンシングブレイズ！」

（「俺の援護に気付いたな。合わせろということか」）

リーナは奴の視界を掠めながら飛行し、カーブを描いた段階で数本の短剣を死角に投じた。

短剣に紛れて分子ディバイダー用のブレイドが飛んだのが見えたが、それだけでは奴に焼かれて届きはしまい。俺は雲散霧消で炎の一部を消し去り、短剣を無事に命中させた。

「アクテイベイト！ 分子ディバイダー！」

新たに生み出され続ける炎で短剣はアツサリ消滅するが、分子ディバイダーの刃はそうもいかない。

元の事象干渉力はリーナの方が優れて居る事もあり、奴本体の腕を切り落とす事に成功したようだ。

「これでさっきのマーカーを利用してでも応用技だと思っか。……こちらでも精々利用させてもらおう」

雲散霧消を使用するのに遠慮は不要だが、それで無制限の使用をするのは愚か者のすることだ。

師匠クラスの魔法師が敵であれば、SBなり使い魔の侵入に成功しているかもしれない。次なる分子ディバイダーの一撃に紛れて穿つべく、監視に用心しながら狙うことにした。

だが正気を失った相手でも、効果的な反撃を行えることもある。

詳細な行動や先を読む様な作戦は無理でも、逆に愚かの極みを戦術レベルまで高めることはあるのだ。

『ギィオオオ！ シェアアア！！』

「炎のブレス!? これだけの消耗中に正気なの!？」

元より正気であるはずがない。

並みの魔法師ならば一撃で昏倒しかねないレベルで、猛烈な炎を吐き出した。瞬時に熱閃と化してリーナの回避機動全体を包みこんで

しまう。

「……まだまだ！」

（「間に合ったか。今はまだまだリーナに目を引きつけてもらわねば困る」）

火傷を直した反動を圧縮して感じながら、リーナが動きを取り戻したのを見届ける。

今の状況が続けば先ほどのブレスも、あくまでリーナ周辺を狙うだろう。正気を失ったがゆえのランダム性もあるだろうが、それでもHが居る方向に吐かれる訳にもいかない。

●終末に向かう世界

戦いは既に五分を越えており、リーナの戦闘力を大いに証明して居る。

最初は焼き殺されたほどの熱量すら、熱遮断の術式でことなきを得て居るほどだ。

「アクティベート！ ダンシングブレイズ！」

（「今度は幻影か。虚実を混ぜた戦いは流石だな。何より本命を覆っているコーティングが見事だ」）

短剣の幻影は炎に巻かれた瞬間に消え去るが、姿を隠した短剣はそうでも無い。

ソレは透明化の魔法を掛けて居るのみならず、熱遮断の効果で炎の中でも原形を保っていた。分子ディバイダーのみならず、普通の短剣ですら効果的に使える辺りは頭脳も冷静さを取り戻して居るのだろう。

「そー！ 目覚めの時よー！」

自身で切り込むと同時に、先ほど設置したマーカー付近で分子ディバイダーが発動する。

複数の角度から斬撃を浴びせながら、投じた短剣を高速で誘導して奴の背中に突き立てることに成功して居た。二重三重の攻撃はそれぞれが囷であり、それぞれが必殺だった。

お手本の様な殺陣とはいかないが、見事なソードダンスと言えるだろう。

奴は生きて居るのが不思議なほどの傷を負っている。

それでも動けて居るのは正気でないから痛みを感じて居ないからだろう。むしろ不思議なのはこれほどの火炎を放ち続けていることだが、もしかしたら儀式系の魔法で蓄えて居たのだろうか？

「とはいえ、そろそろ終局だな。3H……いや深雪。準備はいいな？」

『はい。お兄様』

俺は3Hを抱え上げると、遠距離から動かして居る筈の深雪に声を掛けた。

いよいよ受信型ニブルヘイムであるヘルヘイムを使う時が来たのだ。射程距離は固定で有る為に、この状況では俺が運ばざるを得ない。

「揺れるとは思うが確り捕まって居てくれ」

『それでしたら、この様にした方が、确实ですね。この体は、甲冑だとしても、思っ、てください』

俺の首に回す様に3Hが両腕を回してきた。

抱き締め合って居る様に見えるが、甲冑だと言うならまあ許容範囲内だろう。

幾つもの魔法を併用できるリーナと違って、俺には許容量が少ない。

飛行魔法ではなく移動距離に特化した跳躍魔法を使用し一気に奴の足元に忍びよる。3Hに掛けた指の力を弱めながら幅射熱の中を飛び抜けた。

「後は任せました！」

『お任せ、ください。お兄様』

完全に力を抜いて手を離しつつ、雲散霧消で3Hの前方から一定領域を取り除いた。

転がる3Hの周囲から猛烈な冷気が立ち込め始め、蒸気すら凍らせる凍土が出現し始める。

真っ白に、真っ白に。ただ真っ白に世界を染め上げて行く。

普通にニブルヘイムを使用する場合は自身の生命を守らなければならぬ、だが受信型のヘルヘイムであればその必要は無い。

全ての力を減速系に割り振った強大な魔法が奴を捉えて行った。

「やったと思う？」

「確認するまでもないな。途中から死に体だった。余剰エネルギーで動いて居た相手にトドメを刺したに過ぎん」

むしろ問題なのは下つ端ないし利用された連中を片付けただけだ。

黒幕はここぞとばかりに動いて来るだろう。妙に張り切っている国防軍の反応を感じながら、俺は動きを待つことにした。

茶番

●動き出す影

炎が鎮まるにつれ招かざる客……国防軍がやって来る。
演習場の管理を任せて居た内の一人の反応があることを考えれば、
連中の息が掛って居たのだろうか？

九島老師の息が掛って居る筈とは思いつつも、適当に捕まえて案内
させているだけかもしれない。連中の言い分を聞くまでは現状では
何とも言えないのだが。

「ミスター・シルバー！ これはどういうことですかな?！」
「どうも何も実験中にテロリストに襲われて迷惑して居るのは、こち
らなのですが」

顔色が窺い易い馬鹿役に任せて、連中はこちらの意気を封じに掛つ
た。

これだけで程度が知れるというものだが、まずは後ろで出番を待つ
て居る方に話を聞くべきだろう。

「あえて申しあげるならば、UNSAからの見学を認めると押しつけ
て来た上に、実験も完全に終了しないうちから押しかけて来られても
困ります」

「その様な事は存じ上げません。少なくとも国防軍からUSNAの御
客人をご招待した覚えはないのですよ」

おや？ と疑問に思うほどの事ではない。

国防軍にも派閥がある以上、別部隊……いやセクションが違えば同
じ隊内ですら知らぬ存ぜぬは良くあることだ。

不思議なことがあるとすれば、怒鳴りこんで居る馬鹿役以外にも同
感だと言う表情を浮かべている者が多いことだろう。

「そもそも演習場を一方的に封鎖し、日本の財産であり国家を守る兵
器である戦略魔法や戦術級魔法を他国に見せるなど言語道断!」

「その通り。外務省のみならず国防軍が要請などして居ない以上は、
これは外患誘致に当たる大罪に当たりますぞ」

（「どういう茶番だ……?」）

戦力が欲しかったので受け入れたが、外務省を通じて押しつけて来たのは確かに軍の方だ。

UNSAに近い筋が無理やり押し込んで来たわけだが、それを無かったことに出来るほどの事が、この連中に出来る筈が無い。例えば口裏を合わせたとしても、問い合わせればどこかに証拠が残る問題なのだ。

〔書類自体はお互いに偽装だと言いつつにしても、ここで反論して納得させるべきか。それとも放置して推移を見守るべきか……〕

取れる選択が在ることが、返って俺の行動を躊躇させた。

何しろメルトダウンはでつちあげた偽物の戦略魔法だし、ヘルハイムも所詮はニブルヘイムの亜種にしか過ぎない。ここで奪われても別に困ることなど無いのだ。

〔待てよ。仮に黒幕の差し金で、この連中はスケープゴートだったとして、どうして師匠は介入を起ささない？ 忠告すらする必要が無いのか、それともそこに意味があるのか〕

もし師匠があえてこの事態をスルーしたとすればどうだろう？

その時、俺の背中に走るモノがある。この馬鹿げた茶番劇が黒幕の差し金であり、その正体を浮かび上がらせる為に必須条件であるならば……。

〔もしそうなら、師匠が止める筈がない！ 俺に黒幕の正体を教え、更に影から出て来なかった状況から踏み出させるには打ってつけだ〕

ただの偶然で愚か者の集団が、さきほどの激戦を見て直ぐに動くようにするだろうか？

逆に黒幕に利用された部隊が、何らかの事情でそそのかされたと考える方が自然だ。素直に接收させれば良し、仮に俺が暴発して始末したとしても、それを理由に取り上げることができる。

……そこまで考えておかしなことに気が付いた。

この連中の注意はメルトダウンのユニットではなく、ヘルハイムを使用したことで壊れかけて居る3Hの方なのだ。普通に考えれば逆はあってもこの優先順位はない。

「本当に欲しいのはヘルヘイムの方なのか？ それとも黒幕たちの中で意見が割れている？」

本来は管理して居る者を抱き込んで、密かに情報収集だけをする方が黒幕らしいと言える。

強力な電子戦技術者が用意できていれば、俺が勝利に浮かれている間にそれなり以上のデータを奪えそうに『見える』からだ。実際には藤林中尉も居るし、管理自体もかなり厳しくしているのだが……。

「衛星監視も霊視も不可能な状況だった。結果の全てを外から、あるいは職員目線で見れば3Hは受信機ではなく、魔法を使用出来る新兵器に見えなくもない」

捨てても良い駒を利用して、戦略魔法と同時に新兵器を入手する。

それも魔法を使える人形兵器であれば、軍隊のみならず何処の組織でも有用だろう。意見が割れてもおかしくはない。

「偶然ならばともかく、故意であれば見えて来る者があるな。ようやく居所が判って来た」

九島老師が演習場を抑え、更に外務省を通じて要請したことを一時的にでも無かったことに出来る。

そんな相手はかなり限られてくる。そこらの官僚や軍人を抱き込むのとはレベルが違うのだ。

「だが相手も十師族ならば話は別だ。今の状態は一時的な処置。戦略魔法と新兵器を手に入れた後に、他者に詰め腹を切らせられるからな」

十師族の中でも軍に影響度の高い家ならば、今の状況を意図的に造り出す事もできるだろう。

それほどまでに彼らの力は強く、魔法師社会のみならず深い根を降ろして居るからだ。

とはいえそれを可能とする家はそう多くない。

コネクションだけならば三・四・七・九・十と半数に上るが、上層部と交渉抜きに現場を動かすのはかなり難しい。狙ってやれるとしたら極一部に限られる。

「三矢家は可能でも商売上無理はすまい。一番の容疑者は七草家だ

が……もう一つ大きな動機を持つ家がある」

正確には家では無く、人物というべきか。

その人物であれば最近起きて居る事は十分に可能。今日の事を知らぬ振りで情報入手をする事もでき、かつ今の暴走を誘導する事など容易いと言える。

「リーナ。確認したいことがある」

「何よ？ 言っておくけど日本軍のことに口出しはしないからね」

日本軍ではなく国防軍なのだが訂正する必要は別に無いだろう。

それよりも彼女であれば知っていること、婉曲的にでも感じている事がある筈だ。

「あんな茶番はどうでも良い。俺が聞きたいのは、九島でお前を世話して居た周チヨウという人物は華僑かということだ」

「……？ そうだけど有名な魔法師なの？」

全てが繋がった……。

俺の勝手な思い込みで妄想かもしれない。だがこの考えが本当であれば、全て証明できるほどに一本の線で繋がるのだ。

「その人物かはともかく、華僑のネットワークで情報が漏れている。次に出逢ったらフィルターを掛けて話しておいた方が良いな」

おそらくは大漢の残党であり、大亜連合と敵対する魔法師だろう。

その周チヨウという人物自体は九島老師に雇われて、大亜連合相手のエージエントでもして居たのかもしれない。だが裏で黒幕のネットワークに繋がって居たのだろう。

十分な情報と戦力のバックアップと引き換えに、九島老師経由の情報を通し、あるいは華僑ネットワーク経由の情報を通し、これまでやって来た行動を用意にすることができる。何しろ演習場を抑えたのが老師ならば、リーナの留学支援をしたのも老師。藤林中尉の祖父であり、七草家の当主からみても師匠に当たる。

（二問題なのは老師も黒幕の一人なのか、それとも利用されているのか……か）

この考えが正しいのか妄想かは別にして、九島老師には大きな動機

がある。

まず十師族が軍部に根を張るのを良しとしておらず、四と七の家が勢力回復するのを快く思っていない。さらに。魔法師のみならず軍の相談役でもあるが、魔法師が戦争に行くことを好んで居ない。

「老師であれば3Hが魔法を使ったと聞けば回収命令を出してもおかしくはない。黒幕陣営を割る価値があると思ったのか、それとも利用するのは今回の襲撃を対処したことで十分と思ったのか」

もちろん老師自身が首領であったり、逆に利用され洗脳すらされている可能性もある。

相互に利用する帰還が終わり、老師がワザと証拠を残したという可能性も無いではないが、それは俺の希望的観測だろう。

「それでは外観誘致の容疑が晴れましたらこれらはお返しします」

今回得た情報を前にしては、国防軍が持ち去ったモノなど何の痛痒を感じない。

どこか空々しい言い訳に頷きながら、俺は思い至った考えに戦慄しながら、密かに調査する必要を感じて居た。

●反撃開始

九島老師の身边が怪しい。

そう思い至ってから暫く、調査の要に設定すると色々な情報が出てきた。

「平河が？」

「ええ。調べて見ると九校戦の辺りから周チヨウという男性と、交流が始まって居たようです」

亜夜子たちにはこちらの情報網に刺さって居た『枝』を探ってもらっていたのだが、九島老師身边の人物を代入するとアツサリ答が出た。

周チヨウという人物は老師の元でエージェントをしており、平河・千秋にも繋がって居たのだ。

「慣れ染めはCADの持ち込みで起きたトラブルを解決してもらったそうですけれど……。他にも魔法面での相談で随分と傾倒しているようです」

「他にも九校戦のトラブルを収めたり、横浜での戦いにも協力したとかで、とても尊敬して居るみたいでした」

「そういうえばそんな話を聞いた様な気がするな……誰かに助けてもらったと」

複合型デバイスの登録あたりで聞いた話だったか？

言われてみれば九校戦で小さなトラブルは起きて居たようだし、それ以降で平河が色々提案していたのも確かだ。徐々に仲良くなりつつ、ローゼンや俺達の近辺から情報を抜いていたのだろう。

「平河さんに注意を促しますか？」

「せっかく枝が判明したんだ。迂闊に触って蜘蛛の巣にひかっける事は無い。接触可能な情報を制限すればいいだろう」

「御当主様の御意向にも合致しますわ。そのまま利用して……必要ならば、切れ。と」

頷いて見せるがそこまでする必要はないだろう。

周チヨウとやらリにとっても何時でも切れる枝に過ぎない。利用価値が無くなれば捨てるだろうし、比重が大きくなれば平河に接触して来る回数が増えるだけだ。

「これより以後、平河には何の期待もしない。あえて処分しようとも想わないが、ウイルスや自爆装置を渡されている程度の懸念は常に持つておく」

「その判断を保てるのであれば、何も言うことは無い。とのことですが話を続けてはいるが、頭の中では情報の精査を行っていた。

九島老師関連の人物を代入した結果ではあるが、ただの偶然なのか、それとも本当に俺の考えが正しかったのか？

ローゼンとの交流で得た発想、九校戦で試した技術、横浜戦に向けて用意した様々な術式。

それらに平河は少なからず関わってきたし、彼女を経由して情報を抜いていたのならば、その関与は限りなく黒だろう。状況証拠ではないが九島家の中に巣喰っているのは間違いない。

「九島家に関しては時間を掛けて追及していく。その過程で老師が連中を放り出すか、俺達に掃除させるならばそれ以上は何も言わない」

「流石に老師が判断を見誤るとは思えませんが……。過信は禁物ですわね」

老師ほどの人物が判断を間違えるとは思わないが、『九島家としては他家である四葉よりも手飼いにした大漢残党を有益に思うかもしれない。』

一応の当主である九島・真言は俗物的な人物とのことであるし、老師は放置する気でも息子の方が手放さない可能性はあるだろう。何しろ四葉と七草が沈んで居る今の状況では、九島家こそが十師族で上位に居ると言っても過言ではないのだ。

「それと……これは懸念段階なのだそうですね、外患誘致に関して出頭命令が下るかもしれないとのことです。達也さんとしてはどうされますか？」

「……なるほど。解析でき無かったようだな」

「どういうことですか？ あくまでこの間の説明を求めているだけだと思いますけれど」

亜夜子は面白そうな顔で、文弥は驚きと不満が混じった顔で俺の方を見る。

底意地の悪い見方をするのかどうか、この別れ目だろう。

「どう考えてもあの件で俺を引っ張れる筈が無い。現にこちらの出して居る遺憾の意に、官僚筋から詫びが入って居るくらいだ」

「つまりね。達也さんを脅迫するか個人的に交渉して、技術や情報を引き出したいと言う事よ」

当然なのだがマルチダウンのユニットはでっちあげなので、分子デバイスダーの大型版以上の解析ができる訳が無い。

3日に至っては受信機能しか付けて無い上に、それらの機器はヘルヘイムによる極低温で壊れて居る筈だ。ニブルヘイムのように自身を守る設定が必要無い以上、損害は大きい。

「そんな！ 完全に言い掛りじゃないですか。相手する必要なか無いんです」

「その通りなんだがな。ただ、虎兇を得る為に虎穴に飛び込むか悩む所だ」

流石に脅しが通じるとは思っていないだろうが、金や地位など約束されても困る。

結局のところ、黒幕に至る為の情報こそが何よりのリターンだ。周が黒幕なのか、それとも他に居るのか。そして戦力はどの程度なのか。

「まあ正解を想像するのであれば、証拠固めと弁護人の準備だけしておいてどっちでも良い様に待ち構えるところだろうな」

「言い掛りに対してお疲れ様です。それで何方にコンタクトを？」

暴論とは言え老師のコネクションを利用して放たれた召喚であれば、相応の人物でなければ介入どころか場所を突きとめるのも難しい。

そのことを亜夜子は暗に尋ねたのだが、俺としては苦笑するしかない。

「面倒だからな。その辺りの調整を請け負った人間に、直接頼むでしょう。……七草先輩のラインは止められているだろうから、ここは一花先輩に頼むか」

「まあ、七草家の御当主にですか？」

この間の師族会議で四葉の分家が幾つか表に出た頃、市原家は七草家のツテで一花家として復帰した。

そこに至る業績などは特に存在せず、四葉も七草も自分の勢力を拡大する為にやったのだと言ってよい。その意味では一花家から七草家に話を持ち込む事が出来るだろう。

「七草・弘一氏は色々と画策するのが好きな性格らしいからな。下手に動かれるよりも直接『お願い』した方が双方の利益になるだろうさ」
どうせ老師には色々持って行かれて居る。

最初からダミーでしかない技術を渡すことには異存など無いが、奪われるよりも交渉の材料にした方が遥かにマシだろう。

老師だけでは無くUSNAが仲介を頼んだリストの中に入って居る可能性も高く、証拠も証言も集め易い人物には違いない。

時間を短縮する意味でも交渉するならば、この男が最短だろう。

こうして俺たちは黒幕の陰謀を跳ね除け、逆に尻尾をつかむ為の交

渉に挑んだ。

変転する運命

●偶然が描く理想郷

七草・弘一に一花先輩経由で面会を求めたところ、意外なほどの早さで返事が戻ってきた。

その奇妙な条件には首を傾げざるを得無かったが……。

「四葉に属する僕達だけならともかく、琢磨くんまでとは思いませんでした」

「交渉をカモフラージュする意味では間違っではないがな……」

正式に呼ばれたのは俺、文弥、そして七宝の三人。

七草家の屋敷ではなく借り受けた大きな庭園に招かれ、俺たちは紋付き袴を余儀なくされた。

もちろん旧正月を祝う為では無く、七草家の勢力に所属する女性達とのセツティングを世間体なお題目にしているからだ。

「でも七草の娘と見合いなんて……っ」

「カモフラージュと言っただろう琢磨。我慢しておけ」

「そうですよ。お兄さまも我慢していらっしやるのですから」

正式に呼ばれたのは男性陣三人ではあるが、深雪達が訪れるのも禁止されてはいない。

むしろ一条を呼びつけることで、見合いと言うコンセプトをこれもかと主張して居た。

「でも深雪さん。何を企んでるのかしら？」

「あら、私は何も考えて居ませんよ。お兄様のお役にたてるならば…….と思っただけです」

亜夜子の視線に深雪が静かに首を振る。

振り袖姿が実に似合っているが、その表情に変化は見られなかった。

「名倉と申します。本日は主人の使いでお迎えにまいりました」

「お手数をおかけします」

暫く待つて居ると、名倉と名乗る男が迎えに来た。

（「達也兄さん。この人って……」）

（「だろうな。あくまでそう名乗る別人だ」）

七草家の裏で動いていた名倉という男は、既に喰われて存在を消失している。

だが今日の催しが表向きであり、裏のある交渉だと示すには判り易い名前ではあった。

「あちらの棟に一条さまがお待ちです。下のお嬢様がたも御一緒されております」

「それではお兄様、また後ほど」

「ああ、深雪も気を付けてな」

一条や吉祥寺の姿を見付けたことで、深雪はそちらに軽く頭を下げ移動を開始する。

合わせて文弥たち中学生組もあちらの双子の方に通されて、予定通り七草・弘一との会談に向かった。

「司波さんと合うのも久しぶりですね」

「先輩達は三年生は必要な時だけ登校ですからね。まだ御挨拶をするほどのタイミングでもありませんし」

利用されて不機嫌なのか以前の静かな怒りが収まって居ないのか、一花先輩の顔は澄ましたままだ。俺は苦笑しながら領いて、奥の間に座って居る男に手土産のデータと共に抗議の話題を向けた。

「見合いと言うのはあくまで表向きの理由だと思っていましたか？」

「こちらの条件と老師の思惑を端的に現したつもりだったのだが、気に入らなかつたかね？」

「……っ」

七草・弘一の脇には七草先輩が張りつけたような笑顔で沈黙しており、その隣に一花先輩が座ると針のむしろが形成される。

俺は仕方無く先輩達と相對する形で着席することになったが、良く見ると渡辺先輩と千葉の次男が少し離れた場所に通されていた。

カモフラージュのはずであるが、既にペアとなっている渡辺先輩たちまで呼ぶのは演出過剰だと思われた。

「老師の思惑ですか？」

「そう直裁に進めるのもどうかと思うが……まあ良い。この光景が老

師の望んだ光景だろうと私は判断する」

七草・弘一はサングラスを外すと、若い日に痛めた目をさらけ出した。

それで本音を出して居ると信じるつもりはないが、有る程度の思惑を語る気ではあるのだろう。外患誘致の件などよりも関心度は高いので聞いておくことにする。

「七草は渡辺家や一花家などを支援して、ナンバーズにおける勢力と権益を復活させた。四葉は同様に黒羽家や津久葉家と……上手くやって居る様に見えるが、落とし穴も無いでは無い」

「老師がそれを誘導して居るから……ですか？ 何の得もしていないような気がしますが」

この男が語る内容のほかに、渡辺家には千葉家から次男を引き抜いている。

同じ様に四葉も新発田家を六塚の縁と称して、遠回しにはあるが発言権や権益を確保して居た。

しかし、そのどこが老師の思惑と通じるのだろうか？

九島の家は何の得もしておらず、あえて言うならば藤林中尉と千葉の長兄が婚姻すれば九の家として多少と言う所だ。

「負けるが勝ちという言葉もある。……現在の勢力や権益はともかく、次世代の当主達はそこまで思惑が一致するものかな？」

「リソースの分散を図ったということですか？ 確かに表向きはともかく当主の意向がどうなるかまでは判りませんね」

説明されてようやく見えてきた。

確かに七草家や四葉家の勢力や権益は復活したが、それはあくまで現当主の絶対性が保たれているならばの話だ。例えば新発田家に任せた力を、次期当主が四葉本家の為に使うとは限らない。

名目上は独立した家になっているので無条件に従う理由は無く、分家と公表して居る黒羽家とて本家に従うとは限らないのだ。

「老師の目的は魔法師社会全体の安定と円熟だろう。今のところ上手く行っている……四葉がシルバー社を抱えている件を除いてね」

「まさか……」

「俺が邪魔と言うことですか？ それは流石に思ってもみませんでした」

冷たい笑顔のまま黙って居た七草先輩の顔色が変化する。

俺個人が次世代の妨げに成っているとは、それほどまでに驚きだったのだろう。

俺としても思ってもみなかった切り口ではある。

ずっと四葉が所持する兵器としての意味合いしか無かった筈だが、それほどまでに評価されているとは思ひもしなかったという方が正しいだろう。

「所詮は学生だとは言わないで欲しい所だな。九校戦に始まって、大巫連合に対する冷静な仕切りで明らかだ」

反論しようとする俺の言葉を七草・弘一は苦笑一つで押し留めた。

苦い笑いを含ませながら、一つ一つ指摘して行く。

「君が思うよりも君の差配に注目していた者は多い。大したことは無いと言うならば、努力してもそれだけの成果を得られなかった者の立場が在るまい」

「それは……」

随分と気楽な物の見方もあるものだと思った。

俺は冷静な物では無く感情が無いも同然なのであり、やってきた事も任務の延長線上なだけだ。だが指摘された事が一つの見方であるのは事実だろう。問題なのは老師がそう確信して居ると言う事だった。

「そして今回の脱走兵に寄る襲撃事件を片付けたことで決定的になった。戦術魔法のみならず戦略魔法を作りあげ、国内に住まう勢力を一つ片付けたのだからな」

その魔法はダミーだと言っても聞く耳を持つまい。

そう誤解するように仕向けたのは俺自身であり、少なくとも戦術級魔法を二つ三つ用意したのは間違いが無いからだ。

「君は知らなかったかもしれないが、旧派に属するフレームヘイズという有力なグループが彼らには協力して居たのだよ」

「あれはフレームヘイズだったのですか……」

七草・弘一は誤解しているようだが、フレームヘイズは政治的なグループではない。

あるいは七草先輩たちの手前あえてそう言ったのかもしれないが、多少のショックを覚えていた。

パラサイトと呼ばれる異世界の住人やソレに寄生された連中の中で、『紅世の徒』と対峙する組織がフレームヘイズだ。

マテリアルバーストを狙った以上は始末するのが当然とはいえ、できれば味方に成って欲しいとは思っていたから、ショックが無いと言えば嘘に成るだろう。

「納得が行くかは別として、話は概ね理解できました。しかしこの馬鹿げた集団見合いを演出する必要は無かったと思いますが」

「君も呑み込みの悪い男だな。それとも聡明さと朴念仁は同居する資質なのかな」

喉の奥で笑う独特の笑み。

七草・弘一は意地の悪い笑顔を浮かべてサングラスを掛け直した。

「四葉が君を抱えて居るのが問題だと言った筈だよ？　うちの娘も憎からず思っているようだし、この際は一花くんでも良い。要するに君が四葉の外に出て新しい百家になってしまえば良い」

「俺が先輩達の誰かと……ですか？」

思ってもみなかった切り口の二つ目だ。

俺にそんな自由があるかは別にして、確かに四葉から出れば老師の掣肘から外れる可能性は高い。

「ちよつとお父……」

「嫌いじゃないんだろう？　一花くんもそんな感じに見えるんだが」

「会話するに値するべき相手が少ないだけです。以上」

驚く七草先輩に鉄面皮で流す一花先輩。

このやり取りも随分久しぶりだなとは思いつつ、二の句が告げないで居た。有効な方法とは言え俺の一存で対処できる問題ではないからだ。

「失礼ですがそれで何とかなかったとしても、翻意するのはあくまで老師だけ。九島の家やその下で動く者たちが納得するとも思えません

が」

「彼らは小物だよ。放っておけば状況に流される存在に過ぎん」

本当にそうだろうか？

一応の当主である九島・真言に関してはそうかもしれないが、取り入っている周たち大漢残党の導士たちはそうもいくまい。

そしてこれが最も重要な事なのだが、大亜連合に対する大漢の残党という構図だけでは無かったらどうだろうか？

大亜連合の協力者だと思っていた襲撃して来た連中が、フレイムヘイズだったと仮定するならば……。大漢残党と思っていた連中が『紅世の徒』である可能性もあり得る。

もちろんその可能性もあり得る程度なのだが、状況をみると嫌な予感が生じる。

(もし、もしも奴らが『紅世の徒』だった場合だ。九島老師が亡くなった時。九島の家を隠れ蓑に行動するのではないか？ そうなれば裏社会どころではない餌場を与えることになってしまう)

魔法師全体のオブザーバーである老師のツテがあれば、幾らでも暗躍が出来るだろう。

今現在の進行形で、各方面に潜り込んでしまえば老師が亡くなっても問題は無い。むしろ監視が無くなって好き放題に食い散らかす可能性すらあった。

そしてその考えが頭を掠めた時、電撃的に思い至った事がある。(待てよ。……既に魔法師協会に入り込んでいるならば、フェードアウトした技術者を狙う事ができるんじゃないか?)

関本先輩の様に失意のまま名前が聞かなくなった技術者が、襲われたと思わしき痕跡があった。

その時期は周チヨウが老師に取り入った可能性のある時期に前後する。そこまで考えてしまった以上、脳裏にこびりついたまま離れることが無かった。

七草・弘一の話や先輩の抗議など既に耳に入らず、右から左に抜けて行くのを感じた。

●一時の共闘

カモフラージュと取引の入り混じった馬鹿馬鹿しい会談がようやく終わりを告げた。

重要な情報を見付けたことで流されそうだった認識に急制動が掛り、俺の意識は再構築を始める。

(紅世の徒が潜んで居たとして、どうしたものかな。おびき寄せるか、こちらから襲撃するか。それとも……)

七宝や文弥たちが送迎の車から降りるまでの間に、大凡の考えがまとまって来た。

確実なのは罨の中におびき寄せることだが、この間の事があつたばかりでそれは難しい。あちらも警戒するだろうし、今やってもその辺の犯罪者を手駒として送りつけられるだけだ。

「旦那さまの御申出を受けていただけますでしょうか？」

「急ぎの返事は必要なかったと窺いましたが？ ……そもそも考慮する意義は認めても、求めて受け入れる必要を感じません」

名倉と名乗っている人物の言葉に俺は苦笑せざるを得無かった。

当面の問題を回避するには有効だろうが老師の目的の一つではない上に、今後も変化しないとは断言できない。

便乗して他の家ではなく自分の家との結びつきを求める七草・弘一の思惑など、輪を掛けてどうでも良い。

「当面という意味では、魔法師の極北たらんとする四葉の目的にも合致するとは思いますが？」

「そこは重要ではありませんよ。ソレを必要だと思えば俺達の方で拾えば済む話です。だいたい……」

四葉とそのスポンサーの目的の一つには、魔法師としての能力を磨き、かつ他国に脅威を与えると言うモノがある。

確かに優良な魔法師を次世代に残すだとか、勢力を急速に回復して外敵を圧倒するという意味では婚姻政策は悪くない選択肢だ。血族間の交流を強くしておけば、次期当主の影響度もある程度は保たれる。

だがそれでは俺達の目的、そして四葉の持つ根本的なアイデンティティとはそぐわないのだ。

必要ならば積極的にその方針を取るだろうが、他家に押しつけられて受け入れたのでは矛盾してしまう。

「貴方のスポンサーは別に七草だけではないでしょう、師匠？」

「ええ……っ？　八雲先生なのですか？」

「おや。達也君の目は誤魔化せない用だね。精霊の眼は何とかしていたつもりなのだけれど」

深雪は驚いているが、運転手が振り向いた時には既に顔が入れ替わって居た。

化けの皮がはげ落ちて、身知った禿頭の男に変わる。

「演出過剰なんですよ。それに、シリウス少佐のパレードを見て居たこともありませんしね」

「うーん。纏いの逃げ水はパレードの源流だからねえ。似た魔法を見た後ではバレバレだったか」

もし名倉という人物では無く普通の執事に化け、気配やエイドスの情報も一般人に似せて居れば判らなかつたかもしれない。

それでもあえてそう名乗つたのは、ここでの接触を狙っただけだろう。俺が自分で気がつかねば有り難い授業として驚かされたただけの話だ。

「察するに複数筋の要望があつての接見と見ましたが？　俺の説得に協力するというのは七草家か九島家の依頼もあつただけのことだ」

「まあ、ね。一応は本当に頼まれたんだよ」

俺を説得するだけならばこの場でする必要は無い。

受け入れるか判らない状態で反発させるよりも、折りを見て手段の一つとして入れ智慧を装う方が確実だろう。そっち方面の依頼主もそう考えている可能性の方が高い。

「定番だけと良い情報と悪い情報、どっちから聞きたい？」

「定番ならば悪い方からというのがセオリーでしょう」

拍子抜けした風を装って師匠が肩をすくめるが、予想して居たのだろう。特に表情が変わる様子は無い。察するに良い情報は紅世の徒を殲滅するのに使えそうな情報だろうが、悪い方はどうだろう？

「君の所の御意向はね、今から顔繋ぎする相手との共闘は途中までに

しておけっこと」

「四葉の……っ？　ということとはまさか……っ」

おふくろの要望なのか、それともメインスポンサーの意向なのか。いずれにせよ四葉家が組む相手ではない対象と、一時的な共闘を持ち掛けられているのだ。USNAですら駒とする四葉にとって、禁忌とする相手はそう多く無い。

「大亜連合……」

「大亜連合の陳・祥山氏が再来日していてね。劉閣下からぼくの事を聞いていたらしい」

利用される危険性はあっても侵略する気のないUSNAと違い、大亜連合は明確な敵だ。

この間の敗戦で正式に休戦協定を結ぶという話が模索から実現段階に入ったらしいが、それでも手を組むべき相手ではなのは確かだ。

とはいえ紅世の徒を襲撃し易くなる共闘相手が良い情報だとするならば、一時的にならば組み価値はある。

奇妙な話だが老師や七草の話が良い話でも断る気なのと対照的に、こちらの目的上にある利点だからだ。他所の思惑には縛られず、我道を貫き続けられることが重要だと言っても良い。

その意味では婚姻政策も押しつけられず、こちらの路線の上でならば相手が七草だろうが一条だろうが、それこそ北方でも構いはしないだろう。

「行方不明だった部下が大漢残党の元に居ると言う。当初は変節を信じられなかったが……」

「パラサイト問題を聞いた、と？」

家に向かう途中で陳・祥山を拾い、移動時のみの制限時間で交渉を始めた。

お互いに前置きを抜いて情報整理を進めて行く。紅世の徒・フレイムヘイズともにパラサイト問題に含まれるので、ここはあえてどちらとも言わないでおく。

「……なるほどこの男であれば手間を掛けて操る理由も判る」

渡された写真はルウ・カンフウ呂・剛虎の物。

上からの命令的にも陳個人の心情的にも、このままにしておけない理由が一目で判る相手だ。

「こちらの情報網でも、妙に大陸系の連中が動いているのが掴めていた。おそらくはあえて顔を出したのだろう」

「戦死ならばまだ問題ではない。だが洗脳どころか寄生させられた上、本国を裏切るというのは言語道断だ」

おそらくは呂・剛虎として大亜連合系の末端から情報を抜き出し、監視カメラに自らの顔を移すことでその関与をほめかしたのだ。

ゆえにこちらは戦略魔法を狙ったという情報を信じ、本気になって対処してしまったと言うところだろう。九島老師のツテを使えばその後姿を隠すどころか、別人であると認識させることなど造作も無い。

「共闘内容は大漢残党の殲滅。呂上尉の排除に関しては、最低限の目的としたい」

「前半は合意できるが、後半は試す価値を感じない。リスクの上昇に伴う見返りが欲しい」

この場合の見返りとは報酬と言う意味では無い。

可能ならば危険を承知でトドメを刺さずに回収する危険、解除できる洗脳だったとしても敵戦力である呂・剛虎をむざむざ引き渡す危険。それに見合った危険を大亜連合にも負ってもらうということだ。実際に九島家の勢力を攻撃するのは俺達だし、大亜連合が安全地帯に居る事を許すことはできない。

「パラサイト解除実験のデータでは？」

「その必要性を感じない」

交渉というよりはお互いの立場の確認が必要だ。

陳としては回収できるならば優秀な部下を失いたくは無いだろう。だが上層部に掛け合うほどの理由を用意できるとは思えない。

「むしろ別口のパラサイト情報、あるいはリスクの一部を受け持ってもらいたい」

「その辺りが妥当か。近日中にパラサイトの情報を用意しよう」

ゆえにお前も命を掛けて足止めに来い、あるいは紅世関係の情報を要求した。

軍人ゆえに生命の危険は織り込み済みだろうが、その後に戦いに成る可能性を考えれば頷くまい。

必要なのはこちらの望む情報を、大亜連合として集めさせること。

こちらが迂闊に九島の傘下で動く連中の情報を集めれば、直ぐに伝わって警戒を呼び掛けることに成る。その点、大亜連合であれば部下の情報を確認したと思われるだけだろう。

「ダグラス・黄^{ウオン}にジエイムズ・朱^{チュウ}……。まさかここで名前を聞くことになるうとはな」

数日後、俺達の元に師匠経由で情報が送られて来た。

そこには三国志を元にした偽名なのだろう、呂蒙と名乗る呂・剛虎の他、黄蓋や朱旋と名乗る見知った顔が見受けられた……。

炎の宿命：前編

●九島邸襲撃計画

受け取った情報の精査を四葉でも行いながら襲撃計画を練る。

囹で少数を誘き寄せることができないので、本命が居る事を前提に何処ならば確実かという段階からスタートだ。

老師としても野心家の息子はともかく、孫たちには近寄らせないと
思うのだが……。

「この人も大漢の人だったのか？」

「正確には大亜連合所属で『現在は洗脳されている』と言うべきだな。
知って居るのか？」

レオが資料を見ながら呂・カンフウリュウ・カンフウの剛虎のデータを取り上げた。

何気ない仕草が気不味い表情に移り変わる。

「いやな。例の古式魔法を教えてくださいがこの人なんだよ。別に恩
に着て居る訳じゃないっか……」

「なるほど。……気にするな。レオ経由じゃなくとも何処かで関与を
しただろうさ」

生命力を燃焼させて魔法の効果を増強させる古式魔法。

強力だがリスクも大きい魔法だが、その入手経路を聞いてなんとなく腑に落ちるものがあった。戦闘系魔法師である自在師の魔法であれば納得が行くのだ。

(術の正体は生命力をサイオンと共に消費するのではなく、それらが
入り混じった存在の力を消費する補助式と言うことか)

だとすれば呂・剛虎を使うことで大亜連合が動き回って居るとカモ
フラージュするだけでなく、当時戦っていたフレイムヘイズに俺たち
が紅世絡みだと誤解させることもできるかもしれない。

臭わせる程度なので弱い様な気がするが、複数の情報を同時に操る
上手い手だ。どれが引掛つてもよし、全て成功しても失敗しても良い
という程度なのだろう。

「それよりも問題なのはその人物の紹介先だな。千葉の次男と言って
居なかったか？」

「っ!? ちょっと! 次兄上がこの件に関わっているとかなうんじゃないでしょうね!」

確かレオが倒れて病院に担ぎ込まれた時、不審人物を追って行った先で、同じ様に追って居た千葉の次兄である千葉・修次が居たという。その時に紹介された友人から教えてもらったということだが、このルートだと警戒心が湧き難い。警察関連に強い千葉家のコネが九島のソレに加われれば、好き放題動くことが出来るだろう。

「確認するがエリカ、お前の所の剣は完全な洗脳状態でも十全に力を発揮できるのか?」

「そういう術理もあるけど……。次兄上の場合は駄目ね、変幻自在の才能を殺しちゃうわ」

いつもは千葉家の技を直接語らないエリカも、実の兄が関わって居ると知って動揺して居るのだろう。

あるいは洗脳されて居ないと信じたいと思うあまり、話題を次々に進めたいと思っているのかもしれない。

「なら正規の命令と簡易的な暗示を組み合わせたタイプだな。九島経由で命令を出しておいて、ソレを疑う事を禁ずる程度だろう」

「あーもう! どっちにしろ次兄上と戦うかもしれないってことじゃない!」

「確か3m以内なら世界最強なんだっけ? そりゃあ難儀だよな」

正確には十本の指に入る……。だがこの場合は同じことだろう。

エリカの心酔ぶりと妾の子という血筋からして、直接指導したのは千葉・修次の可能性が高い。師を弟子が越えるのは困難だし、身内相手に割り切れるか怪しいとあつては暗示洗脳されている相手の方が尚更有利だ。

「仕方無いな。ここは一花先輩に頼るか」

「達也くん……。頼ることになるあたしが言うことじゃないけど……。女心判って無き過ぎ」

「オレもうとい方だけど、作戦上の必要性で付き合う相手を決めるのはどうかと思うぜ?」

少し離れたテーブルには各所から送りつけられた無数の見合い写

真の中から、見知った顔を幾つか並べてあった。

数ある内に三枚ほどピックアップしてあるのだが、その内の一枚を手にとって交渉条件を考え始める。

「百家に居る以上は完全にはシガラミを避けられないさ。七草先輩も見合いの度に似た様な事を言っ居なかつたか？」

そう言いながら元のテーブルの位置に戻り、他のデータと並べて比較する。

一花家が市原家になった理由は身体操作が問題視されたからだが、今回ばかりは非常に重要だ。

千葉・修次は得物を選ばないタイプで、武装を破壊しても無力化できない。

エリカと一緒にならば確実に無力化出来るし、……そもそも九島老師の目を一時的にでも誤魔化すには有る程度思惑に乗って見せる必要がある。

「司波くんは女心を理解して居ませんね。貴方が結納として用意すべきなのは株式譲渡用の書類ではありませんよ」

数日を置いてレストランに呼び出し用件を告げた。

その時一花先輩は、澄まし顔のまま譲渡書類を引き裂いた。だが今回の件そのものを否定してはいない。

「……常温型融合炉を実現化する為の会社ではいかがですか？ 慰謝料としての価値があるかは不透明になりますよ」

「それならば前向きに考えさせてもらいますね」

即答だった。

少し考えて以前先輩から聞いた情報を元に、常温型熱核融合炉の話題を切り出すと花の様な笑顔を浮かべた。

現金な……というよりは、最初からソレが目的だったのかと窺わせるほどだ。

「もしかして、俺が新型装備の開発に舵を切った事をスネていたんですか？」

「司波くん、そういう言い方は卑怯ですね。……ああ、演技の必要もあ

るのでしたら達也さんでも呼びましようか」

俺が可能性に言及すると珍しく不機嫌そうな表情に変わるの、もしかしたら言い当ててしまったからだろうか。

だとしたら判らないのは女心ではなく、一花先輩の情緒である。こちらも合わせて鈴音さんと呼ぶべきなのか尋ねようとしたが、間違いなく好きな方で呼ぶように告げるだろうと思われる。

「お互いに好きに呼び合いましよう。どうせ必要な間だけなのですし」

「そうですね。でも、必要性が長く続くかもしれないよ?」
否定はしない。

科学では放棄された常温型熱核融合炉の研究を、魔法によって実現するのは俺の目的の一つでもある。一花先輩……鈴音さんの目的が俺の進路上にあるというならば、別段無理して別れる事も無いだろう。

こうして襲撃作戦に必要な最後のメンバーを加えて、俺たちは作戦の最終段階に入った。

●マントラなど必要も無く

ブレーンを加えた俺たちは、いよいよ襲撃作戦を決行する。

まずはその気が無い事を示して意図を隠す為、あえて手持ちの戦力を散らして行った。

「文弥くんは中条さんを誘ってシルバー社に見学に行ってください。深雪さんはかねてから希望を受けているヘルヘイムの件で軍へお願いします」

「鈴音さんは本当に身内じゃないんですか? 四葉家の者だと言っても誰も嘘に気が付きませんわ」

中条会長は精神干渉系魔法を使うことができるので文弥と相性が良く、年上ぶりたい性格も年下相手ならば丁度良い。

加えて技術系の情報に目が無いので自然に誘う事が出来るだろう。そして深雪は遠距離魔法であるヘルヘイムの説明に移動するが……あからこそ俺たちが同じユニットを抱えて移動しても何の問題も無い。

戦力の調整が上手く全体視野も広い上に迷いが無いので、亜夜子が四葉の係累だと冗談を言うのも仕方があるまい。

正直なところ、津久葉の夕歌さんよりもよほど似合っていた。

「心配しなくても亜夜子ちゃんも襲撃組です。七草家の双子と違って一人でも大丈夫なのですよね？」

「……特異能力ですもの問題はありせんわつ。あちらの双子の様な能力でしたら苦勞なんてしなかったのですけれどね」

亜夜子の能力である極致拡散は気配やエネルギーの平均化だ。

珍しい能力ゆえに才能の発現が遅れたが、今では立派な四葉のエースと言える。師匠の様な超級の実力者を除けば、潜入工作に関しては右に出る者などいまい。

「それならば結構。なまじ七草家のイメージがありますから返って好都合です」

「……っ」

気が付かなかったが亜夜子は鈴音さんを苦手に行っているようだ。

たびたび皮肉を口にするのだが無視され、逆に無視しようとしたら適度に構われている。これでは確かに四葉の身内だったと言われた方がよほど自然に見えた。

「千葉さんと西城くんは私達のデートを後ろから追跡してください。もし監視が居ても『友人の悪戯』で十分に言い訳が立ちます」

「ハイハイ。武装の方は適当で良いのよね？ デリバリーまでしてくれるなんて面倒が無くていいわ」

「本当にこんな変装でいいのか？ もちつと動き易い格好をした方がいいんじゃないかねあ」

普段は渡辺先輩への隔意から三年組を敬遠して居るエリカだが、鈴音さんには別に思うことは無いのだろう。

手配された装備や受け渡しの時期を見て、レオのサングラスを奪って自分が掛け直す程度の余裕がある。

「俺……自分達はいつも通りで良いのですね？」

「ええ。森崎君たちは深雪さんの警護と、その後に合流する一条くんのエスコートに付き合ってください。何かあったら十文字くんのこと

ろに逃げ込むこと」

護衛戦力として確保した森崎一門は、無駄撃ちを承知で配置して居る。深雪や技術者たちの警護として動き、万が一に大亜連合が『早め』に裏切つてテロリスト化した時に備える為だ。

一条や十文字先輩にも内々に話をしてあるので、イザと言う時は連動して暴動を抑える予定ことになっていた。

これで九島が隠蔽工作に走ったとしても、現行犯以外で俺たちが罰せられる可能性は低いだろう。

「それにしても大亜連合の手引きで、大亜連合を匿っている連中の襲撃ねえ。本当に信用出来るの?」

「最初から信用なんかしてないさ。途中で裏切つて、混乱に乗じて脱出するものだと見て居る」

踏み込む為の口実は全て大亜連合側で準備できる。

動かぬ証拠そのものが自分達の形跡を残しながら移動するので、何処に戦力を隠して居ても問題無い。

「連中の足を止める為の要はお前だ。できるな?」

情報を精査する中で、横浜での戦いで収監されたやつらの一部が保釈されている。

政治取引との理由はついていたが、当の大亜連合からは否定の情報が入つて居る。おそらくは手駒を増やす為に精鋭部隊を確保したのだろう。

皮肉なことにそのことが連中の潜伏先を絞らせてくれた。

分散して匿うにしろ洗脳工作を同時に始めないと戦力としては不安だろう。逆に呂・剛虎の顔を最大限に使って暗示を使うならば、割りと簡単に暗示を掛けることが出来る。タイミング的にも今ならば自ら交錯している可能性が高い。

「大丈夫なのか? こないだ苦戦してたばつかだろ?」

「男子三日会わざればっていうけどさ、あたしだって成長してるわ!

コレがあればあいつらとの鬼ごっこも今日でおしまいつてわけ」

確認すると引き抜かれた舞台は例のステルス兵どもだ。

それを懸念するレオの言葉にエリカは笑つて、特中のサングラス型

CADをずらして見せる。『男子三日会わざれば割目してみよ』というのは呂・剛虎がコードネームにしている呂蒙の言葉だったか。冗談としてはまあまあだろう。

その言葉が豪語ではないことをエリカは行動で示して見せた。

九島が所有する別邸を襲撃した時、警護について居たステルス兵を次々に倒して行ったのだ。

「っ！」

「殺シキヤア！……っ!？」

姿が見えない相手を簡単にかわし、そいつの動きを盾にサブマシンガンの射程を回り込む。

まずは銃使いを黙らせようと、遠慮なしに斬撃を浴びせて居るのだろう。足元には血の花が咲き倒れ伏した音だけが倒した人数を告げて居る。

右に飛んで一人を倒し、低く身を沈めて割り込むとそのまま二人目と三人目へ続けざまに切り込んで行く。

「足手まといが必要だというのを忘れて無いだろうか？」

「判ってるって。陳さんだっけ？ ちゃんとお迎えに引き渡してあげるわよ」

言いながらエリカはターンを掛け、追いつがって来る陰兵の手足だけに切りつけた。

殺すのではなく負傷者を続出させ、後退に人手を割くことで相手の戦力をダウンさせるのは戦いの鉄則だ。だが今回はもう一つ、裏切るだろう大亜連合の足を引っ張ることを計算に入れている。

「だからさっさとやられちやいなさいよ」

「世迷イ事ヲ言ウナ！ ダガ何故ダ！ 何故判ル!？」

この間に戦っていた少女に対し、エリカは圧倒的なペースで押しまくって居る。

幻術を見切り振動する剣をかわし、手元へ正確に打ち込みを浴びせて居た。明らかに見えて居なければ不可能な攻撃だ。

「……何をやったのです？ 昨日の今日でコレとは……」

「手の内をバラす必要は無いが……。まあ時間を稼ぐ必要はあるし別に構わないか」

前回は見えない剣を何とか避けながらだったので、互角と言っても良い状態だった筈だ。連中の教官役が信じられないのも無理はあるまい。

「始まりは超音波センサーだったんだがな。途中でお前達が対策をしていないはずが無いと気が付いて、他の物で代用した」

「音も風の一種。同じ木門ですからね……。なるほど」

視覚だけではなく、聴覚も覆い隠して居るはずだ。音波の反射を拾って視覚に還るセンサーが役に立つとは思えなかった。

だが攻略法さえ判れば後は簡単。各種センサーを引っ張り出してエリカが知覚できるモノを選んだだけの話である。

「陳・祥山が確保に来るのは本当だぞ？ お前達は呂・剛虎が囚われ洗脳される筈が無いという前提に囚われ過ぎたんだ」

「それは実際にお逢いしてから判断しましょう！」

滑る様にやって来る教官の攻撃を、片手で受けてその場で勢いを散らす。

同時に発生する振動魔法だが、俺も似たような連携を持っている。最低限の術式解体をまとって無効化。二発目以降は同じ技を見せることで、術式解散を使っても違和感が無い様に誘導しておいた。

「時間稼ぎが必要だったのは私達も同じこと！ 上校……。ちの方が先に到着されたようですね」

「そうかな？ お前とて俺たちが何の対策もしてい無いとは思っても居まい」

呂・剛虎は同時に千葉・修次を伴っていた。

至近戦最強と目される二人の揃い踏みは圧巻だが、本来は敵味方に分かれるからこそこの教官も違和感を覚えて居るのだろうか。だがそれでも上官命令に従うのが軍人だから信じて居るのだろうか。

「エリカ……。後は任せた」

「判ってるわよ。あたし達で何とかすれば良いんですよ」

「こつちも終わったぜ」

戦っている間にエリカは少女を気絶させ、レオも周囲の隠兵たちを片付けて居た。

こちらはエリカほど明確に把握するセンサーを用意はできなかつたが、大物を持たせれば範囲を攻撃できる。硬化魔法さえ掛けて居ればサブマシンガンくらいは問題無いので黙って見て居られた。

そして重要なのはこのタイミングだ。

エリカとレオの手が空くのが間に在ったが、俺達の戦力は他にも隠れて居る。隙を見て捕縛系の魔法を使ってもらえばいいだろう。

「エリカ。お前のやっていることは反逆罪だぞ」

「次兄上こそ騙されて居るんです。早く目を覚ましてください！ あと、できればあの女からも！」

エリカに用意した魔法はタイミングを図ることこそ難しいが、細く短く一瞬の強度を發揮するものだ。

既に間合いの中だと言うのに飛び込もうとしないのは、身内だからか、それとも今行っても容易く見切られるからか。

「どうしますか？ 私としてはあちらが終わってからでも良いのですが」

「プロレスラーじゃねえが……できるだけ早く教えてもらった魔法を使いこなして見せるのが恩返しってやつだろ？」

同時にレオが呂・剛虎に仕掛けた。

こちらはトップスピードのまま一気に拳で殴りつけ、容易くねじられ慌てて距離を離す。

やはり相手の方が実力も実戦経験も上だろう。

それでも世界屈指の相手に容易く終わらないだけ、二人の腕前が向上して居ると言えた。今ならば『あの手』を使っても問題あるまい。

（まずは全体として有利に立つ為に、目の前の相手を倒しておかないとな。しかし監視を考えれば一気に行かないと逃げられる）

大亜連合の兵士相手に有利でも何の意味は無い。

例えば呂・剛虎を妥当しても所詮は洗脳された駒を取り除くだけの話だ。黄や朱にエリカとレオをぶつけ、その間に周を倒す事が最低限必要だろう。

「戦力は逆転しました。貴方はともかくお仲間を思うなら、悪いことは言いません降伏なさい」

「そうかな？ 呂・剛虎も千葉の次男も特技はあくまで白兵戦だ。下がり続ければ早々負けることは無いさ」

教官役の男が言う様に相手の方が格上げばかり。

だがこちらにも良い条件はある……奴らにとって二人は貴重なコマだが、俺にとつては別にエリカとレオを温存する必要は無いということだ。必須なのは二人が次の戦いに参加出来る事ではない。

普通ならば格上相手の足止めを行えば守り主体であつても、良くて負傷、悪ければ重傷だ。

しかし大前提として今回の戦いで俺は、遠慮をする気が全くない。最初から俺の特異能力を全開で使う事を『身内全員』に告げて居た。

「まずはお前を片づけて、二人を遠距離から支援する事にしよう」

「そうはいきませんよ。方を付けるのは私です！」

牽制の拳打から掌底そして接近肘打ち、途中途中に振動魔法を浴びせる。

お互いに同じような組み合わせで打突を繰り返して、俺の様に余裕があつた。当然ながらスパートを速めれば、仕掛けて来るのはこいつの方がだ。

「行きますよー！」

「悪いがキャンセルさせてもらおう」

ニヤリとした笑いが二重の衝撃の後で発せられる。

一度目の衝撃を受け止めた時、間髪いれずに波を上乗せする通背拳。タイムラグがある上に今までとは波長を変えて居るので、術式解散は使えない。

だが牽制封じに使った術式解散のタイミングでまた同じ様に使うとは限らない。

俺の方は後出しながら雲散霧消を使用して、奴の術式の余波を丸ごと消し去つたのだ。

「何!？」

「悪いな。術式解散には別の使い方があるということだ」

説明する訳にもいかないので、あくまで術式解散のバリエーション
と言うことにしておく。それに敵に対して馬鹿正直に解説する必要
もあるまい。

お互いにブラフの一環として喋って居たのだ、最後まで騙させても
らうとしよう。

「そして魔法攻撃を崩せるということは、当然こうなる！」

「馬鹿な！ 想子封じまで!？」

術式解散ならまだしも、至近距離の雲散霧消にサイオンウォールな
ど意味をなさない。

紅世の徒を討滅するためなら、いつもと違って意味の無いマントラ
を唱える必要も無い。さっさと倒して次の標的だと他の二人にワザ
と殺気を漏らしておいた。

「二人ともそのまま下がりがり続ける。ただし逃げる様なら足止めを頼む
ぞ」

「もうちよつと速く行ってくれたら楽だったんだけどね」

「難しい事言ってくれるぜ全く」

エリカは切り傷こそあるものの、攻勢を掛けられない程度で済んで
いる。

むしろ厳しいのはレオの方だろう。何しろ拳の上に呂・剛虎ほどの
男が乗って居るのだ。

「軽身功か。使いこなすのは剛気功よりも難しいらしいが、良くもや
る」

「感心しないで援護の一つもくれればありがたいんだが、よー！」

レオが苦勞して体勢をコントロールすると、落ちて来る相手に対し
ストリートを放った。

これに対し呂・剛虎は身を翻し、回し蹴りを浴びせながら体勢を入
れ替える。カポエラを思わせる低い体勢から、猫が立ちあがる様な軽
いステップで掌底を打つ。なのに万全の体勢で受けて居る筈のレオ
の方が、後ろへ後ろへと下がらざるを得なかった。

「リュウケン呂蒙さんは海軍出身で体術はお手の物だよ。援護しなくていいの
かい？」

「次兄上を放っておけば達也くんを狙うでしょう？　そういう訳にもいきません」

すくい上げるような逆袈裟なのに、千葉・修次の剣は唐竹割りよりも強烈な衝撃を与えて居た。

エリカはその勢いを何とか殺しながら零距离からの刺突を心臓めがけて放った。不思議なことに千葉・修次を受け流す事は無く、身によじって体勢を入れ替えると、小太刀を右手から左手に投げつけつつ切りつける。

「いつのまに覚えたんだい？」

「見せたことの無い技だったのですが……さすがは次兄上です」

（刺突系の衝撃波か？　高速の一撃からの更なる高速とは流石だが、足止めどころか殺す気マンマンだな）

手を抜いて勝てる相手ではないのだろう。

エリカは明らかに殺人技の類を連発して居る。室町や江戸時代でも剣客が他の剣客と出逢って生き残ることなど滅多にないそうだが、千葉・修次は明らかに初見殺しの技を読み切って居た。

（あれは優れた洞察力とか以前に、間合いとタイミングの方を読んでるな。……ここまで高度な知性を残す以上は隣子……使い捨てパラサイト化はしていないだろう）

紅世の徒は隣子という消耗品として、いわゆるパラサイト化を手駒に使うことがあるらしい。

俺が洗脳よりも危険視したのはこちらで、一時的にはあるが爆発的な魔法力を有することを警戒して居た。他にも再生が効かなくなるとかエリカにとつて大変な可能性もあったが、まあそうならなくて良かったというところだろうか。

（……鈴音さんと阿夜子は配置に着いたな。ならば防壁を取り払っておくか）

呂・剛虎も千葉・修次も一流の相手だ。

白兵戦をしているからといって防壁を解くことなどあり得ない。だからこそ俺程度の振動魔法では牽制にもならないのだが、それは同時に鈴音さんたちの捕縛魔法も無力化出来る。

(カメラは既に潰した。精霊の眼で監視の位置を探り切った。あとは
合図を出すだけだ……)

だからこそ連中の防壁魔法をそのまま残すわけにはいかない。

術式解散に紛れて雲散霧消を使用する事で、これに対抗すること
にした。この二人を片付ければ次は黒幕どもだ！

炎の宿命：中編

●二つの剣

エリカの腕は相当な物でレオの遙か上を行っている。それでも相性差を越えるのは難しいのか、レオが呂・カンフウリュウ・カンフウを足止めして居るのに対し、同ランクである千葉・修次に押し負けて居た。

「体術を組み合わせた分身？」

「次兄上が教えて下さったことを、ここで全てお見せします！」

エリカの剣は感覚の剣だ。

どんなに僅かな間合いや、凄まじい高速であろうともタイミングを捉まえてモノにする。渡した新型CADは補助強度が高い代わりにピークタイムがシビアだが、何度も訓練を繰り返して使いこなして居た。

「まずはその動きを封じさせていただきます！」

「これほどの魔法を覚えて居るとは、何時の間にというやつかな。だけれど……」

エリカが感覚の剣であるならば、千葉・修次は意脈の剣だ。

相手の意図を読み取って、表向きの技だけでなく隠された技までも見切る。それを支えるのは腕の左右、立ち位置の上下を問わぬほどに磨き抜いた剣裁き。

撃ち込んだ剣圧と同時に飛び込むエリカの分身突撃。

これに対して僅か一瞬の旋風がケリを付けた。小さな波が剣圧を無力化し、分身の中に隠れている筈の本体へ向けて刃が迫る。

「どんなに凄くとも分身には違和感があるものだよ」

「次兄上に分身効かぬは承知の上！」

振り抜いた小太刀が捕えたのは、思ったよりも鈍い音だ。

エリカの体が小刻みに震え、魔法で拡大された衝撃波が刃を流す。だが二手・三手を先に読むのはお互い様。千葉・修次はその半歩先を征く。

「まさか変わり身!?!」

「よくぞここまで成長したね、エリカ」

跳ね上げられた小太刀が宙を舞う。

エリカが捨てて身で動きを捉えたと思つた時、既に必殺は必殺で無くなって居たのだ。流される小太刀から手を離し、懐から脇差サイズの柄へ……圧斬りを応用したブレードが素早く伸びる。

武具にこだわらずより弱い刃に持ち替え、それを必殺レベルの剣に置き換える。

まさかと思う心にこそ付け込み、最小の円運動を持って台風の如き大円を打ち砕く。もし勝負が一对一であれば、ここで勝負が決まって居ただろう。

「……驚いた、こんなに早く『恩返し』をされるとは思わなかったよ」「いえ、自力では……勝て、ません……でした。無念です」

千葉・修次の剣がエリカの胴を半ばまで切り裂いた。

だが隠れていた鈴音さんの魔法が彼を捉え、それ以上剣を振るうこともできなくなった。あえていうならばエリカにすらタイミングを伝えて居なかつたことが、功を奏したと言うべきだろうか。

「二対一に割り込んですまん。直ぐに治す」

「……元からそういう作戦だったしね。勝ちに行けなかつたあたしが悪いだけよ」

出来る限り鈴音さんの存在を隠す為に、あえて俺の方が謝っておく。

この場に魔法師が居れば一目瞭然だが、監視カメラで探る程度なら誤魔化す事が出来るかもしれない。どんな手札があるかは可能な限り伏せておくべきだろう。

「ところでよ、恩返しってなんだ？」

「弟子が自分を鍛えてくれた師匠を倒す事だ。武術用語みたいなものだと思えばいい」

「今回はそれに当てはまらないけどね。むしろ格好悪いっただらありやしない」

呂・剛虎の貫手を喰らったまま、レオが平然と声を掛けてきた。

硬化魔法を応用した不壊魔法のおかげだが……、このレベルの相手と戦う時に限り、レオの調子はエリカを上回るのかもしれない。お互

いに必殺を持つならば、死なない方が有利だとも言える。

「まあオレの方も自分じや勝てなかつたけどな。時間稼ぎしかしてないのは同じさ」

「あんたの場合は最初からそのつもりでしょ。なんとか勝とうと隠し技まで使ったあたしと、隠し通したあんたじゃ……あーやだやだ。さっさと終わらせるためにも、頭を切り替えたい所ね」

「今回は最初から連戦前提だからな。不本意な結果になるのは勘弁してくれ」

一枚も二枚も格上な相手に対し、しかも生け捕りにしなければならぬ。

この不利な状況を克服したのは、最初から時間と注意を引きつけることが目的だからだ。第三者の奇襲……今回は鈴音さんが本命だが、場合によっては雲散霧消で俺が劇痛を与えることになる。

そういう意味では無事に作戦の初動が成功したと言えなくもない。

鈴音さんも姿を隠したまま亜夜子の魔法で気配を平均化させているし、隠れたことを察させられたとしても、人数の把握は難しいはずだ。

「こちらの人数が読めて無い以上は、今頃は脱出するか迎え討つかを慎重に判断して居る事だろう。悩んでいる内にケリを付ける」

連中は大亜連合の兵士を洗脳して取り込もうとしたばかりに、相応しい場所は限られてしまった。この屋敷以外にも候補はあるが、他の十師族に可能性の低い場所は任せてある。さっさと攻略してしまい、違うならば移動すべきだろう。

●機功方術師

九島が所有する別邸の中でも、この屋敷はとりわけ広い。

後ろ暗い目的に利用して居るからなのか、それとも軍で公然と権勢を振るっていた時代の物だからかは判らないが。

いずれにせよ、この屋敷に大漢に居た紅世関係者が潜んでいるのは間違いが無い。

(関係者……。あくまで現段階では関係者止まりだ。ブラックに近いグレーだが、『紅世の徒』であるとしたらかなり即物的な相手だな)

もつともSBに近いエネルギー生命体である紅世の徒が、即物的であつてはならない理屈は無い。前大戦に前後して連中のコミュニティは表も裏も壊滅している。

しかも表だつて捕食をすればフレイムヘイズに追われるとあつて、隠れ潜むには何処かの組織を利用する方がつとり早いからだ。

(だとしたら行動に制限があるかもしれない。物理的ではなく精神的に……これほど上手く行っている流れを捨てることが出来るだろうか?)

九島老師にとって今の魔法師社会が理想的な状況である様に、連中にとつてもその権勢を利用できる現状は理想的だ。

次代を担う九島・真言は俗物的な人間だし、裏の戦力として手放すまい。仮に人喰いの疑いを持ったとしても、自分に向かなければ必要な犠牲だと割り切るだろう。

だから自分に危険が及ぶと考えない限りは、ギリギリまで此処に居る筈。

そう考えた俺の思考を止めたのは小さな魔法の反応と、続いて訪れた鋭い痛みだった。

「レオ、前に出てくれ。だが注意が必要なのはレオだけじゃない」

「あん? 別に問題はねえが……って。そいつは物騒なご挨拶じゃねえか。でもなんでオレ以外も注意が居るんだ?」

俺が手をかざすと長針がそこに突き刺さつて居る。

更に麻酔を使つて眠らせに掛つた様で、意識が一瞬朦朧し、再生を使つて肉体の情報を元に戻した。

「俺には薬を使っているようだが、他の者にまでそうとは限らん。そしてこれだけあからさまと言うことは……」

(「西城くんが硬化魔法を使うのは既に知られて居るでしょう。むしろ盾として動きを固定し、後ろにルートを固定することでこちらの全容を把握しようとしているのだと思います」)

「あー最適解を強要してるって事ね」

俺の言葉を補足して、鈴音さん小声で相手の行動を予測する。

そしてこちらの判断を途絶させようと明かりが落ちたことが、敵の

作戦を決定的にした。暗闇の中で奇襲にあっては『普通ならば』固まらずを得ないからだ。

〔「亜夜子、薬物を弱体化させろ。どうしても無理ならば俺の方で事後対策する」〕

〔「了解。薬効の一部を遍在させておきますね」〕

攻撃は喰らっても良いが薬物で足が止まるのは困る。

一定の範囲から薬効を取り除き、外側へと偏る様な魔法を指示しておく。もちろん針の中に仕込む様な薬には作用しないが、散布剤や塗るタイプの薬であれば十分だろう。

〔「これで薬は何とかなるとして、後はどうやってレオの守りを突破して来るか見ものだな」〕

知られているであろう傾向の中でも、硬化魔法はシンプルで応用性の高い物だ。

だからこそどこの現場でも使用されているし、特務兵を務める兵士たちの多くも利用して居る。その中でも適性の高いレオの力をどう攻略するかに興味をそそられた。

きつと相手は黄と朱ウオン チューを足止めに使って来る。

そう思っていたからこそその余裕だったが、結果は意外なモノだった。ブラックスーツに身を包んだ長髪の男が屋敷のエントランスで俺たちを出迎えたのだ。

「ようこそ。お招きするのが遅れてしまいました。屋敷を預かっております、執事の周・公チョウ・ゴンジンと申します」

「……招待された覚えは無いが、大亜連合の兵士を囲って内乱を企んだ罪と言えれば理解はできるか？」

まさか首魁がいきなり現れるとは思ってもみなかった。

気配が無いくらいで驚きはしないが、てつきり黄あたりだと思っていたので以外ではある。それともこの男もまた近くに隠れている朱チューと同じ様に、手駒の一人でしかないのかもしれない。

「招かれざる客とはいえ、もてなしもせぬとあっては主人に叱られてしまいます。暫しお戯れください」

「っこの音?! みんな、注意して!」

周が仰々しい一礼をしたと同時にエリカが声を上げる。最初はなんのことか判らなかつたが『跳ねる音』がしてからは違つた。

暗闇の中をバウンドする音が聞こえた後、周囲からナニカが飛来する。

後方に直撃するコースへ咄嗟にレオが動いて喰い止めるのだから……。

「うおっ!? なんだコリヤ? 小せえ球なのに腹へズシンと来やがる」

「暴徒鎮圧用のゴム弾よ。……でも中に変なのが混ざってるわね」

「おや……お判りになりますか。流石は千葉のお嬢様」

体格の良いレオの体が膝について軽く沈む。

それで倒れはしないが、小さな塊を喰らつただけなのに大したものだ。

エリカはレオが喰い止め切れなかつた物を打ち落とすが、その反応よりも気が付いた耳と知識にこそ周は感心して居た。

「機功方術師としての最新作。宝具五ウー・グアン・シー光石と申します。お気をつけください」

「それがレオに一撃を食らわせたって訳ね……厄介な魔法じゃない」
「……?」

奇妙な話が耳を掠める。

今起きている現象に魔法は使用されて居ない。レオが沈んだのは純粹に威力か、他の現象の筈だ。

「エリカ、それは魔法じゃない。ただの化学現象だ」

「その通り。本番はこれからですよ。疾チイ！」

周が掴んだナニカを無造作に投るのが見える。

投擲術ですらなくその辺に放り投げたように見えるのだが……。

「レオ! 後に余力を残さなくて良いわ、必ず喰い留めなさい!」

「わーってるって! っつかし、人使いの荒い女だよまったく!」

一つの球が二つに、三、四……。

それがゴム球と混ざること五つにも十にも増える。幻影などで

はないただの物量攻撃だ。だがそれに僅かな魔法が加わることで対処を難しくしていた。

発生した魔法は三つ、全て小さな魔法式だ。

衝撃強化、加速、ベクトル反射。全て初歩的な魔法だが、クラウドボールで使用される時の様にマルチキャストで上手く組み合わせている。

（「達也さん。五光石といえば封神演技において那侘三太子すら押し留めた品です。当たれば西城くんとはいえ、ただでは済みませんよ」
（「それでも干渉はギリギリまで控えてください。敵にも隠れている奴が居ます」）

鈴音さんの提案に俺は否定の言葉を返すしかない。

伏兵が居る以上は迂闊に手の内を見せられない。それに重要な魔法の方ではない事が、それに拍車を掛けていると言える。

「術はクラウドボールの亜流だ。途中から幻影も混ぜて来るぞ」

「良くご存じで。しかし五光という言葉は目眩しという意味だけではありませんよ？」

やはり重要なのはソレだろう。

硬化魔法を使用し、体格も優れるレオがアツサリと膝をついているのだ。球本体に攻撃力があるからこそ、クラウドボールで使用する様な初歩的な魔法こそが効果的なのである。

こう言うっては何だが鈴音さんが姿を現し積極的に防御や攻撃を担当したとしても、こちらの人数が増える程度の意味しかない。

あちらの伏兵を怯ませ、また援軍をこちらに送るか逃げる主人とやらに向かわせるか悩んでもらった方が良いだろう。

「少々本気で行かせてもらいましうか。先ほどの様に機械任せの射出ではありません」

言うが早いか強烈な弾道で球が投げつけられる。

先ほどは放ったただけだったが、今度は間違いなく投擲術だ。最初に見せびらかせるように一球、続いて魔法を伴い二球が投げつけられた。

「ん……この音って？ まさか……」

「知ってるのかエリカ？」

エリカがまとった衝撃圧で球が弾かれ明後日の方向に飛び抜ける。それは壁を簡単に貫通し、奥へめり込んでしまった。

「見せてくれた人は鉄貫動作とか鉄甲とか言ってたけど……。使ってるのはあいつじゃなくて後ろの男よ」

「はははっ。そこまで見抜くとは素晴らしい。朱、姿を見せてあげなさい。それとこれからは全力で構いません」

「……」

隠れていた男が姿隠しを解除してブラックスーツ姿を現した。

こちらは短く髪を切り込んでおり、ゴルフボールよりも小さな球を指の間に挟み込んで居る。だがそれだけではなく、いつか見た首だけの化生体が幾つも浮かび上がった。

投擲術で投げられたボールは恐るべき勢いで迫り、あるいは壁で反射して後方に居る俺たちを狙う。その制御には周の術だけではなく、朱の操弾射撃の魔法が上乘せされており恐るべき威力を見せていた。「五光石と飛頭民、同時に対処出来ますか？ 無理ならば私は手出しを止めておきますが」

「大丈夫だからあんたも参加しなさいな。既にそのボールのネタはあがってるのよ」

周の表情は笑顔のままだが面白そうに口元が歪んだ。

こちらを格下とみなしているのだろうが、小さな魔法で最大限の効果を発揮して居る辺りは流石だろう。手の内も見せているとは言い難い。

「何が五光石よ。それって単にスタンボールの一種でしょ？ 本命は一瞬の電撃で、命中を補助して居るのはランダム性の高い反動」

「素晴らしい。初見でそこまで見抜かれるとは思ってもみませんでした」

スタンボールというのは暴徒鎮圧用のゴム球を大きくしたようなもので、中にテイザー放電を起こす機械を組み込んで居る。

弱いスタンガンとして機能を発揮するが、ゴム弾として撃ち込む事も出来るので十分な効果が期待できるというものだ。あれほど小型

にすると威力が怪しくなってくるが、そこは投擲術と魔法を組み合わせたのだろうか。

これに対しエリカは動きをシンプルに変えて、二つの魔法を使い分けた。

一つは先ほどと同じで衝撃系の魔法を剣に帯び、威力の高いボールを弾く為だ。もう一つはサイオンを纏った物心同時斬りで化生体を切り裂く為に使用して居る。

「暗闇に慣れる為とはいえ目を閉じて……。なるほどアレンジも予想されているんですね」

「ネタは知ってるって言ったでしょ。幻覚の光の中に催眠光を混ぜるなんて古い手よ」

エリカが黄にやられた後、特訓として幹比古に手伝わせた。

様々な幻覚トラップを使用したらしいが、その中の一つに在ったのだろう。あるいは単純にスタンボールの使い方として、千葉家で開発して居る武器にもあるのかもしれない。

静かな変化は千葉・修次を参考にしたのだろうか？

現在進行形でエリカもまた強くなっていた。暗闇の中で迫るゴム弾を確実に弾き、化生体を次々に切り割いて行く。

「……ふむ。これだけの技量と感覚は惜しいですね。本人の意志に由来する千葉・修次よりもよほど良い燐子になりそうです」

「っ!!」

「落ち付けエリカ。安い挑発だ。……しかし無視できる言葉では無いな」

明らかに怒りを誘った言葉だが、それは同時に俺の関心を強烈に惹きつけた。

燐子……。それは駒という意味で使ったのだろうか、紅世の関係者にとつて大きな意味を持つ。

「貴様、やはり紅世の徒か！ 技術者を喰らい、闇に潜む者を次々と自らの駒にしていったのだな？」

「……私としたことがとんだ不調法を。やはり短時間で済ませようと手間暇を惜しむといけませんね、どこかでボロが出る」

おそらくは自分を探って居たフレイムヘイズが消えて気が抜けていたのだろう。

言葉を取り繕うおうとして、いささか意味の通らない言葉を並べている。それだけ余計な一言を口にした自覚があるのだろう。

「……改めて自己紹介を。」 徒督「周・公僅と申します。短い付き合いに成ると思いますが、お見知りおき下さい」

「エリカ、化生体潰しに専念しろ。鈴音さん、申し訳ありませんが亜夜子と共に電磁シールドをお願いします」

ここからは遠慮をして居るような余裕は無い。

全員の力を使って相手の余力を潰しながら叩き潰す必要があるだろう。

「できたらやって見てください。ここ五百年ほど苦戦したこともありませんか」

その言葉を発した僅か後、屋敷が焼失したのではないかと思うほど、強烈な炎が周囲に出現する。

ただしこの間の襲撃と違い、無数の炎が化生体として次々に現出したのである。

炎の宿命：後編

● 戦言祝ぎいくさことば

人の頭を摸した数体の化生体が居たのだが、比較にならない数の化生体が現れる。

それぞれに灼熱の炎を有し、火炎の息吹や体当たりで攻撃して来る。

「レオ、背中には任せたわよ！」

「任せとけ！」

ランダム起動で跳ね回るボールを、硬度効果ではなく位置硬化させた布が防ぎ留める。

堅いだけでは無く適度な柔らかさを持つがゆえにボールを包み、位置は数m先であるがゆえに電撃を喰らうこともない。

「ひとつ！ ひとつ！ 次行くわよ！」

エリカの繰り出す刃は物質と精神を同時に薙ぐ物心ドウジ斬り。

化生体といえど唯では済まず、いや実体を持たないがゆえに立ち待ち切り伏せられていく。増援の多さに翻弄されているが、今の所は何とかなっているようだった。

あれだけ探して見つからなかった相手が、不用意な言葉で特定できてしまうとはおかしなものだ。

しかし運命とはそんなものかもしれない。ここ十数年は紅世の話など出た事も無く、追いつけているフレイムヘイズの集団もこのあいだ殲滅したばかりなのだから。

周チヨウが気を緩め過ぎたというよりは、単に警戒する必要がなくなっただけなのかもしれない。

「硬化魔法もですがその防壁、ウエグアンシー五光石を弾くとはやりますね」
「それだけが電磁障壁の目的ではないがな」

敵が使っている暗殺用のボールは、ランダム性の強いボールを中心に仕込んだ発電装置と組み合わせて電磁誘導して居る。

ならばそれ以上の強度を持つ電磁波を使って、内から外へ向かう電磁障壁で守れば俺達の方にボールが向かってくることは無い。

「深雪、ゆつくりで良い。温度を下げて行ってくれ」
『了解しました、お兄様』

攻撃が目的ではないので3Hを使った時のヘルヘイムほどの起動速度は必要無い。

亜夜子が発動させている外へ向かう奔流型の電磁障壁と、鈴音さんが発動させている板型の電磁障壁。この二つの領域を繋ぐように極低温が次第に発生し始める。

「五光石による物理攻撃は通じない。なるほど、ですが燐子達の炎はいかがですか？」

「もしかしたら紅世の徒だと予想はして居た。王とはいえムザとやられはせんよ」

電磁場と極低温の組み合わせは炎を封じ込めることが出来る。

もちろんこちらが攻撃に使用するスペースが必要なので完全ではないが、それでも背中を気にしないでいられるだけの防壁は確保できた。

「エリカはそのままドウジ斬りで化生体を始末してくれ。俺の方でも時々援護を入れる」

「おっけー！」

物心ドウジ斬りによってエリカは次々と化生体を葬って行く。

朱が最初チュウに操っていた個体は回避機動を見せる事もあるが、周が呼び寄せた個体はそうでもない。火力はこちらの方が上なので、用途が違うのかもしれないが。

化生体の詳細なコントロールは本来難しい物だ。これほどの操るなど紅世の連中で間違いは無いだろう。

後はいかに相手の戦力を削って、周たちを始末するか考えようとした時。屋敷を燃やさんばかりの勢いで駄目押しが訪れる。

「では追加といきましょう」

「馬鹿なっ。先ほどよりも多いだど？ しかも今までの数を維持したままなど……」

周が指を弾くと大気が膨れ上がり炎の扉が開いた。

その中から現われたのは先ほどに勝る数の化生体であり、いずれの

制御も失われてはいない。

それどころか半ば物質化した個体も見受けられ、野生生物を宿主にしているのかトカゲや野犬のような姿の個体もあった。

「貴方は紅世の何を知って居ると言うのです？ まさか精霊と隣子を同じに考えているのですか？ それともパラサイト風情と、王の一人である私を同一視でもされておられるので？ これは傑作だ！」

これが朱が見せるテクニツクのように、詳細なコントロールは一体ずつというならばまだ判る。

だがそれぞれが隊列を為し、あるいは伏兵として周囲から窺うというのだから既に常識の外だ。当然ながら精霊の眼でも確かに居る事は確実であり、物質化している方も幅射熱から言っても勘違いでは無いだろう。

「ああ、そうですね。こういうえば貴方がたの常識でも理解できますか？ “ 徒督 ” の相方は “ 小霸王 ” であると。三国志くらい読んだことがあるでしょう」

「まさかペアになる相手と、維持と制御を互いに担当しあつて居ると言うのか……」

確かに可能かもしれないが、どれほどの距離を越えて実現できるのか？

それとも専用の宝具……レリックでも所持して居ると言うのだろうか。だが俺にはそれ以上の懸念が頭をよぎる。

「いや、待てよ……」

殺し合いで自分の手の内をさらす必要など無い。

俺も時間稼ぎの意味で相手の無駄話に付き合うこともあるが、それでも度が過ぎる。もし悔りではないとしたら、優先的に対処せねばならない事項が存在した。

「……戦言祝いくみくしほ。それが貴様の能力だな」

「答える必要がありますか？」

答えないのでは無く、答える必要が無い。

暗に俺の言葉が正解であると告げていた。奴の説明は奢りから来る余分では無く、必要から来る補助式なのだ。

「なんだそれ？」

「……古式魔法の一種よ。催眠暗示を自分に掛けて強化すると同時に、相手にプレッシャー掛けて制限するの。例えば絶対に当たると宣言すると、避けられなくなるワケ」

「奴は無意味に説明を垂れ流して居るんじゃない。自分の魔法力を強化し、味方を鼓舞し、そして俺達を圧迫している。“徒督”とはよく言ったものだ」

だからこそ奴の呼び寄せる化生体は制御を外れず、ボールを無効化したものの朱は高い攻撃力を残して居る。

会話して居る間も敵の攻撃は続いているし、周たちが手加減してくれるはずもない。放っておけば精神的な重圧に押し潰されて、いずれ攻撃も回避も精度を失っていくだろう。

（深雪を遠距離に置いて正解だったな。戦言祝はその場に居ないと効果が無い。対火防壁は消えないが……問題は攻撃力か）

電磁障壁は散漫にはなるかもしれないが、元から二人掛りで制御して居る為に過剰気味だからまだ良い。

だがエリカのドウジ斬りは特性上一体ずつの上に、徐々に能力がスベックダウンしていく筈だ。

（ここに居ない”小霸王”とやらも気に掛るが、指揮担当が目の中に居るならば勝負の賭け時かもしれない）

本当に真実だけを口にして居るとは限らない。

そもそも紅世の徒最大の組織の基礎単位が王の二人一組だったらしいが、そいつらを騙る複数名の連合なだけかもしれない。

だがそれでも目の前の男が強大な存在であるのは判るし、老師に取り入った手並みを考えても手を抜いて良い相手では無い。

大漢を操って居た連中の一人だと言われても、むしろ疑う余地の方が少ないくらいだ。

「亜夜子。重要な作戦を告げる。まずは情報閉鎖してくれ」

「……？ はい。判りましたわ」

ここで俺は遮音障壁と簡単な光学歪曲を追加して、周に作戦が漏れないように情報を封鎖する。

ここまで必要な情報は全て告げており、今更情報封鎖するとは思わなかったのか亜夜子は少しだけ訝しんだ。何しろ封去るということは大きな作戦を実行すると相手に教えているも同じだからだ。

「次にみんなを先導して後退しろ。この屋敷の周辺一帯を消し飛ばす」

「達也さん!?! それはまさか……。御当主様の許可も無しに実行してはいけません!!」

マテリアルバースト以外に手段は無い。

雲散霧消では物理的に発生した炎や熱を消す事は出来ても、化生体を消す事は難しい。まして物量で押して来る相手に悠長なことはして居られない。

「大漢の後ろに居た紅世の王を倒す為であれば問題無い。あらゆる手段を取って良いと言われている」

「そんな……」

正確には『どんな手段を取ってでも、倒してくれるわよね』と念押しされただけだ。

それにここで逃がせば深雪も狙われるかもしれない。妹がこのまま四葉の当主になるのか、それとも何処かに嫁に行くかは判らないが危険にさらしたいとは露ほども思わない。

亜夜子の立場では否とは言えまい。

静かにならなかつたのは化生体との戦闘が継続して居ることと、異議が他から提出されたからだ。

「ちよつとちよつとー。うちの兄を洗脳してくれた敵を前に、今さら帰れって言わないでよね」

「そうだけ。どうせ古式魔法でも使う気なんだろうが、その時間稼ぎくらいなら俺達にもできるさ」

何が起きるかは知らなくとも、どれだけ危険なのか理解出来るだろうにエリカとレオが抗議の声を上げた。

問題なのはお袋が使用許可を出すのは判っているが、四葉の当主として目撃者を放置してくれるかは判らないということだ。それにマテリアルバーストで死んだ人間を再生したことは無いので、できれば

ここで撤退して欲しかったんだが……。

「二人とも、どうなっても知らんぞ」

「それこそ今更だぜ」

「そーいうこと。確認するなら麗しの婚約者様じゃない？」

それもそうかと敵の攻撃を避けながら僅かに視線を移すと、鈴音さんの顔色は静かなままだった。

俺が何をするか知ってはいないだろうが、それでも流れから非常手段を使う事くらいは理解できている筈だ。

「鈴音さんは亜夜子と共に撤退してください」

残る残らない、どちらにせよ俺の腹は決まった。

もはや最終手段を使うことに躊躇いは無い。せいぜいが最低限の範囲を定めることと、残るのであれば秘密厳守をどう守らせるかという悩みだけだ。

●虚言

元もと奇襲のために必要なシチュエーションをクリアし、そして戦力になるがゆえに一緒に来てもらった。

だから最後まで協力してくれるような心情でも無いことは理解して居たし、撤退するのではないかと思っていた。

だが帰ってきた答えは意外なほど将来を見据え、驚くほどに冷やかな物だった。

「必要ならば止めはしませんよ。アレが本物ならばという話ですが」「本物……？」

意味が判らなかつた。

全ての状況証拠が周の正体を紅世の王であると告げている。人間では不可能なほどの化生体を操り、レアリティの高い戦言祝などの術式を使用して居る。

「鈴音さんは知らないかもしれませんが……」

「達也さんらしくありませんね。御自分が思い付いた方法を相手が出来ないとも思いましたか？ 3Hを持って行かれたのはついこの間である窺いましたが」

ありえない。魔法の受信だけならばともかくとして、化生体をこれ

ほどまでに呼び寄せるなど不可能だ。

だが本物ではないかもしれないという言葉が、俺の意識へ冷えた水を注ぎ込んだ。俺の感情は薄い筈であったが、どうやら煮詰まらないわけではないようだ。

(偽物……だど？　だがこんなことを人間が可能なのか？)

これまでの状況と情報を振り返る。

強力な戦言祝は王本人ではないと難しいと思うが、本当に喰らったのではなく逆算しただけの話だ。ここまではシチュエーションを用意するだけで思いこませることはできる。

鍵となるのはやはり化生体のコントロールだろうか。少なくとも幹比古ですら無理だと言うだろう。

「どうやら冷静になったようです。達也さんでも落ち着かなくなることもあると知ってむしろホッとしました」

「冷静な顔で言われても嬉しくもなんともありませんが……。しかし忠告には感謝します」

今起きていることは人間には不可能だ。

しかし鈴音さんの言う事にも一理あるということが、俺に冷静さを呼び戻して居た。

「正直な話、私には紅世というものは判りません。しかし失言で正体を悟られる様な失態を犯す相手とも思えません」

「……言われてみればそうですね。むしろ自分で漏らして試行誘導を図ったという方があり得そうな気がしてきました」

紅世の徒を知らないと言音さんは言うが、逆に知っている者も存在するだろう。

特に俺は大漢ともめた四葉の者であり、更に言えばフレイムヘイズに襲われたばかりである。言葉巧みに何かさせるよりも、失言という態を取って誘導した方が引掛かる可能性は高い。

周がどんな方法で化生体を操っているのかはわからない。

だが言われてみれば出来過ぎのシチュエーションと言えるだろう。目の前の男は偽物で、本物は屋敷の外辺りで様子を見守っているのかもしれない。

「そこで愛の確認をされても困るんですけどー？　ちゃんと敵を倒せる手段があるんでしようねえ？」

「イヤミは止してくれ。まあ規模を抑えて遠距離に撃てば、キツカケくらいには成るかな」

可能性としては俺を追いこんで切り札を使わせるところだろうか？

だからこそ現在進行形でこちらを攻撃して居るし、九島家への手前もあるだろうが屋敷ごと俺達を薙ぎ払わないのだろう。紅世の王が居るのだ、やろうと思えばいつでも出来た筈だ。

「追加の球ところや投げ針くらいなら何とでもなるから、時間が掛るだけなら構わないぜ」

「問題なのはこの状況が何時まで続くかってことよね。増援の当ては無いの？」

「こいつらレベルとなるとキツかったからな。居ない訳じゃないが、迂闊に手札は切りたくないから……」

師匠に頼めばなんとかなるかもしれないがそれは最終手段だ。

そう思いつつも手段を思い付かず、念の為に師匠の位置を確認する為に精霊の眼を広げると……その傍におかしなデータが見受けられた。

（馬鹿な。どうして奴が師匠の傍に居た？　まだ大亜連合の連中と取引して居ると言う方がありえる筈……）

師匠は先ほどまで屋敷の外でこちらを窺っていた。

気配遮断の結界を張ったまま移動し、俺がマテリアルバーストを使ったら逃げられる程度の位置からこちらに向けて走って居た。

（いや、それ以前に……奴は……）

気配遮断で誤認しているということはありえない。

気配を操つてもエイドスを見抜く精霊の眼は誤魔化せないからだ。他にも数人分の反応がこちらに向かっていているのだが、それと間違えているという事は無い。

師匠もだが奴らの思惑は判らない、だが既に動き出している以上は悩んでいる暇など無い。

おそらくは俺が決断し、マテリアルバースト以外の方法を思い付いたと仮定して行動を始めた。あるいは俺がそうしないように一足早く行動したのかもしれない

「仕方無いな。予定外に付き合わされるのは性に合わんが、攻勢を掛けるでしょう。『周だと名乗って居る』男に向けて突っ込んでくれ」

「身動き取れない状況なのに、好きに言ってくれちゃってまあ。……援護は期待して良いのよね？」

俺は頷きながら雲散霧消を普通に使い始めた。

戦況も悪化して居るし、もはやこのレベルであれば隠して使う方が難しい。それに奴らの動きを隠すのであれば、偽の切り札として見せて砲が良いだろう。

「ヒュウ♪、こいつはすげえなあ」

「見ての通り単純な構造のモノは何とかなできる。精神攻撃的な物は無理だな」

「その精神攻撃が一番厄介なんですけど!」

俺は化生体の内、攻撃の為に物質化を行っている個体を中心に分解を掛けて行く。

炎をまとった個体は物理現象に成り掛けているので対処し易く、魔法式を撃ち出す個体は術式解散でなんとかなる。

そして俺達が動き出したのに前後して、師匠達が突っ込んで来た。窓を割って乱入りし、周たちに向けて横槍を浴びせる構えだ。

「我らフレイムヘイズ兵団! 含む所はありますが、今限り協力いたします!」

「っ!? ……兵団? そうおっしやるには数が少ない様ですがね」
以前に雲散霧消で

消し去った筈の少女が数名の欧米人と共に現われた。あの時に一緒に居た仲間ではないが、USNAの軍人であるように思える。

「師匠……どういふことか教えていただけなのでしょうね?」

「彼らとも面識はあったのでね。纏いの逃げ水を応用して助けようとはしたのさ。まあ助かったのは再生能力のある彼女だけだったけど」

師匠がニヤリと笑うが若干違和感があった。

九重・八雲という男は飄々として捉えどころが無いが、余裕も無いのに敵前で言葉を連ねるような人では無い。

ソレに対して此処と辺りがあったので、軽く頷いて肯定しておく。おそらくは『纏いの逃げ水』という言葉を使うことで、周がパレードに似た術を使って他者を自分に変装させていることを言いたかったのだろう。

「君の依頼では利用しても構わない。ということだったからね、ちよつとだけ嘘を吐かせてもらった」

「そう言った以上は仕方ありません。まさか『二つも』嘘を吐かれるとは思いませんでした」

纏いの逃げ水だけで先ほどの言葉を使っただろうか？

むしろそちらに意識を向けさせることで、もう一つのキーワードから目を反らせようとしたのかもしれない。いずれにせよ伏兵を使うならば味方にすら気付かれぬ方が有効な事もある。

「まったく敵前でおしゃべりとは、大した余裕ですね」

「先ほどまで好き放題に喋って居たのは誰だ？ 挙げ足取りだとは思うが、随分と余裕が無くなって来たな」

おそらくは戦言祝を使うと思わせるほか、こちらの気を惹くことで周個人への関心を遠ざけるつもりがあったのだろう。

だからこそ偽物の周にはおしゃべりになるようなプログラムを施して居ると思われた。

こいつは命じられたままに喋り続け、当人はその間に俺達を観察し、同時に逃げ出す準備を整えている筈だ。

俺達に必要なのは偽者に気が付かないフリをして、一気に攻め掛ることだ。だからこそ化生体の処理に追われている風を装って、フォーメーションを徐々に偏らせていた。

（隠れるのが上手い様だがこちらが強力な探査網を組めば、おのずと逃走経路は絞られる。悪いがもらったぞ」

俺は周の偽者へ術式解散や雲散霧消を向けながら、規模を最低限に絞ったマテリアルバーストを屋敷の外にある反応へと定めた。

その位置は俺たちが戦っている場所から十分に離れた位置にあり、

それでいて魔法による関与がギリギリ可能な位置である。

(そこに居るのは九島の関係者である可能性もあるが……。その時は大漢どころか紅世の徒を匿った罪ということで勘弁してもらおう)

周の偽者もかなり腕の立つ魔法師であるようだが、こちらには強力な戦闘魔法師が揃っている。

奴が燐子と呼んでいる化生体の数が減り、護衛である朱が討ち取られれば時間の問題だろう。

● 巨星墜つ

そしてチャンスは思ったよりも早く訪れた。

もし師匠が周の位置を特定して居ればそちらに行っただのかもしれないが、残念ながら目の前の状況を打開する方法にしかならなかった。

「チヨウ……周・公僅！」

チヨウ・ゴンジン

「やれやれ。貴方もですか。そろそろ潮時ですかね」

天井を突き破る奇襲攻撃だが、二度目とあっては効果は薄い。

呂・剛虎が現われたと同時に、周はバックステップを掛けながら足元に雷撃陣を作りあげた。

「フーン！」

「げっ。気合いで魔法を吹き飛ばした!?!」

「術式解体と剛気功の中間だな。まああのレベルの魔法師ならできないこともないだろうさ」

師匠が再生について言及した時に、もしかしたらとは思っていた。

それでもこちらに駆け付けて来ると思えなかったのは、この男が居る位置が判らなかつたからだ。

精霊の眼をも欺く包囲への意識操作。

おそらくこれが鬼門遁甲だろう。そして逆行する形で屋敷の外に関する位置情報が急速にクリアになっていくのは、ソレを打ち切つたのではなく、むしろ抑え込み始めたからだろう。

(強烈なエイドスへの関与……。間違いない、奴だ!)

呂は猛虎が地を這う様な低い体勢から突撃を掛け、割って入った朱を一撃で粉碎する。

その間に周は氷結と気流操作を同時に使用するのだが……。

「馬鹿な、私の術が無効化される!？」

「……まだマルチキャストする訳? でもこれで終わりよ!」

「エリカ、その偽者は一応殺すな。聞き出す事がある!」

減速魔法と移動魔法を同時に成功していたが、まだ追加する気だとエリカは判断したようだ。

実際にはこの場に居ない周本人が、鬼門遁甲を行使しようとして押え込まれたのだ。同じ魔法を使う者で有れば無力化することもできるだろう。

先ほど感じた屋敷の外での強烈な反応は、おそらく周本人のものだろう。

偽者に指示しつつ自分も魔法を行使しようとしたことと、誰かが鬼門遁甲を抑え込んだ影響で、想いもせぬほど強烈な反応が出たのだろう。

「全員伏せろ! 古式魔法で外に居る周本人を始末する!」

「ちよつ……」

「いいから伏せろ!」

最小範囲に留めたものの、元よりマテリアルバーストは近・中距離に向いた魔法ではない。

逃走中の周の近くに再生魔法で小さな目標を作りあげ、それを分解する事で熱量に変える。対島要塞を守る為に使用した物より規模は小さい筈だが、屋敷の一部が吹き飛ばすほどの影響を受けた。

— s a i d e ? —

爆風が全てを消し飛ばし、その場に魔法師が居れば防壁を張った上で粉微塵になって行く。

ごく小さな質量爆発であるはずなのに、恐るべき威力で範囲に居る何もかもを消し飛ばした。

もし狙われた対象が生物であれば一環の終わりだったろう。

「ぐうう……。まさか、この私の本体を見抜くとは。迂闊でした」

「大丈夫ですか、徒督? 体が半分千切れている様にも見えますが」

青い顔で周囲を探る周の前に、にこやかな顔のダグラス・黄^{ウオン}が現れる。

煙草を銜えたまま懐に手を伸ばし、ナニカを取り出そうとしていた。

「ミスター黄。貴方をここに配置しておいて、本当に良かった」

「その傷では大変でしょう。今傷を治療しますので、動かないでください」

これは騙し問いの結果だ、別に裏切りではない。

最初から利用しあって居ただけなのに、避難される覚えも無い。黄は懐にしまっておいた催眠を使う為のCADを始動させ……。

「我々に治療の必要はありませんよ。貴方が此処に居ることが重要なのです」

「……なに!？」

対して周は黄の生命力やサイオン……存在の力を吸い上げ始めた。

彼とは何度も会話を行い、幾つもの命令を介して耐性を越えるバイパスを作りあげている。戦言祝の力により抵抗するのどころか、自ら生命を捧げるように提供して居た。

「おの……これ」

「ごちそうさま。御提供ありがとうございます」

絞りカスになるにつれ、炎に巻かれるように黄の姿は消え去った。

代わりに黄の形状をした化生体が現れ、ポーっとした表情で歩き始める。それに自分の一部を植えつけることで、周そっくりな見た目に変化させる事も忘れない。

「そのまま逃走して連中の目を惹きつけてください。しかし……フレイムヘイズを叩き、四葉ともども一挙に潰す計画でしたが上手く行かない物ですね」

周は再構成したばかりでふらつく足を見て苦笑すると、陰から犬の様な化生体を呼び出して自分を運ばせた。

上手く行けば黄が影武者に成って死ぬはずだが、追撃の手は何度でもあると警戒すべきだろう。

「そういう訳にはいかん」

「っ!？」

強烈なサイオンの波動が周を直撃した。

咄嗟に張ったはずの魔法式を吹き飛ばし、防壁が木っ端みじんに砕け散る。

そして物理構成したばかりの体と、そこに根着くはずだった周固有のサイオンが分解されて行く。

●決着

消え失せて行く周の反応を改めて精霊の眼で確認する。

鬼門遁甲が発動しなかったからこそ倒せたが、もし操れていたら危うく逃げられたかもしれない。

「これで一件落着……とはいかんだろうな」

「彼の言葉を信じるならば、『小霸王』という王も居るそうですからね」

周を倒せた理由は、奴が黒子を止めて根を張ろうと勢力を大きくしていたからだ。

大亜連合にまで喧嘩を売り、十師族に潜り込んで一大勢力を造ろうとしていた。その反動ゆえに恨みを買って、方々からの突き上げを食らっていたからだろう。

「奴を自分の手だけで倒せたとも思えません。まだまだ修業が足りないことを実感させられます」

「まあ達也くんならちよつと修業すれば直ぐさ。むしろ今回みたいに影から影に逃げ回る奴を捉まえる方が面倒かもね」

師匠は笑っているが、やはり良い様に動かされた面が否めない。

やり過ぎた四葉は警戒されるし、恐れられもする。それと同時に今回の責任を取らされ権勢からは遠ざかる。

四葉のスポンサーからも、そして獅子身中の虫排除の為に協力して居ただろう九島老師の思惑にも一致して居た。

まだまだ俺も踊らされるレベルであり、色々な精進が必要だろう。

「それで達也はこれからどう動くんだ？」

「ひとまずは重力制御型の融合炉実現だな」

「ちゃんと約束を覚えてくれていいですね、安心しました」

こうして一つの冬が過ぎ去り、また春が訪れるのだろう。
次の季節、次の年にも新しい目標を見付けて歩き続けるだけだ。い
ずれもう一体の敵も倒すとしよう。

後日談

ネクスト・ジエネレーション

● たった一つの冴えたやり方？

『それでは会議を始めます。まずは、かねてからの提案通り四葉家の問題について』

四葉はこれから独り勝ちし始める。

それを抑え込もうとする九島や七草が奔走するのは仕方の無いことだ。

緊急で起こされた師族会議にて、舌を用いる戦いが繰り広げられようとしていた。

『提案します。現時点での四葉家は十師族に相応しくないとはいえず』

『異議あり！』

しかし老師の思惑を越えて事態は急変する。

四葉家を撃つして一時的に権勢から遠ざけたいとは思っていたが、まさか排除を提案する家があるうとは思ひもしなかったのだ。

『迫りくる外患を明らかにし、排除したのは四葉家なんですよ？ それを十師族の地位から遠ざけるのは、やり過ぎを通り越して問題です！』

『そうは言うがね。やり過ぎというなら戦略級魔法を国内で使用した揚句、横暴極まりない手段で首魁を追い詰めて行ったそうじゃないか』

心情的に四葉の側にある六塚・温子の舌鋒。

それを迎え討つのは老師でもなければ、七草・弘一でもなかった。そして事態を難しくさせて居ることがもう一つある。

『顧傑グー・ジエとやらの名前や居場所まで判って居たのだろうか？ その排除に際して、他の家の協力を拒んだ挙句に……』

不思議な事に日本を狙っていたらしい……。

もつといえは四葉家を狙っていたという顧傑という男は、既に排除

されていることだった。

『当主である真夜殿が行方不明。相討ちになったというのは自己責任ではないか』

『そうだそうだ！ 初めから協力し合って居れば世論は荒れ無かつたし、我々の結束も乱れなどしなかつた！』

そして当主である四葉・真夜が居ないということが拍車を掛けた。考える頭の無い者はここぞとばかりに排斥に掛り、そうでない者は真相の究明を優先としていた。そもそも本人が生きて居たら、どうする気なのだろう？

『結果としてそうなったのは認めます。しかし、顧傑という魔法師は大漢の残党です。四葉家を直接狙って来たのも、それを迎撃するのも当然のことでしょう』

『だからと言って援軍を断る必要もあるまい。大前提として大漢の時もやり過ぎなのだ！』

以前からの不満があつた事に加え……。

何処かの家が十師族から陥落せねば、入り込めない家があるというのも事態を大きくした一因だろう。九島が外される事が仮決定している事を踏まえれば、二梓空くかもしれないのだ。彼らにとって千歳一隅のチャンスとも言えた。

『発言、よろしいでしょうか？ 提案があるのですが』

『なんででしょうか、七宝殿？』

事の収束を図つたのは意外な人物。

次の十師族として筆頭候補に挙がっている七宝家の当主である拓巳だった。彼の一言が会議の方向性を形造ることになる。

『重要な問題は四葉家の行動よりも、現時点での能力に欠けているという疑念ではありませんか？ 疑念が本当かを確認する方が先決かと』

『そ、それは確かに……』

それは実に正論であつた。

追い詰めようとした側は自分達の意見に近いと過信して、弁護しようとした側は『彼を推挙した人物』の顔を立てて黙ることにした。

『次の師族会議。または緊急を要する会議までに、何らかの成果が出なければ止む無し。出せるなら問題無いと見なすというのはいかがでしょう』

『七宝殿がそうおっしゃるのでは……』

十師族候補として推薦されている中で、筆頭である彼が待とうと言うのでは他の家が言い出せるわけがない。

何よりも実力が無いから追い出すと言ったのは、提案者の方である。十分な実力があるならば理由が無くなってしまいうし、無いならば本当に追い出せて清々するまでだ。

そして何より、実は四葉・真夜が生きていた……。

そんな事態に成った場合に、言い訳とする為に認めざるを得なかったのである。

「まさか貴女まであそこで言を控えるとは思いませんでした」

「正論でしたからね。それに貴方を推挙したのが真夜さんだと知って居ましたから。そう考えれば採算があると思うのも当然では？」

七宝・拓巳と六塚・温子は顔を見合わせて苦笑した。

この喜劇を演出したのは四葉・真夜。二人はそう確信して居たのである。

●まやさまの居ない日々

一連の騒動を聞いて、俺は苦笑せざるを得なかった。

老師や七草の掣肘を切り抜け、むしろ俺達が団結する方法が無いか探っては居た。

(まさか、こんな方法で潜り抜けるとは思いもよらなかった。大胆不敵といふかなんというか)

四葉が一步前進どころか二歩後退し、そこから不死鳥の様に蘇るのだ。

いかに老師として止める訳にもいかない。そして俺たちは必死で四葉の屋台骨を支えなくてはならないだろう。

なんという悪辣で愉快なことをする女だろうか。

きつと彼女は『守ってくれなかった四葉家』や『体験を知識化した救済策』にすら復讐したかったのだ。そして自分が目を掛けた者だけ

を愛しており、その行く末以外はどうでも良いのに違いあるまい。

「文弥と亜矢子が来てくれるなら、とても頼もしいよ」

「お兄様の……四葉家の為ですから気にしないでください！」

黒羽家の双子は第一高校への進路を決めた。

俺たち四葉の結束を高め、その実力を内外に見せなければならぬからだ。四校辺りで技術確認するというのも、悪くは無いのだが。

「まあヤミちゃんだったら達也さんの事が本当に好きで……そう言えば光宣さんも来たがっていましたけどね」

「慕ってくれるのは良いが……。光宣まで来たら九校戦の意味が無くなりかねんからな」

九島邸で回収した周・公チョウ・ゴンジン僅の影武者は、老師の孫である光宣だった。

体質改善という名目で連れ出され、周の一部を植えつけられて居たらしい。パレードの使い方が上手なのも道理である。

それを縁というには微妙だが、周の痕跡を分解し、精神性を確認して居た時期がある。

その時以来、なにかと話しかけてくれるのだが、おそらくは同世代と話した経験そのものがあまりなかったのだろう。

「それで、実質的な新当主様の計画はどんな塩梅ですか？」
「皮肉を言わないでくれ。深雪から託されたのは確かだがな」

新当主には予定通り深雪が成った。

あくまで暫定と言う扱いだが、元からの予定でもあり他の家から異議が挟まれることは無かった。

一条との縁談話も、奴が縁を切つてでも婿養子に成ると口にした影響が大きいだろう。繋がりを重視する権力旺盛な家はともかく、身内主義の四葉にとってそれは好ましいからだ。

「まずは、このまま司波家を四葉の分家として周知し、適当な所で新システムを正式採用する」

精密性重視の完全思考型CADを用い、複数の特化型CADに仕事を割り振る新システム。

テスター達の反応は上々で、二科生制度を良い意味で覆せると評判

を得ていた。十師族だけでなく魔法師社会全体に十分な評価を与えることが出来るだろう。

「その後で段階的に融合炉関連の計画を進めて行く。……周のお陰で次の用途が立ったというのが皮肉だがな」

「回収した資料がお役に立てて幸いですわ」

ふっと笑う仕草がおふくろに似ている。やはり一族は似るものだろうか？

いずれにせよ九島で回収した周の資料が面白かったのは確かなので、礼は何度言っても良いものだ。

「では私達が学校に慣れた頃に新融合炉の実験。師族会議前に恒星炉の計画発表ですか？」

「いや、先に実用化を試したいモノがある。もつとも新年度を迎えて、幹比古たちと会ってからの話になるだろうな」

ソレこそが周の資料から導き出されたアイデアだった。

新融合炉もその発展形である恒星炉も前から計画していたが、その前に保険となる物を造っておきたい。世間の評判はともかくとして、色々な応用が効くだろう。

「……夏のコンペに合わせることに成るかな？」

「あら。では新一条さんには災難ですわね。せつかく親友の為に犠牲になったのに。いえ、ラブラブでしたっけ」

一条の婿入り宣言に合わせて、カーディナルジョージが一条家の婿としてピツクアップされた。

援助していたのは一家家なので、妥当と言えるだろう。

もつとも相手が小学生……新中学生とあつては色々陰で言われているのも確かではある。

一条のお陰で深雪の株も上がって居ることだし、いずれ協力出来る事があれば協力するのも悪くはあるまい。

●温故知新

新年度が始まって俺は幹比古や五十里先輩と再開した。

学校行事に参加しない訳にはいかないし、老師の介入が無くなったのも大きいだろう。

「そういえば新一年生の間では、フォア・シスターズってのが有名らしいね。生徒会に誘うんだろ？」

「……どっちを数に入れたのかは知らんが、琢磨が来年苦勞するだろうな」

「はは……」

文弥と水波のどちらが四人組に入って居るかは別にして、次期生徒会は強力な布陣になるだろう。

一年筆頭は七宝だったので、例年の法則によればあいつが会長。残りのメンバーが生徒会と風紀・部活連を構成する筈だ。

「で、達也の用事って？ 五十里先輩はともかくボクまでって事は、古式魔法が関わって来るんだろうけど」

「その資料の後の方に載せているが、八卦炉を現代技術で再現しようと思っただけ」

説明を始めた瞬間に、幹比古は驚くほどの勢いで資料を読み始めた。

一緒に渡した風紀の引き継ぎ資料に対して面倒そうな顔をしているのに、今では書類の上から下まで何度も確認するほどだ。

「相変わらず無茶を言うね。八卦炉だなんて古文書でもなかなかお目に掛らないよ」

「まだ企画段階だがな。……昨年度の事件を引き越した片割れが持つて居たんだ」

八卦炉というのは古代中国にあったという伝説の炉心だ。

低出力であれば無限にエネルギーを産出するが、高出力ならば宝貝……様々なレリックをも生産したという。

「眉唾じゃないの？」

「俺も信じて居る訳じゃない。正確にはその設計思想の元に、古式魔法・現代魔法・精霊制御・刻印・魔法陣・儀式詠唱……全てを利用したエネルギー供給システムを造る」

「なるほどね。古式魔法の中には現代では置き去りにしてしまった技術も多いもの。僕も捨てるには惜しいと思う」

周の資料があるとはいえ、その有効性を全て信じた訳でもない。

ここで重要なのはあくまで、現代科学や現代魔法以外のアプローチを組み入れるということだ。両者の中間である刻印技術を持つ五十里先輩には、納得いきやすいと思う。

「そういうことならボクも協力できると思うけど……そんなもの一体、何に使うつもりなのさ」

「俺が考えている融合炉を造る為の補助だ。炉心を動かすエネルギーの安定供給を目的として、制御その他の『雛型』を造っておきたい」
科学では出来ない事に魔法を使うとはいえ、どうしても技術的なシステムは必要だ。

動かすエネルギーや、コンピュータの制御そのものも既存の技術を使う。魔法的な予備動力やバックアップがあれば安定するし、何かあってもリカバリーが効くだろう。

「現代型八卦炉そのものが融合炉を造る為の練習であり、保険でもある」

「だから雛型なのか。確かにいきなり核融合炉を目指すよりも、安定したエネルギーを造るだけの炉心から始める方がみんなも取り組み易いかもね」

八卦炉の思想自体は単純だ。

内外の遮断を完全に行い、その中で力が増し易い環境を整えるというモノ。その結果が低出力の安定供給であり、一時的な高出力になるという訳だ。

「名前に炉ってあるから炉心と言っちゃってるけど、循環型発電装置の方が良いと思うよ」

「そうですね。水力発電ならば水を高い位置に持ち上げれば良い。そしてソレ事態は現代技術でも昼間の太陽発電で行って居ますから」

水力を例にとれば、移動魔法でも他の魔法でも良い。

その補助となる触媒や刻印・魔法陣を整え、魔法師が負担にならない様に精霊が一部を補えば良い。指定した状況になると発動する様に予め命じておけば、詳細はともかく単純作業は減っていくだろう。「奇しくもエネルギーの循環システムが、古代の思想と同じになっちゃった感じだよね」

「だとするとボクが呼び出す精霊はコンピュータのプログラム……それとも予備人員かなあ。難しいとは思うけど面白いと思う」

五十里先輩と幹比古が苦笑しながら顔を見合わせる。

二人にとつては慣れ親しんだ自分の技術であり、だからこそ自身もあるし、発展形で何が出来るか想像しているのだろう。

「狙ってるのは現代と古式の融合による新しい見地になる。それを磨くことにより新しい技術を手にし、いつか『特定の誰か』でなくとも良いシステムに辿りつくこと」

「確かに今、融合炉の実験をやろうとしたら、全校でも数名って事になりかねないからね」

現時点で融合炉用の魔法を組むと、どうしても要求水準が高くなる。

だが二科生に限らず一部の能力ならば満たせる魔法師は多いのだ。常に集中力が保ち難い魔法師でも精霊が代行出来たり、逆に出力が足りない魔法師に魔法陣で補助することができれば変わってくる。

「でも達也。精霊を評価してくれるのは嬉しいけれど、式の乗っ取りは定番だから……」

「電波的・靈子的に遮蔽された空間でスタンドアロンを確立し、外部からの干渉を避けるのは大前提になるだろうな」

せっかく制御システムを造っても、ハッキングされたのでは意味が無いどころか有害だ。

少なくとも多層分けした上で、本丸の中には干渉できない様にしておく必要があるだろう。

「まあ最初は試すだけ試して良いんじゃないかな？」

「そうですね。最悪、八卦炉は技術検証機で構いません。本命は融合炉ですし」

古式魔法や刻印・魔法陣を試し、その成果で融合炉用の魔法が楽になれば良い。

八卦炉はあくまでキツカケ造りでしかなかった。アイデアに固執しても仕方無いし、無いならば無いで深雪や文弥達に頼めば良いだけだ。

そこまで話し込んだところで、ドアが軽くノックされた。

概ね計画は伝え終わったこともあり、中に入って来るのを待つ。

「司波。少しいいか？」

「構いません。服部会頭」

新年度が始まったばかりなのに意外……とは思わなかった。

部活連を統括する服部会頭には、現段階でも遅過ぎるくらいの懸念材料がある筈だ。

「九校戦の話ですか？」

「ああ。今年も大胆なルール変更があるんじゃないかと思つてな」

去年は低スペックCAD戦が導入されたが、地味ながらも好評を博して居た。

今年の新システムの導入もあり、大幅な変更が予想されている。会頭としては対処は早ければ早いほど良いのだろう。

「当然あり得ると思います。CADの持ち込み制限を、本戦と低スペックCAD戦のどちらに掛けるかが微妙ですが」

「全力を出した試合が見たいなら、本戦ではやらないだろう。とはいえ低スペック戦を更に制限してもな……」

「そこまで制限しちゃうと格闘技みたいになりますよね」

去年の四校は低スペックを連鎖型させて起動して居た。

こちらも最低スペックを特化させることでギリギリの調整して戦ったが、かなり地味な戦いになったのは否めない。その結果が合わさって新システムに繋がったのだが……。

「可能性としてはステイブル・チエースやロアー&ガンナーに切り替えて来るかもしれません」

「そうなって欲しい物だ」

うちは去年の校内予選でステイブル・チエースなど最近行われてない競技を行った経験がある。戦鬪色の強い競技だから三校にも有利だが、訓練時間やメンバー調整を行った経験は大きいだろう。

「そうなった場合、メンバーの選定はこちらでやる。CAD関連を頼めるか？」

「構いません。ただ魔工技師科の全体に一声かけていただければ幸い

です」

おそらくは自分がメインで関わるだろうし、実績を上げるにも悪くはない。

だが筋としては新しく造られた魔工技師科全体で計画し、作業を割り振るべきだろう。

「それは当然だな。ノーマルも低スペックもそれぞれ調整適性を見ておき、正式発表された人員で割り振る路線で行こう」

「そうですね。去年は色々と急な発表でしたし、習熟を兼ねてその前から募集しておいて損は無いでしょう」

聞けば低スペックCAD戦も周の提案だったという。

面倒ばかりを残してくれる物だと思っただが、死んだ後でも厄介を残すものだ。虎と違って皮を戦利品にできないのが残念なところである。

こうして俺たちは賑やかな新年度を迎え、新しい目標に向けて挑む事にしたのである。

これが新しい時代の始まりだと、なんとなく感じながら……。